

九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10

小迫辻原遺跡 I

OZAKOTUZIBARU SITE

A・B・C・D区編

1999

大分県教育委員会

序

大分県の西端に位置する日田盆地は、北部九州との交通の要衝にあたることから、歴史的に重要な役割を担ってきた地域として知られています。

盆地内には、弥生時代の王墓として注目された吹上遺跡をはじめ、各時代の遺跡が濃密に分布しており、近年の調査により、その様相が明らかとなってまいりました。

小迫辻原遺跡は、九州横断高速道路の建設に先立って昭和58年以来発掘調査を実施してきたもので、その結果、古墳時代前期初頭の居館遺構2基が発見されました。これによって、方形の区画をもつ我が国最古の居館遺構としてその重要性が認識されることとなり、日本道路公団の協力により、遺構の大部分が現地保存されることになりました。

その後、日田市教育委員会が実施した小迫辻原台地の環壕集落を含む遺構群と合わせて、平成8年11月に国の史跡として指定を受けました。

こうして保存された小迫辻原遺跡は、先人の足跡を学ぶ貴重な文化遺産として広く活用されることが望めますし、また本書がそうした文化財の保護と学術研究等の分野に寄与できれば幸いに存じます。

最後に発掘調査から本書の作成に至るまで多大なご協力をいただいた関係各位に対し心から感謝申し上げます。

平成11年3月

大分県教育委員会教育長

田 中 恒 治

例 言

1. 本書は九州横断自動車道（把木一日田間）の建設にともない、日本道路公団福岡建設局の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した、大分県日田市所在小迫辻原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に報告する遺跡は、昭和61～63年度に大分県教育委員会が調査主体として本調査をおこなった小迫辻原遺跡のA・B・C・D区である。県調査分として『小迫辻原遺跡Ⅰ』とする。
3. 平成元年以後日田市教育委員会が調査をおこなったG～Q区は、今後『小迫辻原遺跡Ⅱ・Ⅲ』として刊行される。また調査全体の写真図版はさきに下記の表題で刊行した。
4. 小迫辻原遺跡の調査概要は以下の概報に速報している。試掘調査の結果は概報1と2に、本調査の結果は概報3・4・5で速報している。なお概報1～4までは小迫辻原遺跡を「小迫原遺跡」と表記している。
5. 大分県教育委員会調査分の出土遺物ならびに実測図・写真等の原資料は、下記の大分県教育庁文化課文化財資料室で保管している。

問合わせ先：☎870-1113 大分市大字中判田字ビワノ門1977

☎097-597-5675 FAX097-597-5680

6. 本書の執筆には、第1章を清水宗昭・田中裕介・土居和幸、第2章を土居、第3～7章を田中がたった。
7. 本書の編集と構成は田中がおこなった。

写真図版編：『小迫辻原遺跡 写真図版編』1998 大分県教育委員会・日田市教育委員会

概報1：芝徹編『九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報』1984 大分県教育委員会・日本道路公団

概報2：芝編『九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報』1985 大分県教育委員会・日本道路公団

概報3：芝・桑原幸則編『九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報—日田地区—』1986 大分県教育委員会・日本道路公団

概報4：渋谷忠章・田中裕介編『九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報—日田地区—』1987 大分県教育委員会・日本道路公団

概報5：渋谷・田中・小柳和宏・行時志郎編『九州横断自動車道（日田地区）建設に伴う発掘調査概報Ⅴ』1988 大分県教育委員会・日本道路公団

目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の経過	1
第2章	遺跡の立地と環境	13
第1節	遺跡の立地	13
第2節	日田市の歴史	14
第3節	日田盆地の遺跡と遺物	16
第3章	調査の方法と報告書の凡例	25
第4章	A区の記録	29
第1節	A区の調査概要	32
第2節	縄文時代	34 1)土壌 34
第3節	弥生時代前期後半～中期初頭	35 1)竪穴住居跡 36 2)土壌 39 3)ピット 105
第4節	弥生時代中期後半	107 1)土壌 107
第5節	古墳時代前期前半	114 1)竪穴住居跡 116 2)掘立柱建物跡 124 3)土壌 124
第6節	奈良時代	126 1)ピット 126
第7節	中世	126 1)掘立柱建物跡 128
第8節	近世	133 1)溝 133
第9節	表面採集遺物	135
第5章	B区の記録	161
第1節	B区の調査概要	167
第2節	弥生時代前期後半～中期初頭	168 1)竪穴住居跡 168 2)土壌 171 3)墓 191 4)ピット 192
第3節	弥生時代中期後半	195 1)土壌 195 2)墓 211 3)ピット 220
第4節	古墳時代前期前半	223 1)竪穴住居跡 223 2)土壌 256 3)墓 256 4)ピット 258
第5節	奈良時代	258 1)竪穴住居跡 258 2)ピット 261
第6節	中世	261 1)掘立柱建物跡 262 2)土壌 268 3)墓 269 4)溝 271 5)ピット 273
第7節	近世	274 1)掘立柱建物跡 274 2)土壌 274 3)溝 279
第8節	表面採集遺物	280
第6章	C区の記録	309
第1節	C区の調査概要	315
第2節	古墳時代前期前半	315 1)方形環溝遺構 316 1.1号方形環溝 321 2.2号方形環溝 334 2)1号条溝 343 3)竪穴住居跡 377 4)掘立柱建物跡 406 5)土壌 407
第3節	奈良時代	408 1)竪穴住居跡 408 2)土壌 414 3)ピット 414
第4節	中世	415 1)掘立柱建物跡 415 2)墓 417 3)溝 417
第5節	近世	418 1)掘立柱建物跡 419 2)土壌 419 3)溝 421
第6節	表面採集遺物	425
第7章	D区の記録	447
第1節	D区の調査概要	450
第2節	弥生時代前期後半～中期初頭	450 1)土壌 450
第3節	古墳時代前期前半	452 1)竪穴住居跡 452 2)土壌 456 3)溝 456
第4節	近世	458 1)溝 458

細 目 次

第1章	はじめに	1	A区-22号土壙	56
第1節	調査の経過	1	A区-23号土壙	56
1)	九州横断自動車道	1	A区-24号土壙	56
2)	地力増進事業	4	A区-25号土壙	56
3)	保存までの経過	7	A区-26号土壙	57
4)	調査組織	8	A区-27号土壙	57
第2章	遺跡の立地と環境	13	A区-28号土壙	58
第1節	遺跡の立地	13	A区-29号土壙	60
第2節	日田市の歴史	14	A区-30号土壙	61
第3節	日田盆地の遺跡と遺物	16	A区-31号土壙	61
第3章	調査の方法と報告書の凡例	25	A区-32号土壙	62
第1節	調査の方法	25	A区-33号土壙	62
第2節	整理の経過	27	A区-34号土壙	63
第3節	報告書の凡例	28	A区-35号土壙	63
第4章	A区の記録	29	A区-36号土壙	63
第1節	A区の調査概要	32	A区-37号土壙	64
第2節	縄文時代	34	A区-38号土壙	64
1)	土壙	34	A区-39号土壙	65
A区-1号土壙	34	A区-40号土壙	65	
A区-2号土壙	35	A区-41号土壙	65	
第3節	弥生時代前期後半～中期初頭	35	A区-42号土壙	66
1)	竪穴住居跡	36	A区-43号土壙	66
A区-1号竪穴住居跡	36	A区-44号土壙	68	
A区-2号竪穴住居跡	36	A区-45号土壙	68	
A区-3号竪穴住居跡	36	A区-46号土壙	68	
A区-4号竪穴住居跡	38	A区-47号土壙	70	
A区-5号竪穴住居跡	38	A区-48号土壙	70	
A区-6号竪穴住居跡	39	A区-49号土壙	71	
2)	土壙	39	A区-50号土壙	72
A区-3号土壙	39	A区-51号土壙	73	
A区-4号土壙	40	A区-52号土壙	74	
A区-5号土壙	40	A区-53号土壙	75	
A区-6号土壙	42	A区-54号土壙	80	
A区-7号土壙	42	A区-55号土壙	80	
A区-8・9号土壙	42	A区-56号土壙	83	
A区-10号土壙	43	A区-57号土壙	83	
A区-11号土壙	44	A区-58号土壙	84	
A区-12号土壙	46	A区-59号土壙	84	
A区-13号土壙	48	A区-60号土壙	85	
A区-14号土壙	49	A区-61号土壙	85	
A区-15号土壙	51	A区-62号土壙	86	
A区-16号土壙	51	A区-63号土壙	87	
A区-17・18号土壙	52	A区-64号土壙	88	
A区-19号土壙	52	A区-65号土壙	94	
A区-20号土壙	53	A区-66号土壙	94	
A区-21号土壙	54	A区-67号土壙	94	
		A区-68号土壙	95	
		A区-69号土壙	95	
		A区-70号土壙	96	
		A区-71号土壙	97	
		A区-72号土壙	97	
		A区-73号土壙	97	

A区-74号土壌	98	第8節 近世	133
A区-75号土壌	99	1) 溝	133
A区-76号土壌	100	A区-1号溝	133
A区-77号土壌	100	A区-2号溝	133
A区-78号土壌	101	A区-3号溝	133
A区-79号土壌	103	A区-4号溝	134
A区-80号土壌	103	A区-5号溝	134
A区-82号土壌	104	A区-6号溝	135
A区-120号土壌	104	第9節 表面採集遺物	135
A区-121号土壌	105	A区遺構一覧表・遺物観察表	136
A区-137号土壌	105	第5章 B区の記録	161
3) ピット	105	第1節 B区の調査概要	167
U18調査区ピット1	105	第2節 弥生時代前期後半～中期初頭	168
第4節 弥生時代中期後半	107	1) 竪穴住居跡	168
1) 土壌	107	B区-1号竪穴住居跡	168
A区-81号土壌	107	B区-2号竪穴住居跡	169
A区-83号土壌と周辺ピット群	108	B区-3号竪穴住居跡	160
A区-84号土壌	109	2) 土壌	171
A区-85号土壌	111	B区-1号土壌	171
A区-86号土壌	112	B区-2号土壌	171
A区-87号土壌	114	B区-3号土壌	172
A区-88号土壌	114	B区-4号土壌	174
第5節 古墳時代前期前半	114	B区-5号土壌	174
1) 竪穴住居跡	116	B区-6号土壌	174
A区-7号竪穴住居跡	116	B区-7号土壌	175
A区-8号竪穴住居跡	120	B区-8号土壌	175
A区-9号竪穴住居跡	122	B区-9号土壌	175
A区-10号竪穴住居跡	123	B区-10号土壌	176
V19調査区ピット1	123	B区-11号土壌	176
2) 掘立柱建物跡	124	B区-12号土壌	176
A区-1号掘立柱建物跡	124	B区-13号土壌	176
A区-2号掘立柱建物跡	124	B区-14号土壌	178
3) 土壌	124	B区-15号土壌	178
A区-89号土壌	124	B区-16号土壌	178
A区-90号土壌	125	B区-17号土壌	179
A区-91号土壌	125	B区-18号土壌	179
A区-92号土壌	126	B区-19号土壌	180
第6節 奈良時代	126	B区-20号土壌	180
1) ピット	126	B区-21号土壌	180
Q18調査区ピット6	126	B区-22号土壌	180
T17調査区ピット3	126	B区-23号土壌	181
第7節 中世	126	B区-24号土壌	182
1) 掘立柱建物跡	128	B区-25号土壌	182
A区-3号掘立柱建物跡	128	B区-26号土壌	182
A区-4号掘立柱建物跡	128	B区-27号土壌	182
A区-5号掘立柱建物跡	129	B区-28号土壌	184
A区-6号掘立柱建物跡	129	B区-29号土壌	184
A区-7号掘立柱建物跡	130	B区-30号土壌	185
A区-8号掘立柱建物跡	130	B区-31号土壌	185
A区-9号掘立柱建物跡	131	B区-32号土壌	187
A区-10号掘立柱建物跡	131	B区-33号土壌	187

B区-34号土壌	188	2) ピット	261
B区-35号土壌	189	F 2 調査区ピット 2	261
B区-36号土壌	190	第6節 中世	261
3) 墓	191	1) 掘立柱建物跡	262
B区-1号墓	191	B区-1号掘立柱建物跡	262
4) ピット	192	B区-2号掘立柱建物跡	263
K 0 調査区ピット 2	192	B区-3号掘立柱建物跡	263
K 1 調査区ピット 2	192	B区-4号掘立柱建物跡	264
L 2 調査区ピット 3	192	B区-5号掘立柱建物跡	264
第3節 弥生時代中期後半	195	B区-6号掘立柱建物跡	264
1) 土壌	195	B区-7号掘立柱建物跡	265
B区-37号土壌	195	B区-8号掘立柱建物跡	265
B区-38号土壌	195	B区-9号掘立柱建物跡	265
B区-39号土壌	196	B区-10号掘立柱建物跡	267
B区-40号土壌	196	B区-11号掘立柱建物跡	267
B区-41号土壌	199	2) 土壌	268
B区-42号土壌	202	B区-48号土壌	268
B区-43号土壌	206	B区-49号土壌	268
B区-44号土壌	207	B区-50号土壌	268
B区-45号土壌	210	B区-51号土壌	268
B区-46号土壌	210	B区-52号土壌	268
B区-1号土器溜まり	211	B区-53号土壌	269
2) 墓	211	B区-54号土壌	269
B区-2号墓	212	B区-55号土壌	269
B区-3号墓	213	3) 墓	269
B区-4号墓	213	B区-9号墓	269
B区-5号墓	214	4) 溝	271
B区-6号墓	215	B区-1号溝	271
B区-7号墓	218	B区-2号溝	271
3) ピット	220	B区-3号溝	273
E 1 調査区ピット 2	220	5) ピット	273
G 0 調査区ピット 3	220	I 0 調査区ピット 6	273
第4節 古墳時代前期前半	223	I 0 調査区ピット 8	273
1) 竪穴住居跡	223	I 0 調査区ピット 9	273
B区-4号竪穴住居跡	223	I 0 調査区ピット 11	273
B区-5号竪穴住居跡	229	H 0 調査区ピット 7	273
B区-6号竪穴住居跡	239	I 19 調査区ピット 7	273
B区-7号竪穴住居跡	244	第7節 近世	274
B区-8号竪穴住居跡	244	1) 掘立柱建物跡	274
B区-9号竪穴住居跡	247	B区-12号掘立柱建物跡	274
B区-10号竪穴住居跡	248	2) 土壌	274
B区-11号竪穴住居跡	254	B区-56号土壌	274
B区-12号竪穴住居跡	255	B区-57号土壌	274
2) 土壌	256	3) 溝	279
B区-47号土壌	256	B区-4号溝	279
3) 墓	256	B区-5号溝	279
B区-8号墓	257	B区-6号溝	279
4) ピット	258	B区-7号溝	279
I 0 調査区ピット 4	258	B区-8号溝	279
第5節 奈良時代	258	第8節 表面採集遺物	280
1) 竪穴住居跡	258	B区遺構一覧表・遺物観察表	282
B区-13号竪穴住居跡	258		

第6章 C区の記録	309		
第1節 C区の調査概要	315		
第2節 古墳時代前期前半	315		
1) 方形環溝遺構	316		
1.1 1号方形環溝	321		
C区-1号掘立柱建物跡	322		
C区-1号溝	322		
2.2 2号方形環溝	334		
C区-2号掘立柱建物跡	334		
C区-3号溝	338		
C区-2号溝	339		
2) 1号条溝	343		
C区-4号溝	343		
C区-4号溝内土壌A	376		
C区-4号溝内土壌B	376		
C区-4号溝内土壌C	376		
3) 竪穴住居跡	377		
C区-1号竪穴住居跡	377		
C区-2号竪穴住居跡	380		
C区-3号竪穴住居跡	382		
C区-4号竪穴住居跡	385		
C区-5号竪穴住居跡	387		
C区-6号竪穴住居跡	388		
C区-7号竪穴住居跡	390		
C区-8号竪穴住居跡	396		
C区-9号竪穴住居跡	404		
C区-10号竪穴住居跡	405		
4) 掘立柱建物跡	406		
C区-3号掘立柱建物跡	406		
C区-4号掘立柱建物跡	406		
5) 土壌	407		
C区-1号土壌	407		
C区-2号土壌	407		
第3節 奈良時代	408		
1) 竪穴住居跡	408		
C区-11号竪穴住居跡	408		
C区-12号竪穴住居跡	408		
C区-13号竪穴住居跡	411		
C区-14号竪穴住居跡	413		
2) 土壌	414		
C区-3号土壌	414		
C区-4号土壌	414		
3) ピット	414		
B3調査区ピット12	414		
第4節 中世	415		
1) 掘立柱建物跡	415		
C区-5号掘立柱建物跡	415		
C区-6号掘立柱建物跡	415		
C区-7号掘立柱建物跡	416		
C区-8号掘立柱建物跡	416		
2) 墓	417		
C区-1号墓	417		
3) 溝	417		
C区-5号溝	417		
C区-6号溝	418		
第5節 近世	418		
1) 掘立柱建物跡	419		
C区-9号掘立柱建物跡	419		
2) 土壌	419		
C区-5号土壌	419		
C区-6号土壌	419		
C区-7号土壌	420		
C区-8号土壌	420		
C区-9号土壌	420		
C区-10号土壌	420		
3) 溝	421		
C区-7号溝	421		
C区-8号溝	421		
C区-9号溝	421		
C区-10号溝	422		
C区-11号溝	422		
C区-12号溝	422		
第6節 表面採集遺物	425		
C区遺構一覧表・遺物観察表	426		
第7章 D区の記録	447		
第1節 D区の調査概要	450		
第2節 弥生時代前期後半～中期初頭	450		
1) 土壌	450		
D区-1号土壌	450		
M8調査区ピット1～5	450		
第3節 古墳時代前期前半	452		
1) 竪穴住居跡	452		
D区-1号竪穴住居跡	452		
2) 土壌	456		
D区-2号土壌	456		
D区-3号土壌	456		
3) 溝	456		
D区-1号溝	456		
第4節 近世	458		
1) 溝	458		
D区-2号溝	458		
D区-3号溝	458		
D区-4号溝	458		
D区-5号溝	458		
D区遺構一覧表・遺物観察表	461		
(報告書抄録)		巻末	

挿 図 目 次

第1章	はじめに	
第1図	日田盆地の位置	1
第2図	自動車道の路線と遺跡の位置	2
第3図	小迫辻原遺跡調査区位置図	3
第4図	国指定史跡範囲図	7
第2章	遺跡の立地と環境	
第1図	日田盆地の位置と地勢	13
第2図	小迫辻原遺跡周辺の地形図	15
第3図	吹上遺跡(6次調査) 弥生時代墳墓群配置図	17
第4図	三和教田遺跡B地点の遺構図と 環濠出土の土器	18
第5図	上野第1遺跡出土(上)と三和教田遺跡 D地点(下)出土遺物	20
第6図	慈眼山瀬戸口遺跡の遺構図	21
第7図	日田盆地周辺の主要遺跡分布図	23
第3章	調査の方法と報告書の凡例	
第1図	方位の凡例	25
第2図	小迫辻原遺跡A～D区調査設定図	26
第4章	A区の記録	
表紙	A区の位置	29
第1図	小迫辻原遺跡A区遺構配置図①	31
第2図	小迫辻原遺跡A区遺構配置図②	33
第3図	A区-1号土壙	34
第4図	A区-2号土壙	35
第5図	A区-2号土壙出土遺物	35
第6図	A区-1～3号竪穴住居跡と A区-6号土壙	36
第7図	A区-2号竪穴住居跡出土遺物	36
第8図	A区-1・2・3号竪穴住居跡の変遷	37
第9図	A区-4号竪穴住居跡	38
第10図	A区-5号竪穴住居跡	38
第11図	A区-6号竪穴住居跡	39
第12図	A区-3号土壙	39
第13図	A区-3号土壙出土遺物	39
第14図	A区-4号土壙	40
第15図	A区-5号土壙	40
第16図	A区-4・5号土壙出土遺物	41
第17図	A区-6号土壙	42
第18図	A区-6号土壙出土遺物	42
第19図	A区-7号土壙	42
第20図	A区-8・9号土壙	42
第21図	A区-7・8・9号土壙出土遺物	43
第22図	A区-10号土壙	43
第23図	A区-10号土壙出土遺物	44
第24図	A区-11号土壙	45
第25図	A区-11号土壙出土遺物①	46
第26図	A区-11号土壙出土遺物②	47
第27図	A区-12号土壙	47
第28図	A区-12号土壙出土遺物	47
第29図	A区-13号土壙	48
第30図	A区-13号土壙出土遺物	49
第31図	A区-14号土壙	50
第32図	A区-14号土壙出土遺物	51
第33図	A区-15号土壙	51
第34図	A区-15号土壙出土遺物	51
第35図	A区-16号土壙	51
第36図	A区-16号土壙出土遺物	51
第37図	A区-17・18号土壙	52
第38図	A区-17・18号土壙出土遺物	52
第39図	A区-19号土壙	53
第40図	A区-19号土壙出土遺物	53
第41図	A区-20号土壙	54
第42図	A区-21号土壙	54
第43図	A区-20号土壙・A区-21号土壙 出土遺物①	55
第44図	A区-21号土壙出土遺物②	56
第45図	A区-22号土壙	56
第46図	A区-22号土壙出土遺物	56
第47図	A区-23号土壙	56
第48図	A区-23号土壙出土遺物	56
第49図	A区-24号土壙	57
第50図	A区-24号土壙出土遺物	57
第51図	A区-25号土壙	57
第52図	A区-25号土壙出土遺物	57
第53図	A区-26号土壙	57
第54図	A区-27号土壙	57
第55図	A区-27号土壙出土遺物	58
第56図	A区-28号土壙	59
第57図	A区-28号土壙出土遺物	60
第58図	A区-29号土壙	60

第59図	A区-29号土壙出土遺物	60	第121図	A区-62号土壙出土遺物	87
第60図	A区-30号土壙	61	第122図	A区-63号土壙	87
第61図	A区-31号土壙	61	第123図	A区-64号土壙①	88
第62図	A区-31号土壙出土遺物	62	第124図	A区-64号土壙②	90
第63図	A区-32号土壙	62	第125図	A区-64号土壙出土遺物①	91
第64図	A区-33号土壙	62	第126図	A区-64号土壙出土遺物②	92
第65図	A区-33号土壙出土遺物	62	第127図	A区-64号土壙出土遺物③	93
第66図	A区-34号土壙	63	第128図	A区-65号土壙	94
第67図	A区-34号土壙出土遺物	63	第129図	A区-65号土壙出土遺物	94
第68図	A区-35号土壙	63	第130図	A区-66号土壙	94
第69図	A区-35号土壙出土遺物	63	第131図	A区-67号土壙	94
第70図	A区-36号土壙	63	第132図	A区-67号土壙出土遺物	94
第71図	A区-36号土壙出土遺物	64	第133図	A区-68号土壙	95
第72図	A区-37号土壙	64	第134図	A区-68号土壙出土遺物	95
第73図	A区-37号土壙出土遺物	64	第135図	A区-69号土壙	96
第74図	A区-38号土壙	64	第136図	A区-69号土壙出土遺物	96
第75図	A区-38号土壙出土遺物	64	第137図	A区-70号土壙	96
第76図	A区-39号土壙	65	第138図	A区-70号土壙出土遺物	97
第77図	A区-39号土壙出土遺物	65	第139図	A区-71号土壙	97
第78図	A区-40号土壙	65	第140図	A区-71号土壙出土遺物	97
第79図	A区-40号土壙出土遺物	65	第141図	A区-72号土壙	97
第80図	A区-41号土壙	65	第142図	A区-72号土壙出土遺物	97
第81図	A区-41号土壙出土遺物	66	第143図	A区-73号土壙	97
第82図	A区-42号土壙	66	第144図	A区-74号土壙	98
第83図	A区-43号土壙①	66	第145図	A区-74号土壙出土遺物	98
第84図	A区-43号土壙②	67	第146図	A区-75号土壙	98
第85図	A区-43号土壙出土遺物	67	第147図	A区-75号土壙出土遺物	99
第86図	A区-44号土壙	68	第148図	A区-76号土壙	100
第87図	A区-44号土壙出土遺物	68	第149図	A区-76号土壙出土遺物	100
第88図	A区-45号土壙	68	第150図	A区-77号土壙	101
第89図	A区-46号土壙	69	第151図	A区-77号土壙出土遺物	101
第90図	A区-46号土壙出土遺物	69	第152図	A区-78号土壙	102
第91図	A区-47号土壙	70	第153図	A区-78号土壙出土遺物	102
第92図	A区-47号土壙出土遺物	70	第154図	A区-79号土壙	103
第93図	A区-48号土壙	70	第155図	A区-80号土壙	103
第94図	A区-48号土壙出土遺物	71	第156図	A区-80号土壙出土遺物	103
第95図	A区-49号土壙	71	第157図	A区-82号土壙	104
第96図	A区-49号土壙出土遺物	72	第158図	A区-82号土壙出土遺物	104
第97図	A区-50号土壙	72	第159図	A区-120号土壙	105
第98図	A区-50号土壙出土遺物	72	第160図	A区-121号土壙	105
第99図	A区-51号土壙	73	第161図	A区-137号土壙	105
第100図	A区-51号土壙出土遺物	73	第162図	A区-137号土壙出土遺物	105
第101図	A区-52号土壙	74	第163図	A区-U18調査区ピット1出土遺物	105
第102図	A区-52号土壙出土遺物	75	第164図	小迫辻原遺跡A区遺構配置図③	106
第103図	A区-53号土壙①	76	第165図	A区-81号土壙	107
第104図	A区-53号土壙②	77	第166図	A区-81号土壙出土遺物	107
第105図	A区-53号土壙出土遺物①	78	第167図	A区-83号土壙と周辺ピット群	108
第106図	A区-53号土壙出土遺物②	79	第168図	A区-83号土壙周辺出土遺物	108
第107図	A区-54号土壙	80	第169図	A区-84号土壙	109
第108図	A区-55号土壙	81	第170図	A区-84号土壙出土遺物	110
第109図	A区-55号土壙出土遺物①	82	第171図	A区-85号土壙	111
第110図	A区-55号土壙出土遺物②	83	第172図	A区-85号土壙出土遺物	112
第111図	A区-56号土壙	83	第173図	A区-86号土壙	113
第112図	A区-56号土壙出土遺物	83	第174図	A区-86号土壙出土遺物	113
第113図	A区-57号土壙	84	第175図	A区-87号土壙	114
第114図	A区-58号土壙	84	第176図	A区-88号土壙	114
第115図	A区-58号土壙出土遺物	84	第177図	A区-87・88号土壙出土遺物	114
第116図	A区-59号土壙	84	第178図	小迫辻原遺跡A区遺構配置図④	115
第117図	A区-60号土壙	85	第179図	A区-7号竪穴住居跡①	116
第118図	A区-60号土壙出土遺物	85	第180図	A区-7号竪穴住居跡②	117
第119図	A区-61号土壙	86	第181図	A区-7号竪穴住居跡出土遺物	118
第120図	A区-62号土壙	86	第182図	A区-8号竪穴住居跡①	119

第183図	A区-8号竪穴住居跡②	120
第184図	A区-8号竪穴住居跡出土遺物	120
第185図	A区-9号竪穴住居跡①	121
第186図	A区-9号竪穴住居跡②	121
第187図	A区-9号竪穴住居跡出土遺物	122
第188図	A区-10号竪穴住居跡と V19調査区ピット1	123
第189図	V19調査区ピット1出土遺物	123
第190図	A区-1号掘立柱建物跡	123
第191図	A区-2号掘立柱建物跡	124
第192図	A区-89号土壙	124
第193図	A区-90号土壙	125
第194図	A区-91号土壙	125
第195図	A区-91号土壙出土遺物	126
第196図	A区-92号土壙	126
第197図	A区-92号土壙出土遺物	126
第198図	A区奈良時代ピット出土遺物	126
第199図	小迫辻原遺跡A区遺構配置図⑤	127
第200図	A区-3号掘立柱建物跡	128
第201図	A区-4号掘立柱建物跡	128
第202図	A区-5号掘立柱建物跡	129
第203図	A区-5号掘立柱建物跡出土遺物	129
第204図	A区-6号掘立柱建物跡	129
第205図	A区-7号掘立柱建物跡	130
第206図	A区-8号掘立柱建物跡	130
第207図	A区-8号掘立柱建物跡出土遺物	130
第208図	A区-9号掘立柱建物跡	131
第209図	A区-10号掘立柱建物跡	131
第210図	A区-10号掘立柱建物跡出土遺物	131
第211図	小迫辻原遺跡A区遺構配置図⑥	132
第212図	A区-1号溝	133
第213図	A区-2号溝	133
第214図	A区-3・4・5号溝	134
第215図	A区-3号溝出土遺物	135
第216図	A区-6号溝	135
第217図	A区表面採集遺物	135

第5章	B区の記録	
表紙	B区的位置	161
第1図	小迫辻原遺跡B区遺構配置図①	163
第2図	小迫辻原遺跡B区遺構配置図②	165
第3図	B区-1号竪穴住居跡	167
第4図	B区-2号竪穴住居跡	168
第5図	B区-2号竪穴住居跡出土遺物①	169
第6図	B区-2号竪穴住居跡出土遺物②	170
第7図	B区-3号竪穴住居跡	171
第8図	B区-3号竪穴住居跡出土遺物	171
第9図	B区-1号土壙	171
第10図	B区-1号土壙出土遺物	171
第11図	B区-2号土壙	171
第12図	B区-2号土壙出土遺物	172
第13図	B区-3号土壙	172
第14図	B区-3号土壙出土遺物	173
第15図	B区-4号土壙	174
第16図	B区-4号土壙出土遺物	174
第17図	B区-5号土壙	174
第18図	B区-5号土壙出土遺物	174
第19図	B区-6号土壙	174
第20図	B区-6号土壙出土遺物	175
第21図	B区-7号土壙	175
第22図	B区-7号土壙出土遺物	175
第23図	B区-8号土壙	175
第24図	B区-9号土壙	175
第25図	B区-9号土壙出土遺物	175
第26図	B区-10号土壙	176
第27図	B区-10号土壙出土遺物	176
第28図	B区-11号土壙	176
第29図	B区-11号土壙出土遺物	176
第30図	B区-12号土壙	177
第31図	B区-12号土壙出土遺物	177
第32図	B区-13号土壙	177
第33図	B区-13号土壙出土遺物	177
第34図	B区-14号土壙	178
第35図	B区-14号土壙出土遺物	178
第36図	B区-15号土壙	178
第37図	B区-15号土壙出土遺物	178
第38図	B区-16号土壙	178
第39図	B区-16号土壙出土遺物	179
第40図	B区-17号土壙	179
第41図	B区-17号土壙出土遺物	179
第42図	B区-18号土壙	179
第43図	B区-18号土壙出土遺物	179
第44図	B区-19号土壙	180
第45図	B区-19号土壙出土遺物	180
第46図	B区-20号土壙	180
第47図	B区-21号土壙	180
第48図	B区-21号土壙出土遺物	180
第49図	B区-22号土壙	180
第50図	B区-22号土壙出土遺物	180
第51図	B区-23号土壙	181
第52図	B区-23号土壙出土遺物	181
第53図	B区-24号土壙	182
第54図	B区-24号土壙出土遺物	182
第55図	B区-25号土壙	182
第56図	B区-25号土壙出土遺物	182
第57図	B区-26号土壙	182
第58図	B区-26号土壙出土遺物	182
第59図	B区-27号土壙	183
第60図	B区-27号土壙出土遺物	183

第61図	B区-28号土壙	184	第123図	B区-4号竪穴住居跡①	224
第62図	B区-28号土壙出土遺物	184	第124図	B区-4号竪穴住居跡②	225
第63図	B区-29号土壙	184	第125図	B区-4号竪穴住居跡出土遺物①	226
第64図	B区-29号土壙出土遺物	184	第126図	B区-4号竪穴住居跡出土遺物②	227
第65図	B区-30号土壙	185	第127図	B区-4号竪穴住居跡出土遺物③	228
第66図	B区-30号土壙出土遺物	185	第128図	B区-5号竪穴住居跡①	229
第67図	B区-31号土壙	186	第129図	B区-5号竪穴住居跡②	230
第68図	B区-31号土壙出土遺物	187	第130図	B区-5号竪穴住居跡③	231
第69図	B区-32号土壙	187	第131図	B区-5号竪穴住居跡出土遺物①	233
第70図	B区-33号土壙	188	第132図	B区-5号竪穴住居跡出土遺物②	234
第71図	B区-33号土壙出土遺物	188	第133図	B区-5号竪穴住居跡出土遺物③	235
第72図	B区-34号土壙	189	第134図	B区-5号竪穴住居跡出土遺物④	236
第73図	B区-34号土壙出土遺物	189	第135図	B区-5号竪穴住居跡出土遺物⑤	237
第74図	B区-35号土壙	189	第136図	B区-5号竪穴住居跡出土遺物⑥	238
第75図	B区-35号土壙出土遺物	189	第137図	B区-6号竪穴住居跡①	239
第76図	B区-36号土壙	190	第138図	B区-6号竪穴住居跡②	240
第77図	B区-36号土壙出土遺物	190	第139図	B区-6号竪穴住居跡③	241
第78図	B区-1号墓	191	第140図	B区-6号竪穴住居跡④	241
第79図	B区-1号墓出土遺物	192	第141図	B区-6号竪穴住居跡出土遺物①	242
第80図	B区-ピット出土遺物	192	第142図	B区-6号竪穴住居跡出土遺物②	242
第81図	小迫辻原遺跡B区遺構配置図③	193	第143図	B区-7号竪穴住居跡	243
第82図	B区-37号土壙	195	第144図	B区-8号竪穴住居跡①	243
第83図	B区-37号土壙出土遺物	195	第145図	B区-8号竪穴住居跡②	244
第84図	B区-38号土壙	195	第146図	B区-8号竪穴住居跡出土遺物①	245
第85図	B区-38号土壙出土遺物	195	第147図	B区-8号竪穴住居跡出土遺物②	246
第86図	B区-39号土壙	196	第148図	B区-9号竪穴住居跡	247
第87図	B区-39号土壙出土遺物	196	第149図	B区-9号竪穴住居跡の変遷	247
第88図	B区-40号土壙①	196	第150図	B区-9号竪穴住居跡出土遺物	247
第89図	B区-40号土壙②	197	第151図	B区-10号竪穴住居跡①	248
第90図	B区-40号土壙③	198	第152図	B区-10号竪穴住居跡②	249
第91図	B区-40号土壙出土遺物	199	第153図	B区-10号竪穴住居跡出土遺物①	250
第92図	B区-41号土壙	200	第154図	B区-10号竪穴住居跡出土遺物②	251
第93図	B区-41号土壙出土遺物	201	第155図	B区-10号竪穴住居跡出土遺物③	252
第94図	B区-42号土壙	203	第156図	B区-10号竪穴住居跡出土遺物④	253
第95図	B区-42号土壙出土遺物①	204	第157図	B区-11号竪穴住居跡	254
第96図	B区-42号土壙出土遺物②	205	第158図	B区-11号竪穴住居跡出土遺物	254
第97図	B区-42号土壙出土遺物③	206	第159図	B区-12号竪穴住居跡	255
第98図	B区-43号土壙	207	第160図	B区-12号竪穴住居跡出土遺物	255
第99図	B区-43号土壙出土遺物①	208	第161図	B区-47号土壙	256
第100図	B区-43号土壙出土遺物②	209	第162図	B区-47号土壙出土遺物	256
第101図	B区-44号土壙	210	第163図	B区-8号墓	256
第102図	B区-45号土壙	210	第164図	B区-8号墓出土遺物	257
第103図	B区-45号土壙出土遺物	210	第165図	B区-I O調査区ピット4出土遺物	258
第104図	B区-46号土壙	210	第166図	B区-13号竪穴住居	258
第105図	B区-46号土壙出土遺物	210	第167図	小迫辻原遺跡B区遺構配置図⑤	259
第106図	B区-1号土器溜まり	211	第168図	B区-13号竪穴住居跡のカマド	261
第107図	B区-1号土器溜まり出土遺物	212	第169図	B区-13号竪穴住居跡出土遺物	261
第108図	B区-2号墓	213	第170図	B区-F 2調査区ピット2出土遺物	261
第109図	B区-2号墓出土遺物	213	第171図	B区-1号掘立柱建物跡	262
第110図	B区-3号墓	213	第172図	B区-2号掘立柱建物跡	262
第111図	B区-3号墓	214	第173図	B区-2号掘立柱建物跡出土遺物	262
第112図	B区-4号墓	214	第174図	B区-3号掘立柱建物跡	263
第113図	B区-5号墓	215	第175図	B区-4号掘立柱建物跡	263
第114図	B区-5号墓出土遺物①	216	第176図	B区-5号掘立柱建物跡	263
第115図	B区-5号墓出土遺物②	217	第177図	B区-6号掘立柱建物跡	264
第116図	B区-6号墓	218	第178図	B区-7号掘立柱建物跡	265
第117図	B区-6号墓出土遺物	218	第179図	B区-7号掘立柱建物跡出土遺物	265
第118図	B区-7号墓	219	第180図	B区-8号掘立柱建物跡	265
第119図	B区-7号墓出土遺物①	219	第181図	B区-9号掘立柱建物跡	266
第120図	B区-7号墓出土遺物②	220	第182図	B区-9号掘立柱建物跡出土遺物	266
第121図	B区-ピット出土遺物	220	第183図	B区-10号掘立柱建物跡	267
第122図	小迫辻原遺跡B区遺構配置図④	221	第184図	B区-11号掘立柱建物跡	267

第185図	B区-11号掘立柱建物跡出土遺物	267	第6章	C区の記録	
第186図	B区-48号土壌	268	表紙	C区的位置	309
第187図	B区-49号土壌	268	第1図	小迫辻原遺跡C区遺構配置図①	311
第188図	B区-49号土壌出土遺物	268	第2図	小迫辻原遺跡C区遺構配置図②	313
第189図	B区-50号土壌	268	第3図	1・2号方形環溝遺構配置図	316
第190図	B区-51号土壌	268	第4図	1号方形環溝①	317
第191図	B区-52号土壌	268	第5図	1号方形環溝②	319
第192図	B区-53号土壌	269	第6図	1号方形環溝③	322
第193図	B区-53号土壌出土遺物	269	第7図	1号方形環溝④	324
第194図	B区-54号土壌	269	第8図	1号方形環溝⑤	325
第195図	B区-54号土壌出土遺物	269	第9図	1号方形環溝⑥	326
第196図	B区-55号土壌	269	第10図	1号方形環溝⑦	327
第197図	B区-9号墓	270	第11図	1号方形環溝⑧	328
第198図	B区-9号墓出土遺物	270	第12図	1号方形環溝⑨	328
第199図	B区-1号溝	271	第13図	1号方形環溝C区-1号溝 出土遺物①	330
第200図	B区-1号溝出土遺物	271	第14図	1号方形環溝C区-1号溝 出土遺物②	331
第201図	B区-2号溝	272	第15図	1号方形環溝C区-1号溝 出土遺物③	332
第202図	B区-2号溝出土遺物	273	第16図	1号方形環溝⑩	333
第203図	B区-3号溝	273	第17図	2号方形環溝②	334
第204図	B区中世ピット出土遺物	273	第18図	2号方形環溝①	335
第205図	B区-12号掘立柱建物	274	第19図	2号方形環溝③	337
第206図	B区-56号土壌	274	第20図	2号方形環溝C区-3号溝出土遺物	337
第207図	B区-57号土壌	274	第21図	2号方形環溝④	338
第208図	小迫辻原遺跡B区遺構配置図⑥	275	第22図	2号方形環溝⑤	338
第209図	B区-4・5・6・7・8号溝	277	第23図	2号方形環溝⑥	339
第210図	B区表面採集遺物①	280	第24図	2号方形環溝⑦	340
第211図	B区表面採集遺物②	281	第25図	2号方形環溝C区-2号溝出土遺物	342
			第26図	1号条溝(C区-4号溝)①	345
			第27図	1号条溝(C区-4号溝)②	345
			第28図	1号条溝(C区-4号溝)③	347
			第29図	1号条溝(C区-4号溝)④	349
			第30図	1号条溝(C区-4号溝)⑤	351
			第31図	C区-4号溝(条溝)出土遺物①	354
			第32図	C区-4号溝(条溝)出土遺物②	355
			第33図	C区-4号溝(条溝)出土遺物③	357
			第34図	C区-4号溝(条溝)出土遺物④	359
			第35図	C区-4号溝(条溝)出土遺物⑤	361
			第36図	C区-4号溝(条溝)出土遺物⑥	363
			第37図	C区-4号溝(条溝)出土遺物⑦	365
			第38図	C区-4号溝(条溝)出土遺物⑧	366
			第39図	C区-4号溝(条溝)出土遺物⑨	369
			第40図	C区-4号溝(条溝)出土遺物⑩	370
			第41図	C区-4号溝(条溝)出土遺物⑪	371
			第42図	C区-4号溝(条溝)出土遺物⑫	373
			第43図	C区-4号溝(条溝)出土遺物⑬	375
			第44図	C区-4号溝(条溝)出土遺物⑭	376
			第45図	1号条溝(C-4溝)内土壌A	376
			第46図	C区-4号溝内土壌A出土遺物	376
			第47図	1号条溝(C-4溝)内土壌B・C	377
			第48図	C区-1号竪穴住居跡①	378
			第49図	C区-1号竪穴住居跡②	379
			第50図	C区-1号竪穴住居跡出土遺物	380
			第51図	C区-2号竪穴住居跡①	380
			第52図	C区-2号竪穴住居跡②	381
			第53図	C区-2号竪穴住居跡出土遺物	382
			第54図	C区-3号竪穴住居跡①	383
			第55図	C区-3号竪穴住居跡②	384
			第56図	C区-3号竪穴住居跡出土遺物	384
			第57図	C区-4号竪穴住居跡①	385

第58図	C区-4号竪穴住居跡②	386
第59図	C区-4号竪穴住居跡出土遺物	387
第60図	C区-5号竪穴住居跡	387
第61図	C区-6号竪穴住居跡	388
第62図	C区-6号竪穴住居跡出土遺物	388
第63図	C区-7号竪穴住居跡①	389
第64図	C区-7号竪穴住居跡②	391
第65図	C区-7号竪穴住居跡出土遺物①	394
第66図	C区-7号竪穴住居跡出土遺物②	395
第67図	C区-8号竪穴住居跡①	397
第68図	C区-8号竪穴住居跡②	398
第69図	C区-8号竪穴住居跡③	399
第70図	C区-8号竪穴住居跡出土遺物①	400
第71図	C区-8号竪穴住居跡④	401
第72図	C区-8号竪穴住居跡出土遺物②	403
第73図	C区-9号竪穴住居跡	404
第74図	C区-9号竪穴住居跡出土遺物	404
第75図	C区-10号竪穴住居跡	405
第76図	C区-10号竪穴住居跡出土遺物	405
第77図	C区-3号掘立柱建物跡	406
第78図	C区-4号掘立柱建物跡	406
第79図	C区-1号土壙	407
第80図	C区-1号土壙出土遺物	407
第81図	C区-2号土壙	407
第82図	C区-2号土壙出土遺物	407
第83図	C区-11号竪穴住居跡	408
第84図	C区-12号竪穴住居跡	408
第85図	小迫辻原遺跡C区遺構配置図③	409
第86図	C区-13号竪穴住居跡①	411
第87図	C区-13号竪穴住居跡②	412
第88図	C区-13号竪穴住居跡出土遺物	413
第89図	C区-14号竪穴住居跡	413
第90図	C区-14号竪穴住居跡出土遺物	413
第91図	C区-3号土壙	414
第92図	C区-3号土壙出土遺物	414
第93図	C区-4号土壙	414
第94図	C区-4号土壙出土遺物	414
第95図	C区-B3調査区ピット12出土遺物	414
第96図	C区-5号掘立柱建物跡	415
第97図	C区-6号掘立柱建物跡	415
第98図	C区-7号掘立柱建物跡	416
第99図	C区-8号掘立柱建物跡	416
第100図	C区-1号墓	417
第101図	C区-5号溝出土遺物	417
第102図	C区-5・6号溝	418
第103図	C区-9号掘立柱建物跡	419
第104図	C区-5号土壙	419
第105図	C区-6号土壙	420
第106図	C区-7号土壙	420
第107図	C区-8号土壙	420
第108図	C区-9号土壙	420
第109図	C区-10号土壙	420
第110図	C区-7・8号溝	421
第111図	C区-7号溝出土遺物	421
第112図	C区-8号溝出土遺物	422
第113図	C区-9号溝出土遺物	422
第114図	C区-10号溝出土遺物	422
第115図	C区-12号溝出土遺物	422
第116図	C区-9・10・11・12号溝	423
第117図	C区-表面採集遺物	425
第118図	C区遺構検出時出土遺物	425
第119図	C区拡張区B試掘区出土遺物	425

第7章 D区の記録

表紙	D区の位置	447
第1図	小迫辻原遺跡D区遺構配置図①	449
第2図	小迫辻原遺跡D区遺構配置図②	451
第3図	D区-1号土壙	452
第4図	D区-1号土壙出土遺物	452
第5図	D区-M8調査区、D区-1号土壙 周辺ピット群	452
第6図	D区-1号竪穴住居跡①	453
第7図	D区-1号竪穴住居跡②	453
第8図	D区-1号竪穴住居跡③	454
第9図	D区-1号竪穴住居跡出土遺物	455
第10図	D区-2号土壙	456
第11図	D区-3号土壙	456
第12図	D区-1号溝出土遺物	456
第13図	D区-1号溝	457
第14図	D区-2・3・4・5号溝	459

表 目 次

第1章 調査の経過

第1表. 小迫辻原遺跡の発掘調査等の経過表 …… 6

第4章 A区の記録

第1表. 小迫辻原遺跡A区竪穴住居跡一覧表 ……136
第2表. 小迫辻原遺跡A区掘立柱建物跡一覧表 ……136
第3表. 小迫辻原遺跡A区土壇一覧表 ……137
第4表. 小迫辻原遺跡A区溝一覧表 ……140
第5表. 小迫辻原遺跡A区出土土器観察表 ……141
第6表. 小迫辻原遺跡A区出土石器観察表 ……160

第5章 B区の記録

第1表. 小迫辻原遺跡B区竪穴住居跡一覧表 ……282
第2表. 小迫辻原遺跡B区掘立柱建物跡一覧表 ……283
第3表. 小迫辻原遺跡B区土壇一覧表 ……284
第4表. 小迫辻原遺跡B区墓一覧表 ……286
第5表. 小迫辻原遺跡B区溝一覧表 ……286
第6表. 小迫辻原遺跡B区出土土器観察表 ……287
第7表. 小迫辻原遺跡B区出土土製品観察表 ……306
第8表. 小迫辻原遺跡B区出土石器観察表 ……307
第9表. 小迫辻原遺跡B区出土鉄器観察表 ……308

第6章 C区の記録

第1表. 小迫辻原遺跡C区竪穴住居跡一覧表 ……426
第2表. 小迫辻原遺跡C区掘立柱建物跡一覧表 ……427
第3表. 小迫辻原遺跡C区土壇一覧表 ……427
第4表. 小迫辻原遺跡C区墓一覧表 ……428
第5表. 小迫辻原遺跡C区溝一覧表 ……428
第6表. 小迫辻原遺跡C区出土土器観察表 ……429
第7表. 小迫辻原遺跡C区出土土製品観察表 ……444
第8表. 小迫辻原遺跡C区出土石器観察表 ……444
第9表. 小迫辻原遺跡C区出土鉄器観察表 ……445

第7章 D区の記録

第1表. 小迫辻原遺跡D区竪穴住居跡一覧表 ……461
第2表. 小迫辻原遺跡D区土壇一覧表 ……461
第3表. 小迫辻原遺跡D区溝一覧表 ……461
第4表. 小迫辻原遺跡D区出土土器観察表 ……462
第5表. 小迫辻原遺跡D区出土石器観察表 ……463

挿入写真目次

A区表紙 作業風景 …… 29
写真1. A区南半遺構検出状態(北東から) …… 32
写真2. A区北半遺構検出状態(東から) …… 32
写真3. A区-10号土壇遺物出土状態(西から) …… 43
写真4. A区-11号土壇の側面の穴(西から) …… 44
写真5. A区-19号土壇遺物出土状態(西から) …… 52
写真6. A区-20号土壇遺物出土状態(北西から) …… 54
写真7. A区-29号土壇の断面土層(東から) …… 60
写真8. A区-31号土壇遺物出土状態(南東から) …… 62
写真9. A区-43号土壇完掘状態 …… 66
写真10. A区-49号土壇No.1壺出土状態(西から) …… 71
写真11. A区-51号土壇遺物出土状態(西から) …… 73
写真12. A区-62号土壇検出状態(北西から) …… 87
写真13. A区-63号土壇遺物出土状態(西から) …… 87
写真14. A区-64号土壇中央部縦断面の土層 …… 89
写真15. A区-64号土壇横断面の土層(B断面) …… 89
写真16. A区-64号土壇底部円礫出土状態 …… 89
写真17. A区-86号土壇とA区-9号竪穴住居跡の遺物出土状態(東から) ……112

B区表紙 調査風景(1987年) ……161

C区表紙 2号方形環溝付近調査風景(1987年) ……309
写真1. 1号方形環溝拡張区A(東北から) ……321
写真2. 1号方形環溝C-1溝C~E地点の縦断面(南西から) ……322
写真3. 1号方形環溝C-1溝 F地点縦断面(西から) ……327
写真4. 1号条溝29群最下部の土器出土状態(左No.196・右No.197) ……353
写真5. C区-1号竪穴住居跡入口施設の断面土層(東から) ……379
写真6. C区-2号竪穴住居跡ベット状遺構の断面土層(南から) ……381
写真7. C区-7号竪穴住居跡東北部遺物出土状態(北東から) ……390
写真8. C区-8号竪穴住居跡ベット3. 板材とりあげ風景 ……399
写真9. 拡張区B出土遺物 ……425
D区表紙 実測風景(1987年) ……447

カラー図版目次

A区全景 …… 30
B区中世館跡全景 ……162
C区上. 1号条溝遠景 ……310

C区下. C区-8号竪穴住居跡 ……310
D区上. D区-1号竪穴住居跡 ……448
D区下. D区-1号溝 ……448

第1章 はじめに

第1節 調査の経過

1) 九州横断自動車道（第2図）

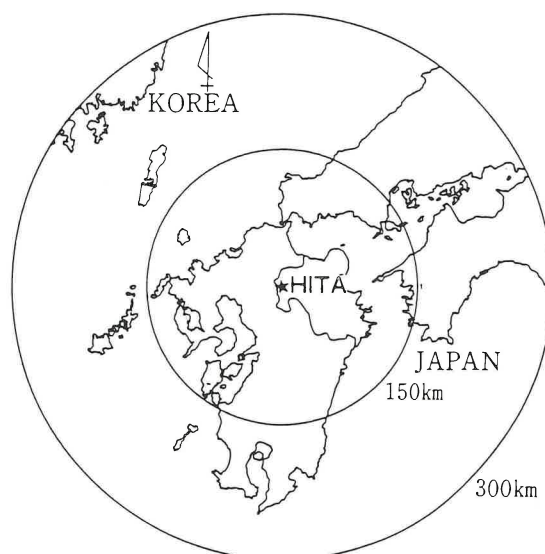
大分と長崎を結ぶ九州横断高速道大分道路の建設に伴う日田地方の埋蔵文化財発掘調査が開始されたのは、昭和58年度からである。この高速道路の日田地方での路線は、盆地の北側の台地群を東西に縦断する形となり、これによって多くの遺跡の事前調査を実施することとなった。その中には、弥生時代後期から古墳時代中期に至る一大埋葬遺跡で、方形周溝墓、石棺墓、甕棺墓、土壇墓などを多数検出した草場第2遺跡をはじめ、弥生中期の集落跡の佐寺原遺跡、古墳時代前期の夕田古墳、同後期の有田塚ヶ原古墳群、小迫穴墓群さらに中世の尾漕遺跡群など、重要な遺跡が含まれており、日田地方の先史時代から中世に至る歴史の解明に大きく寄与するものとなった。

小迫辻原遺跡は、これらの遺跡群の中でも最も注目される遺跡であり、昭和58年度、59年度に試掘調査を行い、昭和60年度から本調査を実施してきた。この遺跡が立地する台地は、標高124mの東西700m、南北400mの独立性の略三角形をなす。麓の水田部との比高差は35～40m、その面積は約18万㎡に及ぶほぼ台地の全域が遺跡と考えられているものである。そして自動車道は、この台地の南辺近くを東西方向に幅20～40mの幅に横断するものであった。

小迫辻原台地の道路計画部分の調査区の設定については、試掘調査の資料を基に、遺構密度の高い地区から順次調査をすすめ、調査の進展に従ってA～F地区とした（報告書ではA～D区に改めた）。昭和60年度は台地の路線部のほぼ中心にあたり、61年度も継続して行った。その結果、弥生時代後期末から古墳時代前期初めの集落を構成する方形竪穴住居跡とB地区（新C区）において集落を画すと見られる南北方向の大規模な溝を検出した。また奈良時代の方形竪穴住居跡、さらに中世掘立柱建物跡も数棟確認した。台地の西端部のC地区（新A区）については61年度に実施し、主として弥生時代前～中期の住居跡、竪穴遺構、貯蔵穴等が検出された。このほか、弥生時代後期末から古墳時代前期初めの方形竪穴住居跡、中世の掘立柱建物群が確認されている。

昭和62年度は、A・B地区とC地区の中間のD地区（新B区）及びA・B地区東側一帯のE・F地区（新C・D区）の調査を実施し、E・F地区において、古墳時代前期初頭の方形の「豪族居館」跡2基を検出した。2基の「豪族居館」跡は、溝部を検出した当初は中世城館の遺構との思い込みがあったが、濠内の調査がすすむうち、遺物が古墳時代初頭の布留式古段階の土師器しかみられないところから、昭和63年1月末の段階で同期の居館遺構と判断されるに至った。この遺構は、当時の新聞記事に「小迫辻原遺跡で日本最古の豪族居館発見」とあるように、我が国最古の古墳時代初頭の居館跡と確認され、その重要性がはやく認識されたのである。

調査主体者である大分県教育委員会は、ただちにこの2基の居館遺構の重要性に鑑み、事業主体者である日本道路公団をはじめ関係機関とその取扱いについて協議にあたった。高速道予定地にかかる遺跡の保存については、その道路の性格から線形の変更はほとんど不可能とされているものであるが、遺跡は国指定に相当する重要なも



第1図 日田盆地の位置

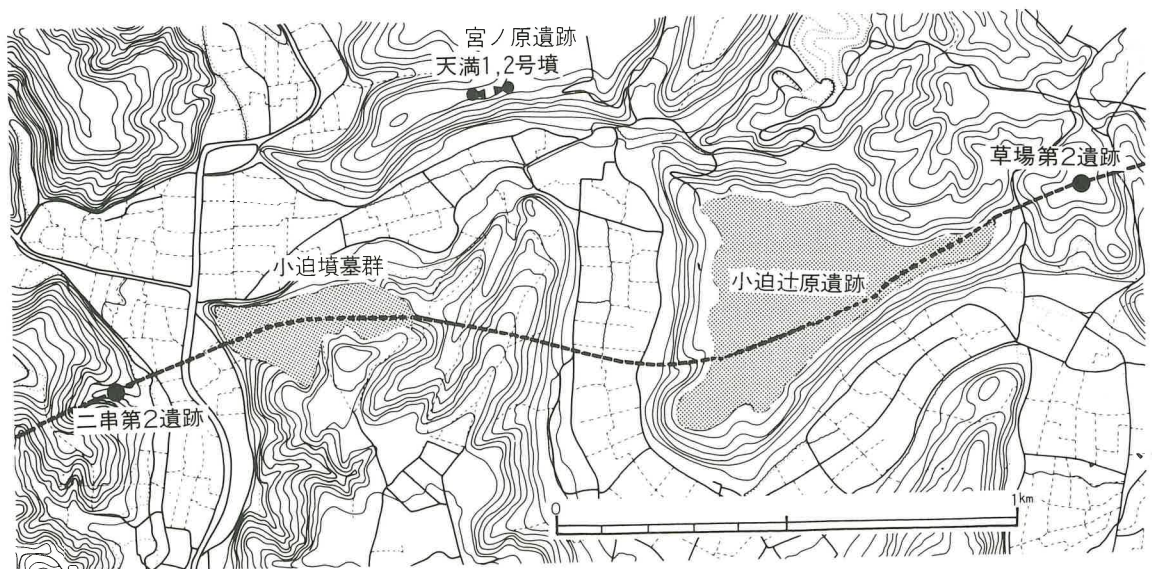
なのであるところから、その保存についてその後2ヶ月にわたり白熱した協議がすすめられた。

その結果、(1)自動車道本線工事の工法変更により、2号居館を完全保存し、1号居館の一部を記録保存とする。(2)事後の方針として、1・2号居館遺構の全容を確認し、県指定史跡として保存する。(3)さらに、その周辺に展開する民有地での全面的な確認調査を実施し、その成果をふまえて遺跡全体の保存策を検討する、という方向が関係機関の間で確認された。

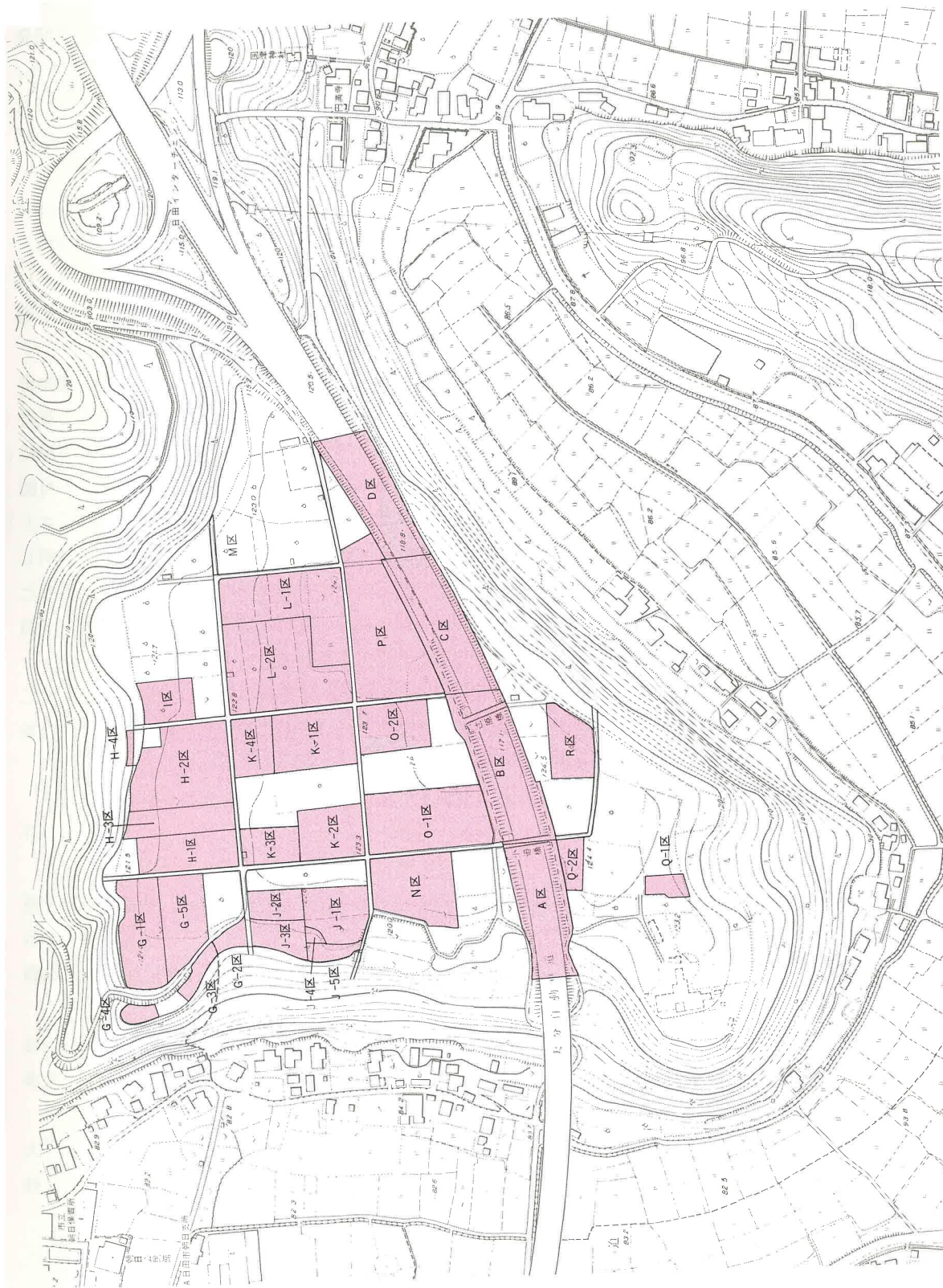
その後、日田市教育委員会が調査主体となって、すでに一部62年度から実施していた小迫辻原台地の14haに及ぶ畑地帯の試掘調査を国費と県費の補助を得て平成5年度まで、ほぼ台地全域を網羅する形で実施した。これは、開発に先行する遺構の確認調査としては大規模の調査となり、その結果、台地の西側部分に弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての環濠3基に加えて小型の居館遺構1基、さらに古代・中世居館遺構等の重要な遺構がこの台地にのこされていることが明らかになった。

高速道にかかる2基の居館遺構については早速、県史跡指定の手続きをとり、翌平成元年3月30日に指定をうけ、地元日田市が公有化することとなった。高速道路内の調査という遺跡の現地保存にとって最も難しい条件の中でこれだけの成果を得たことは、関係機関の遺跡に対する深い認識と理解があったものと評価されるものである。

ともあれ、小迫辻原遺跡は、弥生時代後期末の環濠集落と、その中から地域の支配者にあたる司祭者層の施設(方形居館)が創出されるという過程を表出するものとして、我が国の国家形成期の地方首長の姿を示してくれる貴重な遺跡である。これによって文化庁は遺跡の大部分について平成6年11月18日に国指定の答申を行い、平成8年10月31日に正式に国史跡として官報に告示された。



第2図 自動車道の路線と遺跡の位置



第3図 小迫辻原遺跡調査区位置図 (1/5000)

2) 地力増進事業（第3図）

九州横断高速道大分道路建設に先立つ小迫辻原遺跡での発掘調査が進展し、古墳時代前期の豪族居館跡2基の発見を契機にこの遺跡が注目され始めた頃、辻原台地の畑地では白菜やスイカなどの作物の生産を高めるために機械（バックホウ）を使って畑の床土を掘り起こす地力増進事業（天地返し）が実施計画された。この農業開発に対して市教委では、発掘された豪族居館跡を巡って遺跡の保存問題も検討されているさなかでもあることから、市農政課と再三にわたって遺跡の保存を前提とした協議を行ってきた。しかし、機械を使う単純な開発工事に対応できる工法変更等は見当たらず、最終的には工事予定地を対象に緊急の調査を実施する方針となり、昭和62年度から県教委の協力を得ながら調査を開始した。

こうした経過を経た翌年には本格的な発掘調査を始めたが、台地西端（N区）では豪族居館跡とは別のほぼ同時期とみられる環濠（2号）の一部が検出され、さらには平成元年度の豪族居館跡（大分県指定史跡）用地購入に伴う台地中央の調査（K-1区）では整然と区画された古代の建物群や「大領」銘の墨書土器などが調査された。これら相次ぐ発見はこの遺跡の価値をより一層高めることとなり、また豪族居館跡の保存経過もあって小迫辻原遺跡発掘調査指導委員会からは早急な遺跡の確認の必要性が指摘された。

このことを踏まえて市教委では平成2年度から豪族居館跡の内容把握や環濠（2号）の追跡確認、古代建物群の広がりを確認するなどの遺跡全容解明を目的とした小迫辻原遺跡確認調査事業費を予算化し、緊急調査と並行して調査を行うこととなった。2ケ年間の同時調査の結果、①豪族居館跡（1・2号方形環溝）は方形に巡る溝内部に掘立柱建物跡を有する施設であること、②豪族居館跡西側の溝（1号条溝）は台地を分断する可能性が高いこと、③台地西側には時期が異なる3つの環濠（1～3号）が存在すること、④古代の建物群は「コ」の字型に配置されると推定されること、⑤中世には溝で区画された複数の環溝屋敷が存在することなどが判明した。こうした成果は遺跡の重要性をさらに高める結果となり、次節でもふれるが本格的な遺跡保存への協議へと進むこととなった。その後の調査は各時期の主要な遺構の確認に主眼を置いて進め、3号方形環溝1基などが追加確認され、平成5年度をもって県教委の調査から数えて9年間におよぶ発掘調査は終了した。

以下、市教委による各年度ごとの調査場所と調査成果を簡単にまとめるが、調査地点については昭和63年度に調査の増加による混乱を避けるために県・市教委担当者間において便宜的な呼び名に統一した経緯から、市教委調査実施区分については大半は当時の呼び名のままとしている。

（昭和62年度）L-1区の試掘調査（市国庫）を実施した。（註1）

1・2号方形環溝とほぼ同時期の竪穴住居跡を確認。

（昭和63年度）N区の発掘調査（市国庫）とO-1区の試掘調査（県国庫）を実施した。（註2・3）

この区では全長約48mの屈曲部を有する環濠（2号）の一部を検出したほか、環濠（2号）と前後する竪穴住居や中世墓などが発見された。

（平成元年度）O-1区の発掘調査（市国庫）とK-1区の発掘調査（市公社）、K-2区の試掘調査（県国庫）を実施した。（註4～6）

O-1区では環濠（2号）の追跡を行ったところ、さらに屈曲部1ヶ所が確認された。このほか、弥生時代の竪穴住居跡や小児用甕棺墓、古代の竪穴住居跡、中世の環溝屋敷や墓といった多くの遺構が重複して発見された。

K-1区では古代建物6基を中心に竪穴住居跡、溝などを発掘した。これらの遺構からは「大領？」と読める墨書土器数点や土壁、鉄製紡錘車などが出土した。このほかにも、中世の掘立柱建物跡や墓などの遺構を検出した。

（平成2年度）H-1区・K-3区の発掘調査（市国庫）とG-1区・J-1区・K-4区・L-2区・P区（市単）の確認調査を実施した。（註7）

H-1区とG-1区では新たに重複する2つの環濠（1・3号）の一部が検出された。1号環濠には屈曲部1ヶ所が確認され、3号環濠はほぼ方形に巡ると予想された。

K-3区では1・2号環濠の屈曲部と3号環濠の一部を検出した。このほか、弥生時代の竪穴住居跡や中世の溝、掘立柱建物跡を確認した。

P区では1・2号方形環溝の北側を調査し、1号は溝の内側に小溝が巡ること、2号は溝の北側に陸橋部が存在しその内部に掘立柱建物跡2棟が存在することが判明した。このほか前後する竪穴住居跡や中世の掘立柱建物跡、溝などの遺構を検出した。

J-1区では新たに中世の環溝屋敷1つが発見された。

(平成3年度) H-2区・O-2区の発掘調査(市国庫)とG-1区・J-1区・K-4区・L-2区・P区(市単)の確認調査を実施した。(註8)

H-2区では弥生時代の土壌や円形周溝遺構、方形環溝と前後する竪穴住居跡を検出した。

O-2区では新たに方形環溝(3号)を検出した。このほか、前後する竪穴住居跡や中世の掘立柱建物跡などの遺構を検出した。

(平成4年度) Q区の発掘調査(市国庫)とR-2区・I区・J-2区の試掘調査(市国庫)を実施した。(註9)

Q区では弥生時代の竪穴住居跡や土壌、中世の掘立柱建物跡などを検出した。

R-2区では弥生時代の竪穴住居跡や土壌、古代の墓、中世の掘立柱建物跡などを検出した。

I区では1号条溝の追跡を行い、その確認ができたことから、1号条溝は台地を分断する溝であることが想定できた。

J-2区では2・3号環濠の追跡を行い、それぞれの一部が確認され、2号環濠の内側に小溝が巡ることが判明した。

(平成5年度) G-5区の発掘調査(市国庫)とG-1~4区・H-3・4区・M区・J-3~5区の試掘調査(市国庫)を実施した。(註10)

G-1~5区では1・3号環濠の追跡を行い、3号環濠が台地上で巡ることが確認された。また、1号環濠内で同時期と考えられる竪穴住居跡を検出した。

H-3区では3号環濠の一部を検出した。

J-3~5区では2号環濠の追跡を行い、溝が3号環濠同様に台地上で巡ることが確認された。

平成6~8年度は遺物の整理作業(市国庫・市)を行い、平成9年度には発掘調査報告書(写真図版編)を発行した。

なお、括弧内に記載した事業主体および事業費内訳は、(市国庫)は市教委実施の国庫補助事業日田地区遺跡群発掘調査事業、(県国庫)は県教委が国庫補助事業として実施した大分県内遺跡群詳細分布調査事業、(市単)は市教委が実施した市単独費小迫辻原遺跡確認調査事業、(市公社)は市教委実施の県史跡公有化に伴う発掘調査である。

註1) 『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ』「小迫辻原遺跡」 1988年 日田市教育委員会

註2) 『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ』「小迫辻原遺跡」 1989年 日田市教育委員会

註3) 『大分県内遺跡詳細分布調査概報7』「小迫辻原遺跡」 1989年 大分県教育委員会

註4) 『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅴ』「小迫辻原遺跡」 1990年 日田市教育委員会

註5) 『小迫辻原遺跡発掘調査概報』 1990年 日田市教育委員会

註6) 『大分県内遺跡詳細分布調査概報8』「小迫辻原遺跡」 1990年 大分県教育委員会

註7) 『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅵ』「小迫辻原遺跡」 1991年 日田市教育委員会

註8) 『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅶ』「小迫辻原遺跡」 1992年 日田市教育委員会

註9) 『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅷ』「小迫辻原遺跡」 1993年 日田市教育委員会

註10) 『平成5年度埋蔵文化財年報』「小迫辻原遺跡」 1995年 日田市教育委員会

第1表 小迫辻原遺跡の発掘調査等の経過表

1983(昭和58)年度	県教委が試掘調査を実施する。
1984(昭和59)年度	県教委が試掘調査を実施する。
1985(昭和60)年度	県教委が本格的な発掘調査を開始し(1年次)、1号条溝を確認する。
1986(昭和61)年度	県教委が発掘調査を実施する。(2年次)
1987(昭和62)年度	県教委が発掘調査を実施し(3年次)、豪族居館(方形環溝)2基が発見される。 県教委が発掘調査現地説明会を開催し、約500名の参加がある。(昭和63年1月23日) 豪族居館跡2基が工法変更による保存が決定する。 市教委が試掘調査を実施する。 遺跡名を「小迫原遺跡」から「小迫辻原遺跡」へと変更する。
1988(昭和63)年度	市教委が本格的な発掘調査を開始し(1年次)、2号環濠が発見される。 豪族居館跡2基を含む6,522㎡が大分県指定史跡となる。(平成元年3月30日)
1989(平成元)年度	市教委が発掘調査を実施し(2年次)、古代の建物群や「大領」銘の墨書土器が発見される。 市教委が発掘調査報告会を開催し、約80名の参加がある。(平成元年6月18日) 日田市が大分県指定史跡用地(6,129㎡)を購入する。
1990(平成2)年度	市教委が発掘調査を実施し(3年次)、新たに1・3号環濠や中世環溝屋敷が発見され、1・2号豪族居館(方形環溝)の全容を確認する。 市教委が発掘調査現地説明会を開催し、約300名の参加がある。(平成3年2月10日) 日田市が大分県指定史跡用地(393㎡)を購入する。
1991(平成3)年度	市教委が発掘調査を実施し(4年次)、新たに3号方形環溝が発見される。
1992(平成4)年度	市教委が発掘調査を実施し(5年次)、1号条溝が台地を分断する溝であることを確認する。
1993(平成5)年度	市教委が発掘調査を実施し(6年次)、2・3号環濠が台地上を巡ることを確認する。 発掘調査速報展を開催する。(平成5年9月1日～9月31日) 古代史シンポジウムを開催する。(平成5年10月3日) 「小迫辻原遺跡」概要パンフレットを発行する。(平成5年1月30日)
1994(平成6)年度	小迫辻原遺跡の国指定申請書を提出する。(平成6年9月21日) 小迫辻原遺跡が国指定史跡の答申を受ける。(平成6年11月18日)
1995(平成7)年度	小迫辻原遺跡保存整備基本構想策定委員会を発足させる。
1996(平成8)年度	小迫辻原遺跡81, 926. 36㎡が国史跡として官報告示された。(平成8年10月31日) まちづくりフォーラム 98を開催する。(平成8年11月9・10日)
1997(平成9)年度	発掘調査報告書(写真図版編)を発行する。(平成10年3月31日)

3) 保存までの経過

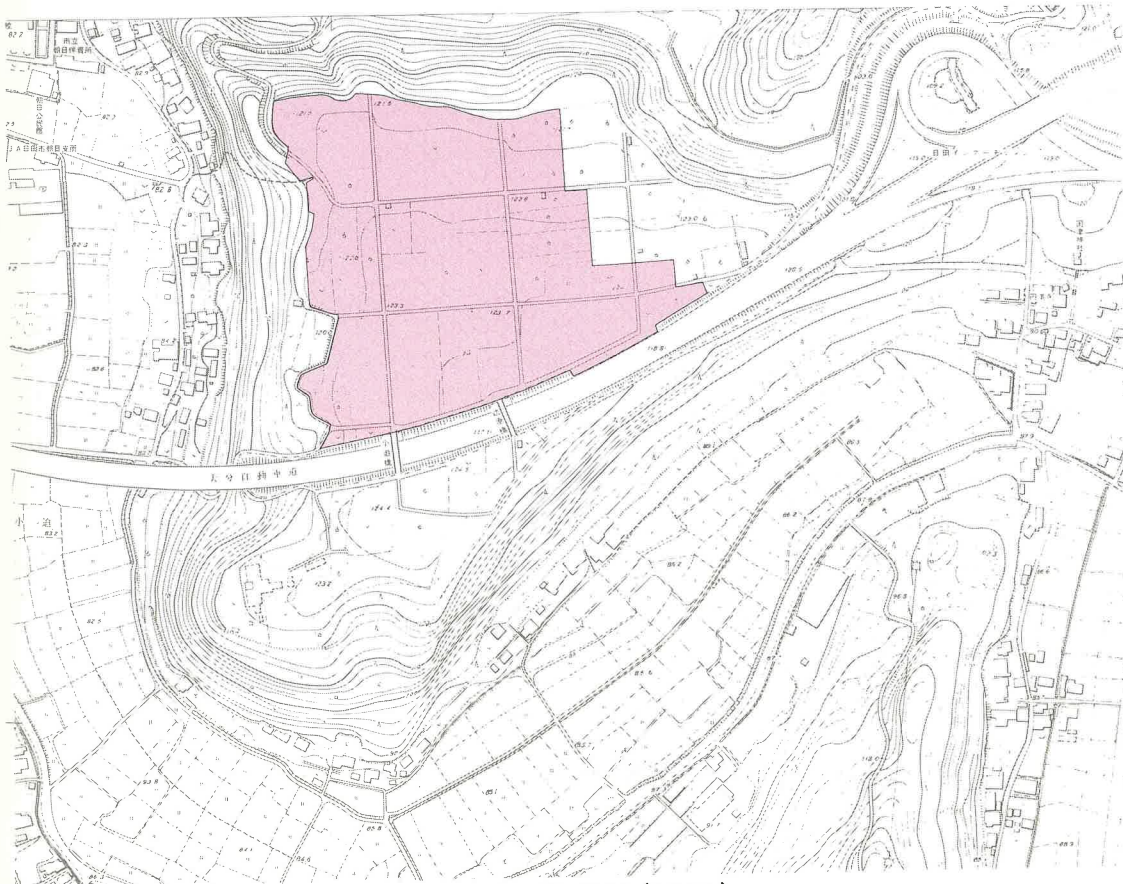
昭和63年1月23日、豪族居館跡の発見が公表され関係機関での幾度にもおよぶ協議の末、道路側面を約95mにわたって垂直のコンクリート擁壁とする工法変更によってその一部は保存されることとなった。この決定により、日田市はすでにトレンチ調査で確認されていた豪族居館跡全ての範囲を保護すべく、道路北側民有地および豪族居館跡保存地区6,522㎡について大分県指定史跡の申請を行い、平成元年3月30日には史跡指定を受け、平成元・2年度にはその公有化を行った。

こうした豪族居館の保存が進むなか、市教委の周辺調査では弥生時代から古墳時代の3つの環濠や古代の建物群、中世の環溝屋敷などの遺構が次々と発掘され、遺跡の重要性が再認識されると同時に、豪族居館のマスコミ発表後の小迫辻原遺跡に対する市民の関心も高まり、さらに周辺調査での成果は遺跡の保存活用について県・市議会でも取りざたされるようになってきた。

このような動きに対し日田市は遺跡の保存と活用を目指す方針を固め、『第3次日田市総合計画』のなかでは小迫辻原遺跡歴史公園化をかがげ、平成4年度から国史跡指定に向けて本格的な保存への取り組みを行うこととなり、それまでの発掘調査成果をもとに文化庁に陳情などを行った。

平成5年8月6日開催の小迫辻原遺跡発掘調査指導委員会には、遺跡の保存すべき範囲について①方形環濠や環濠群を取り入れた範囲とし、②少なくとも発掘調査を実施した区域は取り込み、③将来史跡整備を行い十分な活用が可能な範囲を前提にした市教委事務局案を提示して意見を求めた。指導委員会からは小迫辻原遺跡を代表する豪族居館跡については将来の整備活用の中心となりえることからその周辺は広く保存する必要性があり、また関連する1号条溝についてはすべてを保存すべきとの意見を受け、一部修正を行った後県教委や文化庁との協議を重ね、最終的には第4図に示した里道を含む64筆81,926.36㎡の範囲を保存すべき区域とした。

こうして遺跡の保存すべき範囲が決定し、区域内の土地地権者の同意を得て、平成6年9月21日には国史跡指定申請書を提出し、文化財保護審議会は平成6年11月18日文部大臣に答申を行い、平成8年10月31日付け文部省告示第186号により遺跡の大半は保存されることとなった。



第4図 国指定史跡範囲図 (1/5000)

なお、国史跡の範囲は次のとおりである。

日田市大字小迫字経塚1175番の2、1176番の1、1176番の3、1176番の4、1177番のうち実測834㎡

日田市大字小迫字辻原1189番の1、1190番、1191番、1193番の1、1193番の2、1194番、1196番、1197番、1198番の1、1198番の6、1198番の7、1199番の2、1199番の4、1204番の4、1214番の2、1214番の4、1215番の2、1215番の4、1216番、1217番、1218番、1219番、1220番の1、1220番の2、1221番の1、1221番の2、1222番の1、1222番の3、1223番の1、1223番の3、1224番、1225番、1226番、1227番、1228番、1229番、1230番、1231番、1232番、1233番、1234番、1235番、1236番、1237番の1、1237番の2、1238番の1、1238番の2、1239番、1240番の1、1240番の2、1241番、1242番の1、1242番の2

日田市大字小迫字辻原免1362番の1、1363番の1、1363番の2、1364番の1、1364番の2、1371番の1

上記の地域に介在する道路敷。

4) 調査組織

県教育委員会が発掘調査を実施した際の関係者は下記のとおりである。なお整理に関わる関係者は第3章で記す。

1983 (昭和58) 年度 試掘調査

調査主体 大分県教育委員会

調査責任者 手嶋誠一 (大分県教育長)

調査指導委員 賀川光夫 (別府大学教授・大分県文化財保護審議会委員)

小田富士雄 (北九州市立考古博物館館長・大分県文化財保護審議会委員)

調査総括 後藤宗俊 (大分県教育庁文化課文化財専門員)

調査主任 清水宗昭 (大分県教育庁文化課主任)

調査担当 芝徹 (大分県教育庁文化課主任)

栗焼憲児 (大分県教育庁文化課嘱託)

調査補助 小野信彦

1984 (昭和59) 年度 試掘調査

調査主体 大分県教育委員会

調査責任者 手嶋誠一 (大分県教育長)

調査指導委員 賀川光夫 (別府大学教授・大分県文化財保護審議会委員)

小田富士雄 (北九州市立考古博物館館長・大分県文化財保護審議会委員)

下條信行 (西南学院大学助教授)

調査総括 後藤宗俊 (大分県教育庁文化課文化財専門員兼埋蔵文化財係長)

調査主任 清水宗昭 (大分県教育庁文化課主査)

調査担当 芝徹 (大分県教育庁文化課主任)

桑原幸則 (大分県教育庁文化課嘱託)

調査補助 小野信彦・岩沢安見

1985 (昭和60) 年度 旧A・B地区本調査

調査主体 大分県教育委員会

調査責任者 藤井義美 (大分県教育長)

調査指導委員 賀川光夫 (別府大学教授・大分県文化財保護審議会委員)

小田富士雄 (北九州市立考古博物館館長・大分県文化財保護審議会委員)

森貞二郎 (九州産業大学教授)

西谷正 (九州大学助教授)

調査総括 後藤宗俊 (大分県教育庁文化課文化財専門員兼埋蔵文化財係長)

調査主任 清水宗昭 (大分県教育庁文化課主査)

調査担当 高橋徹 (大分県教育庁文化課主任)

桑原幸則 (大分県教育庁文化課嘱託)

調査員 永松みゆき (大分県教育庁文化課嘱託)

友岡信彦 (大分県教育庁文化課嘱託)

田中裕介 (大分県教育庁文化課嘱託)

1986 (昭和61) 年度 旧A・B・C地区本調査

調査主体 大分県教育委員会

調査責任者 藤井義美 (大分県教育長)

調査指導委員 賀川光夫 (別府大学教授・大分県文化財保護審議会委員)

小田富士雄 (北九州市立考古博物館館長・大分県文化財保護審議会委員)

調査総括 塔鼻勝人 (大分県教育庁文化課課長)

後藤宗俊 (大分県教育庁文化課文化財専門員兼埋蔵文化財係長)

調査主任 渋谷忠章 (大分県教育庁文化課主査)

調査担当 高橋徹 (大分県教育庁文化課主任)

小柳和宏 (大分県教育庁文化課主事)

田中裕介 (大分県教育庁文化課主事)

小野信彦 (大分県教育庁文化課嘱託)

橋本拓也 (大分県教育庁文化課嘱託)

調査員 村上久和 (大分県教育庁文化課主任)

江田豊 (大分県教育庁文化課主事)

1987 (昭和62) 年度 旧C・D・E・F地区本調査

調査主体 大分県教育委員会

調査責任者 嶋津文雄 (大分県教育長)

調査指導委員 賀川光夫 (別府大学学長・大分県文化財保護審議会委員)

小田富士雄 (北九州市立考古博物館館長・大分県文化財保護審議会委員)

石野博信 (橿原考古学研究所)

都出比呂志 (大阪大学助教授)

調査総括 後藤昭六 (大分県教育庁文化課課長)

後藤宗俊 (大分県教育庁文化課主幹)

調査主任 渋谷忠章 (大分県教育庁文化課埋蔵文化財第二係長)

調査担当 田中裕介 (大分県教育庁文化課主事)

行時志郎 (大分県教育庁文化課嘱託)

調査員 山田拓伸 (宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究員)

村上久和 (大分県教育庁文化課主任)

永松みゆき (大分県教育庁文化課嘱託)

後藤晃一 (大分県教育庁文化課嘱託)

吉武牧子 (大分県教育庁文化課嘱託)

調査補助 江藤和幸・藤本啓二・森山敬一郎

1988 (昭和63) 年度 旧E・F地区補足調査調査

調査主体 大分県教育委員会

調査責任者 嶋津文雄 (大分県教育長)

調査総括 小代基雄 (大分県教育庁文化課課長)

後藤宗俊 (大分県教育庁文化課課長補佐)

調査主任 渋谷忠章 (大分県教育庁文化課埋蔵文化財第二係長)

調査担当 高橋徹 (大分県教育庁文化課主任)

小林昭彦 (大分県教育庁文化課主事)

市教育委員会が発掘調査を実施した関係者は下記のとおりである。なお整理に関わる関係者は、『小迫辻原遺跡II』に記載する

1987（昭和62）年度 L-1区試掘調査

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 榎原 芳彦（日田市教育長）
調査指導員 賀川 光夫（別府大学教授）
調査事務 武石 邦男（日田市立博物館館長）
調査員 後藤 宗俊（大分県教育庁文化課主幹）
清水 宗昭（同 係長）
土居 和幸（日田市立博物館事務員）調査担当
友岡 信彦（同 嘱託）調査担当

1988（昭和63）年度 N区本調査、O-1区試掘調査

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 榎原 芳彦（日田市教育長）
調査指導員 賀川 光夫（別府大学学長）
小田富士雄（福岡大学教授）
西谷 正（九州大学教授）
後藤 宗俊（大分県教育庁文化課課長補佐）
佐藤 興治（大分市歴史資料館館長）
真野 和夫（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館調査課長）
調査事務 武石 邦男（日田市立博物館館長）
調査員 清水 宗昭（大分県教育庁文化課埋蔵文化財第1係長）
平川 信哉（同 嘱託）調査担当
玉永 光洋（大分市歴史資料館学芸調査係長）
田中 裕介（大分県立津久見高等学校教諭）
土居 和幸（同 事務員）調査担当

1989（平成元）年度 O-1区・K-1区本調査、K-2区試掘調査

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 榎原 芳彦（日田市教育長）
調査指導員 賀川 光夫（別府大学教授）
小田富士雄（福岡大学教授）
下條 信行（愛媛大学教授）
小笠原好彦（滋賀大学教授）
後藤 宗俊（大分県教育庁文化課課長補佐）
佐藤 興治（大分市歴史資料館館長）
真野 和夫（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館調査課長）
調査事務 武石 邦男（日田市立博物館館長）
調査員 清水 宗昭（大分県教育庁文化課埋蔵文化財第一係係長）
渋谷 忠章（同 埋蔵文化財第二係係長）
高橋 徹（同 埋蔵文化財第二係主査）
玉永 光洋（大分市歴史資料館学芸調査係長）
小倉 正五（宇佐市教育委員会社会教育課主査）
田中 裕介（大分県立津久見高等学校教諭）
土居 和幸（日田市立博物館学芸員）調査担当
行時 志郎（同 学芸員）調査担当

1990（平成2）年度 H-1区・K-3区本調査、G-1区・J-1区・K-4区・L-2区・P区確認調査

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 榎原 芳彦（日田市教育長）
調査指導員 賀川 光夫（別府大学教授）

小田富士雄（福岡大学教授）
 後藤 宗俊（別府大学教授）
 木村幾多郎（大分市歴史資料館館長）
 真野 和夫（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館調査課長）
 調査事務 重石 巧（日田市立博物館館長）
 小埜サダ子（同 主任）
 調査員 清水 宗昭（大分県教育庁文化課埋蔵文化財第1係長）
 渋谷 忠章（同 埋蔵文化財第2係長）
 田中 裕介（同 埋蔵文化財第1係主任）
 玉永 光洋（大分市歴史資料館学芸調査係長）
 土居 和幸（日田市立博物館学芸員）調査担当
 行時 志郎（同 学芸員）
 森山敬一郎（同 嘱託）調査担当

1991（平成3）年度 H-2区・O-2区本調査、G-1区・J-1区・K-4区・L-2区・P区確認調査

調査主体 日田市教育委員会
 調査責任者 榎原 芳彦（日田市教育長）
 調査指導員 賀川 光夫（別府大学教授）
 小田富士雄（福岡大学教授）
 後藤 宗俊（別府大学教授）
 真野 和夫（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館調査課長）
 石山 勲（福岡県教育庁文化課参事補佐）
 調査事務 重石 巧（日田市立博物館館長）～平成3年10月30日
 矢野 友章（日田市教育次長兼博物館館長）平成3年11月1日～
 小埜サダ子（日田市立博物館主任）
 調査員 清水 宗昭（大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第1係長）
 渋谷 忠章（同 埋蔵文化財第2係長）
 坂本 嘉弘（同 埋蔵文化財第1係主査）
 田中 裕介（同 埋蔵文化財第1係主任）
 土居 和幸（日田市立博物館学芸員）調査担当
 行時 志郎（同 学芸員）
 森山敬一郎（同 嘱託）調査担当

1992（平成4）年度 Q区本調査、R-2区・I区・J-2区試掘調査

調査主体 日田市教育委員会
 調査責任者 榎原 芳彦（日田市教育長）～平成4年11月30日
 加藤 正俊（同）平成4年12月1日～
 調査指導員 賀川 光夫（別府大学教授）
 小田富士雄（福岡大学教授）
 後藤 宗俊（別府大学教授）
 調査事務 原田 良伸（日田市立博物館館長）
 阿部 正義（同 次長）
 後藤 裕子（同 臨時職員）
 調査員 清水 宗昭（大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第1係長）
 渋谷 忠章（同 主幹兼埋蔵文化財第2係長）
 牧尾 義則（同 埋蔵文化財第1係主査）
 宮内 克己（同 埋蔵文化財第1係主査）
 吉田 寛（同 埋蔵文化財第1係主事）
 土居 和幸（日田市立博物館学芸員）調査担当
 行時 志郎（同 学芸員）
 森山敬一郎（同 嘱託）調査担当

1993（平成5）年度 G-5区本調査、G-1～4区・H-3・4区・M区・J-3～5区試掘調査

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤 正俊（日田市教育長）

調査指導員 賀川 光夫（別府大学教授）

小田富士雄（福岡大学教授）

後藤 宗俊（別府大学教授）

河原 純之（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長）

調査事務 原田 良伸（日田市立博物館館長）

阿部 正義（同 次長）

羽野 恭子（同 臨時職員）

調査員 清水 宗昭（大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第1係長）

渋谷 忠章（同 主幹兼埋蔵文化財第2係長）

牧尾 義則（同 埋蔵文化財第1係主査）

土居 和幸（日田市立博物館学芸員）調査担当

行時 志郎（同 学芸員）

森山敬一郎（同 嘱託）調査担当

調査協力者 阿部 義平・池田 栄史・石野 博信・伊藤 稔・井上 和人・江上 波夫・岡村 道雄
栗焼 健児・後藤 直・甲元 真之・斎藤 忠・坂井 秀弥・佐藤良二郎・沢村 仁
白石太一郎・杉山 晋作・鈴木 敏則・須田 勉・関川 尚功・高橋 章・武末 純一
坪井 清足・都出比呂志・仲野 浩・西田 健彦・服部 英雄・橋口 定志・橋本 博文
春成 秀爾・平川 南・藤尾慎一郎・松村 恵司・水野 正好・森 浩一・和田 晴吾

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地（第1・2図）

小迫辻原遺跡の所在する大分県日田市は九州島にあっては北部九州のほぼ中央にあたり、現在の行政区画である大分県の西北部に位置する。西は福岡県との県境をなし、玖珠町・天瀬町・大山町・前津江村・山国町・福岡県浮羽町・同杷木町・同添田町・同宝珠山村の7町2村と接する市域面積が約269平方km、人口約65,000人の四方を山々に囲まれた小都市である。

この日田市を起点に西へ向かえば福岡県久留米市や太宰府市・福岡市、北へ向かえば北九州市や中津市・宇佐市、東へ向かえば湯布院を抜け大分市、南へ向かえば竹田市や阿蘇・熊本市へと通じる。このルートは天領として栄えた近世期には筑後国高良山路・久留米城路、筑前国宰府路・福岡城路、彦山路・小倉城路、豊前国宇佐宮路・中津城路、玖珠郡森宮路、直入郡岡城路・肥後国阿蘇山路・隈府路・熊本城路と呼ばれ、旧国の主要な地域と結ばれていた文字通り交通上の要衝の地にあたる。

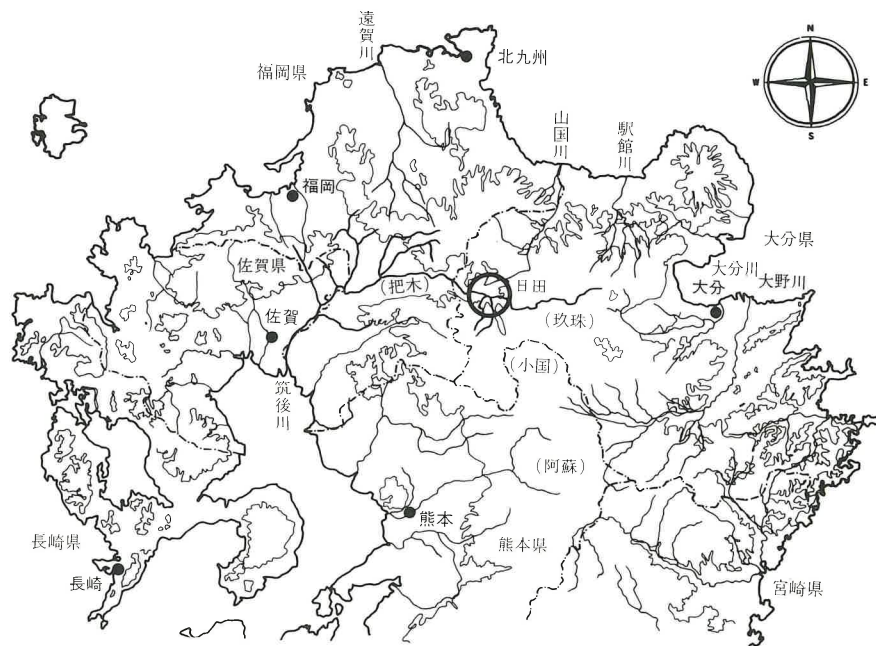
現在でも福岡県との交流が深い日田市は、西流する筑後川の上流に位置するなどその地理的条件に大きく左右されて、古来より西からの文化の影響を強く受けて発展してきた街で、大分県のなかにあっても伝統や文化など全般にわたって独自の文化を色濃く残している。江戸時代には幕府の西国郡代（代官所）が置かれ九州島の政治・経済の中心をなすいっぽうで、この時代に始まった杉の植林は日田杉の一大産地として知られるようになり、豊富な水源は“水郷”の地と称されるようになった。

この日田市の地形を概観すると、現在の市街地にあたるのが日田盆地の沖積面で標高は約75～90m、日隈・月隈・星隈と呼称される残丘が盆地内に点々と残っている。この盆地底の沖積面周囲には市内では原（はる）と呼ばれる山田原、吹上原、葛原、須ノ原、町野原、佐寺原、長者原などの阿蘇4火砕流の流出により形成された標高約150m前後の溶岩台地が段丘上に巡っている。

その台地の外側には龍体山（345m）、西の山（308m）、片峰（約500m）、大石峠（約400m）などの標高約200～600mの耶馬溪火砕流で形成された溶岩台地が占め、さらにその外側の市の境界域には岳減鬼山（1,036m）、大将陣山（909m）、一尺八寸山（707m）、月出山（709m）、五条殿山（834m）、釈迦岳（844m）といった標高約400～1000m級の山々が連なり、さらに遠方には彦山（1,199m）系、久住山（1,786m）系、阿蘇外輪山（900～1,100m）が広がる。

久住山や阿蘇外輪山を源とする玖珠川や大山川は盆地東部で合流し三隈川となり、さらに台地の合間を縫うようにして流れ出る高瀬川、花月川、二串川、内河野川といった小河川が合わさり九州最大河川である筑後川となり、さらに西流して大肥川が合流し筑紫平野を経て有明海へと注いでいる。

こうした日田盆地北部の台地上に小迫辻原遺跡は存在している。遺跡の立地する通称辻原台地は宮原台地



第1図 日田盆地の位置と地勢

とともに盆地内では最も発達した山田原台地の一角を占め、その南側には独立した吹上原台地がある。これらの台地は千田昇氏の地形分類によれば「中位段丘1面」と呼ばれ、その説明では「中位段丘1面」は阿蘇4火砕流堆積面の下位に比高10～30mの崖をつくって分布する地形面で、主として花月川右岸一帯に広がりがあるとされる。右岸一帯の広がりとはこの山田原台地や吹上原台地をさすもので、市内にみられる「中位段丘1面」のなかでは最も広範囲な地形である。

この発達した山田原台地は龍体山の南側山麓にあたり、台地西側には君迫川と合流した二串川が南流し、東側では南流する花月川が吹上原台地の南で西流して二つの河川が重なるようにして三隈川に注ぎこんでいる。山田原台地では昭和30年代に大規模な基盤整備事業が実施され、台地上はより平坦に区画化されて夏はスイカ、冬は白菜の一大生産地となっている。

小迫辻原遺跡のある辻原台地は現状で東西約500m、南北約500mの上面観が三角形をなす。台地の西側は現在大分自動車道日田インターチェンジとなっているが以前は山田原台地と地続きで、東・南側は崖面、北側は小さな谷部へと傾斜している。この台地も昭和30年代に基盤整備事業が実施され平坦に区割りされているが、整備前の図面を見る限りでは台地の南側から北側に向ってゆるやかに傾斜する台地面であった。

辻原台地の南側は谷部が形成されており、本来は河川が流れていたであろうが現在ではみられず、灌漑用の水路が引かれている。台地西側下には現在でもわきで湧水地が数点があり、この台地上もそうであるが周辺台地上には湧水はなく、古くから水の確保にはこうした台地下の湧水地が利用されていたことが想像される。

(参考文献)

- 千田 昇 「日田・玖珠地域の地形—とくに台地地形について—」『日田・玖珠地域—自然・社会・教育—』
大分大学教育学部 1992年
- 中島国夫 「日田盆地のなりたち」『日田市30年史』日田市 1974年

第2節 日田市の歴史

現存する『豊後国風土記』によれば日田の地名の由来を「景行天皇が熊襲征討の帰途に日田へ行幸した折、景行天皇を久津媛が出迎えたことから“久津媛の郡”と呼ぶようになり、それが訛って「日田郡」となったと伝えられている。

日田の歴史は長者原遺跡や吹上遺跡などの台地や山間部の遺跡で後期旧石器時代のナイフ形石器が出土していることから約2万年前に溯る。縄文時代になると周辺台地に加えて河川流域にも遺跡が広がるようになり、後期には竪穴住居が発見された手崎遺跡や葛原遺跡に集落が営まれる。

弥生時代前期後半には福岡平野や筑後地域の弥生文化の影響を受けて吹上遺跡や徳瀬遺跡などに本格的な弥生集落が誕生する。とくに中期後半の吹上遺跡には甕棺墓や木棺墓に保持していた青銅器や鉄器などを副葬した日田盆地を治めるほどの有力な首長が出現するが、後期終りに小迫辻原遺跡に環濠集落や豪族居館が現れると、それまでの拠点地は吹上遺跡から小迫辻原遺跡へと変わる。

古墳時代中期（5世紀）になると日田の地にも城山に大和政権のシンボルである前方後円墳が遅れて築かれ、『国造本紀』によればこのころ比多国造が置かれ止波足泥が会所宮に居を構えたと伝える。後期（6世紀）には筑後地方の影響のもとにガランドヤ1・2号墳や穴観音古墳、法恩寺山古墳（4号墳）に装飾壁画が描かれるようになる。これらのうち法恩寺山古墳は、『豊後風土記』に記されている日下部氏が本拠とした場所に位置するとされ、その一族の奥津城と考えられている。

7世紀の後半には日田市に隣接する玖珠郡域や阿蘇において評の存在が確認されていることから、日田評が成立していたと考えられ、この評督・評造に日下部氏が任命されていたと推定されている。その後、8世紀の初めには豊後国が成立し、日田評は日田郡へと変わる。

『豊後風土記』によれば、律令下の日田郡には郷は5、里は14、駅は1所が存在した記述がある。郷5所とは



第2図 小迫辻原遺跡周辺の地形図 (1/25000)

石井・鞆編・在田・亘理・夜開郷で、鞆編郷は盆地東部の珍珠川右岸流域一帯、石井郷は盆地南部の三隈川左岸一帯、在田郷は盆地北東部の有田川流域沿い、亘理郷は盆地西北部の花月川右岸流域一帯、夜開郷は盆地最西端の大肥川流域沿い（註1）に比定されている。

また駅1所については『延喜式』に石井駅と記されており、その地名から石井郷内に存在したことが窺え、大宰府と豊後国府を結ぶ主要道の駅家は盆地南部に設置されていた。

この日田郡を支配していたのが日下部氏で、『豊後国正税帳』には「大領日下部連吉嶋、少領日下部君大国、

主帳日下部君死」と当時の主要な役職と人物名が記されており、日田郡の支配構造は日下部姓を名乗る複数の豪族によってなされたと考えられている。日田郡衙の所在地についてははっきりしないが、鞆編郷内に比定する意見と花月川左岸の互理郷内に比定する意見にわかれている。

平安時代はじめの9世紀には日田に私邸を構える前豊後介中井王が悪政を行う事件が起こる。中頃(11世紀)になると日下部為行による田島別符の水田開発を最後に古代日下部氏の勢力は衰え、その後中世期の日田を治めることとなる大蔵姓日田氏が台頭してくる。大蔵氏の出自については定かではないが、家系図などにより延久3年(1071)に京の相撲節会の記録が残る大蔵永季が実在した人物とされる。この大蔵氏は花月川左岸の慈眼山丘陵一帯を拠点にして花月川流域の開発を押し進め、また平安時代の終りには大蔵氏が所有の日田郡の大半を占めていた日田荘を金剛心院に寄進した。

鎌倉時代になると建久5年(1194)に源平合戦の功により大蔵永秀に対し地頭職が安堵され、後家人となり日田氏を称するようになる。文永3年(1266)の文永の役では大蔵永基が活躍し軍功と恩賞を得たという記録が『豊後国日田郡司職次第』に残っている。

室町時代の文安元年(1444)には21代とも29代とも言われる大蔵姓日田氏は断絶する。替わって大友四郎親満が日田氏を継ぎ大友姓日田氏として登場することになるが、16世紀前半には日田親将の自刃により断絶することとなる。その後は大友義鑑により指名された、日田郡司職を相伝してきた大蔵氏の中から選ばれた別名八奉行とも呼ばれる坂本・財津・羽野・石松・高瀬・堤・佐藤・瀬戸口各氏の8名による郡老支配へと変わっていく。

文禄2年(1593)、日田は豊臣秀吉の太閤蔵入地となり、翌年には宮本長次郎が代官として赴任し日隈山に日隈城を築き、隈町をつくって政治拠点とした。慶長6年(1601)には江戸幕府領となり、小川壱岐守光氏が月隈山に丸山城(後に永山城)を築き、城下町丸山町(後に豆田町)をつくると、以後明治維新を向かえるまでの260年余りの間、一時親藩・譜代大名の支配地を除けば天領の地となる。

寛永16年(1639)には永山城の堀外に代官陣屋が置かれ、豆田町には商人が集うようになり、その中から成長した千原家・森家・草野家・広瀬家などの有力商家は代官御用達となり金融業(掛屋)を営むようになる。この掛屋の一つ広瀬家の長男に生まれた広瀬淡窓は文化14年(1817)に私塾咸宜園を開き、明治30年にその幕を閉じるまでの間ここで全国62ヶ国約5,000人の門弟が学んだ。

明治維新を向えると後に総理大臣となる松方正義が初代日田県知事として赴任し、明治4年には廃藩置県により日田県は大分県に吸収合併され、明治34年には隈町と豆田町が合併して日田町となる。大正5年には日田豆田と久留米を結ぶ筑後軌道が開通し、昭和9年には国鉄九大線が開通すると木材産業をささえてきた水運業は衰退していく。昭和15年、日田町と三芳・高瀬・光岡・朝日・三花・西有田の周辺6ヶ村が合併して日田市が誕生し、さらに昭和30年には東有田・五和・夜明・大鶴・小野村が合併し現在の日田市となる。

註1) 盆地北部の花月川流域にあてる説もある。

(参考文献) 『日田市史』 日田市 1990年

『日田市の歴史と文化財』 日田市教育委員会 1996年

第3節 日田盆地の遺跡と遺物(第7図)

現在日田市内には約250ヶ所の遺跡が周知されているが、ここ10数年来の緊急の発掘調査成果によって遺跡の内容が明らかになった例や、新たに発見される例が増えている。

とりわけ遺跡の立地場所については、過去には河川の集中するあるいはその流域沿いでは洪水などの自然発生的な出来事により遺跡は残存していないと考えられていたが、河川改修や圃場整備、道路建設に伴う調査が進むなかでそうした立地上での遺跡が次々と確認されてきている。

それまでは盆地周辺の台地上を中心としてしかとらえられなかった遺跡の姿が沖積地を含めた盆地全域にまでおよび、考古学のみならず古代史～中・近世史を考える上で大きな資料を提供してきている。

こうしたことから、以下近年の発掘調査成果を中心に日田盆地の遺跡や遺物を概観する。

旧石器時代

これまでに表面採集により確認された遺跡は16ヶ所を数える（註1）が、いまだこの時代の本格的な調査は行われていない。発掘調査での出土資料としては草場第二遺跡（註2）ではナイフ形石器や台形様石器、三和教田遺跡B地点（註3）ではナイフ形石器、平島遺跡B区（註4）や馬形遺跡（註5）では三稜尖頭器、上野第1遺跡（註6）では剝片尖頭器が出土している。

縄文時代

この時代の調査例は増え、早期から晩期にいたる各時期の土器が出土した手崎遺跡（註7）や葛原遺跡（註8）では竪穴住居が調査されている。前者は西平式期にあたり径約4.5mのほぼ円形をなす、後者は三万田式期にあたり長軸約4.6m、短軸2.8mの長方形をなす。

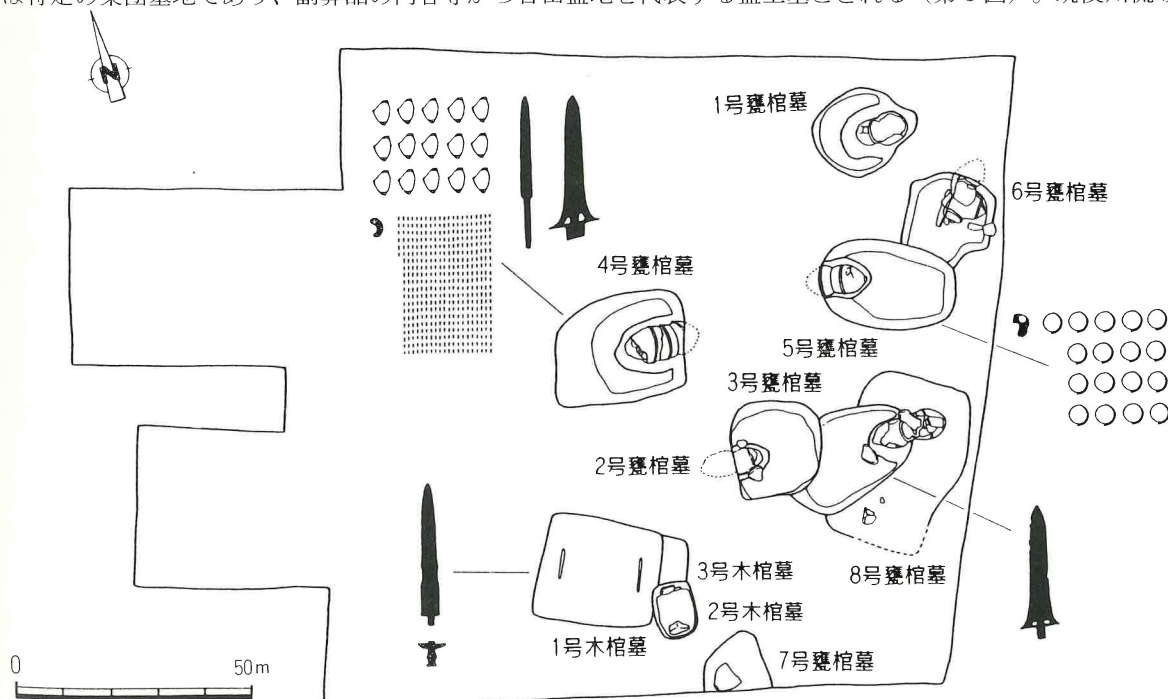
三和教田遺跡C地点（註9）では後・晩期の溝状遺構や流路が調査され、土偶の頭部・胴部・腕部などが出土している。また、牧原遺跡（註10）においても御領式期の土偶の左足部分が出土している。

このほか、石ヶ迫遺跡（註11）・上野第1遺跡（註12）・大部遺跡（註7）などでは早期の集石遺構が発掘され、森ノ元遺跡（註13）では晩期前半代の埋甕、石ヶ迫遺跡（註11）や有田塚ヶ原遺跡（註14）などでは陥穴遺構が調査されている。

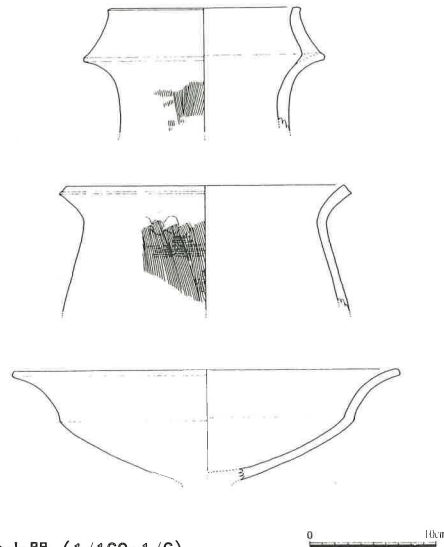
弥生時代

弥生時代の大規模な遺跡は小迫辻原遺跡を含めてその周辺に多くみられるが、なかでも日田盆地を代表する遺跡に吹上遺跡（註15）がある。これまでに行われた9次の調査では竪穴住居・袋状貯蔵穴・土壇・溝・大型成人用甕棺墓・石棺墓などの遺構が重複して検出され、弥生土器をはじめ大陸系磨製石器や立岩産石庖丁など数多くの遺物が出土している。

特に、平成7年に行われた6次調査（註16）で発見された墳墓群は、大型成人用甕棺墓8基と木棺墓3基で構成され、このうち3基の甕棺墓と1基の木棺墓には銅戈や銅剣などの青銅器・鉄剣・貝輪（ゴホウラ、イモ貝）・管玉・勾玉などの装身具などが副葬されていた。甕棺墓は立岩期の中期後半に位置づけられるもので、遺跡にあっては特定の集団墓地であり、副葬品の内容等から日田盆地を代表する盟主墓とされる（第3図）。筑後川流域に



第3図 吹上遺跡（6次調査）弥生時代墳墓群配置図（1/160）



第4図 三和教田遺跡B地点の遺構図と環濠出土の土器(1/160・1/6)

され、朝日宮ノ原遺跡A区(註18)では中期後半から後期初めの堅穴住居・土壙・小児用甕棺墓などが発掘されている。小迫辻原遺跡に隣接するこの3遺跡はいずれも後期後半・末頃から台地縁辺部を中心に大型成人用甕棺墓や箱式石棺墓・土坑墓などで構成される墓地へとかわっている。

佐寺原遺跡(註19)では前期末から後期中頃の堅穴住居・土壙・小児用甕棺墓などが発掘されており、有田川を挟んで対峙する葛原遺跡(註20)では前期末から中期前半の堅穴住居や土壙などが調査されている。三隈川南部の長者原遺跡(註21)では後期前半の堅穴住居や土壙、上野第1遺跡(註12)では前期末から中期前半の土壙や小児用甕棺墓などが確認されている。

また、有田川左岸丘陵上に立地する祇園原遺跡(註22)では中期後半から後期中頃の堅穴住居・掘立柱建物・小児用甕棺墓・円形周溝遺構などが発掘されている。これらの遺構は3間×6間や3間×7間といった大型の建物を中心にその周囲に堅穴住居が配置されており、さらに堅穴住居の平面は円から不整形な円さらに方形へと変化する過程がみられるなどこの時期の集落構造を考える上で注目される。

いつぼう沖積地では庄手川と三隈川に挟まれた微高地上に位置する徳瀬遺跡で5次の調査(註23)が行われ、前期後半から後期後半の堅穴住居・溝・土壙などが発掘されている。後期末以降には方形周溝墓や箱式石棺墓などの墓地へと変わる現象は吹上遺跡など周辺台地と同じ状況を示している。盆地東部の会所山の裾に位置する会所宮遺跡(註24)では中期前半代の堅穴住居・土壙・溝などが調査されている。

このほか花月川左岸の低丘陵上の三和教田遺跡B地点(註3)では後期中頃から後半の堅穴住居・掘立柱建物・溝など、有田川左岸段丘上の平島遺跡A・B区(註4・25)では後期後半の堅穴住居・掘立柱建物・溝が調査されている。両遺跡で発見された溝は堅穴住居や掘立柱建物を囲むことから環壕集落と考えられている。いずれの環壕も地形的に見て完全に巡るものではなく半円状に巡らされている。とくに三和教田遺跡B地点の環濠は規模が大きく断面逆台形の幅約5m、深さ約2mを測り、環濠内には堅穴住居のほか4間×6間の大型建物や1間×2間の掘立柱建物などが配置されている(第4図)。

この時代の墓の事例としては、先述した吹上遺跡のほかに草場第二遺跡(註2)があり、弥生時代後期の大型成人用甕棺墓や壺棺墓などの墓が発見されている。朝日宮ノ原遺跡D地区(註26)では後期の大型成人用甕棺墓1基、平島遺跡D区(註27)では後期の大型成人用甕棺墓4基が発掘されている。このほかに上野第1遺跡(註28)・元宮原遺跡(註28)・草場遺跡(註29)などでも偶然に大型成人用甕棺墓が発見されている。

古墳時代

これまでのところ日田盆地では確実な前期古墳や前方後円墳の存在は確認されていない。この時期の墓地遺跡は草場第二遺跡・吹上遺跡・朝日宮ノ原遺跡・後迫遺跡・徳瀬遺跡・牧原遺跡などがあるが、大半は前代の集落終焉後に墓地化したもので、継続して営まれている例が多い。

においてこの時期の豊富な副葬遺物を有する墳墓事例は甘木周辺までしかなく、奴国など北部九州諸国との政治的な結び付きが強かったことを示す重要な資料である。

また、後迫遺跡(註17)では中期前半から後期後半の堅穴住居・土壙・小児用甕棺墓などが調査

草場第二遺跡（註2）では壺棺墓・土坑墓・割竹形木棺墓・箱式石棺墓・小型堅穴石室・方形周溝墓などが確認されており、鉄刀・鉄剣・刀子・鉄鏃・銅釧・玉類などが出土している。吹上遺跡（註15）では箱式石棺墓・木棺墓・土坑墓、朝日宮ノ原遺跡D地区（註26）では壺棺墓・箱式石棺墓・石蓋土坑墓・土坑墓などが発掘されており、16号石蓋土坑墓からは素環頭刀子1点が出土している。後迫遺跡（註17）では箱式石棺墓6基が発掘され、そのうち1基からは副葬品として小型仿製鏡1面が出土している。徳瀬遺跡（註23）では方形周溝墓5基・箱式石棺墓4基・土坑墓6基などが発掘され、方形周溝墓の主体部である箱式石棺墓には「位至三公鏡」片が副葬されていた。牧原遺跡（註10）では方形周溝墓4基・箱式石棺墓1基・木棺墓1基・土坑墓2基などが発掘され、鉄鏃や刀子などの副葬品が出土している。

このほか、徳瀬遺跡に隣接する草場遺跡（註28）では箱式石棺墓に伴って方格規矩鏡片が出土しており、長者原遺跡や元宮遺跡などでも箱式石棺墓の出土例がある。

また、手崎遺跡（註7）や夕田遺跡（註30）では布留式土器を伴う堅穴や土壙が散発的に発掘されており、該期の集落例としては数少ない資料である。

中期になると有田川右岸台地上に前方後円墳が築かれる。前方部を西に向けた城山古墳（註31）は、全長31mで主体部は箱式石棺もしくは堅穴式石室とみられている。

4世紀後半から5世紀前半の小迫古墳（註31）は、主体部に粘土槨を採用したなかに木棺（割竹形木棺？）を安置し、珠文鏡・勾玉・管玉・小玉が副葬されていた。尾漕古墳群は2号墳（註33）が5世紀初め、1号墳（註19）が5世紀末の築造である。前者は組合式の箱式石棺を主体部とし人骨3体と素環頭太刀・刀子・櫛などが出土しており、後者は単室の横穴式石室で須恵器のほか小玉が出土している。

このほか堅穴式石室を有し蛇行剣が出土した姫塚古墳（註34）や、臚付蓋や脚付壺のほか仿製六獣鏡1面・仿製珠文鏡1面・玉類などが出土した横穴式石室を有する有田古墳（註34）、直径約35mの円墳で主体部には箱式石棺が採用され円筒埴輪が配置されている薬師堂山古墳（註34）、江戸時代に掘り出された細線式獣帯鏡が副葬されていたと考えられる日隈古墳（註34）などの各古墳が盆地の各所に造られるようになる。

さらに尾漕古墳群に対峙する大迫遺跡（註35）では5世紀後半から末の石蓋土坑墓・土坑墓・箱式石棺墓が調査され、3号土坑墓からは県内でも類例の少ない蕨手刀子が出土している。また赤迫遺跡（註36）でもこの時期の石蓋土坑墓6基が調査されている。

この時期注目される遺跡に荻鶴遺跡（註37）があり、5世紀前半から中頃の鍛冶遺構とされる堅穴から鉄床石・鉄滓・高坏転用羽口・鍛造剝片などが出土し、またこの遺構付近からは関連する鉄鋌や手捏土器・石製円盤などの祭祀遺物が集中して発見されている。

5世紀後半代には求来里平島遺跡（註38）のカマドを有する堅穴住居や、羽野横穴1号墓（註39）や夕田横穴第1支群1号墓（註30）が調査されており、いずれも日田地域での出現期の資料である。

6世紀には天満古墳群や装飾古墳が築かれる。長さ約30mの天満1号墳（註31）は社殿建設の際に仿製獣帯鏡・直刀・貝製雲珠などの馬具等の遺物が出土している。日田・玖珠地域最大の古墳である2号墳（註40）は長さ約60mの規模で、剣菱形と推定される周溝を持ち、大型平底壺などが出土している。

ランドヤ古墳群（註41）は3基の古墳で構成され、6世紀後半の1号墳は赤と緑を使って複式構造の横穴式石室の玄室奥壁に円文・同心円文・船・人物・鳥・馬などの多彩な装飾がなされている。須恵器・土師器・馬具・鉄鏃・玉類などが出土している。同じく6世紀後半の2号墳は石室の玄室奥壁に赤を下地に緑を使って同心円文・騎射像・連続山形文などの装飾がなされている。須恵器・珠文鏡・直刀・馬具・鉄鏃・玉類などが出土している。

法恩寺山3号墳（註42）は独立した丘陵上に展開する7基の古墳群の一つで、6世紀後半築造の径約20mの円墳である。複式構造の横穴式石室の玄室奥壁と右側壁、袖石やまぐさ石などに赤を使って円文・同心円文・馬と人物・鳥などの装飾がなされている。出土遺物に須恵器や馬具などが出土している。

穴観音古墳（註43）は径12mの円墳で、複式構造の横穴式石室の玄室奥壁と右側壁、前室の左右側壁に赤と緑を使って円文・同心円文・船・両手を上げた人物・鳥などの装飾がなされている。

このほか有田塚ヶ原1号墳（註19）は直径約10mの円墳で、複式構造の横穴式石室の玄室平面は筑後の影響を受けた胴張プランである。

また、横穴墓の発掘例も増加し、平島横穴墓群（註44）では総数86基の横穴墓がすべて調査されたほか、羽野横穴墓群（註39）・佐寺横穴墓群（註35）・北友田横穴墓群（註45）・小迫横穴墓群（註32）・夕田横穴墓群（註30）などが発掘されている。市内にはこのほかにも、月隈横穴墓群・星隈横穴墓群・東寺横穴墓群・水目横穴墓群などがあり、そのほとんどは三隈川北側の台地崖に営まれている。

このほか、平島遺跡（註4・25）や長迫遺跡（註46）では竪穴住居や掘立柱建物などが大規模に調査され、長迫遺跡では鉄滓が出土しており鍛冶を行っていたと考えられている。さらに、西有田赤ハゲ遺跡（註47）では斜面を削りだして作られた道状遺構が、尾漕遺跡（註48）では河川と並行する道状遺構がそれぞれ調査され、三和教田遺跡B地点（註3）では水路の一部が発見されている。また、長者原遺跡（註49）では竪穴住居から製塩土器が出土している。

古 代

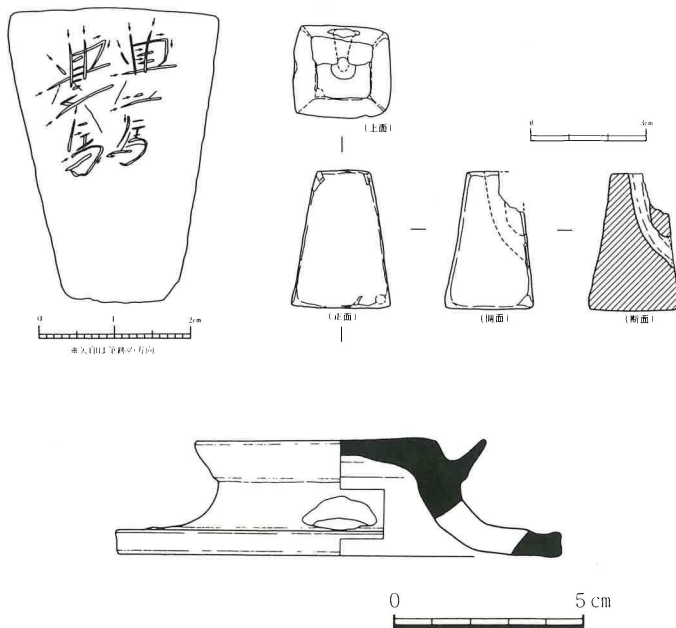
三和教田遺跡B地点（註3）では7世紀後半から8世紀前半の掘立柱建物が調査され、この時期に伴うと考えられる円面硯が出土している（第5図）。

上野第1遺跡（註50）では8世紀前半から中頃の掘立柱建物・竪穴住居・土坑・道状遺構・粘土採掘土坑・水田などの遺構が調査された。これらの遺構からは「豊馬豊馬」と刻まれた石製品や転用硯などが出土しており、石井駅関連施設などの説が考えられている。

慈眼山瀬戸口遺跡（註51）では8世紀中頃から末の一边が0.8mの横板井桁組の井戸枠を設置した井戸と水汲場状遺構が確認され、これらの遺構からは「門」「林」などと書かれた墨書土器・曲物・木製品・濟櫛などが出土している。8世紀代の井戸は大宰府でも少なく、横板井桁組の井戸枠は官人クラスの居住区に限られ、墨書土器などの遺物の出土から公的施設の存在が指摘されている。

このほか長者原田迎遺跡（註52）・手崎遺跡（註7）・後迫遺跡（註17）・尾漕遺跡（註48）・長迫遺跡（註46）・石ケ迫遺跡（註11）・馬形遺跡（註5）・クビリ遺跡（註53）・草場第二遺跡（註2）などで掘立柱建物や竪穴住居などが調査されている。なかでも手崎遺跡・長迫遺跡・石ケ迫遺跡では製塩土器が出土し、長者原田迎遺跡・クビリ遺跡では鉄滓が出土し鍛冶を行っていたと考えられている。

馬形遺跡（註5）では市内では数少ない9世紀中頃から後半の2基の土坑墓が発見されている。1号墓は土師器坏に毛抜き、2号墓は木棺が据えられ副葬品に越州系青磁碗・須恵器坏・内黒土器・土師器坏のほか刀子が出土している。また、吹上遺跡（註16）では12世紀前半頃の経塚が発見されており、90cm×80cmの円形の墓坑から青銅製経筒と共伴品として合子や刀子が出土している。



第5図 上野第1遺跡出土遺物(上)と三和教田遺跡B地点(下)出土遺物

中 世

この時期の遺跡例はここ数年間で最も増えてきている。

慈眼山瀬戸口遺跡（註51）では溝・石垣状の石組・井戸・土坑状遺構などが調査され、多量の土師器・輸入陶磁器・摺鉢・火鉢・渡来銭・硯・石臼・高さ4cmの十一面観音菩薩などが出土している。この遺跡は中世豪族大蔵氏が本拠としていた場所にあたり、発掘された遺構は関連遺構であろう（第6図）。

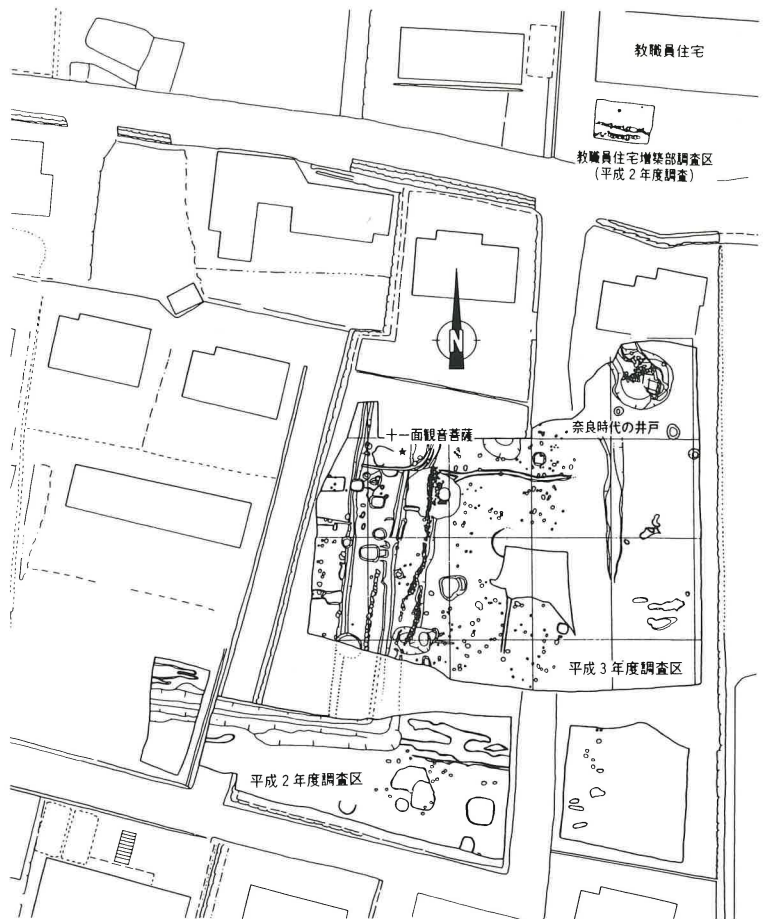
長者原田迎遺跡（註52）・荻鶴遺跡（註37）・尾漕遺跡（註48）では掘立柱建物の周囲を溝で囲む環溝屋敷が調査されている。

このほか、朝日宮ノ原遺跡（註18）・三和教田遺跡（註3）・森ノ元遺跡（註13）・寺

内遺跡（註54）・会所宮遺跡（註24）・惣田遺跡（註55）などで掘立柱建物などが発掘されている。

中世墓の調査事例も増加してきている。これまでの発掘例（註56）は朝日宮ノ原遺跡（註18）5基・小迫墳墓群（註32）1基・尾漕遺跡A区（註19）3基・手崎遺跡（註7）2基・慈眼山瀬戸口遺跡（註51）4基・寺内遺跡（註54）1基・徳瀬遺跡（註57）1基・森ノ元遺跡（註13）1基・尾漕遺跡4地点（註48）2基などである。とくに朝日宮ノ原遺跡4号墓では炭敷きの上に木棺をすえ、被葬者の胸部には念珠を頭部の棺外には青磁碗・合子・湖州鏡・和鉄・竹箆などの副葬品を納めていた。また尾漕遺跡A区2号墓には鉄鍋・300枚を越える六道銭などが副葬されていた。

また、牧原遺跡内に残る牧原千人塚（註10）は、頂上に高さ約2.8mの四面に梵字が刻まれた角塔婆が立つ15m×14mの方形プランの高さ約2mの塚であることが確認されている。



第6図 慈眼山瀬戸口遺跡の遺構図

近世

この時期の調査例としては牧原遺跡（註10）において小国街道の一部の発掘が行われ、後藤家墓地（註58）や祇園原遺跡（註22）では近世墓、山口遺跡（註59）では近世建物の調査が行われている。

註1) 橋昌信編『大分県旧石器時代遺跡分布図』別府大学付属博物館 1986年

註2) 高橋徹編『草場第二遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 大分県教育委員会 1989年

註3) 土居和幸ほか「三和教田遺跡B地点」『平成6年度(1994年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1996年

註4) 行時志郎編『平島遺跡B区』日田市埋蔵文化財調査報告書第4集 日田市教育委員会 1991年

註5) 土居和幸ほか編『馬形遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第16集 日田市教育委員会 1995年

註6) 調査担当者に実見させていただいた。

註7) 田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査2 手崎遺跡・大部遺跡』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II 大分県教育委員会 1998年

註8) 永田裕久「葛原遺跡」『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年

註9) 吉田博嗣編『三和教田遺跡C地点』大分県文化財調査報告書第98輯 大分県教育委員会 1997年

註10) 松下桂子編『牧原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第12集 日田市教育委員会 1997年

註11) 松下桂子「石ヶ迫遺跡」『平成7年度(1995年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1997年

註12) 土居和幸「上野第1遺跡」『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年

註13) 行時志郎編『森ノ元遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第13集 日田市教育委員会 1998年

註14) 行時志郎ほか「有田塚ヶ原遺跡」『平成7年度(1995年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1997年

註15) 村上久和編『吹上遺跡I・II』日田市教育委員会 1980年・1981年

土居和幸「吹上遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報I・II』日田市教育委員会 1986年・1987年

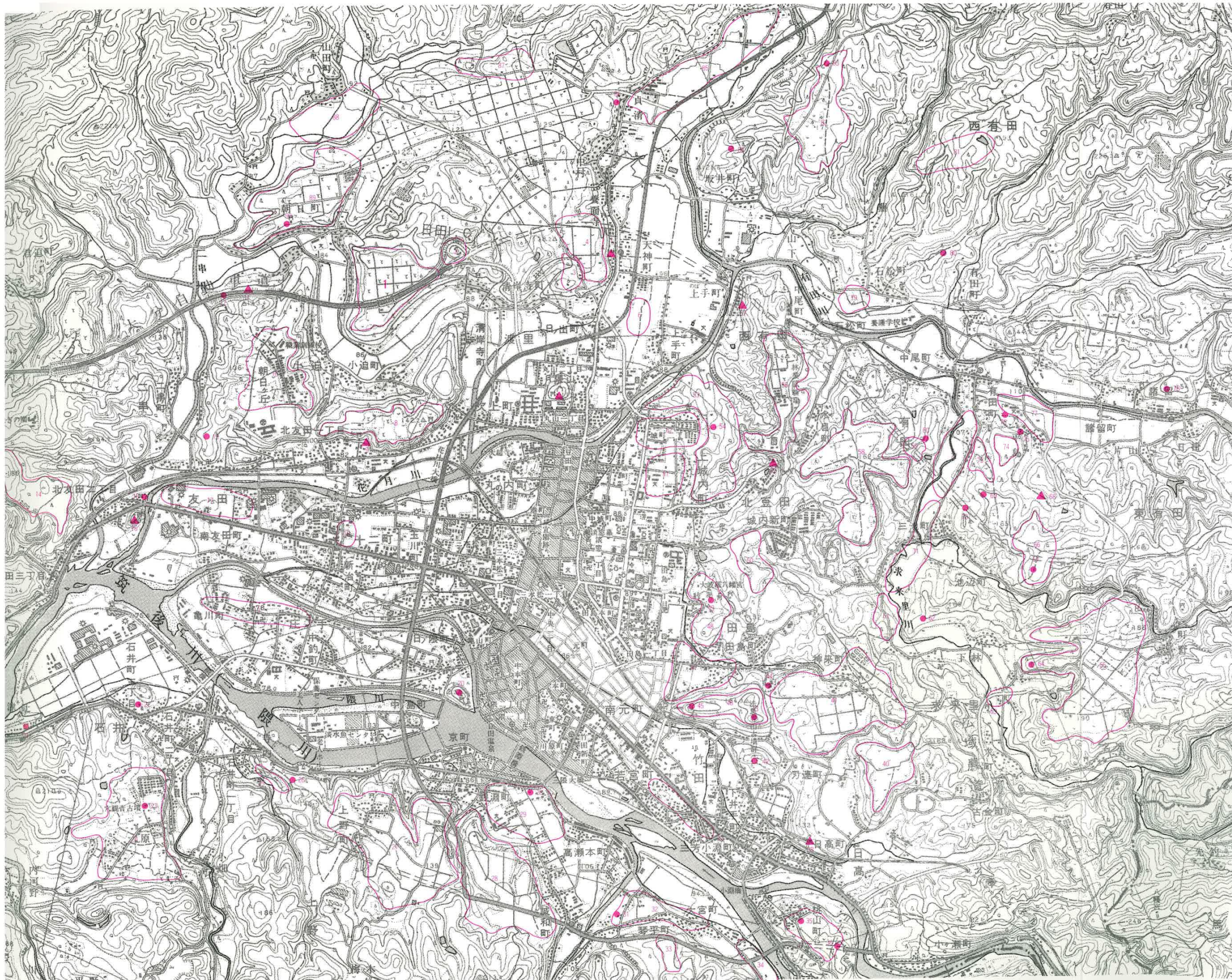
行時志郎「吹上遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報VI』日田市教育委員会 1991年

土居和幸ほか編『吹上遺跡-6次調査の概要-』日田市教育委員会 1995年

土居和幸「吹上遺跡」『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年

註16) 土居和幸ほか編『吹上遺跡-6次調査の概要-』日田市教育委員会 1995年

- 註17) 村上久和ほか編「後迫遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報日田～玖珠間第2・3集』大分県教育委員会 1992・1993年
- 註18) 昭和62年度に日田市教育委員会が調査を実施した。
- 註19) 友岡信彦ほか編『佐寺原遺跡・尾漕遺跡群・有田塚ヶ原古墳群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(9)大分県教育委員会 1998年
- 註20) 昭和61・62年度、平成6年度に日田市教育委員会が調査を実施した。
- 註21) 土居和幸「長者原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ』日田市教育委員会 1986年
- 註22) 行時志郎ほか「祇園原遺跡」『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年
- 註23) 行時志郎「徳瀬遺跡」『平成5年度(1993年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1995年
稲村博文ほか編『徳瀬遺跡』大分県文化財調査報告書第94輯 大分県教育委員会 1996年
- 註24) 土居和幸ほか編『会所宮遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第11集 日田市教育委員会 1996年
- 註25) 土居和幸編『平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第3集 日田市教育委員会 1990年
- 註26) 土居和幸「朝日宮ノ原遺跡(D地区)」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ』日田市教育委員会 1986年
- 註27) 平成9年度に日田市教育委員会が調査を実施した。
- 註28) 土居和幸「第2章弥生時代2.後期の遺跡」『日田市史』日田市 1991年
- 註29) 工事中に大型成人用甕棺墓が露出しているのを確認している。
- 註30) 友岡信彦ほか編『夕田遺跡群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(14)大分県教育委員会 1999年刊行予定。
- 註31) 大分県前方後円墳研究会「大分県の前方後円墳集成(1)」『おおいた考古Ⅰ』大分県考古学会 1988年
- 註32) 小柳和宏編『小迫墳墓群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(3)大分県教育委員会 1995年
- 註33) 行時志郎ほか「尾漕2号墳」『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年
- 註34) 後藤宗俊「第3章古墳時代2.日田地方の古式古墳」『日田市史』日田市 1991年
- 註35) 村上久和ほか編『日田条里遺跡群・佐寺横穴墓群・大迫遺跡・白岩遺跡・下綾垣遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6)大分県教育委員会 1997年
- 註36) 行時志郎「赤迫遺跡E・F地点」『平成5年度(1993年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1995年
永田裕久「赤迫遺跡」『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年
- 註37) 行時志郎編『荻鶴遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第9集 日田市教育委員会 1995年
- 註38) 行時志郎ほか「求来里平島遺跡A・B地点」『平成5年度(1993年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1995年
- 註39) 渋谷忠章ほか編『日田市羽野横穴墓群発掘調査概報』大分県教育委員会 1985年
- 註40) 平成9年度に日田市教育委員会が調査を実施した。
- 註41) 小柳和宏編『ガランドヤ古墳群』日田市教育委員会 1986年
- 註42) 賀川光夫編『法恩寺古墳』日田市教育委員会 1959年
- 註43) 渋谷忠章ほか編『大分の装飾古墳』大分県文化財調査報告書第92輯 大分県教育委員会 1995年
- 註44) 行時志郎ほか「平島横穴墓群」『平成7年度(1995年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1997年
- 註45) 玉永光洋編『北友田横穴』大分県教育委員会 1993年
- 註46) 行時志郎「長迫遺跡」『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年
- 註47) 行時志郎編『西有田赤ハゲ遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第7集 日田市教育委員会 1992年
- 註48) 平成9年度に日田市教育委員会が調査を実施した。
- 註49) 土居和幸「長者原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』日田市教育委員会 1987年
- 註50) 田中裕介編「上野第1遺跡」『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ・Ⅳ』大分県教育委員会 1991・1993年
- 註51) 坂本嘉弘編『慈眼山瀬戸口遺跡』大分県教育委員会 1992年
- 註52) 行時志郎編『長者原田迎遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第5集 日田市教育委員会 1992年
- 註53) 行時志郎ほか「クビリ遺跡」『平成7年度(1995年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1997年
- 註54) 平成9年度に大分県教育委員会が調査を実施した。
- 註55) 土居和幸編『惣田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第8集 日田市教育委員会 1994年
- 註56) 註19)のなかに集成されている。
- 註57) 平成9年度に日田市教育委員会が調査を実施した。
- 註58) 田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査Ⅰ 誠和神社裏遺跡・後藤家墓地・陣ヶ原辻原遺跡・高瀬深ノ田遺跡』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 大分県教育委員会 1995年
- 註59) 平成10年度に日田市教育委員会が調査を実施した。



- | | |
|--------------|-------------|
| 1 小迫辻原遺跡 | 46 会所山遺跡 |
| 2 草場第二遺跡 | 47 会所宮遺跡 |
| 3 草場遺跡 | 48 大波羅遺跡 |
| 4 後迫遺跡 | 49 薬師堂山古墳 |
| 5 羽野横穴墓群 | 50 赤迫遺跡 |
| 6 日田条里上手地区 | 51 上馬場遺跡 |
| 7 月隈横穴墓群 | 52 慈眼山瀬戸口遺跡 |
| 8 吹上遺跡 | 53 大蔵古城跡 |
| 9 北友田横穴墓群 | 54 丸山古墳 |
| 10 朝日ヶ丘遺跡 | 55 水目横穴墓群 |
| 11 小迫横穴墓群 | 56 佐寺原遺跡 |
| 12 小迫古墳 | 57 夕田横穴墓群 |
| 13 鳥越古墳 | 58 中尾原遺跡 |
| 14 穴原遺跡 | 59 大迫遺跡 |
| 15 三郎丸古墳 | 60 中尾古墳群 |
| 16 星隈横穴墓群 | 61 馬形遺跡 |
| 17 荻鶴遺跡 | 62 ガニク古墳群 |
| 18 日田条里郷四郎地区 | 63 求来里平島遺跡 |
| 19 徳瀬遺跡 | 64 亀ノ甲古墳 |
| 20 日隈古墳 | 65 町野原遺跡 |
| 21 津辻古墳群 | 66 塚ヶ原遺跡 |
| 22 ガランドヤ古墳群 | 67 塚ヶ原古墳群 |
| 23 穴観音古墳 | 68 平島横穴墓群 |
| 24 長者原遺跡 | 69 尾瀬2号古墳 |
| 25 寺内遺跡 | 70 尾瀬古墳 |
| 26 護願寺古墳群 | 71 森ノ元遺跡 |
| 27 上野第1遺跡 | 72 尾瀬遺跡 |
| 28 陣ヶ原遺跡 | 73 長迫遺跡 |
| 29 銭淵遺跡 | 74 祇園原遺跡 |
| 30 姫塚古墳 | 75 平島古墳 |
| 31 惣田塚古墳 | 76 塔ノ本古墳 |
| 32 惣田遺跡 | 77 平島遺跡 |
| 33 口が原遺跡 | 78 城山古墳 |
| 34 手崎遺跡 | 79 内ノ下遺跡 |
| 35 千人塚古墳群 | 80 有田古墳 |
| 36 牧原千人塚(中世) | 81 西有田赤ハゲ遺跡 |
| 37 大部遺跡 | 82 葛原遺跡 |
| 38 東寺横穴墓群 | 83 葛原古墳 |
| 39 柳ノ本遺跡 | 84 縫ヶ迫古墳群 |
| 40 東寺原遺跡 | 85 三和教田遺跡 |
| 41 元宮遺跡 | 86 用松中村古墳 |
| 42 法恩寺山古墳群 | 87 谷ノ久保遺跡 |
| 43 会所山古墳 | 88 岩崎遺跡 |
| 44 後山古墳 | 89 朝日宮ノ原遺跡 |
| 45 鳥羽塚古墳 | 90 天満古墳群 |

第7図 日田盆地周辺の主要遺跡分布図 (1/25000)

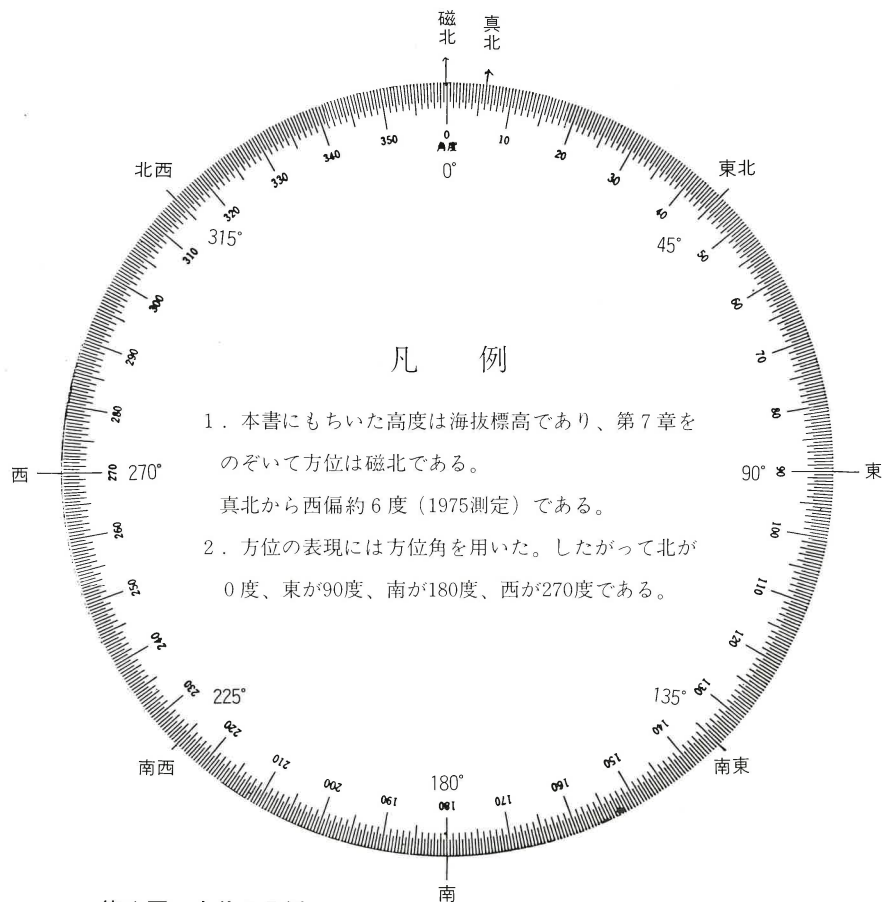
第3章 調査の方法と報告書の凡例

1984～88年度に大分県教育委員会が九州横断自動車道建設にともなう事前発掘調査としておこなった小迫辻原遺跡のA～D区の調査方法と整理報告についてまとめておきたい。

第1節 調査の方法

発掘調査の経過をまじえながら、発掘調査の推移と方法を述べておく。なお概報4作成の1987年までは小迫辻原遺跡は「小迫原遺跡」と表記していたが、遺跡の大部分は大字小迫字辻原に所在することと、地元では「小迫原」は別な台地を指し、小迫辻原遺跡の所在する台地は古くから「辻原」と呼ばれているという指摘があり、概報5作成段階で遺跡の名称を「小迫辻原遺跡」に改めた。

試掘調査 1984年度は辻原台地の東部にあたる、細く東に伸びる丘陵上の平坦面の試掘調査をおこなった（概報1、P2～5）。対象地区に任意に10m方眼を設定し、その東隅に1箇所2×2mの正方形の調査区（グリッド）を設け、手掘りで基盤層まで掘り下げ、その過程で遺構・遺物の存否を検討した。その結果、土器片・須恵器片・箱形石棺の安山岩石棺材を検出したが、遺構は発見されなかった。この結果から、D区より東のこの地区は近現代の畑地化・果樹園開発による削平のため、すでに遺構は失われていると判断し、本調査はおこなわなかった。なお1987年度のD区本調査時に、念のためこの地区の表土剥ぎを重機でおこなって、遺構の存否を検討したが、結果は同じであった。



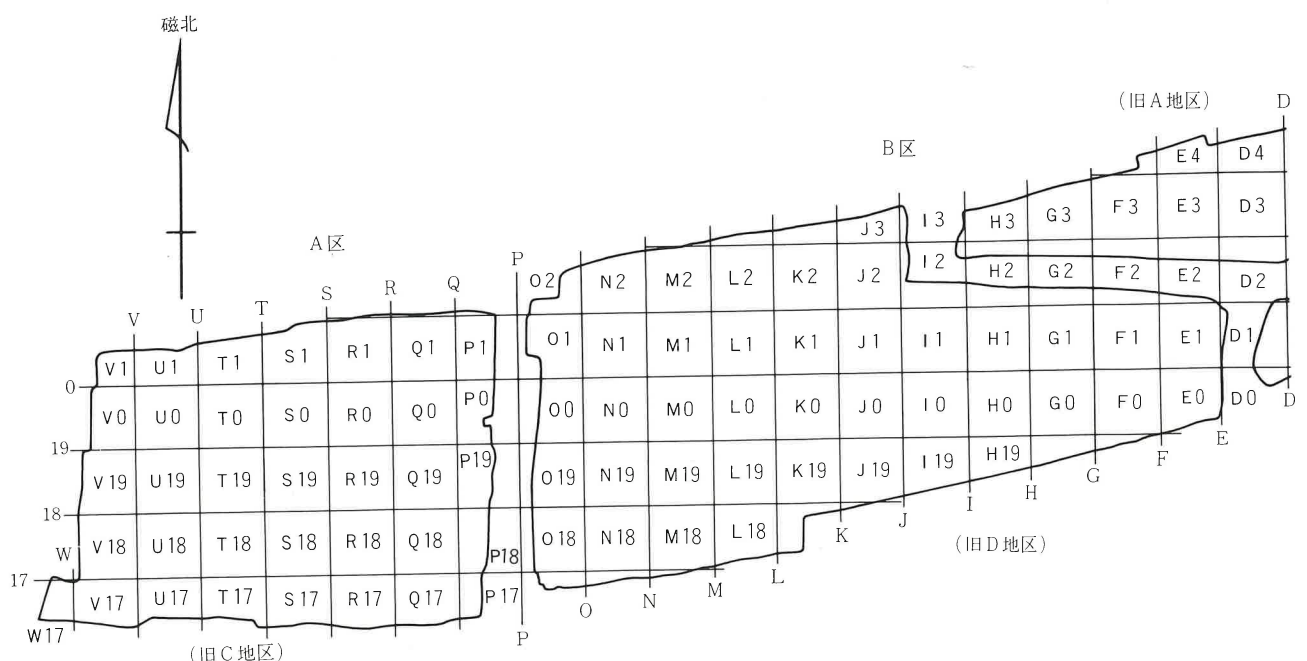
第1図 方位の凡例

1985年度は辻原台地の残りの高速道路建設用地の試掘調査を、前記の方法を基本としながら調査坑（トレンチ）を併用して同じく手掘りでおこなった（概報2、P21～24）。その結果、過去の耕地整理による部分的な削平にもかかわらず、各時代の遺構・遺物の存在が明らかとなり、次年度以降順次本調査をおこなうこととなった。

本調査 1986年度に旧A地区（B区の一部）と旧B地区（C区の一部）の本調査を開始した。表土を重機で剥いで遺構検出をおこない、切り合い関係と遺構の埋没土の質と色調を検討したのち、ピットは半裁、土壌は土層観察用土手を一本、竪穴遺構等の大型遺構は土手を十字に残して、手掘り掘り下げをおこなった。また遺構は検出順に番号を与え、ピットは10m方眼の調査区毎に番号をつけた。なお各地区には実測用に10mの方眼を組み、南北方向を磁北にあわせた。したがって真北とは約6度、第1図のようにずれることになる。以後の調査ではこの10m方眼を東西に拡張した。その結果、第2図のように調査区が設定された。この調査区には南北線にアルファベットを、東西線にアラビア数字を与え、その交点の南西方眼をB5調査区というように呼ぶことにした。実測は原則として20分の1実測図を作成し、遺構によっては10分の1・5分の1実測図を作成した。写真は35ミリカメラでモノクロ・カラースライド撮影をおこない、遺構によっては6×9大型カメラを併用した。

1987年度には旧C地区（A区）、旧D地区（B区の大部分）、旧E地区（C区の大部分）、旧F地区（D区）の本調査を、前年度と同じ手続きでおこなった。さらにC区ではいわゆる「豪族居館」遺構の発見により、居館周辺のトレンチ調査と遺構検出調査（C区拡張区A）をおこなっている。また調査区全体の空中写真撮影をあわせておこない、C区-8号竪穴住居跡では、山田拓伸（宇佐風土記の丘歴史民俗資料館）がベッド状遺構の炭化木材の取り上げをおこなった。

補足調査 1988年度には「豪族居館」の保存工事の一環として、1号方形環溝の一部の調査（C区拡張区B）とC区の空中写真測量をおこなった。



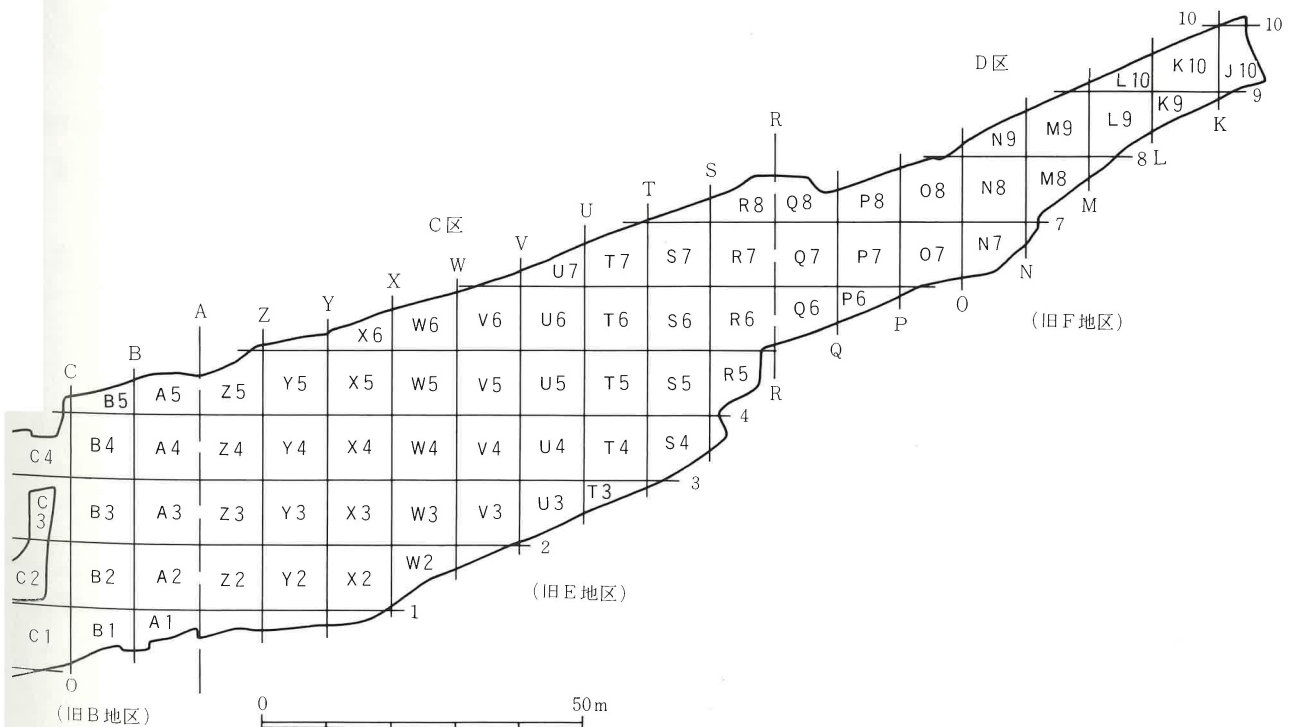
本調査中、第1章第1節4)で前記した調査委員・調査員以外の、現地で調査の方法・遺構遺物の検討と評価についてご助言をいただいた方々と調査に協力いただいた機関は以下のとおりである。明記して謝意を表したい。

(アイウエオ順・現職)

岡村道雄(文化庁) 小倉正五(宇佐市教委) 梶原秀彦(日田考古学同好会) 片岡宏二(福岡県小郡市教委) 河津修吉 菊田徹(臼杵市役所) 栗田勝弘(大分県教委) 坂本嘉弘(大分県教委) 佐田茂(佐賀大学) 佐藤良二郎(宇佐市教委) 高倉洋彰(西南学院大学) 高島忠平(佐賀県教委) 武石邦男 武末純一(福岡大学) 辰巳和弘(同志社大学) 田中常雄 玉永光洋(大分市教委) 土居和幸(日田市教委) 中村勝 中山晋(栃木県教委) 西別府元日(広島大学) 西谷正(九州大学) 故丹羽茂(前福岡県豊前市教委) 橋本博文(新潟大学) 原田勝宏(日田市文化財調査委員) 原田昭一(大分県教委) 林一也(宇佐市教委) 広瀬和雄(奈良女子大学) 牧尾義則(大分県教委) 三辻利一(奈良教育大学) 宮小路宏 八重津清 綿貫俊一(大分県教委)

第2節 整理の経過

遺物整理作業は、本調査中に現地で遺物洗浄と注記をおこなったが、すべての遺物は終了しなかった。1995・96年度に大分県教育庁文化課文化財資料室で遺物の洗浄・注記と接合作業をおこない、同時に遺物の実測・観察作業にはいった。1997・98年度は遺物の実測と復元、遺構図の編集と浄書をおこなった。遺物の接合には、高森美恵子、高橋孝子、土崎弘子があたり、復元は田北節子があつた。また報告書の作成は田中の指揮のもと、遺物の観察・実測は久住猛雄、土崎、麻生廣美、東冬子、田中がおこない、浄書は今泉正子、金丸涼子と麻生がおこなった。編集作業には、土崎、麻生、金丸、大倉久美子、二宮恵子、後藤京子の協力をえた。遺物の写真撮影は、文化財写真家の長谷川正美氏がおこなった。



第2図 小迫辻原遺跡、A～D区調査区設定図(1/120)

鉄器は宇佐風土記の丘歴史民俗資料館においてレントゲン撮影をおこない、実測の参考にした。また炭化種実の同定はパリノサーベイ社がおこない、B区-3号竪穴住居跡出土の鏡片の鉛同位体分析は平尾良光・鈴木浩子（東京国立文化財研究所）氏がおこなった。また鏡片に付着した赤色顔料の分析は本田光子（別府大学）氏がおこなった。この3件の自然科学的分析の報告は、本報告書には掲載せず、最終巻に報告する予定である。

整理報告書作成中、遺物の検討と評価についてご助言いただいた方々は以下のとおりである。明記して謝意を表したい。（アイウエオ順・現職）

江見正美（岡山県教委） 大久保徹也（徳島文理大学） 久住猛雄（福岡市教委） 佐々木憲一（国際日本文化研究センター） 高橋徹（大分県立歴史博物館） 土居和幸（日田市教委） 牧尾義則（大分県教委） 宮内克己（大分県教委） 村上恭彦（愛媛大学） 山本悦世（岡山大学） 行時志郎（日田市教委） 吉田寛（大分県教委） 綿貫俊一（大分県教委）

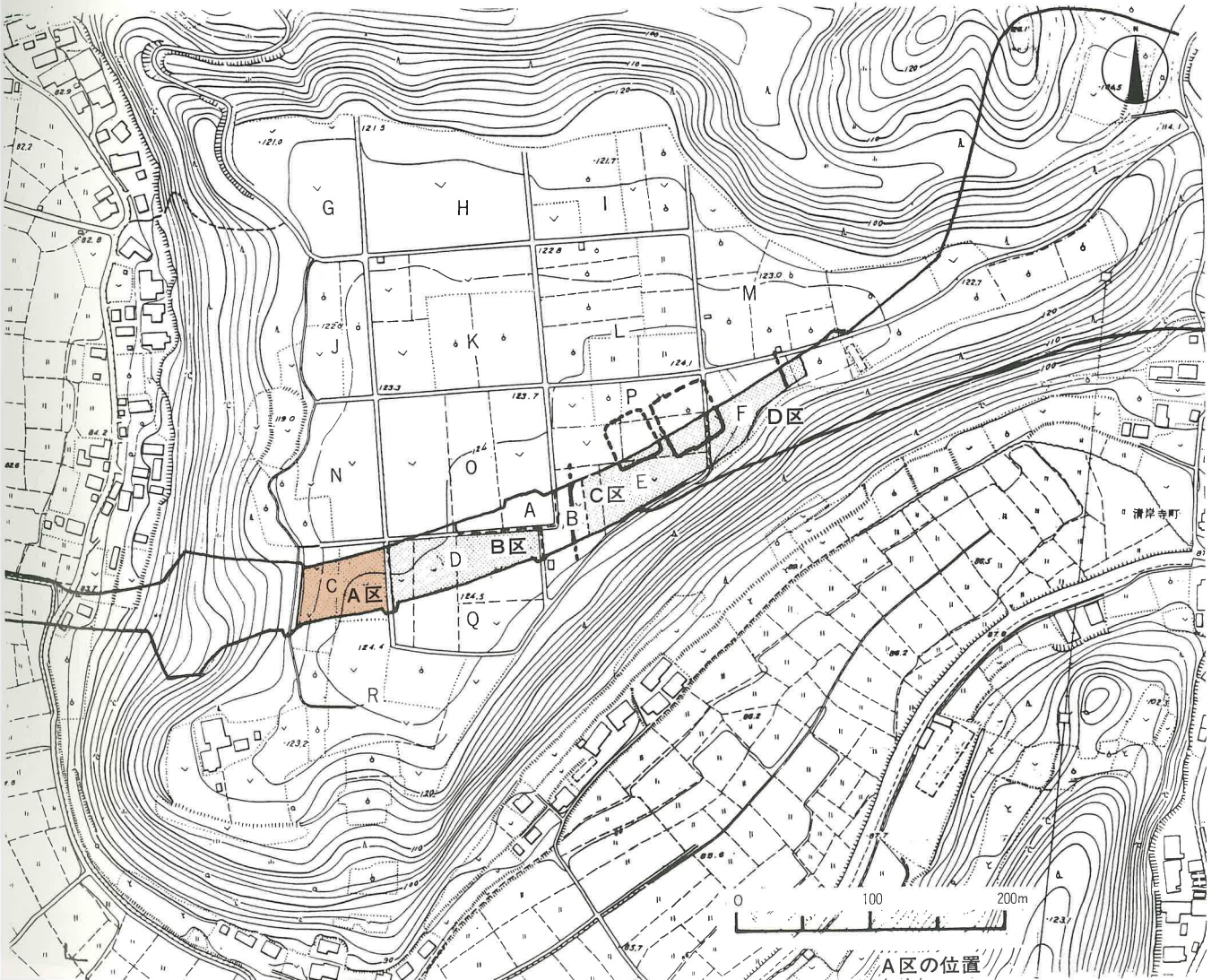
第3節 報告書の凡例

- 1、本調査地区の名称は本調査着手順にA～F地区と名付けたために、調査地区名称がモザイク状になった。整理時に西からA・B・C・D区と改めた。その関係は第2図に示した。
- 2、調査地区の名称変更にもなって、遺構の名称を区ごとに改めた。各区本文末尾の一覧表・観察表に旧名称の欄を設けて、対応関係を示した。
- 3、各遺構は「B区-5号竪穴住居跡」のように表記し、本文中や挿図一覧表で省略する場合には「B-5住」のように表現する。したがって、掘立柱建物・土壇・墓・溝も「B-4建物」「C-3土壇」「D-1墓」「A-6溝」のように省略形をもちいる。
- 4、挿図中に書き込んだ方位はすべて磁北である。真北との関係は第1図のようになる。
- 5、遺構の方向は、長軸線をもとに計測し、方位角で表現した。第1図参照。
- 6、挿図の遺構の縮尺は、竪穴住居跡が60分の1、その遺物出土状態図は40分の1を原則とした。掘立柱建物跡は80分の1とし、土壇は30分の1と40分の1とした。墓は20分の1、溝は100分の1をを原則とした。また遺構配置図はすべて300分の1で統一している。
- 7、挿図の遺物の縮尺は、土器が4分の1、石器が2分の1ないし3分の1、鉄器・鏡は2分の1に統一した。
- 8、なお竪穴住居跡の床面積は、竪穴の下バをプランメーターで計測した。
- 10、（→図版5）とした見出しのあとの矢印の指示は、『写真図版編』の番号である。
- 11、一覧表中の土壇の分類は、平面形を基本に断面形と底面の形状をもとに分類したものである。
- 12、本書でもちいる「古墳時代前期前半」という時期は、庄内式および布留式古段階の土器使用期で、弥生時代後期終末～古墳時代前期前半とされる時期である。表現の煩瑣をさけるために古墳時代前期前半という表現に統一した。したがって土器もすべて土師器と表現している。
- 13、観察表中の土器の分類は本文中で適時、解説をおこなっている。
- 14、観察表中に胎土の項目で「搬入」と表現した土器は、必ずしも遠隔地を意味せず、小迫辻原遺跡で大多数を占める在地胎土と異なることを意味する。したがって近隣地域からの搬入の可能性を含めて考えている。
- 15、観察表中の弥生式土器の底部表現（a手法等）は、田崎博之氏の須玖式土器の研究による。
- 16、土師器の分類は、久住猛雄氏の一連の古式土師器研究の成果をもとにしたものである。その内容は適時本文中でふれる。

第4章 A区の記録



A区作業風景





第1節 A区の調査概要（カラー図版、第1図、写真1・2 →空撮図版1）

A区は本調査時の旧C地区である。高速道路調査区のもっとも西端の調査区で台地の西端にあたる。現状は畑で、A区の南東部がもっとも高く、北と西に向かって次第に低くなる。しかし北東部分では本来伸びていたはずの近世の畑地境界溝が途中で削平されて途切れている。したがって北側に低くなる現状の地形は、1960年代の耕地整理によるもので、近世までは東部が全体として高く、西に向かって次第に低くなる地形であったと推定される。その東西の比高差は2m強である。近世の畑地開発や近年の耕地整理で、高い部分特に北東部分が削られているが、西に低く東に高い地形の基本はそれほど変化していないと推定される。ただし弥生時代や古墳時代前期の地表面は検出面から50cm以上高かったことは遺構の削平状態からみて明らかである。

A区では現地形の上面で、明らかに自然が生み出した凹みや現代の穴を除いて、竪穴住居跡10軒・掘立柱建物跡10棟、土壌137基、溝7条とピット多数を検出した。このうち以下に報告する遺構は、出土遺物・切り合い関係・土質等により時期の判定が可能であったもののみである。文章のない遺構は章末の遺構一覧表を参照されたい。（第1～4表）

A区の遺構の時期別分布の特徴は、①この区でのみ縄文時代の遺構が検出されたこと。②弥生時代前期後半から



写真1. A区南半遺構検出状態（北東から）

から中期初頭の遺構がまとまって検出されたこと。③散漫ながら弥生時代中期後半と古墳時代前期前半の遺構が存在すること。④中世の掘立柱建物群がまとまって検出されたこと。⑤近世の畑地境界溝が多く存在する、などである。小迫辻原遺跡の中で、遺構の密集がもっとも激しい場所であった。しかし以上の時期以外の時代の遺構は全く検出されないのは、ほかの地区でも同様であり、特定の歴史的条件が揃ったときに遺跡が形成されるという特徴を一方で備えている。



写真2. A区北半遺構検出状態（東から）

第2図 小迫辻原遺跡A区、遺構配置図②
 一繩文時代・弥生時代前期後半～中期初頭— (1/300)

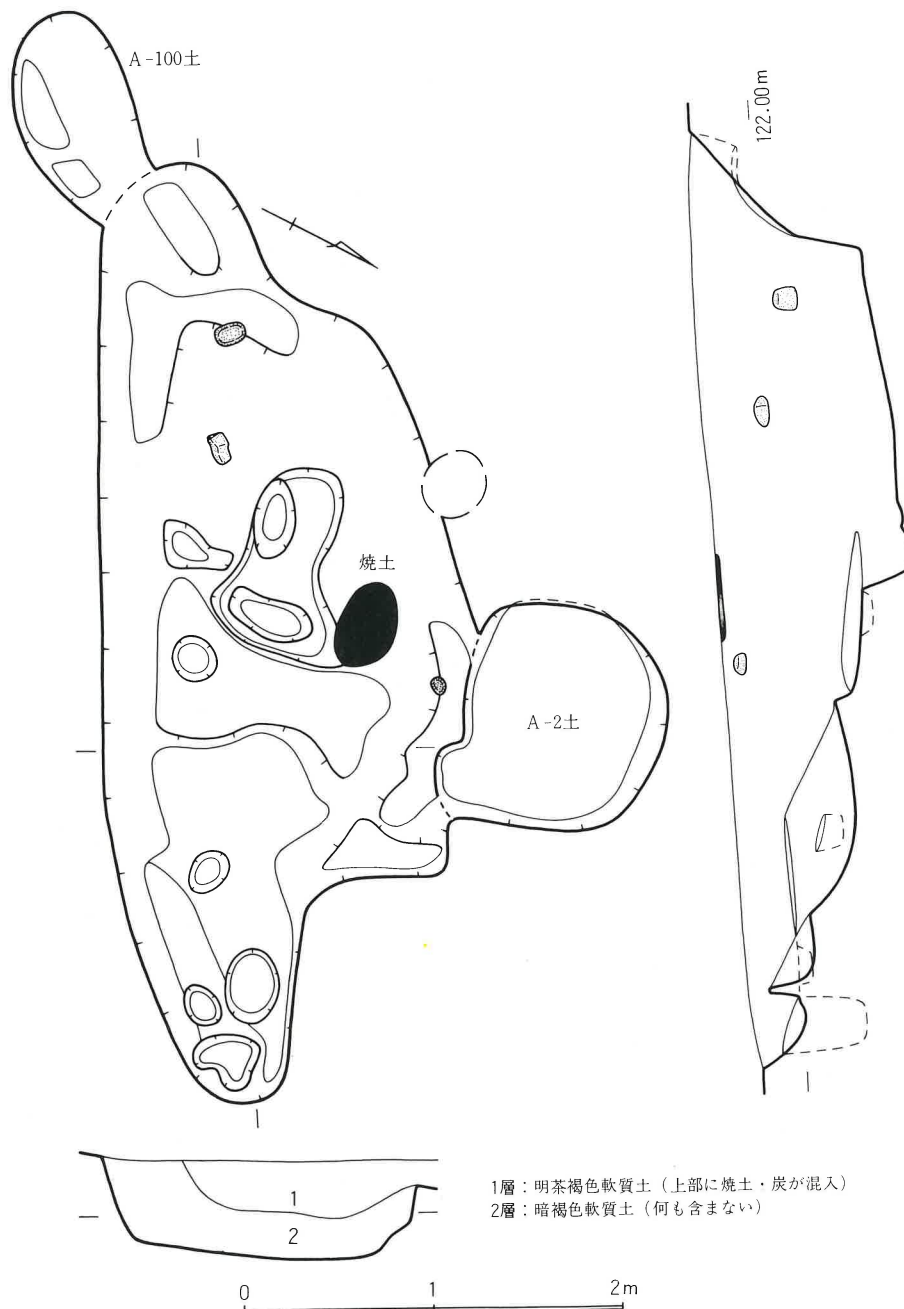


第2節 縄文時代（第2図）

小迫辻原遺跡では縄文時代、特に後期あるいは晩期の小規模な包含層が点々と存在することが、その後の日田市の調査により判明している。しかし県が調査したA～D区では包含層の検出はなく、唯一このA区のQ19調査区で後期末の三万田式期の土壌が2基みつかっている。それは、A区の中でも最も高い位置に掘りこまれていた。

1) 土壌（第3・5表）

A区-1号土壌（第3図 →図版1）



明確な形をなさない大型の土壌で、規模は長さ498cm・幅200cm、底面は凸凹して定まっていない。数度にわたる掘削行為の繰り返し結果であろう。実際、検出時には二つの土壌と考えた。深さは検出面から101cmほどである。A-2土壌に切られているので縄文時代の遺構と推定した。埋土は二層に別れるが下部の2層には遺物はなく、上部の1層に拳大の礫と炭それに焼土の集中箇所がみつき、人為的な土壌と判断した。土壌の具体的な機能を推定する手がかりはなかった。（旧C地区土壌78・79）

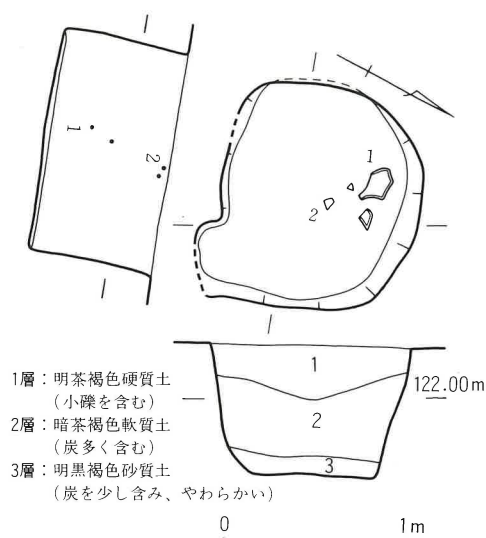
第3図 A区-1号土壌（1/40）

A区-2号土壙（第4・5図 →図版1・29）

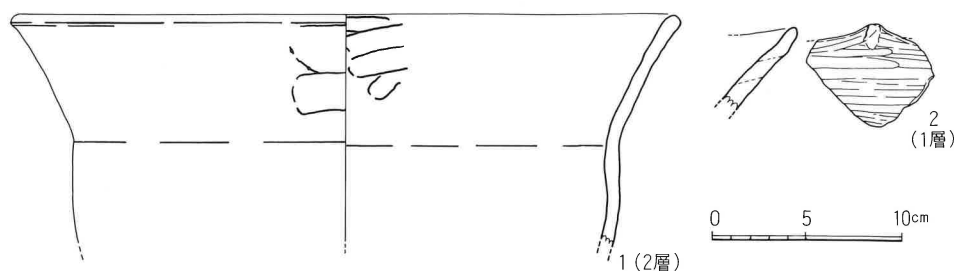
A-1土壙をわずかに切って掘りこまれた小型円形の土壙である。規模は長軸長128cm・短軸長107cm、底面は平坦で深さは検出面から70cmほどである。袋状ではなくほぼ垂直に壁がおちる堅穴状の断面形である。その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。

埋土は三層に別れるが、全体に小さな炭片と小礫を含み、土器の破片が混ざりこんでいた。貯蔵穴として使用したのち生活廃棄物が捨てられて埋没したと思われる。

1は縄文時代後期末の三万田式の粗製深鉢で、2は浅鉢である。
（旧C地区土壙80）



第4図 A区-2号土壙（1/40）



第5図 A区-2号土壙出土遺物(1/4)

第3節 弥生時代前期後半～中期初頭（第2図）

この時期にあたる遺構はきわめて多く、堅穴住居跡6軒・土壙82基を確認し、ピット1本を掲載した。この時代のピットはまだ多いであろうが、土器を含まないためにほかの時期のピットと区別できなかった。

遺構の配置は、第2図をみると東北部から南部中央にかけて太い帯状に遺構が密集するように一見みえるが、この現象は後世の削平による遺構の消失によるものである。つまり南東部の遺構が少ない場所は、調査区内でもっとも高い場所で、後世の畑地化に際して一番影響を受けやすい場所にあたる。またA区の西半分はこの時期の遺構が少ないのは、西にいくにつれて遺構の深さが総じて浅くなる傾向から考えて、削平をかなり受けたために浅く掘られた遺構が消失したので少なくなったと推定される。しかし最も後世の削平を受けたと推定した東北部では、円形堅穴の堅穴部分まで全く削平されているにもかかわらず、遺構が最も密集する。したがって東北部には本来この時期の遺構がほかの場所に比べてもっとも密集していたと考えられる。

なお弥生時代前期後半から中期初頭としたこの時期は、北部九州の土器編年と比較した場合、次の三期に編年できると考えられる。すなわち板付II式の新しい段階、前期末段階、中期初頭の城ノ越式段階におおよそ対応する。以下の本文中では板付II式の新しい段階にあたる時期を「弥生時代前期後半」、前期末段階を「弥生時代前期末」、中期初頭の城ノ越式段階を「弥生時代中期初頭」と表現することにする。

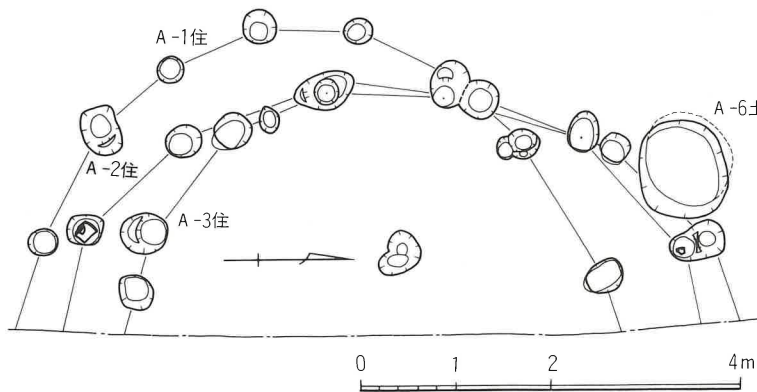
1) 竪穴住居跡 (第1・5表 →空撮図版2上)

6軒検出された竪穴建物はいずれも竪穴部分が削平されているため、柱穴群の配列をもとに復元した。なかでもA-1住・A-2住・A-3住の三軒と、A-5住・A-6住の二軒は位置をずらしながら重複している。いずれも竪穴建物の拡張ではないので、一定の時間をおいてあえて同一の場所に竪穴建物を建設した小集団(生活をともにする世帯)の存在が想定できる。竪穴建物を重複してたてたこの小集団はみずからの系譜を意識し、同一場所に再び居住することで、その系譜を集落内の他の小集団に誇示したと思われる。

またA-1・2・3住の三軒はいずれも大型の円形竪穴住居跡と考えられ、同一の場所にたてる際の竪穴の規模が変わらない点も興味深い。

A区-1号竪穴住居跡 (第6・8図 →図版1)

C区の東端で西半分のみ検出された。A-2住・A-3住と重複し、柱穴6の切り合いから三軒のなかでも



第6図 A区-1~3号竪穴住居跡とA区-6号土壇 (1/80)

最初に建設された竪穴である。竪穴部分は削平され、柱穴の配列から円形竪穴建物に復元される。柱穴を8本確認した。柱穴の数はきわめて多い。柱穴1-8間で630cmをはかり、本来床面積が50㎡を越える大型の竪穴であったと推定される。

竪穴の時期は、柱穴3から小土器片が出土してこの時期に属することは判明したが、細かい時期の特定はむずかしい。あとに作られたA-2住の出土土器(第7図)からみて、弥生時代前期後半~末の間と推定される。(旧C地区竪穴住居9)

A区-2号竪穴住居跡 (第6~8図 →図版1)

A-1住と同じく西半分のみ検出された。A-1住・A-3住と重複し、柱穴4の切り合いから三軒のなかで二番目に建設された竪穴である。竪穴部分は削平され、柱穴の配列から円形竪穴建物と復元される。柱穴は6本確認した。柱穴の数はこれもかなり多く、深さはA-1住より全体に深く掘られ、高さも揃っている。柱穴1-6間で660cmをはかり、本来の竪穴部分の床面積は同じく50㎡を越える大型の竪穴と推定される。また柱穴1の途中に角礫が柱穴をふさぐように検出された。柱抜き取り後に意図的に入れた可能性がある。

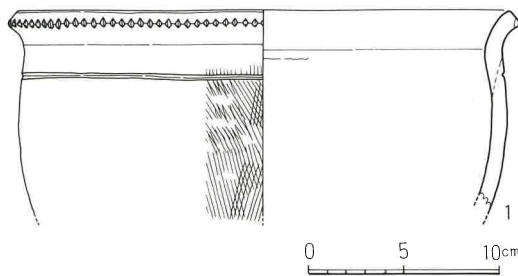
竪穴の時期は、柱穴6から柱抜き取り後に混ざりこんだと推定される1の如意形口縁の甕Aの破片からみて、弥生時代前期後半~末の間と推定される。(旧C地区竪穴住居15)

A区-3号竪穴住居跡 (第6・8図 →図版1)

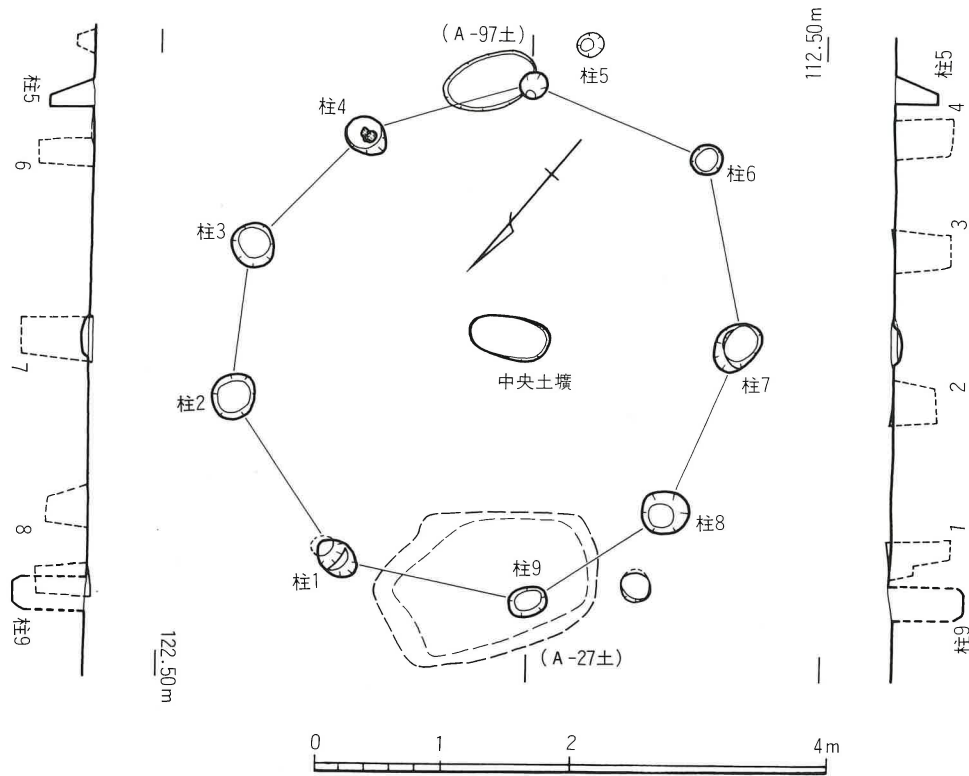
A-1・2住と同じく西半分のみ検出された。A-1住・A-2住と重複し、柱穴5と7の切り合いから三軒のなかで最後に建設された竪穴である。竪穴部分は削平され、柱穴の配列から円形竪穴建物と復元される。柱穴は7本確認した。深さはA-2住と同じで高さも揃っている。柱穴1-7間で640cmをはかり、竪穴部分の床面積はやはり50㎡を越える大型の竪穴と推定される。

竪穴の時期は、切り合い関係と柱穴3から出土した壺形土器の小片から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区竪穴住居8)

またA-6土壇はA-1~3住のいずれかの屋内貯蔵穴であった可能性が高い。



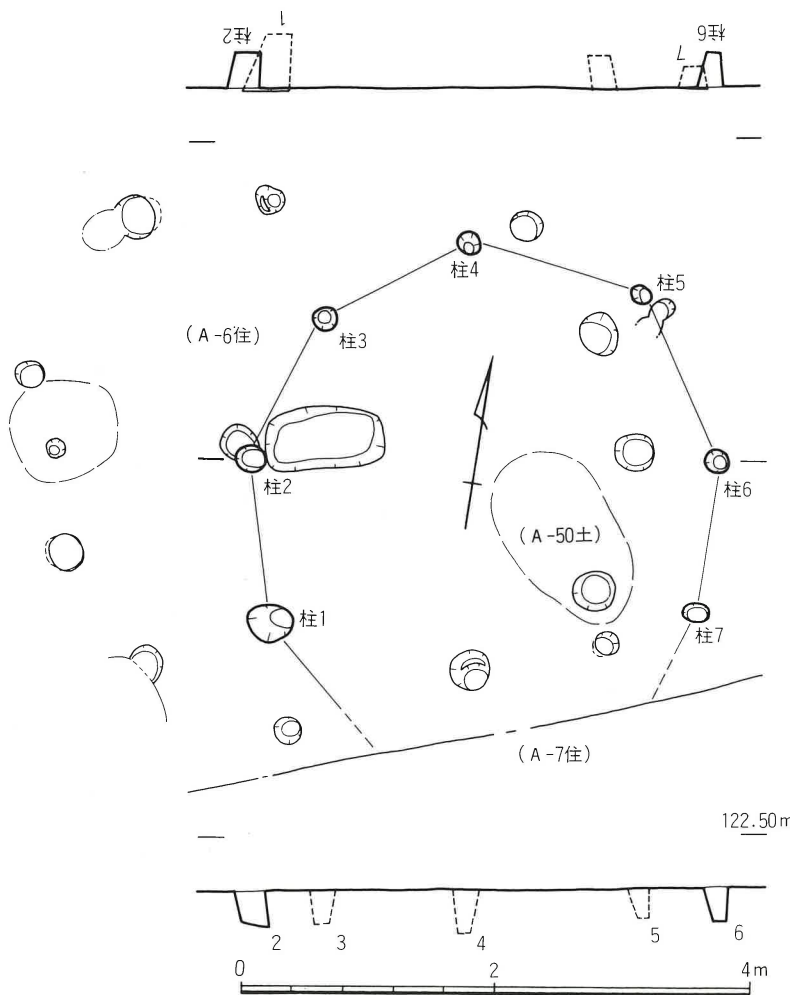
第7図 A区-2号竪穴住居跡出土遺物 (1/4)



第9図 A区-4号堅穴住居跡 (1/60)

A区-4号堅穴住居跡 (第9図 → 図版2)

A-1~3住の西隣に位置し、柱穴がA-97土壙を切り、A-27土壙に切られている。堅穴部分は削平され、柱穴の配列から9本柱の円形堅穴と復元される。中央に焼土を含む暗褐色土が充満した長円形の中央土壙がある。柱穴間の径は平均450cmで、本来の床面積は30㎡前後の中型の堅穴であったと推定される。

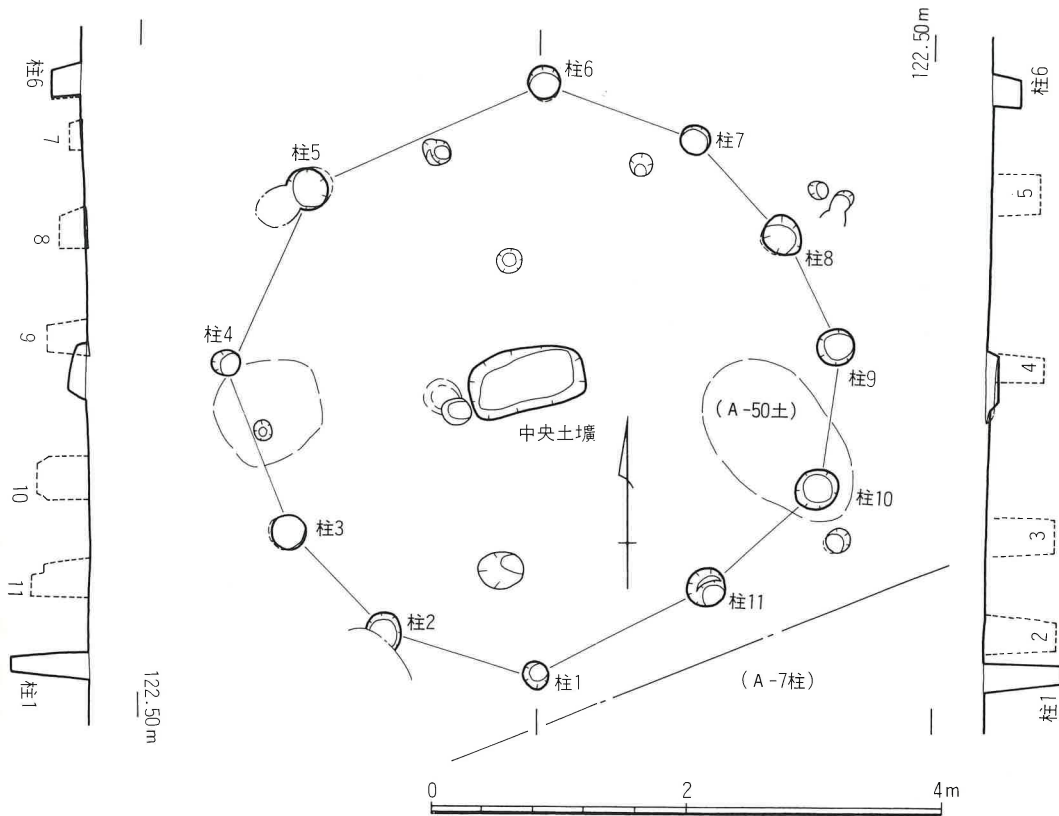


第10図 A区-5号堅穴住居跡 (1/60)

柱穴から土器小片が出土したが、時期のわかる遺物はない。堅穴の時期は、柱穴9を切ったA-27土壙以前で、その土壙の時期は弥生時代前期末と推定されるので、堅穴の時期はそれ以前である。またA-1~3住と同時に存在したとは考えられないほど近接する。(旧C地区堅穴住居10)

A区-5号堅穴住居跡 (第10図 → 図版2)

C区の中央近くにA-6住と重複して建設された堅穴建物である。A-6住との直接の切り合いはなく時期の前後関係は不明である。堅穴部分は削平され、柱穴の配列から円形堅穴建物と復元される。柱穴は7本確認した。南部をA-7住に切られている。柱穴間の径は平均410cmで、本来の床面積は30㎡前後の中型の堅穴だと推定される。柱穴から出土した土器小片からこの時期に属することがわかる。(旧C地区堅穴住居11A)



第11図 A区-6号竪穴住居跡 (1/60)

A区-6号竪穴住居跡 (第11図 →図版2)

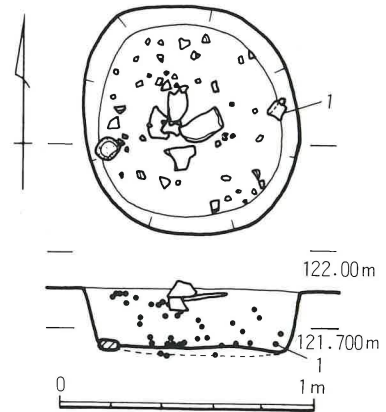
A-5住と重複した建設された竪穴建物である。竪穴部分は削平され、柱穴の配列から11本柱の円形竪穴と復元される。中央に炭片と焼土を含む暗褐色土が充満した長円形の中央土壙がある。柱穴間の径は平均510cmで、本来の床面積は40㎡前後の大型の竪穴であったと推定される。出土遺物はないが、柱穴10に切られた弥生時代前期末のA-50土壙より後で、竪穴の時期はその土壙より新しい弥生時代前期末から中期初頭になる可能性もある。(旧C地区竪穴住居11B)

2) 土壙 (第3・5表)

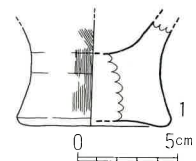
平面形からみると①小型円形(A)、②大型円形(B)、③小型方形(A5)、④長円形(C)、⑤船底形(D)、⑥長方形(E)、⑦形の定まらない不定形(F)の7種類に大別されるさまざまな遺構を含めて、土壙と一括した。また以上の土壙は断面形からみて底が広がる袋状と壁が真っすぐに落ちる竪穴状と、底面が丸い皿状に大別される。

A区-3号土壙 (第12・13図 →図版2)

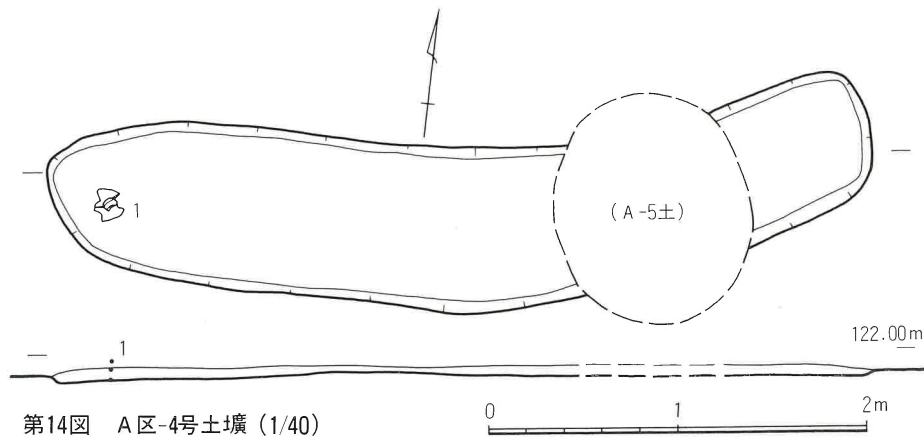
P1調査区検出の小型円形竪穴状の土壙で、規模は長軸長98cm・短軸長85cm、底面は平坦で深さは検出面から26cmほどである。その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。埋土は単一層で、炭片と焼土・小礫・土器片を多量に含む暗褐色土である。5cm大の黄色土ブロック(基盤層の土)がかなり含まれるので、貯蔵穴として使用したのち生活廃棄物が捨てられて短期間に埋没したと思われる。遺物は一括廃棄状態であり、大型の破



第12図 A区-3号土壙(1/30)



第13図 A区-3号土壙出土遺物(1/4)



第14図 A区-4号土壙 (1/40)

片も含まれていたが、保存状態が悪く実測できたのは1の甕底部のみだった。この土器などから土壙の埋没時期は弥生時代前期末とみられる。

(旧C地区土壙17)

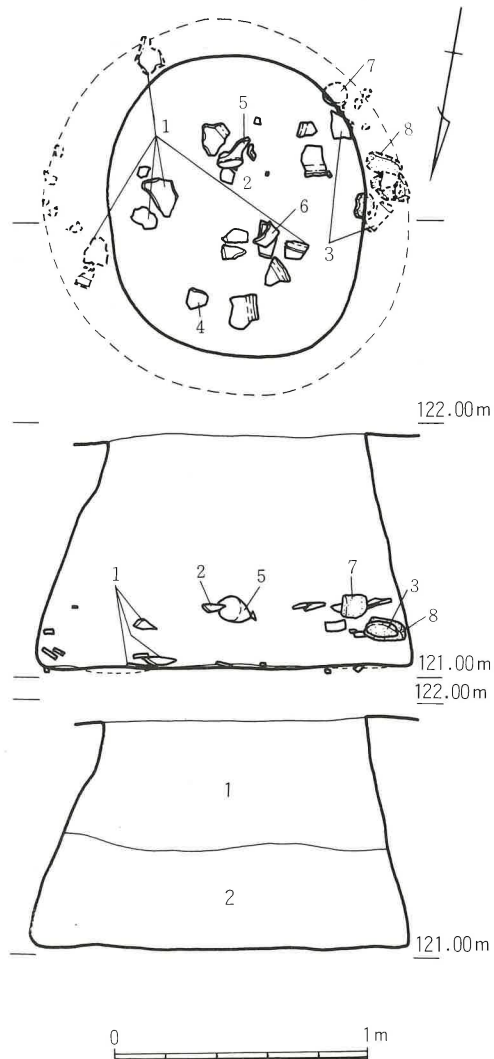
A区-4号土壙
(第14・16図 → 図版3・29)

P1～Q1調査区
検出の長い船底形の土壙で、東西にやや

曲がりながら伸びて、底は皿状で浅い。A-5土壙に切られている。規模は長さ436cm・幅73cm、深さは検出面から7cmほどである。西端の底部に接して第16図1の甕の底部片のみが横倒して出土した。この土器から土壙は弥生時代前期末ごろと考えられる。(旧C地区土壙19)

A区-5号土壙 (第15・16図 → 図版3・29)

P1調査区で検出された大型円形袋状の土壙で、A-4土壙埋没後に掘りこまれている。その形態からみて貯蔵穴として作られたものと推定される。規模は長軸長150cm、短軸長140cmで、検出面からの深さは93cmである。埋土は二層に分かれ、2層下部の底面上に土器片を中心に炭・焼土・小礫を多量に含む遺物の一括廃棄行為が行なわれている。同時に埋土全体が二層にしか分層できないことと、多量の黄色土ブロックを含む点から、遺物の一括廃棄をおこなうと同時に一気に埋め戻した可能性が高い。そして基盤層の土壌である黄色土ブロックを含む点からみて、埋め戻す際には別な遺構が掘られ、その排出土で埋められたと考えられる

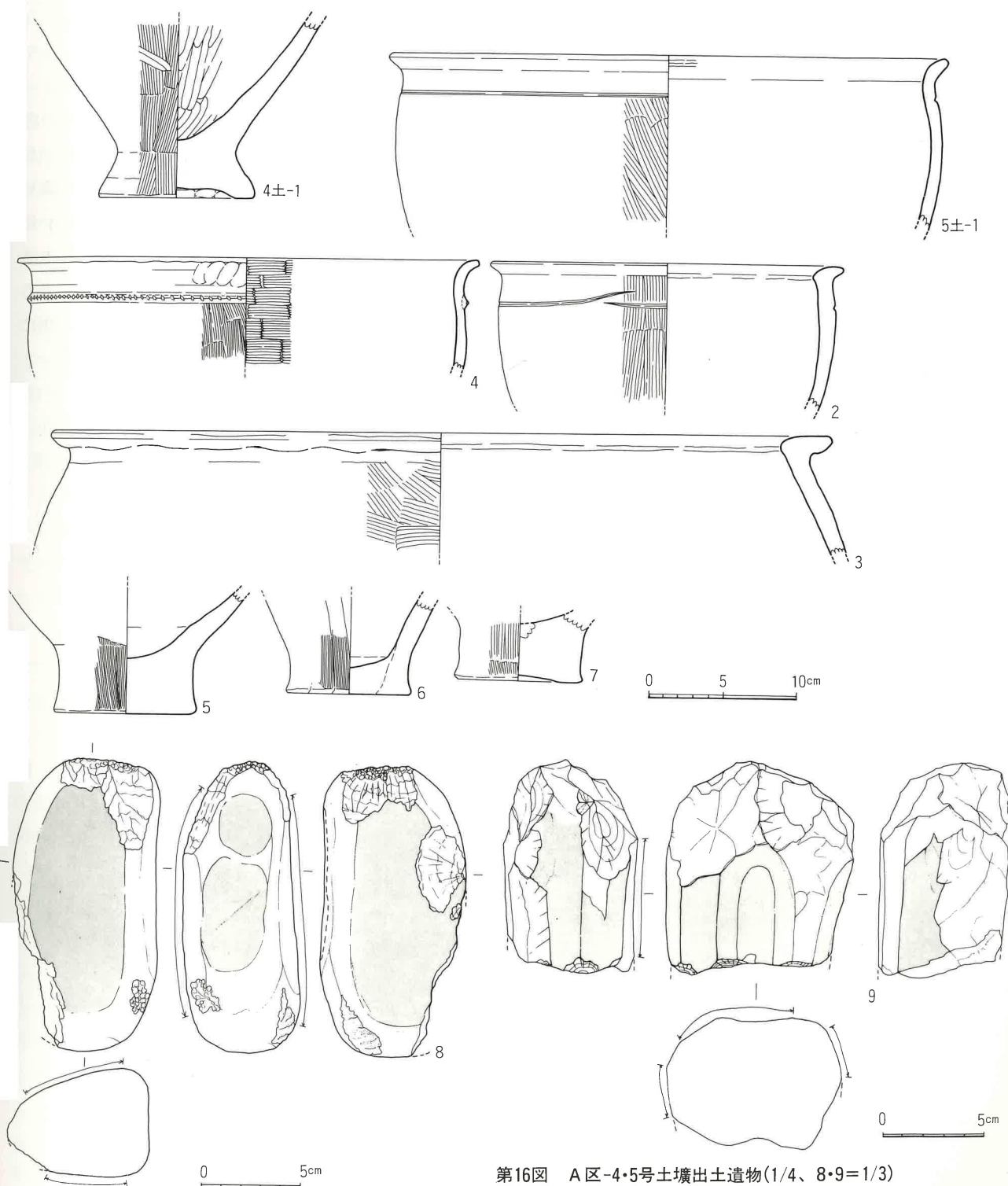


1層：暗褐色硬質土（炭・焼土・小土器片・黄色粘土ブロックを多く含む。）
2層：暗褐色軟質土（大型土器片を多く含む、炭・焼土・黄色土ブロックも多い。）

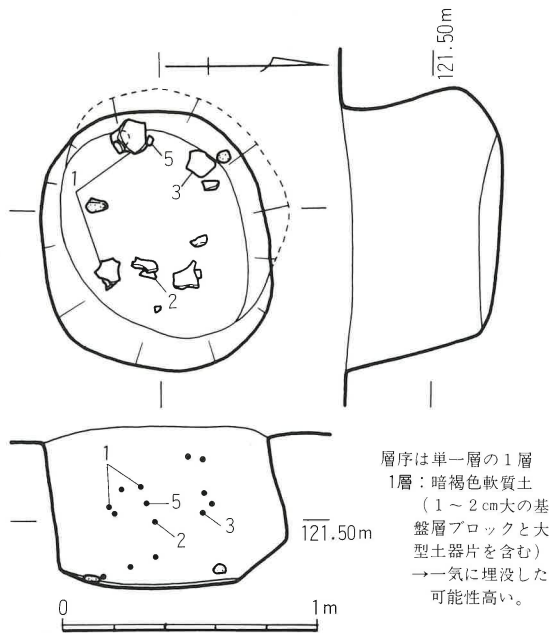
第15図 A区-5号土壙 (1/30)

2層下部の一括廃棄遺物には土器と石器があり、弥生土器は甕ばかりである。1・2・3は如意形口縁の系譜を引く甕A、4はそれに突帯をはりつけ刻目を施す甕Bである。3は大型品で沈線がない。5・6・7は1～3の底部と推定される甕の底部である。石器として、8は端部に敲打痕をもち、両面が磨れた磨石で一部欠けている。9は半分に折れた大型の砥石である。土器・石器ともに破損しており、土器は使用の痕跡が明らかなものが多いので、この貯蔵穴を埋め戻す際にすてられた生活廃棄物の一群と評価できる。廃棄の時期は甕Aの口縁部形態と、底部の形態か

らみて弥生時代中期初頭になるだろう。(旧C地区土壙18)



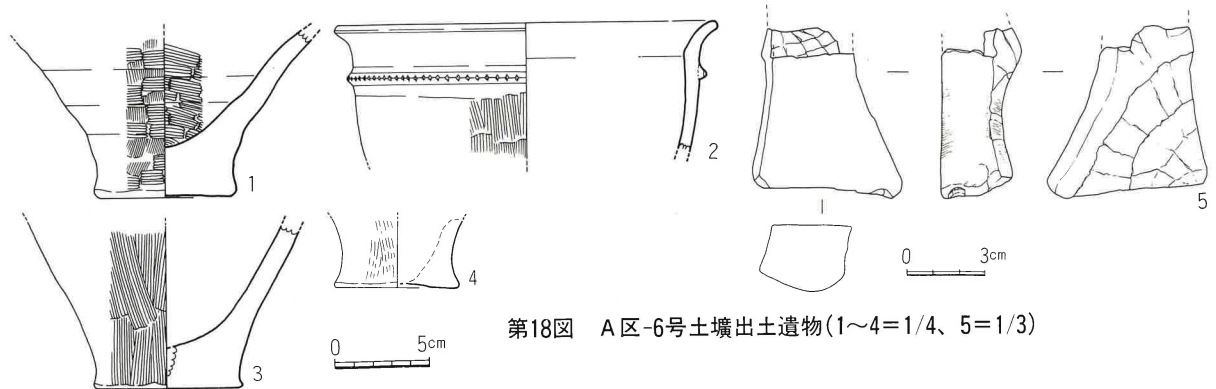
第16図 A区-4・5号土壙出土遺物(1/4、8・9=1/3)



第17図 A区-6号土壙 (1/30)

A区-6号土壙 (第6・17・18図 →図版3・29)

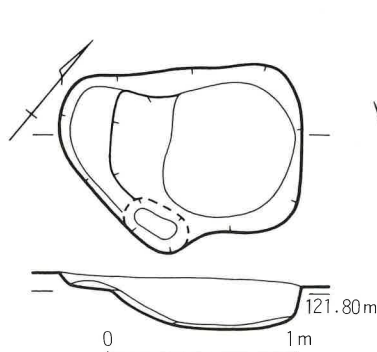
P1調査区で検出され、重複するA-1～3住に近接した小型円形の土壙である。西北半の片側のみが袋状に張り出した特異な形態をしている。袋の方向がA-1～3住の遠心方向と一致するので、そのいずれかの円形堅穴住居の柱並びと壁の間に設けられた屋内貯蔵穴の可能性が高い。規模は長軸長105cm、短軸長88cmで、検出面からの深さは64cmである。埋土はその深さにもかかわらず分層できない単一の暗褐色土で、大きく割れた土器片と1～2cm大の黄色土ブロックを多量に含む。遺物は一括して土とともに短期間に廃棄されている。1は壺の底部片、2は甕Bの口縁部、3・4は甕の底部である。5はよく研ぎこまれた頁岩製の砥石の破片である。土器・石器ともに破損し、土器は使用痕跡の明らかなものが多いので、この屋内貯蔵穴を埋め戻す際にすてられた生活廃棄物の一群であろう。この土壙の廃絶時期は、土器の特徴からみて弥生時代前期末で、A-2住かA-3住にともなった可能性が最も高い。(旧C地区土壙20)



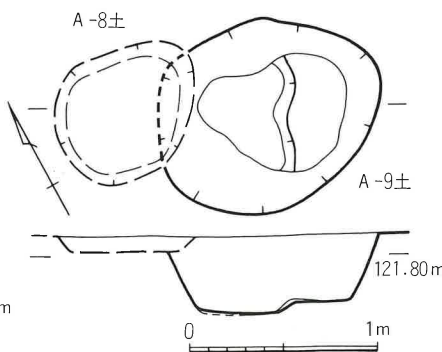
第18図 A区-6号土壙出土遺物(1～4=1/4、5=1/3)

A区-7号土壙 (第19・21図 →図版3)

P1調査区で検出された不定形で底部に段のある皿状の土壙である。規模は長軸長133cm、短軸長86cmで、検出面からの深さは29cmである。埋土は単一の炭片と焼土・土器片を含む暗褐色土で、黄色土ブロック(基盤層の土)がかなり含まれる。生活廃棄物を捨てて埋没したと思われる。1は高坏の口縁部で、その形態から弥生時代中期初頭と推定される。(旧C地区土壙21)



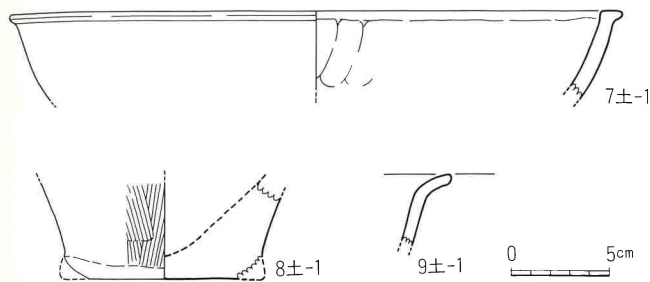
第19図 A区-7号土壙(1/40)



第20図 A区-8・9号土壙(1/40)

A区-8・9号土壙 (第20・21図 →図版3)

Q1調査区で検出された、どちらも不定形で小型の土壙である。A-8土壙をA-9土壙が切っている。A-8土壙からは1の甕底部片が、A-9土壙からは1の鉢の口縁部が出土した。土器の時期から弥生時代前期末と考えられる。(旧C地区土壙23・22)



第21図 A区-7・8・9号土壌出土遺物(1/4)

A区-10号土壌(写真3、第22・23図 →図版3・29)

P0調査区で検出された大型円形袋状の土壌である。その形態からみて貯蔵穴として作られたものと推定される。規模は長軸長154cm、短軸長140cmで、検出面からの深さは52cmである。

土壌の底部には貯蔵穴として使用中に堆積したと思われる8層が薄く広がり、その上に6・7層が西側から一方的に流れこんだ状態で堆積し、その後に土器片をかなり含む1～5層が堆積している。埋没状態は土層のなかに炭片や黄色土ブロックをかなり含む点から、短期間に埋められたものであろう。土器はいずれも2～4層中から破片となって散在している。1・2・3は、突帯をもつ壺B、4・5・6も壺の口縁部と考えられる破片で、いずれも刻目を施す。7も壺の底部片である。廃棄された土器の殆どが壺の破片であることと、壺でありながら二次加熱を受けて、赤変したり煤が付着している。また、8は6層出土の完形のサヌカイト製打製石鏃である。以上の土層と遺物はこの貯蔵穴を埋め戻す際にすてられた生活廃棄物の一群と評価できる。廃棄の時期は壺Bの形態からみて弥生時代前期末になるだろう。(旧C地区土壌49)

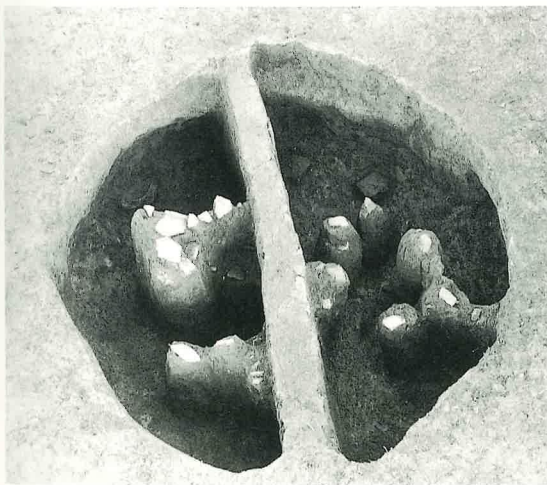
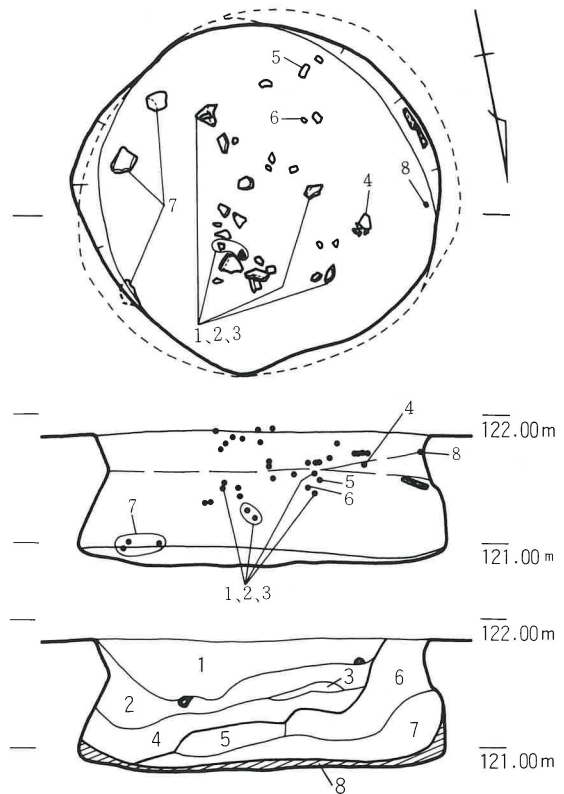
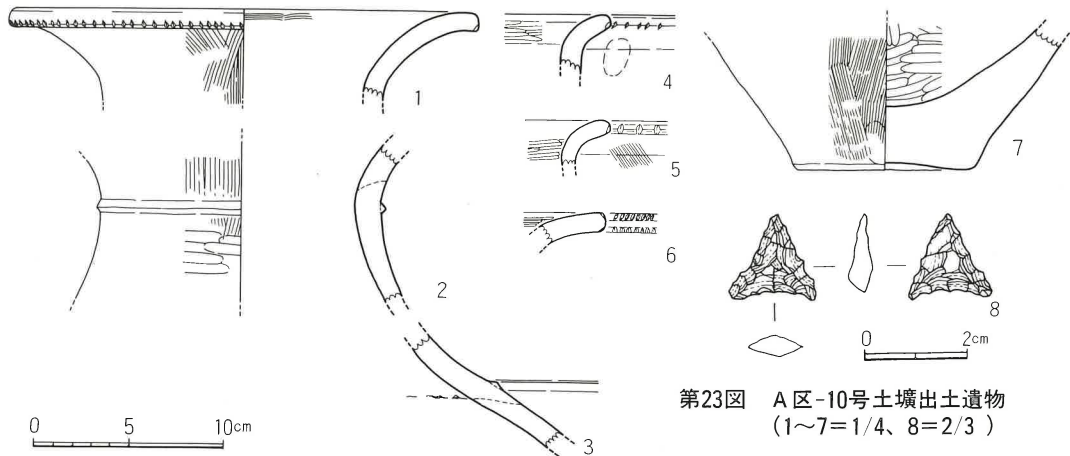


写真3. A区-10号土壌遺物出土状態(西から)



- 1層: 暗茶褐色土(焼土・炭片含み、黄色土ブロック多い。)
 - 2層: 明黒褐色土(焼土・炭片含み、黄色土ブロック少し含む。)
 - 3層: 暗茶褐色土(炭少しと黄色土ブロック多く含む。)
 - 4層: 暗黒褐色土(炭片多く、黄色土ブロック少し含む。)
 - 5層: 明茶褐色土(焼土・炭・黄色土ブロック少し含む。)
 - 6層: 明黒褐色土(炭片と黄色土ブロック少し含む。)
 - 7層: 暗黒褐色土(炭片と黄色土ブロック少し含む。)
 - 8層: 灰色がかった粘質の淡黒褐色土
- 1～5層が土器片を多く含む。

第22図 A区-10号土壌(1/30)



第23図 A区-10号土壌出土遺物
(1~7=1/4、8=2/3)

A区-11号土壌（写真4、第24~26図 →
図版3・29~31）

Q19交点で検出された大型円形の袋状土壌で、壁の側面に数箇所の深浅さまざまな穴が掘られている（第24図）。規模は長軸長193cm・短軸長178cm、底面は平坦で、深さは検出面から142cmほどである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。なお底面中央には浅い皿状の凹を認めたが、袋状貯蔵穴でしばしばみられる中央ピットほどははっきりしていない。

使用状態は、まず底面に堅くしまった19層が形成される。この層は使用中に繰り返し踏まれて形成された最初の床面形成層で、遺物はまったく含まない。次に底面の壁ぎわに18層が堆積し、その上面が堅くしまってふたたびボールの底状の二次床面が形成されている（A層）。ところでこの18層は黄褐色土で、この土壌が掘りこまれた基盤の土そのものである。おそらく壁の側面に穿たれた穴からの排出土であろう。つまり壁に穴をほってその土で床を作る改修がおこなわれているのである。側面の穴がどのような機能をもつのか不明だが、このような改修はこの時期の大型貯蔵穴ではしばしば認められ、弥生時代中期後半の貯蔵穴でも知られている。なお18層中からは土器の細片とともに27と29の完形の磨石が検出されている。まだ使用に耐える石器であり、埋納の可能性はある。

17層から1層までは使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は中位と下位に二度の遺物一括廃棄が認められることである。まず下位に黒褐色の16・17層が堆積する。この層では炭片と土器片が多量に検出された。

1・2・4・5・7・11・12の壺、15~17・21~22・24の甕、20の鉢などが、いずれも破片で出土し、完形に復元できるものはなかった。甕の大部分には煤が付着して被熱した使用痕が残り、日常生活用具を一括廃棄したものと考えられる。



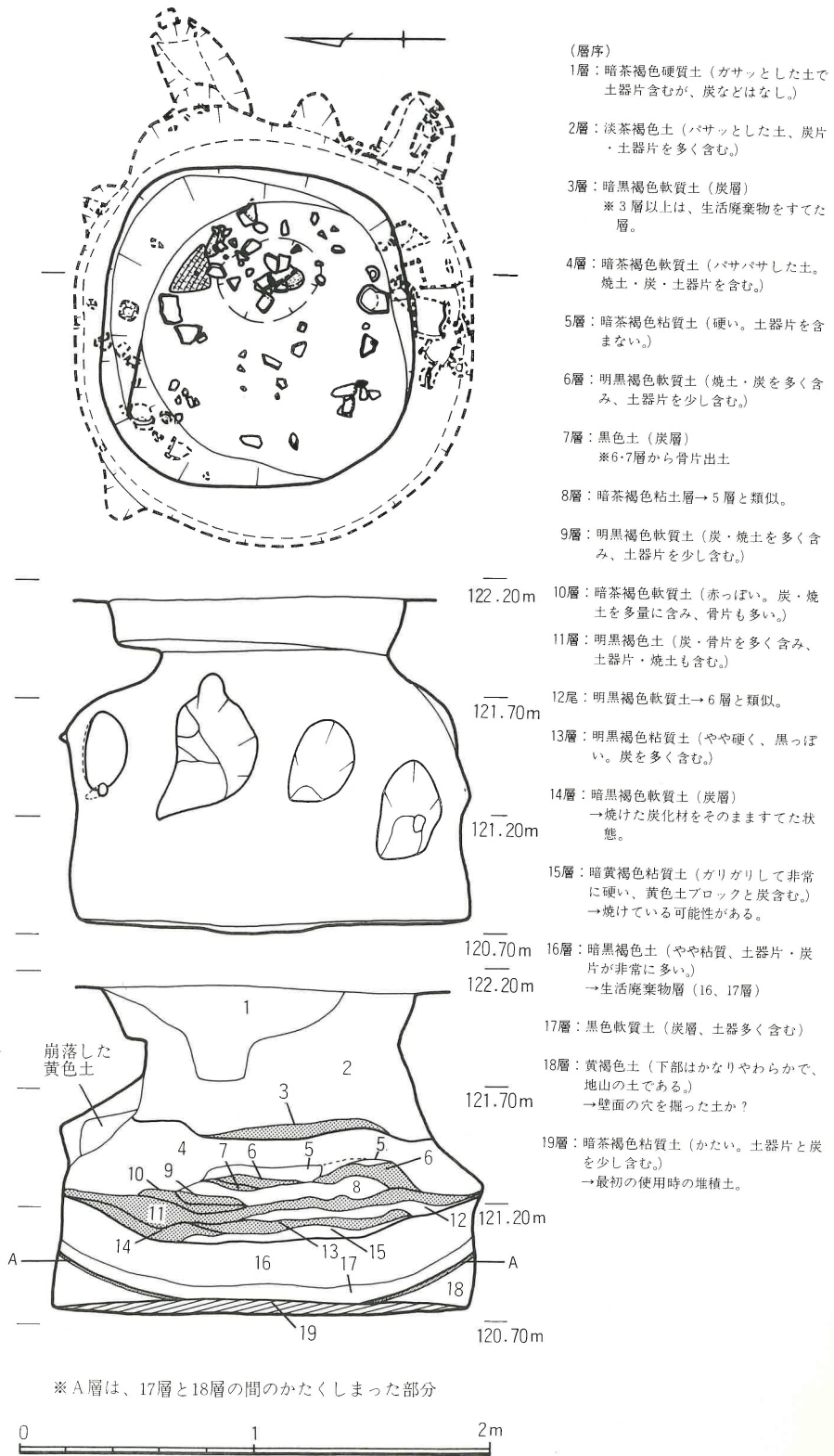
写真4. A区-11号土壌の側面の穴（西から）

次の中位の15層から4層までは互層をなして堆積する。最初に廃棄された15層はガリガリと非常に堅く、火を受けた土が持ち込まれた可能性がある。その上の14層は炭化材をまとめて捨てたような炭層である。13層から5層までは少量の層単位が積み重なったもので、中央が次第に高くなっていく様子がみてとれる。おそらく土壌の上から投棄を繰り返したものであろう。最後にパサパサした4層が厚く堆積して、中位の遺物一括廃棄が終わっている。その中は全体に炭化材や炭片・焼土片を多量に含むほかに、13層では炭化した微量のマメ類と少量のコナラ属のどんぐりが出土し、10・

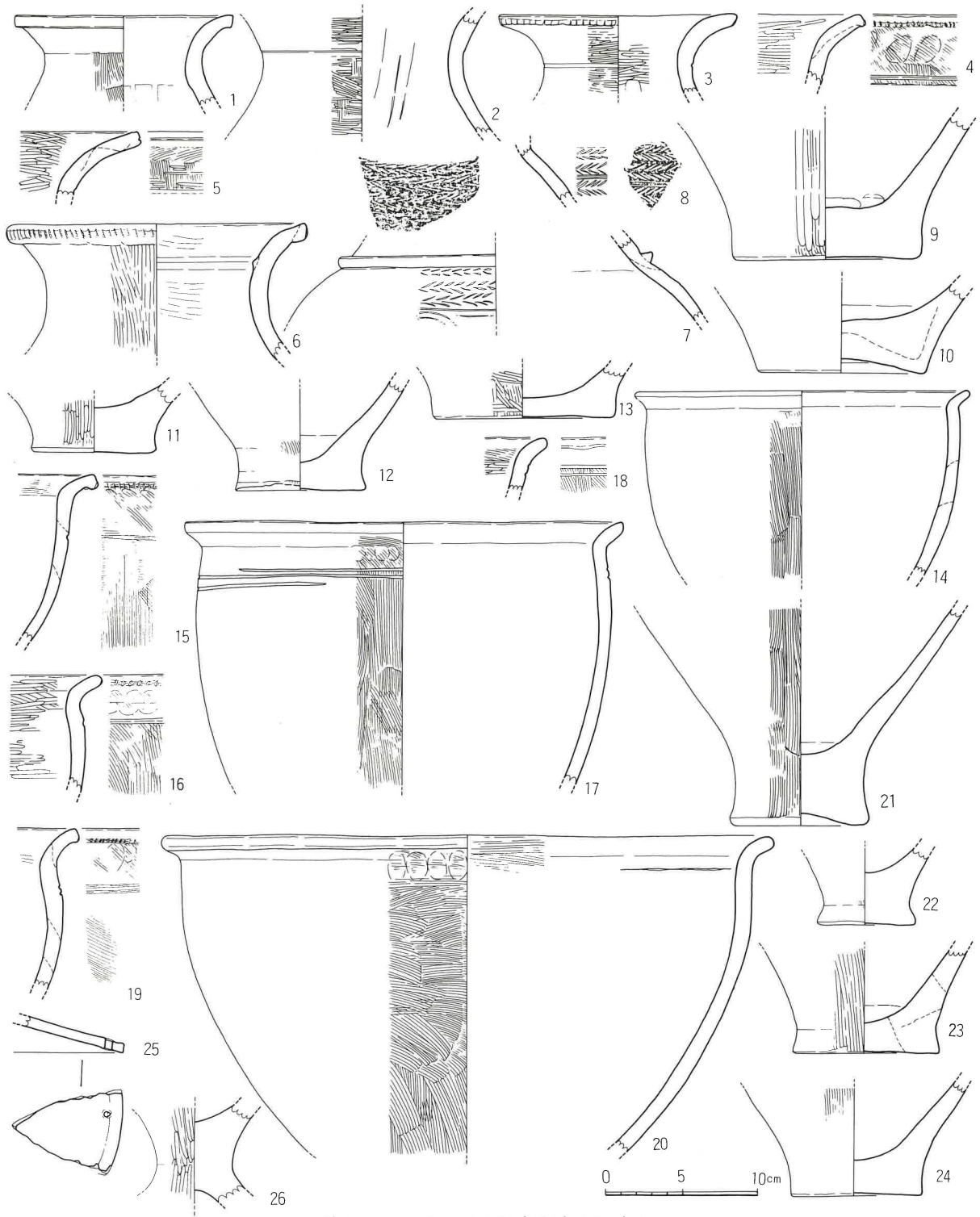
11層では細片化した動物の骨片がかなり検出された。いずれも食物残滓と推定される。さらにそれに伴って3・6・9・10・13の壺、14の甕を破片で検出した。壺が多いのが特徴で、甕には使用痕が明瞭である。以上の中位の廃棄は、日常の食事の残りがすの投棄がこの貯蔵穴の所有者によっておこなわれた結果とみる解釈も可能であるが、大量の廃棄が間層を挟まずに累積する点と、廃棄された土器の器種構成も壺が多く甕が少ないことからみて、多量の食事を用意して壺を中心に使用した非日常的な短期間の行為の結果である可能性が高い。後者の場合はおそらく一壑穴住居に暮らす世帯の規模をこえた参加者によるもの、例えば住居改築の際の参加者全員による祭祀と共食などとなろう。

埋没の最後は、炭層の3層が投棄されて、軟らかい2・1層が堆積して終る。遺物は少なく8の壺小片と28の磨石の破片が含まれるのみである。遺物の少なさからみて、中位の遺物一括廃棄の後、埋め戻された可能性がある。

出土土器には金雲母を含む胎土を使用した搬入品が多い。下位の4の壺・15・17・20の甕と鉢、中位の9の壺、18の甕などがそれにあたり、在地品と共存する。また6～8のような周防・豊前系の壺を含む他に、甕Aでは二条沈線がめだち、17には回転台を利用して螺旋状に施紋した二条沈線を認めた。中位と下位の間には廃棄の時期に大きな差はなく、土器全体からみて弥生時代前期末にあたる。(旧C地区土壙72)



第24図 A区-11号土壙 (1/30)

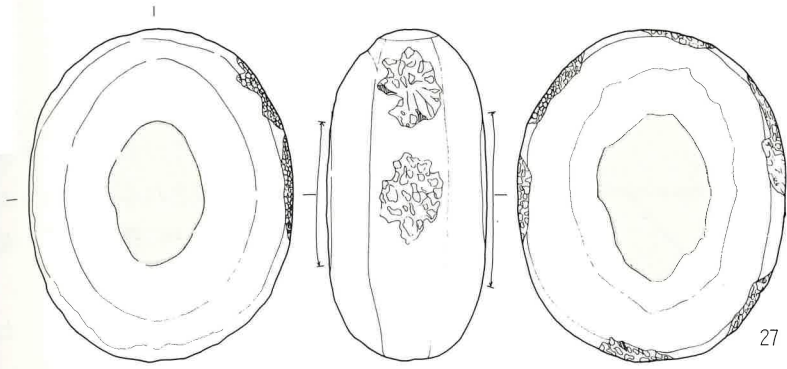


第25図 A区-11号土壌出土遺物① (1/4)

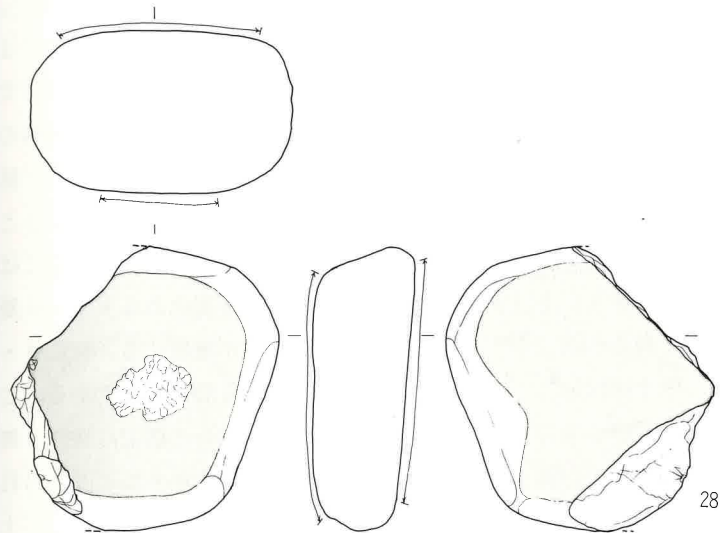
A区-12号土壌 (第27・28図 →図版4・31)

P19調査区で検出された小型円形の袋状土壌で、規模は長軸長97cm、短軸長93cmである。底面はおおむね平坦で、検出面からの深さは56cmである。その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。埋土は三層に分かれ、2層に土器片・炭・焼土を多く含むが、遺物はいずれも破片化して散在する。生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。1の磨石は半分に割れた廃品のかたわれである。図示できないが土器の小片から判断して、

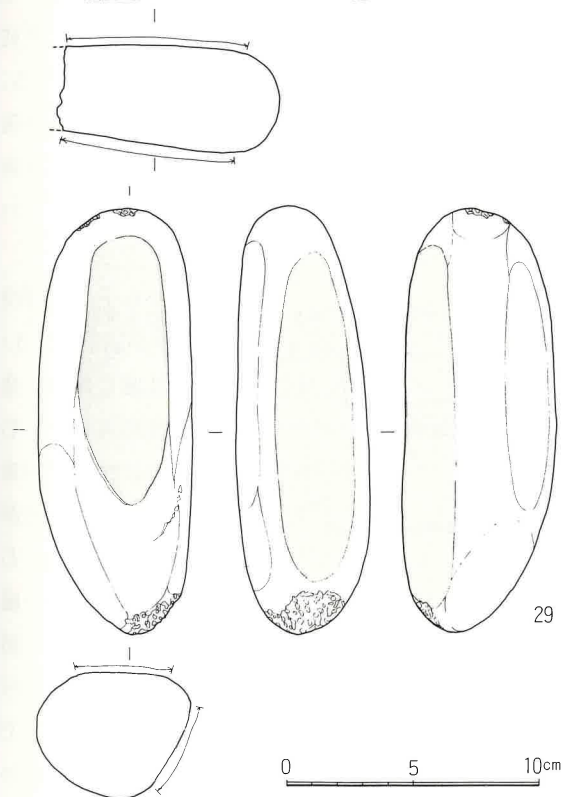
土壌の時期は弥生時代前期末とみられる。(旧C地区土壌75)



27

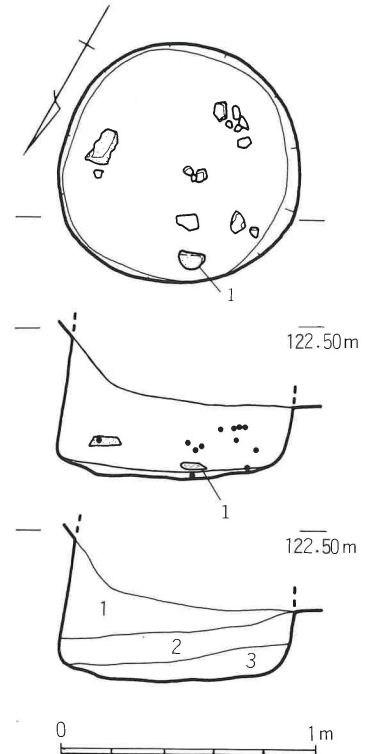


28



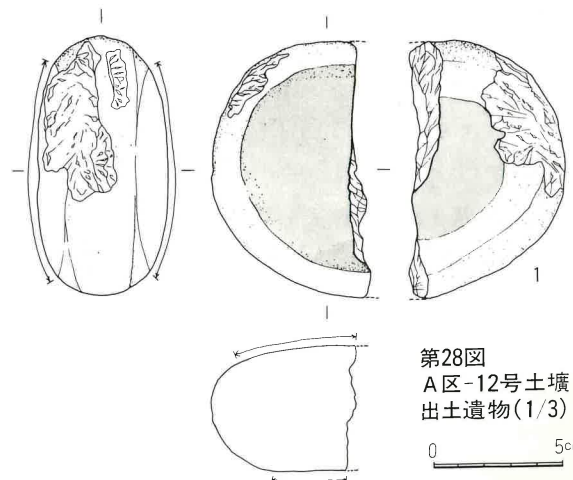
29

第26図 A区-11号土壌出土遺物② (1/3)



1層：暗褐色軟質土（黄色土小ブロック、炭・土器片含む）
2層：暗褐色軟質土（焼土・土器片多く含む）
3層：暗黄褐色軟質土（土器片・炭少し含む）

第27図 A区-12号土壌(1/30)

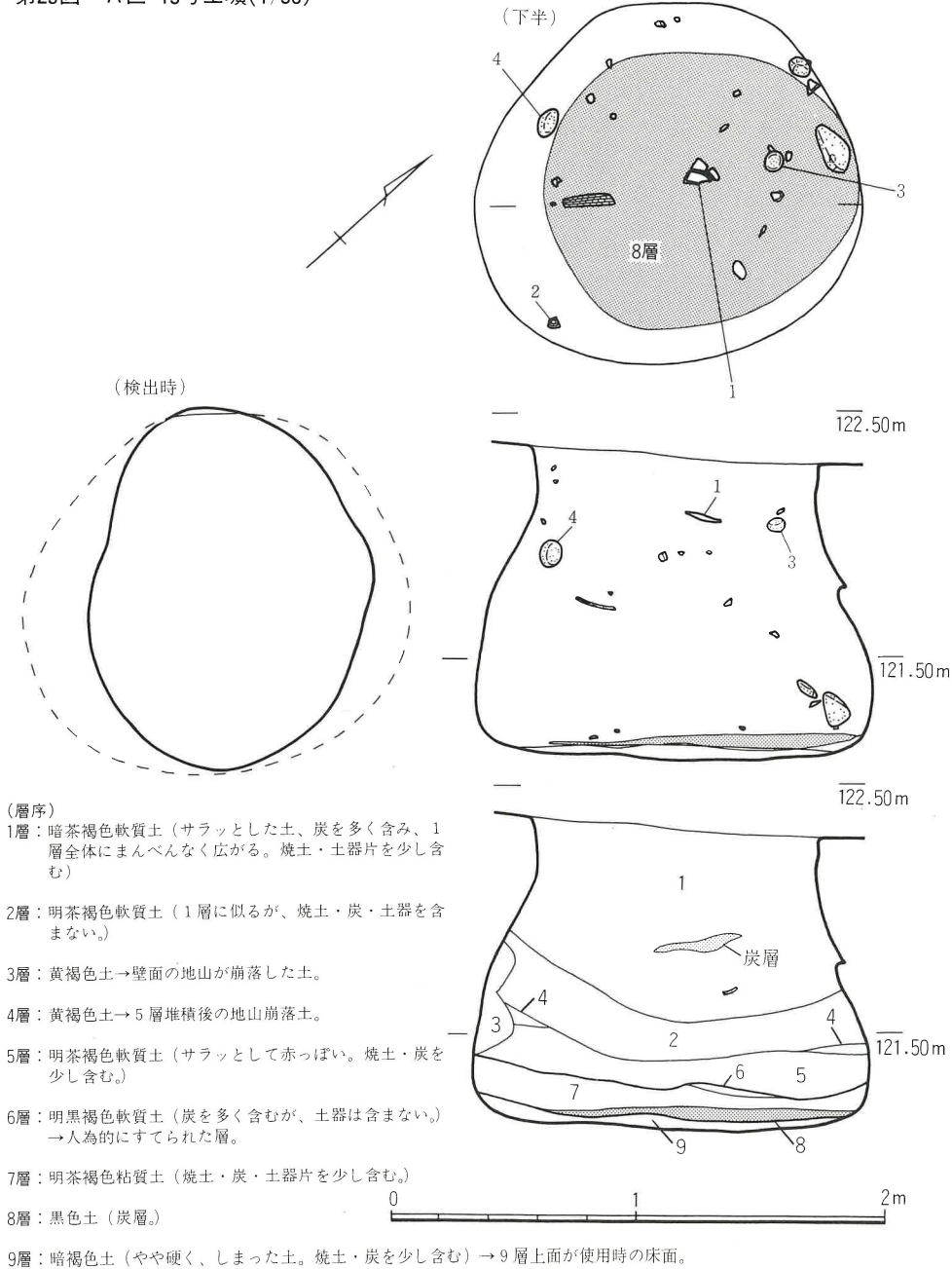


第28図
A区-12号土壌
出土遺物(1/3)

A区-13号土壌 (第29・30図 →図版4・31)

P18調査区で検出された大型円形の袋状土壌である。規模は長軸長158cm、短軸長145cmで、底面は平坦で、検出面からの深さは128cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。使用状態は、まず底面

第29図 A区-13号土壌(1/30)



によくしまった9層が形成される。この層は使用中に踏まれて形成された床面形成層で、炭・焼土を含むが、土器はまったく含まない。

7層から1層までは使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は下位に遺物一括廃棄が認められることである。その下位には黒褐色の8・7・6層が堆積する。特に8・6層は炭層である。これらの層では炭片と焼土片が多量に認められるほか小礫を含む。土器片は少なく2の甕底部片以外は細片である。貯蔵穴の使用停止直後に生活廃棄物を一括廃棄したものと考えられる。

5層から上は、埋没途中で壁が崩落して3・4層が堆積したり、全体に土質がさらっとした軟らかい状態であるから、比較的長時間かけて堆積が進行したものと推定される。少量

の炭片・焼土片・小礫・土器片が含まれている。1の壺破片と3・4の完形の磨石が1層に含まれていた。5層以上の堆積の特徴は、遺物量が少なく長時間かけて埋没した点にあり、おそらくこのA-13土壌付近は住居から離れた場所であったのであろう。

出土遺物のうち、1は頸部に三角突帯と羽状文を施す壺Bで、在地の胎土で作られたものである。2は小型の甕で、あるいは蓋になる可能性もある。3・4は地元で産出する安山岩製の磨石で、4は敲打痕が顕著である。いずれもまだ使えそうであるが廃棄されている。

土器からみて埋没の時期は弥生時代前期末と推定される。（旧C地区土壌99）

A区-14号土壙（第31・32図 →図版4・31）

P17ライン上で検出された大型長円形の土壙である。規模は長軸長190cm、短軸長152cm、検出面からの深さは深いところで約50cmである。次のように土器焼成坑の可能性が指摘できる。

土壙そのものの形状は断面皿状で底面に段がつく。いったん深く掘削して、すぐに基盤層の土である黄褐色土（5層）を埋めている。この層の上面は焼けておらず、また5層と4層の間に掘り直しの痕跡である破壊境界面が認められるので、おそらく二次面の炉床は次の炉床成形の際に掘りとられたものであろう。次の二次面は、上記したように底面を整えたのち、焼土ブロックを多量に含む暗褐色土（7層）を土壙の西面に貼りつけて炉床を形成する。その側面はよく焼けている。さらにその後南北両面に暗茶褐色土（6層）を貼りつけて三次面の炉床を形成している。以上都合二回の改修がおこなわれ、計三面の炉床をもつ燃焼施設であることが判明する。

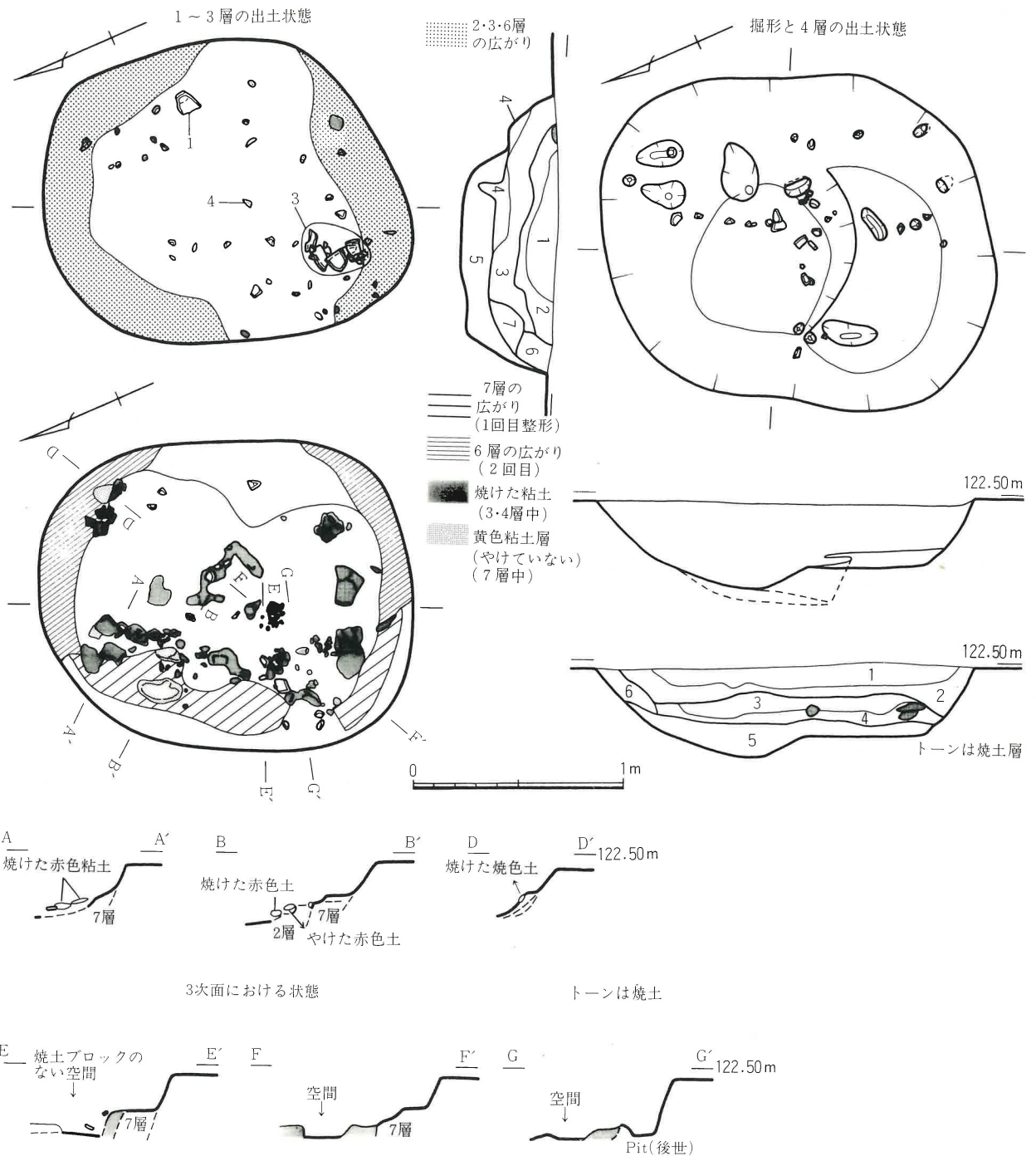
さて4層以上の堆積は三次面の廃絶状態を示している。まず3・4層は灰色がかった層で、拳大から人頭大の焼けた粘土の固まりと炭片が多量に含まれている（第31図中）。この粘土は、二次面の7層に含まれる焼けていない黄色粘土と同質のものである。土器片は細片が少量含まれるのみで、3・4層は三次面の炉床使用中の堆積物とみられる。その中の焼けた粘土の固まり（焼土ブロック）を検出する際に、灰質土（3層）のつまる焼土ブロックのない径30cmほどの空間が何箇所か認められた。どうしてこのような状態になるのか不明だが、土器を据えるのに不都合はない形状である。

以上の三次面の炉床の廃絶状態からこの土壙の機能を推理すると次のようになる。①灰層中の焼土ブロックの粘土は、二次面の壁に貼られた7層にもちいられた粘土と同じものである。炉の残骸である可能性が高いので、二次面の炉の壁は本来まだ上にのびていたと考えられる。②土壙全体が炉として機能したことは明らかで、後世の削平を考慮すると、かなり深い位置に炉床があることになる。③さらに①のように壁体があったとすれば、内部に土器が置かれた場合、それは生活面からかなり下に位置することになる。そうすると火力の調節をするための焚き口施設が検出されないことが不自然である。このような構造の土壙が炊飯施設であるとするならば、焚き口施設は不可欠である。それがないから、この土壙は炊事施設ではなく、壁体を立ち上げて密閉する形式の一種の窯であった可能性が高くなる。金属関係の遺物が出土していない点を考慮すると、内部に土器が置かれたとしても不自然でない遺構の状態からみて、土器焼成坑であった可能性が最も高い。そうすると少なくとも3回の操業がおこなわれたことになる。

第30図
A区-13号土壙出土遺物(1・2=1/4、3・4=1/3)

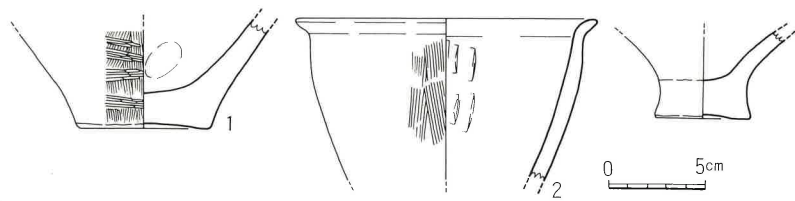
2層から上は炉廃絶後の堆積層で土器片・炭・焼土を多く含むが、遺物はいずれも破片化して散在する。図示した遺物はこの1・2層から出土した。1は壺底部片、2の甕は使用痕が明瞭である。3の甕底部は、蓋かもしれない。いずれも日用品で、この土壙で焼かれた土器ではないと思われる。したがって廃絶後は生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。4は1層出土のサヌカイト製打製石鏃で、無茎平基重さ5グラムの大型

図版4・31のA区-14号土壙の断面図と平面図を示している。断面図は上部に土壙の開口部があり、内部には段状の炉床が形成されている。平面図は長円形を示している。スケールは5cmである。

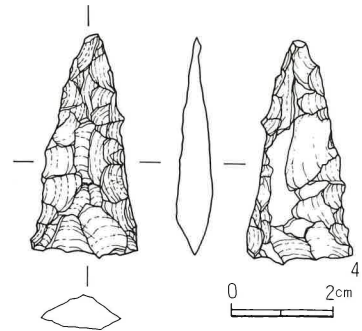


- 1層：褐色軟質土（土器・炭・焼土片少し含む）…自然堆積層
- 2層：暗褐色軟質土（サラッとしている。土器・炭・焼土片少し含む、部分的に焼土片が、集中するところがある。）
- 3層：黒色灰質土（大型の焼土ブロックが入り、小さな焼土ブロックが全体に広がる）
- 4層：灰色黒土（やや粘質、黄色土地山ブロックが、ところどころに入る。焼けていない。）
- 5層：黄褐色土（少し黒っぽい、焼土・炭含まず、上面は焼けていない。）→土壇掘りこみ後は整形土 →一次面
- 6層：暗茶褐色土（焼土・炭多く、北と南にはりつけている。）→三次面
- 7層：暗褐色土（黒色土ブロック・焼土ブロック多量に混じる。西側にはりつける。側面は焼けている。はく落した焼土ブロック入る）→二次面

第31図 A区-14号土壇(1/30)



第32図 A区-14号土壙出土遺物(1~3=1/4、4=2/3)



品である。土壙廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。

(旧C地区土壙110)

A区-15号土壙(第33・34図 →図版31)

Q1調査区で検出された北の一部が調査区外につづく、大型円形の竪穴状の土壙である。規模は東西長129cm、南北長80cm以上で、検出面からの深さは48cmである。底面は平坦ではなく、中央がくぼむ。

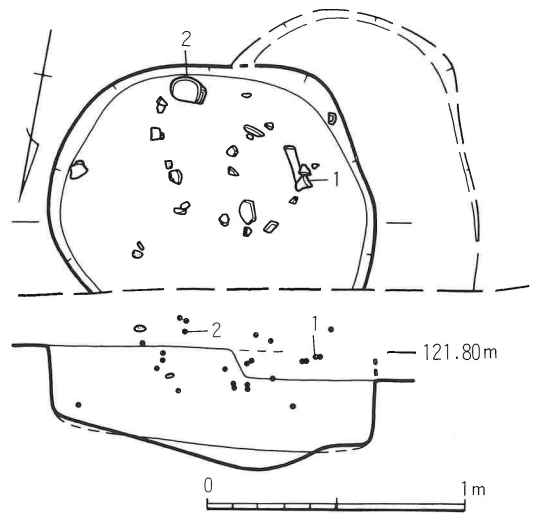
埋土は炭・焼土と土器の小片を含む暗褐色土の単一層(1層)で、その中には1・2の甕底部片が含まれていた。いずれも被熱して使用痕が顕著な日常品である。この土壙は、廃絶後に生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。

土壙廃棄の時期は、以上の出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壙175)

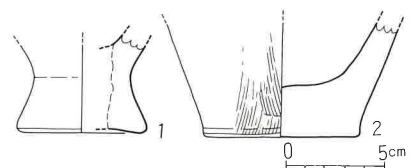
A区-16号土壙(第35・36図 →図版5・31)

Q1調査区で検出された小型円形の底の丸い皿状の土壙で、A-17土壙と接するが切り合い関係は不明である。その規模は径約77cmで、検出面からの深さは29cmである。

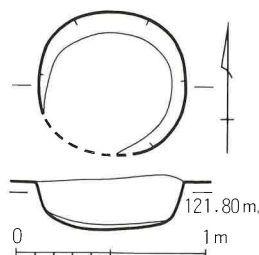
埋土は、炭・焼土と小礫を含むパサパサした黒褐色土の単一層(1層)で、埋土が厚いのに分層できない点から考えて、短時間の埋没すなわち埋め戻しがおこなわれた可能性がある。A-24土壙やA-25土壙の埋没状態とよく似ている。土器は出土せず、唯一1のサヌカイト製の打製石鏃を1点検出した。この石鏃は無茎凹基の軽量品(0.8グラム)である。ほかの時期の遺物を全く含まないことと、打製石鏃が出土したことから、この時期の遺構と認定した。(旧C地区土壙140)



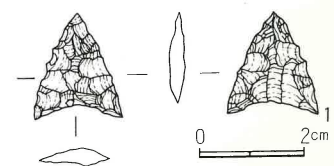
第33図 A区-15号土壙(1/30)



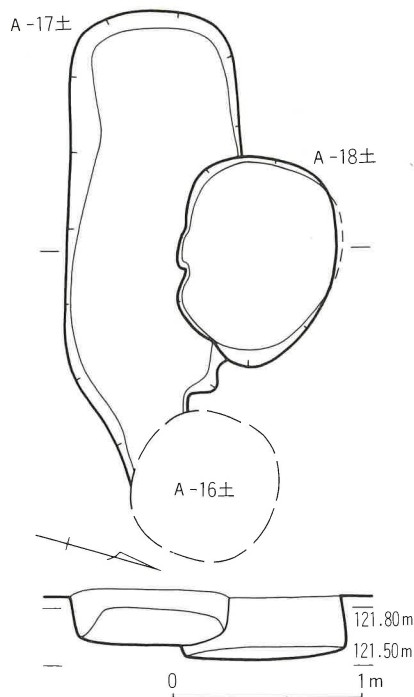
第34図 A区-15号土壙出土遺物(1/4)



第35図 A区-16号土壙(1/40)



第36図 A区-16号土壙出土遺物(2/3)



第37図 A区-17・18号土坑(1/40)

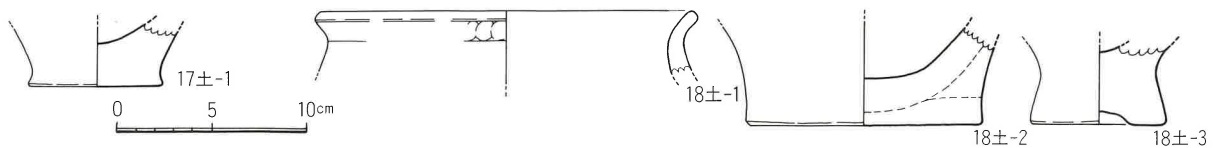
A区-17・18号土坑(第37・38図 →図版5)

Q1調査区で検出された、切り合った二つの土坑で、A-17土坑はA-18土坑に切られる。

A-17土坑は船底形で、規模は長さ247cm、幅90cm、検出面からの深さは31cmである。その底面は平坦である。埋土は炭・焼土と土器片を含む暗褐色土の単一層(1層)で、2~3cm大の基盤層に由来する黄色粘土の小ブロックをかなり含み、埋め戻された可能性がある。その中から1の甕底部片が出土した。

A-18土坑は小型円形の袋状土坑で、規模は長軸長109cm、短軸長82cm、検出面からの深さは34cmである。その底面は平坦である。形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。埋土は硬い黒褐色土の単一層(1層)で、炭・焼土と小土器片を含むが、とりわけ炭と焼土の入り方が著しい。A-17土坑同様に、2~3cm大の基盤層に由来する黄色粘土の小ブロックをかなり含み、短期間に埋没つまり埋め戻された可能性がある。埋土中からは、1の甕口縁片、2・3の甕底部片が検出された。2は壺の可能性もある。いずれも破片化して混入していた。

埋没の時期は、出土土器からA-18土坑が弥生時代前期末と推定され、A-17土坑はそれ以前である。(旧C地区土坑26・25)



第38図 A区-17・18号土坑出土遺物(1/4)

A区-19号土坑(写真5、第39・40図 →図版5・31)

Q1調査区で検出された長円形の土坑である。その規模は長軸長193cm、短軸長136cm、検出面からの深さは55cmである。西壁の傾斜は緩やかで途中に段がつき、底面はやや高低がある。埋没以前に使用された痕跡はなく、形状と底面の状態からみて、長く使用されたものではない。

4・3層と1層が生活廃棄物の堆積層で、上位の1層に遺物の一括廃棄が認められる。まず黒褐色の4・3層が堆積する。この層では炭片・焼土と土器片が検出された。2層は黄色土ブロックが多く含まれ、別の穴を掘る際の排出土を捨てたような状態であった。次にふたたび黒褐色の1層が堆積する。この層では炭片・焼土片と土器片が多量に検出された。特に東隅では2の壺、3・4の甕の大型破片がつぶれた状態で検出され、一括廃棄されたものとみられる。また3層以上では土器片が全体に散在した状態で含まれていた(写真5)。1の壺、5~10の甕で、いずれも破片で出土し完形に復元できるものはなかった。甕の大部分には煤が付着して被熱した使用痕が残り、日常生活用具を廃棄したものと考えられる。

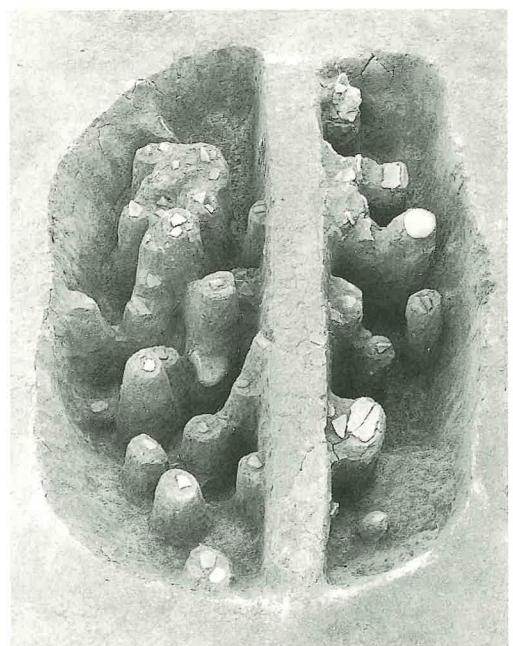
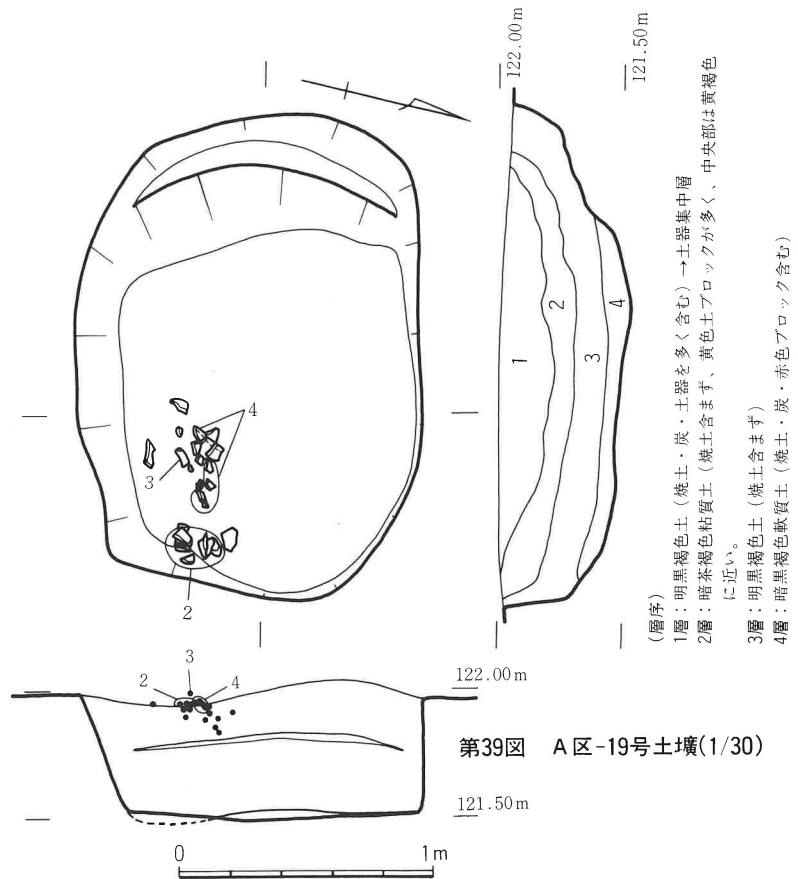


写真5. A区-19号土坑遺物出土状態(西から)

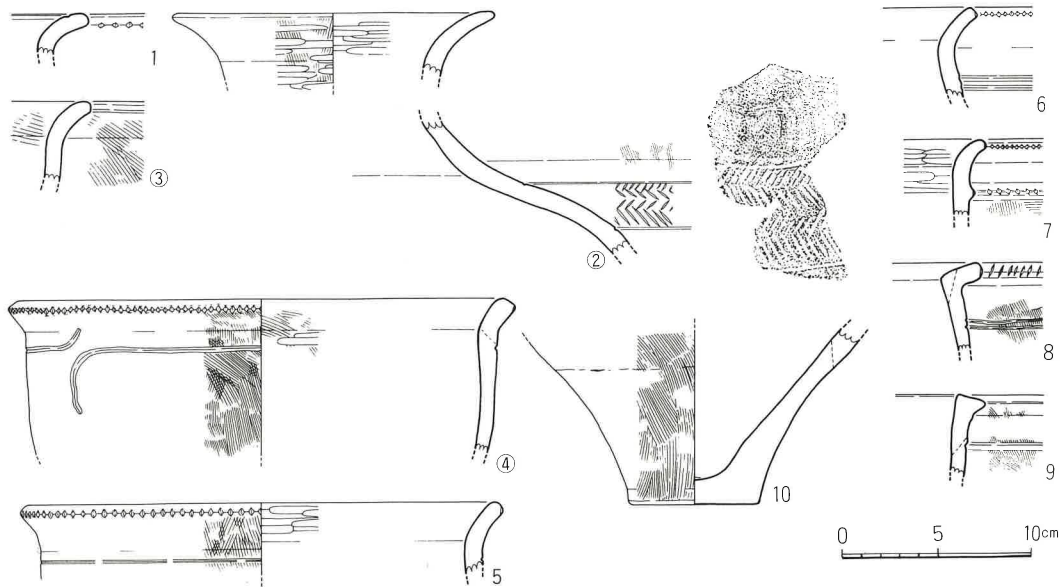
出土土器のなかで、1層遺物一括廃棄に含まれる4の甕は金雲母を含む胎土を使用した搬入品である。その甕の一条沈線は、上下に離れて接点がない文様である。2の壺の肩部には、沈線で区画されたへら描きの羽状文が施される。また如意形口縁の系譜をひく甕のほかに9のような逆L字形口縁の甕Cもふくまれ、6・8のような二条沈線の甕Aもある。

土壇埋没の時期は土器全体からみて弥生時代前期末にあたる。

(旧C地区土壇29)



第39図 A区-19号土壇(1/30)

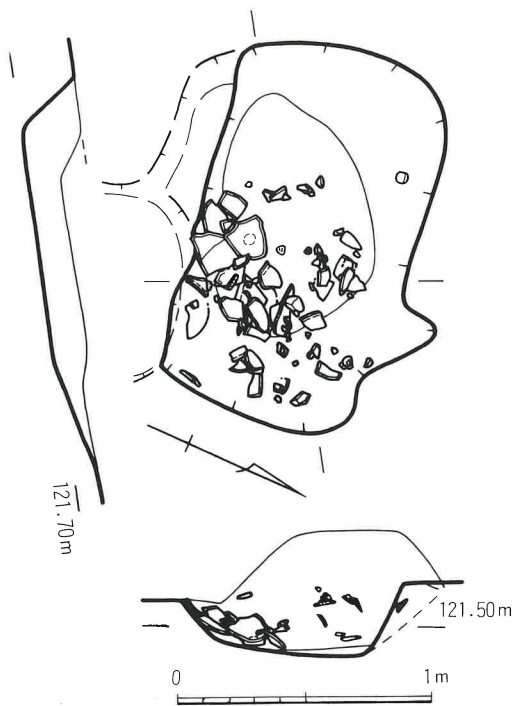


第40図 A区-19号土壇出土遺物(1/4)

※○数字は、一層集中

A区-20号土壇 (第41・43図上、写真6 → 図版5・21・31)

Q1調査区で検出された長円形の土壇で、A-21土壇とA-81土壇(弥生時代中期後半)に切られている。その規模は東西長軸長153cm、南北短軸長85cmで、検出面からの深さは24cmである(第41図)。底面は皿状に近く、その機能を考える手がかりはない。また調査時にA-81土壇の一部と誤認して掘りすすめたために、埋没状態の詳細は不明である。しかしその下位に大量の土器が出土し、廃絶直後に遺物一括廃棄がおこなわれたことが判明



第41図 A区-20号土壙(1/30)



写真6. A区-20号土壙遺物出土状態(北西から)

した。

土器の出土状態は、大型の破片がまとまって投棄された状態であった。特に1・2の壺は大型の破片のままつぶれていた。1の壺は丁寧に作られているにもかかわらず、火を受けて赤く焼けている。一方2の壺には被熱の痕跡はないが、これは胎土が異なる搬入品である。壺を火に掛けるという行為を伴う点からみて、単なる生活廃棄物の投棄ではなく、なんらかの祭祀に

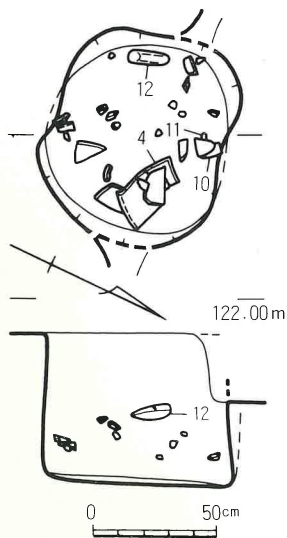
使われた土器を一括廃棄したものと推定される。

出土土器は、沈線で文様を施す壺・甕が主体で、沈線は一条である。6のような逆L字形口縁の甕Cもふくまれる。土壙廃棄の時期は、以上の出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壙144)

A区-21号土壙(第42~44図 →図版5・21・32)

Q1調査区で検出された小型円形の土壙で、A-20土壙を切りA-81土壙(弥生時代中期後半)に切られている。壁はやや内傾しており袋状と推定され、その底面は平坦である。規模は長軸長83cm、短軸長70cmで、検出面からの深さは61cmである。その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。

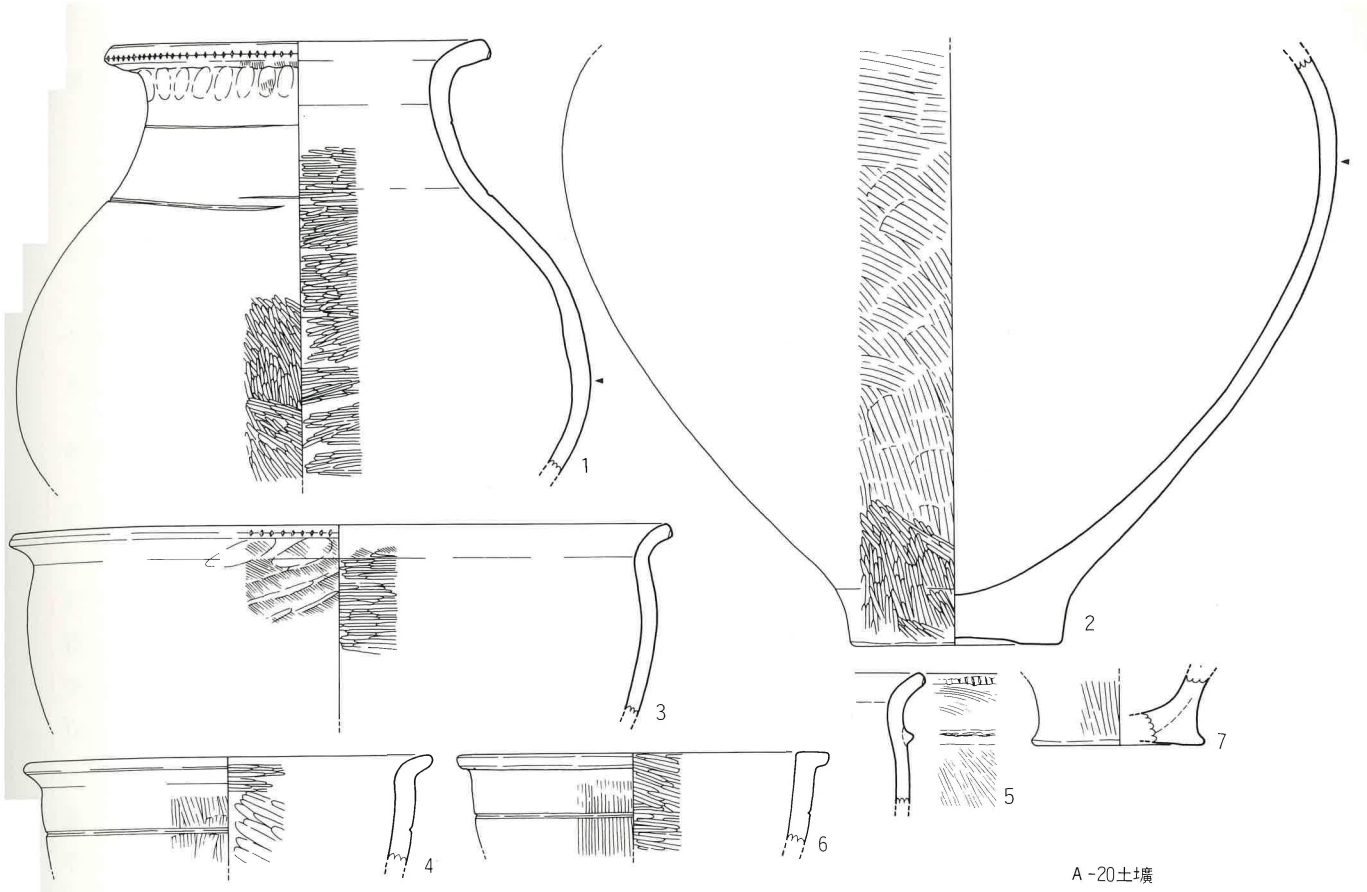
埋没状態の特徴は、下位と上位に遺物一括廃棄があることである。層序の観察をおこなっていないので詳細は不明であるが、下位では1の壺、4・8・10の甕、11の手づくねのミニチュア土器と12の磨製石斧が検出され、土器はいずれも比較的大型の破片だが、完形に復元できるものはなかった。そのうち1と10は同一個体の甕である。1の壺と4・8の甕は火を受けて赤く焼けていた。壺を火に掛けるという行為を伴う点と、11のようなミニチュア土器を伴う点からみて、単なる生活廃棄物の投棄ではなく、なんらかの祭祀に使われた土器を一括廃棄したものと推定される。



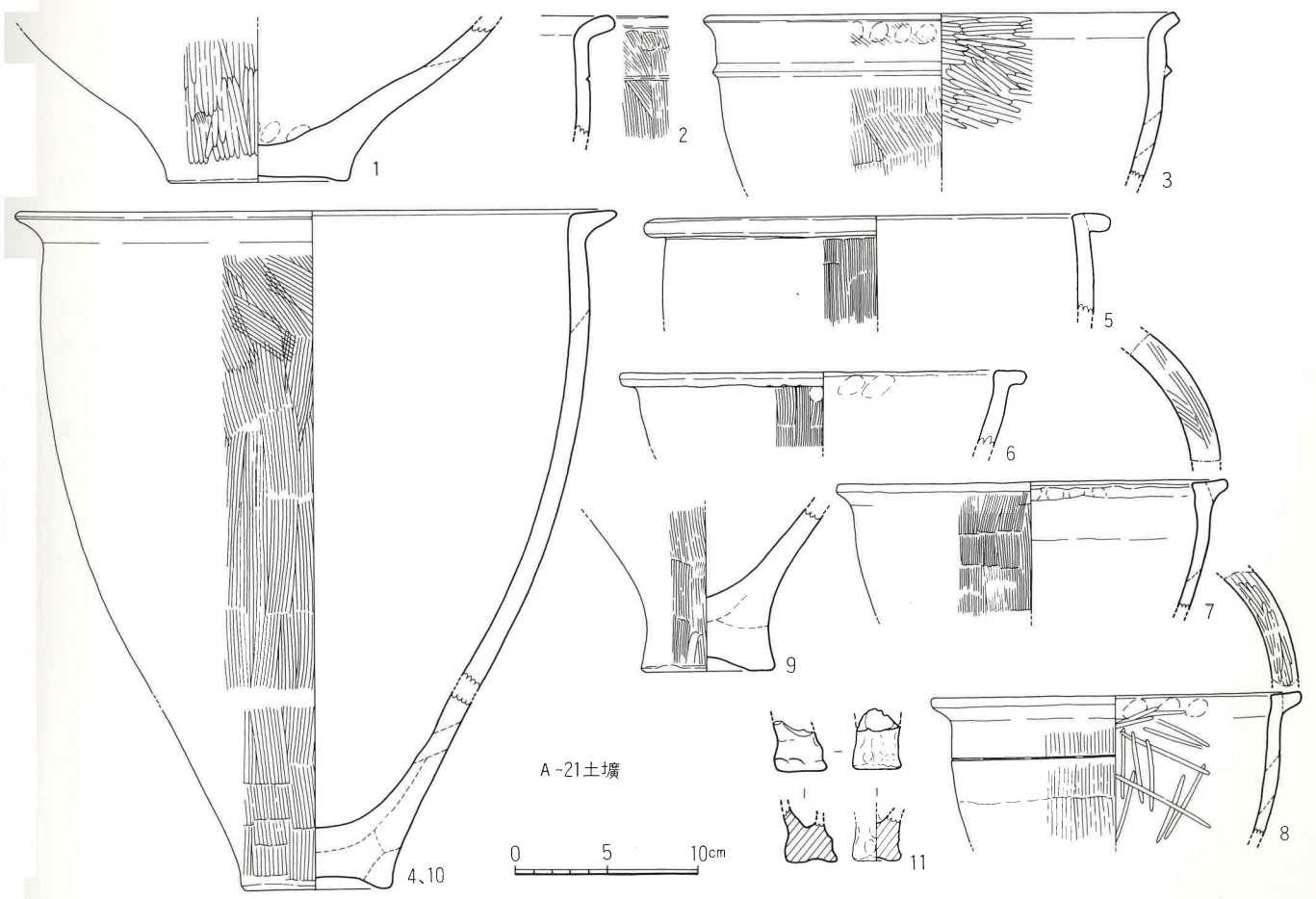
第42図 A区-21号土壙(1/30)

上位には3・6・7・9の甕の破片がまとまって出土した。いずれも被熱した使用痕が明瞭である。下位の遺物一括廃棄とどのような関係にあるか不明であるが、それほど時間を措かずに廃棄されたものとみられる。

下位の廃棄土器の様相は、切り合ったA-20土壙の廃棄遺物のそれとよく似ている。時期を異にしながらも同じ場所に同じような廃棄行為がおこなわれていることになる。出土土器は、逆L字形口縁の甕Cが主体で、沈線文様の甕Aはすでに少数派である。また土器はすべて在地産で、搬入品はない。12の石器は太形蛤刃の磨製石斧で、硬質砂岩製の完形品である。よく使い込まれており、再生不能の廃品として捨てられている。

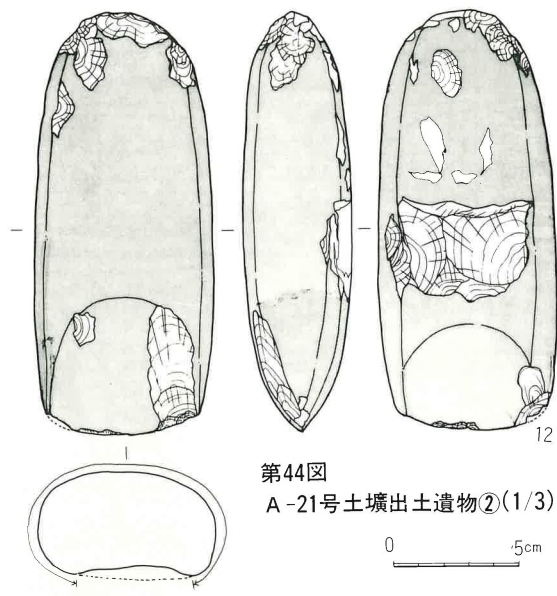


A-20土壤

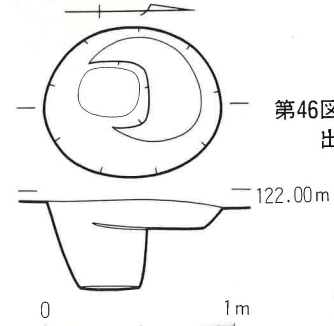


A-21土壤

第43图 A-20号土壤·A-21号土壤出土遺物① (1/4)

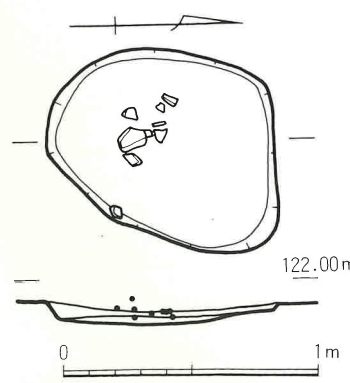


第44図
A-21号土壙出土遺物②(1/3)

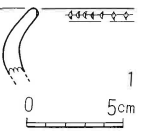


第46図 A区-22号土壙
出土遺物(1/4)

第45図 A区-22号土壙
(1/40)

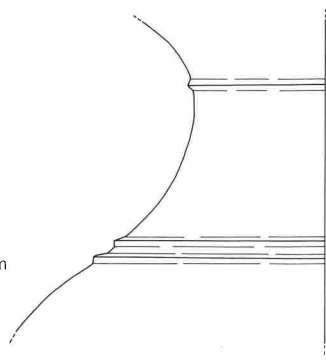


第47図 A区-23号土壙(1/30)



A区-24号土壙(第49・50図 →図版5)

Q1調査区で検出された小型円形の底の丸い皿状の土壙で、規模は長軸長102cm、短軸長90cm、検出面からの深さは34cmである。底面は掘りすぎで平坦になったもので実際には丸い。その性格は不明である。埋土はパサパサした黒褐色土の単一層(1層)で、小礫・炭・焼土と土器の細片を含む。埋土が厚いにもかかわらず分層できない点から考えて、短時間の埋没すなわち埋め戻しがおこなわれた可能性がある。A-16土壙やA-25土壙の埋没状態とよく似ている。図示できる土器は1・2の甕底部片のみである。いずれも被熱した使用痕が顕著な日常品である。廃絶後に生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。土壙廃棄の時期は、以上の出土土器から弥生時代前期末から中期初頭と推定される。(旧C地区土壙28)



第48図 A区-23号土壙出土遺物(1/4)

土壙廃棄の時期は、出土土器の特徴から弥生時代中期初頭と推定される。(旧C地区土壙143)

A区-22号土壙(第45・46図 →図版5)

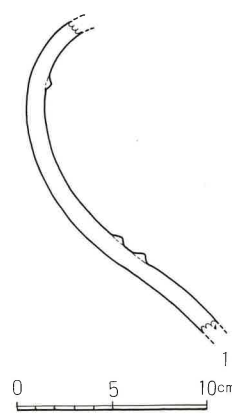
Q1調査区で検出された小型円形の土壙で、二段掘りになる。規模は長軸長92cm、短軸長77cmで、検出面からの深さは18cmである。埋土中から1の刻み目をもつ口縁部破片を検出した。土壙の性格等は不明とするしかない。他の時期の遺物を全く含まないので、1の土器からこの時期の遺構と認定した。(旧C地区土壙22)

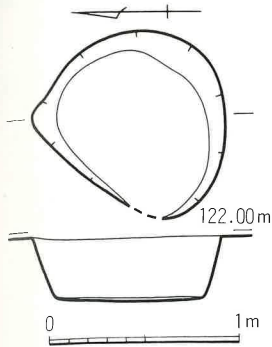
A区-23号土壙(第47・48図 →図版32)

Q1調査区で検出された不定形の土壙で、底面はやや高低がある。規模は長軸長99cm、短軸長75cmで、検出面からの深さは9cmである。底部がわずかに残るのみで、その性格は不明である。埋土はパサパサした黒褐色土の単一層(1層)で、小礫を含むが炭や焼土は全く含まない。底面からやや浮いた検出面で、1の壺の破片がまとまって出土した。その位置からみて土壙廃絶直後に廃棄されたものである。またこの壺の破片の一部は、この土壙から4mほど西に離れたA-41土壙の遺物一括廃棄の中からも検出されている。1は突帯を施す壺Bで赤彩の痕跡がある。この土器からみて土壙廃絶の時期は弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壙34)

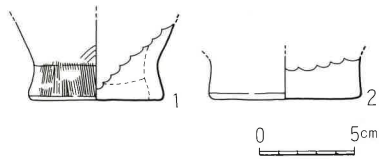
A区-25号土壙
(第51・52図 →図版6)

Q1調査区で検出された大型円形の袋状土壙で、底面は平坦である。規模は長軸長112cm、短軸長100cmで、検出面からの深さは40cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

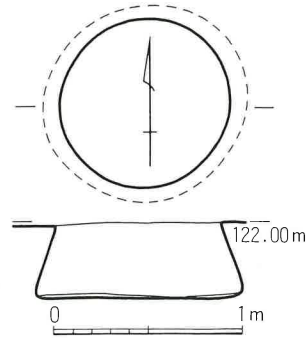




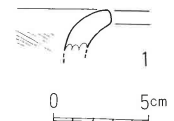
第49図 A区-24号土壌(1/40)



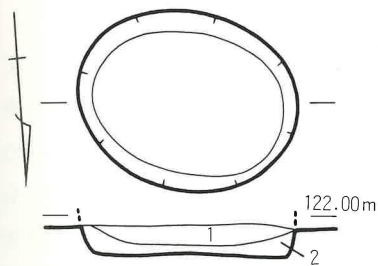
第50図 A区-24号土壌出土遺物(1/4)



第51図 A区-25号土壌(1/40)



第52図 A区-25号土壌出土遺物(1/4)



1層：暗褐色硬質土（炭・焼土・土器片少量含む）
2層：暗黄褐色粘質土（何も含まない）

第53図 A区-26号土壌(1/30)

埋土は暗黄褐色土の単一層（1層）で、炭・焼土・土器細片のほかに基盤層に由来する黄色粘土ブロックを多量に含む。埋土が厚いのに分層できない点や、黄色粘土ブロックを多量に含む点からみて、短時間の埋没すなわち埋め戻しがおこなわれた可能性が強い。A-16土壌やA-24土壌の埋没状態とよく似ている。1層中から1の口縁部の破片が1点出土した。他の時期の遺物を全く含まないので、1の土器からこの時期の遺構と認定した。（旧C地区土壌33）

A区-26号土壌（第

53図 → 図版6）

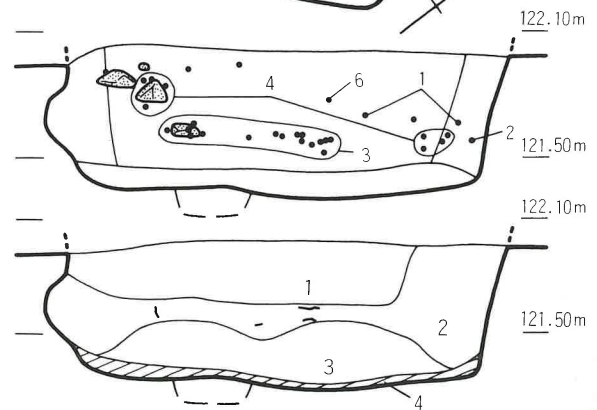
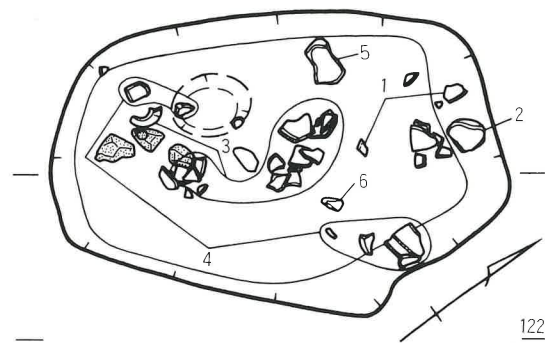
Q1調査区で検出された小型円形の土壌で、底面はほぼ平坦である。規模は長軸長87cm・短軸長

70cm、深さは検出面から14cmほどである。埋土は二層に分かれ、底部の2層は硬く締まった暗黄褐色粘質土で遺物は何も含まない。土壌使用中の堆積であろう。1層には土器片・炭・焼土を含むが、図示できる遺物はない。底面に使用の痕跡があることから、この土壌は小型の貯蔵穴と推定され、廃絶後生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。土器の細片からこの時期の遺構と認定した。（旧C地区土壌32）

A区-27号土壌（第54・55図 → 図版6・32）

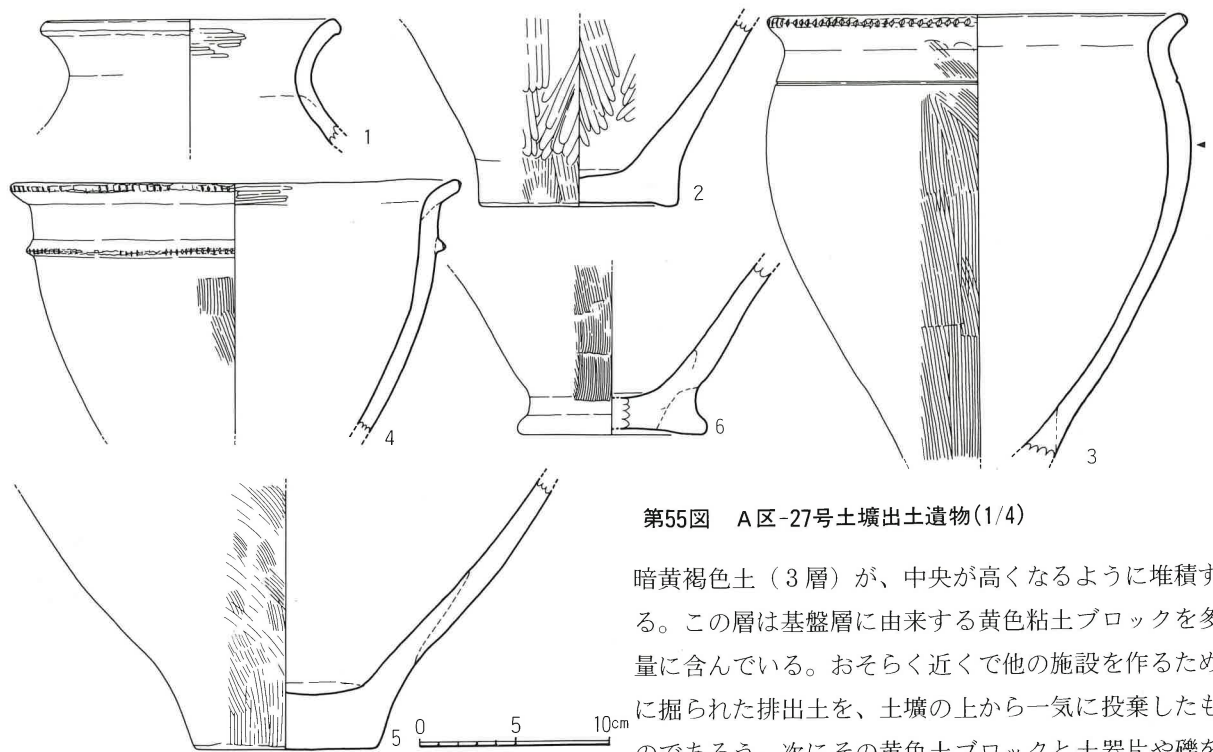
Q0ライン上で検出された長円形の土壌で、A-4住の柱穴を切って掘りこまれている。底面はやや高低がある。規模は長軸長181cm、短軸長121cmで、検出面からの深さは62cmである。使用状態は、まず底面によくしまった4層が形成される。この層は使用中に踏まれて形成された床面層で、遺物はまったく含まない。このように底面に使用の痕跡があるので、この土壌は貯蔵穴と推定される。

3層から1層までは、使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は2層に遺物一括廃棄が認められることである。まず床面の4層直上に、炭片を少し含むが他に何も含まない



1層：暗茶褐色土（2層よりややかたい。黄色土ブロック、炭含む）
2層：明黒褐色土（やわらかい。黄色土ブロック、土器片多量に含む）
3層：暗黄褐色土（土器含まない、炭少し含む、黄色土ブロックが中位に広がる）
4層：暗茶褐色粘質土（土器含まない、よくしまっている。）

第54図 A-27号土壌(1/30)



第55図 A区-27号土壌出土遺物(1/4)

暗黄褐色土（3層）が、中央が高くなるように堆積する。この層は基盤層に由来する黄色粘土ブロックを多量に含んでいる。おそらく近くで他の施設を作るために掘られた排出土を、土壌の上から一気に投棄したものであろう。次にその黄色土ブロックと土器片や礫を多量に含む2層が堆積する。この層は汚れて黒色化し、軟らかい。その層の土器の出土状態は、大型の破片をまとめて投棄したような状態であった。1・2は壺、3～6は甕でいずれも大型の破片である。特に1の壺は胎土に金雲母を含む搬入品である。2の壺底部と3・4・6の甕は火を受けて赤く焼けていた。甕だけでなく壺を火に掛けるという行為を伴う点からみて、単なる生活廃棄物の投棄ではなく、なんらかの祭祀に使われた土器を一括廃棄したと推定される。近接するA-20・21土壌の遺物一括廃棄にも類似の例がある。その後1層が堆積している。出土土器は、沈線で文様を施す甕が主体で、沈線は一条である。4のような如意形口縁に突帯を施す甕Bも共伴する。土壌廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。（旧C地区土壌31）

A区-28号土壌（第56・57図 →図版6・32・33）

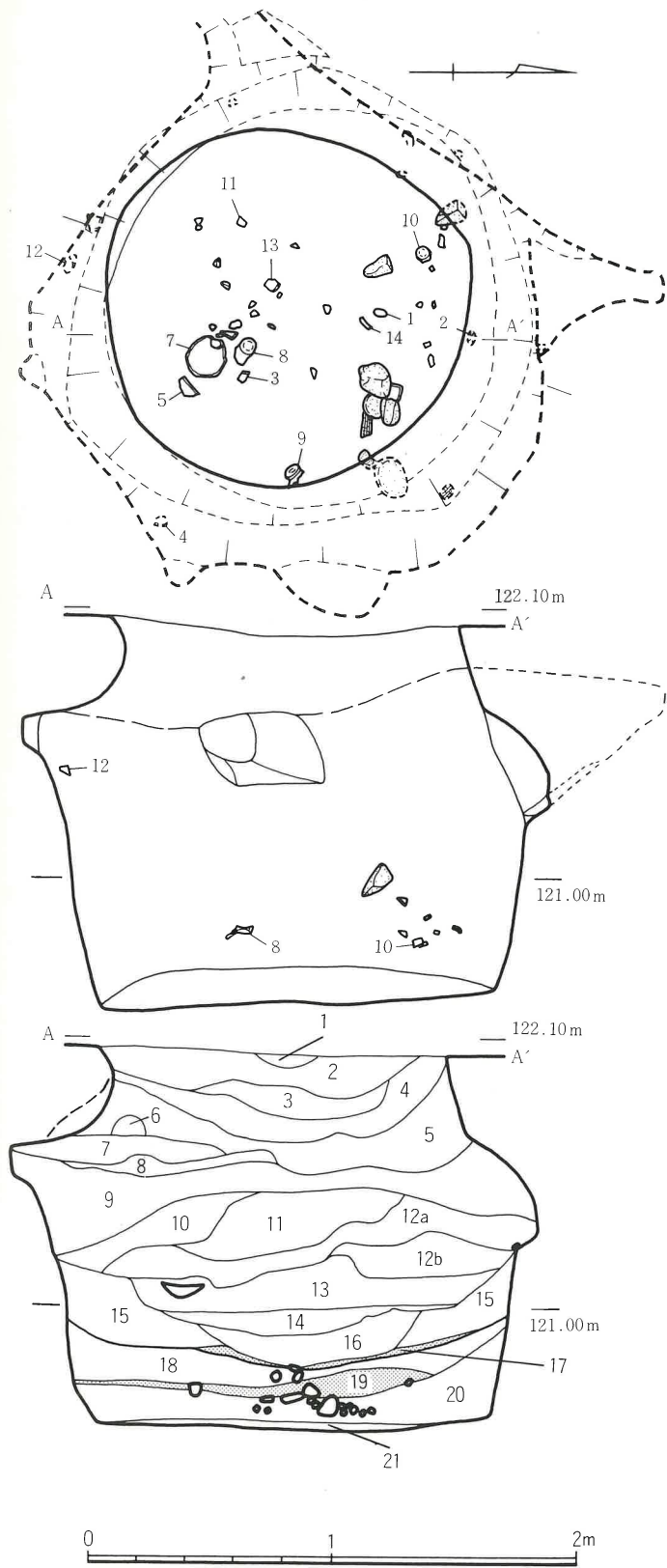
Q0調査区で検出された大型円形の袋状土壌で、壁の側面四方に深浅さまざまな穴が掘られている。規模は長軸長208cm・短軸長200cm、底面は平坦にならされ、深さは検出面から160cmほどである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

埋没状態は、まず底面に黒褐色の21層が形成される。この層は使用中に形成された最初の床面である。その上に黄色土ブロックや礫・砂を多く含む層（18・20層）に挟まれて、焼土・炭・土器片を含む汚れた19層が形成される。この層は8～10の甕を含む下位の遺物一括廃棄層である。土器片にはいずれも被熱した使用痕が残り、日常の生活用具を一括廃棄したものと考えられる。次に底面に黒褐色の17層が薄く堆積し、二次床面が形成されている。さらに無遺物で黄色土ブロックを多量に含む14～16層が堆積する。このうち15・16層は黄褐色土層で、基盤層の土そのものである。おそらく壁の側面に穿たれた穴からの排出土であろう。つまり壁に穴をほってその土で土壌を埋める行為がおこなわれているのである。側面の穴がどのような機能をもつのか不明だが、このような行為はこの時期の大型貯蔵穴でしばしば認められる。この行為を以て貯蔵穴は廃絶する。

13層から1層までは使用停止後の堆積層である。中位と上位にさらに二度の遺物一括廃棄が認められる。まず中位に黒褐色の13層が堆積する。この層では黄色土ブロックと土器片が多量に出土した。2の壺、3・5・7・11の甕などが、いずれも小片で出土した。甕の大部分は被熱しており、日常の生活用具を一括廃棄したものと考えられる。次に土器をほとんど含まない12～10層が、中央が次第に高くなるように堆積する。おそらく遺物一括

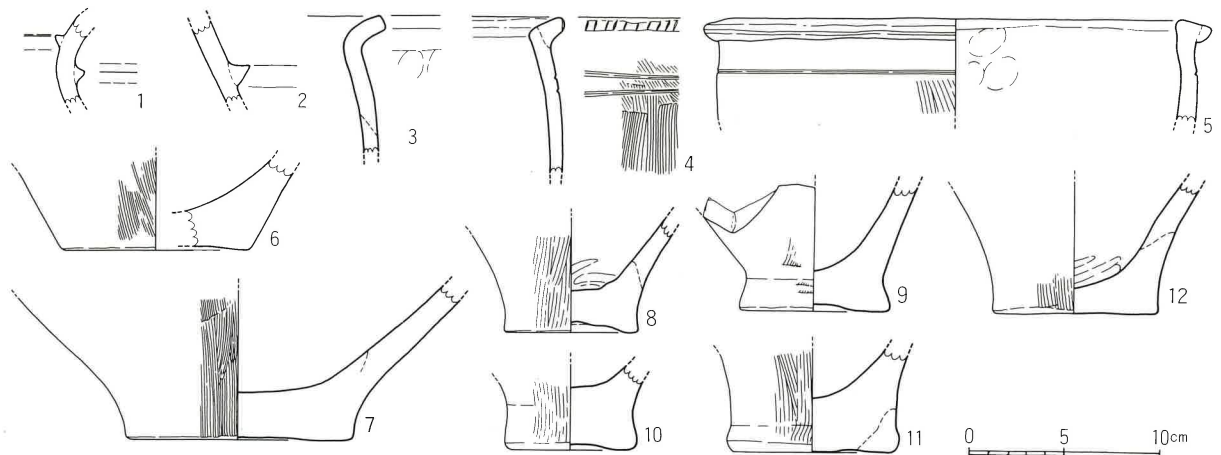
廃棄の直後に、土壌の上から土砂を投棄したものであろう。12層からは1の壺片が出土した。

さらに9層で上位の遺物一括廃棄がおこなわれる。土器は細片が多く、4と12の甕を含む。甕は被熱しており、日常の生活用具を一括廃棄したものと考えられる。その後は8～1層が順次投棄されている。浅くなった土壌を

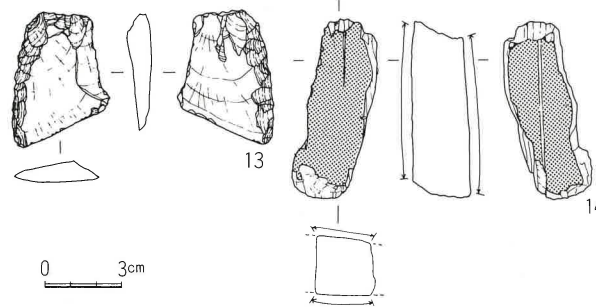


- (層序)
- 1層：暗黒褐色軟質土（炭含む。）→後世のピットか？
 - 2層：明茶褐色硬質土（黄色土ブロック・焼土・小礫・土器片多く含む。）
 - 3層：暗茶褐色軟質土（土器片・小礫少し含む）
 - 4層：明茶褐色硬質土（2層より軟い、黄色土ブロック、小礫多く含む。）
 - 5層：明褐色軟質土（黄色土ブロック少しと炭多く含むが、小礫と土器は含まない。）
 - 6層：明黄茶褐色粘質土（なにも含まない。）
 - 7層：明茶褐色土（4層より黒い、土器・炭片少し含む）
 - 8層：明黄褐色土（黄色土ブロックの堆積、遺物なし。）
 - 9層：暗茶褐色軟質土（炭・土器を多く、黄色土ブロックを少し含む。）
→上位土器集中。
 - 10層：明黒褐色軟質土（黄色土ブロック含むが土器はない。）
 - 11層：暗黄褐色硬質土（やや粘質。黄色土ブロック・炭を多く含むが、土器はない。）
 - 12a層：暗茶褐色土（9層よりやや暗い。土器片・黄色土ブロックを少し含む。）
 - 12b層：暗茶褐色土（12a層より、やや明るく、サラサラした土。黄色土ブロックを少し含むが、土器はない。）
 - 13層：明黄黒褐色土（サラサラした土、黄色土ブロック・土器を多く含む。）→中位土器集中
 - 14層：暗黒褐色軟質土（サラサラした土。何も含まない。）
 - 15層：黄褐色土（地上上部の土、黄色土ブロックそのもの）→壁面の穴から掘りとられた土である。
 - 16層：黄茶褐色土+黄色土ブロック混層（15層の土がまざったもの）
 - 17層：明黒褐色土（小礫含む。）
 - 18層：黄褐色+黄色土ブロック混層（大型礫含む）
 - 19層：暗黒褐色土（焼土・炭・土器片を多く含む）
→下位土器集中
 - 20層：黄褐色土（中央に大型礫、左には砂が多い）
 - 21層：明黒褐色土（土器少し含む）
→最初の使用時の堆積。

第56図 A区-28号土坑(1/30)



第57図 A区-28号土壌出土遺物(1~12=1/4、13・14=1/3)

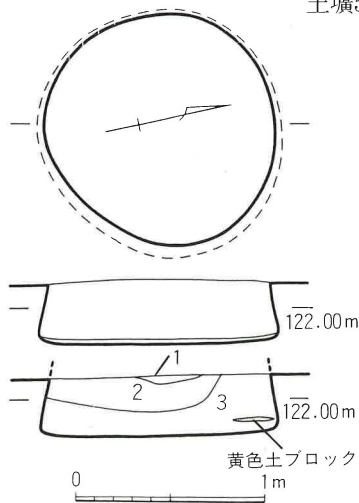


ゴミ捨て場所として利用していったと推定され、土器は少なくなって石器を含むようになる。6の甕小片・13の粘板岩製の完形のスクレイパーと14の硬質頁岩製の砥石の破片が含まれるのみである。

出土土器は、逆L字形口縁の甕Cが主体である。1は口縁内面に突帯を施す周防・豊前系の壺である。また土器はすべて在産で、搬入品はない。土壌廃棄の時期は、出土土器の特徴から弥生時代中期初頭と推定される。(旧C地区土壌54)

A区-29号土壌(写真7、第58・59図 →図版6)

Q0調査区で検出された大型円形の袋状土壌で、底面は平坦である。規模は長軸長132cm、短軸長124cmで、検出面からの深さは34cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。埋土は三層に分かれ、どの層も土器片・炭・焼土を含むが、遺物はいずれも破片化して散在する。土壌の廃絶後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。土器は3層から出土した小片で、1と2は甕口縁片である。土壌廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌53)

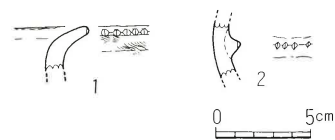


1層：黒褐色軟質土（焼土片、土器片含む）
 2層：硬くしまった暗黄褐色土（炭・焼土・土器片含む）
 3層：暗褐色軟質土（土器片含む）

第58図 A区-29号土壌(1/40)



写真7. A区-29号土壌の断面土層(東から)



第59図 A区-29号土壌出土遺物(1/4)

A区-30号土壙 (第60図 → 図版6)

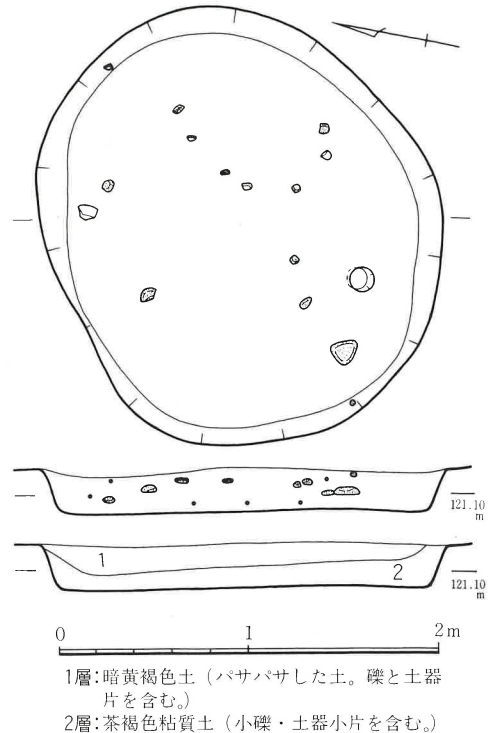
Q19調査区で検出された大型円形の袋状土壙で、底面は平坦である。規模は長軸長236cm、短軸長200cmで、検出面からの深さは25cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

埋土は二層に分かれ、どの層も小礫・土器片と炭片・焼土片を含むが、遺物はいずれも小片で散在する。土壙は廃絶後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。土器は小片で図示できないが、甕の底部片がある。他の時期の遺物を全く含まないので、その土器からこの時期の遺構と認定した。(旧C地区土壙85)

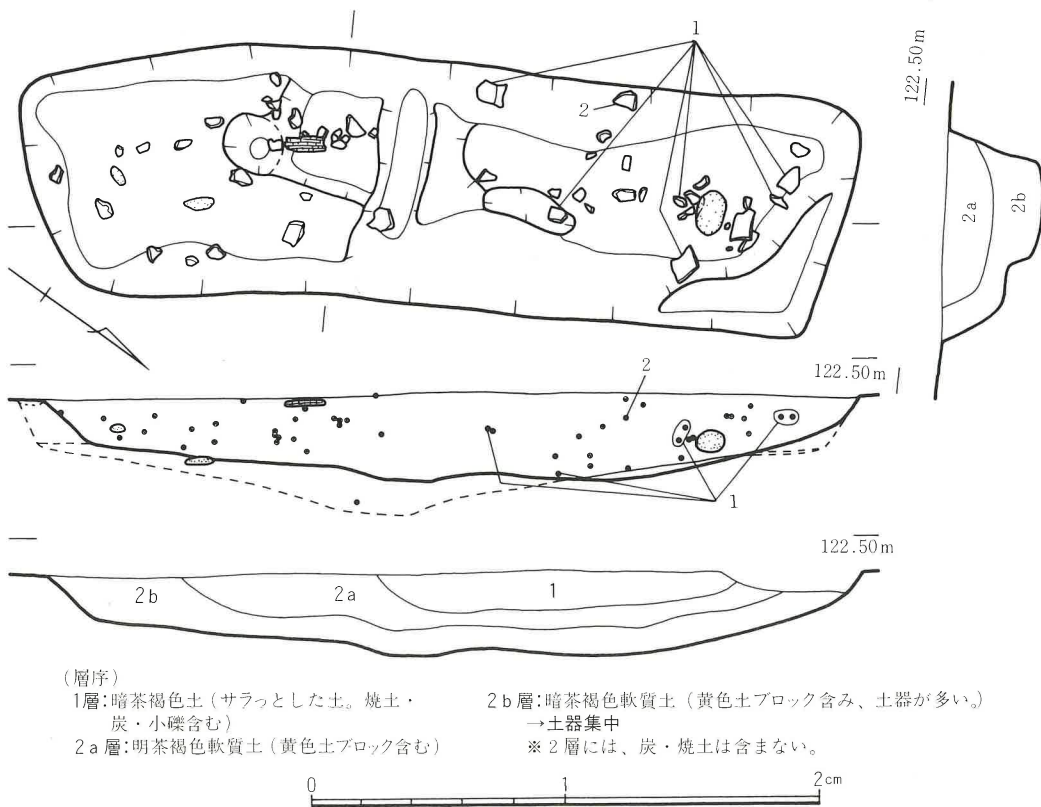
A区-31号土壙 (第61・62図、写真8 → 図版7)

Q19調査区で検出された船底形の土壙で、底面は一定せず凸凹で、中央部がもっとも低い。規模は長さ334cm、幅98cmで、検出面からの深さは深いところで31cmである。長軸の方位角は149度である。形状と底面の状態からみて、埋没以前に使用された痕跡はなく、廃棄のために掘られた可能性が高い。

まず黄色土ブロックと土器片を多く含む2層が堆積する。その下位の2b層に遺物の一括廃棄が認められる。2層は、炭や焼土が含まれない、この遺跡では稀な廃棄層である。土器片は散在してまんべんなく含まれる。1・2の甕が中から出土した。その上



第60図 A区-30号土壙 (1/40)

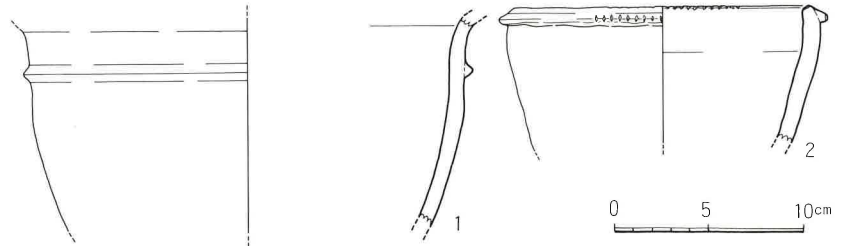


第61図 A区-31号土壙 (1/30)



写真8.

A区-31号土壌遺物出土状態(南東から)



第62図 A区-31号土壌出土遺物(1/4)

にさらっとした茶褐色の1層が堆積する。この層には炭片・焼土片と小礫が含まれる。1は如意形口縁に三角突帯を施す甕B、2は逆L字形口縁の甕Cである。土壌廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌76)

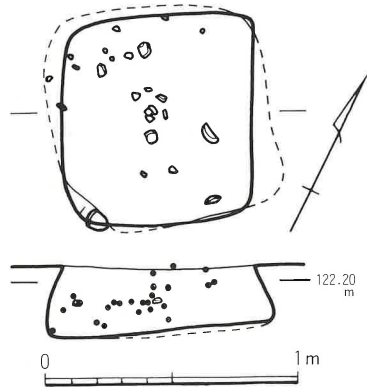
A区-32号土壌(第63図 →図版7)

Q19調査区で検出された小型方形の袋状土壌で、底面は平坦だが、東がやや高い。規模は長さ88cm、幅86cmで、検出面からの深さは28cmである。その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定されるが、方形の袋状土壌というのはきわめて稀である。

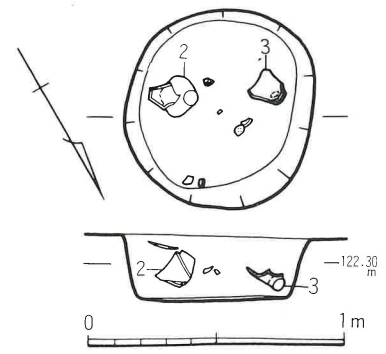
埋土は二層に分かれ、どの層も土器片と炭片・焼土片を含むが、遺物はいずれも小片で散在する。黄色土ブロックが多量に含まれ、短期間の埋没、つまり埋められた可能性が強い。土器は小片で図示できないが、この時期の土器の細片である。その土器からこの時期の遺構と認定した。(旧C地区土壌84)

A区-33号土壌(第64・65図 →図版7・33)

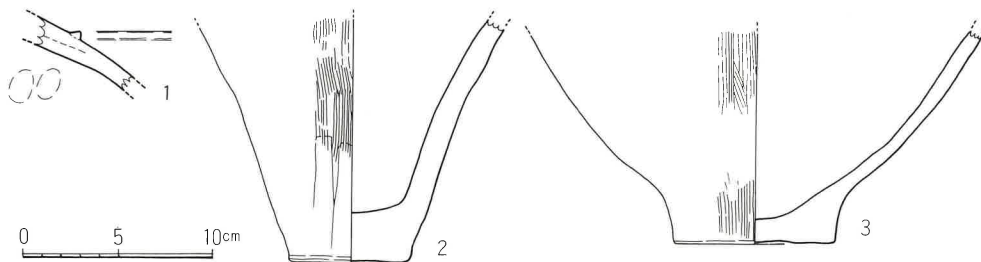
Q18調査区で検出された小型円形の竪穴状土壌で、底面は平坦である。規模は長軸長80cm・短軸長73cm、深さは検出面から27cmほどである。小型の貯蔵穴の可能性もあるが、はっきりしない。埋土は暗褐色粘質土の単一層(1層)で、炭・焼土・大型土器片を多量に含む。埋土が厚いにもかかわらず分層できない点から考えて、短時間の埋没すなわち埋め戻しがおこなわれた可能性が強い。埋没状態の特徴は、遺物の一括廃棄が



第63図 A区-32号土壌(1/30)

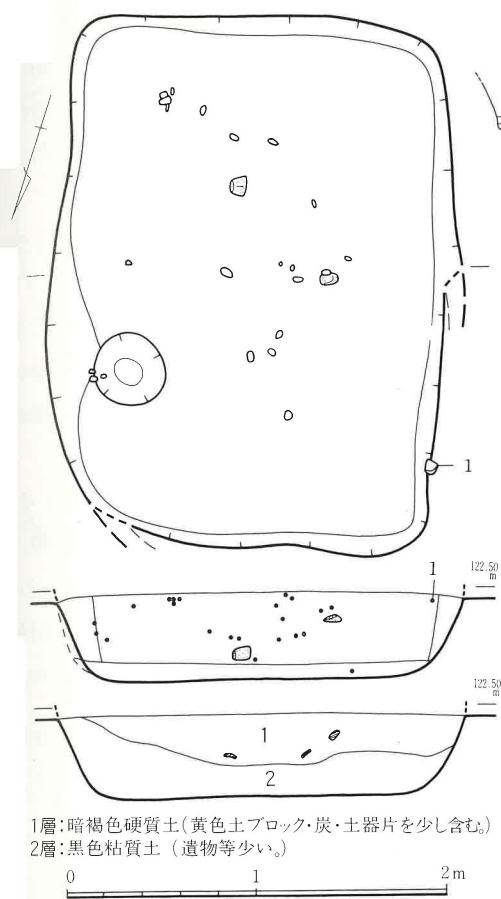


第64図 A区-33号土壌(1/30)



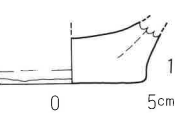
第65図 A区-33号土壌出土遺物(1/4)

あることにある。1の壺、2・3の甕はいずれも比較的大型の破片であるが、完形に復元できなかった。土壌廃棄の時期は、出土土器から弥生



第66図 A区-34号土壌 (1/40)

1層:暗褐色硬質土(黄色土ブロック・炭・土器片を少し含む)
2層:黒色粘質土(遺物等少い。)



第67図 A区-34号土壌
出土遺物 (1/4)

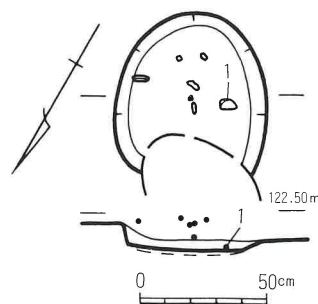
時代前期末と推定される。(旧C地区土壌100)

A区-34号土壌 (第66・67図 →図版7)

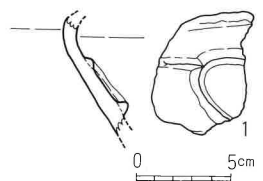
Q18調査区で検出された長方形の土壌で、底面は平坦である。規模は長さ323cm、幅197cm、検出面からの深さは46cmである。底面の

壁際にピットがあるが、柱穴かどうかは不明。長軸の方位角は165度である。その大きさと形態からみて、居住用とは異なるなんらかの施設として使用されたことは明らかである。

埋土は二層に分かれ、どの層も土器片・炭・焼土と小円礫・黄色土ブロックを少量含むが、遺物はいずれも破片化して散在する。土壌は廃絶後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。図示できるのは1層から出土した1の甕底部片のみである。土壌廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌150)



第68図 A区-35号土壌 (1/30)



第69図 A区-35号土壌
出土遺物 (1/4)

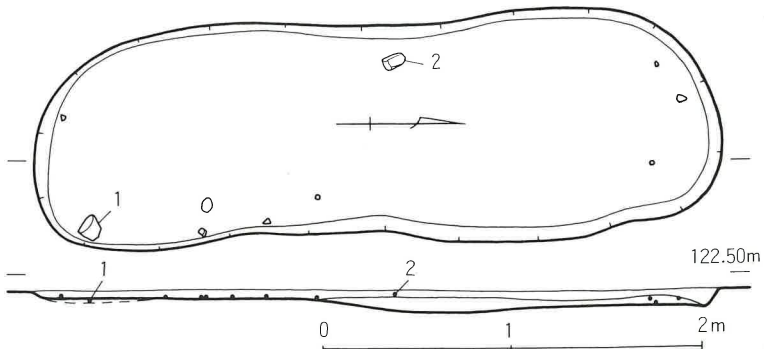
A区-35号土壌 (第68・69図 →図版7)

Q17ライン上で検出された小型長円形の土壌で、底面は平坦である。規模は長軸長70cm、短軸長56cmで、検出面からの深さは12cmである。断面層序の観察をおこなっていないので埋没状態の詳細は不明だが、遺物はいずれも小片化して散在する。土壌は廃絶後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。図示できるのは1の壺頸部片のみである。それは三角突帯が鍵の手に接続する文様をもつ壺Bである。土壌廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌161)

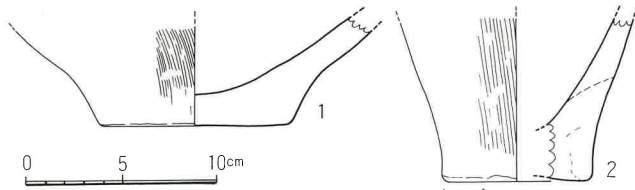
A区-36号土壌 (第70・71図 →図版7)

Q17調査区で検出された船底形の土壌で、底面はやや高低がある。規模は長さ363cm、幅112cmで、検出面からの深さは12cmである。長軸の方位角は179度である。その性格・用途は不明である。

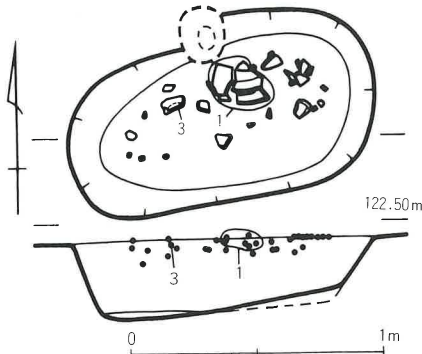
埋土は黒褐色軟質土の単一層(1層)で、炭・焼土・土器細片を含む。1層から出土の1の壺、2の甕はいずれも底部破片である。残存部が浅いので埋没状態の詳細は不明である。土壌廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌111)



第70図 A区-36号土壌 (1/40)



第71図 A区-36号土壇出土遺物 (1/4)

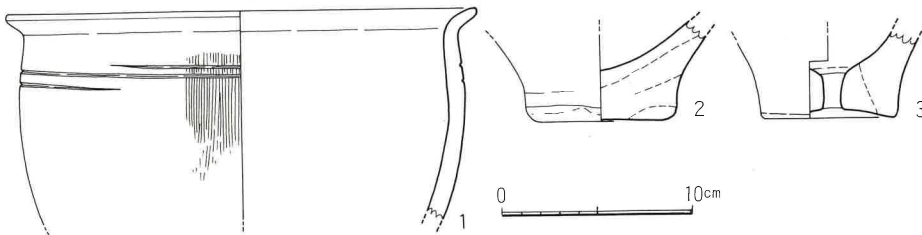


第72図 A区-37号土壇 (1/30)

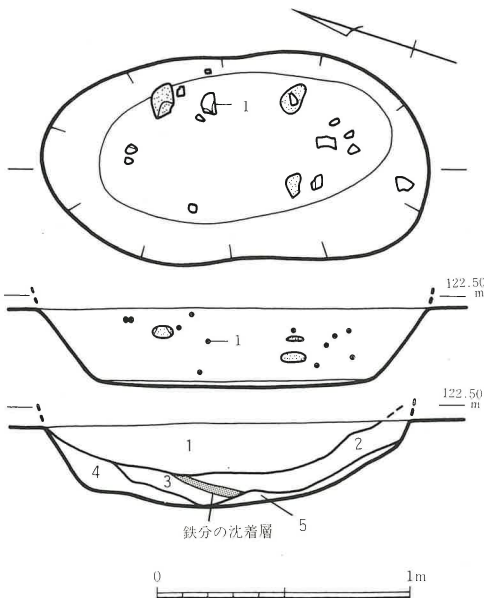
A区-37号土壇 (第72・73図 →図版8・33)
 Q17調査区で検出された長円形の土壇で、底面は平坦だが東がやや高い。規模は長軸長123cm、短軸長62cmで、検出面からの深さは31cmである。その性格・用途は不明である。

埋土は暗褐色粘質土の単一層(1層)で、炭・焼土・土器小片を多量に含む。埋没状態の特徴は、1層上部に遺物の一括廃棄があることにある。2・3の甕は断片で検出されたが、1の甕は大型破片のままつぶれた状態で検出した。埋土が厚いにもかかわらず分層できない点から考えて、短時間の埋没すなわち埋め戻しがおこなわれた可能性が強い。

なお1は回転台を利用して螺旋状に施紋した二条沈線を施した甕Aで、胎土に金雲母と石英を多量に含む搬入品である。A-11土壇の17の搬入品の甕とよく似ている。また3は底部に焼成前の穿孔を施した甕である。土壇廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壇113)



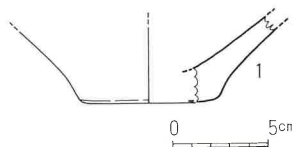
第73図 A区-37号土壇出土遺物 (1/4)



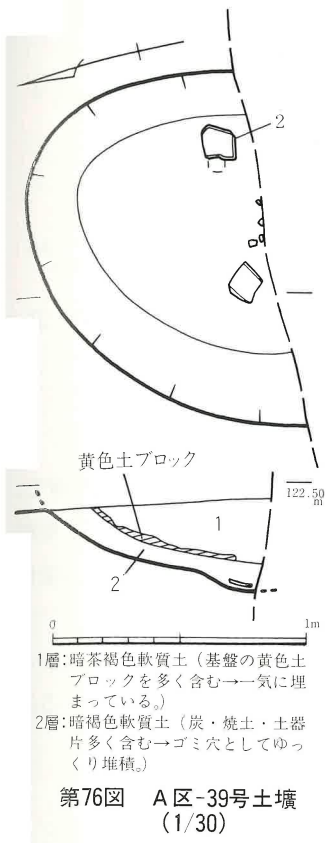
- 1層:暗褐色土(土器片・炭多く含む。)
- 2層・3層:やや灰色がかかった黄褐色土(炭片含む)
→中間に鉄分の沈着層あり。
- 4層・5層:暗黄褐色土(炭等含まない)
→基盤層の可能性あり。

第74図 A区-38号土壇 (1/30)

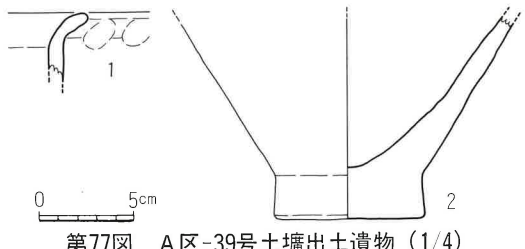
A区-38号土壇 (第74・75図 →図版8)
 Q17調査区で検出された長円形の土壇で、底面は皿状である。規模は長軸長154cm、短軸長78cmで、検出面からの深さは31cmである。その性格・用途は不明である。埋土は下部に、黄色土ブロックの層(4・5層)がまず堆積し、その上に炭片を含むやや灰色がかかった黄褐色土(2・3層)がのる。その層中には鉄分の沈着層が挟まるが、遺物は全く含まない。最後は暗褐色土の1層で、炭・焼土・小礫と土器細片を含む。1層からは1の壺底部片が出土している。土壇は廃絶後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。土壇廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壇112)



第75図 A区-38号土壇出土遺物 (1/4)



第76図 A区-39号土壙 (1/30)



第77図 A区-39号土壙出土遺物 (1/4)

第77図 A区-39号土壙出土遺物 (1/4) 図 → 図版 8・33

A区-39号土壙 (第76・77 図 → 図版 8・33)

Q17調査区で検出された南側が調査区外に伸びる長円形と推定される土壙で、底面は皿状である。規模は長軸長192cm、短軸長92cm以上で、検出面からの深さは36cmである。底面の状態からみて、埋没以前に使用された痕跡はなく、廃棄のために掘られた可能性が高い。

埋土は二層に分かれ、まず暗褐色軟質土の2層が堆積し、炭・焼土・土器片を多量に含む。遺物はいずれも破片化して散在する。土壙の廃絶後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。この2層からは1・2の甕片が出土した。甕は被熱した使用痕が残る日常生活用具である。ところでその上に黄色土ブロックの1層が堆積しているのは、埋没の途中に別の穴からの排出土をいれて埋めたと考えられる。

土壙廃棄の時期は、2層出土の土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壙151)

A区-40号土壙 (第78・79図)

R1調査区で検出された小型の船底形土壙で、底面はやや高低がある。規模は長さ119cm、幅35cmで、検出面からの深さは17cmである。長軸の方位角は62度である。

埋土は二層に分かれ、下部の2層は硬く締まった暗褐色粘質土で、無遺物である。その上の1層は軟らかく土器片を含む。全体に炭・焼土はきわめて少なく、短期間に埋没した状態である。平面形と埋没状態からみて、小児用の土壙墓の可能性はあるが、決め手がない。埋土中から1の甕片が出土した。被熱した日常品である。

土壙廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壙40)

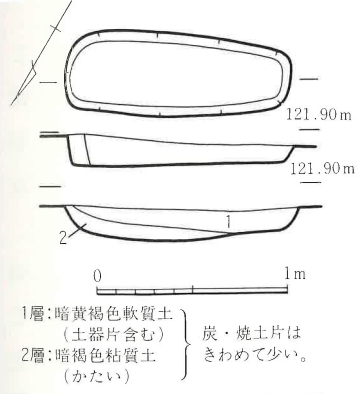
A区-41号土壙 (第80・81図 → 図版 8・33)

R1調査区で検出された小型円形の土壙で、底面は平坦だが南がやや高い。規模は長軸長60cm、短軸長57cmで、検出面からの深さは8cmである。その形態から小型の貯蔵穴である可能性も否定できない。

埋没状態の特徴は、下位に遺物一括廃棄があることにある。層序の観察をおこなっていないので詳細は不明であるが、1～4の甕と5の打製石鏃が検出された。土器とくに甕の口縁部片はいずれも大型破片であるが、完形に復元できるものはなかった。2～4の甕は火を受けて赤く焼けていた。ほかにA-23土壙の1の壺の一部が検出されている。破片が大きく底をふさぐように大量に廃棄されているところから、単なる生活廃棄物の投棄ではなく、なんらかの祭祀に使われた土器を一括廃棄した可能性がある。

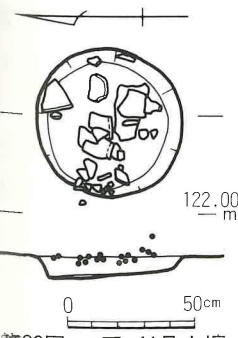
1は如意形口縁に三角突帯を施す甕B、2・3は逆L字形口縁の甕Cである。5は脚が一部欠損したサヌカイト製の打製石鏃で、無茎凹基の軽量品(0.7グラム)である。

土壙廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壙37)

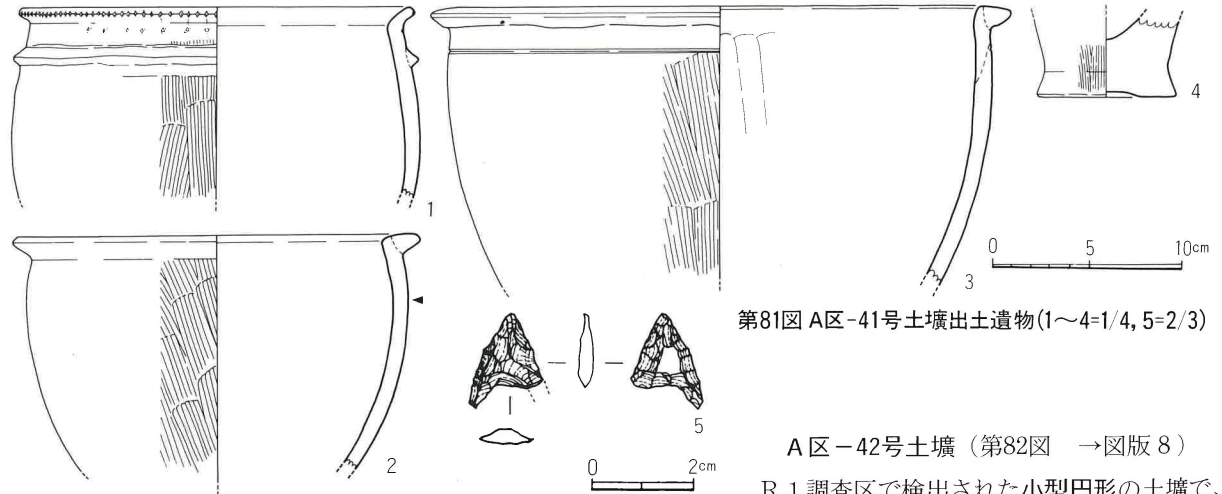


第78図 A区-40号土壙 (1/40)

第79図 A区-40号土壙出土遺物 (1/4)



第80図 A区-41号土壙 (1/30)



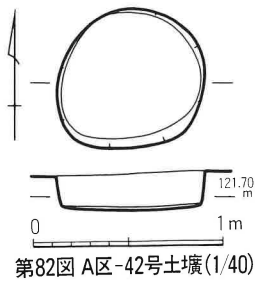
第81図 A区-41号土壇出土遺物(1~4=1/4, 5=2/3)

A区-42号土壇 (第82図 → 図版8)

R1調査区で検出された小型円形の土壇で、底面は平坦である。規模は長軸長79cm、短軸長74cmで、検出面からの深さは20cmである。その形態から小型の貯蔵穴であった可能性も否定できない。

埋土は炭・焼土と土器片を含む暗褐色軟質土の単一層(1層)で、基盤層に由来する10cm大の黄色粘土の小ブロックを含むので、埋め戻された可能性がある。図示できる遺物はないが、土器の細片からこの時期の遺構と認定した。(旧C地区土壇36)

A区-43号土壇 (写真9、第83~85図 → 図版8・9・33・34)

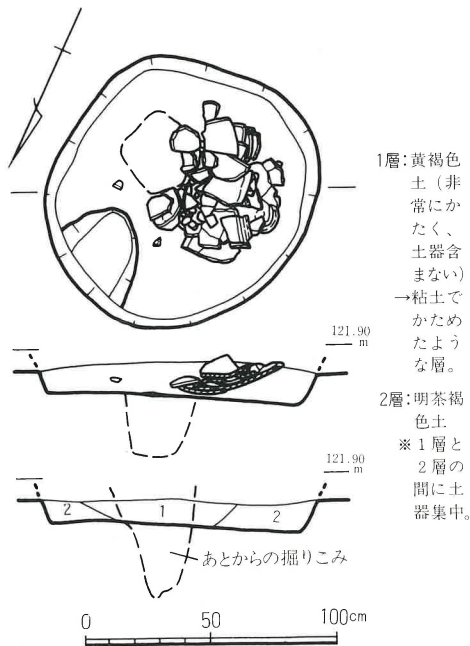


第82図 A区-42号土壇(1/40)

R1調査区で検出された大型円形の土壇で、底面は平坦である。中央部は後世のピットから切られている。規模は長軸長112cm、短軸長103cmで、検出面からの深さは18cmである。その形態から小型の貯蔵穴であった可能性も否定できない。

2層から1層が使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は1層に特異な遺物一括廃棄が認められることにある。まず底面の壁ぎわに2層が堆積し、ボールの底状の構造ができあがる。この層は基盤層に由来する黄色粘土ブロックを多量に含んできわめて硬い。あるいは掘りすぎの基盤層かも知れない。後者の場合は土壇の形状は断面皿状となり、貯蔵穴ではないことになる。遺物は含まない。次に大型土器片を多量に含む明茶褐色土の1層が堆積する。

2層と1層の間に土器の一括廃棄がある。土器の出土状態は第84図のように、最初に1・2の同一個体の壺が、東に口縁を向けて完形のまま、横倒しで置かれる。その横に3・4の甕がこれも完形で同じ向きに横倒しで置かれる。次にその壺・甕の上に6の甕



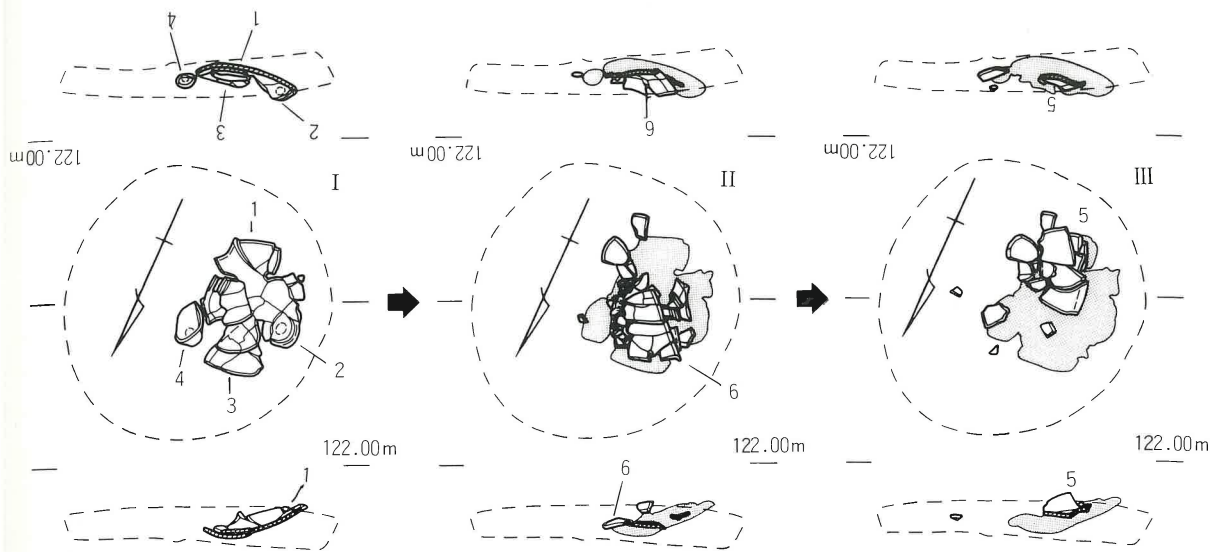
第83図 A区-43号土壇①(1/30)

1層:黄褐色土(非常にかたく、土器含まない)→粘土でかためたような層。
2層:明茶褐色土
※1層と2層の間に土器集中。
あとからの掘りこみ

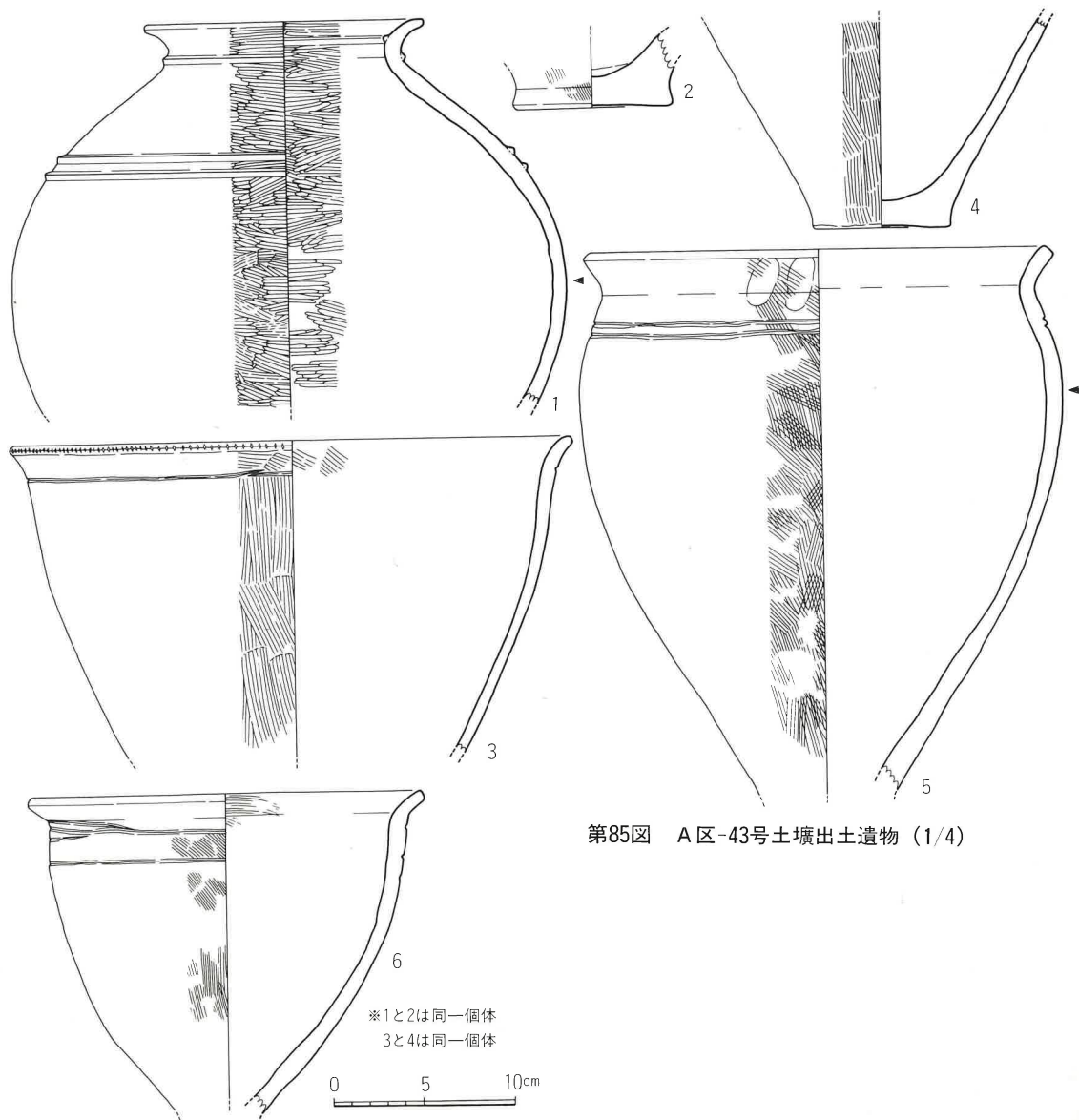


写真9. A区-43号土壇完掘状態

が逆向きの南西方向に口縁を向けて横倒しで重ねられる。さらにその上に5の甕が同じく南西方向に口縁を向けて横倒しで置かれている。6・5の甕もほとんど完形である。以上の6個体の土器が重ねてつぶれた状態で出土した。そのうち3~6の3個体の甕はいずれも火を受けて赤く焼け、内



第84図 A区-43号土坑②-土器廃棄状況-(1/30)

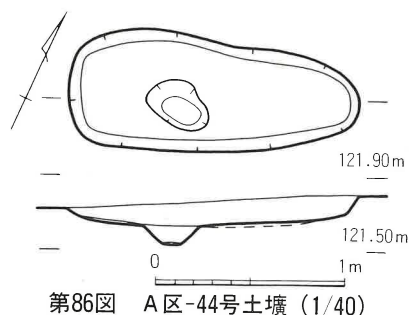


第85図 A区-43号土坑出土遺物(1/4)

※1と2は同一個体
3と4は同一個体

面に焦げ状の炭化物が付着した使用品である。特に3+4と6の2個体は胎土に金雲母を含む搬入品である。一方壺は在地産で被熱していない。完形品を横倒しに重ねている点からみて、単なる廃棄物の投棄ではなく、なんらかの事情でなお使用できる一群の土器を一括埋置したものと推定される。

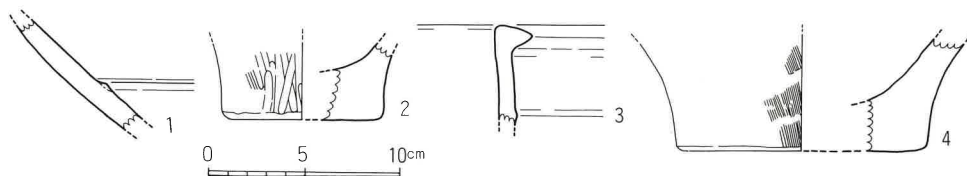
出土土器の特徴は、まず1・2の壺は口縁内面に突帯を張りつける周防・豊前系の壺Bで、甕は沈線で文様を施す甕Aが主体で、沈線は一条と二条の両者がある。同じ甕Aでも搬入品の3・6に比べて、在地産の5は胴が張るという形態上の特徴がうかがえる。土壌の時期は、以上の出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌38)



第86図 A区-44号土壌 (1/40)

A区-44号土壌 (第86・87図 →図版9)

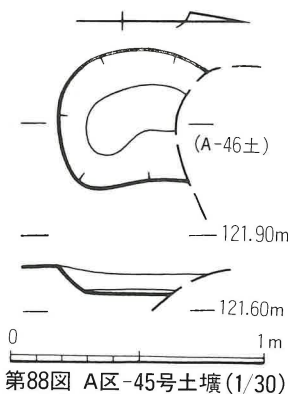
R1調査区で検出された船底形の土壌で、底面はやや高低があり、中央に浅いピットがある。A-46土壌と一連となる可能性がある。規模は長さ153cm、幅50cmで、検出面からの深さは17cmである。長軸の方位角は67度である。その形状と底面の状態からみて、廃棄のために掘られた可能性が高い。埋土は暗褐色土の単一層(1層)で、炭・焼土と小土器片を



第87図 A区-44号土壌出土遺物 (1/4)

多量に含むが、検出面では一部に焼土の集中が認められた。1層からは1・2の壺片、3・4の甕の破片が検出された。

土器はいずれも小片で散在する。土壌の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌43)



第88図 A区-45号土壌 (1/30)

A区-45号土壌 (第88図 →図版10)

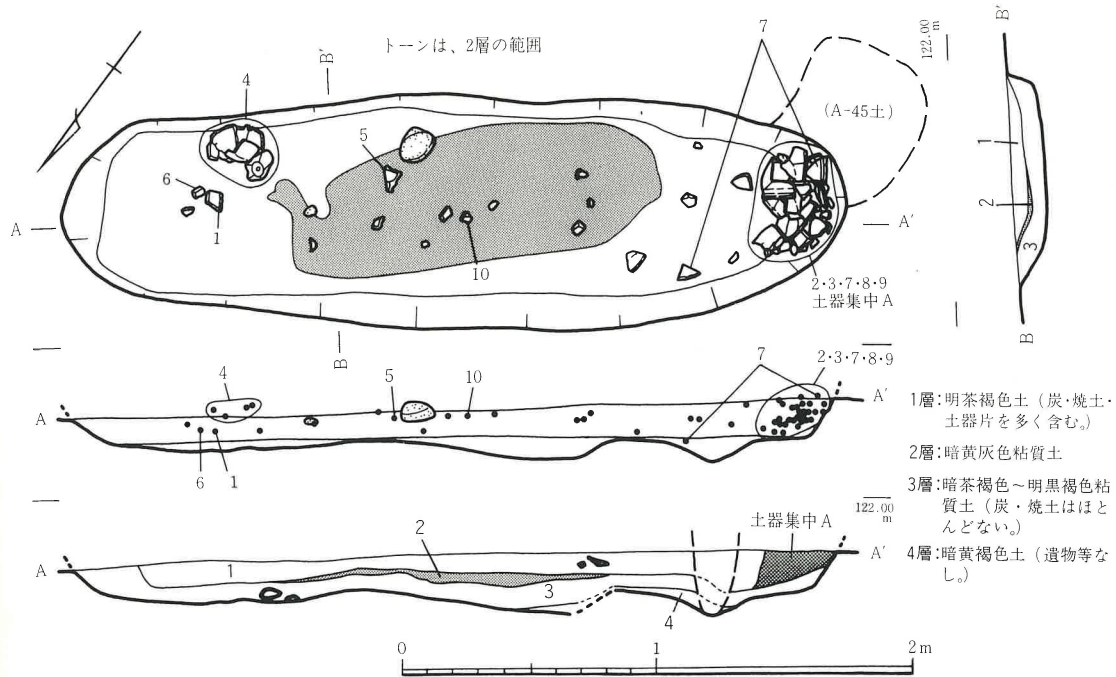
R1調査区で検出された不定形の土壌で、A-46土壌に切られ、底面は皿状である。規模は長軸長63cm、短軸長51cmで、検出面からの深さ10cmである。その性格・用途は不明で、遺物は何も出土していないが、弥生時代中期初頭のA-46土壌に切られているので、この時期の遺構と認定した。(旧C地区土壌147)

A区-46号土壌 (第89・90図 →図版10)

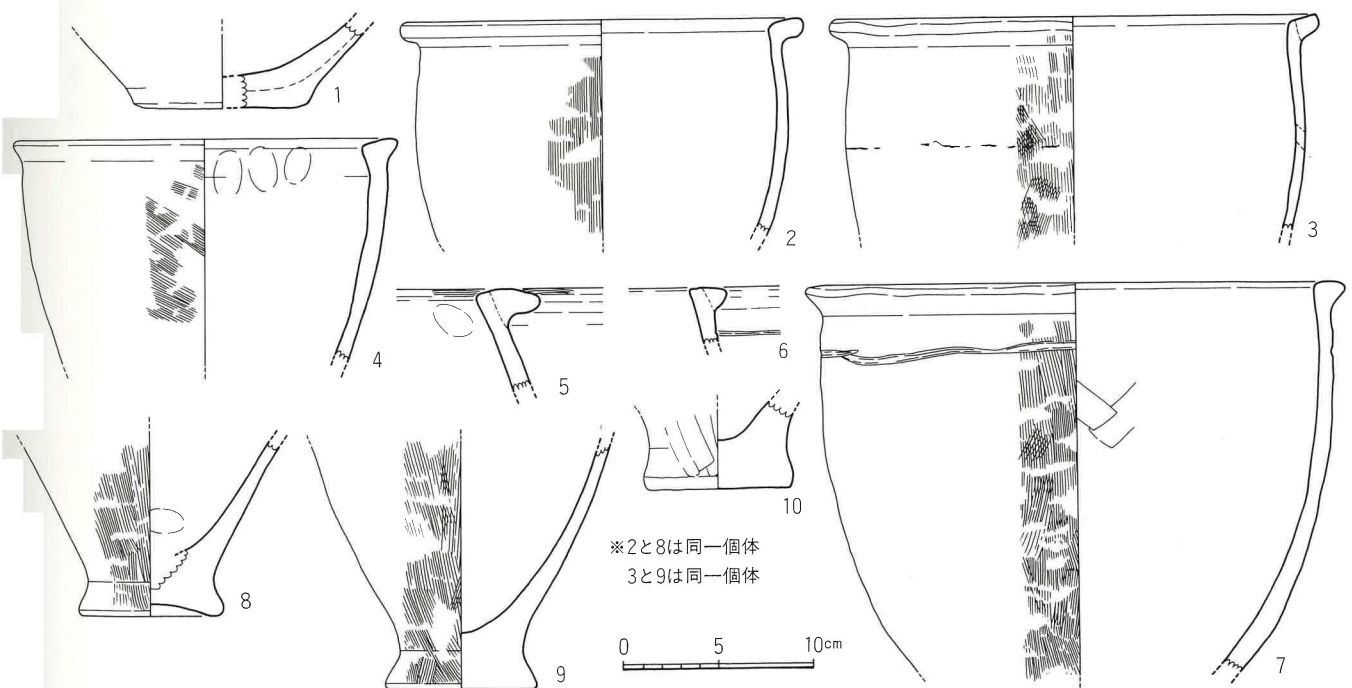
R1調査区で検出された船底形の土壌で、A-45土壌を切っている。底面はかなり凸凹している。規模は長さ312cm、幅73cmで、検出面からもっとも深いところで25cmを測る。長軸の方位角は53度である。A-44土壌と一連となる可能性がある。後述するように粘土で床状の底面を作っている点と、その平面形からみて、なんらかの作業土壌であった可能性が指摘できる。

まず凸凹した底面に黄色土ブロックを多く含む4層が堆積し、その上に土壌の底面全体に茶褐色の粘質土(3層)が堆積する。この3層までは遺物を全く含まず、硬く締まっている。さらにその上面の中央に暗黄灰色粘質土(2層)の薄い層が広がる。2層上面は平坦に整えられているので、おそらくなんらかの使用目的にあわせて床面整形をおこなったものと推定される。その底面には焼土など火を使用した痕跡はなく、西端がわずかにくぼむのが特徴である。しかし具体的な用途は不明である。

1層は廃絶後の堆積層で土器片・炭・焼土・円礫を多量に含む。特に西端のくぼみの部分にA-43土壌のような土器堆積(集中A)が認められた。そこでは2・3・7~9の3個体の完形の甕がつぶれた状態で検出された。また東側にも縦に半分に割れた4の甕が、壁にたてかかるように検出されている。1・5・6・10は破片化して1層中に散在していた。さきの3個体の甕を含めて、いずれも火を受けて赤く焼け煤が付着した日常品である。

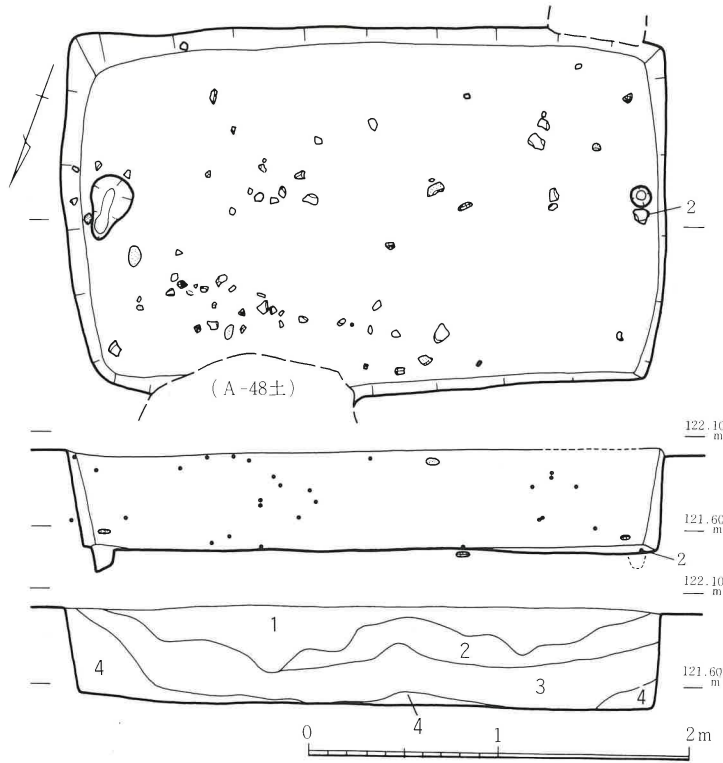


第89図 A区-46号土壌 (1/30)



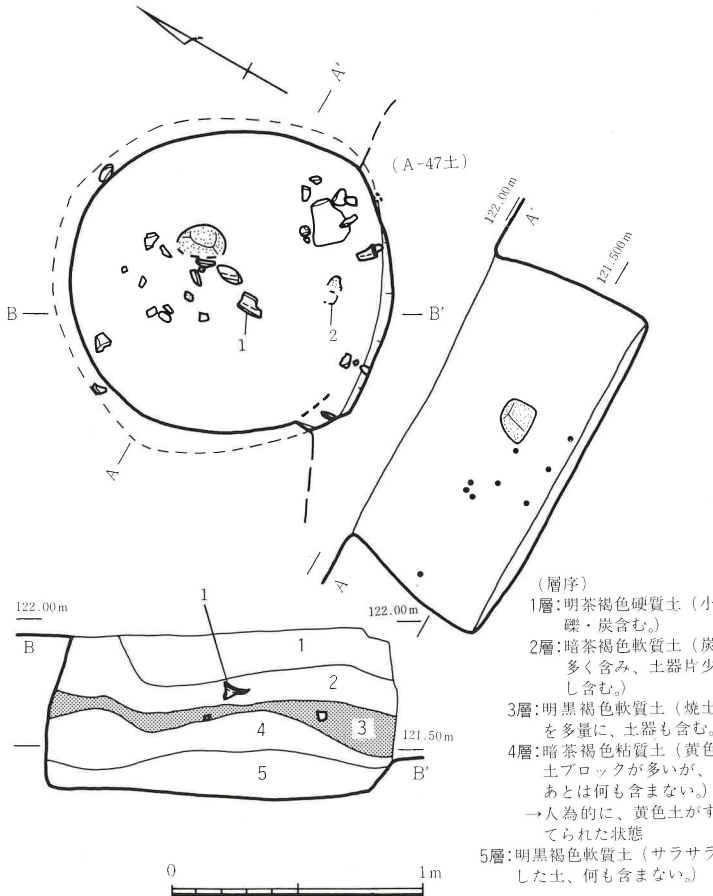
第90図 A区-46号土壌出土遺物 (1/4)

その土器の出土状態からみて、単なる廃棄物の投棄ではなく、なんらかの事情で一群の土器を一括埋置した上で、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。出土土器の特徴は、逆L字形口縁の甕Cが主体で、沈線文様の甕Aはすでに少数派である。また土器はすべて在地産で、搬入品はない。土壌廃絶の時期は、以上の出土土器から弥生時代中期初頭と推定される。(旧C地区土壌46)



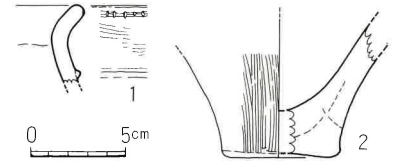
- (層序)
- 1層:黄茶褐色硬質土(ガラガラした土。小礫多く、炭・土器片少し含む。)
 - 2層:明褐色土(小礫少し含むが、土器はない。)
 - 3層:暗褐色粘質土(黄色土ブロックが全体に入る。土器はない。)
 - 4層:明黒褐色土(サラサラした土。多量の炭と土器片を含む。)

第91図 A区-47号土壙(1/40)



- (層序)
- 1層:明茶褐色硬質土(小礫・炭含む。)
 - 2層:暗茶褐色軟質土(炭多く含む、土器片少し含む。)
 - 3層:明黒褐色軟質土(焼土を多量に、土器も含む。)
 - 4層:暗茶褐色粘質土(黄色土ブロックが多いが、あとは何も含まない。)
→人為的に、黄色土がすてられた状態
 - 5層:明黒褐色軟質土(サラサラした土、何も含まない。)

第93図 A区-48号土壙(1/30)



第92図 A区-47号土壙出土遺物(1/4)

A区-47号土壙(第91・92図 →図版11)

R0調査区で検出された長方形の大型土壙で、A-48土壙の一部を切られていた。底面は平坦で、規模は長さ352cm、幅179cm、検出面からの深さは53cmである。A-34土壙と規模はほぼ等しい。東西の壁際中央に小ピットがあり、二本柱の竪穴建物の可能性もあるが、ピットが貧弱すぎるので、柱が使われたとしても簡単な作りのものと推測される。長軸の方位角は70度である。

埋土は、まず底面周縁部に炭片と土器片を多量に含むサラサラとした黒褐色土の4層が堆積し、その上に黄色土ブロックが全体に入り土器を含まない3層と、小礫を含むが土器の入らない2層が厚く堆積する。短時間に埋め戻されたとみられる。その上に炭片・土器片を含む黄茶褐色土(1層)がのる。4層からは2の甕底部片が出土している。土壙は廃絶の際ある程度埋め戻され、その後生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。土壙廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。

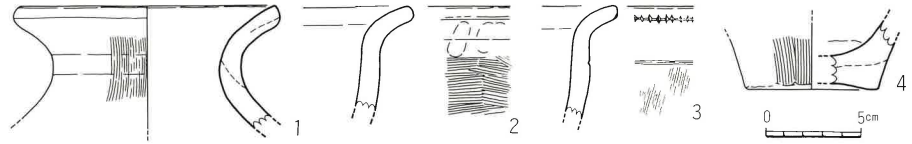
(旧C地区土壙56)

A区-48号土壙(第93・94図 →図版11・34)

R0調査区で検出された大型円形の袋状土壙で、A-47土壙の北端をわずかに切って掘りこまれている。底面は平坦である。規模は長軸長142cm、短軸長137cmで、検出面からの深さは69cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

5層から1層までは、使用停止後の堆積層である。その埋没状態

の特徴は3層に遺物一括廃棄が認められることである。まず床面直上にサラサラした明黒褐色土(5層)が、その上に基盤層に由来する黄色粘土ブロックを多量に



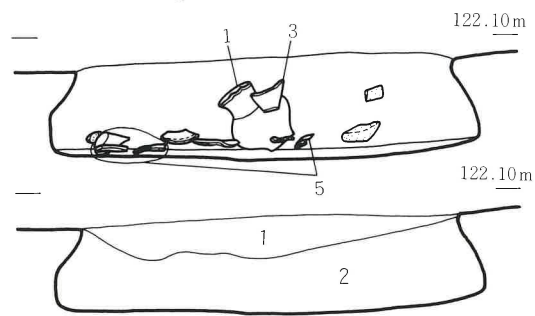
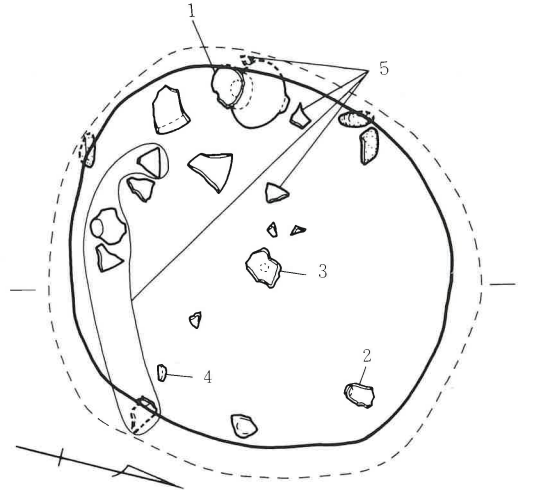
第94図 A区-48号土壌出土遺物(1/4)

含んだ4層が、中央が高くなるように堆積する。この層はおそらく近くで他の施設を作るために掘られた排出土を、土壌の上から投棄をしたものであろう。4・5層ともに遺物は皆無である。次に土器片や礫にくわえて焼土を多量に含む3層が堆積する。この層は汚れて黒色化し軟らかい遺物一括廃棄層である。2・3の甕が含まれ、ともに胎土に金雲母を含む搬入品である。その後2・1層が堆積している。小礫・炭・土器片を含み、1・4の甕の小片が出土した。3層の遺物一括廃棄を契機に、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。土壌廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌55)

A区-49号土壌(写真10、第95・96図 →図版12・34)

R0調査区で検出された大型円形の袋状土壌で、底面は平坦である。規模は長軸長180cm、短軸長170cmで、検出面からの深さは42cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

2・1層は、使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は2層に特徴的な遺物一括廃棄が認められることである。まず床面直上に、炭片・焼土・少円礫と黄色粘土ブロックを含む暗茶褐色土(2層)が厚く堆積する。その層の特に底面直上に多量の土器が検出された。2層の土器の出土状態は、すべて大型の破片を投棄したものであり、1の壺は東側の壁面に立てるように完形のまま出土した。この壺の底部側面には外側から焼成後に施された穿孔があり、口縁の一部も失われていた。そこでは壺の機能をなくす象徴的な行為がおこなわれている。同時に5の鉢はやはり壁際に大きく割れて散らばっていたが、完形に復元できるので、おそらく打ち割って壺の周辺に廃棄したのであろう。2の壺、3・4の甕も大型の破片であるが、その一部である。3・4・5の甕は火を受けて赤く焼けていた。なんらかの祭祀に使われた土器を一括埋置し、2層の土で埋めたものと推定される。なお1層はやや硬い明茶褐色土で、土器は含まない。

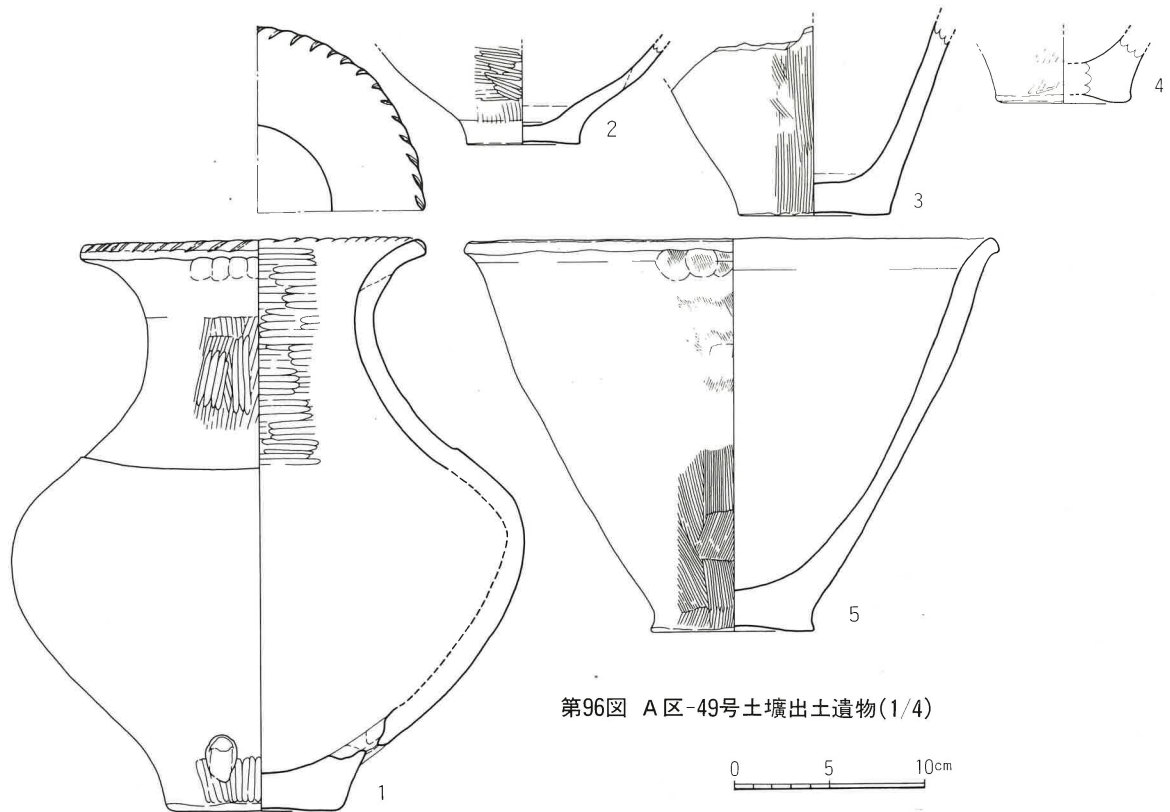


1層：明茶褐色土(やや硬い。炭・焼土小片含む。)
2層：暗茶褐色土(1層より軟かい。炭・焼土・黄色土ブロックを含み、土器多い。)
→土器一括廃棄層

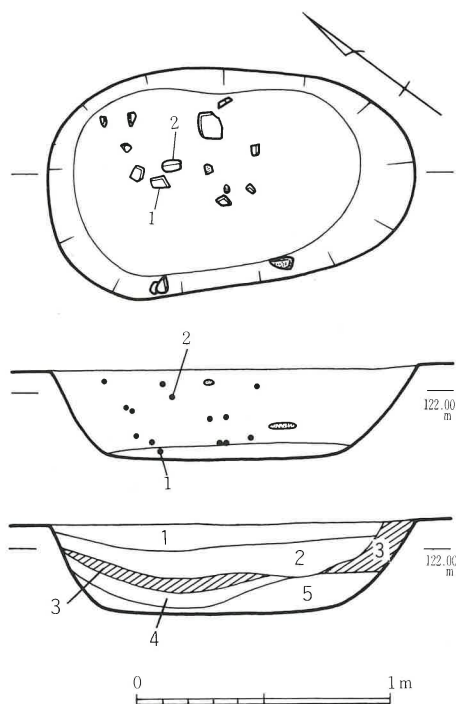
第95図 A区-49号土壌(1/30)



写真10. A区-49号土壌 No.1壺 出土状態(西から)



第96図 A区-49号土壙出土遺物(1/4)



- 1層: 暗黄褐色土(粘質強い)…1~2cm大の地山小礫。黄色土ブロック・焼土・炭・土器片含む。
- 2層: 暗褐色土(やや軟質)…炭・焼土・土器片含む。
- 3層: 黄褐色粘質土…基盤層ブロックそのもの。炭焼土なく、土器片少い。
→一氣に投げ入れられている。
- 4層: 黄褐色軟質土…よごれている。炭・焼土・土器片多い。
- 5層: 暗褐色土(やや軟質)…炭・焼土・土器片少し含む。

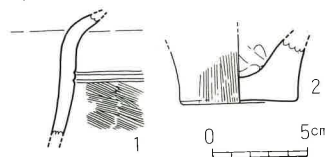
第97図 A区-50号土壙(1/30)

削り出しの段をつける壺Aで、口縁部上面に斜めの刻目を施す。
5の鉢Aは、被熱しており甕としてよいかもかもしれない。土壙廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期後半と推定される。(旧C地区土壙59)

A区-50号土壙(第97・98図 →図版12)

R19調査区で検出された長円形の土壙で、A-6住の柱穴に切られている。底面は平坦である。規模は長軸長146cm、短軸長80cmで、検出面からの深さは36cmである。平坦な底面からみて、廃棄用以外の目的で掘られた土壙であるが、その用途は不明である。

5層から1層までは、使用停止後の堆積層である。埋没の途中で、基盤層に由来する黄色粘土ブロックを多量に含んだ3層が廃棄されているが、全体に炭・焼土と土器の小片が含まれた廃棄物の堆積である。土壙使用後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたと推定される。1は3層より下から出土した甕A、2は2層出土の甕底部で、胎土に金雲母を含む搬入品である。土壙廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壙86)

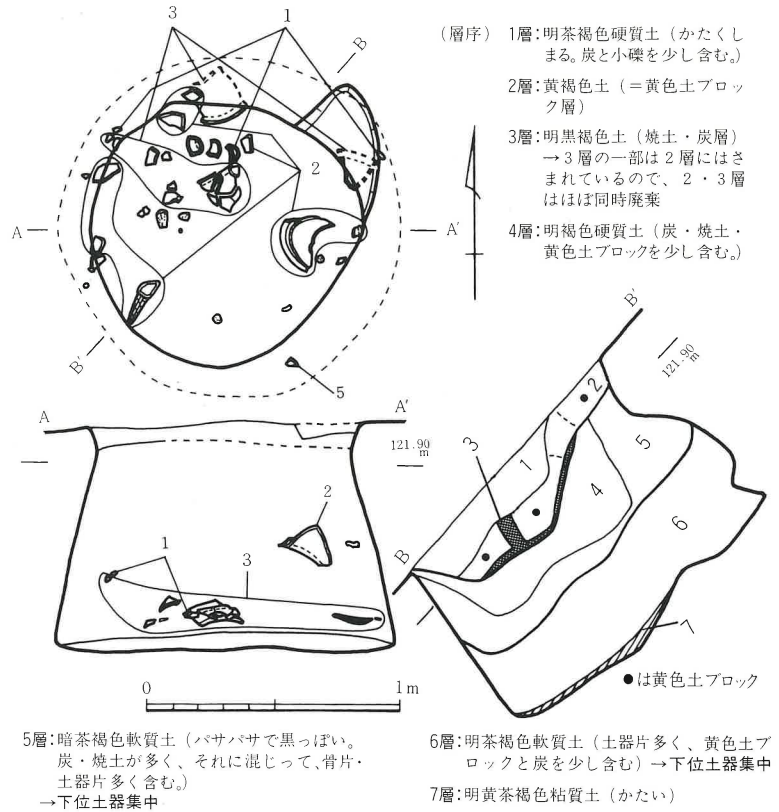


第98図 A区-50号土壙出土遺物(1/4)

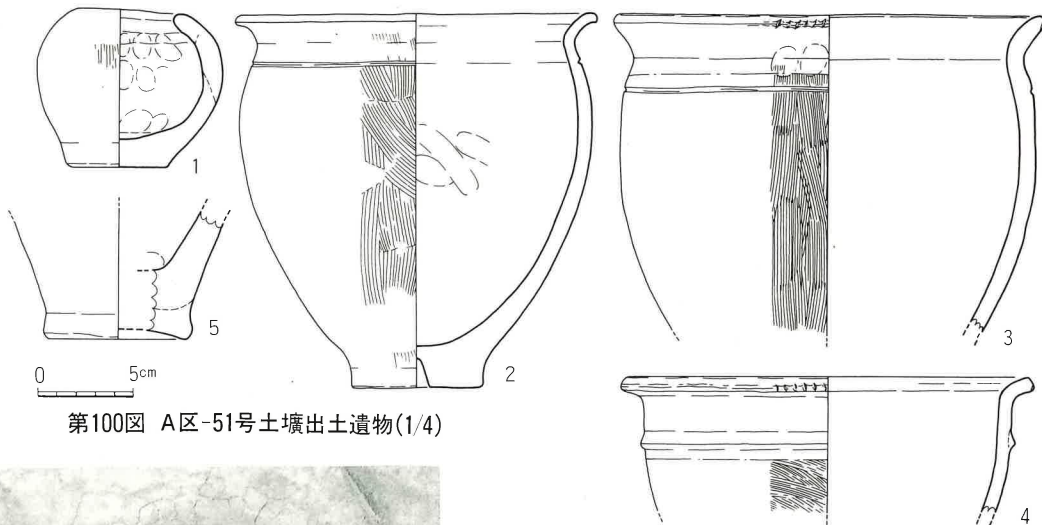
A区-51号土壌（第99・100図、写真11 →図版12・34）

R19調査区で検出された大型円形の袋状土壌で、底面はやや高低がある。規模は径135cmでほぼ正円形に近く、検出面からの深さは92cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

まず底面に硬く締まった7層がある。この層は使用中に繰り返し踏み踏まれて形成された床面層で、遺物はなく硬く締まっていた。6層から1層までは使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は下位に遺物一括廃棄が認められることである。まず下位に茶褐色の軟らかい6・5層が堆積する。6層には炭片と黄色土ブロックが含まれ、5層は炭・焼土と動物の骨片が多量に検出された。土器は大型破片の状態で6層下部を中心に5層におよぶ。1の小



第99図 A区-51号土壌 (1/30)



第100図 A区-51号土壌出土遺物(1/4)



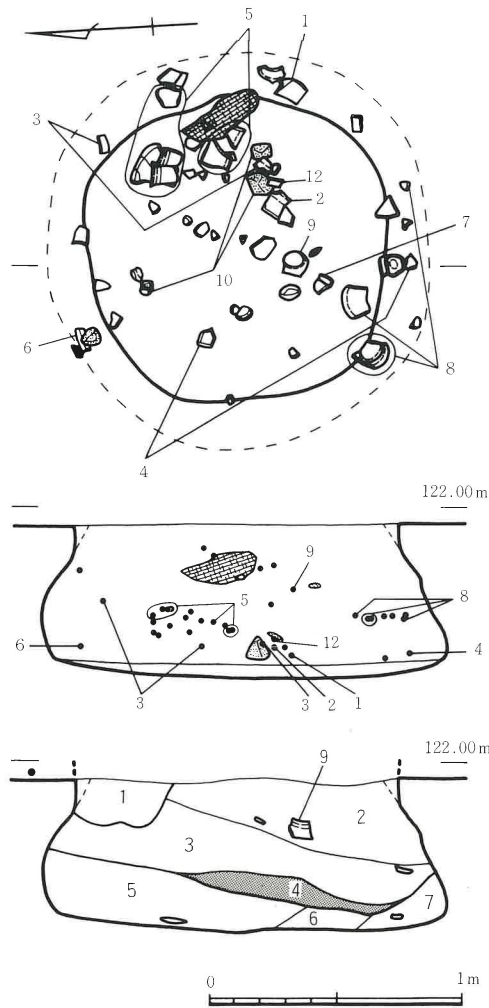
写真11. A区-51号土壌遺物出土状態 (西から)

型無頸壺と2の甕はばらばらで検出したが、完形に復元できた。3～5の甕はいずれも大型破片で出土したが、完形には復元できなかった。2・4の甕は煤が付着して被熱していた。以上のように完形の土器を割って廃棄している点と1のような小型壺を伴う点からみて、単なる生活廃棄物の投棄ではなく、なんらかの祭祀に使われた土器を一括廃棄して埋めていったものと推定される。この下位の遺物一括廃棄のあとに、やや硬い4層が投棄さ

れ、最後に、焼土・炭混層の3層が黄色土ブロックの2層と混ざりあうように、東の方向から投棄されている。そしてさらに硬く締まった1層が堆積する。4層以上には土器はないが、黄色土ブロックを多量に含むところから、おそらく故意に埋めたものであろう。

出土土器は、沈線で文様を施す甕Aが主体で、沈線は一条である。4のような如意形口縁に突帯を施す甕Bも共伴する。土器はいずれも在地産で、胴部が膨らむ特徴をもつ。土壙廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壙88)

A区-52号土壙 (第101・102図 →図版13・34・35)



第101図 A区-52号土壙 (1/30)

(層序)

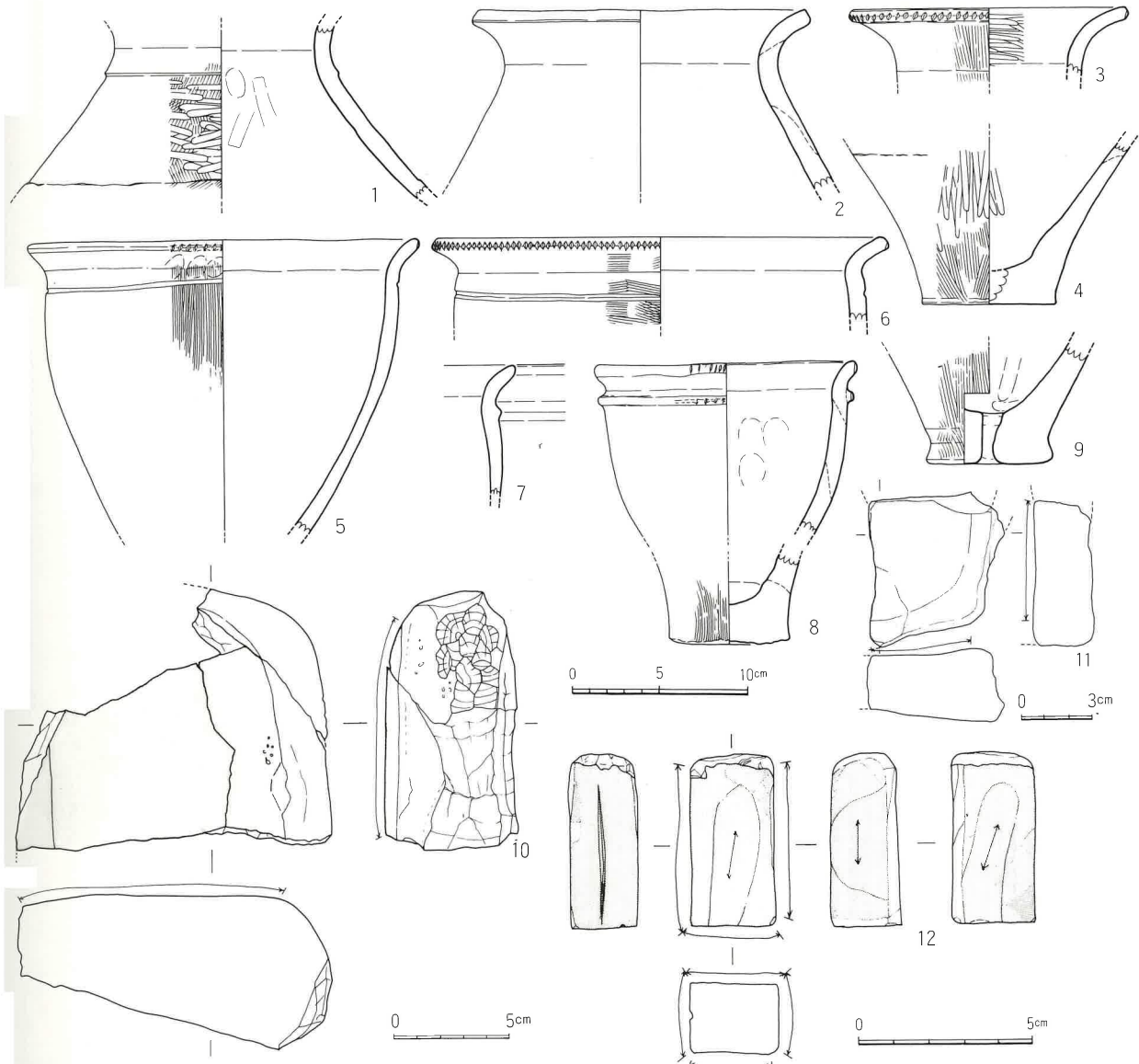
- 1層:黄褐色粘土と暗黄褐色土の混層。
→地山をほった土を投棄している。
 - 2層:暗黄褐色土(2cm大の黄色土ブロックと炭を含むほか、小礫と土器片多く含む。)
 - 3層:暗褐色土(土器片1cm大の黄色土小ブロックと円礫を含む。)
 - 4層:暗灰色土(炭を多く含む。)
 - 5層:暗黄褐色粘質土(礫と黄色土ブロック少し含む。)
 - 6層:黄褐色粘質土(黄色土ブロックを多量に含む。)
 - 7層:明黄褐色粘質土(黄色土ブロックを多く含むほか、土器片含む。)
- ※5～7層は、廃絶直後の堆積で、4～2層は、ゴミ穴として順次堆積。

R19調査区のA-7住(古墳時代前期前半)の床面下で検出された大型円形の袋状土壙で、底面はやや中央がくぼむが、おおむね平坦である。規模は長軸長157cm、短軸長167cmではほぼ正円形に近く、検出面からの深さは61cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

使用の痕跡をしめす層や床面の硬化は認められず、7層から1層まではすべて使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は4層に遺物一括廃棄が認められることである。まず底面直上に、基盤層に由来する黄色粘土ブロックを多量に含んだ黄褐色土(7～5層)が堆積する。この層には小礫と土器細片を含むが、炭や焼土はほとんどない。6の甕の口縁片が唯一図示できるものである。おそらく近くで、他の施設を作るのに掘った排出土を、土壙使用停止直後に投棄したものと推定される。次に土器片や礫にくわえて炭を多量に含む4層が堆積する。この層は遺物一括廃棄層である。1～4の壺、5の甕が含まれ、比較的大型の破片のまま廃棄されている。またそこには10・11の石皿の破片が含まれていた。特に10は被熱して割れた破片で、3片が接合した。12もこの層から出土した小型砥石の完形品である。壺の破片が多い点と、10のように火を受けてはじけた石皿を伴う点、

それに12のようなまだ十分使える砥石を廃棄した点からみて、生活廃棄物の投棄ではなく、なんらかの祭祀に使われた土器を一括廃棄したものと推定される。その後3～1層が堆積している。3～1層には小礫・土器片と黄色土ブロックを含み、炭片・炭化材が多い。4層の遺物一括廃棄を契機に、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。3～1層からは7・8の甕と9の甗の破片が出土した。

出土土器はいずれも在地産で、1は肩部に削り出しの段をつける壺Aである。甕は沈線文様の甕Aと、突帯の甕Bで、沈線は一条である。また9は底部に焼成前に穿孔を施した甗である。甗の胴部は張らない古い特徴をもつ。土壙廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期後半と推定される。(旧C地区土壙174)

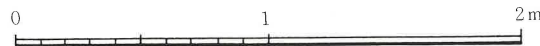
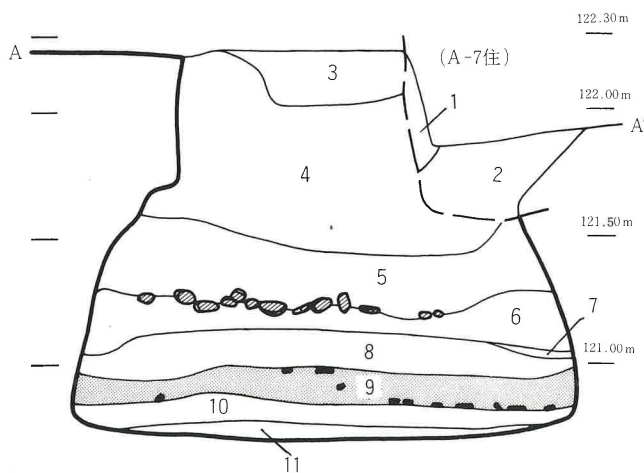
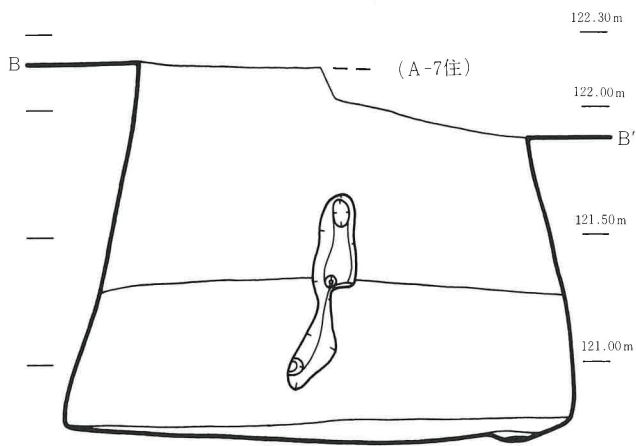
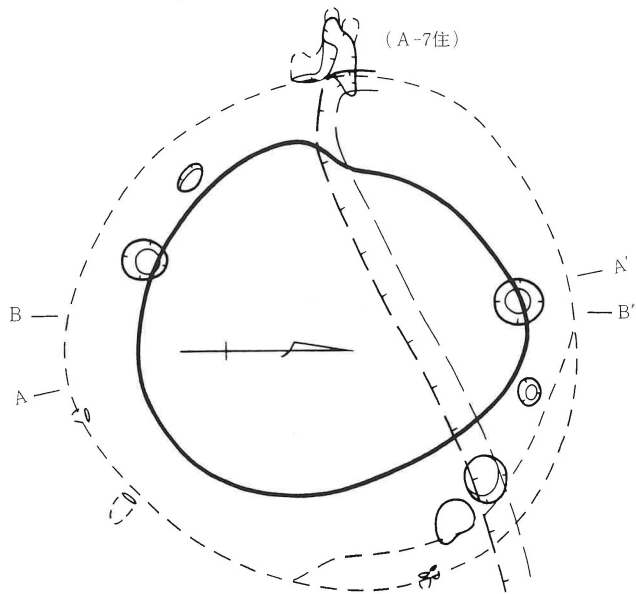


第102図 A区-52号土壙出土遺物 (1~9=1/4, 10・11=1/3, 12=1/2)

A区-53号土壙 (第103~106図 → 図版13・14・35・36)

R18ライン上で検出され、A-7住(古墳時代前期前半)に切られた大型円形の袋状土壙で、底面は平坦である。規模は長軸長203cm、短軸長202cmではほぼ正円形に近く、検出面からの深さは150cmである。壁の1箇所にてたての裂目が入っている。水が流れこんだことによる侵食の可能性はある。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される(第103図)。

まず底面によごれて黒褐色の11層が形成される。この層には炭・焼土・土器の細片を含み、基部が折れた廃品の磨製石斧(32)が検出された。おそらく使用中に形成された床面層である。その上の10層から1層までは使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は下位と中位に二度の遺物一括廃棄が認められることである(第104図)。まず床面直上に茶褐色の軟らかい10層が堆積する。この層には黄色土ブロックが含まれるが焼土・炭等は含まれない。おそらく故意に投棄したものであろう。その上の黒褐色の9層は炭・焼土と土器片が多量に検出され、土器は大型破片の状態で5~10cm大の破片ばかりで、細片がほとんどない。これが下位の遺物一括廃棄である。そのなかには1~3の壺、8・10・12・18・21・22・24の甕をばらばらで検出したが、完形に近く復元できるものが多い。甕は煤が付着し被熱していた。おそらくまとめて打ち割られたものを廃棄したと考えられる。

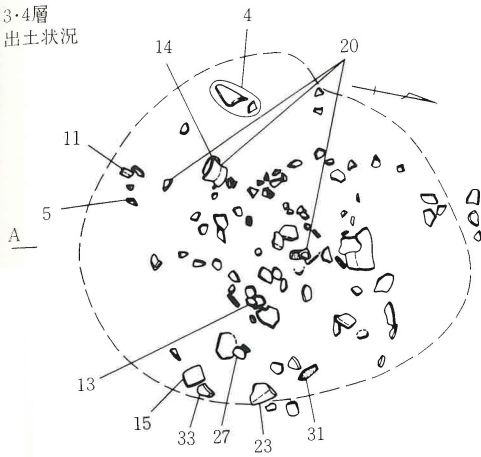


- (層序)
- 1層:暗褐色土
 - 2層:黄茶褐色粘質土(黄色土ブロック含む)
※1・2層は、A区-7号竪穴住居の床面下埋土。
 - 3層:暗褐色軟質土(焼土・炭片・大型礫・土器片含む。)
 - 4層:暗茶褐色土(やや粘質。焼土・炭片・小礫・土器片を多く含む。)
 - 5層:暗茶褐色土(バサバサして暗い。焼土・炭・土器片を多量に含み、骨片も含む。)
 - 礫層:5~10cm大の円礫の堆積。
 - 6層:暗褐色軟質土(非常にやわらかい。炭・焼土・土器片・骨片の集中的な廃棄がみとめられる。)
※5・6層は一連の遺物廃棄層で、途中で礫が投棄されたもの→中位土器集中
 - 7層:茶色粘質土(水っぽくやわらかい。)
 - 8層:暗茶褐色粘質土(かたい。黄色土ブロック、焼土・炭・土器片少し含む。)->中央部がもり上がる。
 - 9層:暗黒褐色粘質土(やわらかい。炭・焼土多く、5cm大の土器破片が多量に含まれる)->下位土器集中
 - 10層:明茶褐色粘質土(やわらかい。黄色土ブロック含むが、焼土・炭・土器等は含まない。)
 - 11層:明黒褐色土(炭・焼土・土器片を少し含む。)->貯蔵穴として使用中の堆積。

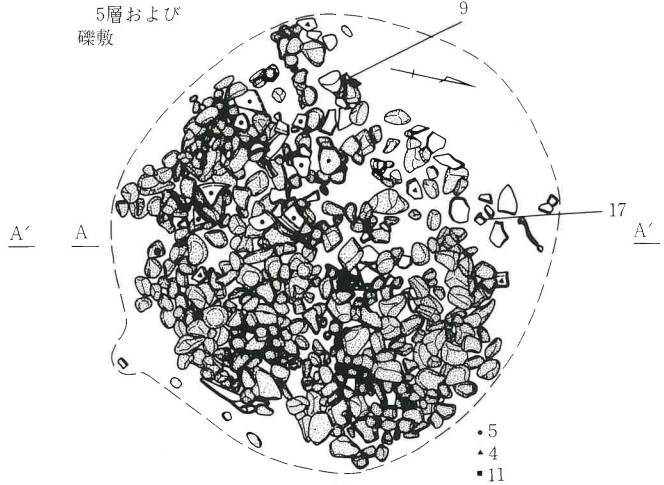
第103図 A区-53号土坑①(1/30)
—平面・断面と層序—

また28の完形の石鏃が1点伴出した。以上は単なる生活廃棄物の投棄ではなく、なんらかの祭祀に使われた土器を一括廃棄したものと推定される。この下位の遺物一括廃棄の後に、黄色土ブロックを含んで硬い8層が、中央部が盛り上がるように堆積し、さらに水を含んで軟らかい7層が一部に堆積する。おそらく壁にある裂目と関連

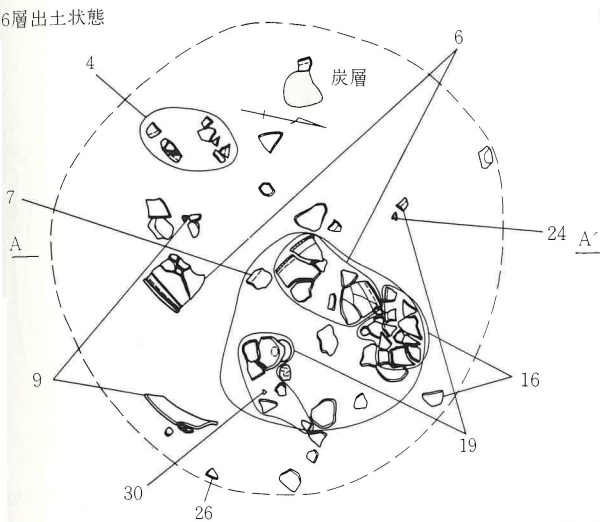
3・4層
出土状況



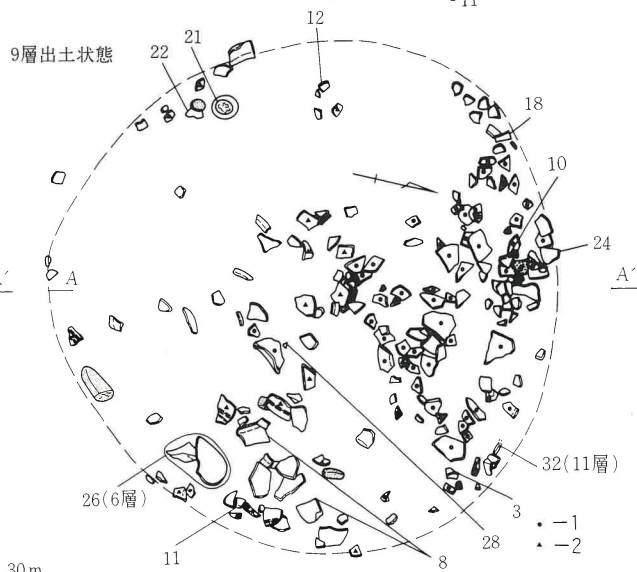
5層および
礫敷



6層出土状態



9層出土状態



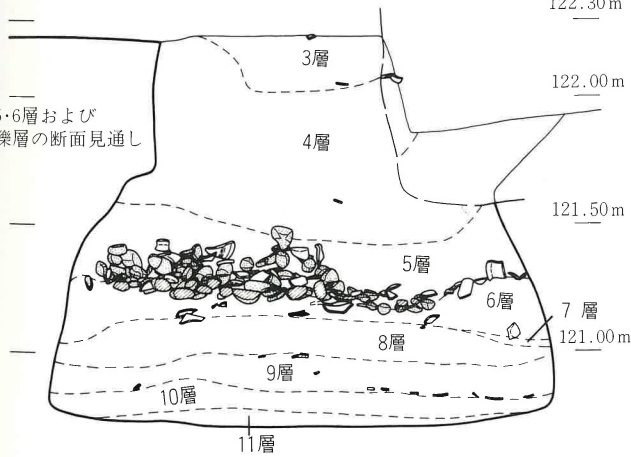
122.30m

122.00m

121.50m

121.00m

5・6層および
礫層の断面見通し

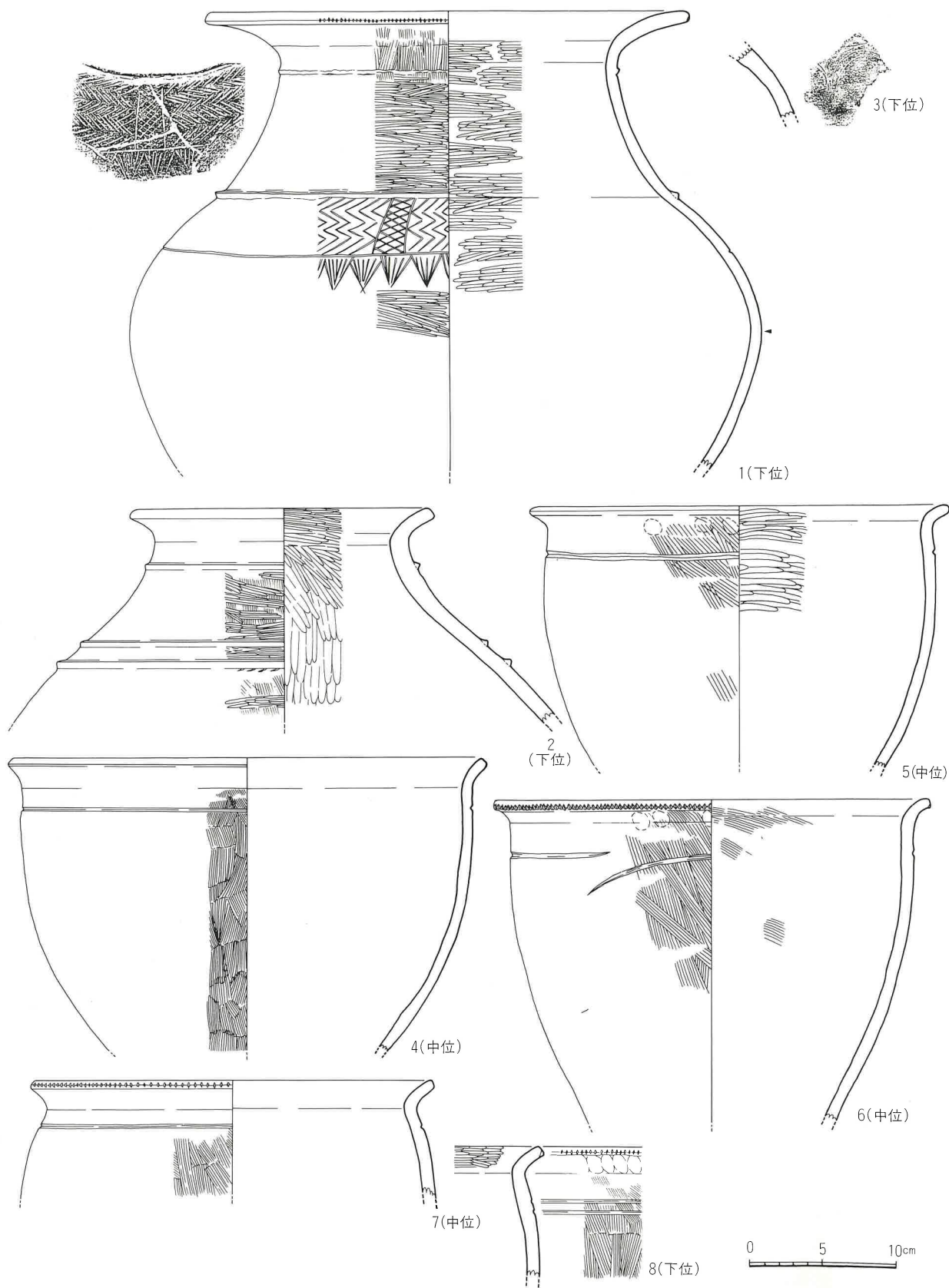


第104図 A区-53号土壌②

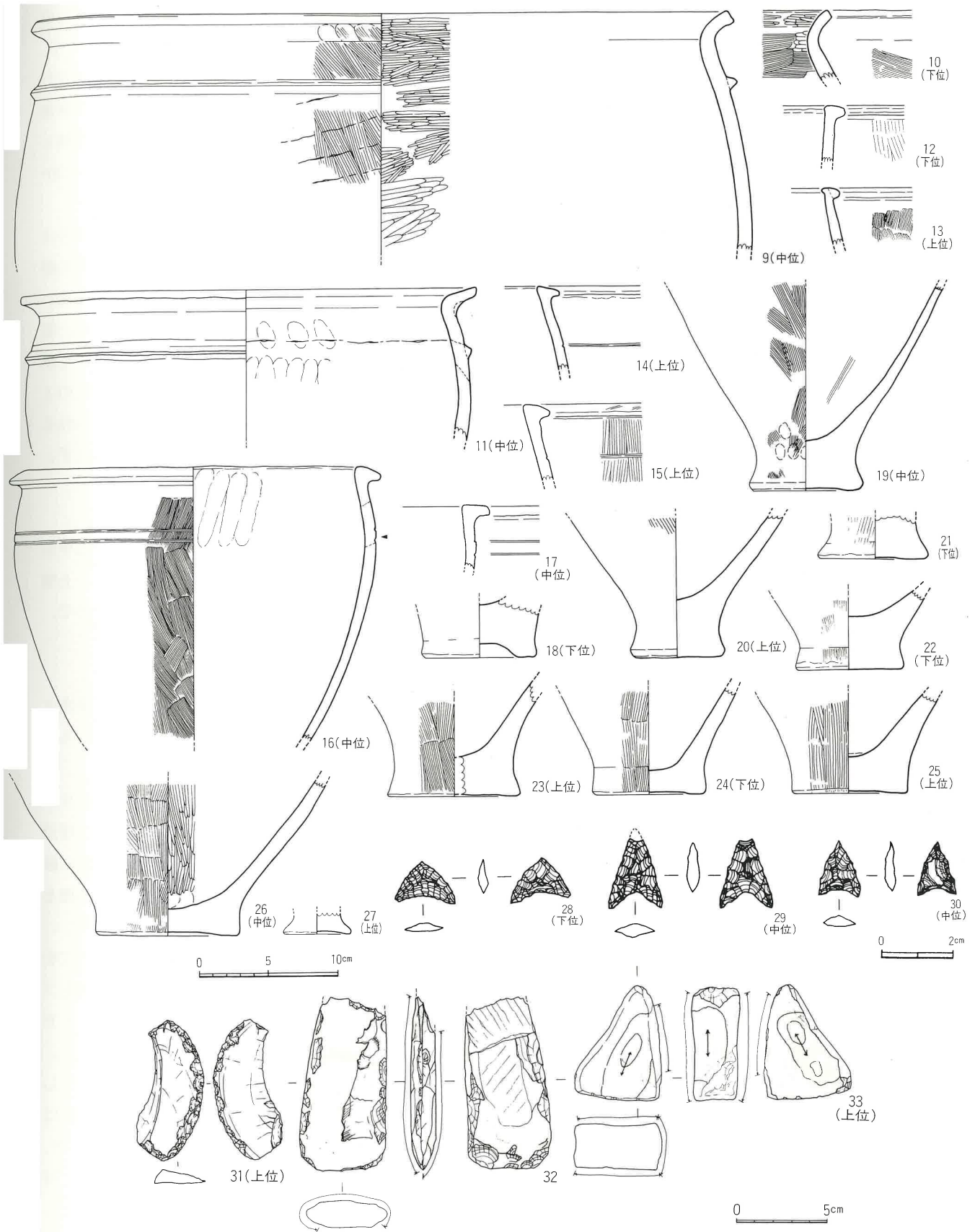
一埋没過程における遺物の出土状態(1/30)

0 1m

する層で、8層堆積後に水が流れこむ状態が一時あったことを示す。その上の6・5層ではさらに中位の遺物一括廃棄がおこなわれている。両層とも土質は非常に軟らかい茶褐色土で、焼土・炭のほかにも多量の土器・円礫・動物の骨片を含む。廃棄状態はまず6層に土器の大型破片を投棄し、その上に土壌をふさぐように大量の5～10cm大の円礫が投棄されて礫層が形成される。そのため下の土器が押しつぶされて割れている。さらにその上から再び多量の土器破片が投棄される。4の甕のように礫層の上下で接合する例があり、土器片→礫→土器片という投棄の過程は、一連の廃棄行為の結果とみてよい。下の6層からは6・7・9・16・19・26の甕と29・30の石鍬を検出し、上の5層からは5・17の甕を検出した。器種は甕のみで、完形に近く復元できるものが多い。甕のほ



第105图 A区-53号土壤出土遗物①(1/4)

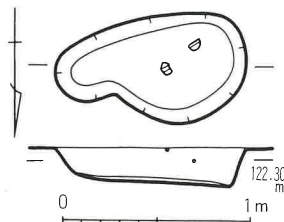


第106图 A区-53号土壤出土遺物②(1/4, 28~30=2/3, 31~33=1/3)

とんどは煤が付着して被熱していた。おそらくまとめて打ち割られたものを廃棄したとみられる。骨片を含む食物残渣と使用の痕跡のある甕のみを、多量の礫とともに投棄する点からみて、日常の生活廃棄物の投棄ではなく、一時に多量の食事を用意して、それに使われた土器を一括廃棄したなんらかの非日常的な行為の結果と推定される。なお下位と中位の土器は、下位の土器の一部が上に浮いたものを除いて全く接合せず、上下の遺物一括廃棄はそれぞれ異なる背景を持っていると推定される。最後に、焼土・炭・礫と土器片を含む4・3層が厚く堆積して埋没する。中位の遺物一括廃棄を契機に、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。13～15・20・23・25・27の甕・31のスクレイパーと33の砥石が出土した。

出土土器。下位では突帯を施す壺Aと沈線で文様を施す甕Aが主体で、沈線は一条と二条があるほかに12のような逆L字形口縁の甕Cも共伴する。12は搬入品である。中位では甕のみで、沈線で文様を施す甕A、突帯の甕B、逆L字形口縁の甕Cが主体で、沈線は一条と二条がある。9の大型甕は甕棺として使われてもおかしくない土器である。4・6・16・19は搬入品である。そして上位の4・3層から出土した土器は甕Cのみであった。石器。下位の遺物一括廃棄に伴った28は、腰岳産黒曜石製の完形の打製石鏃で、中位の遺物一括廃棄には同じく腰岳産黒曜石製の先端部欠損の打製石鏃の29と、姫島産黒曜石製の完形の打製石鏃である30がともなう。上位の4層から出土した31はサヌカイト製の完形のスクレイパーである。土器廃棄のなかに伴う石器が、石鏃に限られる点は興味深く、あるいは土器とともに祭祀に使われたのかも知れない。土器全体に大きな時期差は認められず、土壌廃棄の時期は、その出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌102)

A区-54号土壌 (第107図)



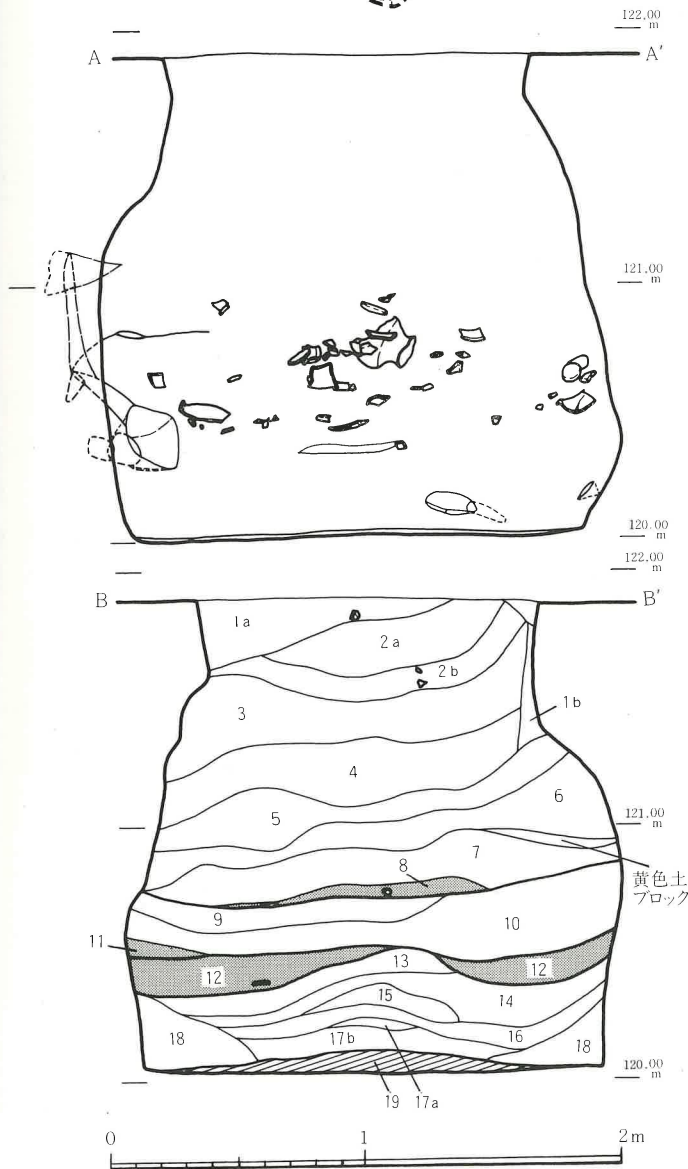
第107図 A区-54号土壌 (1/40)

R17調査区で検出された不定形の土壌で、底面はやや傾斜があるが、おおむね平坦である。規模は長軸長100cm、短軸長58cmで、検出面からの深さは21cmである。土壌の性格は不明だが、埋土中に弥生時代前期末の甕の底部片2片が混入していたので、この時期の遺構と認定した。(旧C地区土壌114)

A区-55号土壌 (第108～110図 → 図版14・36・37)

S0調査区で検出された大型円形の袋状土壌で、底面は平坦で、壁の側面に深さまざまな穴が四方に掘られている。その規模は長軸長216cm・短軸長210cmで正円形に近く、深さは検出面から186cmほどである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

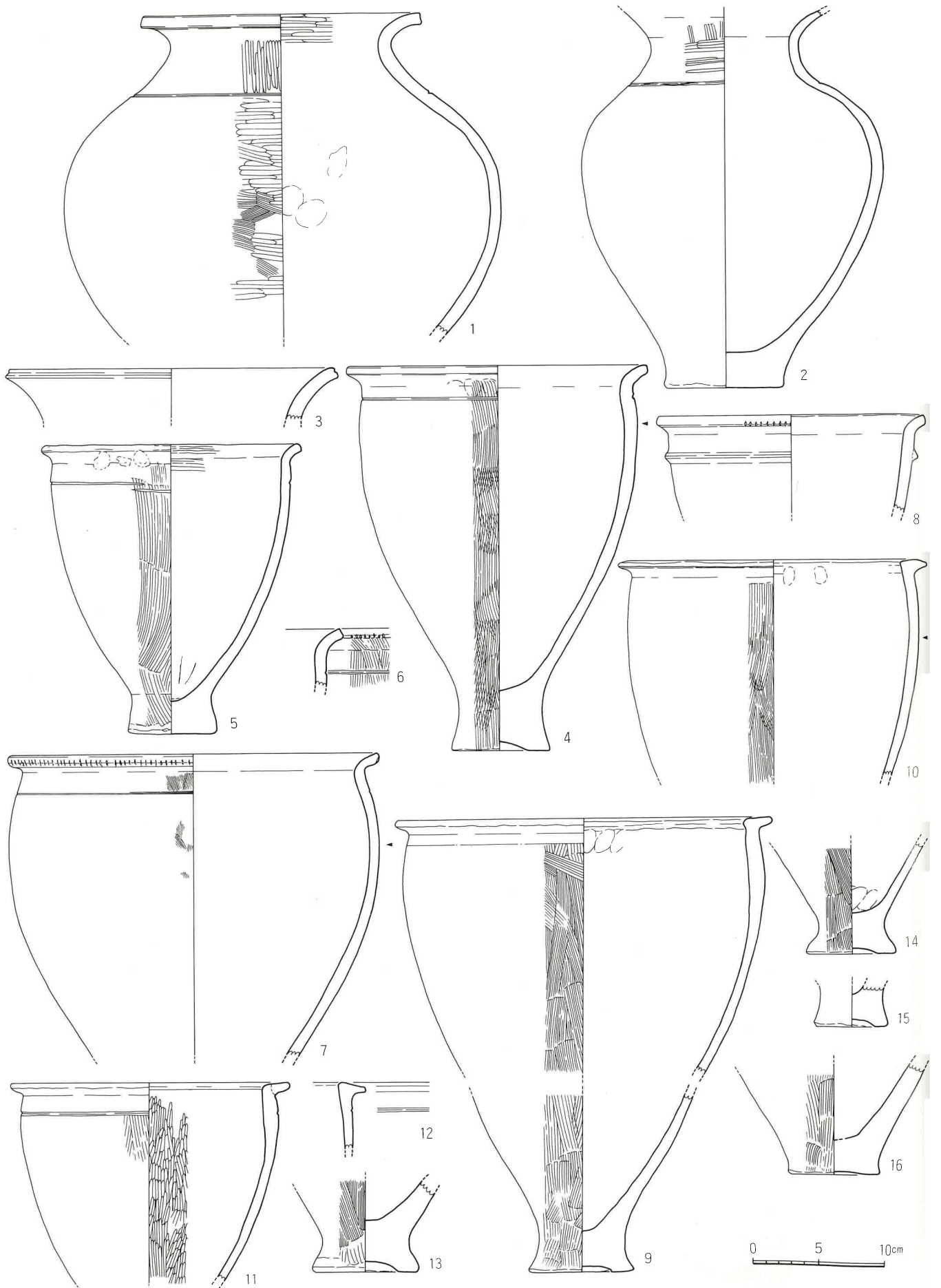
まず底面に黒褐色の19層が形成される。この層には炭・土器の細片を含み、20の高杯の破片と22の石皿破片が出土した。貯蔵穴使用中に形成された床面層である。その上の18～1層が使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は下位と中位に二度の遺物一括廃棄が認められることである(第108図)。まず床面直上の周縁に砂混じりの黄褐色土(18・17層)が堆積する。基盤層とまったく同質の土であることから、この層は壁の穴を掘る際の排出土であることがわかる。遺物は何も含まない。さらに16～13層が、中央部が盛り上がるように堆積し、砂層と焼土・炭混じりの層が互層をなしている。3の壺口縁片と12の甕Cの破片が混入する。おそらく壁の穴を掘ったのちひきつづき生活廃棄物を土壌の上から投棄したものであろう。その上の黒褐色の12・11層は黄色土ブロックと炭層の混層で、土器片を多量に含む下位の遺物一括廃棄である。そのなかには1の壺、4・6・7・9～11・13・14の甕を検出したが、完形に近く復元できるものが多い。甕はすべては煤が付着して被熱していた。おそらくまとめて打ち割られたものを廃棄したとみられ、なんらかの非日常的行為に使われた土器を一括廃棄したものと推定される。この下位の遺物一括廃棄の後に、やや粘質の10・9層が堆積し、16の甕底部以外に遺物はほとんどない。次の8層ではふたたび中位の遺物一括廃棄がおこなわれ、小礫と大型土器片を多く含む。2の壺、5・8・15・17～19の甕などで、完形に近く復元できるものが多い。壺も含めてすべての土器が煤が付着して被熱していた。壺が被熱している点などからみて、日常の生活廃棄物の投棄ではなく、一時に多量の食事を用意して、それに使われた土器を一括廃棄したなんらかの非日常的な行為の結果と推定される。なお下位と中位の土器は、下位の土器の一部が上に浮いたものを除いて全く接合せず、遺物一括廃棄にはそれぞれ異なる背景を持っていると推定される。この中位の遺物一括廃棄の後に、遺物の少なく硬い7・6層が堆積し、その上の軟らかい5



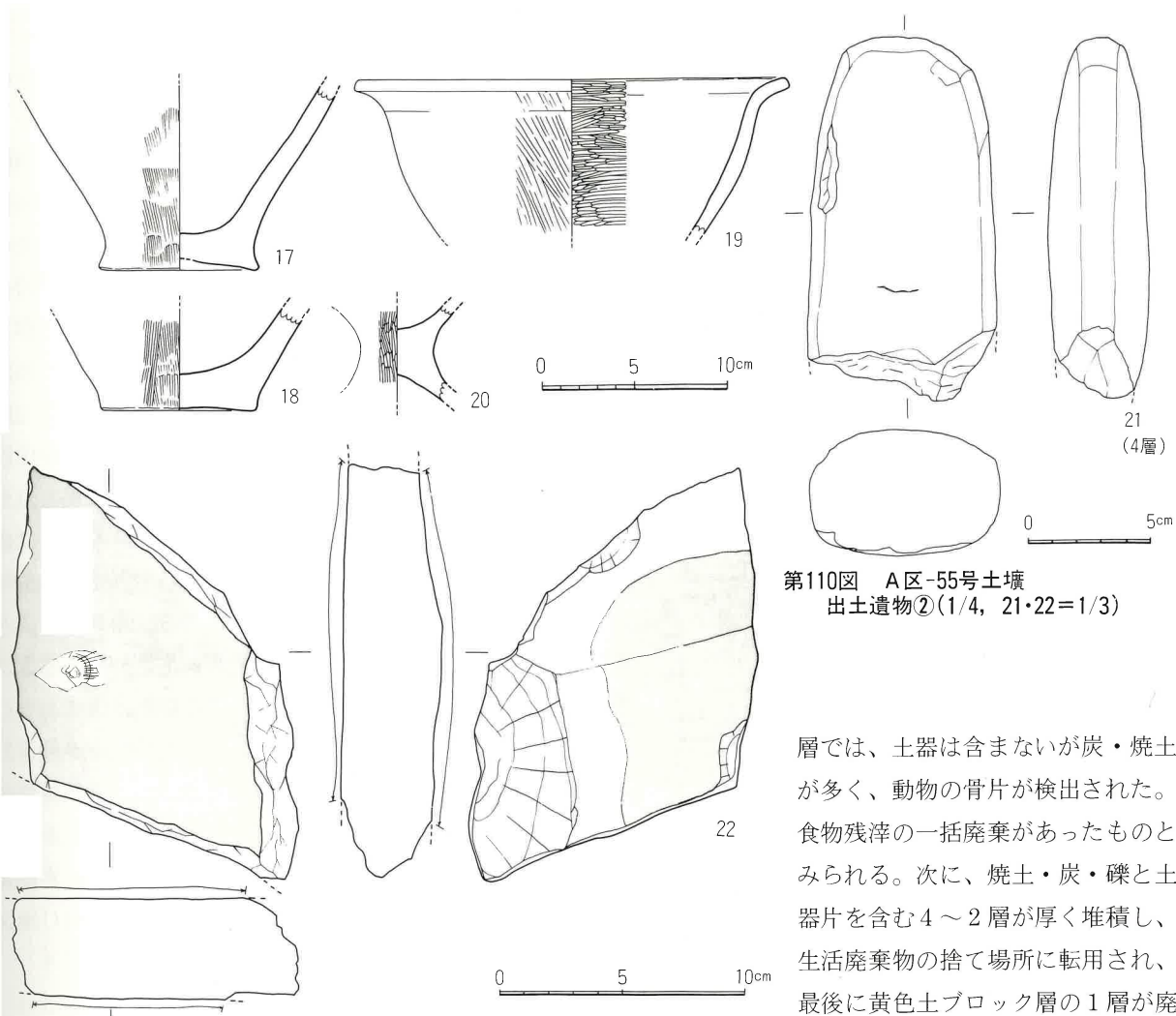
第108図 A区-55号土坑 (1/30)

(層序)

- 1a層:黄茶褐色土(黄色土ブロック層、土器片含む。)
- 1b層:黄茶褐色土(黄色土ブロック層、土器片含む。)->壁面が崩落した層
- 2a層:暗茶褐色土(小礫多く、土器も含む。)
- 2b層:明茶褐色土(小礫多く、焼土片・土器片を少し含む。)
- 3層:茶褐色軟質土(サラッとした土。小礫と土器片は含まない。)
- 4層:淡茶褐色粘質土(かたい。土器片少し含むが、小礫は含まない。)
- 5層:暗茶褐色土(4層より軟い。焼土・炭少し含み、骨片を検出)->上位廃棄層
- 6層:暗茶褐色硬質土(5層よりやや明るい。土器片含む。)
- 7層:茶褐色粘質土(非常にかたい。土器片含む。)
- 8層:暗黒褐色軟質土(焼土・炭・土器片を多量に含む。)->中位土器集中
- 9層:明茶褐色土(やや粘質。小礫を多く含み、焼土・炭・土器片を少し含む。)
- 10層:暗茶褐色土(やや粘質。焼土・炭多く、土器片と小礫を少し含む。)
- 11層:暗黒褐色土(=炭層、土器片多量に含む。)
- 12層:明黒褐色土(黄色土ブロックと炭層の混層。土器片を多量に含む。)
※11・12層は下位土器集中
- 13層:暗茶褐色土(土器片を少し含み、礫多いが、焼土・炭は含まない。)
- 14層:明黒褐色土(焼土・炭多く、礫と土器片少し含む。)
- 15層:灰茶褐色土(砂まじり粘質土、何も含まない。)
- 16層:明黒褐色土(焼土・炭多く、礫と土器片少し含む。)
- 17a層:灰黄色砂質土(粘質もある。何も含まない。)
- 17b層:灰黄色土(砂まじり、何も含まない。)
※15・17層の砂層は、側面の穴からの排出土
- 18層:明黄褐色土(砂多い、17b層と同じ。)->両壁からおちた土
- 19層:暗黒褐色土(ややかたく、炭・土器片少し含む。)->貯蔵穴として使用中の堆積。



第109图 A区-55号土壤出土遗物①(1/4)



第110図 A区-55号土壌
出土遺物②(1/4, 21・22=1/3)

層では、土器は含まないが炭・焼土が多く、動物の骨片が検出された。食物残滓の一括廃棄があったものとみられる。次に、焼土・炭・礫と土器片を含む4～2層が厚く堆積し、生活廃棄物の捨て場所に転用され、最後に黄色土ブロック層の1層が廃

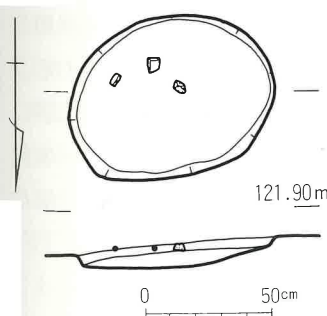
棄されて最終的にこの土壌は埋没する。4層からは刃部が欠けた21の磨製石斧の廃品が出土した。

出土土器は沈線で文様を施す壺Aと甕Aが主体で、沈線は一条である。8のような突帯の甕B、9～11のような逆L字形口縁の甕Cも共伴する。すべて在地産である。土器全体に大きな時期差は認められず、土壌廃棄の時期は、その出土土器から弥生時代前期末と中期初頭の問と推定される。(旧C地区土壌62)

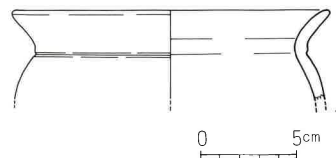
A区-56号土壌(第111・112図 →図版15)

S0調査区で検出された長円形の土壌で、底面はやや高低がある。規模は長軸長83cm、短軸長63cmで、検出面からの深さは9cmである。埋土は暗褐色土の単一層(1層)で、炭と土器細片を含む。胎土に石英を多量に含む搬入品の1の甕口縁が含まれる。残存部が浅いので土壌の性格と埋没状態の詳細は不明である。土壌廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。

(旧C地区土壌67)



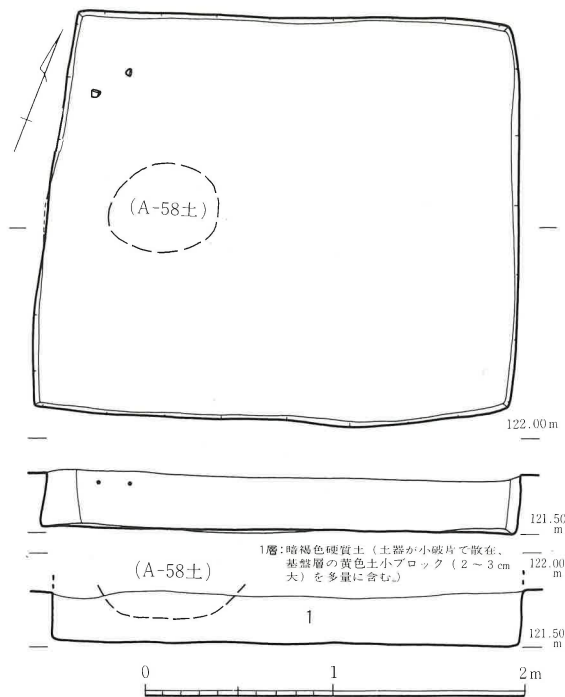
第111図 A区-56号土壌(1/30)



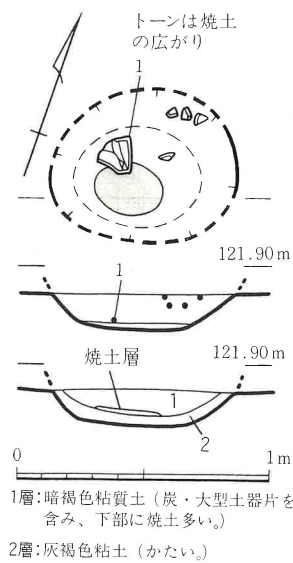
第112図 A区-56号土壌
出土遺物(1/4)

A区-57号土壌(第113図 →図版15)

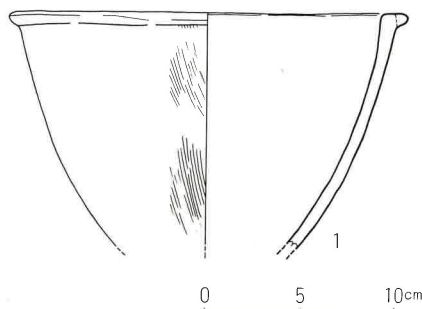
S0調査区で検出された長方形の大型土壌で、A-58土壌に切られている。底面はおおむね平坦である。規模は長さ253cm、幅214cm、検出面からの深さは34cmである。長軸の方位角は70度で、A-47土壌と同じ方位である。その大きさと形態からみて、居住用ではないなにかの施設として建設されたことは明らかである。埋土は暗褐色土の単一層(1層)で、土器細片を少量含む。2～3cm大の黄色土ブロックを多量に含くみ、かつ層が厚いにもかかわらず分層できない点からみて、故意に埋め戻したものと推定される。土壌廃棄の時期は、土器細片から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌68)



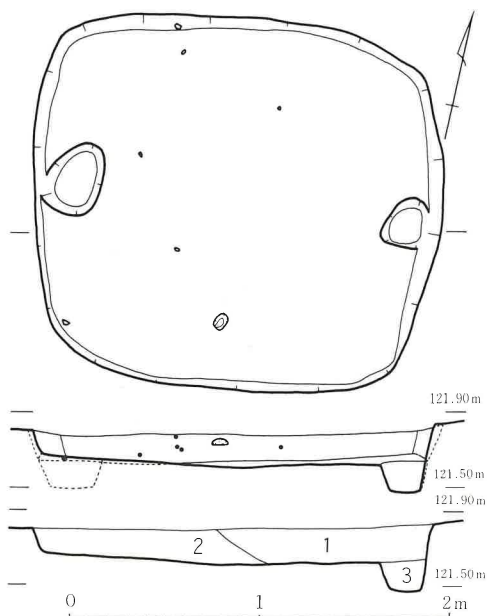
第113図 A区-57号土坑 (1/40)



第114図 A区-58号土坑 (1/30)



第115図 A区-58号土坑出土遺物 (1/4)



1層：暗茶褐色土（1～3cm大の黄色土ブロックと土器小片を含む。バサバサした土。）
 2層：黄茶褐色土（やや粘質。黄色土ブロックが均一に入り、土器小片を含む。）
 3層：暗褐色軟質土→柱穴埋土

第116図 A区-59号土坑 (1/40)

A区-58号土坑 (第114・

115図 →図版15)

A-57土坑の埋土中に別に掘りこまれた円形で底の丸い皿状の小型土坑である。土手の断面で確認したため一辺のみしか計測できなかったが、長さは60cm、検出面からの深さは14cmである。埋土は二層に分かれ、下の2層は硬い灰褐色粘土で、底面に張られたように検出した。その上に焼土層が堆積して、1層の土で埋まっている。おそらく炉として使われたものであろう。

1層内には1の甕Cの大型破片が残されていた。土坑廃棄の時期は、土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土坑146)

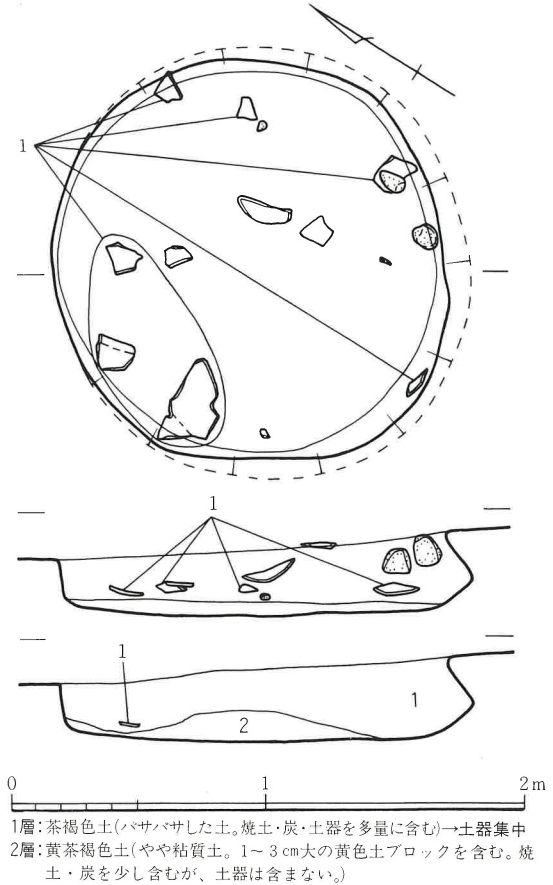
A区-59号土坑 (第116図 →図版15)

S19調査区で検出された長方形の土坑で、底面はおおむね平坦である。規模は長さ221cm、幅196cm、検出面からの深さは18cmである。長軸の方位角は84度である。両短辺に1本づつ柱穴があり、二本柱の支えを備えている。その規模と構造からみて、居住用とは異なるなんらかの施設として使用されたことは明らかである。埋土は、二層に分かれるが、全体に黄色土ブロックが均一に入り、土器細片を少量含む。短時間に埋め戻されたとみられる。土坑廃棄の時期は、土器細片から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土坑69)

A区-60号土壌 (第117・118図 →図版15・37)

同じくS19調査区で検出された大型円形の袋状土壌で、底面は平坦である。規模は長軸長168cm、短軸長166cmでほぼ正円形に近く、検出面からの深さは33cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

使用状態を知る手がかりはなかったが、埋没状態では1層に遺物一括廃棄があることを確認した。まず黄色土ブロックと炭・焼土を含む1層が、中央部に盛り上がるように堆積している。土器は含まない。おそらく土壌使用停止直後に土壌の上から落下した自然堆積物であろう。その上に茶褐色のバサバサした1層が厚く堆積する。そのなかに焼けた礫と大型土器片が多量に含まれ、逆に細片はほとんどないので遺物一括廃棄と評価される。散らばっていた大型破片の大部分は1の甕に接合復元されたが、その底部はなかった。甕は被熱した大型の甕Bである。他に破片の中には壺の破片が含まれている。おそらく打ち割られたものを廃棄したとみられる。焼けた礫もいっしょに捨てられているので、なんらかの非日常的行為に使われた土器を一括廃棄したものとも考えられるが、はっきりしない。土壌廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌93)

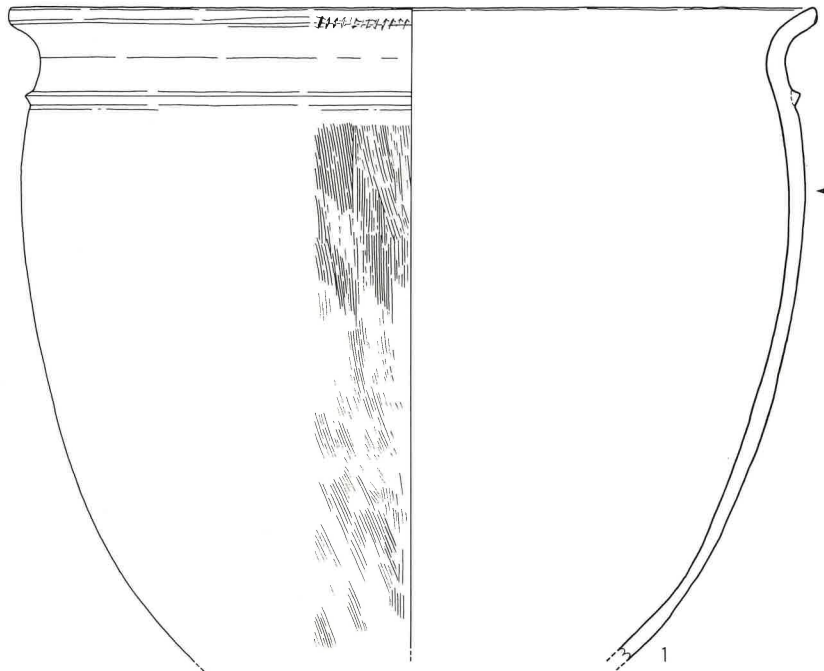


第117図 A区-60号土壌 (1/30)

A区-61号土壌 (第119図)

S19調査区で検出された不定形の土壌で、A-62土壌に南側を切られている。底面は平坦で浅いピットが1箇所ある。規模は長軸長183cm、短軸長104cmで、検出面からの深さは10cmである。なんらかの使用目的を以て掘られた穴だが、その性格は不明である。

埋土は暗褐色粘質の硬い単一層(1層)で、炭・焼土等はなく、土器細片を1点検出した。残存部が浅いので埋没状態の詳細は不明である。土壌廃棄の時期は、その細片から判断して弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌95)

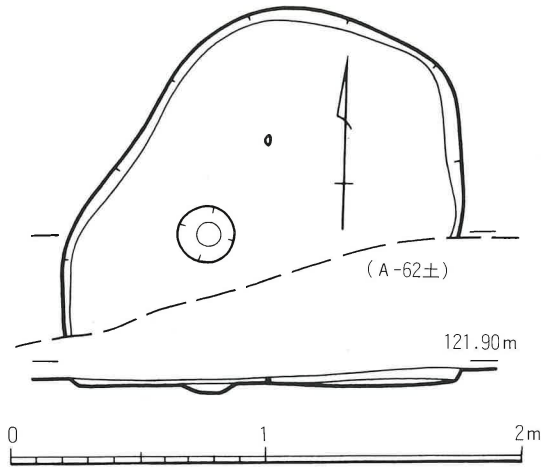


第118図 A区-60号土壌出土遺物 (1/4)

A区-62号土壙（第120・121図、写真12 →図版16・37）

S19～T19調査区で検出された東西に長い隅丸長方形の大型土壙で、A-61土壙を切って掘りこまれている。底面はやや高低があるが、おおむね平坦である。規模は長さ329cm、幅205cm、検出面からの深さは11cmである。長軸上に二本柱を備えている。しかし床面には炉はなく、食物貯蔵用の竪穴建物であった可能性が高い。そして廃絶時に「火災」により焼失したものと推定される。

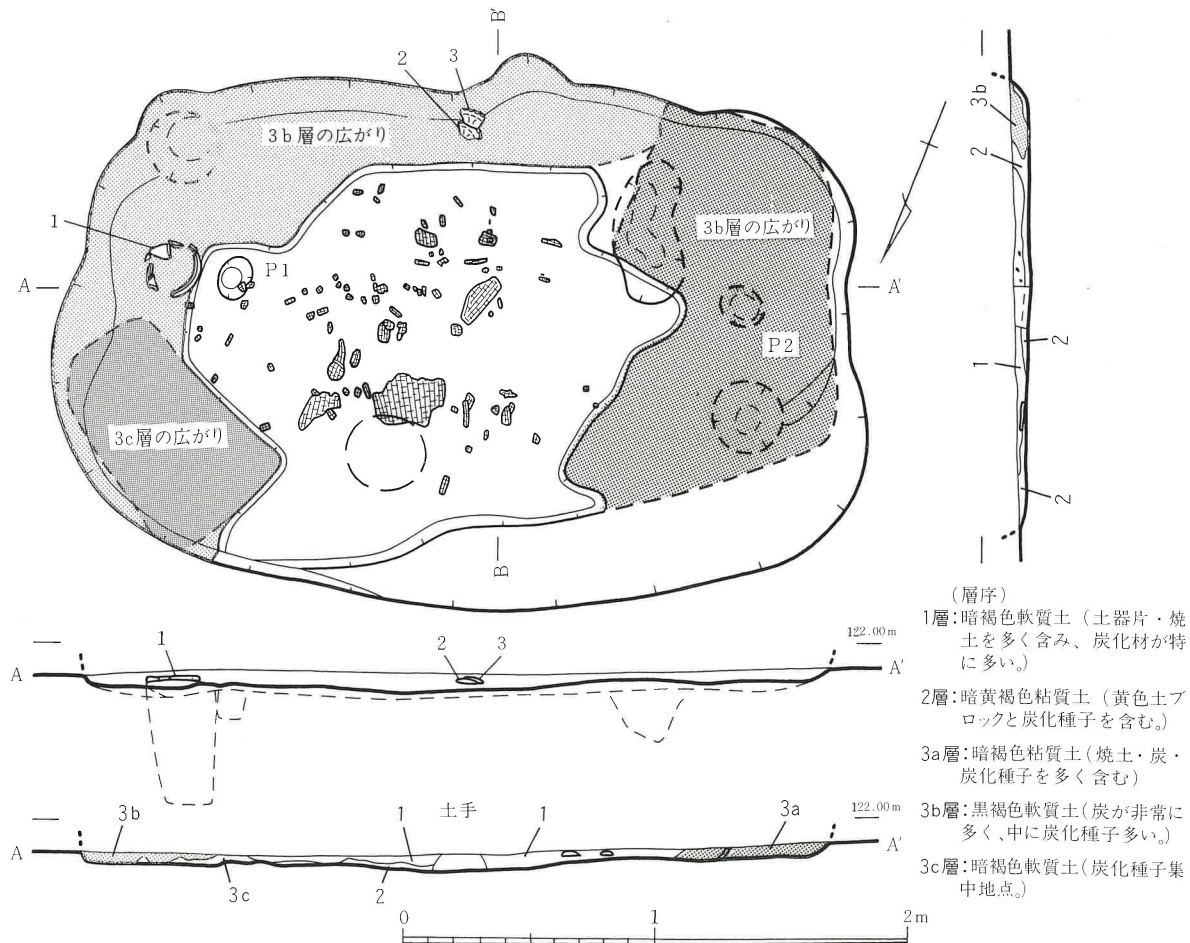
上部の削平が激しいので底部の埋没状態しからなかった。まず南壁ぎわの中央に、二枚のサヌカイト製スクレイパー（第121図2・3）が刃を外に向けて、重ね置かれた状態で検出された。まだ使用に耐える製品が置かれたままになっている。さらに東側のP1の外側に、底面に密着して逆さまに置かれた1の甕を検出した。削平のため胴部以下はなくな



第119図 A区-61号土壙 (1/30)

ているが、おそらく完形品をふせて置いたものであろう。ちなみにこの甕は、胎土に金雲母を含む搬入品で、被熱した日常土器の転用品である。以上の土器と石器の出土状態が、日常の使用状態のままであるとは考えにくい。おそらく廃絶時に意図的に配置されたと推定される。

その上に以上の遺物をおおって、まず炭片・焼土片と炭化種実を大量に含む3層が、土壙の周縁に広く堆積する。場所によりその含む密度が異なり、3C層は土壙の隅に長方形に検出された。腐朽した入れ物の痕跡であろうか。分析の結果、炭化種実はずべてマメ類であることが判明した（資料17・18）。つまりこの土壙に貯蔵され



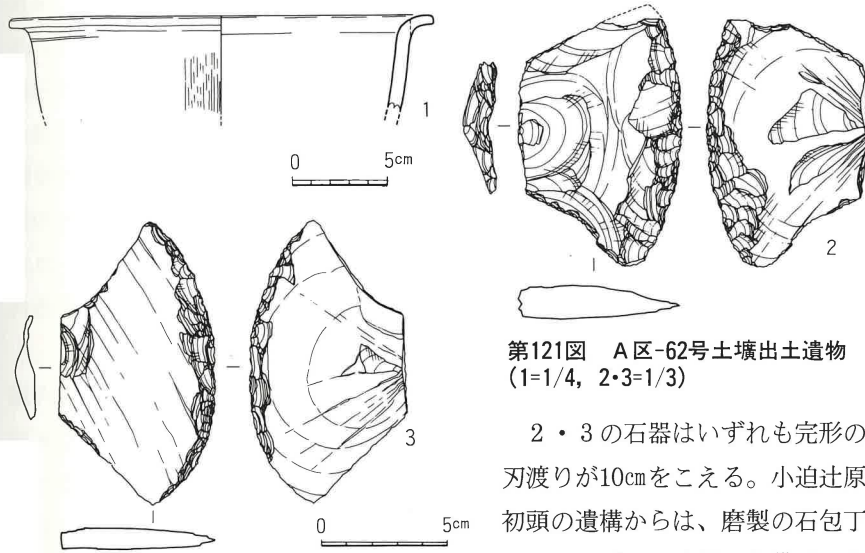
第120図 A区-62号土壙 (1/30)

(層序)

- 1層：暗褐色軟質土（土器片・焼土を多く含み、炭化材が特に多い。）
- 2層：暗黄褐色粘質土（黄色土ブロックと炭化種子を含む。）
- 3a層：暗褐色粘質土（焼土・炭・炭化種子を多く含む）
- 3b層：黒褐色軟質土（炭が非常に多く、中に炭化種子多い。）
- 3c層：暗褐色軟質土（炭化種子集中地点。）



写真12. A区-62号土壇検出状態(北西から)



第121図 A区-62号土壇出土遺物
(1=1/4, 2・3=1/3)

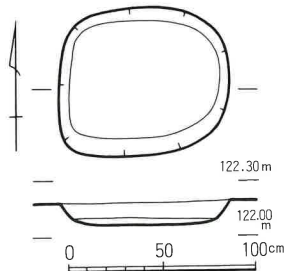
2・3の石器はいずれも完形のサヌカイト製のスクレイパーで、刃渡りが10cmをこえる。小迫辻原遺跡の弥生時代前期後半から中期初頭の遺構からは、磨製の石包丁がまったく出土していないので、この石器がこの時期の収穫具である可能性が高い。土壇廃棄の時期

は、甕から判断して弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壇96)

A区-63号土壇(第122図、写真13)

S18調査区で検出された、円形で底の丸い皿状の小型土壇である。規模は長軸長89cm、短軸長76cmで、検出面からの深さは13cmである。その性格は不明である。埋土は暗黄褐色の単一層(1層)で、炭・焼土と土器細片を含む。残存部が浅いので埋没状態の詳細は不明である。土壇廃棄の時期は、その細片に含まれた甕底部の小片から判断して、弥生時代前期末と推定される。

(旧C地区土壇103)

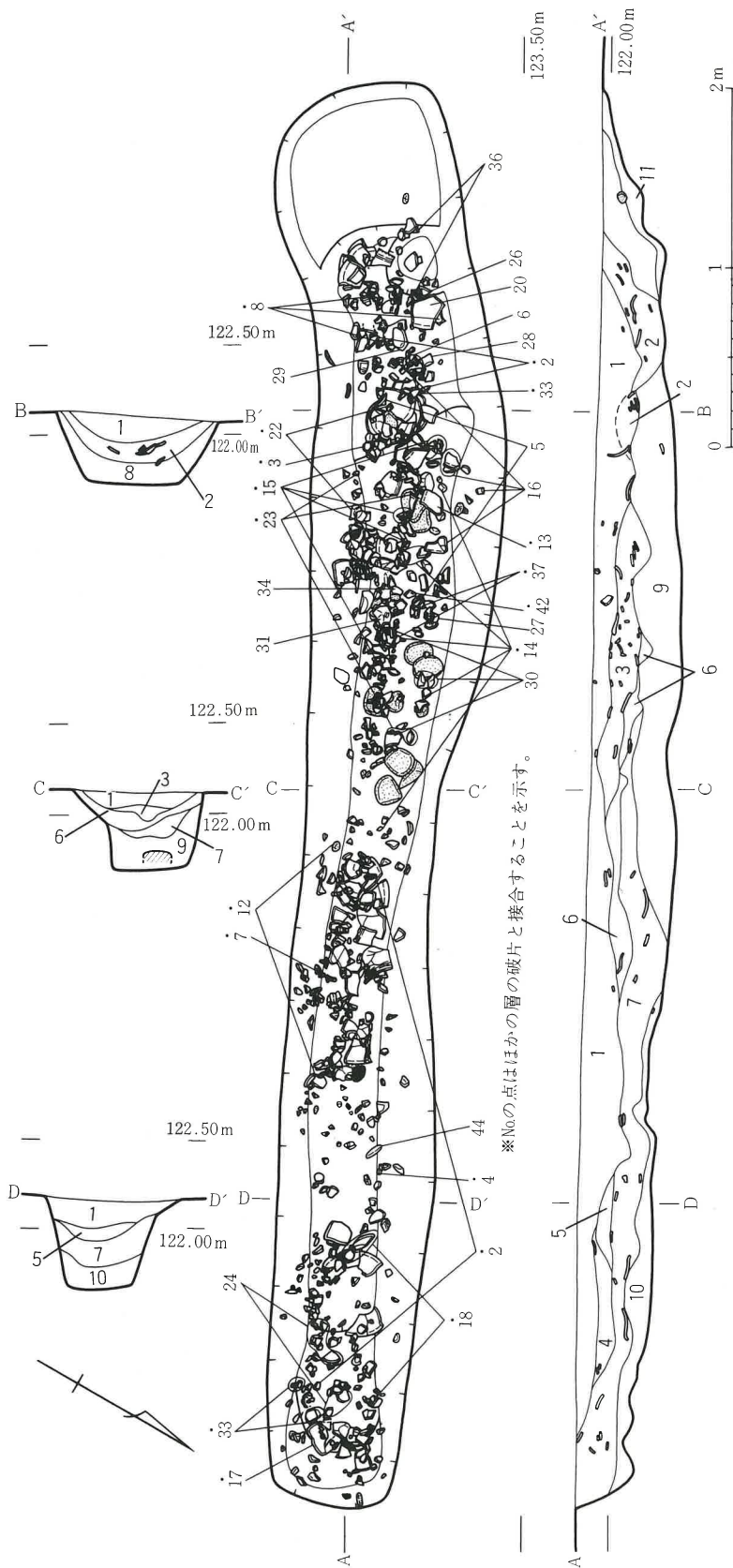


第122図 A区-63号土壇
(1/40)



写真13. A区-63号土壇遺物出土状態(西から)

ていた食料そのものである。同時に中央部には、炭化種実と黄色土ブロックを含む粘質の2層が薄く広がり、その上に炭化材と焼土を多量に含む、軟らかい1層が堆積していた。1層堆積時に明らかに木材が燃える状態であったことがわかり、それが3層と2層をおおっている。この埋没状態を、不時の火災による食料貯蔵穴の焼失と考えることも可能であるが、土器と石器の出土状態と、柱穴とみられるP2は廃絶時に3層におおわれ、焼けた状態の柱は検出されていないことなどから、意図的な焼却という解釈も可能である。後者の場合、最初に置かれた石器と甕は一種の埋納ということになる。



第123図 A区-64号土壌① -遺物出土状態と層序- (1/40)

- (層序)
- 1層：暗茶褐色土(炭片と炭化種子を多く含む、焼土・土器も多い。土器は小破片が多い。)
 - 2層：暗褐色土(炭化種子は含まないが、骨片が検出できる。土器片の大量廃棄あり)→8・9層を覆っている。
 - 3層：暗褐色土(この層を中心に骨片が多く出土。炭化種子を少し含む)→2層と連続する一連の遺物廃棄層
 - 4層：明茶褐色土(この層を中心に骨片が多く出土。炭化種子を少し含む。土器片の量は少ない。)
 - 5層：明褐色土(炭を少し含むが、土器片を全く含まない。)
 - 6層：黄茶褐色土(炭化種子なし、土器・炭がわずかに入る)→7層上にうすく広がる遺物の少ない間層。
 - 7層：明茶褐色土(土器片大量廃棄層)
 - 8層：明茶褐色土(土器片・炭を少し含む)
 - 9層：明茶褐色土(下部底面に磨石等の石器をすてている。炭化種子を少し含むが、黄色土ブロックは含まない。)
 - ※8層と9層は同一時に堆積した層。
 - 10層：明茶褐色土(黄色土ブロック含むが、遺物は何も含まない。)
 - 11層：黄茶褐色土(何も含まない)→土壌掘削時に堆積した土。

A区-64号土壌(第123~127図、写真14~16 →図版17・37・38)

R18~S18調査区で検出された船底形の長大な土壌である。底面も凸凹した船底状で、横断面は逆台形になる。規模は長さ810cm、幅91cmで、検出面からの深さは40cmである。長軸の方位角は63度である。後述するようにどんぐり類の食品加工用の施設として掘られた可能性が考えられる。

まず底面の両端に茶褐色の11・10層が堆積する。この層には黄色土ブロック以外は何も含まず、土壌掘削時に動いた土が残されているものと考えられる。その上の9~1層の使用後の廃棄土層である。その埋没状態の特徴は7層と2+3層に二度の遺物一括廃棄が認められることである(第124図)。まず底面直上の中央から西に盛り上がるように茶褐色土(9・8層)が

堆積する。この層は黄色土ブロックを含まず、ほかの穴からの排出土を利用したものではないので、土そのものが選ばれている可能性がある。土器はなく、少量のコナラ属の炭化種実と、礫石器類が底面から出土した。特に後者は、40・43の小型石皿の完形品と、同じ大きさの円礫6個の計8個からなっていた(写真16)。この石にどんぐり類が伴っている点を考慮すると、この土層は石皿を使ってどんぐり類を加工する施設、すなわち食物加工の目的で掘られた可能性が指摘できる。そして使用した道具をそのまま残して埋め戻した可能性が高いのである。さらに8・9層埋没の直後に、東半分の残された凹みに大量の土器を主とした遺物一括廃棄がおこなわれて7層が形成される。さらに、遺物の少ない間層(6層)を挟んで、3層と2層の土器一括廃棄層が、一部下の8・9層を掘りこんで形成される。3層にはコナラ属の炭化種実がふくまれ、2層には動物骨片が含まれる。また東の7層の上には、動物の骨片を多量



写真14. A区-64号墳中央部縦断面の土層

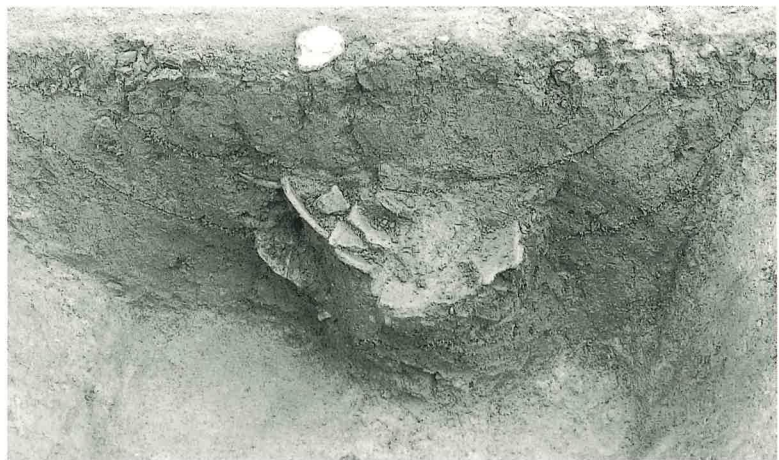
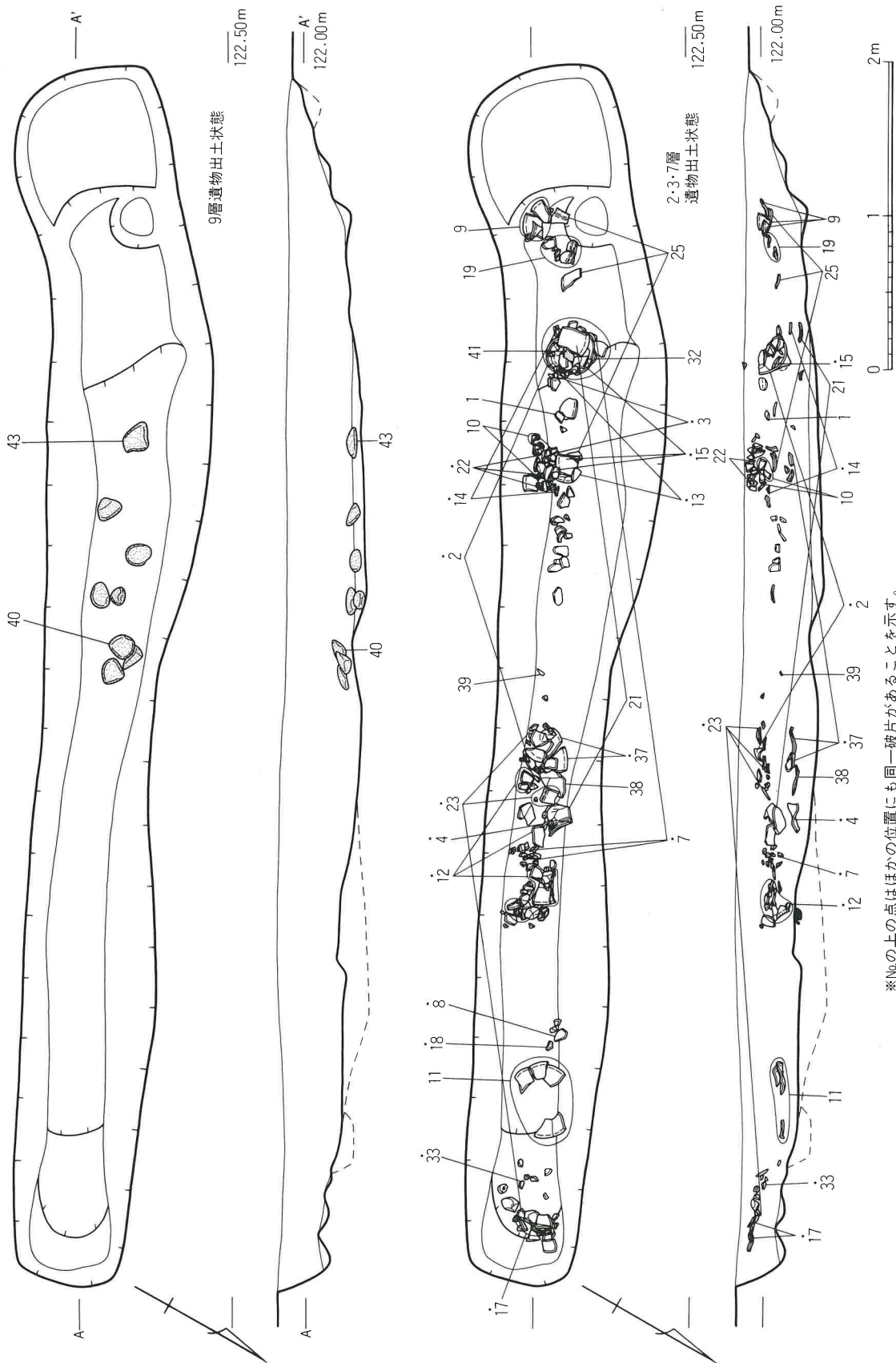


写真15. A区-64号土層横断面の土層(B断面)

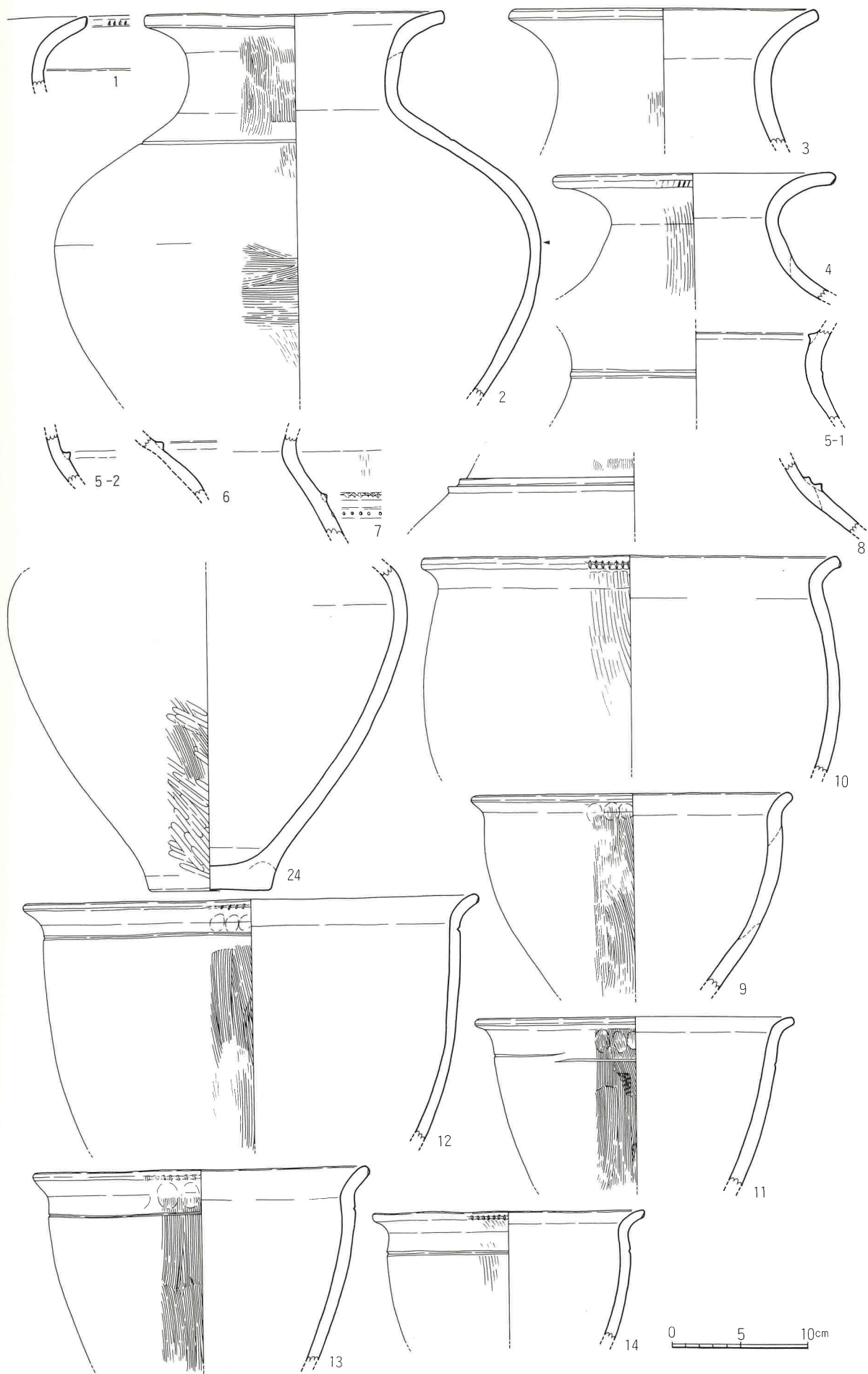
を含む4層が堆積する。層序からは7層→6層→3+2層・4層の順は明らかだが、相互に土器が接合するので、以上の遺物一括廃棄は、短期間の一連の廃棄行為の累積と言える。7層遺物一括廃棄層では、4・7の壺片と10～12・18・21・23・33の甕および38の高坏が、大きく割られ大型破片のまま、口縁部を上に向けるように廃棄されていた。この層では完形の39の石匙も検出された。3層と2層の遺物一括廃棄層では、1～3・8の壺片と9・13～15・17・19・22・25・32・33の甕および37の鉢が、同じく大型破片のまま、口縁部を上に向けるように廃棄されていた。この層では41の石皿片も検出された。7層と3+2層の土器出土状態はよく似ており、ところどころ折り重なるように集中する地点がある。その上別な地点で折り重なった大型破片同士が接合する例(10・17・25・34)があるので、おそらく別な場所でまとめて打ち割られたものを次々と廃棄したとみられる。壺は被熱していないが、対照的に甕はほとんど被熱した日常品である。少なくとも5個体以上の壺と17個体以上の大小の甕が転用されて、なんらかの非日常的行為に使われた後、動物骨片やどんぐりなどの食物残渣とともに一括廃棄されたものと推定される。かなり大規模な共食を伴う祭祀がおこなわれたものと推定される。最後にこの遺物一括廃棄の後に1層が堆積し、やはり大量の土器片と炭・焼土・炭化種実が含まれる。土器は一括廃棄のものに比べて小片であるが、下の土器と接合する例(14～16・18・20・33)が多



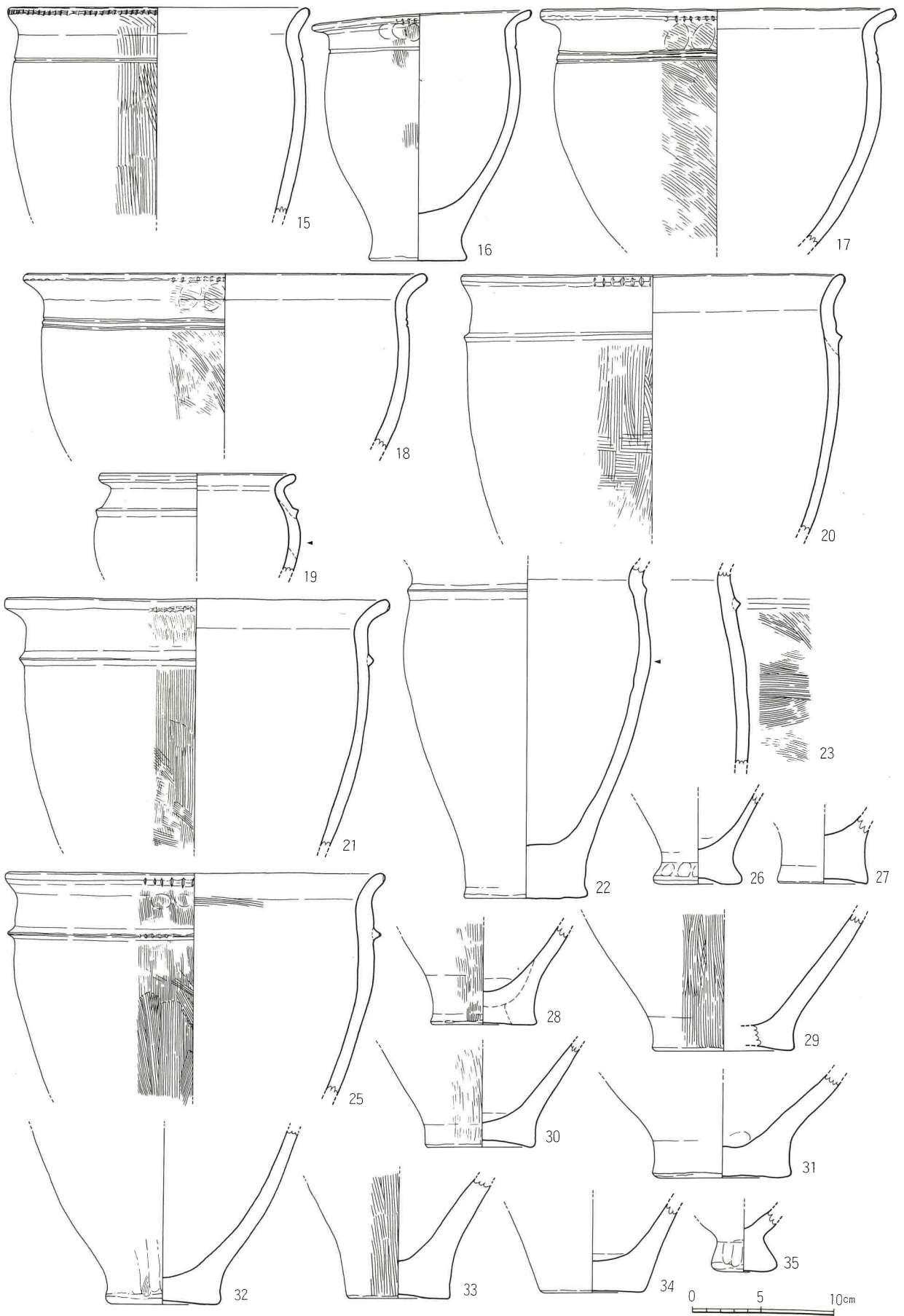
写真16. A区-64号土層底部円礫出土状態



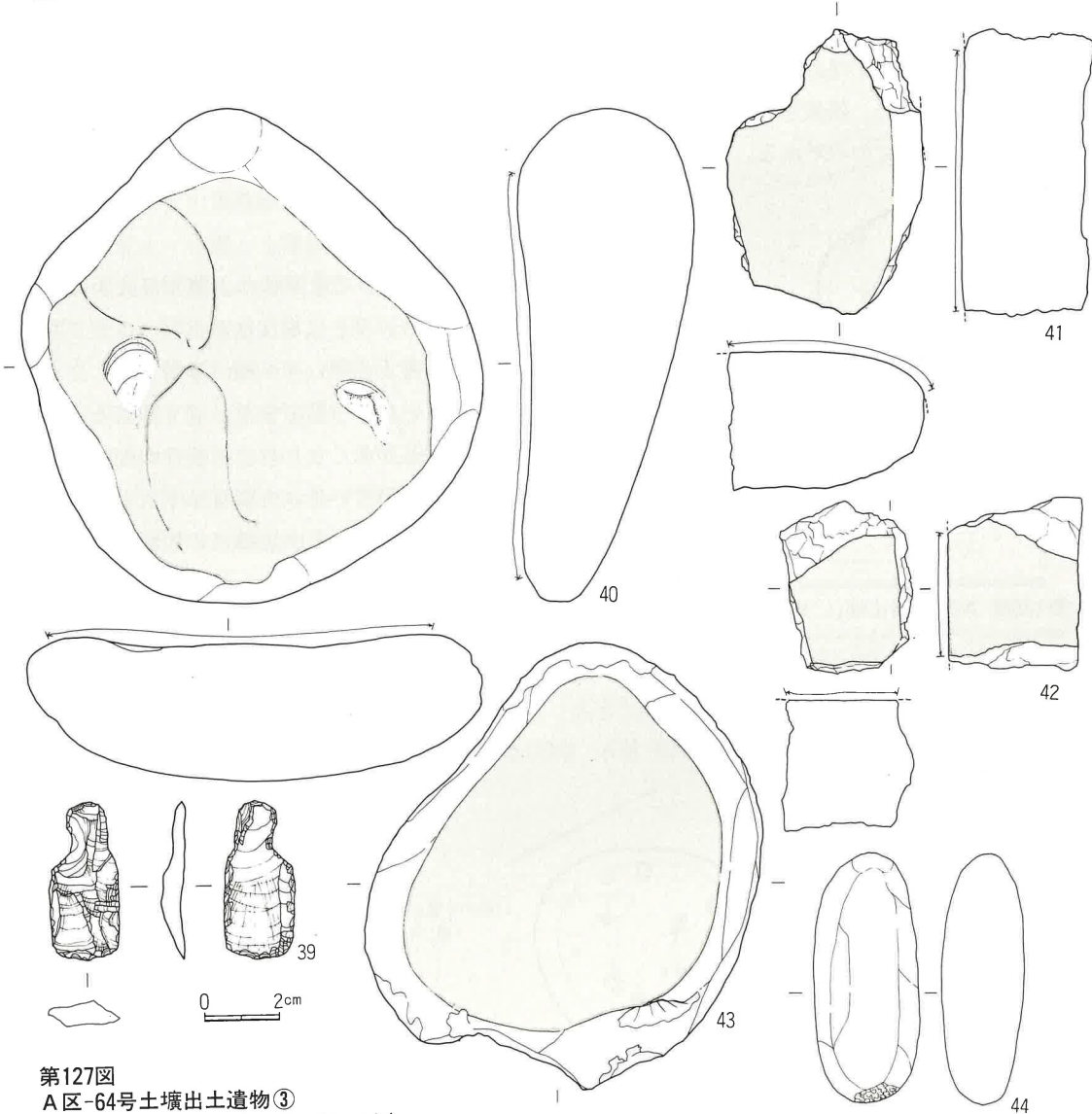
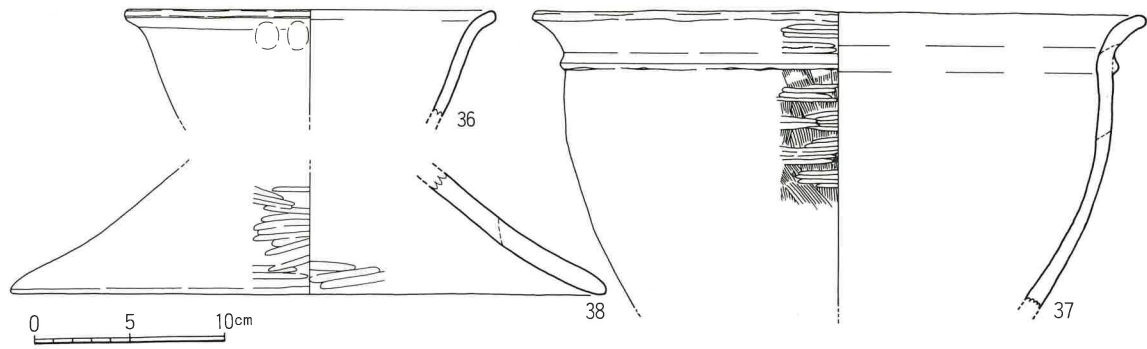
第124図 A区-64号土壌② -下部遺物出土状態- (1/40)



第125图 A区-64号土壤出土遗物① (1/4)



第126図 A区-64号土壙出土遺物②(1/4) No.24は第125図にある。



第127図
A区-64号土壌出土遺物③
(36~38=1/4、39=1/2、40~44=1/3)

く、おそらく共食祭祀のあとの後片付け
による堆積物とみられる。1層中からは
5・6・24の壺片、16の小型甕、26~31
の甕底部片、36の鉢片、42の石皿破片と

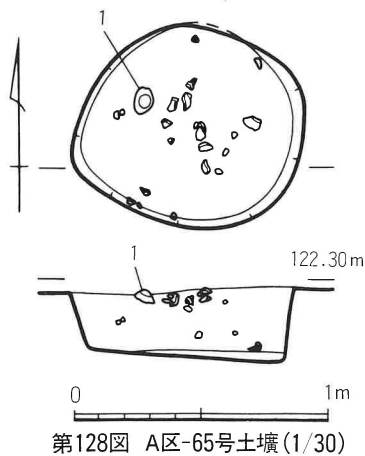
44のハンマーストーンが出土している。他に1層からは打製石鏃が2点出土している。

出土遺物として、土器の壺は突帯を施す壺Bが主体で、沈線で文様を施す壺Aが少ない。甕は反対に甕Aが主
で甕Bが従である。甕Aの沈線は一条と二条がある。その内一条沈線の11・14・15は胎土に金雲母と石英を含む

搬入品である。逆L字形口縁の甕Cは1点も含まれない。35は出土位置不明のミニチュアの甕である。石器では、7層の遺物一括廃棄に伴った39は腰岳産黒曜石製の完形小型の石匙である。最下層にのこされた40・43の安山岩製の石皿は小型で、いずれも完形品である。41・42の安山岩製の石皿はいずれも破片の一部である。44は砂岩製の完形のハンマーストーンである。土器全体に大きな時期差は認められず、土壙廃棄の時期は、その出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壙104)

A区-65号土壙(第128・129図 →図版18)

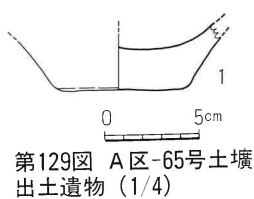
S17調査区で検出された小型円形の竪穴状土壙で、底面は平坦だが西がやや高い。規模は長軸長96cm・短軸長76cm、深さは検出面から29cmほどである。小型の貯蔵穴の可能性もあるが、はっきりしない。埋土は暗褐色粘質土の硬い単一層(1層)で、炭・焼土と土器細片を多量に含むほかに、コナラ属の炭化種実が少量検出された(資料40~43)。埋土が厚いのに分層できず、硬く締まる点から考えて、短時間の埋没すなわち埋め戻しがおこなわれた可能性が強い。隣接するA-66土壙の堆積土層と非常によく似ている。土器はいずれも細片で、図示できるのは1の壺底部片のみである。1は金雲母を含む胎土の搬入品である。土壙廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壙153)



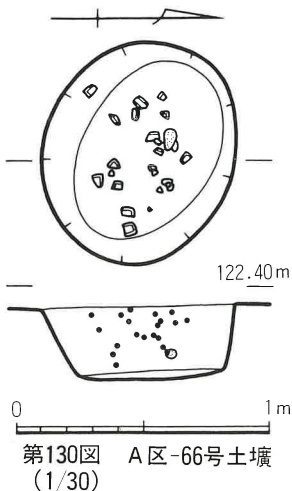
第128図 A区-65号土壙(1/30)

A区-66号土壙(第130図 →図版18)

S17調査区で検出された小型円形で竪穴状の土壙で、底面は平坦である。規模は長軸長88cm・短軸長75cm、深さは検出面から31cmほどである。性格は不明である。埋土は暗褐色粘質土の硬い単一層(1層)で、炭・焼土と土器細片を多量に含む。埋土が厚いのに分層できず、硬く締まる点から考えて、短時間の埋没すなわち埋め戻しがおこなわれた可能性が強い。隣接するA-65土壙の堆積土層と非常によく似ている。土器はいずれも細片で、図示できるものはない。土壙廃棄の時期は、A-65土壙との類似から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壙116)



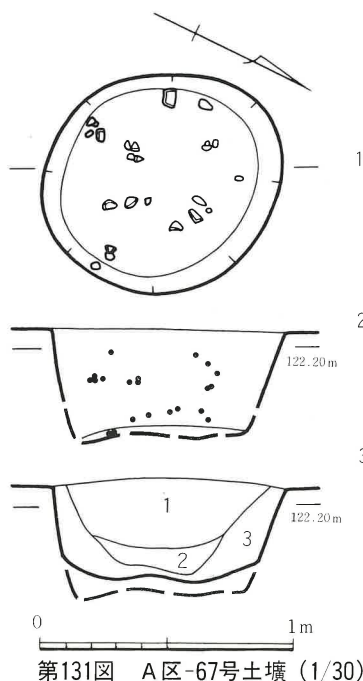
第129図 A区-65号土壙出土遺物(1/4)



第130図 A区-66号土壙(1/30)

A区-67号土壙(第131・132図)

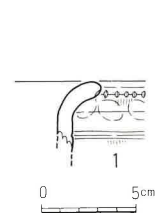
S17調査区で検出された平面形は円形だが、断面は皿状で、底は凸凹した小型土壙である。規模は長軸長98cm・短軸長82cm、深さは検出面から45cmほどである。その性格・用途は不明である。埋土は、まず壁面から下部全体に、やや硬い3層が堆積する。ついで炭片を多量の含む軟らかい黒褐色土(2層)が入る。その層中ではコナラ属の炭化種実が少量検出された(資料44)。最後にやや硬い茶褐色土の1層が堆積する。どの層も炭・焼土と土器細片を含む。1は1ないし2層から出土した甕Aの口縁部片



第131図 A区-67号土壙(1/30)

(層序)
1層:明茶褐色土(ややかたい、炭・焼土と小片の土器を多く含む)
2層:黒褐色軟質土(炭片が非常に多く、土器小片を含む)
3層:暗褐色土(ややかたい、焼土・炭を少し含むが土器はほとんどない)

である。埋土は、まず壁面から下部全体に、やや硬い3層が堆積する。ついで炭片を多量の含む軟らかい黒褐色土(2層)が入る。その層中ではコナラ属の炭化種実が少量検出された(資料44)。最後にやや硬い茶褐色土の1層が堆積する。どの層も炭・焼土と土器細片を含む。1は1ないし2層から出土した甕Aの口縁部片



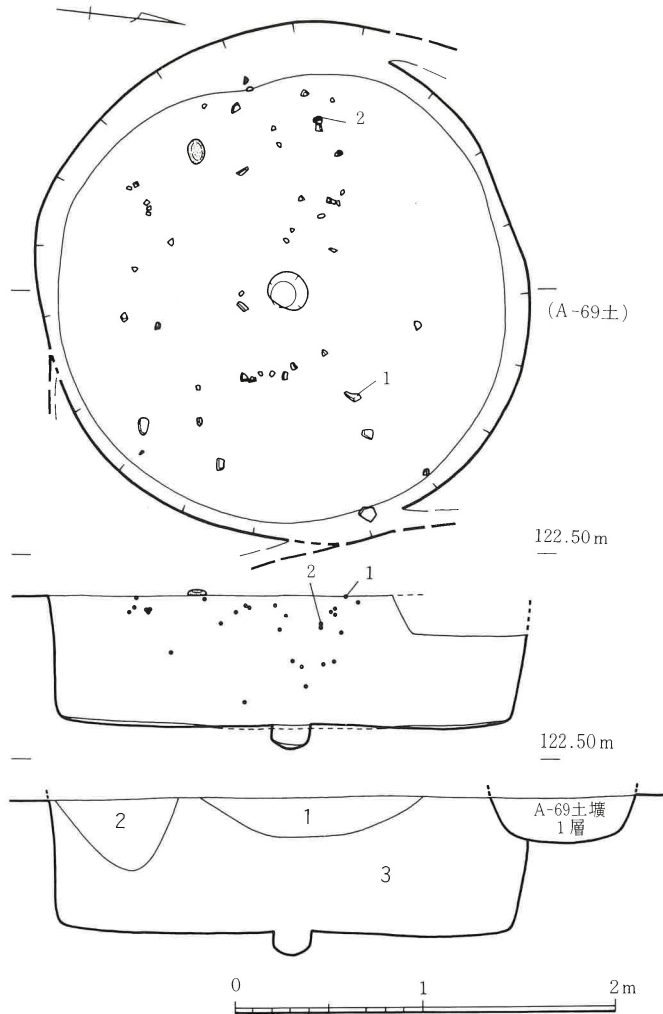
第132図 A区-67号土壙出土遺物(1/4)

である。土壙は使用后、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。土壙廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定され

る。(旧C地区土壌154)

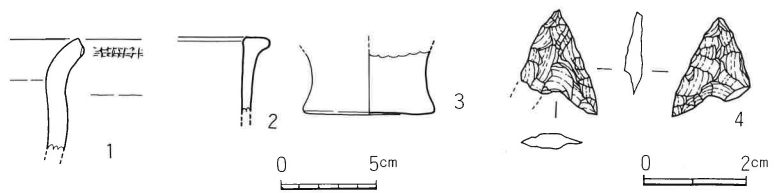
A区-68号土壌(第133・134図 →図版18・38)

R17～S17調査区で検出された大型円形の竪穴状土壌で、A-69土壌に北端を切られている。規模は長軸長276cm・短軸長268cmではほぼ正円形に近く、底面は平坦で、深さは検出面から74cmほどである。その構造から貯蔵穴であると推定される。底面中央にいわゆる中央ピットがある。ピット内には軟らかい明黒褐色土が詰まっていた。埋土は三層に分かれるが、暗黄褐色粘質土の3層が大部分で、その上部に2・1層が部分的のっている。3・2層には2～3cm大の黄色土ブロックが多量にふくまれ、炭・焼土・小礫と土器細片を含む。黄色土ブロックの大量廃棄とその厚さからみて、故意に埋め戻したものと推定される。この埋め戻し土中からは、1～3の甕の小片と、脚を欠損した4の石鏃1点が散在する状態で出土したほか、コナラ属の炭化種実が少量検出された(資料38・39)。出土遺物は、1が如意形口縁の下端に刻み目をもつ甕A、2が逆L字形口縁の甕C、3の底部片は胎土に石英を多量に含む搬入品である。4はサヌカイト製打製石鏃で、小型品である。土壌廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌115)



1層:暗褐色土(かたい。焼土・炭片を非常に多く含む、土器片も含む)
2層:暗褐色粘質土(かたい。土器片と、5mm大の炭・焼土・黄色土小ブロックを多く含む)
3層:暗黄褐色粘質土(2～3cm大の黄色土ブロックを非常に多く含む、少量の焼土・炭・土器片を含む)→埋め戻した土。

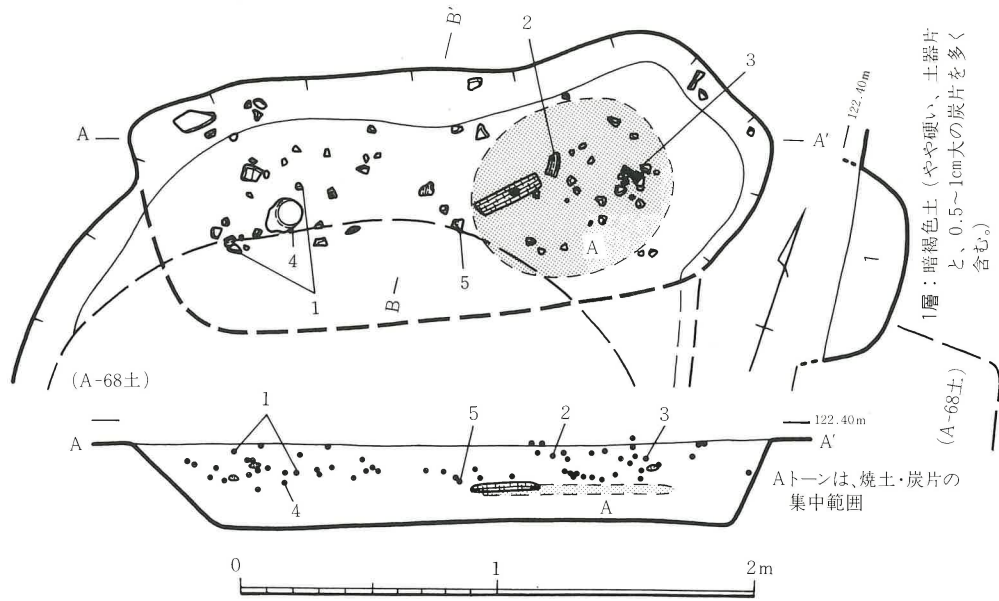
第133図 A区-68号土壌(1/40)



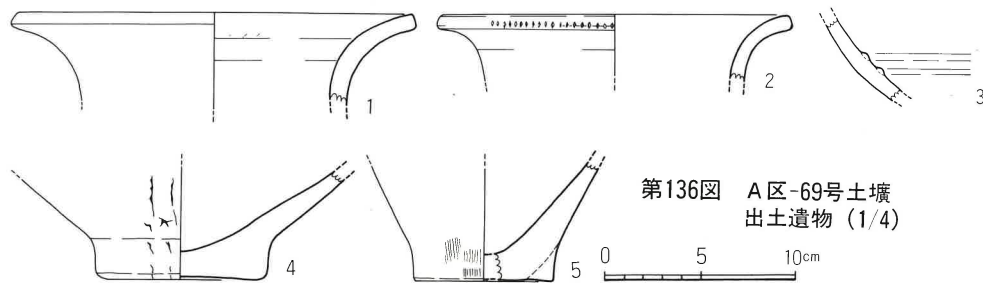
第134図 A区-68号土壌出土遺物(1～3=1/4, 4=2/3)

A区-69号土壌(第135・136図 →図版18)

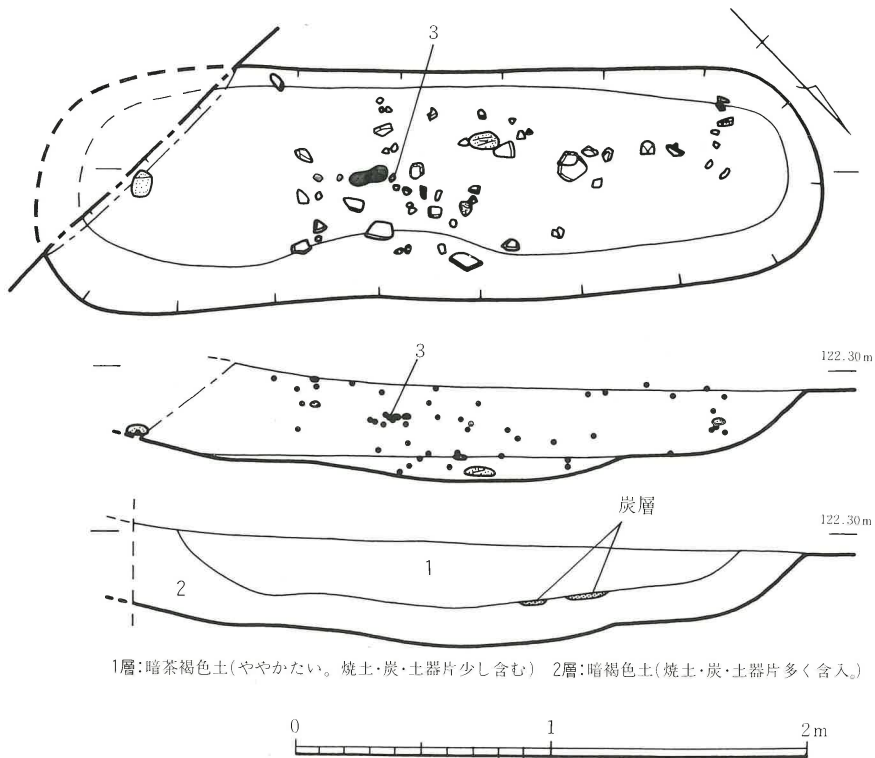
A-68土壌を切って掘りこまれた船底形の土壌で、底面は皿状である。規模は長さ255cm、幅110cmで、検出面からの深さは24cmである。歪んでいるので方位角は計測しなかったが、A-64土壌とほぼ同じ方位をとる。その性格は不明である。埋土は暗褐色土のやや硬い単一層(1層)で、炭・焼土と土器細片を多量に含む。炭化材と炭・焼土が集中する地点があり、遺物はその高さより上で多量に検出された。廃棄に先立って木材の焼却がおこなわれている。その後生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。その層中に1～4の壺の破片と5の甕底部片が含まれている。3の壺片と5の甕は被熱している。また2の壺片は、石英の多い胎土をもちいた搬入品である。土壌廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌165)



第135図 A区-69号土壌 (1/30)



第136図 A区-69号土壌出土遺物 (1/4)

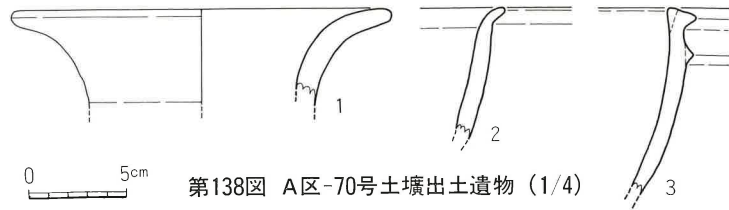


第137図 A区-70号土壌 (1/30)

A区-70号土壌 (第137
~138図 →図版18)

S17調査区で検出された、南半が調査区外に伸びる船底形の土壌で、底面も船底状である。規模は長さ310cm以上、幅90cmで、検出面からの深さは45cmである。長軸の方位角は130度である。使用の状態を推測させる手がかりはなく、その性格と用途は不明である。埋土は二層に分かれるが、暗褐色土の2層と暗茶褐色土の1層が順に堆積し、2層と1層の間に炭層の堆積が認められる。全体に炭・焼土・小礫と土器細片を多量に含む。2層を中心に1の壺片と2~3

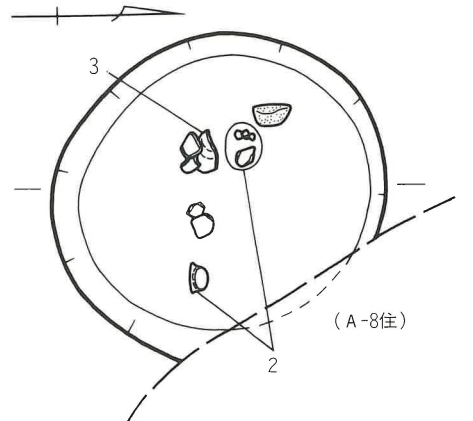
の甕の小片が散在する状態で出土した。
3は逆L字形口縁の甕Cで、突帯が一条
めぐる。土壌廃棄の時期は、出土土器か
ら弥生時代前期末と推定される。(旧C
地区土壌162)



第138図 A区-70号土壌出土遺物 (1/4)

A区-71号土壌 (第139・140図 →
図版18)

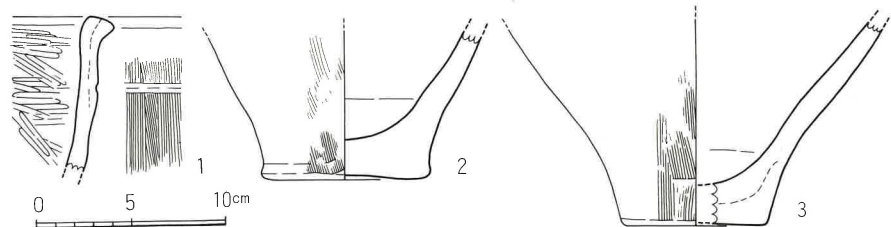
T0調査区で検出された大型円形の土壌で、A-8住(古墳時代
前期前半)に東端を切られている。底面は皿状である。規模は長軸
長135cm、短軸長110cmで、検出面からの深さは20cmである。貯蔵穴
の名残りであろうか。埋土は暗褐色土の硬い単一層(1層)で、炭・
焼土・円礫と土器片が散在する。残存部が浅いので埋没状態の詳細
は不明である。1~3の甕が破片で含まれ、甕の底部は被熱してい
る。1は一条沈線の甕Cである。土壌廃棄の時期は、出土土器から
弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌118)



第139図 A区-71号土壌 (1/30)

A区-72号土壌 (第141・142図 →図版18)

T19調査区で検出された小型円形の土壌で、底面は凸凹である。
規模は長軸長88cm、短軸長81cmで、検出面からの深さは19cmである。
埋土は二層に分かれ、下部に黄色土ブロックを多量に含む2層が、
その上に土器片を含む1層が堆積する。1は1層から出土した逆L
字形口縁一条沈線の甕Cで、被熱している。残存部が浅いので土
壌の性格と埋没状態の詳細は不明である。土壌廃棄の時期は、その土
器から弥生時代前期末と推
定される。(旧C地区土壌
127)

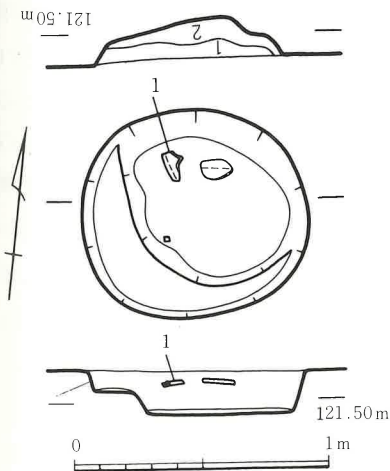


第140図 A区-71号土壌出土遺物 (1/4)

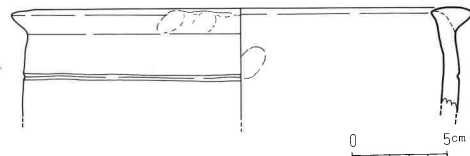
A区-73号土壌 (第14
3図)

T18調査区で検出された

遺物目録 { 土器製番号: 多摩川流域土器製: 量2
(母器器王) 土器製番号: 量1

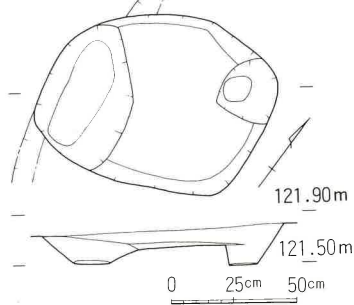


第141図 A区-72号土壌 (1/30)



第142図 A区-72号土壌出土遺物 (1/4)

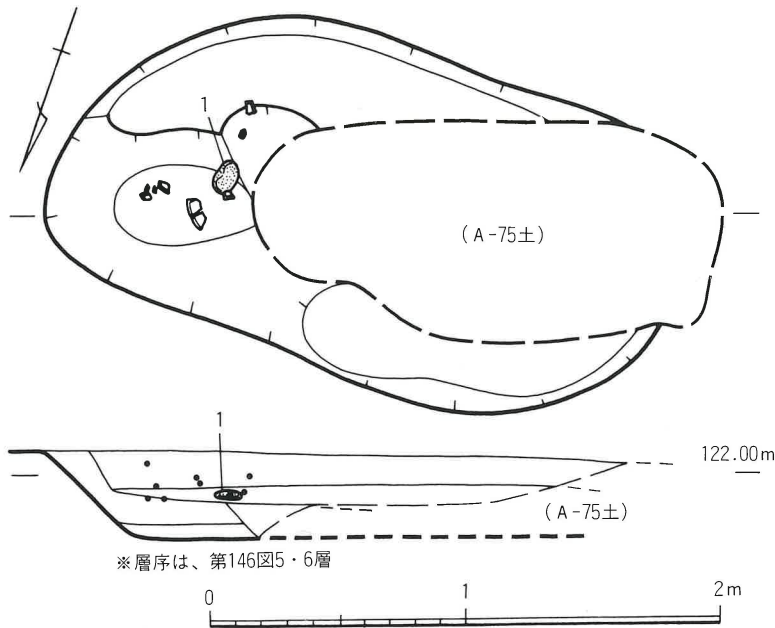
(A-86土に切られる)



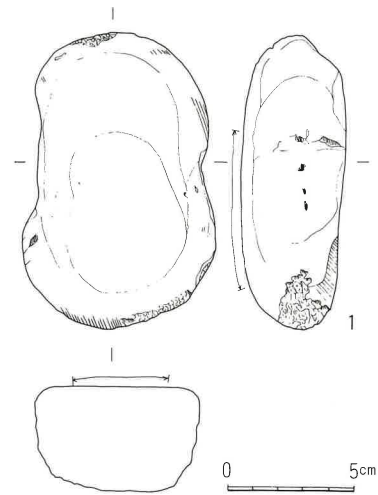
第143図 A区-73号土壌 (1/30)

不定形の土壌で、A-
86土壌(弥生時代中期
後半)の床面下で検出
された。底面は凸凹で
ある。規模は長軸長97
cm、短軸長70cmで、検
出面からの深さは20cm

である。その性格は不明である。埋
土は、黄色土ブロックを多量に含む
暗黄褐色粘質土で、遺物はなにも含
まない。A-86土壌以前の遺構なの
でこの時期と認定した。(旧C地区
土壌169)



第144図 A区-74号土坑 (1/30)

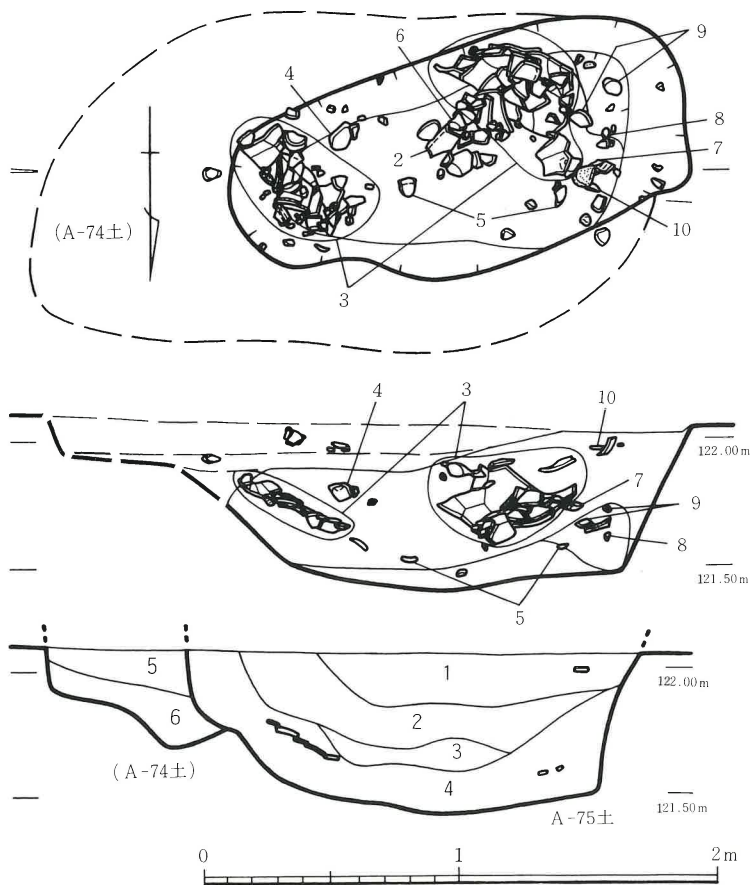


第145図 A区-74号土坑出土遺物 (1/3)

A区-74号土坑 (第144・145図
→図版19)

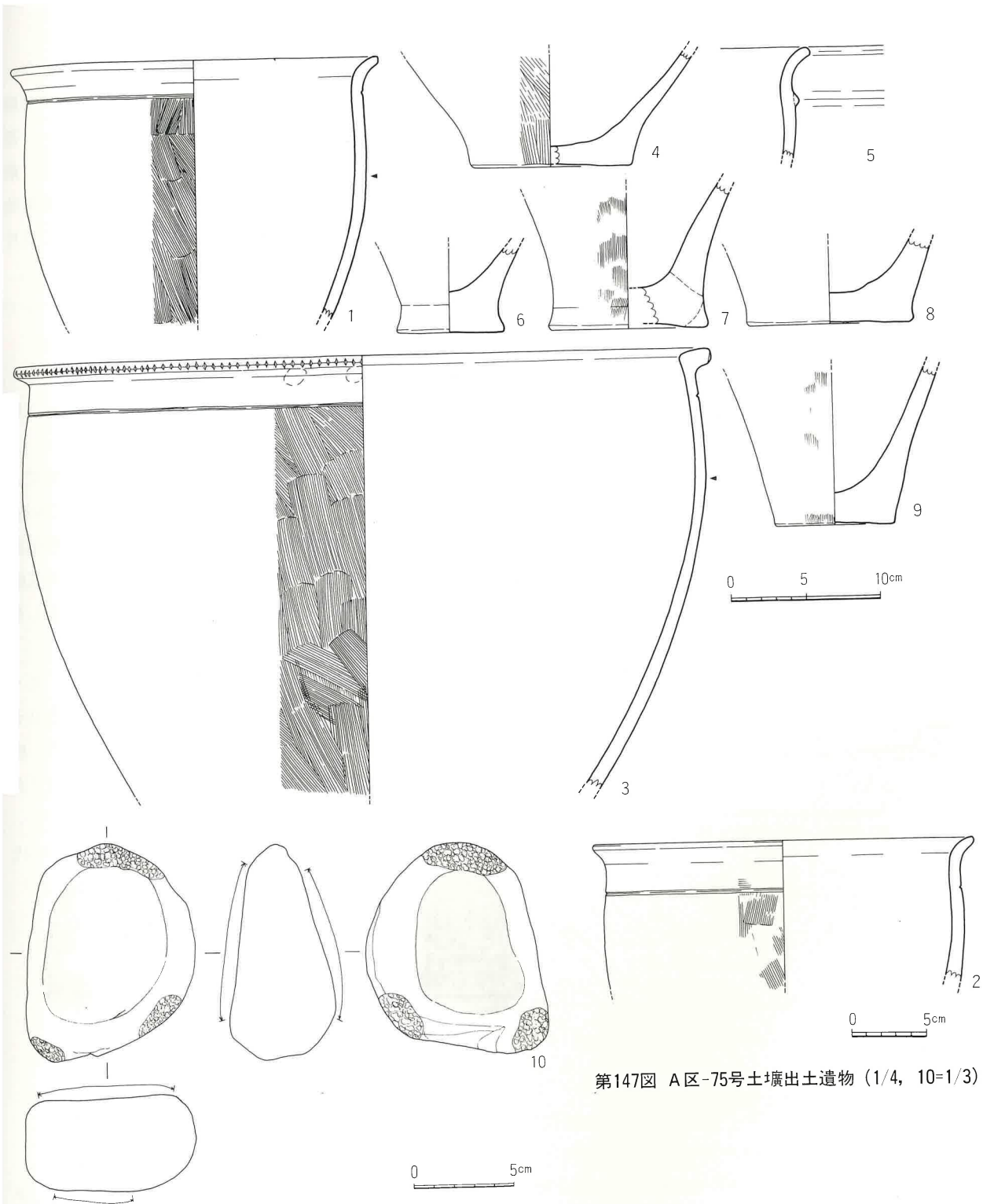
S17~T17調査区で検出された不定形の大型土坑で、埋没後にA-75土坑が重複するように掘りこまれている。

底面は凸凹で高さは一定していない。規模は長軸長250cm、短軸長128cmで、検出面から最も深いところで35cmである。埋土 (第146図) は二層に分かれ、まず黄茶褐色土の6層が堆積し、次に土器片等を含む5層が堆積する。土坑の廃絶後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。1層からは甕Bの小片と1の完形の磨石が出土した。土坑廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土坑160)



第146図 A区-74号土坑 (1/30)

- (層序)
- 1層: 明黒褐色軟質土 (サラッとした土。焼土炭片をまばらに含み、土器片は多いが散在している。)
 - 2層: 暗褐色硬質土 (やや粘質。焼土・炭・土器片を少し含む。)
 - 3層: 黄褐色土 (2層より軟い。黄色土ブロックを多量に含むが、焼土と炭は少ない。)
 - 4層: 明黒褐色土 (炭・焼土・土器片を多量に含む。土器片は2ヶ所に集中する。)
→下位土器廃棄
※以上A-75土坑
 - 5層: 明茶褐色土 (やや硬い。土器片を少し含む。)
 - 6層: 黄茶褐色土 (炭を少し含む。)
※5・6層は、A-74土坑の層序。



第147図 A区-75号土壇出土遺物 (1/4, 10=1/3)

A区-75号土壇 (第146・147図 →図版19・38・39)

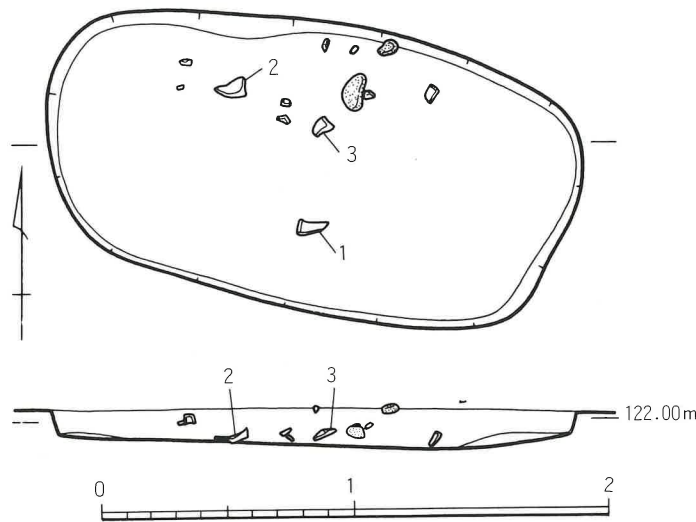
S17～T17調査区で検出された長円形の土壇で、A-74土壇埋没後にその中央に重複して掘りこんでいる。底面は皿状である。規模は長軸長187cm、短軸長85cmで、検出面からの深さは59cmである。土壇の用途ははっきりしない。

埋没状態の特徴は下位に遺物一括廃棄が認められることである(第146図)。まず底面から壁の全周に炭・焼土と土器片を多量に含む、黒褐色の軟らかい4層が堆積する。土器は大型破片の状態で、壁に張りつくように廃棄され、二ヶ所では特に重なって集中する。この遺物一括廃棄のなかには1・3～5・7～9の甕と10の磨石が

含まれ、甕には完形に近く復元できる例（3+4）がある。壺はなく、甕は大半が煤が付着して被熱していた。また磨石も火を受けている。おそらく土器はまとめて打ち割られて廃棄されたとみられる。以上は単なる生活廃棄物の投棄ではなく、甕のみを少なくとも4個体以上と磨石を使用した非日常的な行為に使われた遺物を、一括廃棄したものと推定される。この下位の遺物一括廃棄の後に、黄色土ブロックを多量に含む3層が投棄され、最後に焼土・炭・礫と土器片を含む2・1層が厚く堆積して埋没する。下位の遺物一括廃棄を契機に、生活廃棄物の捨て場所に転用されたか、遺物一括廃棄の残りの遺物を片付けたものであろう。1・2層からは2・6の甕片が出土した。

出土土器。下位では、沈線で文様を施す甕A、突帯を施す甕B、逆L字形口縁の甕Cが共伴し、沈線は一条である。石器には完形で被熱した磨石がある。

土壌廃棄の時期は、その出土土器から弥生時代前期末と推定される。（旧C地区土壌167）



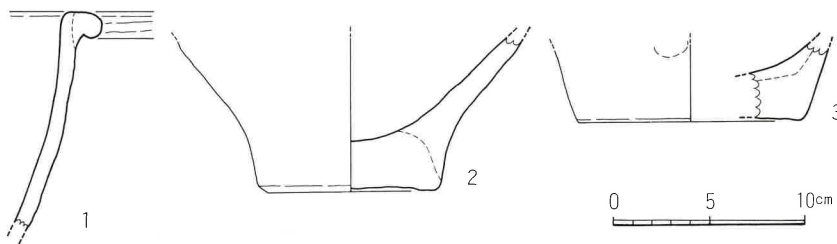
第148図 A区-76号土壌 (1/30)

A区-76号土壌（第148・149図 →図版20）

T17調査区で検出された長円形の土壌で、底面はやや傾斜するが、おおむね平坦である。規模は長軸長213cm、短軸長102cmで、検出面からの深さは16cmである。その大きさと底面の平坦さからみて、居住用とは異なるなんらかの施設として使用されたと見られる。

埋土は暗褐色土の単一層（1層）で、炭・焼土・小礫と土器細片を含む。1層から出土の1～3の壺甕はいずれも被熱している。残存部が浅いので、埋没状態の詳細は不明である。1は逆L字形口縁の甕Cである。

土壌廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。（旧C地区土壌159）



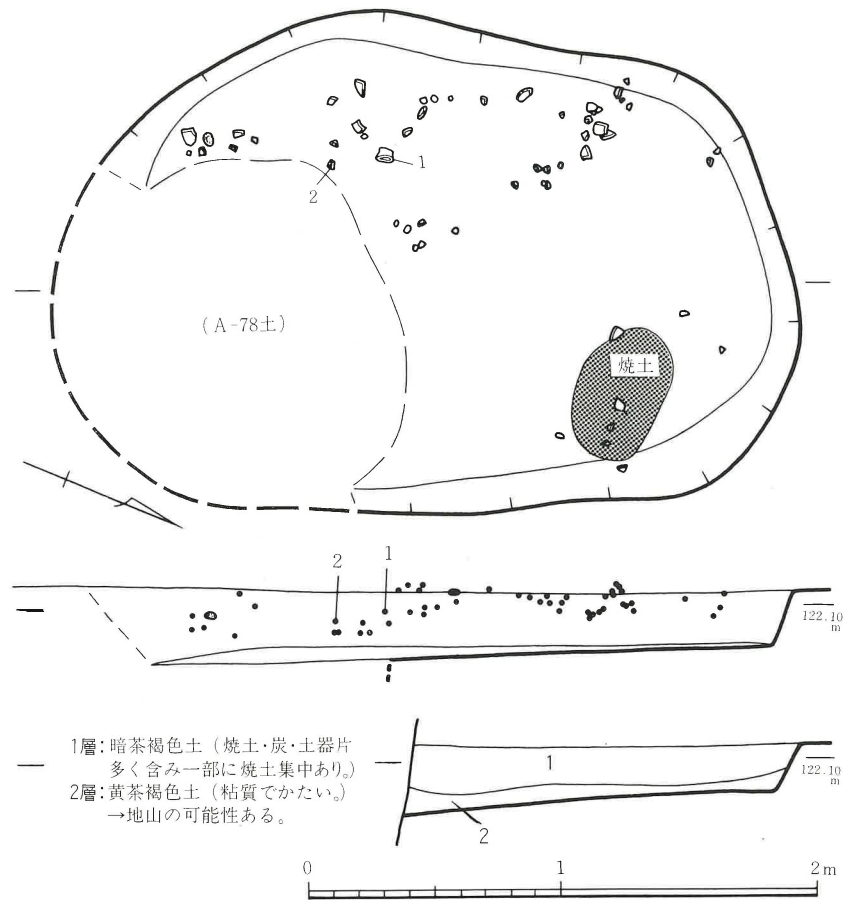
第149図 A区-76号土壌出土遺物 (1/4)

A区-77号土壌（第150・151図 →図版20）

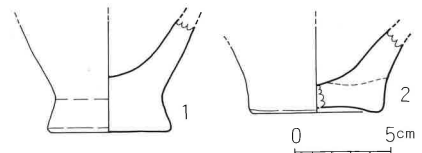
S17～T17調査区で検出された長円形の大型土壌で、A-78土壌に南半分を切られている。底面はやや傾斜するが、おおむね平坦である。規模は長軸長285cm以上、短軸長175cmで、検出面からの深さは31cmである。その大きさと底面の平坦さからみて、居住用とは異なるなんらかの施設として使用されたとみられる。

埋土は二層に分かれ、下部に黄色土ブロック層（2層）があり、粘質で硬く遺物は何も含まない。あるいは基盤層の掘りすぎかもしれない。その上に炭片・焼土片と土器片を多量に含む1層が堆積する。検出面で焼土の集中する地点がある。土器はいずれも細片である。1・2は1層から出土した甕の底部片である。1は被熱している。土壌の使用後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。

土壌廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。（旧C地区土壌158）



第150図 A区-77号土壌 (1/30)



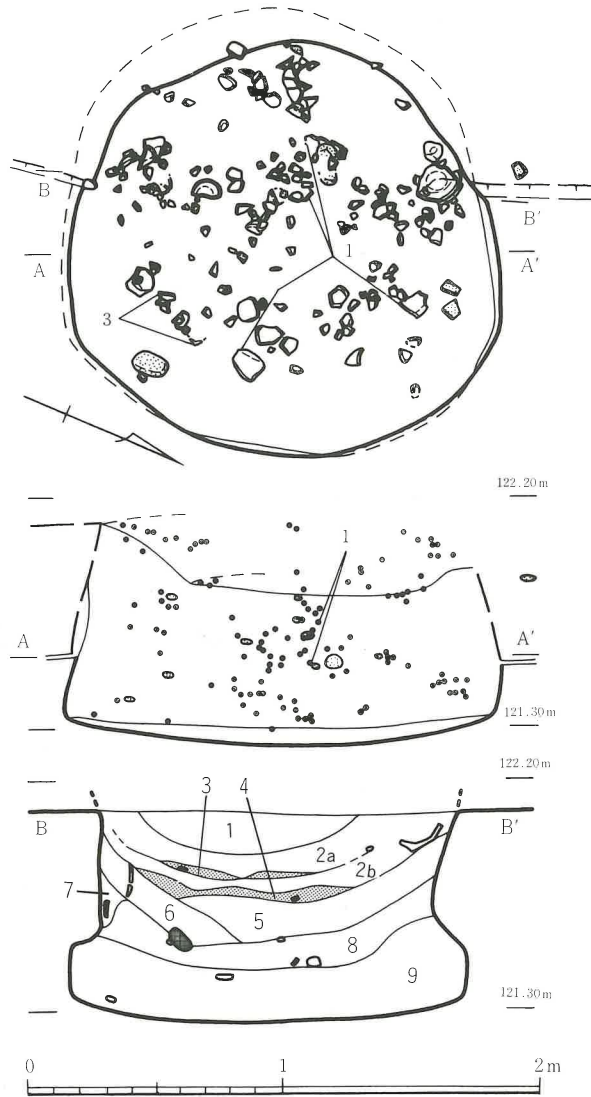
第151図 A区-77号土壌出土遺物(1/4)

A区-78号土壌 (第152・153図 →図版20・39)

S17～T17調査区で検出された大型円形の袋状土壌で、A-77土壌を大きく切って掘りこんでいる。底面は浅い皿状である。規模は長軸長185cm、短軸長170cmでほぼ正円形に近く、検出面からの深さは84cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

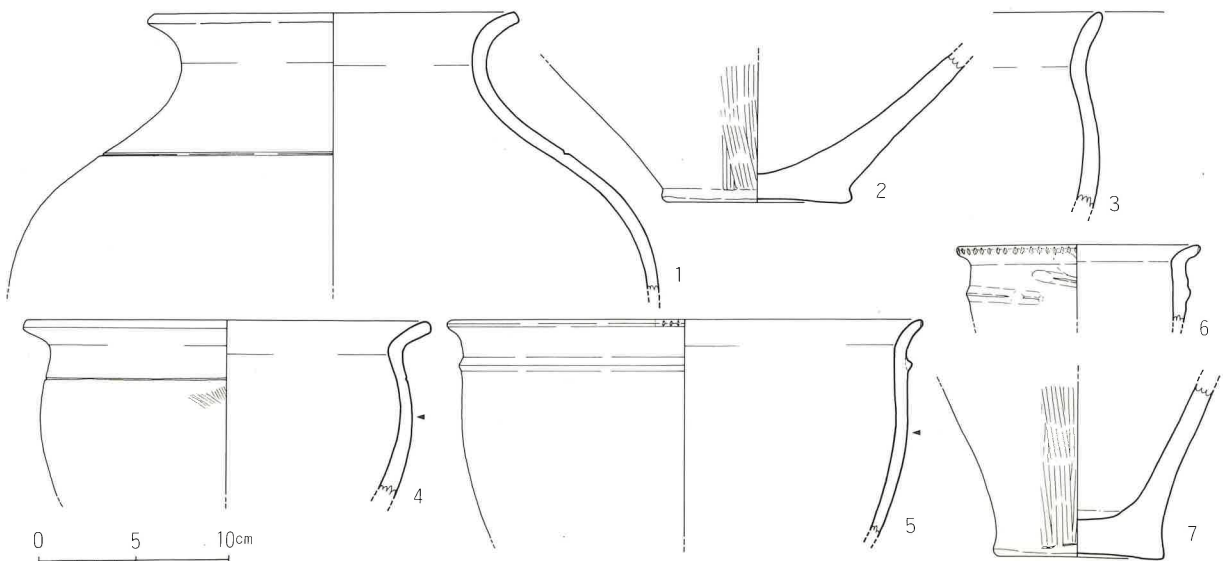
使用状態を示す堆積はなく、その上の9～1層が使用停止後の堆積層である。埋没状態の特徴は下位と上位に二度の遺物一括廃棄が認められることである(第152図)。まず炭片と土器の細片を多量に含む暗黄褐色土(9・8層)が堆積する。焼土は少なく、そのなかには1の壺が大型破片で散在し、さらに3・7の甕を検出した。壺は金雲母を胎土に含む搬入品である。甕は煤が付着して被熱していた。おそらくまとめて打ち割られたものを廃棄したとみられる。

この下位の遺物一括廃棄の後に、壁から崩落した7層が壁ぎわに堆積し、その7層を覆うように斜めに黄色土ブロックを多量に含む6層と、炭・焼土を多量に含む5層が順に堆積する。7～5層には土器はほとんど含まれない。次の4～1層ではふたたび上位の遺物一括廃棄がおこなわれる。黒褐色で軟らかい4層と3層に、暗褐色



第152図 A区-78号土坑 (1/30)

- (層序)
- 1層: 暗黄褐色軟質土 (バサバサした土。0.5~1cm大の黄色土ブロック・炭・土器片を多く含むが、焼土は少ない。)
 - 2a層+2b層: 暗褐色軟質土 (大型の炭片と土器片が多いが、焼土は少ない。)
→同一層だが、間に3層が入るので、2aと2bに分ける。
→上位土器集中
 - 3層: 黒褐色軟質土 (炭・焼土・土器片を含み、特に炭が多い。)
 - 4層: 淡黒褐色軟質土 (焼土・炭・土器片と1cm大の黄色土ブロックを含む。)
 - 5層: 暗褐色軟質土 (1cm大の炭片・焼土粒子が非常に多く、土器片も含む。)
 - 6層: やや灰色かかった暗褐色土 (炭・焼土片・0.5cm大の黄色土ブロックが非常に多く含む。)
 - 7層: 黄褐色粘質土と暗褐色土の混層。
→壁の地山が崩落した土。
 - 8層: 灰色かかった暗褐色土 (炭・土器片多いが、焼土は少ない。)
 - 9層: 暗黄褐色粘質土 (土器片と1cm大の炭片を多く含む。)
- ※ 8・9層→下位土器集中



第153図 A区-78号土坑出土遺物 (1/4)

の2層が、互層で堆積する。どの層も炭・焼土・小礫と土器片を含むが、黄色土ブロックが特に多い層（4層）、炭が多い層（3層）、土器片が多い層（2層）などと各層単位の内容は異なっている。この中から4～6の甕の口縁部が出土した。6は胎土に金雲母を混ぜる搬入品で、4の甕は被熱している。なお下位と上位の土器で接合する例はない。この上位の遺物一括廃棄の後に、パサパサして黄色土ブロックと炭・土器細片を多量に含む1層が堆積している。全体に、遺物とくに土器の量が少ないので、二回の遺物一括廃棄をどのように評価するかは難しい問題だが、少なくとも土器は日常品であることは間違いなく、それが廃棄される際の契機が何であるかが問題である。

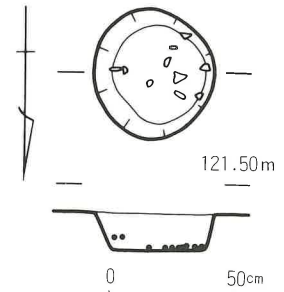
出土土器の特徴は、沈線で文様を施す壺Aと甕Aに、突帯を施す甕Bが加わる点にある。6の甕Bの突帯は交わらない。1・6以外は在地産である。土器全体に大きな時期差は認められず、土壙廃棄の時期は、その出土土器から弥生時代前期末と推定される。

（旧C地区土壙166）

A区-79号土壙（第154図 →図版22）

U0調査区で検出された小型円形の竪穴状土壙で、底面は平坦である。規模は長軸長52cm・短軸長48cm、深さは検出面から16cmほどである。その性格は不明である。

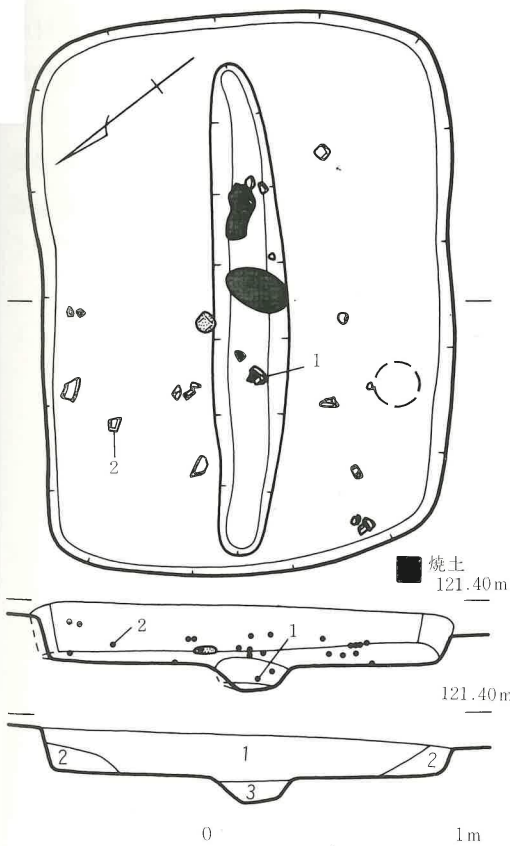
埋土は暗褐色土の単一層（1層）で、炭片と黄色土ブロックと土器細片を多量に含む。残存部が浅いので、埋没状態の詳細は不明である。その細片から判断して、この時期の遺構と認定した。（旧C地区土壙119）



第154図 A区-79号土壙(1/30)

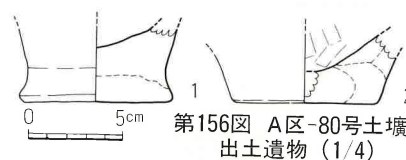
A区-80号土壙（第155・156図 →図版20）

V18～U18調査区で検出された中央に船底状のくぼみのある長方形の大型土壙である。底面は平坦である。規模は長さ218cm、幅160cm、検出面からの深さは、もっとも深いところで23cmである。長軸の方位角は126度である。中央の船底状のくぼみのなかには、黄色土ブロックの小粒子と炭・焼土と土器細片が含まれ、一部に焼土の堆積する地点があったが、この土壙の



1層：暗褐色土（炭・焼土・土器片・0.5cm大の黄色土ブロック多く含む）
 2層：黄褐色土（黄色土ブロックが多く含まれる）
 3層：暗黄褐色土（土器片・炭・焼土少し含む、0.5cm大の黄色土ブロック含む）

第155図 A区-80号土壙（1/30）

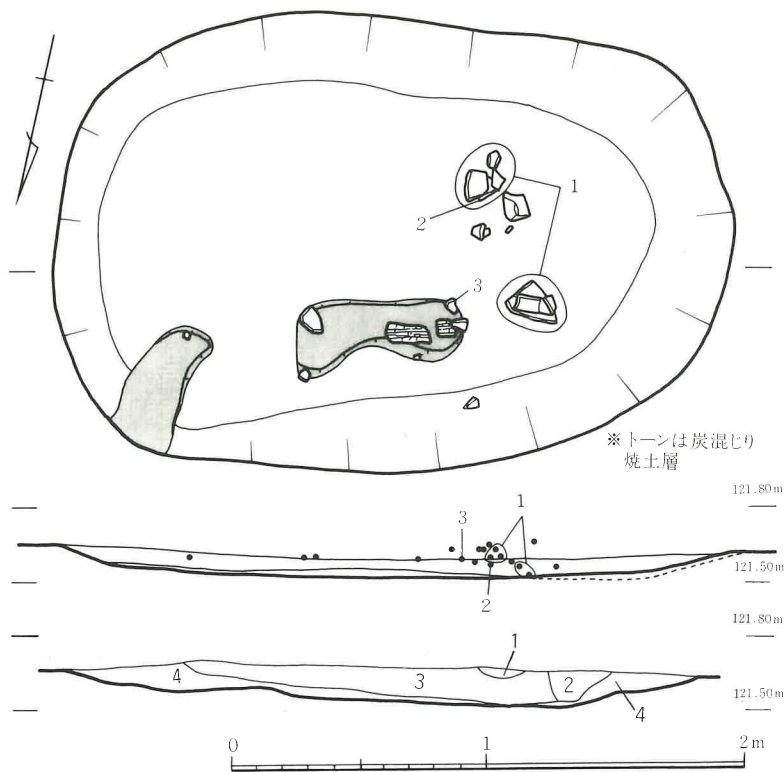


第156図 A区-80号土壙
出土遺物（1/4）

機能とどのようにかわるのか判然としなかった。

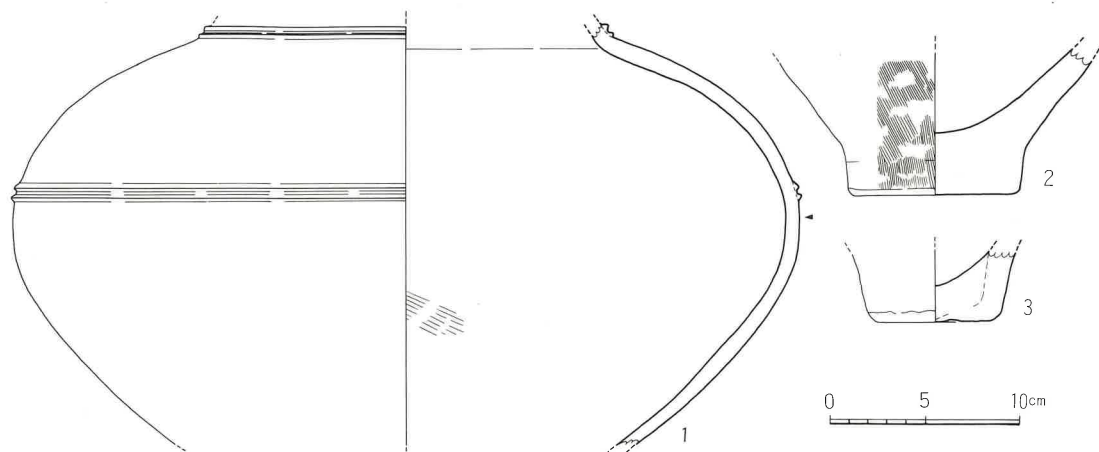
埋土は二層に分かれ、基盤層に由来する黄色土ブロックを多量に含む2層が、土壙の隅に堆積し、その上に1層が堆積している。2層と先の3層はほとんど同質の土で、おそらく一連の過程で埋没したものと推定される。そうすると中央の船底状のくぼみは、土壙廃絶時まで開口した状態を保っていたことになる。くぼみの中の3層からは1の甕底部片が、竪穴埋土からは2の甕底部片が出土した。1はよく焼けている。

土壙廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。（旧C地区土壙139）



- 1層：明茶褐色軟質土（炭・焼土含まない）
 2層：暗茶褐色土（焼土・炭を多く含み、3層に比べてやわらかい）
 3層：明黒褐色土（焼土ブロック・炭多く含む）
 4層：暗黒褐色粘質土（かたく、炭と黄褐色粘土ブロック含む）
- 2・3層に土器片が集中する。

第157図 A区-82号土壙（1/30）



第158図 A区-82号土壙出土遺物（1/4）

焼け、煤が付着している。その出土状態からみて、焼却された廃棄物の一括廃棄がおこなわれたと考えられる。

出土土器の特徴としては、1の壺は肩部と胴部にM字突帯をめぐるし、胎土に金雲母と石英を含む搬入品である。土壙廃絶の時期は、以上の出土土器から弥生時代前期末と推定される。（旧C地区土壙47）

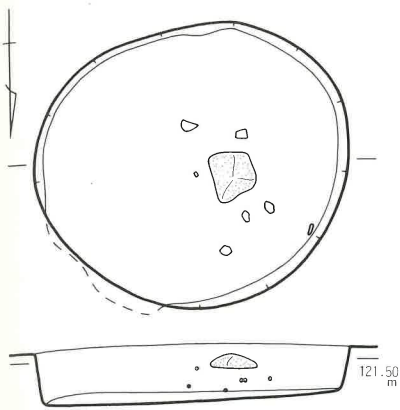
A区-120号土壙（第159図 →図版21）

U19調査区で検出された大型円形の袋状土壙で、底面は平坦である。第159図では縦穴状に見えるが、これは

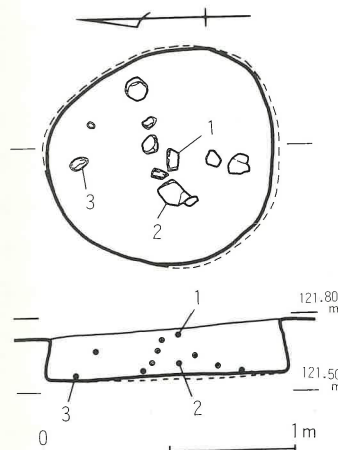
A区-82号土壙（第157・158図 →図版20）

S1調査区で検出された長円形的大型土壙で、底面は皿状である。その規模は長軸長269cm、短軸長167cmで、検出面からの深さは14cmである。後述するように床状の底面が形成されている点と、その平面形からみて、なんらかの作業土壙であった可能性が指摘できる。

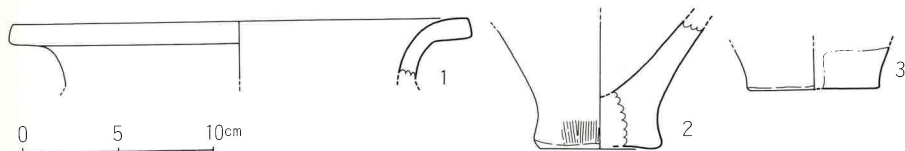
まず凸凹した底面に黄色土ブロックと炭片を多量に含む4層が堆積し、硬く締まっている。土器は含まず、土壙使用中の床面形成層である。その上の3～1層は廃絶後の堆積層で、3・2層は土器片・炭・焼土を多量に含む。4層の直上には部分的に焼土の堆積があり、炭化材がかなり含まれる。また土器片の集中地点があり、そこから1の壺と2・3の甕底部片が検出された。壺は大型破片で、甕の底部片はいずれも火を受けて赤く



第159図 A区-120号土壌 (1/40)



第161図 A区-137号土壌(1/30)



第162図 A区-137号土壌出土遺物 (1/4)

冬の霜で壁が落ちてしまったものであり、実際の壁は内傾していた。その規模は長軸長166cm、短軸長148cmで、検出面からの深さは31cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

埋土は暗褐色粘質土の単一層（1層）で、1～2cm大の黄色土ブロックを多量に含み、炭片・焼土片・大型礫と土器細片を含む。30cm以上の深さを残していたのに分層できない均一の層で、基盤層の由来する黄色土ブロックを多量に含む点から

第160図 A区-121号土壌 (1/40)

みて、埋め戻された可能性が強い。

出土土器はいずれも細片で図示できないが、如意形口縁の甕と逆L字形口縁の甕Cが含まれている。土壌廃絶の時期は、その出土土器から弥生時代前期末と推定される。（旧C地区土壌125）

A区-121号土壌（第160図 →図版21）

T19調査区で検出された長円形の小型土壌で、底面はやや傾斜するが、おおむね平坦である。規模は長軸長94cm、短軸長75cmで、検出面からの深さは16cmである。その性格は不明である。

埋土は暗褐色粘質土のよくしまった単一層（1層）で、炭化材と1～2cm大の黄色土ブロックと土器細片を多量に含む。残存部が浅いので、埋没状態の詳細は不明である。土壌廃絶の時期は、その細片から判断して、この時期の遺構と認定した。（旧C地区土壌126）

A区-137号土壌（第161・162図 →図版21）

S0調査区で検出された小型円形の袋状土壌で、底面は平坦である。規模は長軸長95cm、短軸長85cmで、検出面からの深さは24cmである。その形態からみて

小型の貯蔵穴であったと推定される。断面層序の観察をおこなっていないので、埋没状態はわからないが、埋土中から土器片が比較的多く検出さ

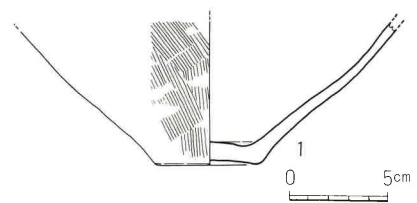
れた。いずれも小片で、1は壺の口縁部、2・3は甕の底部片である。いずれも在地産で、甕は被熱が著しい。土壌廃絶の時期は、その出土土器から弥生時代前期末と推定される。（旧C地区土壌66）

3) ピット（第2図、第5表）

遺物の出土状態からこの時期であることが確実なピットは1本のみであった。

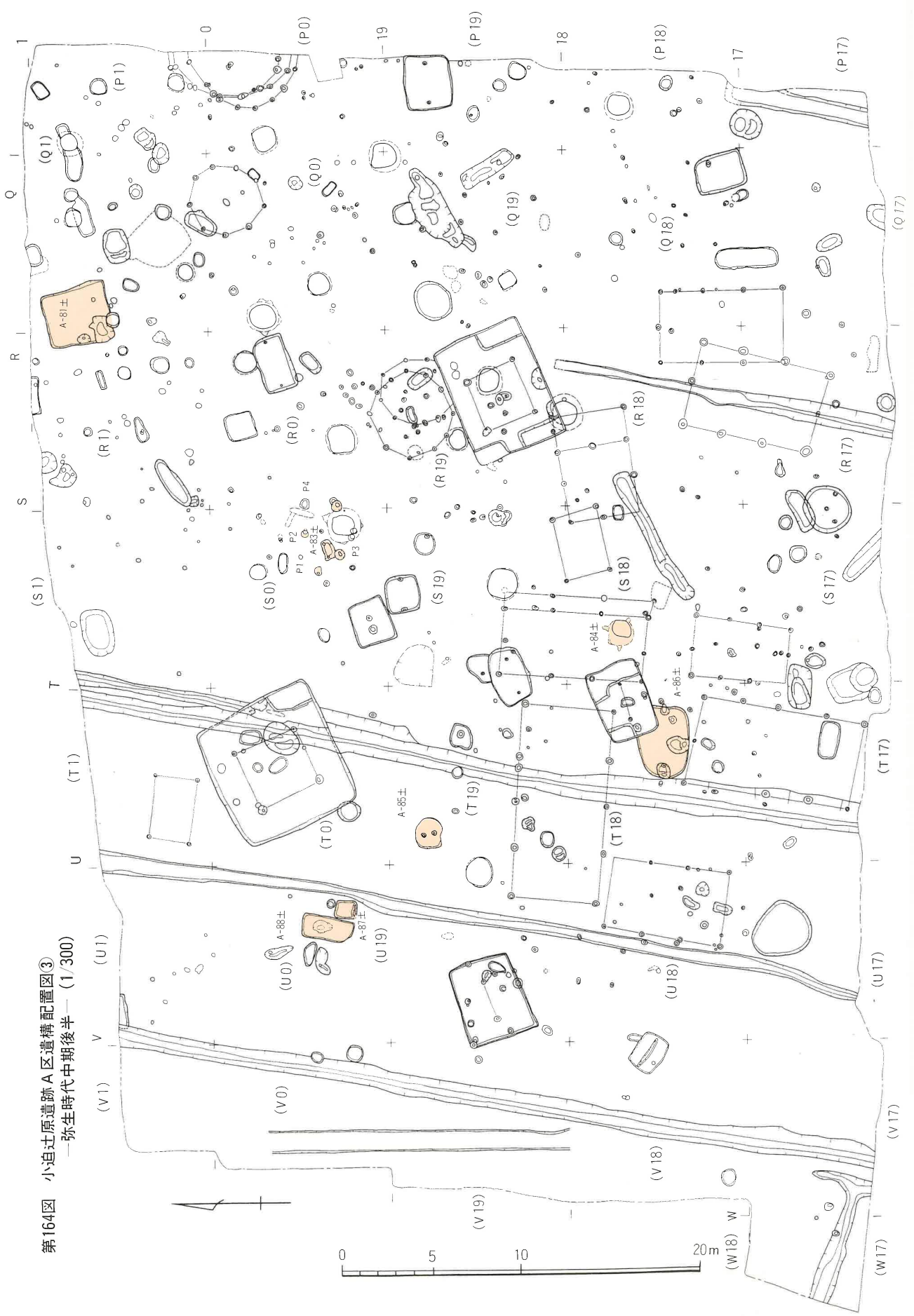
U18調査区ピット1（第163図）

ピット内から1の壺の底部片が出土している。大型破片で、胎土に金雲母を含む搬入品である。



第163図 A区-U18調査区ピット1出土遺物 (1/4)

第164図 小迫辻原遺跡A区遺構配置図③
—弥生時代中期後半— (1/300)



第4節 弥生時代中期後半 (第164図)

この時期にあたる遺構は、土壌7基を確認したのみである。関連するピット4本を本文に掲載する。この時代の遺構はまだ存在している可能性が高いが、土器を含まないためにほかの時期の遺構と区別できなかった。

遺構の配置は、弥生時代前期後半～中期初頭の遺構群と重複する傾向があるが、A区の中で最も高い南東部には遺構の広がりはなかった。検出遺構は貯蔵穴または竪穴状の土壌で、竪穴住居跡は検出されなかったものの、削平の状態を考慮すれば周辺に存在したことは疑いなく、A区はこの時期においても生活空間として利用されていたと考えられる。

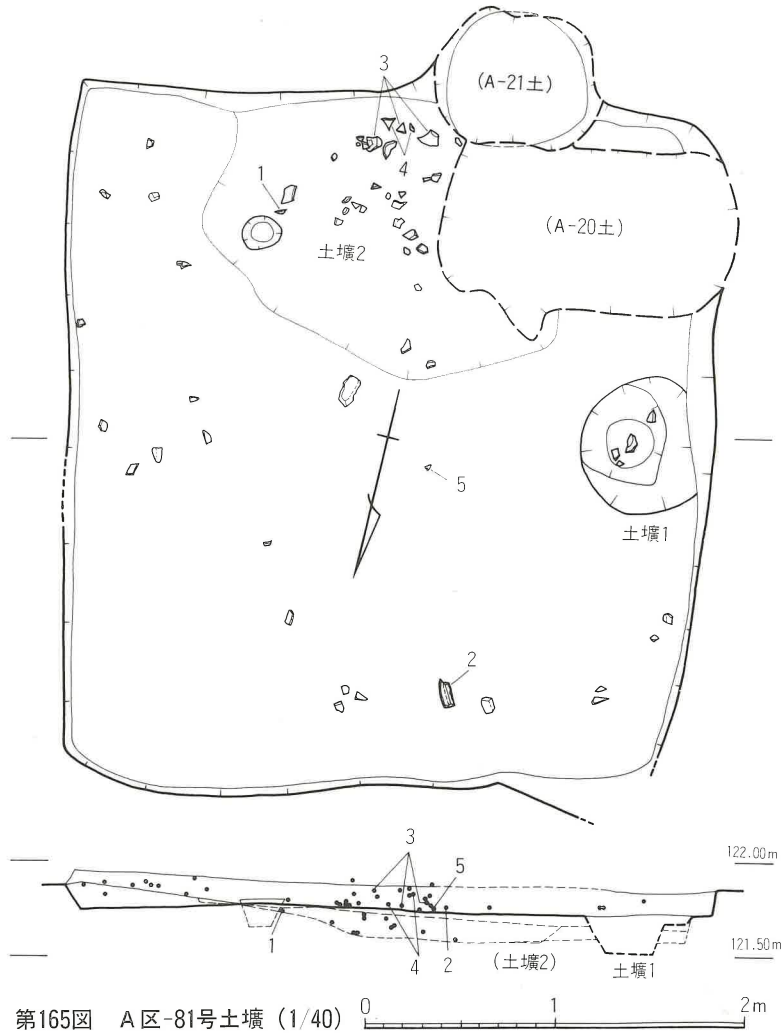
1) 土壌 (第3・5・6表)

平面形からみると、①大型円形(B)、②長円形(C)、③長方形(E)、④形の定まらない不定形(F)の4種類に大別されるが、その遺構をすべて土壌に一括した。また以上の土壌は断面形からみて、底が広がる袋状と、壁が真っすぐに落ちる竪穴状と、底面が丸い皿状の三種に大別される。大型袋状の土壌はこの時期まで存在するが、小型円形や船底形の土壌は作られていない。

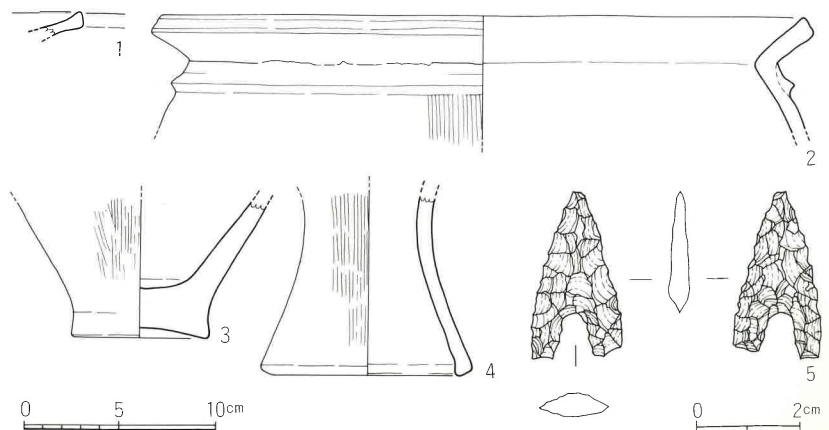
A区-81号土壌 (第165・166図
→図版21・39)

Q1～R1調査区で検出された長方形の大型土壌で、A-20・21土壌(弥生時代前期末)を切って掘りこまれている。底面は平坦である。規模は長さ356cm、幅342cm、検出面から長さ356cm、幅342cm、検出面からの深さは10cmである。長軸の方位土壌があり、土壌1は西辺中央壁ぎわに掘られている。土壌2は南辺中央の壁に接して掘られた浅い皿状の土壌である。炉がないので居住用ではないが、内部に土壌をもつ点からみて別の用途をもった施設であったと考えられる。

層序の観察をおこなっていない

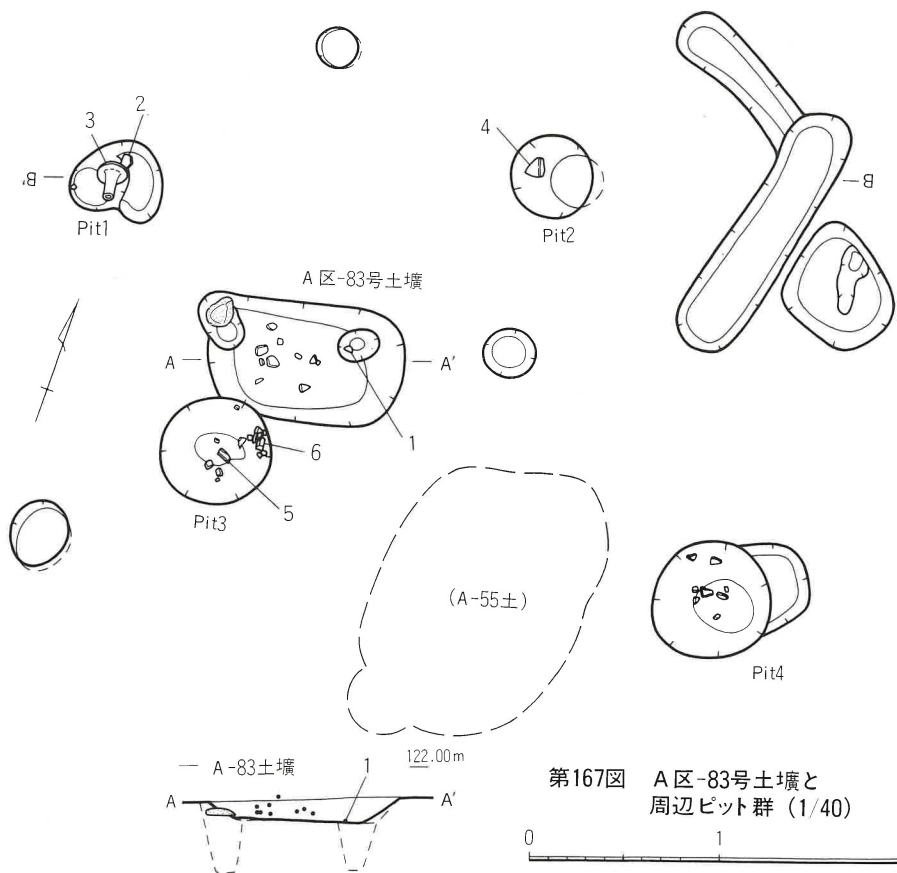
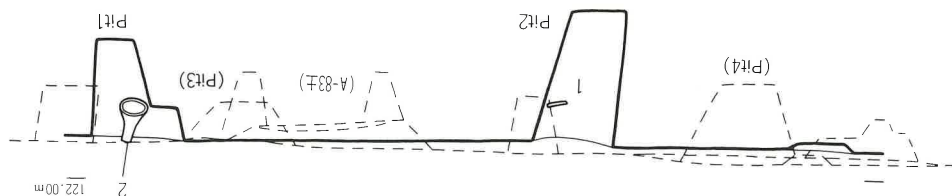


第165図 A区-81号土壌 (1/40)



第166図 A区-81号土壌出土遺物 (1～4=1/4, 5=2/3)

ので埋没状態の詳細は不明であるが、土壌2を中心に土器の小片が散在状態で検出された。1～3の甕と4の器台は破片となって、5の打製石鏃が完形品のまま検出された。ほかに図示していないが器種不明の鉄器片が1点出土している。1には丹塗りがあり、3・4は被熱している。胎土はいずれも在地産である。5の打製石鏃はサヌカイト製の無頸凹基の大型品（重さ2.3グラム）である。



第167図 A区-83号土壌と
周辺ピット群 (1/40)

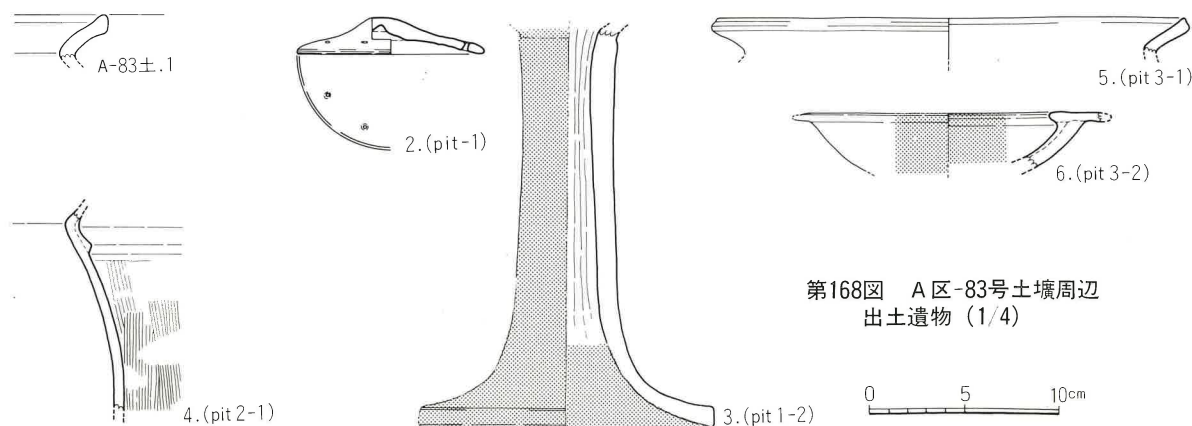


この土器からみて、土壌廃絶の時期は弥生時代中期後半と推定される。(旧C地区土壌141)

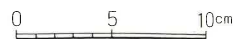
A区-83号土壌と周辺ピット群(第167・168図 →図版21・39)

A-83土壌はS0調査区で検出された長円形の小型土壌である。底面は皿状で、ピット3に切られている。その規模は長軸長114cm、短軸長62cmで、検出面からの深さは14cmである。埋土は炭混じりの暗褐色土層で、その中に土器小片が散在していた。1の甕口縁片が唯一図示できるものである。(旧C地区土壌63)

この土壌の周辺には、土壌の埋土と同



第168図 A区-83号土壌周辺
出土遺物 (1/4)



質の土で埋まったピット群があり、そのうちピット1～4から土壙と同時期の土器が出土した。そのことからA-83土壙に関連するものと考えられる。ピット1からは2個1単位の穿孔のある丹塗りの蓋(2)の破片と、根元で折れた丹塗りの高坏脚部(3)が出土し、ピット2からは甕の胴部片が、ピット3からは甕口縁片(5)と丹塗りの高坏片(6)が出土した。

この付近でのみ、この時期の遺構と遺物が検出される点からみて、以上の土壙とピットは同一の遺構の一部である可能性がある。しかし竪穴建物の残存と考えるには配置が不規則であるので、不明と言わざるをえない。

出土土器からみて、土壙等の時期は弥生時代中期後半と推定される。

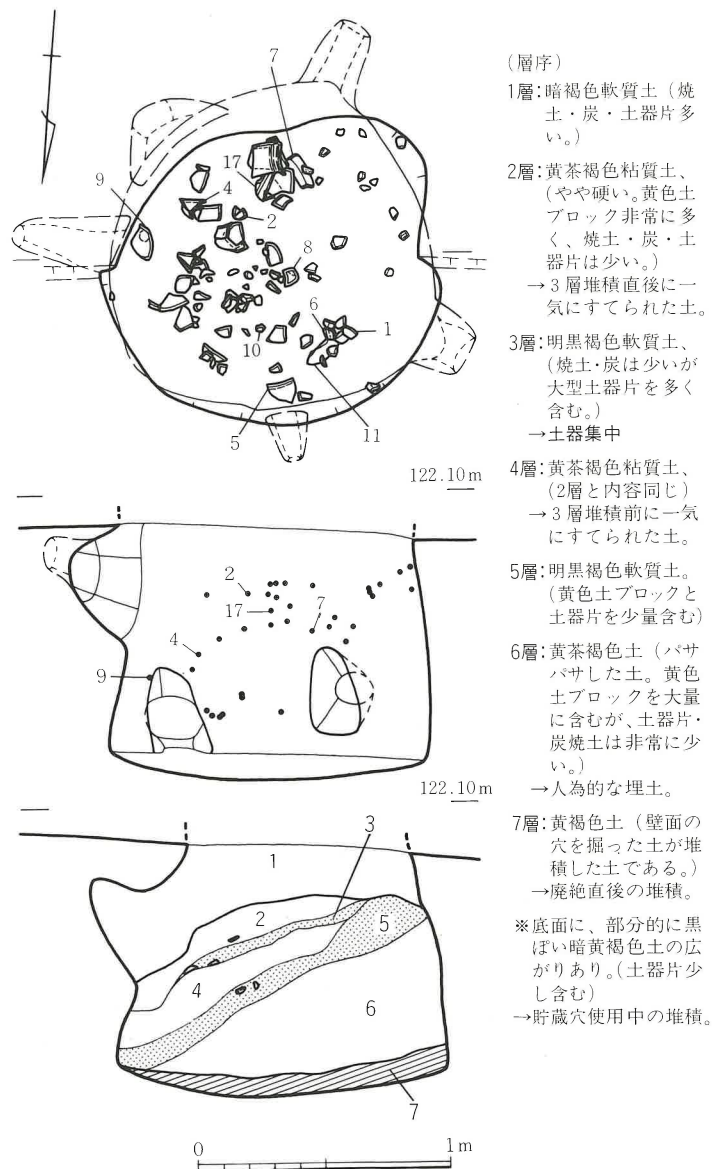
A区-84号土壙(第169・170図 →図版21・22・39・40)

S18調査区で検出された大型円形の袋状土壙である。壁の四方に深浅さまざまな穴が掘られている。規模は径133cmで正円形に近く、底面は平坦で、深さは検出面から103cmほどである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

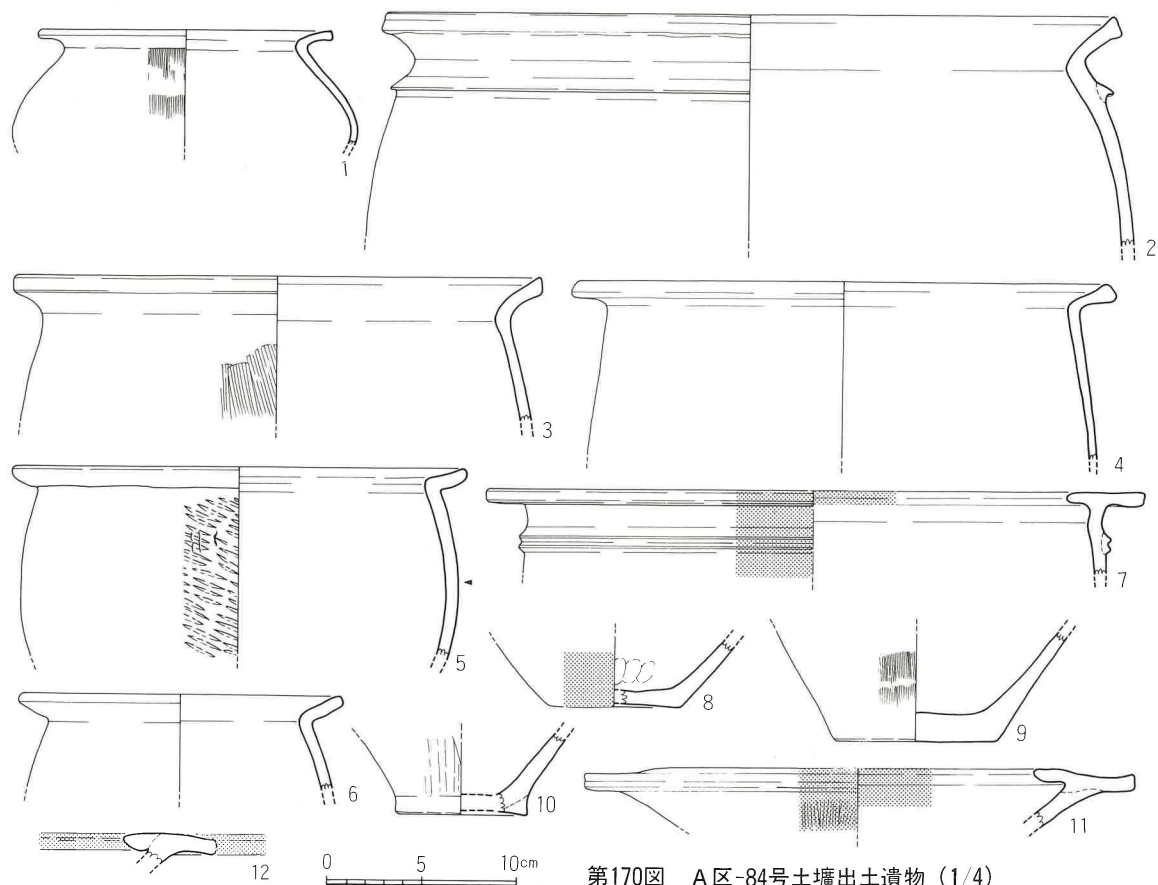
使用状態の痕跡として、土層図に表現できないほど薄い暗黄褐色土の広がりがあり、土壙底面にところどころ認められる。その表面は黒く汚れている。それは貯蔵穴使用中に形成された床面であると考えられる。

次の7層から1層までは、使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は中位の3層に遺物一括廃棄が認められることである。まず底面全体に黄褐色土の7層が堆積する。この黄褐色土は、この土壙が掘りこまれた基盤層の土そのもので、遺物をまったく含まない。土質の一致から7層は、壁の側面に穿たれた穴からの排出土であると推定される。側面の穴がどのような機能をもつのか不明だが、この時期の大型貯蔵穴ではしばしば認められ、弥生時代前期の貯蔵穴でも知られている。次に黄色土ブロック

を多量に含むパサパサした黄茶褐色の6層が、明らかに東側から投棄されたように厚く堆積している。この層にはわずかながら炭・焼土・土器細片が含まれる。その上から黒褐色の軟らかい5層が堆積し、この層中には黄色土ブロックとともに、1の小型壺の破片、10の甕底部片と11の丹塗りの高坏口縁片が含まれていた。そして上下の4層と2層に挟まれて、土器の大型破片を多量に含む3層が堆積する。上下の4・2層は黄色土ブロックを多量に含んで遺物の少ない、一度に廃棄された土である。3層中からは、4～9の甕と12の高坏がいずれも大きく割れた破片で出土したが、完形に復元できるものはなかった。4と5の甕口縁部は被熱していたが、8～10の底部破片は焼けていない。また5・7と8の丹塗りの須玖系の甕が含まれている。以上の6層から2層までは東



第169図 A区-84号土壙(1/30)



第170図 A区-84号土壙出土遺物 (1/4)

側から堆積していることが明白で、短期間に一連の行為として投棄されたものと推定される。この一連の層中には基盤層に由来する黄色土ブロックが多量に含まれているので、おそらく別の土壙を掘る際の排出土が投棄されているとみられる。したがって貯蔵穴を作り替える作業の過程には、土器一括廃棄行為が介在している可能性が高く、丹塗りの壺と高杯を含む点から、その行為は土器をもちいた祭祀であって、おそらく貯蔵穴を意識したものであろう。そして最後に炭・焼土・土器片を含む1層が堆積して埋没している。その層からは2の大型甕の破片が出土した。

出土土器はすべて在地の胎土を使用したものである。2～6は遠賀川以東系の甕A、1・7・8・11・12は須玖系の壺と高杯である。土壙廃棄の時期は、土器全体からみて弥生時代中期後半の中でも新しい時期、つまり中期末＝須玖II式の新段階にあたる。(旧C地区土壙107)

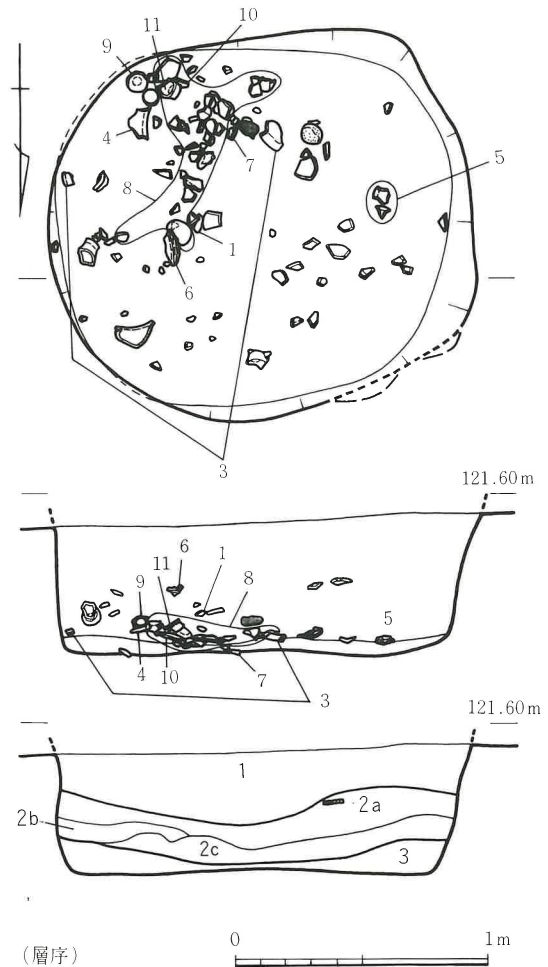
A区-85号土壙（第171・172図 →図版22・40）

T19調査区で検出された大型円形の堅穴状土壙である。底面は中央がやや高いが、おおむね平坦である。規模は長軸長172cm、短軸長150cmで、検出面からの深さは57cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

使用状態を示す証拠として、まず底面に硬くしまった3層が形成されている。この層は使用中に繰り返し踏み踏まれて形成された床面形成層で、遺物はまったく含まない。

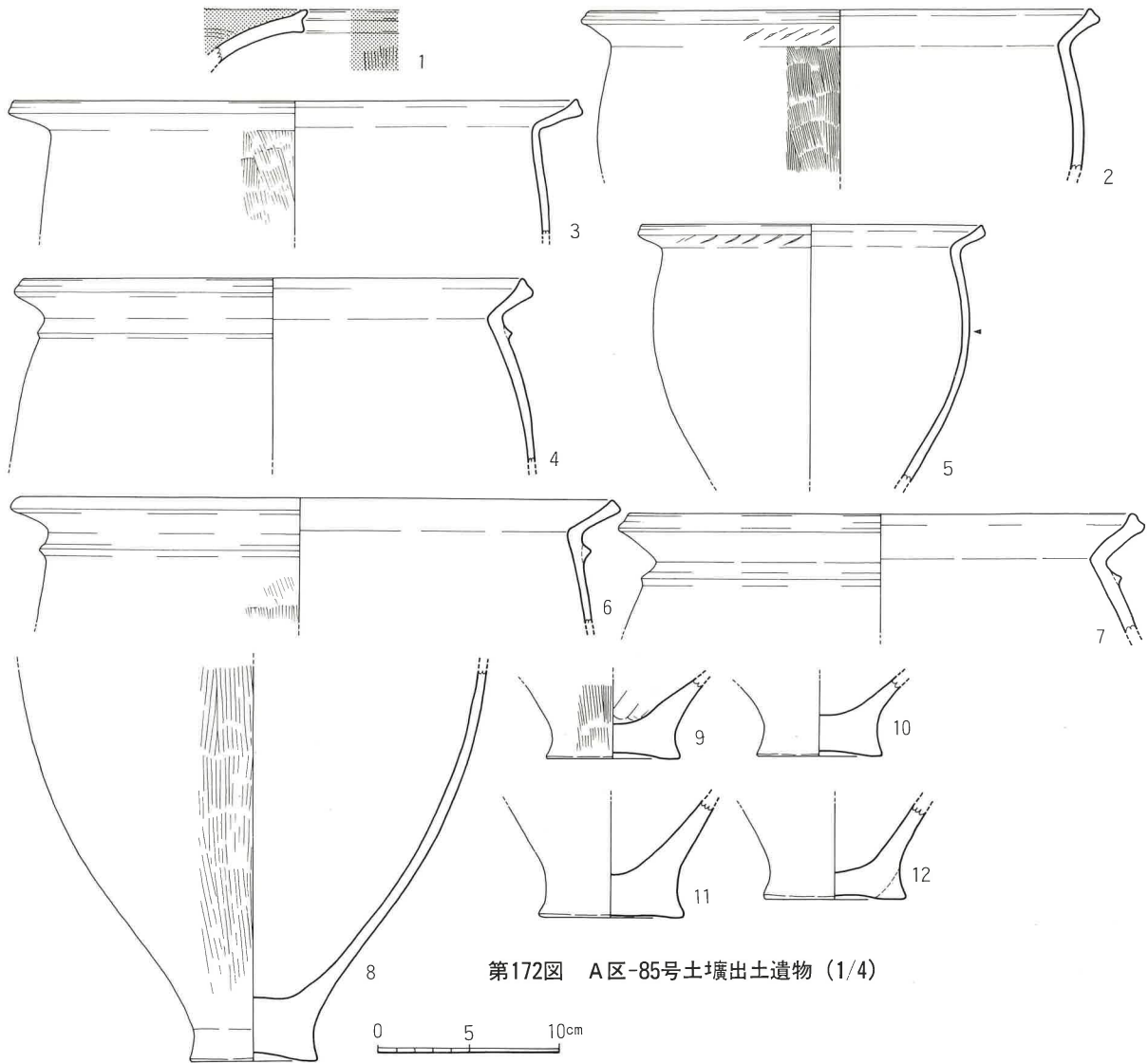
次の2層から1層までが、使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は下位の2c層に遺物一括廃棄が認められることである。まずこの3層の直上に土器の大型破片がばらばらにつぶれた状態で検出され、基盤層に由来する小礫と黄色土ブロックを少量含む硬い2c層がその上を覆い、さらに同質の暗褐色粘質土（2b・2a層）がかぶさっている。2c層からは、3～5・7～11の甕が出土した。いずれも大型破片で、廃棄された土器片だけでは完形にならないものの、口縁片と底部片が揃うので、廃棄される直前までは完形品であったと推測される。いずれも底部片は被熱している。おそらく4個体ほどの甕が、直前に割られて廃棄されたものとみられる。また2b層から1の丹塗りの壺の破片と6の甕片が出土している。そしてその上に基盤層に由来する1cm大の小礫と1～2cm大の黄色土ブロックと土器の細片を多量に含む粘質の1層が厚く堆積している。1層からは2と12の甕片が出土し、基盤層の土砂を多量に含んで遺物が少ないので、短時間に埋まったものと推定される。以上の遺物一括廃棄は、単なる生活廃棄物の投棄ではなく、なんらか非日常的行為に使われた土器を一括廃棄したものと推定される。

出土土器はすべて在地の胎土を使用したものである。1の丹塗りの須玖系の壺Dを除いて、大型破片のもの（2～7）はすべて遠賀川以東系の甕Aである。土壙廃棄の時期は、土器全体からみて弥生時代中期後半の中でも新しい時期、つまり須玖Ⅱ式にあたる。（旧C地区土壙124）



- (層序)
- 0 1m
- 1 層:黄褐色軟質土（粘質強い。地山由来の0.5～1cm大の小礫と、1～2cm大の黄色土小ブロックと、土器小片を多量に含む。）
 - 2 a 層:暗褐色粘質土（やや硬い。1～2cm大の黄色ブロックと土器片含む。）
 - 2 b 層:暗黄褐色粘質土（硬い。土器片・炭・黄色土小ブロック含む。）
 - 2 c 層:暗褐色粘質土（硬い。地山小礫・黄色土ブロック少し含む。この層の下部に大型土器片を多量に含む。）→土器集中
 - ※2 a～c層は、土壙廃絶直後に短期間に埋没・廃棄。
 - 3 層:黄色粘質土（硬い。土器片・炭は含まない。）→使用中の堆積土。

第171図 A区-85号土壙（1/30）



第172図 A区-85号土壙出土遺物 (1/4)

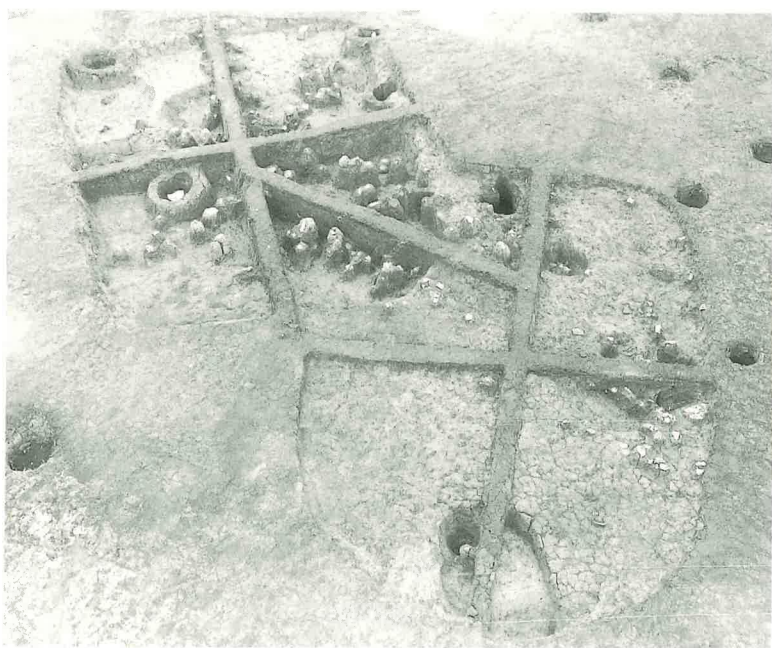


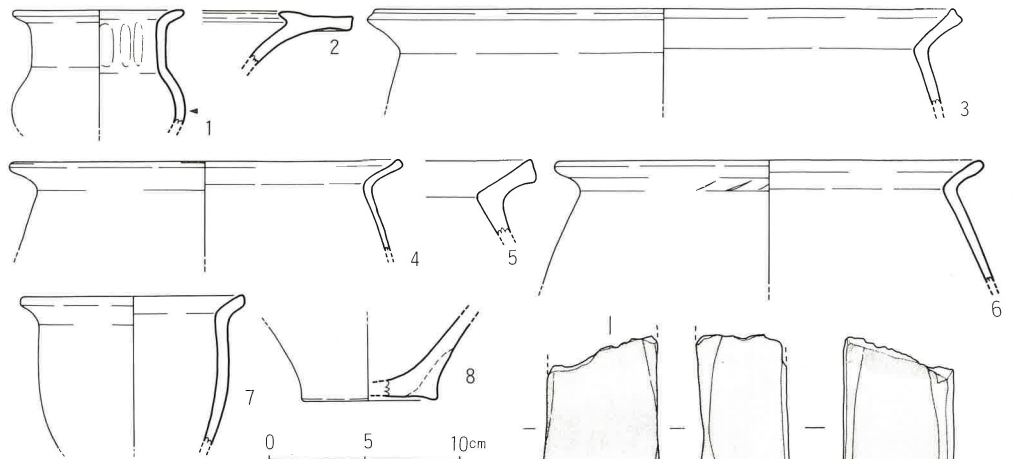
写真17. A区-86号土壙とA区-9号竪穴住居跡の遺物出土状態 (東から)

A区-86号土壙 (第173・174図、
写真17 →図版22・40)

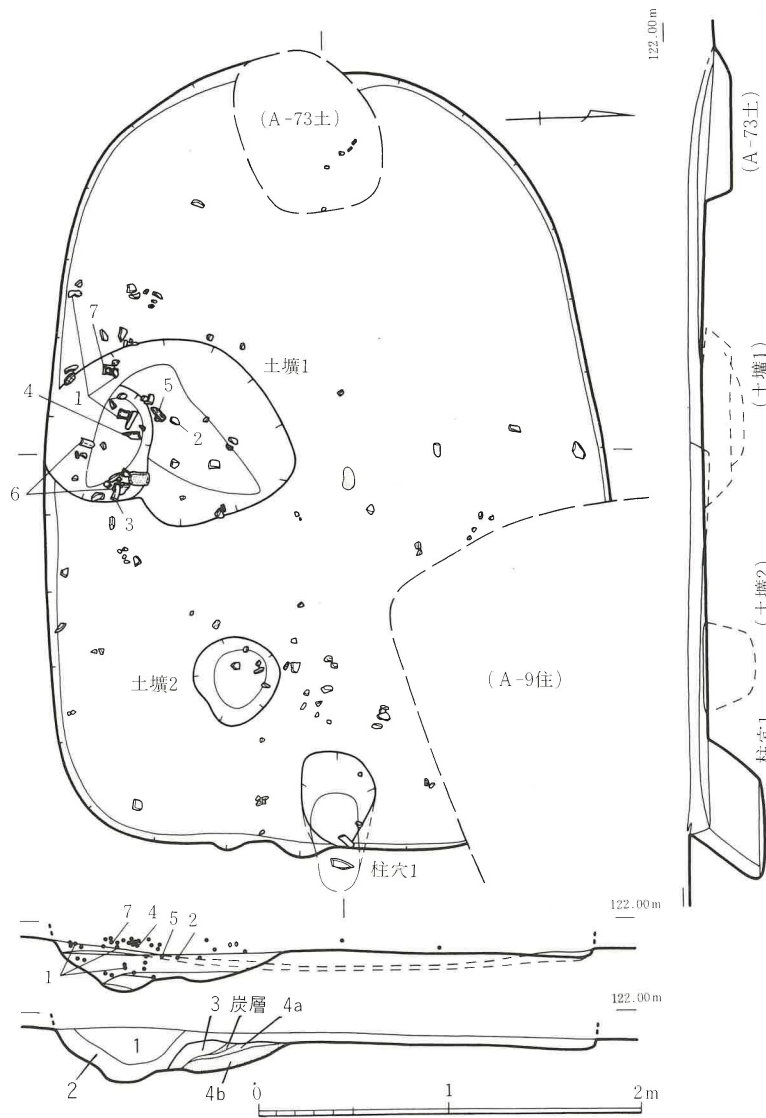
T18調査区で検出された扁平な長円形の大型土壙で、A-73土壙 (弥生時代前期末) を切り、A-9住 (古墳時代前期前半) に切られている。その規模は長さ420cm、幅300cm、検出面からの深さは8cmである。長軸の方位角は90度である。底面は平坦で、内部に2箇所の土壙と、斜めに穿たれた柱穴が1箇所存在する。土壙1は南辺中央の壁に接して掘られている。後述するように炉と密接にかかわる施設である。柱穴1は東辺の中央から壁の下に向かって斜めに掘られた柱穴である。西辺に

対応する柱穴はなく、あるいは方流れの屋根をささえる支柱1本の小屋掛けをした土壙であったのかもしれない。

まず土壙の使用状態を示すものは、土壙1の堆積である。その内部には炭を多量に含む4b層→何も含まない黄色土ブロック



第174図 A区-86号土壙出土遺物 (1/4, 9=1/2)



- (層序)
- 1層: 暗褐色粘質土 (焼土・炭・土器片, 0.5~1cm大の黄色土小ブロック少し含む)
 - 2層: 黒褐色軟質土 (炭・土器片・1~2cm大の黄色土小ブロック含む)
 - 3層: 暗黄褐色粘質土 (硬い。炭片・土器含む)
 - 4a層: 黄褐色粘質土 (=黄色土ブロックそのもの、何も含まない)
 - 4b層: 黒色軟質土 (炭を多く含む、焼土・土器片も含む)
- } 土壙廃絶後の埋土
} 土壙使用中の堆積

第173図 A区-86号土壙 (1/40)

クの4a層→硬い暗黄褐色の3層が順に堆積し、その表面は硬く締まっている。おそらく土壙使用中に堆積した炉からの排出土である。しかし土壙内には炉の跡はなく、外部から持ち込まれたものと推定される。そしてその上に炭・焼土・土器細片と黄色土ブロックの小粒子を多量に含む2・1層が、土壙1を埋めながら堆積している。遺物は土壙1を中心にこの土壙全体に散在する。2層中から1・2の壺の破片と3~8の甕の破片や、9の折れた砥石などが出土した。以上の埋没状態からみて、土壙廃絶後は生活廃棄物の捨て場所に転用されたとみられる。

出土土器はすべて在地の胎土を使用したものである。1は小型壺で、2は須玖系の壺、7は小型の甕である。6・8は被熱している。9の砥石は砂岩質頁岩製でよく使い込まれている。

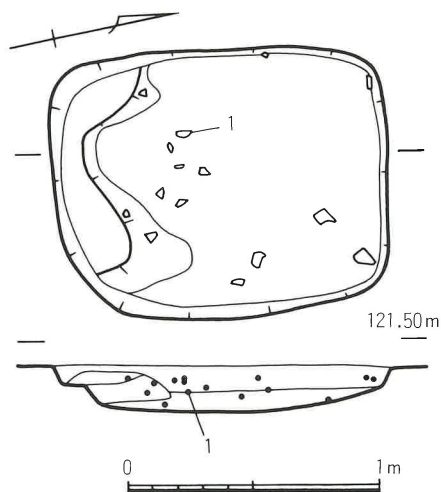
土壙廃棄の時期は、出土土器からみて弥生時代中期後半の中でも古い時期、つまり須玖I式の新段階からII式の古段階にあたりと考えられる。(旧C地区土壙109)

A区-87号土壙 (第175・177図 →図版22)

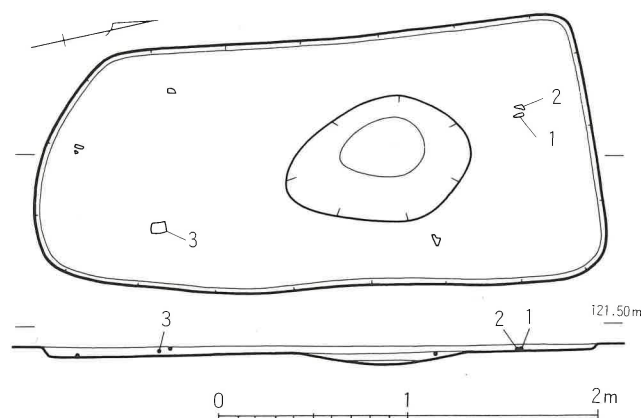
U0調査区で検出された長方形の土壙で、底面は皿状である。南側に段が付き、階段状の入り口施設を思わせる。その規模は長さ148cm、幅105cm、検出面からの深さは20cmである。

埋土は炭混じりの暗褐色土層で、その中に土器小片が散在していた。図示できるのは第177図1の丹塗りの高坏D口縁部片のみである。胎土は在地産で、破片の一部はとなりのA-88土壙からも出土した。

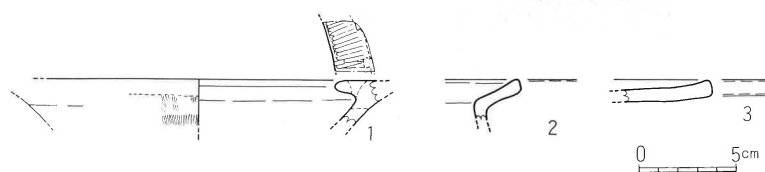
土壙廃棄の時期は、出土土器からみて弥生時代中期後半あたると考えられる。(旧C地区土壙120)



第175図 A区-87号土壙 (1/30)



第176図 A区-88号土壙 (1/40)



第177図 A区-87・88号土壙出土遺物 (1/4)

A区-88号土壙 (第176・177図 →図版22)

同じくU0調査区で検出された不定形の土壙で、A-87土壙に接するように掘られている。底面は平坦で、中央やや北よりに浅い凹みがある。その規模は長さ304cm、幅131cm、検出面からの深さは6cmである。土壙の性格は不明であるが、出土土器に同一個体のものがあることから、となりのA-87土壙と関連することは明らかである。

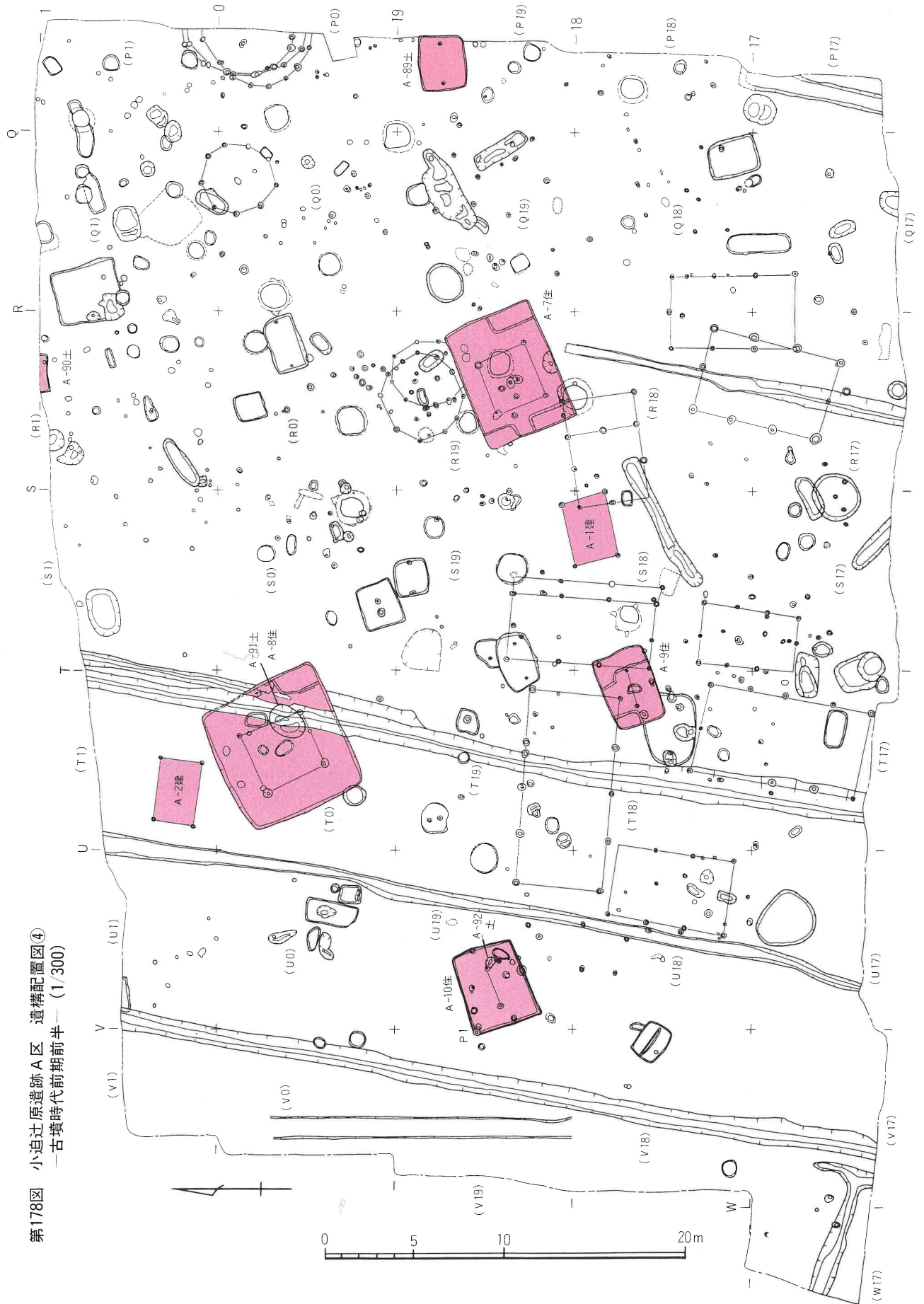
埋土は黄色土ブロックと暗褐色土の混在層で、炭・焼土は含まず、土器小片がわずかに散在していた。図示できるのは第177図2の甕口縁部片と、3の高坏の口縁部片のみである。いずれも胎土は在地産である。また1の破片の一部はとなりのA-87土壙からも出土した。

土壙廃棄の時期は、出土土器からみて弥生時代中期後半あたると考えられる。(旧C地区土壙121)

第5節 古墳時代前期前半 (第178図)

この時期にあたる遺構はそれほど密集しないが、A区全面に満遍なく分布する。竪穴住居跡4軒・掘立柱建物跡2棟、土壙4基を確認し、ピット1本を本文に掲載した。この時代のピットはまだ存在するであろうが、土器

第178图 小迫辻原遺跡A区 遺構配置図④
—古墳時代前期前半— (1/300)



を含まないためにほかの時期のピットと区別できなかった。

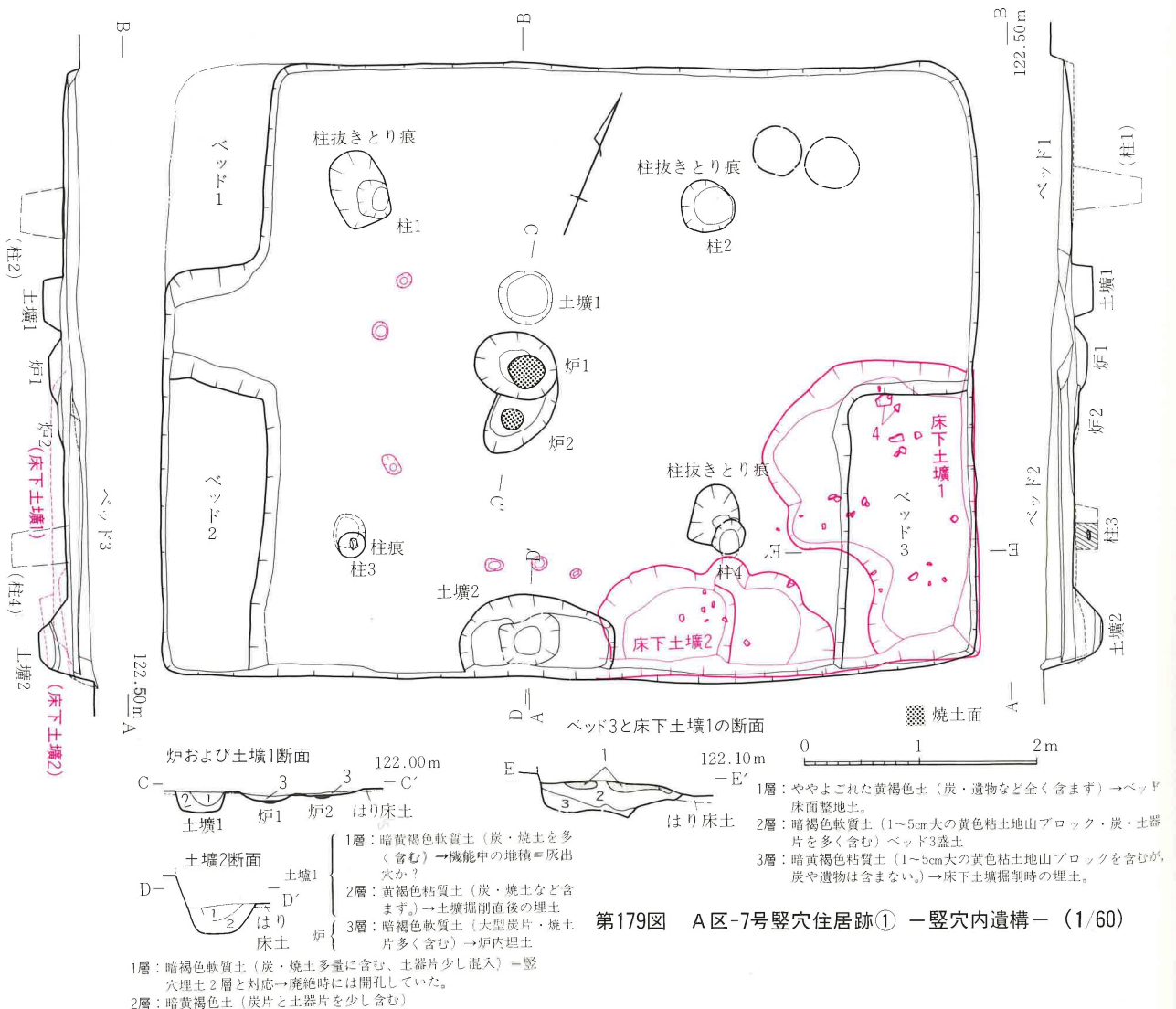
遺構の配置の特徴は、竪穴住居跡が地形の高低とは無関係に、ほとんど同じ方位にのっって建てられていることである。いずれも方位角70度前後で、後述するB区の第2群の竪穴住居跡の方向と一致し、さらに1号方形環溝の方向と近似する。

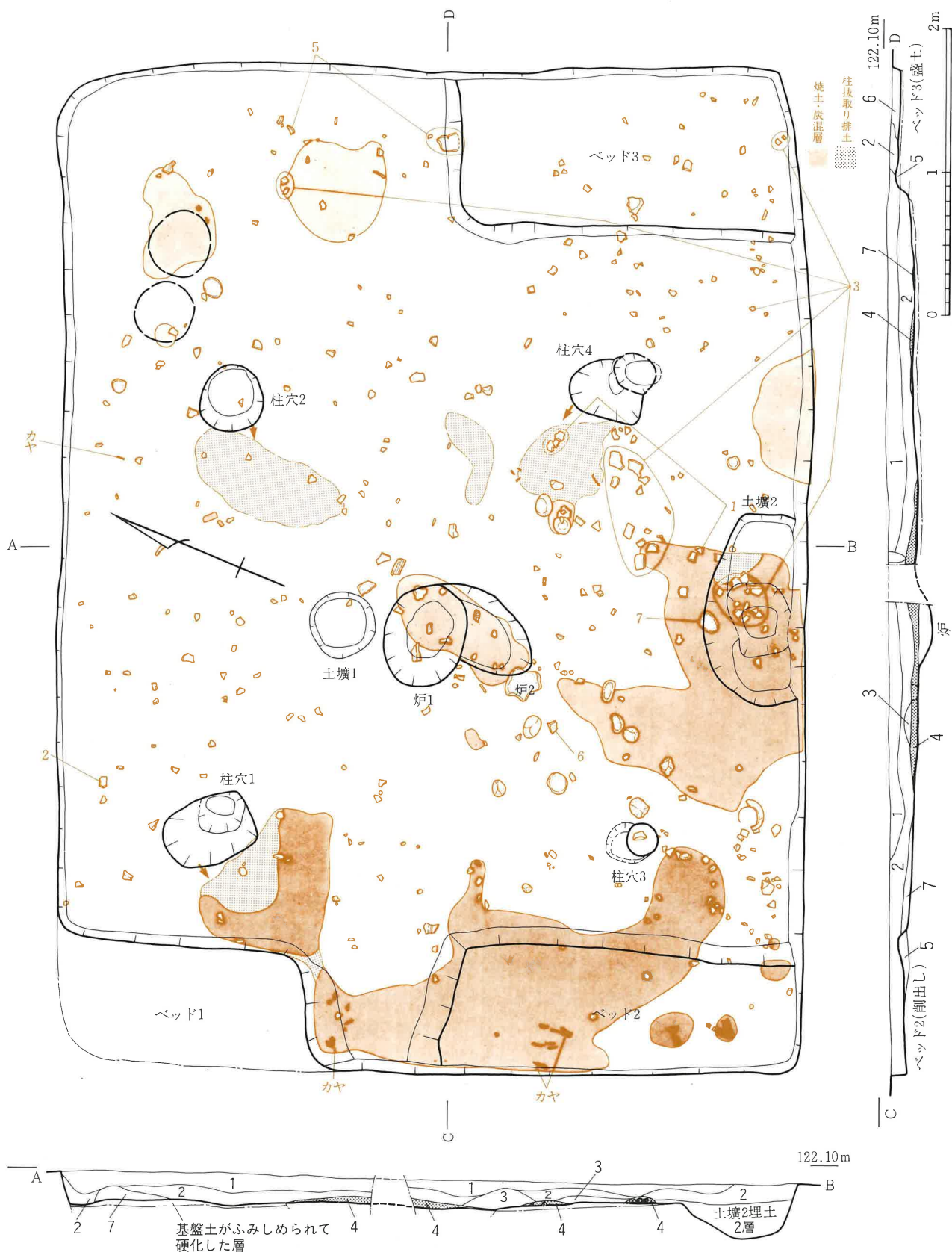
1) 竪穴住居跡 (第1・5・6表)

中型の竪穴住居跡であるA-7住と小型のA-9住とがほぼ同じ方位で、長軸が同一直線になるように配置されている。大型の竪穴住居跡であるA-8住と小型の竪穴建物であるA-10住も軸をずらしながら、A-7住とA-9住の関係とほぼ同じ配置でたてられている。大小の竪穴が一単位となって建設されている可能性が高い。

A区-7号竪穴住居跡 (第179~181図 →空撮図版2上・図版23・24・40・41)

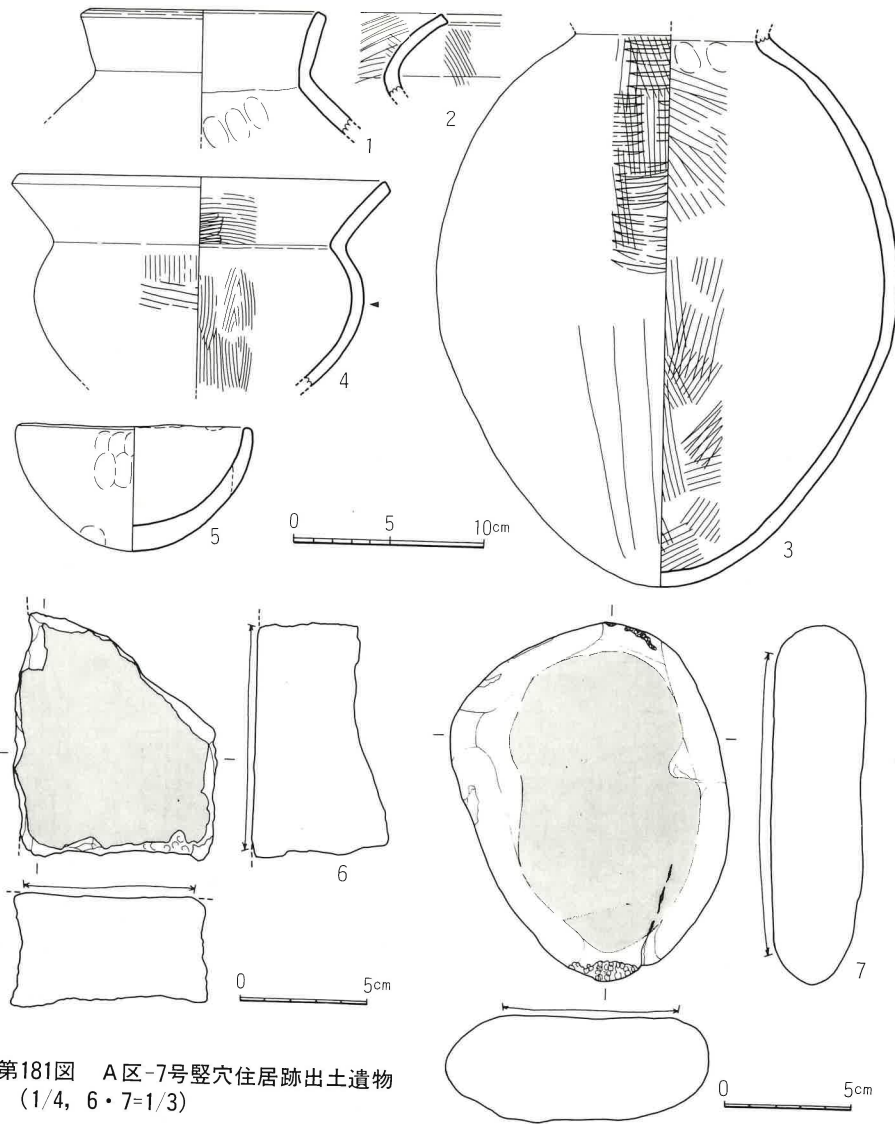
A区中央の最高所に近い位置に建設された東西方向に長い長方形の竪穴建物で、A-51・52・53土壙やA-5住などの弥生時代前期の遺構を切る。規模は東西長軸長710cm、南北短軸長530cmで、検出面からの深さは25cmである。東西長軸の方位角は68度で、床面積は35.8㎡の大型竪穴である。竪穴の平面形にあわせた4本柱の構造であるが、柱穴配置は全体に西に偏っている。柱穴3のみがやや浅いほかは柱穴の深さは揃う。床面は踏みしめられて硬化したものである。ベッド3の周辺に床下土壙が2箇所ある。いずれも竪穴掘削の際に壁際を深くほりこんだ不整形の土壙である。4の台付鉢口縁部のように、床下土壙の埋土には土器片がかなり含まれる。





- 1層：暗茶褐色軟質土（焼土・炭・土器片少量含む。）
 2層：明黒褐色土（やや粘質、焼土・炭・土器片を多量に含む。炭・焼土が特に多い黒色部分を平面図に示した。かなりの部分が床面に密着して広がる）→焼却行為がおこなわれている。
 2層：黄褐色ブロックを含む明茶褐色土（上面が焼けている。）→柱抜きの際の排出土。
 4層：黒褐色土（やややうすい炭層・焼土を少し含む。炉からのかきだしで2層とは異なる）
 5層：暗黄褐色土（ベッド上面整地層）
 6層：赤茶褐色土（ベッド3上に広がる焼土・炭を含む層。）→2層に近い。
 7層：明茶褐色土（2層の下に部分的に堆積・焼土・炭は含まない。）柱抜きとり排土か？

第180図 A区-7号竪穴住居跡② 一遺物出土状態と層序一 (1/40)



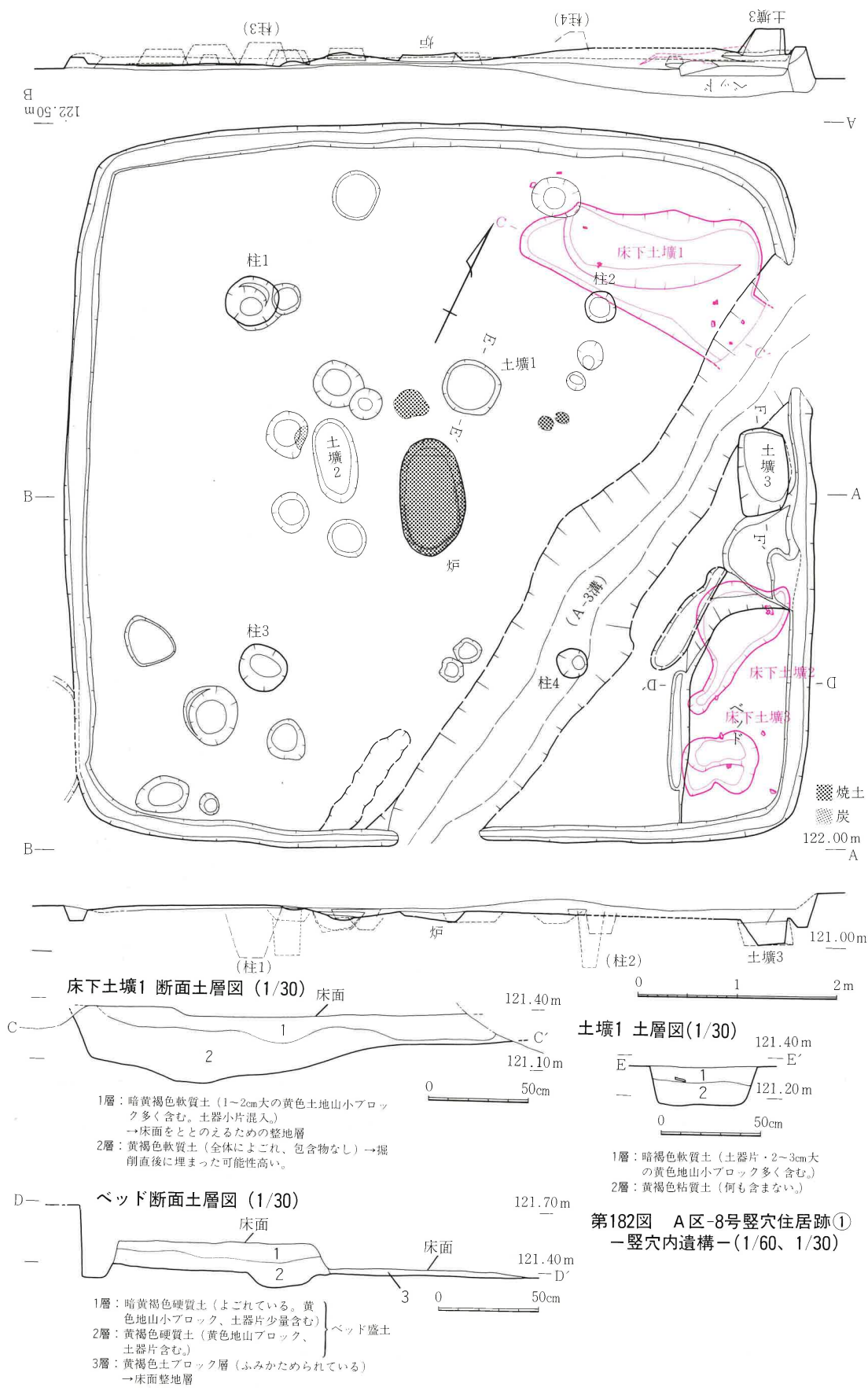
第181図 A区-7号竪穴住居跡出土遺物
(1/4, 6・7=1/3)

内部施設には、3箇所のベッド状遺構がある。西辺に南北に並んでベッド1と2が、地山を削りだして作られる。一方対面する東南隅には床下土壌1を埋めた上に、さらに盛り土をしてベッド3が築かれる。中央には炉が二箇所重複しており、廃絶時に投棄された遺物が炉2の中に入りこんでいるので、廃絶時に使われていたのは炉2の方である。つまり当初は竪穴の中心に炉1が設けられ、その後南側の炉2に造り替えられている。炉の構造は両者とも底の中央が焼けて焼土面となる通常の地床炉である。炉の北にある土壌1の内部に、炉内と同様の炭・焼土を含む土が多量にあり、炉に関連する施設であると考えられる。南辺中央の壁にそって作られた長円形の土壌2は、廃絶時の焼却行為の際に堆積した2層が内部

に流れこんでおり、竪穴廃絶時には開口していたと推定される。この竪穴建物の機能は炉とベッド状遺構の存在からみて、居住目的に建設され、実際にそのように使われたものであると言える。

廃棄時に、次のような柱の抜取りと焼却行為がおこなわれている。まず床面に黄色土ブロックを含む茶褐色土(3・7層)が、第180図のように数か所に点在する。その位置は柱穴1・2・4の周囲で、以上の3箇所の柱穴には明瞭に柱の抜取痕跡が認められることから、その土は柱抜取り時の排出土である。そのために掘り崩された基盤層の黄色土が含まれているのである。ただし不思議なことに柱穴3の周囲にはその排出土はなく、柱抜取りの掘り広げも認められなかった。柱穴3のみはそのままだったのだろうか。しかし柱穴3の上は焼却時の堆積である4層が覆い、また焼けた柱材も検出できないので、やはり抜取られていることは確かである。おそらく柱穴3の柱のみは切り取るか、あるいは特に丁寧に抜かれたと見られる。ところで炉の周辺では、焼土を含む炭層(4層)が薄く広がり、一部柱抜取り排出土の下になっていた。土器は含まず、柱抜取りの直前におこなわれた炉の片付けの跡とみられる。

次に炭・焼土・土器片を大量に含む黒褐色土(2層)が、竪穴全体を覆うように堆積している。柱抜き取りの排出土や炉の掻きだし土のないところでは、床面に直接接している。大量の炭と焼土を含み第180図のように部分的に炭・焼土だけの厚い堆積となっていた。この点とさらに柱穴抜取り排出土の上面が焼けて赤変している点からみて、竪穴全体を使った焼却行為がおこなわれたことは確実である。また炭片の中には茅材とみられる炭化物が点在し、おそらく焼却された建築材の名残りと考えられる。この層中では小片となった多量の土器片・磨石



第182図 A区-8号竪穴住居跡①
-竪穴内遺構-(1/60、1/30)

と焼けた円礫が散在した状態で検出され、また焼土・炭層の中に混ざりこむ破片も多い。3の甕は完形に近く復元できたが、破片は竪穴全体に散らばる。5の碗も同じである。ほかに1の壺片、2の甕片が混じり、6の石皿片は周囲の焼けた円礫といっしょに出土した。7の磨石は完形のまま床面直上に置かれ2層が覆っていた。そして最後に炭・焼土・土器片を少量含む1層が堆積している。

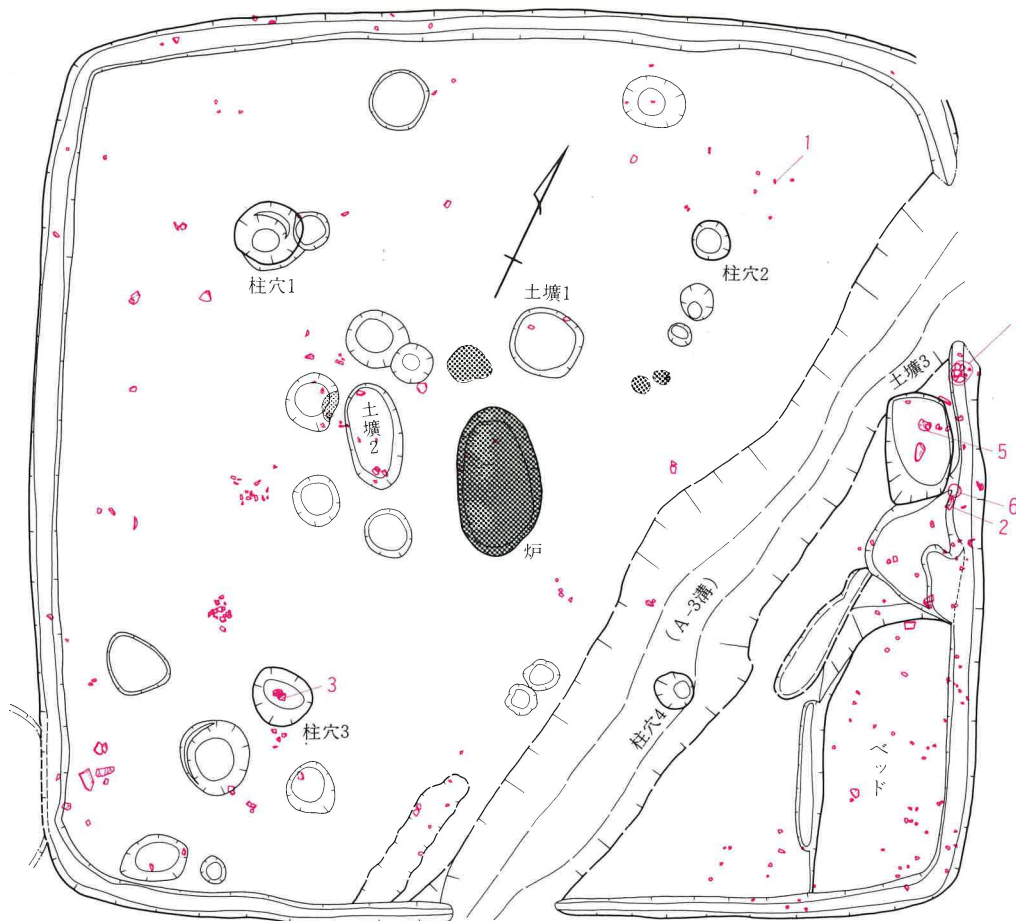
以上の竪穴廃絶時の状況をまとめると、

炉の片付けと柱の抜取りがおこなわれ、

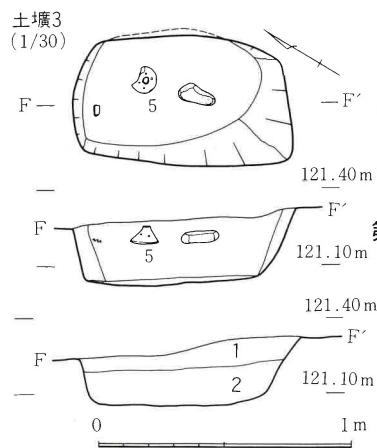
廃材をその場で焼却する。

その際、おそらくこの住居で使われていた磨石と円礫が残される。

焼却層の中



に土器細片を多量に含む点（上層ほど土器片は少ない）からみて、土器片もまた焼却時に片付けたものである。焼却時に廃棄物となった土器片が偶然多量にあったと考えるよりは、焼却に先立ちまたは並行して祭祀がおこなわれ、そこで使われた土器の一部が廃棄された可能性が高い。完形に復元できる例がほとんどない点からみて、大部分はほかの場所に廃棄されたと推定される。この祭祀は竪穴建替えに際しておこなう廃絶祭祀であると推定される。

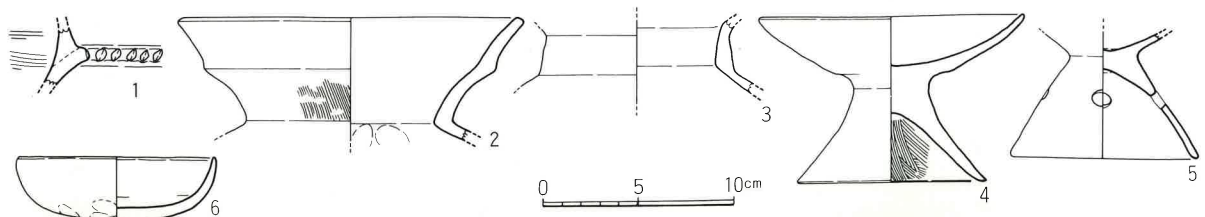


第183図 A区-8号竪穴住居跡② -遺物出土状態-(1/60)

、出土遺物のうち、土器はいずれも在地系のA類のみで、胎土も在地産である。2・3は被熱している。6の石皿の破片と7の磨石は地元産の安山岩を利用している。竪穴住居跡の時期は、建設時の方向と出土土器からみて古墳時代前期前半の小迫辻原3期に建設・使用・廃絶したと推定される。（旧C地区竪穴住居12）

A区-8号竪穴住居跡（第182～184図 →空撮図版2下・図版24・25・41）

削平が激しい場所で検出された長方形の竪穴建物で、A-3溝（近世）に大きく切られている。規模は東西長軸長760cm、南北短軸長720cmで東西方向にやや長く、検出面から最も深いところで約20cmである。東西長軸の方位角は65度で、床面積は51.3㎡の大型である。竪穴の平面形にあわせた4本柱の構造である。柱穴の深さは一定していない。ベッドの背後およびベッド前面に周溝がほぼ全周し、土層の観察からみて壁材固定用の溝と考えら

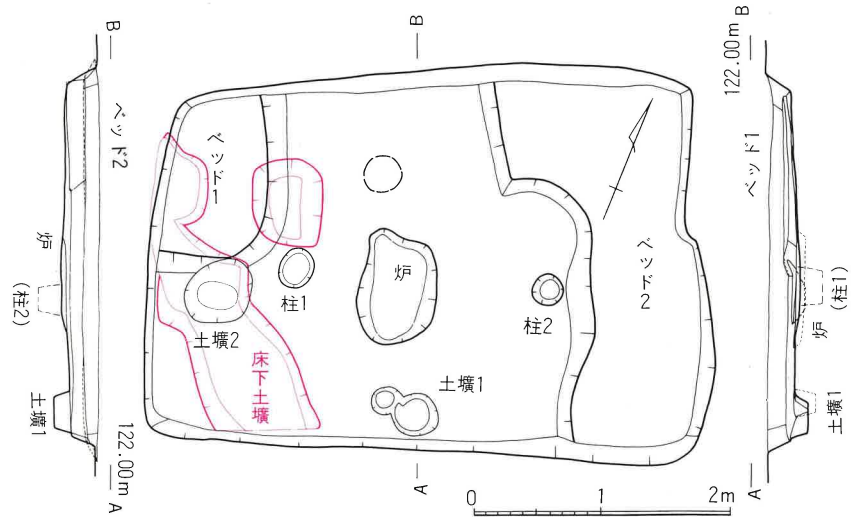


第184図 A区-8号竪穴住居跡出土遺物（1/4）

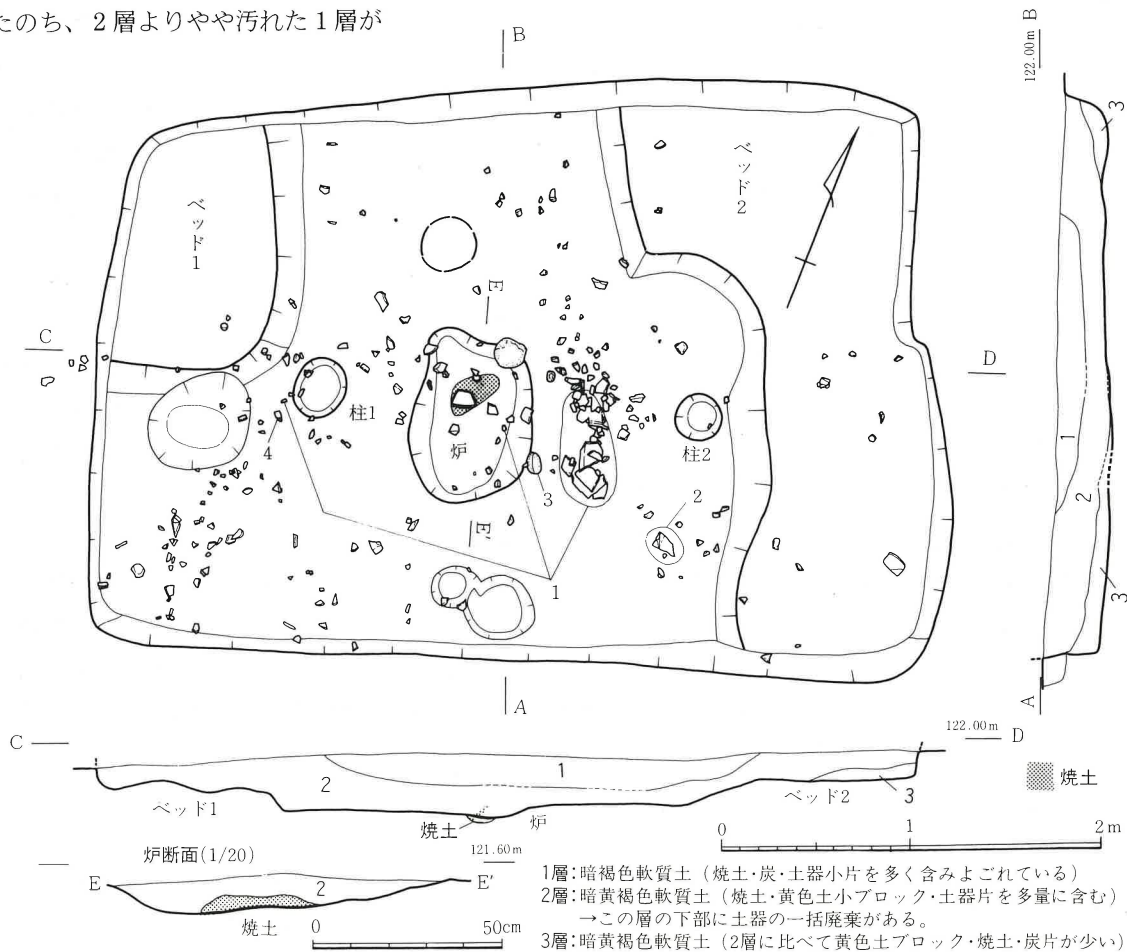
れる。特にベッド前面の周溝はC-8住例と同様に、ベッドの側面板材の固定用に掘られたものと考えられる。床面は踏みしめられて硬化したものである。床面の下では、大小3箇所の床下土壌を検出したが、ベッドと対応しないので堅穴掘削時の掘りすぎの可能性が高い。

内部には、まず東南隅のベッド状遺構がある。床面をいったん平らにした上に盛り土をして築かれている。堅穴中央には南北に長い長円形の地床炉があり、内部に焼土が堆積していた。炉の周辺を中心に床面で多数のピットと小土壌を検出したが、遺物の出土状態からこの堅穴にともなうと推定されるのは三箇所であった。そのうち土壌1と2は埋土からみて炉とは無関係のようである。東辺中央の壁に接する土壌3は廃絶時に土器が置かれていたので、その時点では開口していたとみられる。この堅穴建物の機能は炉とベッド状遺構の存在からみて、居住用と推定される。

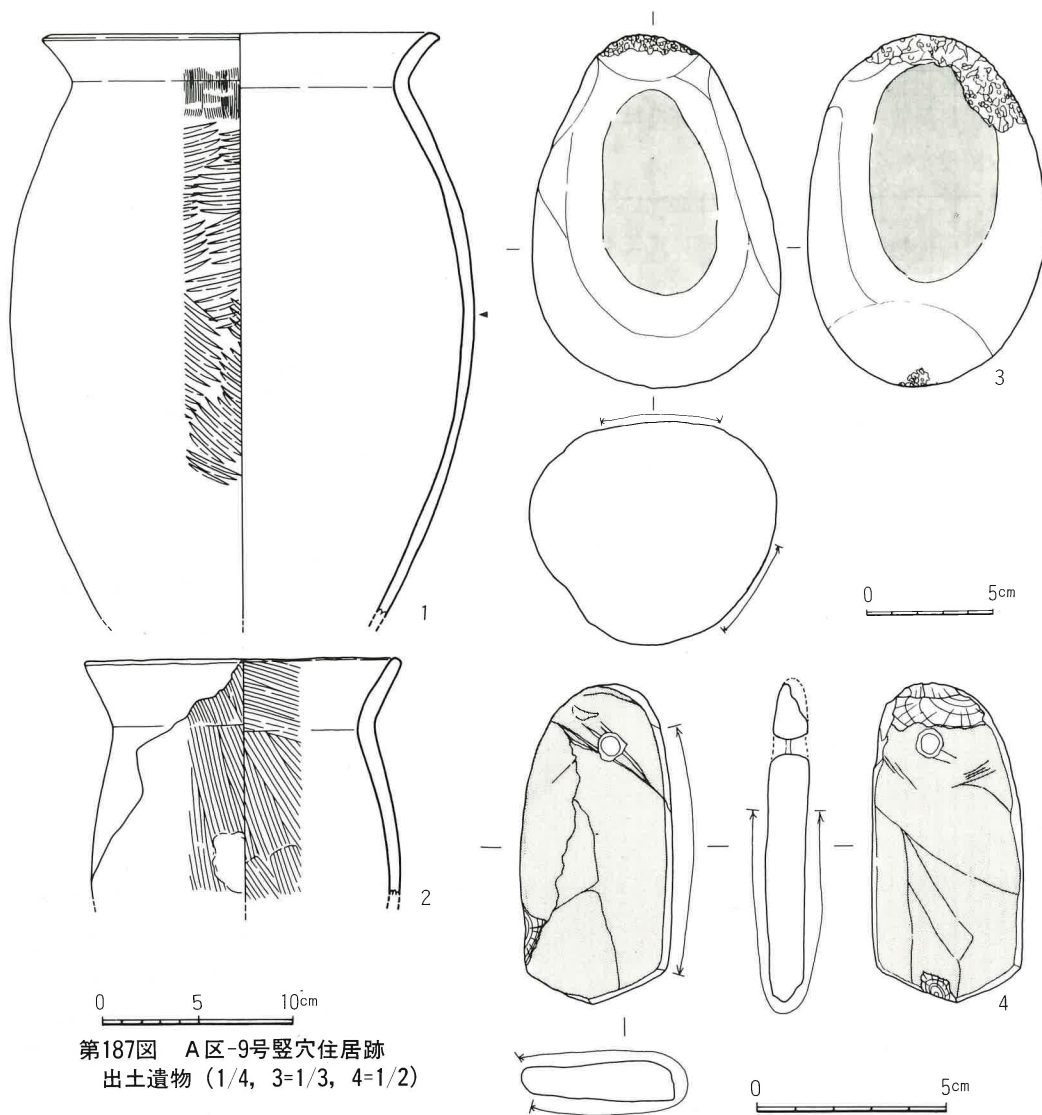
ほとんど床面近くまで削平されているので埋没状態は不明だが、残された柱穴や土壌内の様相からある程度推定可能である。まず柱穴3の柱痕内から3の二重口縁壺の破片がつぶれて出土したので、柱の抜取りがおこなわれたとみられる。また土壌3とその周辺では、興味深い出土状態が観察された。土壌3では、まず無遺物の2層が堆積したのち、2層よりやや汚れた1層が



第185図 A区-9号堅穴住居跡①—堅穴内の遺構—(1/60)



第186図 A区-9号堅穴住居跡②—遺物出土状態と層序—(1/40)



第187図 A区-9号竪穴住居跡
出土遺物 (1/4, 3=1/3, 4=1/2)

覆う。その1層の中に5の器台の脚部が正位で検出され、その隣で同じ高さで円礫が1個検出された。2・1層ともに黄色土ブロックを多量に含んでいるので、土壌3は埋め戻されたと考えられ、その過程で一旦埋め戻しを中止して、坏部を取り除かれた器台の脚部と円礫を埋置したものと推定される。さらに土壌3の北の壁ぎわに4

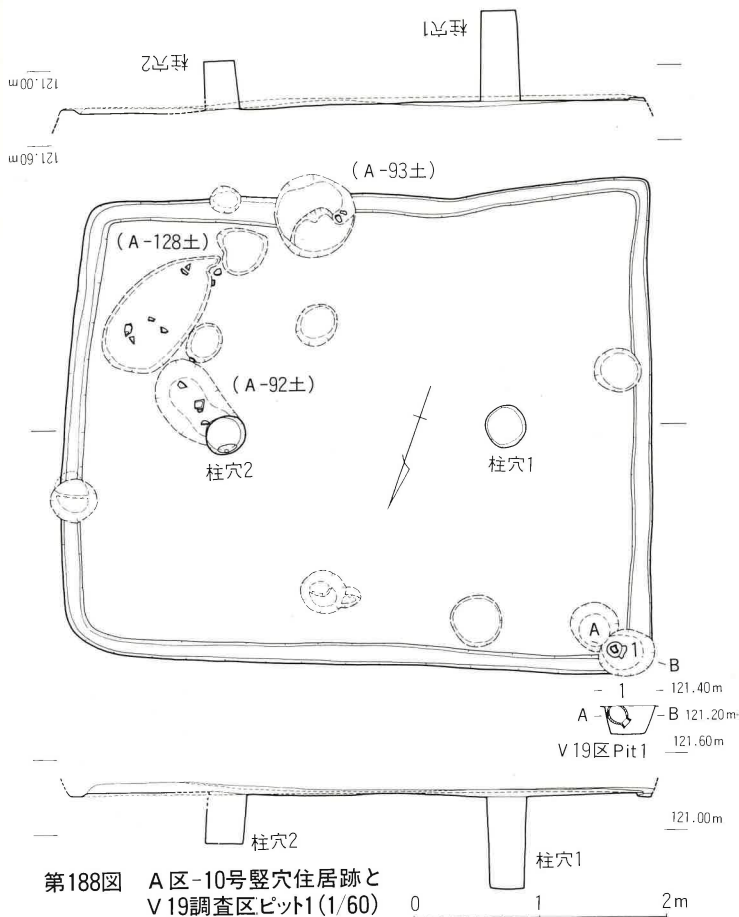
の小型高坏がつぶれて検出され、完形に復元でき、さらに被熱していた。同時に南側には2の二重口縁の壺の頸部以上の破片と、逆さに伏せられた完形の6の碗が検出された。竪穴住居廃絶時に土壌3を埋め戻し、3個体の小型供献用土器を用いた供献儀礼がおこなわれた可能性が高い。竪穴住居跡の廃絶祭祀の一例である。

出土土器はいずれも在地産の胎土を用いている。1は床面で検出された在地系の複合口縁壺Aの小片。2・3は布留系の二重口縁の壺D。4は伝統的V様式系の小型高坏B。5は布留系の器台D。6は在地系の碗Aである。4は被熱している。竪穴住居跡の時期は、建設時の方向と出土土器からみて古墳時代前期前半の小迫辻原3期に建設・使用・廃絶したと推定される。(旧C地区竪穴住居13)

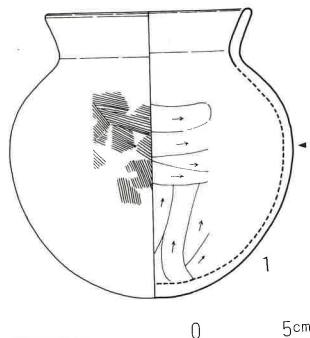
A区-9号竪穴住居跡 (第185~187図 →図版25・41)

A-7住の長軸方向上に位置する長方形の竪穴建物で、A-86土壌(弥生時代中期後半)を破壊し、A-6・8建物(中世)の柱穴が重なっている。規模は東西長軸長450cm、南北短軸長315cmで東西に長く、検出面からの深さは30cmである。東西長軸の方位角は71度で、床面積は11.5㎡の小型竪穴である。竪穴の長軸にあわせた2本柱の構造で、その深さは揃っている。床面は踏みしめられて硬化したものである。床面の下には、大小2箇所の床下土壌を検出したが、ベッドと対応しないので、竪穴掘削時の掘りすぎの可能性が高い。

内部施設には、東西両辺にベッド状遺構がある。いずれも地山を削りだして作られたものである。ベッド1は西北隅に小規模に作られ、これに対しベッド2は東辺全体から北辺にかけてL字形に削りだされている。竪穴中央には南北に長い長円形の地床炉があり底に焼土が堆積していた(第186図)。床面上には土壌1と2がある。この竪穴建物の機能は炉とベッド状遺構の存在などからみて、居住用に建設され、実際にそのように使われた竪穴住居であると言えるが、きわめて少人数しか寝起きできないと考えられる。



第188図 A区-10号竪穴住居跡とV19調査区ピット1(1/60)



第189図 V19調査区ピット1出土遺物(1/4)

柱穴の大きさは揃っている。周溝が全周するが、床下土壌はなく、ベッドの有無は不明である。周溝が残っているから、もし地床炉や土壙などの内部施設が存在したならば、その痕跡がのこって然るべきであるが検出されなかった。それゆえ本来この竪穴建物には、炉などの居住用施設はなかったと推定される。したがってこの竪穴建物は人が寝泊りする住居そのものではなく、別な機能を考えなければならないだろう。その点でA-8住と一単位をなす配置は興味深い。出土遺物はまったく無く、直接竪穴の時期を示すことはできないが、廃絶直後に掘りこまれたと推定されるピット1の土器の時期と、A-8住との密接な関係が推定できる点からみて、古墳時代前期前半の小迫辻原3期と推定される。(旧C地区竪穴住居14)

V19調査区ピット1(第189図 →図版26・41)

A-10住の西北隅の周溝に掘りこまれたものである。この位置にピットを掘るのが可能なのはA-10住廃絶直後の

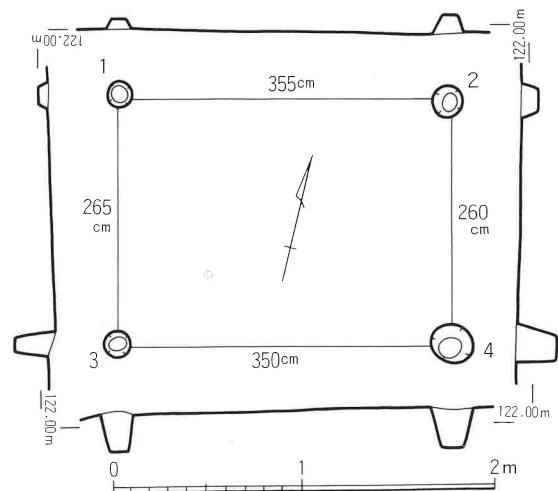
3～1層は、使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は2層下部に遺物一括廃棄が認められることである。まず床面直上に土器の大型破片がばらばらにつぶれた状態で検出され、その上を基盤層に由来する黄色土ブロックと炭・焼土を多量に含む軟らかい暗黄褐色の2層が覆い、さらに同質の暗褐色土(1層)が堆積している。2層からは1の甕が大型破片をまとめて投棄されたように検出され、2の甕は口縁部破片のみが検出された。ともに被熱している。3の磨石と4の小型携帯用砥石も検出されたが、この層には大量の弥生時代中期後半の土器片が混入しているので、一括廃棄の遺物かどうか判定できない。焼却の痕跡はなかったが、床面を覆う2層中に遺物一括廃棄があり、多量の基盤層に由来する黄色土ブロックを含むことから、単なる生活廃棄物の投棄ではなく、なんらかの祭祀的行為が介在した上で埋め戻された可能性が高い。

出土遺物。1は床面で検出された在地系の甕A。2は在地系の甕Aで、胎土に石英を多量に

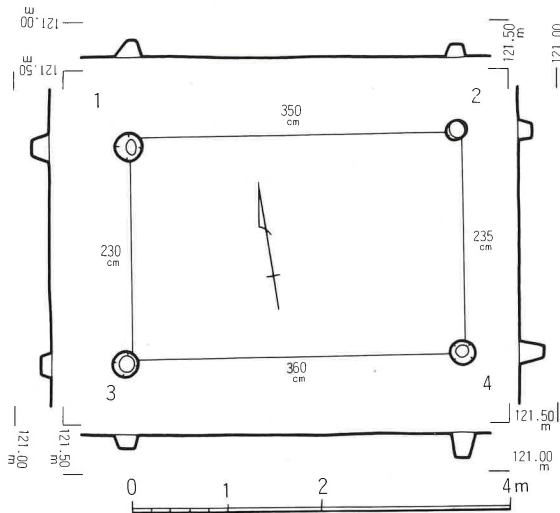
含む搬入品。3は安山岩製の完形の磨石。4は使い込まれた携帯用の砥石である。この竪穴住居跡の時期は、建設時の方向と出土土器からみて、古墳時代前期前半の小迫辻原3期に建設・使用・廃絶したと推定される。(旧C地区土壙108)

A区-10号竪穴住居跡(第188図 →図版26)

A区の西端で検出された長方形の竪穴建物である。後世の畑地化で床面まで削平され、周溝と柱穴のみを検出した。その規模は東西長軸長470cm、南北短軸長370cmで東西に長い。東西長軸の方位角は72度で、床面積は17.3㎡の小型竪穴である。竪穴の長軸に配置された2本柱の構造である。柱穴1が非常に深いほかは、



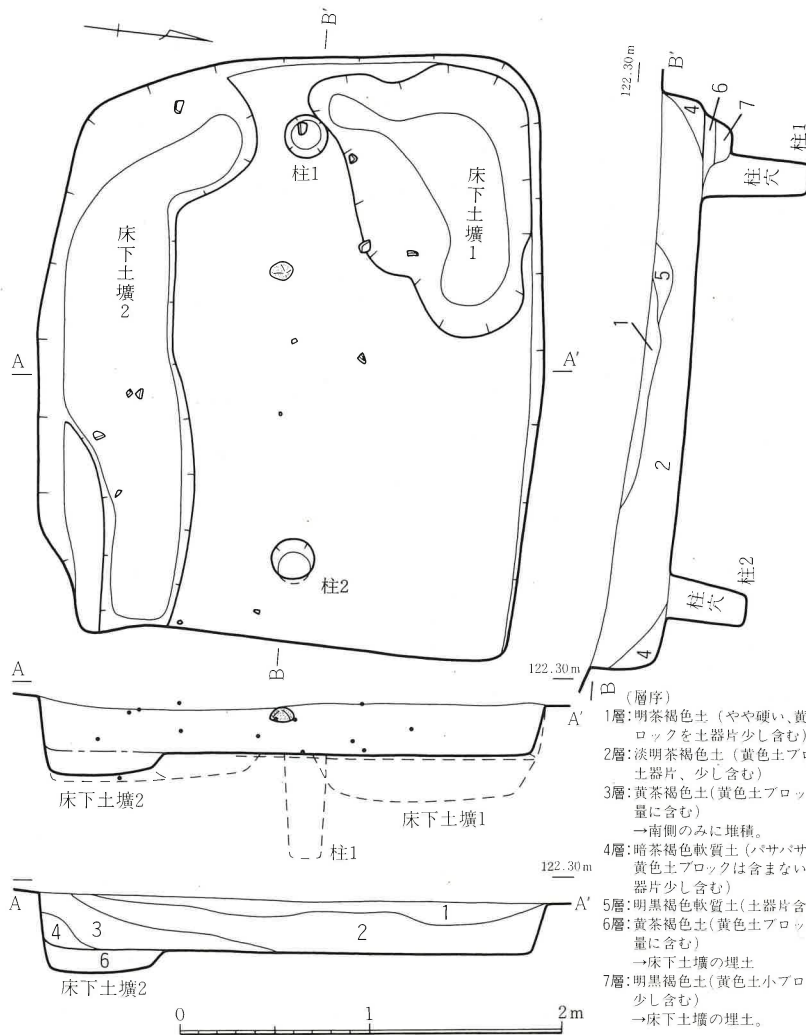
第190図 A区-1号掘立柱建物跡(1/80)



第191図 A区-2号掘立柱建物跡 (1/80)

を測る。床面積は9.40㎡で、長軸の方位角は77度である。この形式の掘立柱建物跡としては柱穴が小さく、削平された長方形堅穴住居の柱部分の可能性が高い。柱穴内から出土した土器の細片からは時期を特定できず、建物の方角が小迫辻原3～4期と異なるので、それ以前の古墳時代前期前半の小迫辻原1～2期の可能性がある。

(旧C地区掘立柱建物6)



第192図 A区-89号土壇 (1/40)

堅穴の輪郭が明瞭な時点しかないと思われるので、堅穴廃絶時の土器廃棄の一方法なのかもしれない。内部から完形の1の小型壺が逆さに出土した。土器の時期は古墳時代前期前半の小迫辻原3～4期にあたる。

2) 掘立柱建物跡 (第2表)

掘立柱建物跡を2棟検出したが、いずれも削平された方形堅穴建物の柱穴の残存である可能性が高い。1間×1間という建物構造からみて、この時期になる可能性が最も高いと推定した。

A区-1号掘立柱建物跡 (第190図)

A-7住とA-9住の中間で東西方向を向いて検出された1間×1間の柱構造の掘立柱建物跡である。その柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約350cm、南北短軸長約260cm

A区-2号掘立柱建物跡 (第191図 →図版26)

A-8住の北側で方向を異にして検出された1間×1間の掘立柱建物跡である。その柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約360cm、南北短軸長約235cmを測る。床面積は8.25㎡で、長軸の方位角は99度の東西棟である。A-1住と同様にこの形式の掘立柱建物跡としては柱穴が小さく、削平された長方形堅穴住居の柱部分の可能性が高い。遺物はなく建物の方角が小迫辻原3～4期と異なるので、それ以前の古墳時代前期前半の小迫辻原1～2期の可能性がある。(旧C地区掘立柱建物4)

3) 土壇 (第3・5表)

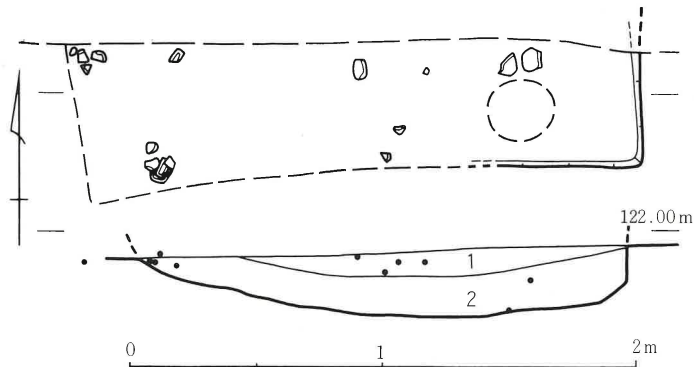
A区-89号土壇 (第192図 →図版26)

C区東端のP19調査区で検出された長方形の大型土壇で、底面は平坦である。その規模は長

さ318cm、幅270cm、検出面からの深さは34cmである。長軸の方位角は85度である。長軸上に二本柱を備えているので小規模な竪穴建物とみてよいが、炉がなく居住用の竪穴住居とは考えにくい。柱穴の深さは揃い、床面はそれほど硬化せず、また床下土壌上でも貼り床ははっきりしていないので、長く使用されたとは考えがたい。床下土壌が2箇所あり、いずれも土壌掘削の際に掘りこんだ不整形の土壌である。内部は黄色土ブロックを多量に含む6・7層を充填して埋めている。次の4層から1層までが、使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は、埋土が南側から堆積していった点にある。まず土壌の周縁に自然流入土の4層が堆積し、その上に南から黄色土ブロックを多量に含む3層が堆積する。それは土壌使用停止直後の土砂の投棄である。遺物はなく別な施設からの排出土を、捨てたものであろう。さらに土器小片と黄色土ブロックをわずかに含む2・1層が順次堆積して埋没する。混入した土器はいずれも細片で、図示できるものはない。廃絶後は生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。土壌の時期は、床下土壌を掘る点で古墳時代前期前半の土壌といえ、長軸の方向から判断して小迫辻原4期の可能性がもっとも高い。(旧C地区土壌71)

A区-90号土壌 (第193図 →図版26)

R1調査区で検出され、大半が調査区外となった長方形の土壌で、底面は皿状である。その規模は長さ200cm、幅64cm以上、検出面からの深さは28cmである。長軸の方位角は166度である。その用途は不明である。埋土は二層に分かれ、小礫と炭片を多く含む2層とそれが少ない1層である。どちらも軟らかく土器細片を少量含む。廃絶後生活廃棄物の捨て場所に転用されたものとみられる。図示できる土器はないが、内面ヘラケズリの破片が多いので、この時期の遺構と認定した。



1層:軟質褐色土(均質でよごれている、土器小片含む)
2層:暗褐色軟質土(地山礫・土器小片・炭片多く含む) } 土壌埋土

第193図 A区-90号土壌 (1/30)

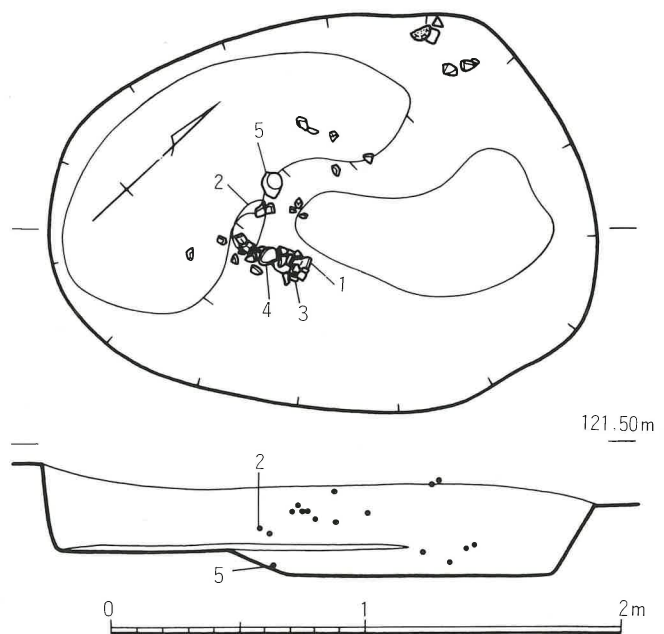
(旧C地区土壌41)

A区-91号土壌 (第194・

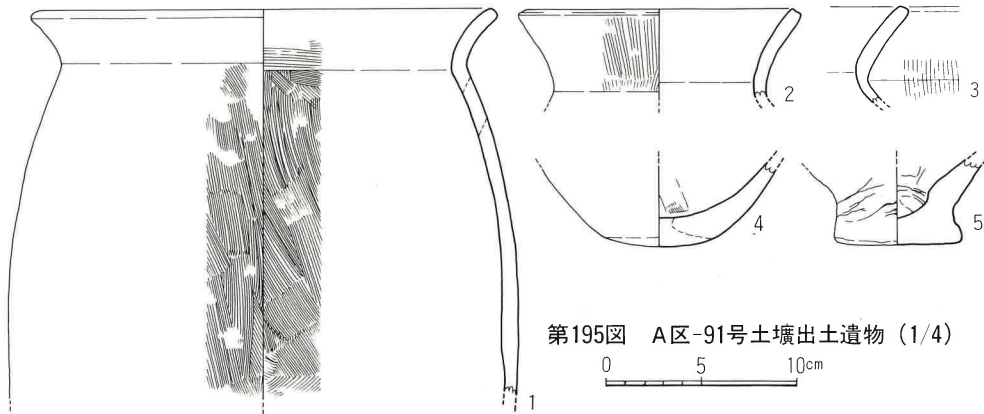
195図 →図版26・41)

T0調査区のA-8住の床

面下で検出された長円形の大型土壌で、底面は段が付き高低差がある。規模は長軸長215cm、短軸長155cmで、検出面からの深さは29cmである。底面の凸凹からみて、当初から廃棄土壌として掘られた可能性が高い。埋土は暗横褐色の単一層(1層)で、炭・焼土は含まないが、土器片と1~2cm大の黄色土ブロックを多量に含む、土器片が一括廃棄の状態ですべて検出された。土壌が深く層単位が厚いにもかかわらず分層できない点と、黄色土ブロックを多量に含む点からみて、この土壌は人為的に埋められたと推定される。一括廃棄の土器はすべて甕の破片で、胎土はすべて在地産である。1~4は在地系の甕Aで、4はレンズ底。5は伝統的V様式系の甕Bの底部である。1の長胴甕は被熱している。この土壌の廃絶時期は、小



第194図 A区-91号土壌 (1/30)

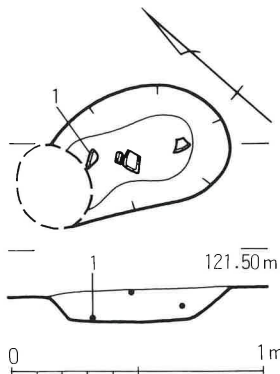


第195図 A区-91号土壌出土遺物 (1/4)

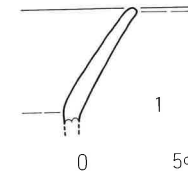
迫辻原3期のA-8住よりも古く、出土した在地系の甕がまだ丸底ではなく、また5のような甕を伴う点から古墳時代前期前半の小迫辻原1ないし2期と推定される。(旧C地区

土壌164)

A区-92号土壌 (第196・197図)



第196図 A区-92号土壌 (1/30)

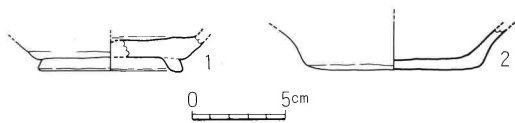


第197図 A区-92号土壌出土遺物 (1/4)

U19区のA-10住の柱穴を切って掘りこまれた小型長円形の土壌で、底面は皿状である。規模は長軸長76cm、短軸長47cmで、検出面からの深さは12cmである。性格は不明。埋土は軟らかい暗褐色の単一層(1層)で、炭・焼土は含まないが、1~2cm大の黄色土ブロックを多量に含む。土器小片が数点混入し、1は在産の壺の口縁部片である。小迫辻原3期のA-10住の柱穴を切る点から、この土壌の時期は古墳時代前期前半の小迫辻原3ないし4期と推定される。(旧C地区土

第6節 奈良時代 (第199図)

この時期にあたる遺構はきわめて少なく、ピット2本を報告する。



第198図 A区奈良時代ピット出土遺物 (1/4)

1) ピット (第198・199図、第5表)

Q18調査区ピット6からは、1の高台の付く土師器の坏底部片が出土した。またT17調査区ピット3からは、2の土師器坏の底部片が出土している。

第7節 中世 (第199図)

この時期にあたる遺構はかなり多く、掘立柱建物跡8棟を検出した。遺構の配置は、A区の南半中央に掘立柱建物群が密集する。なかでも東側に廂をもつA-6建物を主屋、その背後に直交して建てられたA-8建物を副屋とし、周囲に存在するA-4・7・9・10建物をあわせた六棟は、ほぼ方向を同じくしており、A-6建物の東側を広場=庭としたひとつの屋敷ととらえられるであろう。またA-3建物とA-5建物が直交して建っているところを見ると、この二棟も小規模な屋敷をなしていたとみてよいだろう。そしてA-5建物はA-6建物の庭先にあたり、同時にたっていたと考えるのは不自然であり、またA-3建物もA-4建物と重複している。したがって方向と時期の異なる二つの中世の屋敷が重複していると考えられる。A-3建物とA-4建物の柱穴の

第199図 小迫辻原遺跡A区 遺構配置図⑤
 奈良時代・中世 (1/300)



切り合い関係から、前者の屋敷群が古く後者が新しいと考えられる。この掘立柱建物からなる屋敷群の時期は、柱穴出土の遺物からみて、13世紀後半を中心とする時期と推定され、B区の掘立柱建物群とほぼ同時期と思われる。なお台地上は地下水水位が低く、井戸は掘られていない。

ところで建物群の南限はA区外になるが、南となりのR-2区が日田市によって調査されており、この建物群に連続すると考えられる掘立柱建物跡が検出されている。それは1号建物で南北に廂の付く東西棟である(註1)。注目される。

註1、土居和幸「小迫辻原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』Ⅷ、1993、日田市教育委員会

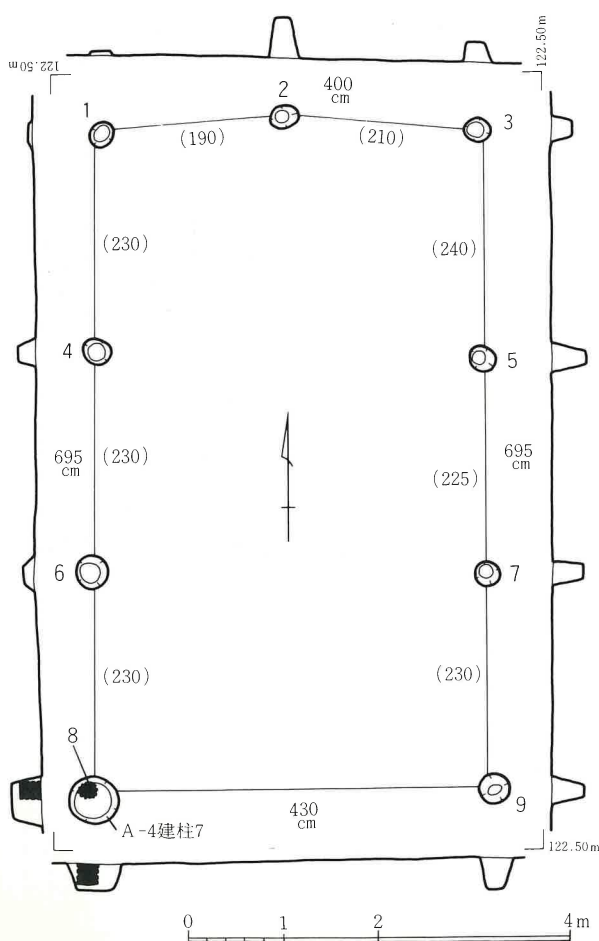
1) 掘立柱建物跡 (第2・5表)

A区-3号掘立柱建物跡 (第200図 →図版27)

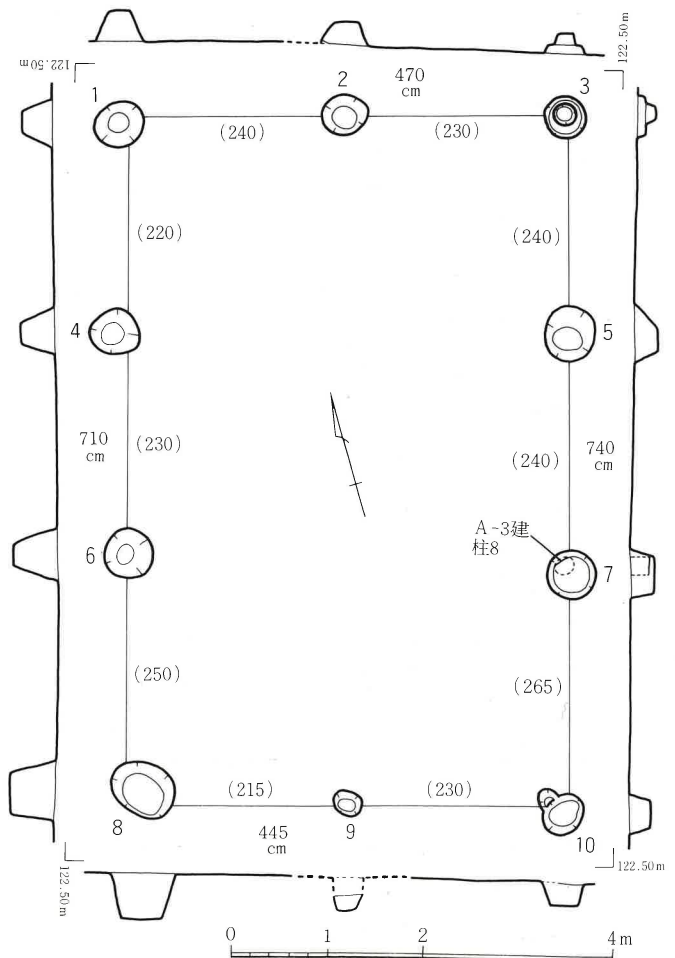
掘立柱建物群の西端で検出した3間×2間の掘立柱建物跡で、A-4建物と重複する。南の梁を支える柱の穴は未検出である。柱穴の大きさと深さは揃っている。柱穴8がA-4建物の柱穴7のなかに掘りこまれていたため、A-4建物→A-3建物の順になる。その柱間寸法は、心中心距離で南北長軸長約695cm、東西短軸長約430cmを測る。床面積は29.0㎡で、長軸の方位角は178度の南北棟である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と認定した。(旧C地区掘立柱建物9)

A区-4号掘立柱建物跡 (第201図 →図版27)

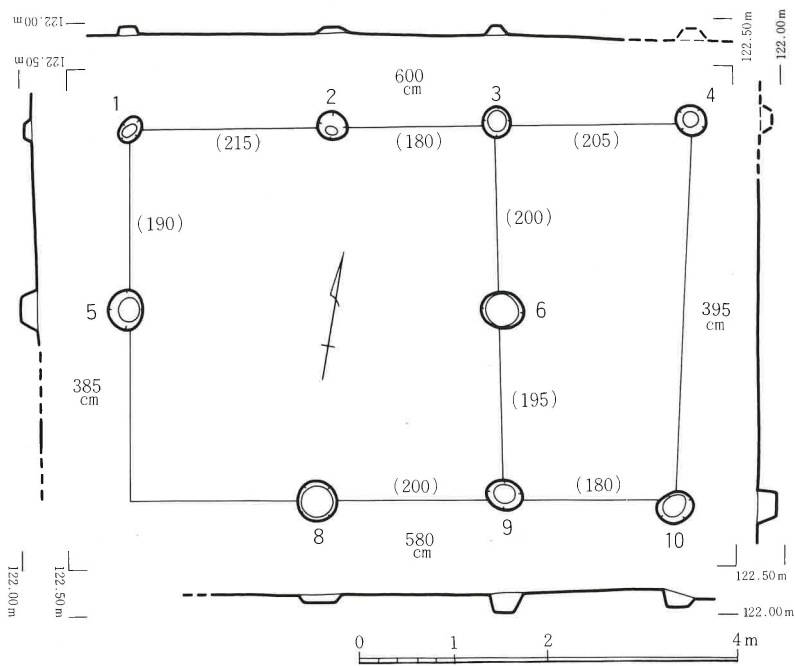
A-4建物と重複する3間×2間の掘立柱建物跡で、南北棟である。柱穴の大きさと深さは揃っている。柱穴7のなかにA-3建物の柱穴8が掘りこまれていた。その柱間寸法は、心中心距離で南北長軸長約740cm、東西短



第200図 A区-3号掘立柱建物跡 (1/80)



第201図 A区-4号掘立柱建物跡 (1/80)

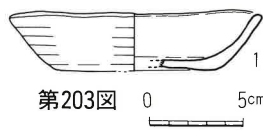


第202図 A区-5号掘立柱建物跡 (1/80)

軸長約470cmを測る。床面積は33.3㎡で、長軸の方位角は15度である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と認定した。(旧C地区掘立柱建物10)

A区-5号掘立柱建物跡 (第202・203図 →図版27)

A-6建物の正面に位置する3間×2間の掘立柱建物跡で、東西棟である。南西隅の柱穴はA-64土壙(弥生時代前期末)と重複していた



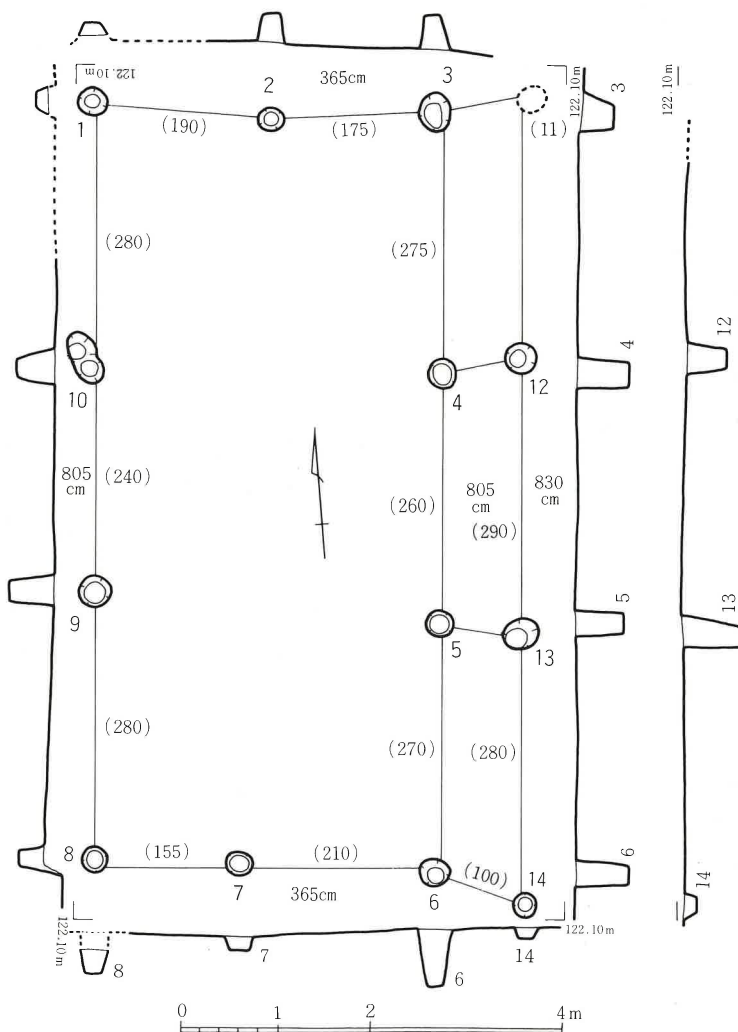
第203図 0 5cm

A区-5号掘立柱建物跡出土遺物 (1/4)

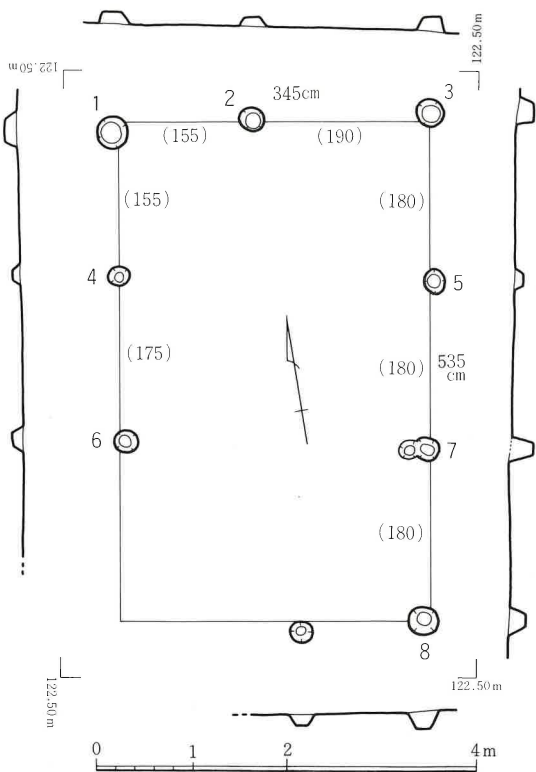
ため、間違えて掘り飛ばしてしまった。東の梁を支える柱の穴は未検出だが、内部に東柱と考えられる柱穴6がある。柱穴の大きさと深さは揃っている。その柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約580cm、南北短軸長約395cmを測る。床面積は23.2㎡で、長軸の方位角は82度である。コーナーの柱穴4の内部から1の土師質土器の坏片が出土した。掘立柱建物のコーナーの柱穴に意図的におこなう土器片埋納の可能性はある。建物の時期はこの土器から中世前期と推定される。(旧C地区掘立柱建物5)

A区-6号掘立柱建物跡 (第204図 →図版27)

建物群の中央に位置し、東側に廂の付く3間×2間の掘立柱建物跡で、南北棟である。柱穴の大きさは揃うが、深さはまちまちである。その柱間寸法は、心心距離で南北長軸長約805cm、東西短軸長約365cmを測り、廂を含めると460cmである。床面積は29.3㎡で、廂部分を含めると37.2㎡になる。長軸の方位角は4度である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と認定した。(旧C地区掘立



第204図 A区-6号掘立柱建物跡 (1/80)



第205図 A区-7号掘立柱建物跡 (1/80)

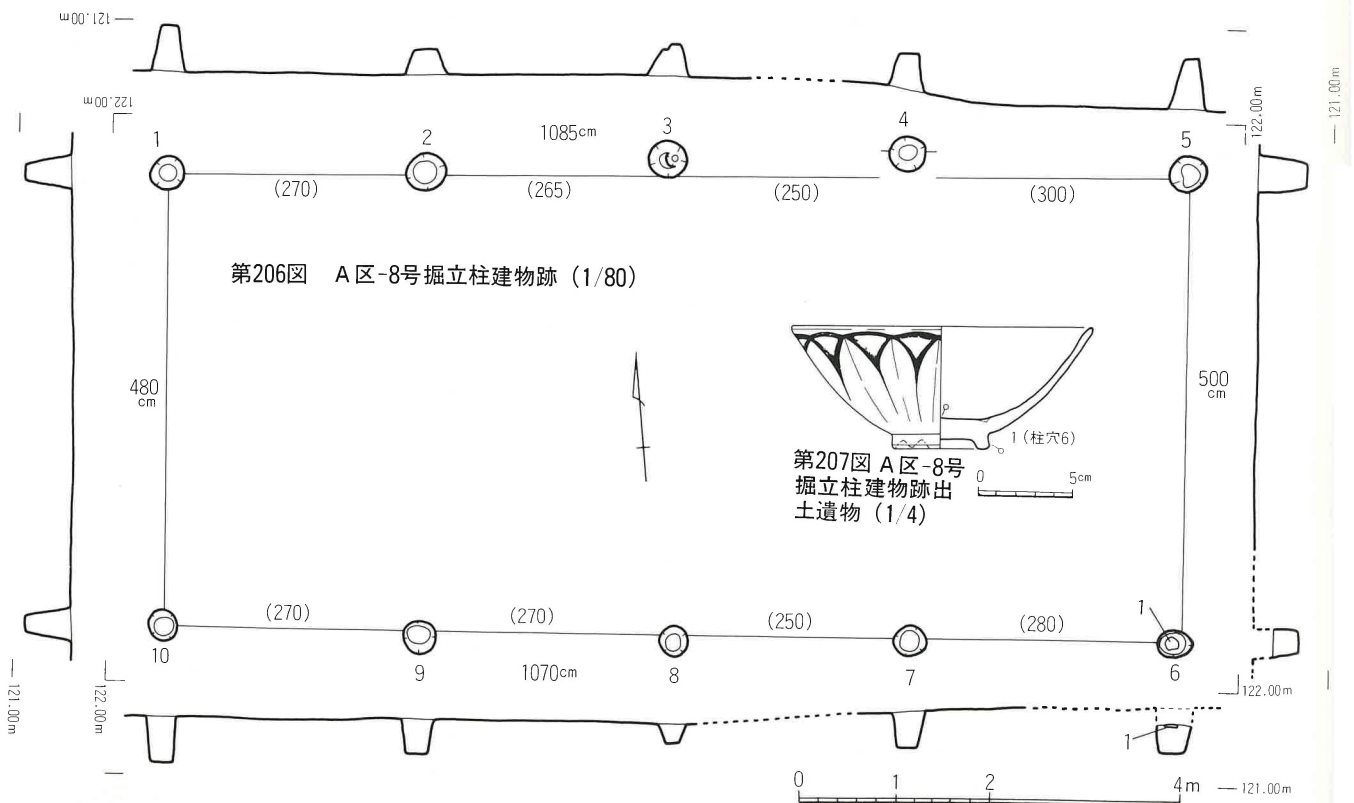
柱建物7)

A区-7号掘立柱建物跡 (第205図)

A-6建物の南に方向を同じくして建てられた3間×2間の掘立柱建物跡で、南西隅の柱穴は未検出である。柱穴の大きさと深さはほぼ揃っている。その柱間寸法は、心心距離で南北長軸長約535cm、東西短軸長約340cmを測る。床面積は17.0㎡の小型の建物である。長軸の方位角は10度の南北棟である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と認定した。(旧C地区掘立柱建物11)

A区-8号掘立柱建物跡 (第206・207図 →図版28・42)

A-6建物の背後西側の中央に直交して建てられた長大な掘立柱建物で、4間×1間の東西棟である。東西の梁を支える柱の穴はいずれも未検出である。柱穴の大きさと深さは揃っているが、隅の4本がやや深い。その柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約1085cm、南北短軸長約500cmを測る。床面積は53.1㎡に達しA区最大の建物である。長軸の方位角は95度の東西棟で、A-6建物と正確に直交する。南東隅の柱穴6の内部中央から1の中国製青磁碗の大型破片が、柱穴をふさぐように出土しており、その状態から判断して柱抜き取り後に意図的に納められたものと推定される。破片を埋納する建物廃絶時の祭祀の一例と考えられる。



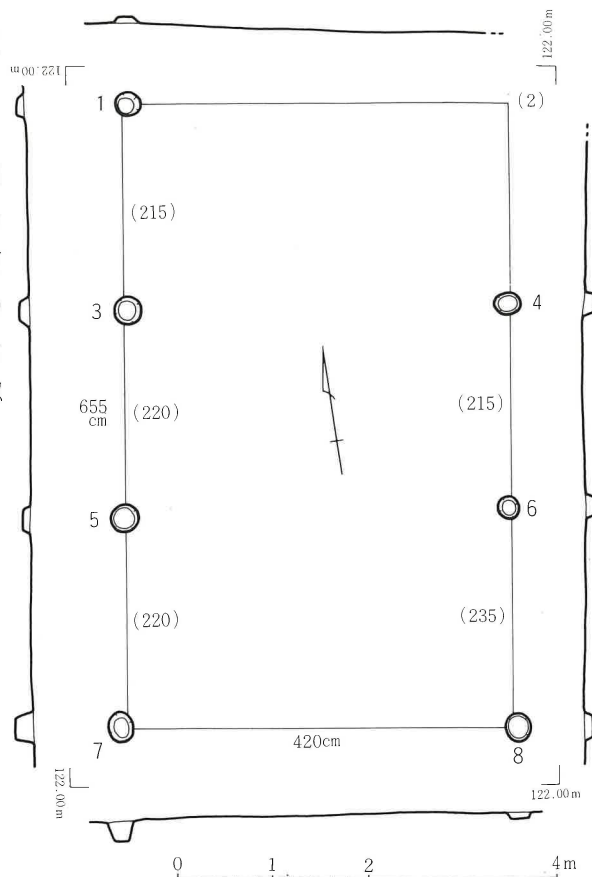
第206図 A区-8号掘立柱建物跡 (1/80)

第207図 A区-8号掘立柱建物跡出土遺物 (1/4)

建物の時期はこの青磁碗から中世前期と推定される。(旧C地区掘立柱建物8)

A区-9号掘立柱建物跡(第208図 →図版28)

A-8建物の南西隅に取りつくように接近して検出された3間×1間の掘立柱建物跡で、北東隅の柱穴は未検出である。柱穴の大きさと深さはほぼ揃っている。その柱間寸法は、心心距離で南北長軸長約655cm、東西短軸長約420cmを測る。床面積は27.1㎡の中型の建物である。長軸の方位角は19度の南北棟である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と認定した。(旧C地区掘立柱建物12)

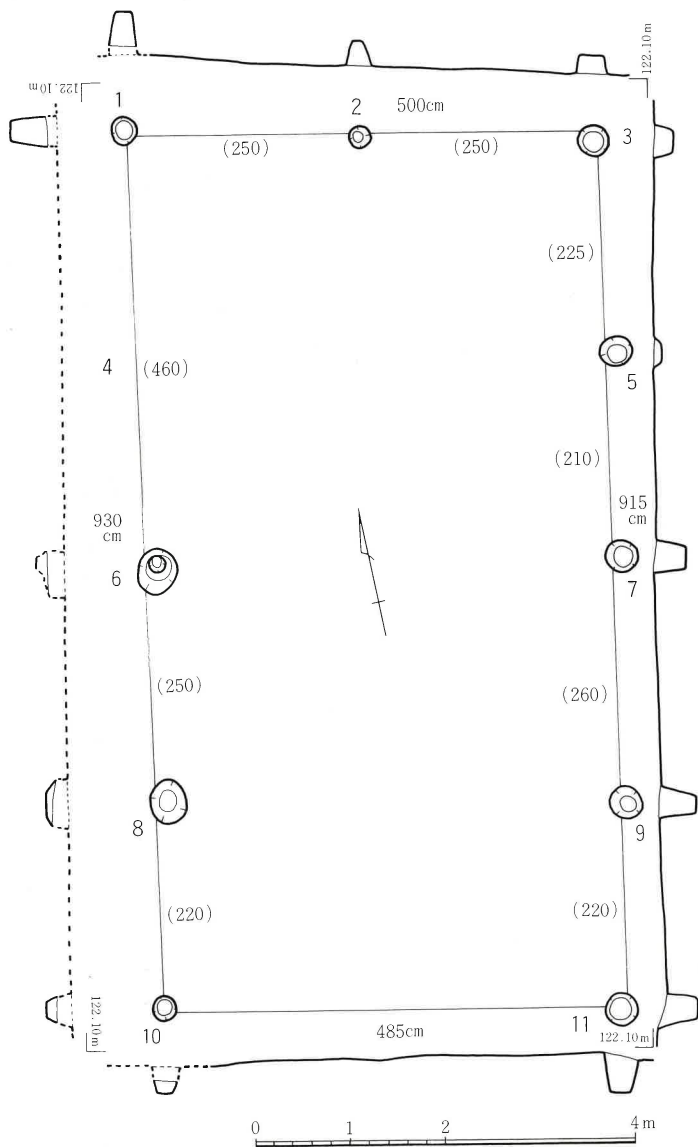


第208図 A区-9号掘立柱建物跡(1/80)

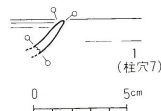
A区-10号掘立柱建物跡(第209・210図

→図版28)

ほかの建物群に取り囲まれたような位置で検出された4間×2間の掘立柱建物跡で、南の梁を支える柱の穴は未検出である。柱穴の大きさと深さはほぼ揃っている。その柱間寸法は、心心距離で南北長軸長約930cm、東西短軸長約485cmを測る。床面積は45.5㎡の大型の建物である。長軸の方位角は9度の南北棟である。柱穴7の埋土中から1の口髷の中国製白磁皿片が1点出土している。建物の時期はこの白磁から中世前期と推定される。陶磁器の破片はコーナーの柱で検出される例が多いので、あるいはこの建物は柱穴6・7を隅柱として、南の調査区外に伸びる建物である可能性もある。(旧C地区掘立柱建物13)

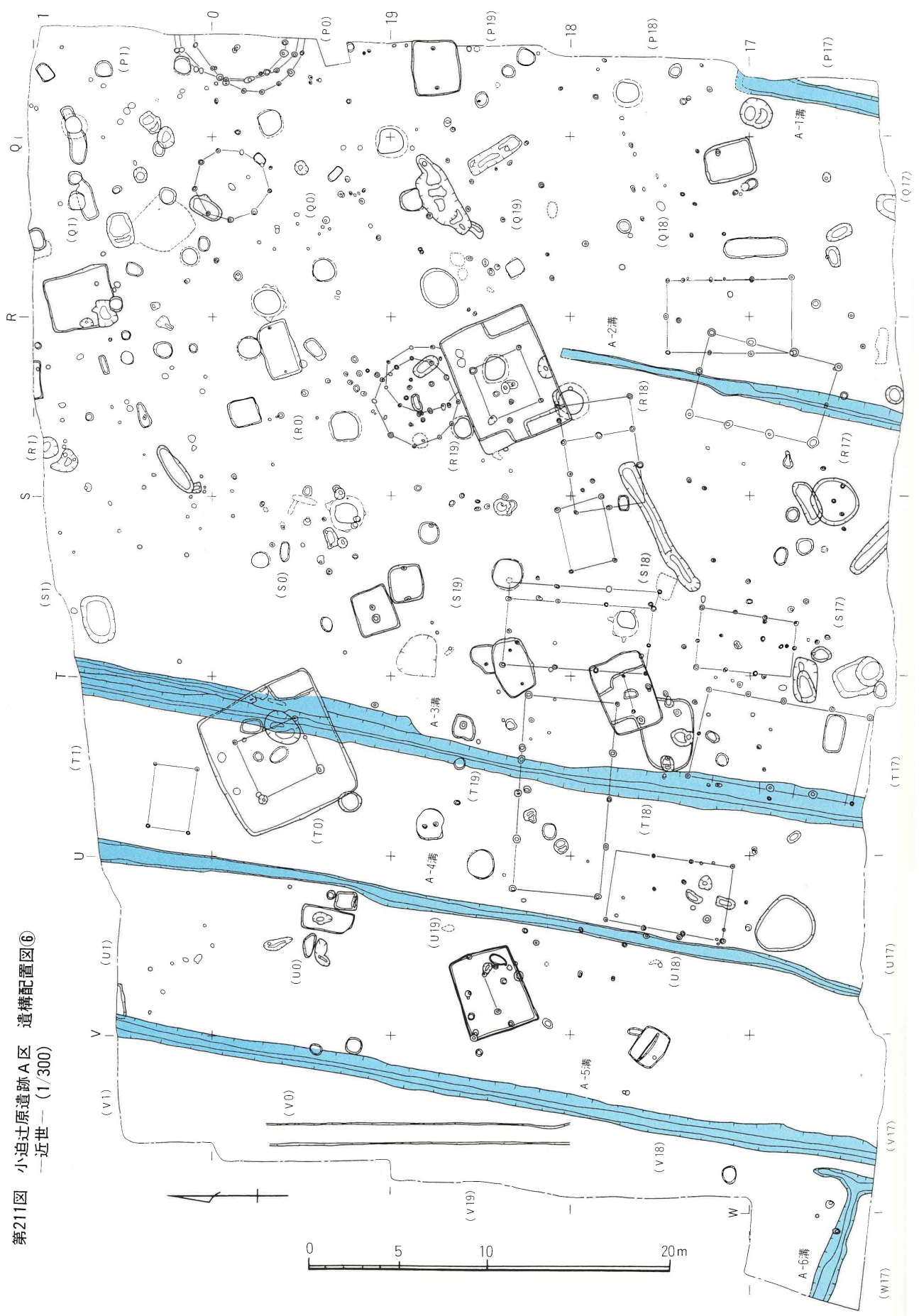


第209図 A区-10号掘立柱建物跡(1/80)



第210図 A区-10号掘立柱建物跡出土遺物(1/4)

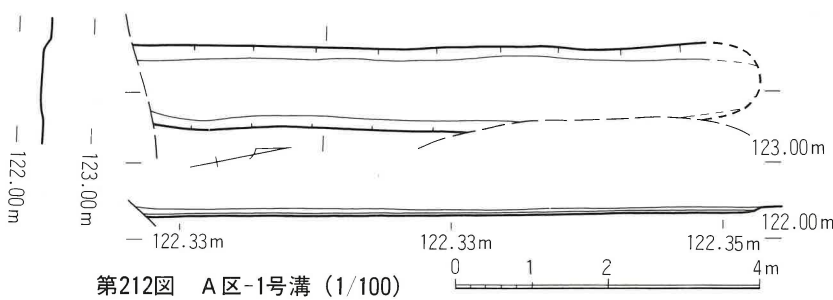
第211图 小迫辻原遺跡A区 遺構配置図⑥
—近世— (1/300)



第8節 近世 (第211図)

この時期にあたる遺構としては溝6条を確認した。この時代の遺構はまだ存在している可能性があるが、土器を含まないためにほかの時期の遺構と区別できなかった。

遺構の配置は、第211図のように東に10度ほどふって、南北に掘られた溝が平行に走っている。溝の間隔が西と東で異なるのは、この近世の畑地境界溝が掘られた当時の地形を反映していると考えられる。すなわち西側では傾斜が急で東側ではゆるい一枚の畑地のなかの高低差を少なくするために、傾斜の急な西側の畑地の幅を狭めた結果であろう。またA-5溝とA-6溝の間にある狭い通路状の空間は、文字通り畑の間の道であった可能性がある。以上のようにA区は近世には、ほとんど畑地として利用されていたといえる。



第212図 A区-1号溝 (1/100)

1) 溝 (第4・5表)

A区-1号溝 (第212図)

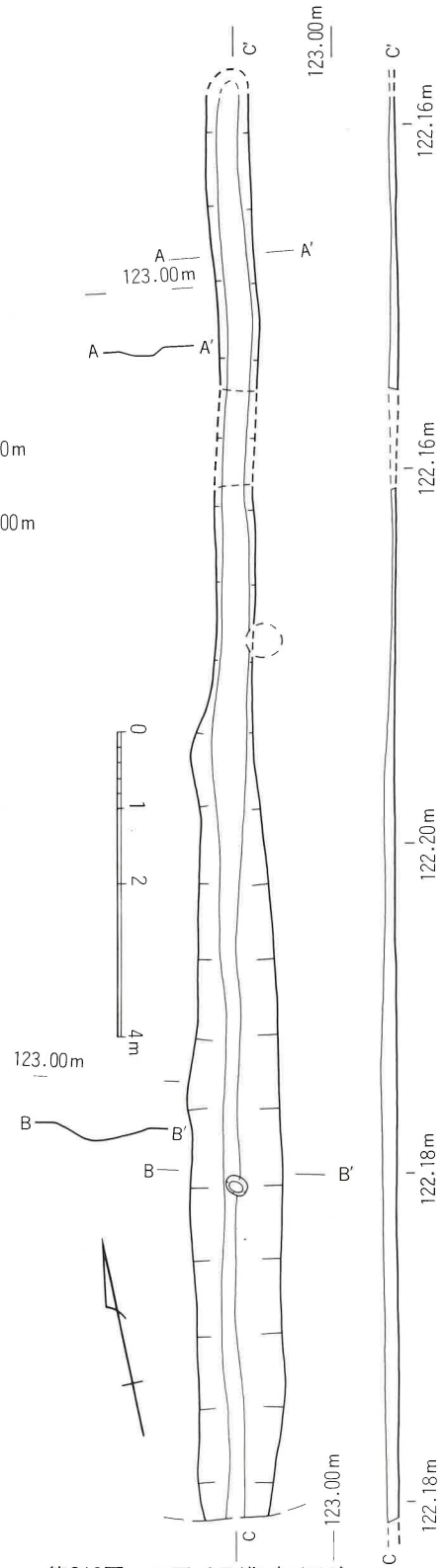
南側の一部のみ残存していたが、本来まだ北に伸びていた畑地境界溝と推定される。底面の高さはほぼ水平である。出土遺物はないが、埋土の新しさとほかの近世溝との方向の一致から、この時期の遺構と認定した。(旧C地区溝5)

A区-2号溝 (第213図)

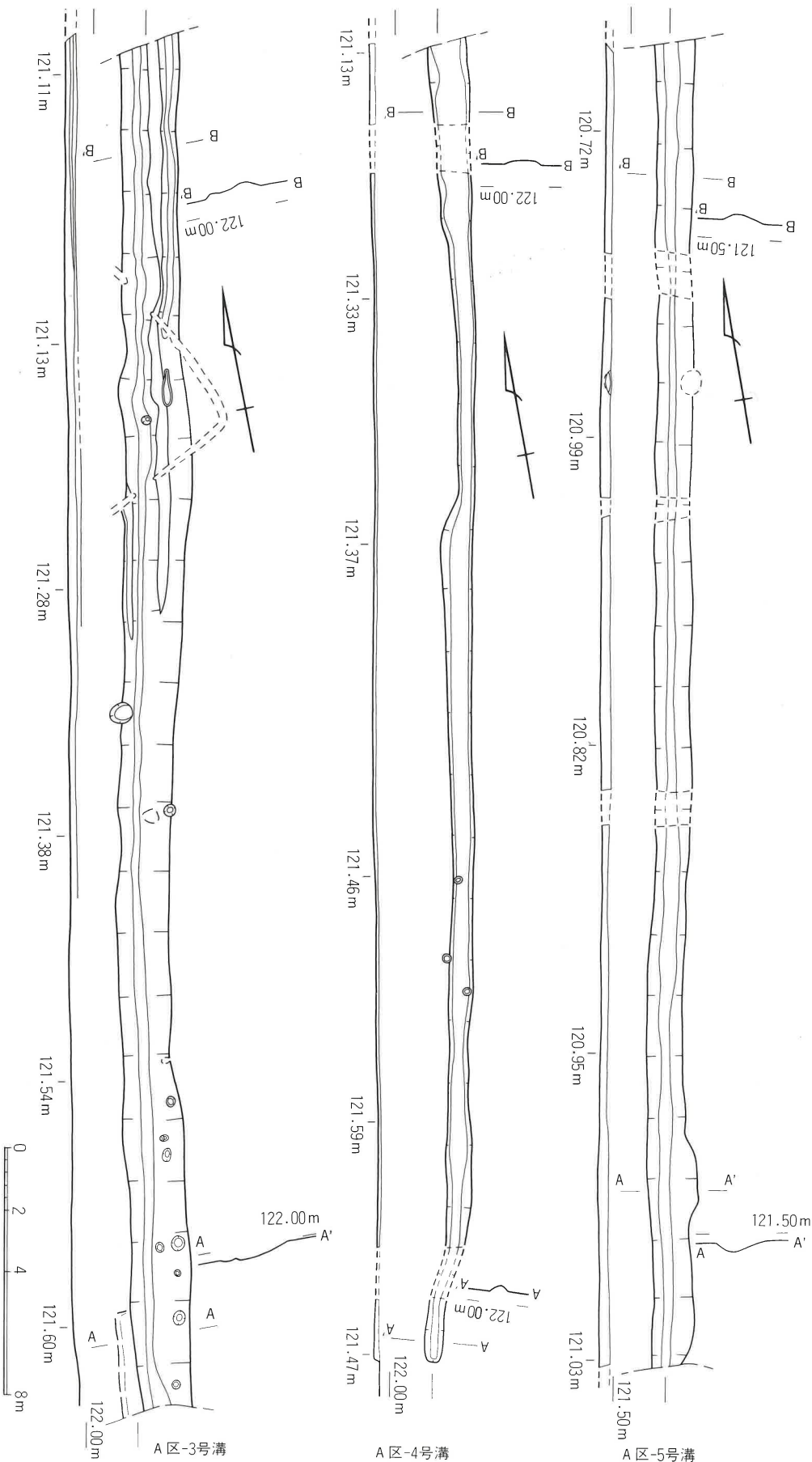
重機で表土剥ぎをおこなった時点ではさらに20mほど北に伸びていたが、非常に浅かったために遺構検出時に消えてしまった畑地境界溝である。底面の高さはほぼ水平である。出土遺物はないが、埋土の新しさとほかの近世溝との方向の一致から、この時期の遺構と認定した。(旧C地区溝6)

A区-3号溝 (第214・215図)

A区中央を南北に縦断する畑地境界溝である。途中で二条に分かれ、掘りなおしがおこなわれたと推定される。底面の高さは南にいくほどだんだん高くなる。埋土中から肥前磁器染付の破片が出土している。1は19世紀後半製作の鉢、2は18世紀後半から19世紀前半製作の碗の破片である。埋土の新しさとほかの近世溝との方向の一致、さらに染付から、少なくとも19世紀代には使用されていたと推定される。(旧C地区溝7)



第213図 A区-2号溝 (1/100)



第214図 A区-3・4・5号溝 (1/200)

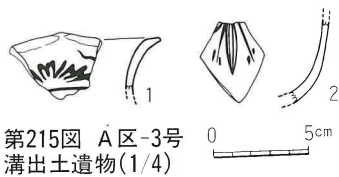
A区-4号溝
(第214図)

A-3溝に平行し、約9mの間隔をおいてはしる畑地境界溝で、溝そのものは狭いものである。底面の高さは南にいくほどだんだん高くなる。A-3溝とこのA-4溝の間は、1筆の長大な畑地であったと推定される。出土遺物はないが、埋土の新しさとほかの近世溝との方向の一致から、この時期の遺構と認定した。

(旧C地区溝8)

A区-5号溝
(第214図)

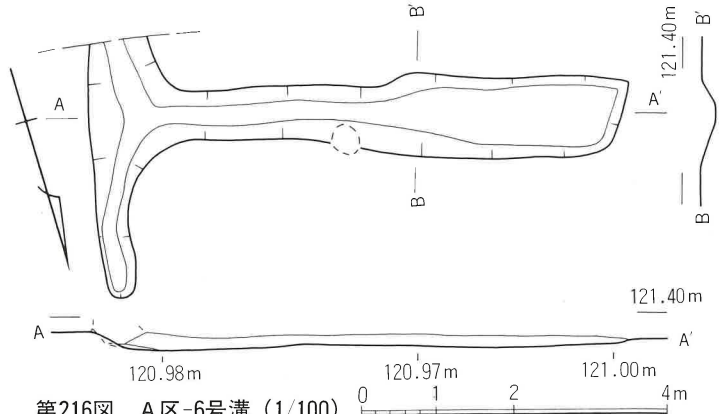
同じくA-3・4溝の西側に平行してはしる畑地境界溝で、底面はほぼ水平である。A-4溝との間に約10mの間隔があり、その間も同じく畑地の1筆であったとみられる。出土遺物はないが、埋土の新しさとほかの近世溝との方向の一致から、この時期の遺構と認定した。(旧C地区溝9)



第215図 A区-3号
溝出土遺物(1/4)

A区-6号溝 (第216図)

A-5溝に直交するT字形の畑地境界溝で、A-5溝との間の空間は通路状をなしている。底面の高さはほぼ水平である。出土遺物はないが、埋土の新しさとほかの近世溝との方向の一致から、この時期の遺構と認定した。(旧C地区溝10)



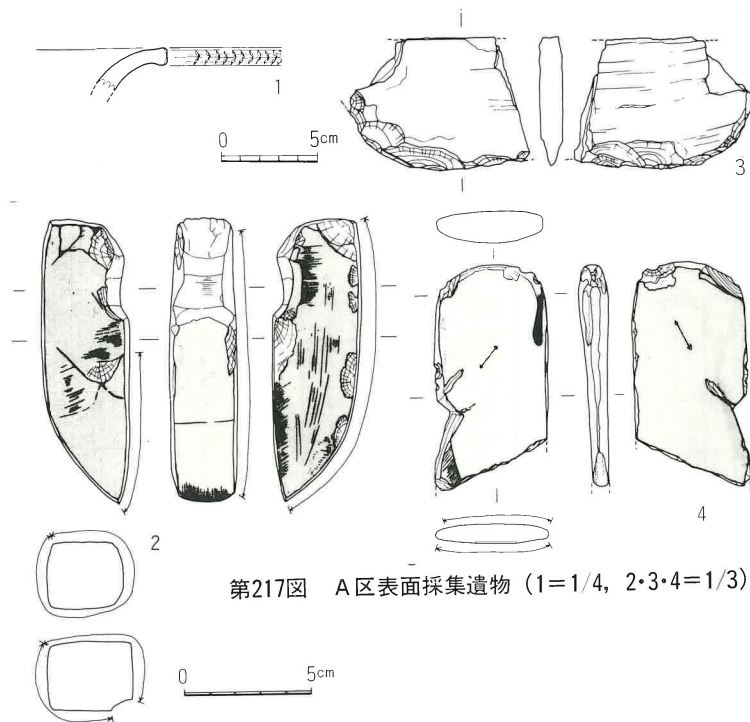
第216図 A区-6号溝 (1/100)

第9節 表面採集遺物 (第217図、第6表 →図版42)

以下の遺物は遺構内出土遺物であるが、明らかに、より古い時代からの残留遺物と考えられるものである。1は弥生時代中期後半の遺構であるA-81土壌内に残留した弥生時代前期の壺の口縁部破片で、口縁端部に羽状の刻目を施す。2は古墳時代前期のA-8住内に残留した弥生時代の磨製抉入片刃石斧で、頁岩質砂岩製である。

3は近世のA-3溝内に残留した弥生時代の石器の未製品である。結晶片岩製であるので、石包丁の未製品と推定される。

なお4はA区ではなく、C区X2調査区のピット1の埋土中から出土した結晶片岩製の携帯用砥石で、半分には折れている。最終校正中に間違いを発見したものでご寛恕願いたい。



第217図 A区表面採集遺物 (1=1/4, 2・3・4=1/3)

第 1 表 小迫辻原遺跡 A 区 竪穴住居跡一覧表

遺構名	調査区	平面形	長軸長 (cm)	短軸長 (cm)	長軸方位角	床面積 (㎡)	主体本数	地床炉の有無	内部土層	ヘッドの有無	床面	床下土層	時期	備考	旧名称
A区-1号竪穴住居	P1.P0	円形	径 630 以上		-	12.5以上	8本以上	不明	A-6土が屋内貯蔵穴?	不明	(削平)	なし	弥生時代前期後半~中期初頭	削平柱穴のみ残存.A-3住に切られる	C-住9
A区-2号竪穴住居	P1.P0	円形	径 660 以上		-	8.9以上	6本以上	不明	A-6土が屋内貯蔵穴?	不明	(削平)	なし	弥生時代前期後半~中期初頭	削平柱穴のみ残存.A-3住に切られる	C-住15
A区-3号竪穴住居	P1.P0	円形	径 640 以上		-	10.9以上	7本以上	不明	A-6土が屋内貯蔵穴?	不明	(削平)	なし	弥生時代前期後半~中期初頭	削平柱穴のみ残存.A-2住を切る	C-住8
A区-4号竪穴住居	Q0.Q1	円形	径 450 以上		-	13.9以上	9本	中央土層1ヶ所	なし	不明	(削平)	なし	弥生時代前期後半~中期初頭	削平柱穴のみ残存.A-27土に切られる.A-97土を切る	C-住10
A区-5号竪穴住居	R19	円形	径 410 以上		-	10.2以上	7本以上	不明	なし	不明	(削平)	なし	弥生時代前期後半~中期初頭	削平柱穴のみ残存.A-7住に切られる	C-住11A
A区-6号竪穴住居	R19.R0	円形	径 510 以上		-	17.6以上	11本	中央土層1ヶ所	なし	不明	(削平)	なし	弥生時代前期後半~中期初頭	削平柱穴のみ残存.A-50土を切る	C-住11B
A区-7号竪穴住居	R19	長方形	710	530	68°	35.8	4本	中央2ヶ所 (つくりなおし)	中央1ヶ所,南東壁際 中央1ヶ所	削り出し2ヶ所 盛り土1ヶ所	踏みしめ	あり2ヶ所	古墳時代前期前半	廃絶祭祀あり,A-51・52・53土を切る	C-住12
A区-8号竪穴住居	T0	長方形	760	720	65°	51.3	4本	中央1ヶ所	炉周辺2ヶ所,北東壁際 際中央1ヶ所	盛り土1ヶ所	踏みしめ	あり3ヶ所	古墳時代前期前半	周溝あり,廃絶祭祀あり A-86土を切る.A-6・8建物に切られる.	C-住13
A区-9号竪穴住居	T18.S18	長方形	450	315	71°	11.5	2本	中央1ヶ所	南壁際中央1ヶ所,西側1ヶ所	削り出し2ヶ所	踏みしめ	あり2ヶ所	古墳時代前期前半	A-86土を切る.A-6・8建物に切られる.	C-土108
A区-10号竪穴住居	U19	長方形	470	370	72°	17.3	2本	なし	なし	不明	(削平)	なし	古墳時代前期前半	周溝あり	C-住14

第 2 表 小迫辻原遺跡 A 区 掘立柱建物跡一覧表

遺構名	調査区	規模 (間敷)	長軸長 (m)	短軸長 (m)		床面積 (㎡)		方位角 (磁北より東へ長軸の方位角)	時期	備考	旧名称
				中心距離	ひさし付き	本体	ひさし付き				
A区-1号掘立柱建物	S18	1×1	3.50	2.60	-	9.40	77°	古墳時代前期前半	竪穴住居の可能性大きい,東西棟	C-建6	
A区-2号掘立柱建物	T1	1×1	3.60	2.95	-	8.25	99°	古墳時代前期前半	竪穴住居の可能性大きい,東西棟	C-建4	
A区-3号掘立柱建物	R18.Q18	3×2	6.95	4.30	-	29.00	178°	中世	南北棟	C-建9	
A区-4号掘立柱建物	R18.R17	3×2	7.40	4.70	-	33.30	15°	中世	南北棟	C-建10	
A区-5号掘立柱建物	R18	3×2	5.80	3.95	-	23.20	82°	中世	東西棟,柱穴4より土師環出土	C-建5	
A区-6号掘立柱建物	S19.S18	3×2 (ひさし付)	8.05	3.65	4.60	29.30	4°	中世	東ひさし付き,南北棟	C-建7	
A区-7号掘立柱建物	S18.S17	3×2	5.35	3.40	-	17.00	10°	中世	南北棟	C-建11	
A区-8号掘立柱建物	T19.T18	4×1	10.85	5.00	-	53.10	95°	中世前期	柱穴6より青磁碗出土,東西棟	C-建8	
A区-9号掘立柱建物	U18	3×1	6.55	4.20	-	27.10	9°	中世	南北棟	C-建12	
A区-10号掘立柱建物	T17	4×2	9.30	4.85	-	45.50	9°	中世前期	南北棟,柱穴7より白磁片出土	C-建13	

第 3 表 小迫辻原遺跡 A区 土壘一覽表

遺構名	調査区	形状	分類		時期	備考	旧名称	
			長軸長	短軸長				
		単位 (cm)		深さ				
A区-1号土壘	Q19	不定形	F 498	200	101	縄文時代	A-1土2に切られる。遺物なし	C-土18,79
A区-2号土壘	Q19	小型円形 (竪穴状)	A2 128	107	70	縄文時代後期	A-1土1を切る	C-土80
A区-3号土壘	P1	小型円形 (竪穴状)	A2 98	85	26	弥生時代前期後半～中期初頭	遺物多量を含む	C-土17
A区-4号土壘	Pl, Q1	船底形	D1 436	73	7	弥生時代前期後半～中期初頭	A-5土に切られる。東西方向	C-土19
A区-5号土壘	P1	大型円形 (袋状)	B1 150	140	93	弥生時代前期後半～中期初頭	A-4土を切る。貯蔵穴。遺物一括廃棄あり (2層下部)	C-土18
A区-6号土壘	P1	小型円形 (片袋状)	A3 105	88	64	弥生時代前期後半～中期初頭	A-2住・A-3住に伴う貯蔵穴?遺物一括廃棄あり (1層)	C-土20
A区-7号土壘	P1	不定形	F 133	86	29	弥生時代前期後半～中期初頭	—	C-土21
A区-8号土壘	Q1	不定形	F 80	68	(10)	弥生時代前期後半～中期初頭	A-9土に切られる	C-土23
A区-9号土壘	Pl, Q1	不定形	F 123	97	42	弥生時代前期後半～中期初頭	A-8土を切る	C-土22
A区-10号土壘	P0	大型円形 (袋状)	B1 154	140	52	弥生時代前期後半～中期初頭	西側から土砂と遺物が流入	C-土49
A区-11号土壘	P0, P19	大型円形 (袋状・壁穴あり)	B3 193	178	142	弥生時代前期後半～中期初頭	中・下位に2回の遺物一括廃棄あり。貯蔵穴	C-土72
A区-12号土壘	P19	小型円形 (袋状)	A1 97	93	56	弥生時代前期後半～中期初頭	貯蔵穴	C-土75
A区-13号土壘	P18	大型円形 (袋状)	B1 158	145	128	弥生時代前期後半～中期初頭	貯蔵穴。炭層の遺物一括廃棄 (7・8層)	C-土99
A区-14号土壘	P18, P17	大型長円形	C1 190	152	50	弥生時代前期後半～中期初頭	—	C-土110
A区-15号土壘	Q1	大型円形 (竪穴状)	B2 129	80以上	48	弥生時代前期後半～中期初頭	—	C-土175
A区-16号土壘	Q1	小型円形 (底丸)	A4 77	77	29	弥生時代前期後半～中期初頭	—	C-土140
A区-17号土壘	Q1	船底形	D1 247	90	31	弥生時代前期後半～中期初頭	A-18土に切られる。うめもどされた状態	C-土26
A区-18号土壘	Q1	小型円形 (袋状)	A1 109	82	34	弥生時代前期後半～中期初頭	A-17土を切る	C-土25
A区-19号土壘	Q1	長円形	C1 193	136	55	弥生時代前期後半～中期初頭	遺物一括廃棄あり (1層)	C-土29
A区-20号土壘	Q1, R1	長円形	C1 153	85	24	弥生時代前期後半～中期初頭	遺物一括廃棄あり。A-21土・A-81土に切られる	C-土44
A区-21号土壘	Q1	小型円形 (袋状)	A1 83	70	61	弥生時代前期後半～中期初頭	上・下位に遺物一括廃棄あり。A-20土を切り、A-81土に切られる	C-土43
A区-22号土壘	Q1	小型円形	A 92	77	18	弥生時代前期後半～中期初頭	—	C-土24
A区-23号土壘	Q1	不定形	F 99	75	9	弥生時代前期後半～中期初頭	—	C-土34
A区-24号土壘	Q1	小型円形 (底丸)	A4 102	90	34	弥生時代前期後半～中期初頭	—	C-土27
A区-25号土壘	Q1	大型円形 (袋状)	B1 112	100	40	弥生時代前期後半～中期初頭	—	C-土33
A区-26号土壘	Q1	小型円形 (竪穴状)	A2 87	70	14	弥生時代前期後半～中期初頭	—	C-土32
A区-27号土壘	Q1, Q0	長円形	C1 181	121	62	弥生時代前期後半～中期初頭	遺物一括廃棄あり (2層)。A-4住の柱穴を切る	C-土31
A区-28号土壘	Q0	大型円形 (袋状・壁穴あり)	B3 208	200	160	弥生時代前期後半～中期初頭	貯蔵穴。床面2回形成。側面に穴あり。上・中・下位に遺物一括廃棄あり	C-土54
A区-29号土壘	Q0	大型円形 (袋状)	B1 132	124	34	弥生時代前期後半～中期初頭	貯蔵穴。東側より土砂と遺物が流入	C-土53
A区-30号土壘	Q19	大型円形	B 236	200	25	弥生時代前期後半～中期初頭	袋状貯蔵穴の底部?	C-土85
A区-31号土壘	Q19	船底形	D1 334	98	48	弥生時代前期後半～中期初頭	遺物一括廃棄あり (2層)。長軸の方位角 149°	C-土76
A区-32号土壘	Q18	小型方形 (袋状)	A5 88	86	28	弥生時代前期後半～中期初頭	貯蔵穴	C-土84
A区-33号土壘	Q18	小型円形 (竪穴状)	A2 80	73	27	弥生時代前期後半～中期初頭	遺物一括廃棄あり (1層)	C-土100
A区-34号土壘	Q18	長方形	E1 323	197	46	弥生時代前期後半～中期初頭	長軸の方位角 165°	C-土150
A区-35号土壘	Q18, Q17	小型長円形	C1 70	56	12	弥生時代前期後半～中期初頭	土器細片混入	C-土161
A区-36号土壘	Q17	船底形	D1 363	112	12	弥生時代前期後半～中期初頭	長軸の方位角 178°	C-土111
A区-37号土壘	Q17	長円形	C1 193	62	31	弥生時代前期後半～中期初頭	—	C-土113
A区-38号土壘	Q17	長円形	C1 154	78	31	弥生時代前期後半～中期初頭	1層で土器混入	C-土112
A区-39号土壘	Q17	長円形?	C1? 192	(92)	36	弥生時代前期後半～中期初頭	南半は調査区外	C-土151
A区-40号土壘	R1	船底形 (小型)	D1 119	35	17	弥生時代前期後半～中期初頭	方位角 62°	C-土40
A区-41号土壘	R1	小型円形	A 60	57	8	弥生時代前期後半～中期初頭	遺物一括廃棄あり	C-土37
A区-42号土壘	R1	小型円形	A 79	74	20	弥生時代前期後半～中期初頭	—	C-土39
A区-43号土壘	R1	大型円形	B 112	103	18	弥生時代前期後半～中期初頭	遺物一括廃棄あり (1層)	C-土38
A区-44号土壘	R1	船底形	D1 153	50	17	弥生時代前期後半～中期初頭	A-46土と一連となる可能性あり。長軸の方位角 67°	C-土43
A区-45号土壘	R1	不定形	F 63	51	10	弥生時代前期後半～中期初頭	A-46土に切られる	C-土47
A区-46号土壘	R1	船底形	D1 312	73	25	弥生時代前期後半～中期初頭	A-45土を切る。遺物一括廃棄あり。長軸の方位角 63°	C-土46

A区-47号土壙	R0	長方形	E2	352	179	53	弥生時代前期後半～中期初頭	A-48土に切られる。2本柱?長軸の方位角 70°	C-土56
A区-48号土壙	R0	大型円形(袋状)	B1	142	137	69	弥生時代前期後半～中期初頭	貯蔵穴・A-47土を切る	C-土55
A区-49号土壙	R0	大型円形(袋状)	B1	180	170	42	弥生時代前期後半～中期初頭	遺物一括廃棄(2層)あり。意図的な土器埋置あり。貯蔵穴	C-土59
A区-50号土壙	R19	長円形	C1	146	80	36	弥生時代前期後半～中期初頭	A-6住に切られる。	C-土86
A区-51号土壙	R19	大型円形(袋状)	B1	135	135	92	弥生時代前期後半～中期初頭	下に遺物一括廃棄あり。貯蔵穴	C-土88
A区-52号土壙	R19	大型円形(袋状)	B1	157	156	61	弥生時代前期後半～中期初頭	遺物一括廃棄あり(4層)。貯蔵穴	C-土174
A区-53号土壙	R18, R19	大型円形(袋状)	B1	203	202	150	弥生時代前期後半～中期初頭	中・下に遺物一括廃棄2回あり。中に円礫堆積	C-土102
A区-54号土壙	R17	不定形	F	100	58	21	弥生時代前期後半～中期初頭	土器細片(弥生前期土器底部2片)混入	C-土114
A区-55号土壙	S0	大型円形(袋状・壁穴あり)	B3	216	210	186	弥生時代前期後半～中期初頭	貯蔵穴。中位・下に2回の遺物一括廃棄あり	C-土62
A区-56号土壙	S0	長円形	C1	83	63	9	弥生時代前期後半～中期初頭	—	C-土67
A区-57号土壙	S0	長方形	E1	253	214	34	弥生時代前期後半～中期初頭	A-58土に切られる。長軸の方位角 70°	C-土88
A区-58号土壙	S0	小型円形(底丸)	A4	60	—	14	弥生時代前期後半～中期初頭	A-57土を切る。底に焼土面あり	C-土146
A区-59号土壙	S19	長方形。2本柱	E2	221	196	18	弥生時代前期後半～中期初頭	遺物一括投棄あり(1層)。貯蔵穴	C-土69
A区-60号土壙	S19	大型円形(袋状)	B1	183	166	33	弥生時代前期後半～中期初頭	遺物一括投棄あり(1層)。貯蔵穴	C-土33
A区-61号土壙	S19	不定形	F	183	104	10	弥生時代前期後半～中期初頭	A-62土に切られる。土器片少し含む	C-土35
A区-62号土壙	S19, T19	長方形。2本柱	E2	329	205	11	弥生時代前期後半～中期初頭	食物貯蔵用堅穴建物。火災による焼失。A-61土を切る	C-土98
A区-63号土壙	S18	小型円形(底丸)	A4	89	76	13	弥生時代前期後半～中期初頭	土器小片含む	C-土103
A区-64号土壙	R18, S18	船底形	D1	810	91	40	弥生時代前期後半～中期初頭	長軸の方位角 63°。2+3層と7層で2回の大量の遺物一括廃棄あり	C-土104
A区-65号土壙	S17	小型円形(壁穴状)	A2	96	76	29	弥生時代前期後半～中期初頭	—	C-土153
A区-66号土壙	S17	小型円形(壁穴状)	A2	88	75	31	弥生時代前期後半～中期初頭	—	C-土116
A区-67号土壙	S17	大型円形(底凹凸)	A4	98	82	45	弥生時代前期後半～中期初頭	—	C-土154
A区-68号土壙	R17, S17	大型円形(中央ピット・壁穴状)	B2	276	268	74	弥生時代前期後半～中期初頭	埋め戻し。中央ピットあり。A-69土に切られる。貯蔵穴	C-土115
A区-69号土壙	R17, S17	船底形	D1	255	110	24	弥生時代前期後半～中期初頭	炭化材集中。A-68土を切る	C-土165
A区-70号土壙	S17	船底形	D1	(310)	90	45	弥生時代前期後半～中期初頭	長軸の方位角 133°	C-土162
A区-71号土壙	T0	大型円形	B	135	110	20	弥生時代前期後半～中期初頭	A-8住に切られる。貯蔵穴のなごり?遺物一括廃棄あり(1層)	C-土118
A区-72号土壙	T19	小型円形	A	88	81	19	弥生時代前期後半～中期初頭	—	C-土127
A区-73号土壙	T18	不定形	F	97	70	20	弥生時代前期後半～中期初頭	遺物等なし。A-86土に切られる	C-土169
A区-74号土壙	S17, T17	不定形	F	250	128	35	弥生時代前期後半～中期初頭	A-75土に切られる	C-土160
A区-75号土壙	T17, S17	長円形	C1	187	85	59	弥生時代前期後半～中期初頭	下位遺物一括廃棄あり。A-74土を切る	C-土167
A区-76号土壙	T17	長円形	C1	213	102	16	弥生時代前期後半～中期初頭	—	C-土159
A区-77号土壙	T17, S17	長円形	C1	(285)	175	31	弥生時代前期後半～中期初頭	A-78土に切られる	C-土158
A区-78号土壙	T17, S17	大型円形(袋状)	B1	185	170	84	弥生時代前期後半～中期初頭	上位・下に2回の遺物一括廃棄あり。A-77土を切る。貯蔵穴	C-土166
A区-79号土壙	U0	小型円形(壁穴状)	A2	52	48	16	弥生時代前期後半～中期初頭	土器小片混入	C-土119
A区-80号土壙	V18, U18	長方形	E3	218	160	23	弥生時代前期後半～中期初頭	中央に船底状の凹み。長軸の方位角 126°	C-土139
A区-81号土壙	Q1, R1	長方形	E1	356	342	10	弥生時代中期後半	内部に土壁あり。A-20土・A-21土を切る。長軸の方位角は165°	C-土141
A区-82号土壙	S1	長円形	C1	269	167	14	弥生時代中期後半	遺物一括廃棄あり	C-土47
A区-83号土壙	S0	長円形	C1	114	62	14	弥生時代中期後半	S0調査区ピット3に切られる	C-土63
A区-84号土壙	S18	大型円形(袋状・壁穴あり)	B3	133	133	103	弥生時代中期後半	遺物一括廃棄(3層)。東から流入	C-土107
A区-85号土壙	T19	大型円形(壁穴状)	B2	172	150	57	弥生時代中期後半	貯蔵穴。下に遺物一括廃棄あり(20層)	C-土124
A区-86号土壙	T18	長円形。1本柱?	C2	420	300	8	弥生時代中期後半	A-73土を切り、A-9住に切られる。内部に土壁2と斜めの柱穴1あり。長軸の方位角 90°	C-土109
A区-87号土壙	U0	長方形	E1	148	105	20	弥生時代中期後半	土器小片散布。長軸の方位角 9°	C-土120
A区-88号土壙	U0	不定形	F	304	131	6	弥生時代中期後半	土器小片散布。	C-土121
A区-89号土壙	P19	長方形。2本柱	E2	318	270	34	古墳時代前期前半	床下土壁2ヶ所あり。長軸の方位角83°	C-土71
A区-90号土壙	R1	長方形	E1	200	64以上	28	古墳時代前期前半	方位角 166°	C-土41
A区-91号土壙	T0	長円形	C1	215	155	29	古墳時代前期前半	A-8住に切られる。	C-土164
A区-92号土壙	U19	小型長円形	C1	(76)	47	12	古墳時代前期前半	A-10住の柱穴を切る	C-土128
A区-93号土壙	U19	小型円形(壁穴状)	A2	64	64	29	不明	A-10住を切る	C-土130
A区-94号土壙	P1	長方形	E	110	73	10	不明	(遺物なし)	C-土16
A区-95号土壙	P19	不定形	F	86	63	10	不明	炭・焼土混入するが遺物なし	C-土73

A区-96号土壙	P19	小型円形	A	71	65	9	不明	自然土壙?遺物等なし	C-土74
A区-97号土壙	Q0	小型長方形	E1	77	50	4	不明	遺物なし	C-土145
A区-98号土壙	Q0	不定形	F	78	62	33	不明	遺物なし	C-土50
A区-99号土壙	Q0	長方形	E1	96	46	11	不明	遺物なし	C-土51
A区-100号土壙	Q19	不定形	F	114	62	-	縄文時代?	A-1土と連続する.自然土壙?	C-土81
A区-101号土壙	Q19	長円形	C1	(110)	(50)	-	不明	遺物等なし.自然土壙?	C-土88
A区-102号土壙	R1	大型円形(底丸)	A4	123	78以上	24	不明	自然土壙?遺物等なし	C-土44
A区-103号土壙	R1	不定形	F	162	92	29	不明	遺物なし	C-土45
A区-104号土壙	R1	不定形	F	-	-	-	不明	自然土壙	C-土36
A区-105号土壙	R0	長方形	E1	169	145	7	不明	遺物なし	C-土58
A区-106号土壙	R0	長円形	C1	124	70	38	弥生時代の可能性あり	土器小片あり	C-土57
A区-107号土壙	R19	不定形	F	97	85	14	不明	自然土壙?遺物等なし	C-土87
A区-108号土壙	R19	不定形	F	80	36	24	不明	自然土壙?	C-土89
A区-109号土壙	R17	小型円形(底丸)	A4	108	104	28	不明	遺物なし	C-土152
A区-110号土壙	S0	不定形	F	115	80	6	不明	遺物なし	C-土65
A区-111号土壙	S19	大型円形	B	132	119	11	不明	遺物等なし	C-土90
A区-112号土壙	S19	不定形	F	271	246	57	不明	遺物なし.風倒木痕	C-土70
A区-113号土壙	S19	不定形	F	125	74	35	不明	自然土壙?遺物等なし	C-土91
A区-114号土壙	S18	不定形	F	157	103	3	不明	自然の凹み	C-土106
A区-115号土壙	S17	小型円形	A2	117	95	16	弥生時代~古墳時代	中央に.炭と土器細片が集中	C-土157
A区-116号土壙	T0	不定形	F	127	72	-	弥生時代?	A-8住に切られる.遺物なし	C-土163
A区-117号土壙	T0	小型円形(底丸)	A4	52	40	-	不明	A-8住に切られる	C-土173
A区-118号土壙	T19	小型円形	A4	75	65	20	不明	遺物等なし.A-溝3に切られる	C-土94
A区-119号土壙	T19	不定形	F	158	136	66	不明	土器小片含む	C-土97
A区-120号土壙	U19	大型円形(袋状)	B1	166	148	31	弥生時代前期後半~中初期頭	貯蔵穴	C-土125
A区-121号土壙	T19	長円形	C1	94	75	16	弥生時代前期後半~中初期頭	-	C-土126
A区-122号土壙	T18	不定形	F	91	55	6	不明	炭.土器片少し混入	C-土155
A区-123号土壙	T18	小型円形(底丸)	A4	75	64	16	不明	炭.糞土を多く含む	C-土156
A区-124号土壙	T17	不定形	F	80	48	12	不明	遺物等なし	C-土134
A区-125号土壙	T17	不定形	F	78	70	15	不明	遺物等なし	C-土168
A区-126号土壙	U0	不定形	F	146	65	5	不明	自然の凹み?遺物なし	C-土122
A区-127号土壙	U0	不定形	F	162	65	42	不明	自然の凹み?遺物なし	C-土123
A区-128号土壙	U19	不定形	F	120	60	11	不明	土器細片含む	C-土129
A区-129号土壙	U18	不定形	F	100	60	(-)	不明	遺物なし	C-土131
A区-130号土壙	U18	不定形	F	90	75	18	(中世以前)	土器小片含む	C-土132
A区-131号土壙	U18	不定形	F	100	50	(-)	不明	遺物なし->自然土壙?	C-土133
A区-132号土壙	U17	不定形	F	340	305	21	不明	土器小片混入.焼土あり	C-土137
A区-133号土壙	V0	大型円形	A2	165	41	10	中世~近世	A-5溝より古いか	C-土172
A区-134号土壙	V0	小型円形	A	101	92	21	不明	粘土と土器細片含む	C-土171
A区-135号土壙	V18	小型長円形	C1	105	75	23	不明	自然土壙?遺物等なし	C-土170
A区-136号土壙	Q1	不定形	F	-	-	-	不明	風倒木痕	C-土301
A区-137号土壙	S0	小型円形(袋状)	A1	95	85	24	弥生時代前期後半~中初期頭	貯蔵穴	C-土66

第 4 表 小迫辻原遺跡 A区 溝一覽表

遺構名	調査区	断面形態	長さ (単位 m)			方向と方位角	時期	備考	旧名称
			最大幅	最小幅	幅				
A区-1号溝	P17	U字形	(8.0)	1.2	1.0	南北12°	近世	畑地境界溝	C-溝5
A区-2号溝	R18.R17	U字形	(19.0)	1.3	0.6	南北12°	近世	畑地境界溝.A-4建を切る	C-溝6
A区-3号溝	S1.T1.T0.T19.T18.T17	U字形. 二条	(45.2)	2.2	1.0	南北10° →8°	近世	畑地境界溝.A-8住・A-61土・A-10を切る.掘りなおしあり	C-溝7
A区-4号溝	T1.U0.U19.U18.U17	U字形	(43.6)	1.2	0.5	南北10°	近世	畑地境界溝	C-溝8
A区-5号溝	U1.V1.V0.V19.V18.V17	U字形	(43.4)	1.6	1.0	南北10°	近世	畑地境界溝.A-133土を切る	C-溝9
A区-6号溝	V17.W17	U字形	(7.3+3.4)		(1.2)	東西108° .南北18°	近世	畑地境界溝.C-5溝に直交	C-溝10
A区-7号溝	V0.V19	U字形	(17.0)	1.2	0.4	南北0°	現代(1960年代以後)	—	C-溝11

第 5 表 小迫辻原遺跡 A区 出土土器観察表

小迫辻原 A区-2号 竪穴住居:弥生時代前期後半~中期初頭

C-PO-住15

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは複元径・単位:cm)		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	柱穴6埋土中	弥生土器	甕A	—	27.1	25.9	—	楕円形	タテハケ(6本/1cm)	—	暗褐色~茶褐色	二次加熱 スス付着	弥生土器

C-R19-住12

小迫辻原 A区-7号 竪穴住居:古墳時代前期前半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは複元径・単位:cm)		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	2層一拵	土師器	甕A (厚口縁)	—	(13.0)	—	積上げ	ヨコナデ	指圧痕・ヨコナデ	—	赤褐色	—	内面・胴部下に深く広い条線あり
2	埋土中	土師器	甕A	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ	ヨコハケ	—	茶褐色	二次加熱 スス付着	口縁部片
3	2層一拵	土師器	甕A	29.0以上	—	(24.6)	タテハケ成形	平行タテキ→タテハケ(4本/1cm)・ヨコナデ	指圧痕→タテハケ(4本/1cm)	黒斑	赤褐色	二次加熱	底部丸底
4	床下土層内	土師器	台付鉢A	—	20.1	17.4	積上げ	タテ・ヨコハケ(2~3本/1cm)	タテハケ(4~6本/1cm)・ヨコハケ	黒斑	明褐色	—	底部
5	2層一拵	土師器	甕A	6.5	12.4	—	積上げ	ナデ	ナデ	—	淡茶褐色~黒褐色	—	底部丸底

C-TO-住13

小迫辻原 A区-8号 竪穴住居:古墳時代前期前半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは複元径・単位:cm)		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	床面直上	土師器	甕A (複合口縁)	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナデ	粗いヨコハケ	—	茶褐色	—	一条刻目突起
2	床面直上	土師器	甕D (二重口縁)	18.3	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ	ヨコナデ	—	淡褐色	—	口縁部片
3	柱穴3内	土師器	甕D (二重口縁)	—	(10.0)	砂粒多い 在地	積上げ	ナデ?	ナデ	—	褐色	二次加熱 一部赤変	柱抜き取り後、柱穴内に入っている
4	床面直上	土師器	小型高坏B	8.8	14.2	10.0	積上げ	ナテハケ	タテハケ(7本/1cm)	—	茶褐色	—	底部丸底
5	土層3・1層中	土師器	器台D	—	—	10.0	積上げ	刺摩がはげしい	ナデ	—	茶褐色	—	胴部穿孔4穴、正位におかれる
6	床面直上	土師器	甕A	3.35	10.3	—	積上げ	指圧痕→ナデ	ナデ	—	淡茶褐色	—	底部丸底

C-T18-土108

小迫辻原 A区-9号 竪穴住居:古墳時代前期前半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは複元径・単位:cm)		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	2層下部一拵	土師器	甕A	—	20.8	24.8	積上げ	平行タテキ→タテハケ(6本/1cm)	丁字なナデ	黒斑	茶色	二次加熱	底部なし2/3完形
2	2層下部一拵	土師器	甕A	—	(16.8)	—	積上げ	ナナメハケ(5本/1cm)・刺摩	ヨコハケ・ナナメハケ(4本/1cm)	—	淡褐色~黒灰色	二次加熱 スス付着	胎土に石英が多い

C-S18-R18-建物5

小迫辻原 A区-5号 竪穴住居:中世

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは複元径・単位:cm)		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	柱穴4	土師製土器	杯	3.0	(13.4)	(8.0)	ロウ口成形 回転糸切	回転ナデ	—	良好	明褐色	—	—

C-T17-18-建物8

小迫辻原 A区-8号 竪穴住居:中世

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは複元径・単位:cm)		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	柱穴6	中国製青磁 (黄泉窯)	碗	6.4	16.0	5.0	ロウ口成形	軸がけたみつき無軸	—	良好	淡灰青緑色	—	(文)横連弁文

小迫辻原 A区-10号 竪立柱建物 中世

C-T17-18-建物13

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	柱穴?	中国製 白磁	皿?	—	—	灰白色	ロクロ成形	釉がけ	口ばげ無釉	—	淡青灰色	—	

小迫辻原 A区-2号 土壘: 縄文時代後期

C-Q19-土80

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	2層	縄文土器	深鉢	—	(32.0)	砂粒多い 在地	積上げ	ナデ	ナデ	黒斑	黄褐色 (外)黒灰色 (内)淡褐色	—	口縁部 三万田式
2	1層	縄文土器	浅鉢	—	—	—	—	ヨコ方向の跡磨	ナデ	—	—	—	口縁部 三万田式

小迫辻原 A区-3号 土壘: 弥生時代前期後半~中期初頭

C-P1-土17

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1層	弥生式土器	壺	—	—	(8.2) 砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ	ナデ	—	にふい赤褐色	二次加熱 スス付着	底部 a,b手法

小迫辻原 A区-4号 土壘: 弥生時代前期後半~中期初頭

C-P1Q1-土19

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1層	弥生式土器	壺	—	—	10.6 砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(7本/1cm)・ヘラミガキ・ヘラナデ	丁草なナデ	—	茶褐色	—	底部 a,b手法

小迫辻原 A区-5号 土壘: 弥生時代前期後半~中期初頭

C-P1-土18

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	2層下部	弥生式土器	壺 A	—	(39.6)	砂粒多い 在地	積上げ	ナメハケ(5本/1cm)	丁草なナデ	黒斑	淡茶褐色~ 明茶褐色	—	口縁部 一条沈線
2	2層下部	弥生式土器	壺 A	—	(28.8)	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	丁草なナデ	—	淡褐色~ 黒灰色	二次加熱 スス付着	口縁部~胴部 交わらない一条沈線
3	2層下部	弥生式土器	壺 A (大型)	—	(52.8)	砂粒多い 在地	積上げ	ナメハケ・ナデ・ヨコハケ(6本/1cm)	丁草なナデかミガキ	(内)黒斑	淡褐色~ 黒灰色	—	口縁部
4	2層下部	弥生式土器	壺 B	—	(31.4)	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(9本/1cm)・指圧痕	ヨコハケミガキ	—	淡茶褐色~ 黒灰色	二次加熱 スス付着	口縁部~胴部 一条三角変帯に刻目
5	2層下部	弥生式土器	壺	—	—	9.6 砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ・ナデかヘラミガキ	丁草なナデ	黒斑	淡茶褐色~ 明茶褐色	—	底部 b手法
6	2層下部	弥生式土器	壺	—	—	8.4 砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(12本/1cm)	ナデ	—	明茶褐色 (内)黒褐色	二次加熱 (内)スス付着	底部 c手法
7	2層下部	弥生式土器	壺	—	—	8.8 砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	丁草なナデ	—	淡褐色~ 灰色	—	底部 b手法

小迫辻原 A区-6号 土壘: 弥生時代前期後半~中期初頭

C-P1-土20

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1層一拵	弥生式土器	壺	—	—	7.6 砂粒多い 在地	横積み	タテハケ・ヘラミガキ(横上げ痕)	ヘラミガキ(横上げ痕)	黒斑	淡褐色~ 黒灰色	—	底部 b手法・モミミ痕がある
2	1層一拵	弥生式土器	壺 B	—	—	(20.4) 砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(8本/1cm)	丁草なコナデ	—	淡褐色~ 黒灰色	二次加熱 スス付着	口縁部 貼付一条三角変帯刻目
3	1層一拵	弥生式土器	壺	—	—	(7.0) 砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(8本/1cm)	丁草なナデ	—	明茶褐色~ 黒灰色	二次加熱 (内)スス付着	底部 b手法
4	1層一拵	弥生式土器	壺	—	—	(6.6) 砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ・コナデ	タテハケナデ	—	淡茶褐色・淡 赤色・灰色	二次加熱 赤変	底部 a,b手法

小迫辻原 A区-7号 土層: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○つきは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	11ないし2層	弥生式土器	高杯 A	—	(32.0)	—	楕上げ	ヨコナデ	指圧痕ナデ	—	茶褐色	—	底部口縁

小迫辻原 A区-8号 土層: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○つきは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	11層	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 在地	—	タテハケ(6本/1cm)	—	—	暗褐色	—	底部

小迫辻原 A区-9号 土層: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○つきは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	11層	弥生式土器	鉢 A	—	—	砂粒多い 在地	楕上げ	丁草ナデ	—	—	淡茶褐色	—	口縁部

小迫辻原 A区-10号 土層: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○つきは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	2～4層	弥生式土器	壺 B	—	(24.8)	砂粒多い 在地	楕上げ	タテハケ(6本/1cm)	ヨコハケ 丁草ナデ	—	黄褐色	二次加熱 赤変	口縁部 刻目 No.1,2,3は同一個体
2	2～4層	弥生式土器	壺 B	—	(14.8)	砂粒多い 在地	楕上げ	ヨコナデ・タテハケ(6本/1cm)	丁草ナデ	—	黄褐色	二次加熱 赤変	類部 貼付三角突帯 No.1,2,3は同一個体
3	2～4層	弥生式土器	壺 B	—	—	砂粒多い 在地	楕上げ	ヨコハラミガキ	丁草ナデ	—	黄褐色	二次加熱 赤変	胴部 貼付三角突帯 No.1,2,3は同一個体
4	2層	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 在地	楕上げ	指圧痕	ヨコハラミガキ	—	黄褐色	二次加熱 赤変	口縁部 刻目
5	2層	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 在地	楕上げ	ナナメハケ→ヨコナデ	ヨコハラミガキ	—	橙色	二次加熱 赤変	口縁部 刻目
6	4層	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 在地	楕上げ	ナナメハケ→ヨコナデ	ヨコハラミガキ	—	橙色	—	口縁部 上下に刻目
7	4層	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 在地	楕上げ	タテハケ(8本/1cm)・(底)ナデ	ミガキ ^m ヘラナデ	—	黄褐色	二次加熱 赤変 スス付着	底部

小迫辻原 A区-11号 土層: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○つきは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	16層 下層(下位一拵)	弥生式土器	壺 A	—	(16.0)	砂粒多い 在地	楕上げ	タテハケ	タテ指ナデ	—	淡褐色	—	口縁部
2	17層(下位一拵)	弥生式土器	壺 A	—	(13.2)	砂粒多い 在地	楕上げ	タテハケ→ヨコハラミガキ	ナデ	—	淡灰褐色	—	類部 削りだし段あり
3	13層(中位一拵)	弥生式土器	壺 A	—	(15.6)	砂粒多い 在地	楕上げ	ヨコハラミガキ	—	—	明褐色	—	口縁部 刻目・類部 一条沈線
4	17層(下位一拵)	弥生式土器	壺 A	—	—	砂粒多い 在地	楕上げ	指圧痕跡・ナナメハケ(6本/1cm)	ヨコハラミガキ	黒斑	明茶褐色	—	口縁部 刻目・金蓋母差入
5	17層(下位一拵)	弥生式土器	壺 A	—	—	砂粒多い 在地	楕上げ	ナナメハケ(6本/1cm)後ヨコハラミガキ	ヨコハラミガキ	黒斑	明褐色	—	口縁部 刻目・一条沈線 2ヶ所(口縁・類部 各1条)
6	6層+11層(中位一拵)	弥生式土器	壺 B	—	(19.8)	砂粒多い 在地?	楕上げ	タテハケ(4本/1cm)	ヨコハケ	—	茶褐色～ 暗褐色	—	口縁部 刻目・内面三角突帯
7	16層 下層(下位一拵)	弥生式土器	壺 B	—	(20.2)	砂粒多い 在地	楕上げ	ヨコハラミガキ・ヨコナデ	丁草ナデ	—	明茶褐色～ 淡灰褐色	—	類部・赤彩あり(文)羽林文・貼付一条三角突帯
8	1層	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 在地	楕上げ	ナデ	丁草ナデ	黒斑	明褐色	—	類部(文)羽林文
9	13層(中位一拵)	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 在地	楕上げ	タテハケ(6本/1cm)→タテハラミガキ・(底)細いナデ	丁草ナデ	黒斑	(外)濃茶褐色 (内)明褐色	—	底部 胎土に石炭、金蓋母差入
10	13層(中位一拵)	弥生式土器	壺?	—	—	砂粒多い 在地	楕上げ	不明(割離)	ナデ	—	淡明褐色	—	底部・外・内に赤彩?

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸きは単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			外	内				
11	16層(下位一拵)	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 8.2/在地	積上げ	タテハケ(5本/1cm)→タテハラミガキ(底粗い)	丁寧なナデ	—	茶褐色	—	底部
12	16層(下位一拵)	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 8.9/在地	積上げ	タテハケ→ハラミガキ(割離)・(底)ナデ	丁寧なナデ	—	淡明褐色～ 茶褐色	—	底部
13	11層(中位一拵)	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 12.1/在地	積上げ	タテハケ→ハラミガキ(底)ハラミガキ	ミガキ風丁寧なナデ	(内)黒斑	明茶褐色～ 黒茶褐色	—	底部・赤彩?
14	11層(中位一拵)	弥生式土器	壺 A	—	(21.8)	—	積上げ	タテハケ(10本/1cm)	丁寧なナデ	—	黒茶褐色	二次加熱 赤彩	口縁～胴部 塩を焼いたような痕付かた
15	16層(下位一拵)	弥生式土器	壺 A	—	—	砂粒多い —	積上げ	ナナメ・ヨコ・タテハケ(7本/1cm)	丁寧なナデ	黒斑	明茶褐色	—	口縁部 刻目・二条沈線
16	17層(下位一拵)	弥生式土器	壺 A	—	—	砂粒多い —	積上げ	ナナメ・タテハケ(6本/1cm)	ナナメハケ→ヨコハラミガキ	—	明褐色	—	口縁部 刻目・二条沈線
17	16層(下位一拵)	弥生式土器	壺 A	—	28.6	砂粒多い —	積上げ	指圧痕→タテハケ	丁寧なナデ	黒斑	茶褐色～ 暗茶色	二次加熱 スス付着	口縁・胴部 1/3突起・二条沈線・金雲母混入
18	埋土中	弥生式土器	壺 A	—	—	砂粒多い —	積上げ	ナナメ・タテハケ(7本/1cm)	ヨコハケ・ヨコハラミガキ	黒斑	明褐色	—	口縁部 金雲母混入・二条沈線
19	埋土中	弥生式土器	壺 A	—	—	砂粒多い —	積上げ	ナナメハケ	ヨコハケ・丁寧なナデ	黒斑	淡褐色	—	口縁部 刻目・二条沈線・赤彩?
20	16層(下位一拵)	弥生式土器	鉢 A	—	(40.0)	砂粒多い —	積上げ	指圧痕→ヨコ・ナナメ・タテハケ(6・7本/1cm)	ミガキ風丁寧なナデ・ヨコハケ	—	茶褐色	二次加熱 スス付着	口縁部 刻目・二条沈線・金雲母混入
21	16層(下位一拵)	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 9.1/在地	積上げ	タテハケ(7本/1cm)・(底)粗いナデ(隆線)	タテミガキ風丁寧なナデ・ヨコハケ	—	(外)淡明褐色 (内)黒茶褐色	二次加熱 スス付着	底部 a,b 手法
22	17層(下位一拵)	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い (6.5)/在地	積上げ	タテハケ(割離)	ナデ	—	淡褐色	二次加熱 赤彩	底部
23	埋土中	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い (9.6)/在地	積上げ	タテハケ(4～5本/1cm)	タテ方向の丁寧なナデ	—	明褐色～ 茶褐色	二次加熱 赤彩	底部
24	16層(下位一拵)	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い (8.6)/在地	積上げ	タテハケ(割離)・(底)未調整	タテ方向の丁寧なナデ	—	(外)淡明褐色 (内)淡茶褐色	二次加熱 赤彩	底部
25	埋土中	弥生式土器	蓋	—	—	砂粒多い —	—	ナデ	ナデ	—	淡褐色	—	赤彩(丹塗り)あり・穿孔二穴あり
26	埋土中	弥生式土器	台付鉢? 高杯?	—	5.0 胴部	砂粒多い —	?	ナデ	ナデ	—	明茶褐色	—	—

小迫辻原 A区-13号 土壺:弥生時代前期後半～中期初葉

C-P18-土99

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸きは単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			外	内				
11層	20(0)	弥生式土器	壺日	—	—	砂粒多い —	積上げ	タテハケ・ヨコナデ	不明(割離)	(外)黒斑	明茶褐色	—	胴部 貼付一条三角突起・文羽状文
20層(下位一拵)	—	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 5.8/在地	積上げ	タテハケ(5本/1cm)・(底)ナデ	平常なナデ	—	茶褐色	—	底部 G2

小迫辻原 A区-14号 土壺:弥生時代前期後半～中期初葉

C-P17-土110

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸きは単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			外	内				
11層	—	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い —	積上げ	タテハケ→ヨコハラミガキ(底)ナデ	平常なナデ	黒斑	茶・赤褐色～ 黒灰色	—	底部 やや上げ底
21+2層	—	弥生式土器	壺 A	—	(16.0)	砂粒多い —	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	ヨコハラナデ	—	赤褐色～ 茶褐色	二次加熱 赤彩	底部なし 2/3突起
31層	—	弥生式土器	壺	—	—	砂粒少く白 (5.2)精緻・在地	積上げ	不明(割離)	ナデ	—	淡褐色	—	底部

小迫辻原 A区-15号 土壺:弥生時代前期後半～中期初葉

C-O1-土175

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸きは単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			外	内				
11層	—	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い —	積上げ	不明(割離)	—	—	明褐色	二次加熱 赤彩	底部 aないし手法
21層	—	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 8.3/在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	ナデ	—	明褐色	二次加熱 赤彩	底部 aないし手法

小迫辻原 A区-17号 土壺:弥生時代前期後半～中期初葉

C-O1-土26

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸きは単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			外	内				
11層	—	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い —	積上げ	ヨコナデ	丁寧なナデ	—	赤褐色	二次加熱 (内)スス付着	底部

小迫辻原 A区-18号 土壘 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は径×高さ・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				口径	器高			内面	外面				
11層		弥生式土器	壺A	—	(20.4)	砂粒多い 在地	緒上げ	ヨコナデ・指圧痕	—	黒斑	赤褐色～ 黒灰色	—	口縁部
21層		弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 在地	緒上げ	ナデ	—	—	淡灰褐色	—	底部
31層		弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 在地	緒上げ	ヨコナデ・(底面)未調整	—	—	赤褐色	二次加熱 赤変	底部a手法

小迫辻原 A区-19号 土壘 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は径×高さ・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				口径	器高			内面	外面				
11～3層		弥生式土器	壺A	—	—	砂粒多い 在地	緒上げ	ヨコナデ	—	黒斑	褐色	二次加熱 赤変	口縁部 刻目・内側一条沈線
21層集中		弥生式土器	壺A	—	—	砂粒多い 在地	緒上げ	タテハケ・ヘラミガキ	—	—	褐色	—	内側 二条沈線
31層集中		弥生式土器	壺A	—	—	砂粒多い 在地	緒上げ	ナナメハケ	ナデ	—	褐色	二次加熱 スス付着	内側 二条沈線・(文)羽状文
41層集中		弥生式土器	壺A	—	—	砂粒多い 在地	緒上げ	ナナメハケ	ヨコハケ	—	褐色	二次加熱 スス付着	口縁部 刻目・金環母多い・変わらない一条沈線
51～3層		弥生式土器	壺A	—	(26.8)	砂粒多い 在地	緒上げ	タテハケ	ナナメハケ・ヨコハケ・ヘラミガキ	—	褐色	二次加熱 スス付着	口縁部 刻目・一条沈線
61～3層		弥生式土器	壺A	—	(26.5)	砂粒多い 在地	緒上げ	タテハケ	ヨコハケ	—	褐色	二次加熱 スス付着	口縁部 刻目・二条沈線
71～3層		弥生式土器	壺A	—	(14.4)	砂粒多い 在地	緒上げ	ヨコナデ	—	—	褐色	—	口縁部 刻目・一条沈線
81～3層		弥生式土器	壺B	—	—	砂粒多い 在地	緒上げ	タテハケ	ヨコハケ	—	褐色	—	口縁部 刻目・二条沈線
91～3層		弥生式土器	壺A	—	—	砂粒多い 在地	緒上げ	ナナメハケ	ナデ	—	黄褐色	—	口縁部 刻目・一条沈線
101～3層		弥生式土器	壺C	—	—	砂粒多い 在地	緒上げ	タテハケ	ナナメハケ	黒斑	黄褐色	二次加熱 スス付着	口縁部 刻目・一条沈線
111～3層		弥生式土器	壺(垂?)	—	—	砂粒多い 在地	緒上げ	タテハケ	ナナメハケ	黒斑	褐色	—	口縁部 刻目・一条沈線

小迫辻原 A区-20号 土壘 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は径×高さ・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				口径	器高			内面	外面				
1下位一拵		弥生式土器	壺A	22.8以上	20.4	砂粒多い 在地	緒上げ	指圧痕→タテ・ナナメハケ	ヨコハケ	黒斑	淡紫褐色～ 淡赤褐色	二次加熱 赤変	口縁部 刻目・一条沈線(胴部・頸部各1本)
2下位一拵		弥生式土器	壺	31.2以上	41.2	砂粒多い 在地	緒上げ	ヨコ・タテハケ(3本/1cm)→ヘラミガキ(下部)	平滑なナデ	黒斑	淡紫褐色・灰 褐色・黒灰色	—	底部 胎土に石葉・金環母混入
3下位一拵		弥生式土器	壺A	—	(35.4)	砂粒多い 在地	緒上げ	ナナメハケ(9本/1cm)→指圧痕・ヘラミガキ	ヨコハケ	—	淡灰褐色	—	口縁部 刻目・一条沈線
4下位一拵		弥生式土器	壺A	—	(21.8)	砂粒多い 在地	緒上げ	タテハケ(6本/1cm)	ヨコ・ナナメハケ	—	淡褐色	—	口縁部 刻目・一条沈線
5下位一拵		弥生式土器	壺B	—	—	砂粒多い 在地	緒上げ	ナナメハケ(5.6本/1cm)	平滑なナデ	—	暗褐色	二次加熱 スス付着	口縁部 刻目・貼付一条三角変形
6下位一拵		弥生式土器	壺C	—	(19.7)	砂粒多い 在地	緒上げ	タテハケ(4.5本/1cm)	ヨコハケ	—	淡褐色～ 黒灰褐色	—	口縁部 刻目・一条沈線・胎土に黒曜石片
7下位一拵		弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 在地	緒上げ	タテハケ(4本/1cm)・(底)ナデ	ナデ	—	赤褐色 (内)黒褐色	二次加熱 赤変 (内側)スス付着	底部a手法の変形

小迫辻原 A区-21号 土壘 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は径×高さ・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				口径	器高			内面	外面				
1下位一拵		弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 在地	緒上げ (内側接合)	タテヘラミガキ・(底)ナデ	—	—	黄褐色	二次加熱 スス付着	底部
2埋土中		弥生式土器	壺A	—	—	砂粒多い 在地	緒上げ	指圧痕→タテハケ(5本/1cm)	平滑なナデ	—	明茶褐色	二次加熱 スス付着	口縁部

小迫辻原 A区-28号 土壌:弥生時代前期後半~中期初頭

Table with columns: NO, 出土位置・遺構, 種別, 器種, 規格(口径, 器高, 口径, 胴部最大径, 底径), 胎土, 成形, 調整面(外, 内), 焼成, 色調, 使用痕, 備考. Rows 1-12.

小迫辻原 A区-29号 土壌:弥生時代前期後半~中期初頭

Table with columns: NO, 出土位置・遺構, 種別, 器種, 規格(口径, 器高, 口径, 胴部最大径, 底径), 胎土, 成形, 調整面(外, 内), 焼成, 色調, 使用痕, 備考. Rows 1-2.

小迫辻原 A区-31号 土壌:弥生時代前期後半~中期初頭

Table with columns: NO, 出土位置・遺構, 種別, 器種, 規格(口径, 器高, 口径, 胴部最大径, 底径), 胎土, 成形, 調整面(外, 内), 焼成, 色調, 使用痕, 備考. Rows 1-2.

小迫辻原 A区-33号 土壌:弥生時代前期後半~中期初頭

Table with columns: NO, 出土位置・遺構, 種別, 器種, 規格(口径, 器高, 口径, 胴部最大径, 底径), 胎土, 成形, 調整面(外, 内), 焼成, 色調, 使用痕, 備考. Rows 1-3.

小迫辻原 A区-34号 土壌:弥生時代前期後半~中期初頭

Table with columns: NO, 出土位置・遺構, 種別, 器種, 規格(口径, 器高, 口径, 胴部最大径, 底径), 胎土, 成形, 調整面(外, 内), 焼成, 色調, 使用痕, 備考. Rows 1-1.

小迫辻原 A区-35号 土蔵: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○)つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
11層		弥生式土器	壺B	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ナ子	ナ子	—	褐色	—	頸部 貼付三角交差帯を凹形に

C-Q17-土161

小迫辻原 A区-36号 土蔵: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○)つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
11層		弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い (10.1) 在地	積上げ	タテハケ(7本/1cm)・(底)ナ子	不明(剥離)	—	茶褐色～ 灰茶褐色	—	底部
21層		弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い (8.0) 在地	積上げ	タテハケ(4本/1cm)	平滑なナ子	—	明橙褐色	二次加熱 赤変	底部の手法

C-Q17-土111

小迫辻原 A区-37号 土蔵: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○)つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
11層上部		弥生式土器	壺A	—	(25.0)	砂粒多い 陥入	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	平滑なナ子	—	淡茶褐色	—	口縁部 胎土に金雲母、石英多い、二条沈線
21層		弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い (8.0) 在地	積上げ	不明	不明	—	褐色 暗黒色	—	底部
31層上部		弥生式土器	甌	—	—	砂粒多い (7.25) 在地	積上げ	不明	平滑なナ子	—	淡橙褐色	二次加熱 赤変 (内面)又付着	底部 焼成前穿孔(直径10mm)

C-Q17-土113

小迫辻原 A区-38号 土蔵: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○)つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
11層		弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い (7.5) 在地	積上げ	不明(剥離)	不明(剥離)	黒斑	赤褐色	—	底部

C-Q17-土112

小迫辻原 A区-39号 土蔵: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○)つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
12層		弥生式土器	壺A	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	指圧痕→ヨコナ子	ヨコナ子	—	褐色	二次加熱 (内面)赤変	口縁部
22層		弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 8.0 在地	積上げ	不明(剥離)	平滑なナ子	—	淡黄褐色	二次加熱 赤変	底部の手法?

C-Q17-土151

小迫辻原 A区-40号 土蔵: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○)つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1埋土中		弥生式土器	壺A	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ナナメハケ(8本/1cm)・ヨコナ子	ヨコハケ・ナ子	—	にふい黄褐色	二次加熱 赤変 又付着	口縁部

C-R1-土40

小迫辻原 A区-41号 土蔵: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○)つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
11層一括		弥生式土器	壺B	—	(21.0)	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	丁寧なナ子	—	淡黄褐色～ 明橙褐色	—	口縁部 刻目・胴部 刻目工具痕・三角突帯
21層一括		弥生式土器	壺C	—	(21.6)	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコ・ナナメハケ(5本/1cm)	タテ方向の丁寧なナ子	—	淡灰褐色～ 赤褐色	二次加熱 赤変	口縁部～胴部
31層一括		弥生式土器	壺C	—	(30.8)	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	指ナ子→ナ子	黒斑	明橙褐色～ 赤褐色	二次加熱 赤変	口縁部～胴部・一条沈線
41層一括		弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 7.2 在地	積上げ	タテハケ	丁寧なナ子	—	赤褐色	二次加熱 赤変	底部の手法

C-R1-土37

小迫辻原 A区-43号 土壌:弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは標準口径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				口径	胴部最大径			口径	内面				
1	1層 最下部	弥生式土器	壺B	(15.4)	(30.6)	砂粒多い 在地	横上げ	ナナメハケ・ヨココ・ナナメヘラミガキ	黒斑	茶褐色~ 黒灰色	-	三角尖帯が頸部(1)・胴部(2)・No2と同一個体	
2	2層 最下部	弥生式土器	壺	-	-	砂粒多い 9.0在地	横上げ	タテハケ	-	にふい黄褐色	-	底部No1の壺と同一個体	
3	3層 最下部	弥生式土器	壺A	(31.2)	-	砂粒多い 瓶入	横上げ	タテハケ(6本/1cm)	ナナメハケ・丁寧なナデ	明褐色~ 明暗褐色	二次加熱 (外)赤変 (内)スス付着	胎土に金葉母・No4と同一個体	
4	4層 最下部	弥生式土器	壺	-	-	砂粒多い 7.6在地	横上げ	タテハケ(6本/1cm)	丁寧なナデ	明褐色~赤褐色 (内)黒褐色	二次加熱 (外)赤変 (内)スス付着	底部No3と同一個体	
5	5層 下部	弥生式土器	壺A	(26.0)	26.8	砂粒多い 在地	横上げ	ナナメ・タテハケ(7本/1cm)・口縁部 指圧痕・ナデ	平滑なナデ・割縁	淡黄褐色	二次加熱 (外)赤変	二条流線	
6	6層 上部	弥生式土器	壺A	(22.0)	-	砂粒多い 瓶入?	横上げ	ナナメ・タテハケ	平滑なナデ	にふい黄褐色	二次加熱 (外)赤変	母黒・金多い・二条流線	

小迫辻原 A区-44号 土壌:弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは標準口径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				口径	胴部最大径			口径	内面				
1	1層	弥生式土器	壺B	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ	-	にふい黄褐色	(内)赤変	胴部一条三角尖帯	
2	2層	弥生式土器	壺	-	-	砂粒多い (8.8)在地	横上げ	タテヘラミガキ(底)ナデ	指ナデ	にふい黄褐色	二次加熱 赤変	口縁部一条三角尖帯	
3	3層	弥生式土器	壺C	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ	-	褐色	-	底部	
4	4層	弥生式土器	壺	-	(13.2)	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(底)指圧痕	不明(割縁)	にふい黄褐色	-	底部	

小迫辻原 A区-46号 土壌:弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは標準口径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				口径	胴部最大径			口径	内面				
1	1層	弥生式土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	不明	平常なナデ	-	にふい黄褐色	二次加熱 赤変	底部C2・胎土に黒曜石混入
2	2層 集中A	弥生式土器	壺C	21.3	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ	平常なナデ	黒斑	明黄褐色	二次加熱 スス付着	No8と同一個体
3	3層 集中A	弥生式土器	壺C	(26.0)	-	砂粒多い 在地	輪組み	タテハケ	ヘラミガキmヘラナデ	-	淡黄褐色	スス付着	No9と同一個体
4	4層	弥生式土器	壺C	-	20.6	砂粒多い 在地	横上げ	ナナメハケ	指圧痕残す粗いナデ	-	褐色	二次加熱 スス付着	口縁上面ヨココハケ(6本/1cm)・黒曜石・石英混入
5	5層	弥生式土器	壺C	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ	指圧痕残す丁寧なナデ	-	淡黄褐色	二次加熱 赤変	口縁部・黒曜石混入・一条流線
6	6層	弥生式土器	壺C	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ	平常なナデ	黒斑	淡黄褐色	二次加熱 スス付着	口縁~胴部・黒曜石・石英混入・一条流線
7	7層 集中A	弥生式土器	壺C	(28.6)	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ・ナデ	丁寧なナデ	-	淡黄褐色	二次加熱 スス付着	口縁~胴部・黒曜石・石英混入・一条流線
8	8層 集中A	弥生式土器	壺	-	-	砂粒多い 7.7在地	横上げ	タテハケ(底)指ナデ	平常なナデ	-	褐色	二次加熱 スス付着	底部No2と同一個体
9	9層 集中A	弥生式土器	壺	-	-	砂粒多い 8.1在地	横上げ	タテハケ(底)ナデ	ミガキのようなタテヘラナデ	黒斑	淡黄色	二次加熱 スス付着	底部a~b手法・No3と同一個体・黒曜石・石英多量混入
10	10層	弥生式土器	壺	-	-	砂粒多い 7.8在地	横上げ	タテヘラナデ(底)指圧痕	ナデ	-	にふい黄褐色	二次加熱 赤変	底部・黒曜石・石英多量混入

小迫辻原 A区-47号 土壌:弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは標準口径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				口径	胴部最大径			口径	内面				
1	1層 土中	弥生式土器	壺B	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ヨココハケ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	黒斑	黒茶褐色 (内)明茶褐色	-	口縁部 刻目・貼付一条尖帯
2	2層	弥生式土器	壺	-	-	砂粒多い (6.2)在地	横上げ	タテハケ(6本/1cm)・(底)ナデ	丁寧なヨコナデ	-	明黄褐色~ 茶褐色	二次加熱 赤変	底部

小迫辻原 A区-48号 土壌: 弥生時代前期後半～中期初頭

C-RO-155

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
12層		弥生式土器	壺A	—	(14.0)	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(7本/1cm)	ヨコナデ	—	淡褐色	—	
25層(下位一拵)		弥生式土器	壺A	—	—	砂粒多い 破入	積上げ	ヨコハケ(5本/1cm)・指圧痕→ヨコナデ	ナデ	—	黒茶褐色	—	口縁片・胎土に石英・金雲母混入
34層(下位一拵)		弥生式土器	壺A	—	—	砂粒多い 破入	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	不明	—	暗茶褐色	—	口縁部刻目・一条沈線・胎土に石英・金雲母混入
41・2層		弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い (7.1)破入?	積上げ	タテハケ(5本/1cm)・(底)ナデ	丁寧なナデ	—	褐色	二次加熱 赤変	底部 胎土に石英多い

小迫辻原 A区-49号 土壌: 弥生時代前期後半～中期初頭

C-RO-159

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
12層(下位一拵)		弥生式土器	壺A	29.0~30.0	18.4	28.5	10.0	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(3本/1cm)→ナデ・一部タテハラミガキ	黒斑	(外一内に焼成後穿孔あり)	赤変・口縁部刻目・肩部削出し
22層(下位一拵)		弥生式土器	壺	—	—	—	6.0	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ→ヨコハラミガキ・(底)赤調整	黒斑	—	底部
32層(下位一拵)		弥生式土器	壺	—	—	—	8.4	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(6~7本/1cm)	—	二次加熱 赤変	底部
42層(下位一拵)		弥生式土器	壺	—	—	—	(7.2)	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ・(底)赤調整	—	二次加熱 赤変	底部
52層(下位一拵)		弥生式土器	鉢A	28.0~28.4	28.4	—	8.8	砂粒多い 在地	積上げ	指圧痕→タテハケ(10本/1cm)→ナデ	—	二次加熱 赤変	復元完形

小迫辻原 A区-50号 土壌: 弥生時代前期後半～中期初頭

C-R19-186

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
142(1・1.5層)		弥生式土器	壺A	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ナナメハケ(8本/1cm)	—	二次加熱 スス付着	頭部・黒曜石混入・二条沈線
22層		弥生式土器	壺	—	—	—	(6.2)	砂粒多い 破入	積上げ	タテハケ(7本/1cm)・(底)ナデ	—	—	底部 胎土に金雲母混入

小迫辻原 A区-51号 土壌: 弥生時代前期後半～中期初頭

C-R19-188

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
16層(下位一拵)		弥生式土器	小型壺	8.0~8.3	4.8	9.9	5.0	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ・ナデ	黒斑	—	復元完形
25層(下位一拵)		弥生式土器	壺A	18.6~19.5	19.2	18.6	7.0	砂粒多い 在地	積上げ	タテ・ナナメハケ(6本/1cm)	—	二次加熱 スス付着	復元完形・一条沈線
36層(下位一拵)		弥生式土器	壺A	—	(22.8)	(22.1)	—	砂粒多い 在地?	積上げ	指圧痕→タテハケ(9本/1cm)	黒斑	—	口縁部刻目 一条沈線
45層(下位一拵)		弥生式土器	壺B	—	(21.9)	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテ・ナナメハケ(10~11本/1cm)	黒斑	二次加熱 赤変	口縁部刻目・貼付一条三角突帯
55層(下位一拵)		弥生式土器	壺	—	—	—	(7.9)	砂粒多い 在地	積上げ	不明(剥離)	—	—	底部

小迫辻原 A区-52号 土壌: 弥生時代前期後半～中期初頭

C-R19-174

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
14層		弥生式土器	壺A	—	(12.4)	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテ・ナナメハケ(5本/1cm)→ヨコハラミガキ	—	—	頭部 削出し
24層		弥生式土器	壺A	—	(19.5)	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ナデ・口縁ヨコナデ	—	—	口縁部~胴部
34層		弥生式土器	壺A	—	(16.2)	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(7本/1cm)	—	—	口縁部(刻目)
43+4層		弥生式土器	壺	—	—	—	(7.7)	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ→タテハラミガキ	黒斑	—	底部

274層(上位)	弥生式土器	壺	—	—	—	—	—	—	—	ナ子	ナ子	—	赤褐色	二次加熱 赤変	底部	備考
----------	-------	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	---	-----	------------	----	----

小迫江原 A区-55号 土壺 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸)つきは複元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考	
				器高	口径			胴部最大径	底径					外面
1	11・12層(下位一括)	弥生式土器	壺 A	—	21.6	—	33.5	—	ヨコハケ(6本/1cm)・タテ・ヨコヘラミガキ・ヨコナ子	指圧痕残すナ子・ヨコヘラミガキ・ヨコナ子	黒斑	明褐色～黒灰色	—	肩部 一条へら指圧痕 口縁部を打ち抜いた完形品、一条沈線・胎土に石多い
2	6層(中位一括)	弥生式土器	壺 A	—	—	9.2	—	タテハケ(6本/1cm)・ヨコヘラミガキ	ナ子	黒斑	淡褐色～暗褐色	二次加熱 スス付着	口縁部を打ち抜いた完形品、一条沈線・胎土に石多い	
3	14層	弥生式土器	壺	—	(25.6)	—	—	ナナメ・タテハケ・剥離?	ナ子	—	明褐色	二次加熱 赤変	口縁部・口縁に一条沈線	
4	8+11・12層(中・下位)	弥生式土器	壺 A	29.5	—	22.9	7.6	タテハケ(6本/1cm)・指圧痕(口縁部)	ナ子	黒斑	明褐色	二次加熱 赤変	肩部 一条へら指圧痕	
5	6+8層(中位一括)	弥生式土器	壺 A	21.9	22.0	18.4	6.5～6.9	タテハケ(6本/1cm)・指圧痕(口縁部)・底・モミ痕	ナ子	—	明褐色 (内)淡黒褐色 黒褐色	二次加熱 赤褐色変	交差しない一条沈線	
6	11・12層(下位一括)	弥生式土器	壺 A	—	—	—	—	ナナメ・タテハケ(6本/1cm)	ナ子	黒斑	淡褐色 (内)黒灰色	二次加熱 スス付着	口縁部 刻目・一条沈線	
7	11・12層(下位一括)	弥生式土器	壺 C	—	(28.8)	—	28.6	タテハケ(10本/1cm)	ナ子?	—	暗茶褐色～明褐色	二次加熱 赤変	口縁部 刻目・一条沈線	
8	8層(中位一括)	弥生式土器	壺 B	—	(21.4)	—	—	タテハケ?・ヨコナ子	ナ子	—	淡茶褐色 (内)明褐色	—	口縁部 刻目・貼付一条三角変帯	
9	11+11・12層(中・下位)	弥生式土器	壺 C	—	(20.2)	—	(27.8)	タテハケ(6本/1cm)・底ナ子	ナ子	—	淡褐色・黒灰色 赤褐色	二次加熱 スス付着	口縁部 刻目・貼付一条三角変帯	
9-2	8+11・12層(中・下位)	弥生式土器	壺 C	—	—	—	—	ナナメ・タテハケ(6本/1cm)・底・指ナ子・未調整	ナ子	—	淡褐色・黒灰色 赤褐色	二次加熱 スス付着	口縁部 刻目・貼付一条三角変帯	
10	8+11・12層(下位一括)	弥生式土器	壺 C	—	24.0	—	—	タテハケ(6本/1cm)	ナ子	—	明褐色 (内)明褐色	二次加熱 赤褐色変	口縁部 刻目・貼付一条三角変帯	
11	11・12層(下位一括)	弥生式土器	壺 C	—	(21.6)	—	—	不明(剥離)	ナ子	—	淡黄白色	—	口縁部 刻目・一条沈線	
12	14層	弥生式土器	壺 C	—	—	—	—	不明(剥離)	ナ子	—	黒灰色～淡褐色	二次加熱 スス付着	口縁部 刻目・一条沈線	
13	11・12層(下位一括)	弥生式土器	壺	—	—	7.8	—	タテハケ(6本/1cm)・底ナ子	ナ子	—	赤褐色～黒灰色	二次加熱 赤変	口縁部 刻目・一条沈線	
14	11・12層(下位一括)	弥生式土器	壺	—	—	7.0	—	ナナメ・タテハケ(6本/1cm)・指ナ子	ナ子	—	淡・明褐色 黒灰色	二次加熱 スス付着	口縁部 刻目・一条沈線	
15	8層(中位一括)	弥生式土器	壺	—	—	5.4	—	ナナメ・タテハケ(6本/1cm)・底ナ子	ナ子	黒斑	淡茶褐色 (内)赤褐色	—	口縁部 刻目・一条沈線	
16	10層	弥生式土器	壺	—	—	7.0	—	タテハケ(7本/1cm)・底未調整	ナ子	黒斑	赤褐色～黒灰色	二次加熱 赤変	口縁部 刻目・一条沈線	
17	8層(中位一括)	弥生式土器	壺	—	—	8.8	—	タテハケ(8本/1cm)・底ナ子	ナ子	—	赤褐色～淡褐色	二次加熱 赤変	口縁部 刻目・一条沈線	
18	6・8層(中位)	弥生式土器	壺	—	—	8.4	—	タテハケ(6本/1cm)・底ナ子	ナ子	—	明褐色～淡褐色	二次加熱 赤変	口縁部 刻目・一条沈線	
19	8層(中位一括)	弥生式土器	鉢 A	—	(28.8)	—	—	ナナメ・タテハケ(6本/1cm)・底ナ子	ナ子	(内) 黒斑	黒～黒灰色 淡褐色～黒灰色	二次加熱 スス付着	口縁部 刻目・一条沈線	
20	19層(最下層)	弥生式土器	高杯	—	(4.0)	—	—	ハラミガキ(底ハラナ子・小蓋とっている)	ナ子	黒斑	淡褐色～黒灰色	—	口縁部 刻目・一条沈線	

小迫江原 A区-56号 土壺 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸)つきは複元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1層	弥生式土器	壺 A	—	(17.0)	—	—	不明(剥離)	不明(剥離)	(内) 黒斑	淡褐色～黒灰色	—	口縁部 刻目・一条沈線・胎土に角閃石・長石がなく、石灰が多い

小迫江原 A区-68号 土壺 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸)つきは複元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1層下部	弥生式土器	壺 C	—	(20.4)	—	—	不明(剥離)	不明(剥離)	—	淡褐色	—	口縁部 刻目・一条沈線・胎土に大型石あり

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は復元径・単位:cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考	
				器高	口径			胴部最大径	底径					外面
11	1層一拵	弥生式土器	壺B	—	(42.8)	(41.4)	—	積上げ	タテハケ(7本/1cm)	—	黒斑	明茶褐色	二次加熱 赤変	口縁部 刻目・貼付一条三角突帯

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は復元径・単位:cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考	
				器高	口径			胴部最大径	底径					外面
12	12層床面上	弥生式土器	壺A	—	(22.6)	—	積上げ	タテハケ	—	—	—	赤茶褐色	二次加熱 赤変	口縁部 下に逆さにおかれる。胎土に金雲母混入

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は復元径・単位:cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
13	1層一拵	弥生式土器	壺A?	—	—	砂粒多い 在地?	積上げ	不明	—	黒斑	褐色	—	口縁部 刻目・刺出しの痕あり
22	2層一拵	弥生式土器	壺A	—	(21.9)	(35.6)	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	平滑なナデ	黒斑	明茶褐色	—	肩部 一条沈線
33	3層一拵	弥生式土器	壺	—	(22.7)	—	積上げ	タテハケ→剥離	平滑なナデ	黒斑	淡褐色	—	口縁部
47	4層一拵	弥生式土器	壺	—	(20.7)	—	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	平滑なナデ	—	淡褐色	—	口縁部 刻目
5-1	1層	弥生式土器	壺B	—	(18.4)	類部	積上げ	不明	—	—	黒褐色	—	頸部・(外)二条沈線による浅い袋帯・(内)貼付一条三角突帯
5-2	1層	弥生式土器	壺B	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	不明	—	—	黒褐色	—	頸部 貼付一条三角突帯
6	1層	弥生式土器	壺B	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナチ→剥離	不明	—	黒褐色	—	頸部 貼付一条三角突帯
7	1層一拵	弥生式土器	壺B	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ	平滑なナデ	—	明褐色	—	頸部 貼付一条三角突帯(刻目・竹管文)
8	2層一拵	弥生式土器	壺B	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)→剥離	不明	黒斑	褐色	—	頸部 貼付一条M字三角突帯
9	2層一拵	弥生式土器	壺A	—	(23.8)	—	積上げ	タテハケ(6本/1cm)・指圧痕	丁穿なナデ	—	褐色	二次加熱 赤変	口縁部 刻目
10	3+7層一拵	弥生式土器	壺A	—	(30.7)	30.6	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	丁穿なナデ	黒斑	淡褐色	二次加熱 赤変	口縁部 刻目
11	1層一拵	弥生式土器	壺A	—	(23.6)	—	積上げ	指圧痕→タテハケ(6本/1cm)	丁穿なナデ	—	暗茶褐色	二次加熱 赤変	胎土に金雲母ありへう描一条沈線
12	1層一拵	弥生式土器	壺A	—	(33.4)	—	積上げ	指圧痕→タテハケ(6本/1cm)	丁穿なナデ	黒斑	明褐色	—	口縁部 刻目・一条沈線
13	2+3層	弥生式土器	壺A	—	(24.8)	—	積上げ	指圧痕→タテハケ(6本/1cm)	丁穿なナデ	黒斑	淡褐色	—	口縁部 刻目・一条沈線
14	1+2+3層一拵	弥生式土器	壺A	—	(20.0)	—	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	丁穿なナデ	—	赤茶褐色	二次加熱 スス付着	口縁部 刻目・胎土に金雲母、石英混入・一条沈線
15	1+2+3層一拵	弥生式土器	壺A	—	(22.0)	(21.5)	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	平滑なナデ	—	茶褐色	二次加熱 赤変	半壳形・口縁部 刻目・底部手手法・一条沈線
16	1層主体+7層	弥生式土器	小型壺A	—	15.8	14.1	積上げ	タテハケ→剥離	不明	—	淡褐色	—	口縁部 刻目・一条沈線
17	2+3層一拵	弥生式土器	壺A	—	(26.0)	23.9	積上げ	指圧痕→ナナメハケ	平滑なナデ	—	黒茶褐色	二次加熱 赤変	口縁部 刻目・胎土に金雲母、石英混入・一条沈線
18	7層主体+1層	弥生式土器	壺A	—	(29.4)	(26.7)	積上げ	指圧痕→ナメハケ(5~6本/1cm)	不明	黒斑	黒茶褐色	—	口縁部 刻目・二条沈線・No.32と同一個体
19	2層一拵	弥生式土器	小型壺B	—	(14.3)	(15.0)	積上げ	ヘラミカキ?	丁穿なナデ	—	淡茶褐色	—	口縁部 刻目・一条三角突帯
20	1~2層	弥生式土器	壺B	—	(27.9)	(27.0)	積上げ	ヨコハケ→タテハケ(6本/1cm)	丁穿なナデ	—	褐色	—	口縁部 刻目・一条三角突帯
21	7層一拵	弥生式土器	壺B	—	(28.0)	(25.1)	積上げ	タテハケ(6~7本/1cm)	丁穿なナデ	黒斑	淡褐色	二次加熱 赤変	口縁部 刻目・一条三角突帯
22	3層一拵	弥生式土器	壺B	—	(16.8)	(18.0)	積上げ	不明・数面が非割に荒れている	—	—	明褐色	二次加熱 赤変	底部・一条三角突帯
23	7層一拵	弥生式土器	大型壺B	—	—	—	積上げ	ヨコ・ナメハケ	丁穿なナデ	黒斑	褐色	—	胴部 胎土に石英多い・一条三角突帯

24	1層	弥生式土器	壺	—	—	(29.2)	(9.0)	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ→ナナメハケ	平滑なナデ	黒斑	淡灰褐色	二次加熱 赤変	底部～胴部
25	2+3層一括	弥生式土器	壺B	—	(27.4)	(26.1)	—	砂粒多い 在地	精上げ	指圧痕→タテハケ(6~7本/1cm)	丁寧なナデ	—	明茶褐色	二次加熱 スス付着	口縁部刻目・貼付一条三角突帯
26	1層	弥生式土器	壺	—	—	—	6.4	砂粒多い 在地	精上げ	下部に指圧痕?・(底)ナデ	丁寧なナデ	—	淡褐色	—	底部 a手法
27	1層	弥生式土器	壺	—	—	—	6.5	砂粒多い 入地?	精上げ	不明	ナデ	—	明茶褐色	二次加熱 赤変	底部 b手法・胎土に石多い
28	1層	弥生式土器	壺	—	—	—	7.7	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ・(底)割離	丁寧なナデ	—	明褐色	二次加熱 赤変	底部 b.c手法
29	1層	弥生式土器	壺	—	—	—	(10.3)	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ(5~6本/1cm)	丁寧なナデ	—	明褐色 (内)淡褐色	二次加熱 赤変	底部
30	1層	弥生式土器	壺	—	—	—	8.0	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ(6本/1cm)	平滑なナデ	—	明褐色	二次加熱 赤変	底部
31	1層	弥生式土器	壺	—	—	—	10.1	砂粒多い 在地	精上げ	不明	ナデ	—	淡茶褐色	—	底部
32	2層一括	弥生式土器	壺	—	—	—	8.4	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ→ヘラナデ・(底)指ナデ	平滑なナデ	—	明褐色	二次加熱 赤変	底部 No.17と同一個体
33	1+7層	弥生式土器	壺	—	—	—	7.4	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ(4~5本/1cm)・(底)指ナデ	平滑なナデ	—	赤褐色	二次加熱 赤変	底部 No.18と同一個体
34	2+3層	弥生式土器	壺	—	—	—	7.7	砂粒多い 在地	精上げ	不明・割離	ナデ	—	淡褐色	二次加熱 赤変	底部
35	埋土中	弥生式土器	三ツユウ	—	—	—	4.3	砂粒多い 在地	精上げ	指圧痕・(底)ナデ	不明(割離)	—	淡褐色	—	底部
36	1層	弥生式土器	鉢A	—	(19.8)	—	—	砂粒多い 在地	精上げ	指圧痕・割離	不明(割離)	—	淡褐色	—	口縁部
37	2+3層一括	弥生式土器	鉢B	—	(32.4)	—	—	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ(10本/1cm)→ヨコヘラミガキ	ナデ	黒斑	明褐色 暗褐色	二次加熱 赤変	貼付一条三角突帯
38	1層	弥生式土器	高杯	—	—	—	31.6	砂粒多い 在地	精上げ	ヨコヘラミガキ	平滑なナデ→ヘラミガキ	—	茶褐色	—	底部 a手法

小迫辻原 A区-65号 土蔵:弥生時代前期後半～中期初頭

C-S17-土153

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格(つきは毎元径・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考		
				器高	口径			胴部最大径	底径					外	内
11	1層	弥生式土器	壺	—	—	—	—	—	—	不明(割離)	ナデ	—	淡黄色	—	底部胎土に金葉母多い

小迫辻原 A区-67号 土蔵:弥生時代前期後半～中期初頭

C-S17-土154

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格(つきは毎元径・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考	
				器高	口径			胴部最大径	底径					外
11+2層	1+2層	弥生式土器	壺A	—	—	—	—	—	指圧痕→タテハケ(7本/1cm)	ヨコナデ	—	淡茶褐色	二次加熱 スス付着	口縁部刻目一条流線

小迫辻原 A区-68号 土蔵:弥生時代前期後半～中期初頭

C-R17S17-土115

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格(つきは毎元径・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
11~2層	11~2層	弥生式土器	壺A	—	—	—	—	—	不明(割離)	—	褐色	—	口縁部刻目
2+3層	2+3層	弥生式土器	壺C	—	—	—	—	—	不明(割離)	—	淡褐色	—	口縁部
31+2層	31+2層	弥生式土器	壺	—	—	(7.0)	—	—	不明	—	明褐色	二次加熱 赤変	底部 b手法胎土に石多い

小迫辻原 A区-69号 土蔵:弥生時代前期後半～中期初頭

C-O18-土100

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格(つきは毎元径・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
11層	11層	弥生式土器	壺A?	—	(21.6)	—	—	—	不明	黒斑	灰褐色 黒灰色	—	口縁部
21層	21層	弥生式土器	壺A	—	(18.8)	—	—	—	不明	(内)黒斑	灰茶褐色	—	口縁部刻目胎土に石多い
31層	31層	弥生式土器	壺B	—	—	—	—	—	不明(割離)	—	明褐色 暗褐色	二次加熱 赤変	頭部貼付三角突帯二条
41層	41層	弥生式土器	壺	—	—	(9.0)	—	—	不明・卑土の割入(タテ)	黒斑	淡黄褐色 黒灰色	—	底部 a,b手法

51層	弥生式土器	壺	—	—	—	(7.4)	砂粒多い 在地	精上げ	不明(剥離)・タテハケ	平滑なナズ	—	明褐色～ 淡褐色	二次加熱 赤変	底部b手法
-----	-------	---	---	---	---	-------	------------	-----	-------------	-------	---	-------------	------------	-------

C-S17-土162

小迫辻原A区-70号 土壺：弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
11	ないし2層	弥生式土器	壺A?	—	(20.2)	砂粒多い 在地	精上げ	ヨコナズ	—	—	黄褐色	—	口縁部
21	ないし2層	弥生式土器	壺A	—	—	砂粒多い 在地	精上げ	不明(剥離)	—	—	淡黄褐色	—	口縁部～胴部片 胎土に黒曜石・貼付一条三 角突起
31	2層	弥生式土器	壺C	—	—	砂粒多い 在地?	精上げ	不明(剥離)	—	—	褐色	—	角突起

C-TO-土118

小迫辻原A区-71号 土壺：弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
11	1層一括	弥生式土器	壺C	—	—	砂粒多い?	精上げ	タテハケ(7～8本/1cm)	—	—	黒斑	—	口縁部1条沈線
21	1層一括	弥生式土器	壺	—	(9.0)	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ(8本/1cm)	—	—	明褐色	二次加熱 赤変	底部
31	1層一括	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ(7本/1cm)・(底)未調整	—	—	外明褐色 内褐色	二次加熱 赤変	底部

C-T19-土127

小迫辻原A区-72号 土壺：弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
11	1層	弥生式土器	壺C	—	(23.0)	砂粒多い 在地	精上げ	ナズ	—	—	黄褐色	二次加熱 赤変 又欠付着	口縁部 一条沈線・胎土に黒曜石含む

C-S17-T17-土167

小迫辻原A区-75号 土壺：弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
14	4層(下位一括)	弥生式土器	壺A	—	(25.0)	砂粒多い 在地	精上げ	タテ・ナナムハケ(10本/1cm)	不明(剥離)	—	外明褐色 内淡褐色	—	口縁部～胴部・一条沈線
21	2層(上位流込)	弥生式土器	壺A	—	(25.6)	砂粒多い 在地	精上げ	タテ・ナナムハケ(8本/1cm)	不明(剥離)	—	淡黄褐色 淡褐色～ 黒灰色	二次加熱 又欠付着	口縁部胎土に黒曜石・一条沈線
34	4層(下位一括)	弥生式土器	壺C	—	46.8	砂粒多い 在地	精上げ	タテ・ナナムハケ(10本/1cm)	平滑なナズ	—	淡褐色 断黒灰色	—	胎土に黒曜石・一条沈線・兼程? No.4上同一
44	4層(下位一括)	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 在地	精上げ	ナナム・タテハケ(6・7本/1cm)	不明(剥離)	—	淡褐色	—	底部No.3と同一
54	5層(下位一括)	弥生式土器	壺B	—	—	砂粒多い 在地	精上げ	ヨコナズ・剥離	不明(剥離)	—	淡褐色	—	口縁部・貼付一条三角突起
61	1・2層(上位流込)	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 7.4在地	精上げ	不明(剥離)	—	—	黄褐色	二次加熱 赤変	底部ab手法
74	4層(下位一括)	弥生式土器	壺	—	(10.4)	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ(8本/1cm)	平滑なナズ	—	明褐色～ 淡褐色	二次加熱 赤変	底部ab手法
84	8層(下位一括)	弥生式土器	壺	—	10.8	砂粒多い 在地	精上げ	不明(剥離)	—	—	明褐色	二次加熱 (内)又欠付着?	底部ab手法
91	1・2・4層(上位+下位一括)	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 8.0在地	精上げ	タテハケ	平滑なナズ	—	淡褐色	—	底部ab手法

C-T17-土159

小迫辻原A区-76号 土壺：弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
11	11層	弥生式土器	壺C	—	—	砂粒多い 在地	精上げ	不明(剥離)	—	—	明褐色	二次加熱 (内)赤変	口縁部～胴部
21	21層	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い (9.4)在地	精上げ	不明(剥離)	—	—	淡黄褐色	赤変	底部
31	31層	弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い (12.0)在地	精上げ	ナズ	不明(剥離)	—	黄褐色	—	底部

小迫辻原 A区-77号 土層: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	器種	器高	規格(○つきは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				口径	胴部最大径			底径	外面				
1	1層	弥生式土器 甕	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	不明(剥離)	—	(内)黒斑	褐色 黄褐色 断黒色	二次加熱 赤変	底部 a,b 手法
2	2層	弥生式土器 甕	—	—	—	砂粒多い 在地?	積上げ	ナテ	—	黒斑	—	—	底部

小迫辻原 A区-78号 土層: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	器種	器高	規格(○つきは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				口径	胴部最大径			底径	外面				
1	18・9層(下位一拵)	弥生式土器 壺 A	—	(19.8)	—	砂粒多い 破入 在地	積上げ	ヘラミカキ・剥離	平滑なナテ	(内)黒斑	明茶褐色 黄褐色～ 黒灰色	—	口縁部 胎土に金華母・石英混入・一条沈線
2	2埋土中	弥生式土器 壺	—	—	10.0	砂粒多い 在地	積上げ	不明(剥離)	不明(剥離)	黒斑	—	—	底部 a,b 手法
3	38・9層(下位一拵)	弥生式土器 甕 A	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	不明(剥離)	不明(剥離)	黒斑	暗褐色	二次加熱 スス付着	口縁部～胴部
4	42層(上位一拵)	弥生式土器 甕 A	—	(21.6)	—	砂粒多い 在地	積上げ	ナメメハケ	不明(剥離)	黒斑	黒赤褐色～ 淡褐色	二次加熱 赤変	口縁部～胴部・一条沈線
5	52層(上位一拵)	弥生式土器 甕 B	—	(25.2)	(23.4)	砂粒多い 在地	積上げ	剥離	不明(剥離)	—	黄褐色	—	口縁部 刻目・貼付一条三角突帯
6	62層(上位一拵)	弥生式土器 甕 B (小型)	—	(12.8)	—	砂粒多い 破入 在地	積上げ	不明(剥離)	不明(剥離)	黒斑	褐色 断黒色	—	口縁部 刻目・胎土に金華母多い・一条三角突帯
7	78・9層(下位一拵)	弥生式土器 甕	—	—	9.0	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	平滑なナテ	黒斑 (内)黒灰色	—	二次加熱 赤変	底部 a,b 手法

小迫辻原 A区-80号 土層: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	器種	器高	規格(○つきは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				口径	胴部最大径			底径	外面				
1	13層	弥生式土器 甕	—	—	8.2	砂粒多い 在地	積上げ	ナテ・(底)指圧痕	平滑なナテ	—	淡黄褐色	二次加熱 赤変	底部
2	2 ないし2層	弥生式土器 甕	—	—	(7.6)	砂粒多い 在地	積上げ	ナテ	タテハケミガキ	—	淡黄色	—	底部

小迫辻原 A区-81号 土層: 弥生時代中期後半

NO	出土位置・遺構	器種	器高	規格(○つきは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				口径	胴部最大径			底径	外面				
1	1土層 2-1層	弥生式土器 甕 A	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ	—	—	淡褐色	—	口縁部 丹塗り
2	21層	弥生式土器 甕 A	—	(35.2)	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(4・6本/1cm)	平滑なナテ	—	淡褐色	—	口縁部 貼付一条三角突帯
3	3土層 2-1層	弥生式土器 甕	—	—	7.3	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ	平滑なナテ	—	淡褐色	二次加熱 赤変	底部 〇手法
4	4土層 2-1層	弥生式土器 器台	—	(6.8)	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	ナテ	—	淡褐色～ 明褐色	二次加熱 赤変	底部

小迫辻原 A区-82号 土層: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	器種	器高	規格(○つきは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				口径	胴部最大径			底径	外面				
1	2・3層一拵	弥生式土器 甕白	—	(22.0)	(41.7)	砂粒多い 破入 在地	積上げ	平滑なナテ	一部ハケ残る平滑なナテ	黒斑	淡黄褐色	—	頸・胴部に各M字突帯・胎土に金華母・石英多混入
2	2・3層一拵	弥生式土器 甕	—	—	9.2	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ・底・押圧	平滑なナテ	黒斑	にふい褐色	二次加熱 スス付着	底部 胎土に黒曜石・石英多混入
3	3層	弥生式土器 甕	—	—	(6.0)	砂粒多い 在地	積上げ	不明・(底)ナテ	ナテ	—	にふい黄褐色	二次加熱 赤変	底部

小迫辻原 A区-83号 土塚 弥生時代中期後半

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格(つきは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			器高	口径				
1	1層 PM内	弥生式土器	壺 A	—	(28.2)	—	精上げ	ヨコナテ	—	—	淡褐色	—	口縁部

小迫辻原 A区-83号 土塚 弥生時代中期後半

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格(つきは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			器高	口径				
2	pit 1-1	弥生土器	蓋 D	1.9	—	砂粒多い 在地	精上げ	ヨコナテ	—	—	淡黄褐色	—	丹塗り・穿孔2個(1単位)
3	pit 1-2	弥生土器	高杯 D	20.8以上	5.0	砂粒多い 在地	丹塗充填	ヨコナテ	—	—	淡褐色~赤色	—	脚部 丹塗り
4	pit 2-1	弥生土器	壺	—	—	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ(6本/1cm)	平滑なナテ	—	淡黄色	—	脚部 貼付一条三角突起

小迫辻原 A区-83号 土塚 弥生時代中期後半

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格(つきは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			器高	口径				
5	1層 mt3-1	弥生式土器	壺 A	—	(25.4)	砂粒多い 在地	精上げ	ヨコナテ	—	—	淡褐色~灰色	—	口縁
6	1層 mt3-2	弥生式土器	高杯 D	—	—	砂粒多い 在地	精上げ	ヨコナテ	—	—	淡茶褐色	—	杯・口縁部・彩色(丹塗り)

小迫辻原 A区-84号 土塚 弥生時代中期後半

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格(つきは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			器高	口径				
1	6層	弥生式土器	小型壺 D	—	(15.8)	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ	—	—	淡褐色	—	口縁部
2	1層 流込	弥生式土器	壺 A(大)	—	(39.2)	砂粒多い 在地	精上げ	不明(剥離)	ナテ	—	淡黄褐色~ 灰色	—	口縁部 一条突起
3	埋土中	弥生式土器	壺 A	—	(28.0)	砂粒多い 在地	精上げ	ナナメハケ(7本/1cm)	平滑なナテ	—	灰褐色	—	口縁部
4	3層一拵	弥生式土器	壺 A	—	(28.4)	砂粒多い 在地	精上げ	ナテ・剥離?	丁葺なナテ	—	淡黄褐色~明 褐色	—	口縁部 二次加熱 赤変
5	3層一拵	弥生式土器	壺 A	—	(24.2)	砂粒多い 在地	精上げ	石上りの浅いタテハケ	丁葺なナテ	—	明褐色	—	口縁部(未完成品)
6	3層一拵	弥生式土器	壺 A	—	(17.2)	砂粒多い 在地	精上げ	タタキ?	平滑なナテ	—	淡褐色	—	口縁部
7	3層一拵	弥生式土器	壺 D	—	(34.8)	砂粒多い 在地	精上げ	ヨコナテ	丁葺なナテ	—	淡黄褐色	—	口縁部 丹塗り 貼付M次突起
8	3層一拵	弥生式土器	壺 D	—	(7.0)	砂粒多い 在地	精上げ	丁葺なタテナテ・(底)ナテ	指圧痕一ナテ	—	赤黄褐色~ 淡褐色	—	底部 丹塗り
9	3層一拵	弥生式土器	壺	—	8.6	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ(12本/1cm)・(底)ナテ	丁葺なナテ	—	淡褐色	—	底部 de手法
10	5層	弥生式土器	壺	—	(7.0)	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ(4本/1cm)	ナテ	—	淡褐色~灰色	—	底部 de手法
11	5層	弥生式土器	高杯 D	—	(29.2)	砂粒多い 在地	精上げ	ヨコナテ・脚部にタテハケ(7本/1cm)	ヨコナテ	—	淡褐色	—	口縁部 丹塗り
12	3層一拵	弥生式土器	高杯 D	—	—	砂粒多い 在地	精上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	—	淡褐色	—	口縁部 丹塗り

小迫辻原 A区-85号 土塚 弥生時代中期後半

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格(つきは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			器高	口径				
1	20層	弥生式土器	壺 D	—	—	砂粒少い 在地	精上げ	ヨコナテ	—	—	淡褐色	—	口縁部 丹塗り
2	1層	弥生式土器	壺 A	—	(29.0)	砂粒少い 在地	精上げ	タテハケ(11本/1cm)	平滑なナテ	—	淡褐色~ 黒灰色	—	口縁部~脚部

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは複元径・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面				
32c層一拵		弥生式土器	甕A	—	(32.2)	—	積上げ	ナナメハケ(6本/1cm)	平滑なナデ	—	淡褐色~黒灰色	—	口縁部~胴部
42c層一拵		弥生式土器	甕A	—	(29.0)	砂粒少い在地	積上げ	不明(剥離)	平滑なナデ	—	淡褐色	—	口縁部~胴部 一条三角突起
52c層一拵		弥生式土器	甕A	—	(19.4)	砂粒少い在地	積上げ	不明(剥離)	平滑なナデ	—	淡褐色	—	口縁部~胴部
62b層		弥生式土器	甕A	—	(32.2)	砂粒少い在地	積上げ	タテハケ	平滑なナデ	—	淡褐色(内黒灰色帯)	—	口縁部 一条三角突起
72c層一拵		弥生式土器	甕A	—	(29.4)	砂粒少い在地	積上げ	不明(剥離)	平滑なナデ	—	淡褐色	—	口縁部 一条三角突起
82c層一拵		弥生式土器	甕	—	—	7.2 砂粒少い在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)・底ヨコナデ	平滑なナデ	—	淡赤褐色(内黒灰色)	二次加熱 又ス付信	底面
92c層一拵		弥生式土器	甕	—	—	7.6 砂粒多い在地	積上げ	タテハケ→ヨコナデ	平滑なナデ	—	淡褐色	—	底面○手法
102c層一拵		弥生式土器	甕	—	—	7.0 砂粒多い在地	積上げ	ヨコナデ	平滑なナデ	—	灰褐色~淡褐色	内面に赤色顔料?	底面○手法
112c層一拵		弥生式土器	甕	—	—	8.2 砂粒多い在地	積上げ	不明(剥離)・(底)ナデ	不明(剥離)	—	赤褐色~黒灰色	二次加熱 赤変	底面○手法
121層		弥生式土器	甕	—	—	8.0 砂粒多い在地	積上げ	ヨコナデ	平滑なナデ	—	明褐色~茶褐色	二次加熱 赤変	底面○手法?

小迫辻原 A区-86号 土壙: 弥生時代中期後半 C-T19-土109

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは複元径・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面				
12層		弥生式土器	小型壺	—	(9.1)	砂粒多い在地	積上げ	不明(剥離)	指圧痕・ナデ	—	淡褐色	—	口縁部~胴部
22層		弥生式土器	壺D	—	—	砂粒多い在地	積上げ	ヨコナデ	平滑なナデ	—	淡褐色	—	口縁部
32層		弥生式土器	甕	—	(31.6)	砂粒多い在地	積上げ	不明	平滑なナデ	—	淡褐色	—	口縁部
417a1L1層		弥生式土器	甕	—	(20.8)	砂粒多い在地	積上げ	不明	平滑なナデ	—	淡褐色	—	口縁部
52層		弥生式土器	甕	—	—	砂粒多い在地	積上げ	不明	平滑なナデ	—	淡黄褐色	—	口縁部
617a1L1層		弥生式土器	甕	—	(22.8)	砂粒多い在地	積上げ	不明	平滑なナデ	—	明褐色~淡褐色	二次加熱 赤変	口縁部
72層		弥生式土器	甕	—	(12.0)	砂粒多い在地	積上げ	ナデ?	平滑なナデ	—	淡褐色~黒灰色	—	口縁部~胴部
82層		弥生式土器	甕	—	—	7.2 砂粒多い在地	積上げ	ナデ	平滑なナデ	—	淡褐色~淡赤褐色	二次加熱 赤変	底面○手法

小迫辻原 A区-87,88号 土壙: 弥生時代中期後半 C-UO-土120.121

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは複元径・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面				
1A-87土+A-88土		弥生式土器	高坏D	—	—	砂粒多い在地	積上げ	口縁上面にへらミガキ・タテハケ	ヨコナデ	—	淡褐色	—	口縁部 丹塗り
2A-87土層		弥生式土器	甕A	—	—	砂粒多い在地	積上げ	ヨコナデ・剥離	平滑なナデ	—	淡褐色	—	口縁部
3A-87土層		弥生式土器	高坏?	—	(22.2)	砂粒多い在地	積上げ	ナデ・剥離	平滑なナデ	—	淡褐色	—	口縁部

小迫辻原 A区-91号 土壙: 古墳時代前期前半 C-TO-土164

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは複元径・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面				
11層一拵		土師器	甕A	—	(24.8)	砂粒多い在地	積上げ	ヨコ・タテハケ(9・10本/1cm)	タテハケ(9・10本/1cm)	—	淡黄褐色	二次加熱 又ス付信	口縁部~胴部
21層一拵		土師器	甕A	—	(15.0)	砂粒多い在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)→ヨコナデ	ヨコナデ	—	褐色	—	口縁部
31層一拵		土師器	甕A	—	—	砂粒多い在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	不明	—	茶褐色	—	口縁部
41層一拵		土師器	甕A	—	—	6.2 砂粒多い在地	積上げ	剥離	ハケ・剥離	—	明黄褐色	—	底面 シズ底・胎土に黒曜石混入
51層一拵		土師器	甕B	—	—	6.8 砂粒多い在地	積上げ	ナデ	平滑なナデ・指ナデ	—	黄褐色(内黒色)	—	底面 伝統的V様式系

小迫辻原 A区-92号 土壌：古墳時代前期前半

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格(つききは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			口径	口径				
1	1層	土師器	直口壺A?	-	-	砂粒多い 在地	精上げ	ヨコナデ	黒斑	黄褐色	-	口縁部 胎土に黒曜石	

C-SO-土66

小迫辻原 A区-137号 土壌：弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格(つききは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			口径	口径				
1	1層	弥生式土器	壺A	-	(24.6)	砂粒多い 在地	精上げ	不明(剥離)	-	茶褐色	-	口縁部	
2	1層	弥生式土器	甕	-	(6.8)	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ・剥離(底未調整)	-	赤褐色	二次加熱 赤変	底部ト手法	
3	1層	弥生式土器	甕	-	-	砂粒多い 在地	精上げ	不明(剥離)	-	赤褐色	二次加熱 赤変	底部	

C-T-溝7

小迫辻原 A区-3号 溝：近世

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格(つききは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			口径	口径				
1	埋土中	肥前磁器片付	鉢	-	-	-	ロクロ成形	釉が付・外内とも、裏入がある	-	淡灰色 文彦色	-	口縁部片 19世紀後半	
2	埋土中	肥前磁器片付	碗	-	-	-	ロクロ成形	染付並の葉文様	-	灰白色～藍色	-	胴部片 18世紀後半～19世紀前半	

小迫辻原 A区弥生時代前期ピット

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格(つききは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			口径	口径				
1	1018調査区 pit1	弥生式土器	壺	-	-	5.4 瓶入	精上げ	タテハケ(8本/1cm)・(底)ヨコナデ 平滑なナデ	-	淡黄褐色	-	底部 胎土に金雲母混入	

小迫辻原 A区古墳前期ピット

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格(つききは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			口径	口径				
1	1V19調査区 pit1	土師器	小型壺	15.0	10.6	15.0	精上げ	ヨコナデ(10本/1cm)・ナデ	黒斑	にぶい黄色	-	(A-10)住を切る(壳形丸底・胎土に金雲母混入)	

小迫辻原 A区奈良時代ピット

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格(つききは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			口径	口径				
1	1G18調査区 pit6	土師器	杯	-	-	(7.6) 砂粒多い	精上げ	ヨコナデ	-	淡黄褐色	-	底部・高台付	
2	1I17調査区 pit3	土師器	杯	-	-	(9.2) 砂粒多い	精上げ	ヨコナデ・回転へう切り	黒斑	にぶい黄褐色	-	底部	

小迫辻原 A区表面採集土器

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格(つききは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			口径	口径				
1	A-81土壌残留	弥生式土器前期壺	壺	-	-	砂粒多い 在地	精上げ	ヨコナデ	淡褐色	淡褐色	-	口縁部片(文)口縁に羽状の刻み目	

第 6 表 小迫辻原遺跡 A区 出土石器観察表

出土遺構	NO	位置・層序	器種	石材	(>)つきは破片・単位(cm)			重量 (単位 g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
A区-7号竪穴住居 (古墳時代前期・前半)	6	2層一括	石皿	安山岩	(9.6)	(8.1)	4.5	破片 (522.0)	
A区-9号竪穴住居 (古墳時代前期・前半)	7	2層一括 床面直上	磨石?	安山岩	14.1	10.6	4.1	952.0	変形
A区-9号竪穴住居 (古墳時代前期・前半)	3	2層下部一括	磨石	安山岩	13.9	9.9	8.8	1800.0	変形
A区-5号土壌 (弥生時代前期～中初)	4	2層下部	小型砥石(携帯用)	千枚岩	8.5	4.1	1.1	56.0	変形 基部に穿孔(面穿孔)
A区-5号土壌 (弥生時代前期～中初)	8	2層下部	砥石	安山岩	14.8	7.3	5.5	(936.0)	一部欠損 端部に敲打面あり
A区-6号土壌 (弥生時代前期～中初)	9	2層下部	砥石	砂岩	(10.3)	9.5	6.5	(880.0)	半折
A区-10号土壌 (弥生時代前期～中初)	5	1層一括	砥石	頁岩	(6.6以上)	3.2～5.6	2.6	(107.1)	破片
A区-11号土壌 (弥生時代前期～中初)	8	6層	打製石鏃	サヌカイ	1.7	1.75	0.4	0.8	変形
A区-11号土壌 (弥生時代前期～中初)	27	18層	磨石	安山岩	13.2	10.6	6.4	1430.0	変形 加熱を受けている
A区-11号土壌 (弥生時代前期～中初)	28	2層(上位)	磨石	安山岩	11.1	(8.8)	3.9	(696.0)	一部欠損
A区-12号土壌 (弥生時代前期～中初)	29	18層	磨石	安山岩	16.8	6.2	5.0	738.0	変形 ハンマーストーン?
A区-12号土壌 (弥生時代前期～中初)	1	3層	磨石	安山岩	10.0	(5.7)	5.0	(440.0)	半折
A区-13号土壌 (弥生時代前期～中初)	3	1層	磨石?	安山岩	9.7	9.2	6.0	670.0	変形
A区-14号土壌 (弥生時代前期～中初)	4	1層	磨石	安山岩	10.5	9.3	6.1	850.0	変形
A区-16号土壌 (弥生時代前期～中初)	4	1層	打製石鏃	サヌカイ	4.2	2.1	0.7	5.0	変形
A区-16号土壌 (弥生時代前期～中初)	1	1層	打製石鏃	サヌカイ	2.1	1.75	0.35	0.8	変形
A区-21号土壌 (弥生時代前期～中初)	12	下位一括	磨製石斧(鋸刃)	輝質砂岩	16.7	7.1	4.2	896.0	変形
A区-28号土壌 (弥生時代前期～中初)	13	3層	スクレイパー	粘板岩	5.3	3.9	1.0	17.1	変形
A区-41号土壌 (弥生時代前期～中初)	14	2層	砥石	輝質頁岩	(7.0)	(2.4)	2.2	(73.0)	破片
A区-52号土壌 (弥生時代前期～中初)	5	1層一括	打製石鏃	サヌカイ	1.9	(1.5)	0.3	(0.7)	一部破損
A区-52号土壌 (弥生時代前期～中初)	10	4層	石皿	安山岩	(10.4)	(13.2)	5.6～6.4	(1184.9)	破片 二次加熱の跡が割れている
A区-53号土壌 (弥生時代前期～中初)	11	4層	石皿	砂岩	(6.6)	(5.8)	3.1	(148.3)	破片
A区-53号土壌 (弥生時代前期～中初)	12	4層	小型砥石	砂岩質頁岩	4.9	2.4	2.0	52.0	変形
A区-53号土壌 (弥生時代前期～中初)	28	9層(下位一括)	打製石鏃	腰岳産黒曜石	1.2	1.6	(0.3)	0.3	変形
A区-53号土壌 (弥生時代前期～中初)	29	6層(中位一括)	打製石鏃	腰岳産黒曜石	(1.9)	1.5	0.35	(0.7)	先端欠損
A区-53号土壌 (弥生時代前期～中初)	30	6層(中位一括)	打製石鏃	腰岳産黒曜石	1.5	1.2	0.3	0.3	変形
A区-53号土壌 (弥生時代前期～中初)	31	4層(上位)	スクレイパー	サヌカイ	7.6	3.4	0.7	18.9	変形
A区-53号土壌 (弥生時代前期～中初)	32	11層(床面層)	磨製石斧	千枚岩?	(9.4)	4.5	1.4	(114.0)	基部欠損
A区-53号土壌 (弥生時代前期～中初)	33	4層(上位)	砥石	安山岩	6.3	4.7	2.5	74.0	変形(金雲母含有)
A区-53号土壌 (弥生時代前期～中初)	21	4層(上位)	磨製石斧(鋸刃)	安山岩	(14.8)	(7.6)	5.0	(1012.1)	刃部欠損
A区-62号土壌 (弥生時代前期～中初)	22	19層(最下層)	石皿	安山岩	(16.8)	(10.0)	4.0	(1221.5)	破片
A区-64号土壌 (弥生時代前期～中初)	3	床直	スクレイパー	サヌカイ	11.2	6.2	1.0	51.6	変形
A区-64号土壌 (弥生時代前期～中初)	39	7層一括	石鏃	サヌカイ	9.6以上	6.6	1.2～1.4	85.2	変形
A区-64号土壌 (弥生時代前期～中初)	40	9層	石鏃	腰岳産黒曜石	4.3	1.9	0.7	4.4	変形
A区-64号土壌 (弥生時代前期～中初)	41	2.3層一括	石皿	安山岩	20.0	18.5	5.5	3000.0	変形
A区-64号土壌 (弥生時代前期～中初)	42	1層	石皿	凝灰岩質安山岩	(11.6)	(8.0)	5.4	(793.2)	破片
A区-64号土壌 (弥生時代前期～中初)	43	9層	石皿	安山岩	(6.9)	(5.0)	5.3	(296.0)	破片
A区-64号土壌 (弥生時代前期～中初)	44	1層	ハンマーストーン	安山岩	18.2	16.4	5.9	-2140.0	変形
A区-68号土壌 (弥生時代前期～中初)	4	1～3層	打製石鏃	サヌカイ	10.2	4.3	3.5	174.0	変形
A区-74号土壌 (弥生時代前期～中初)	1	1ないし2層	磨石	安山岩	11.8	6.6	4.1	608.0	変形
A区-75号土壌 (弥生時代前期～中初)	10	4層(下位一括)	磨石	安山岩	10.8	8.5	4.6	710.0	変形 被熱している
A区-81号土壌 (弥生時代中期・後半)	5	1層	打製石鏃	サヌカイ	3.3	1.8	0.45	2.3	変形
A区-86号土壌 (弥生時代中期・後半)	9	2層	砥石	砂岩質頁岩	(6.8)	3.3	2.2	(87.4)	半折

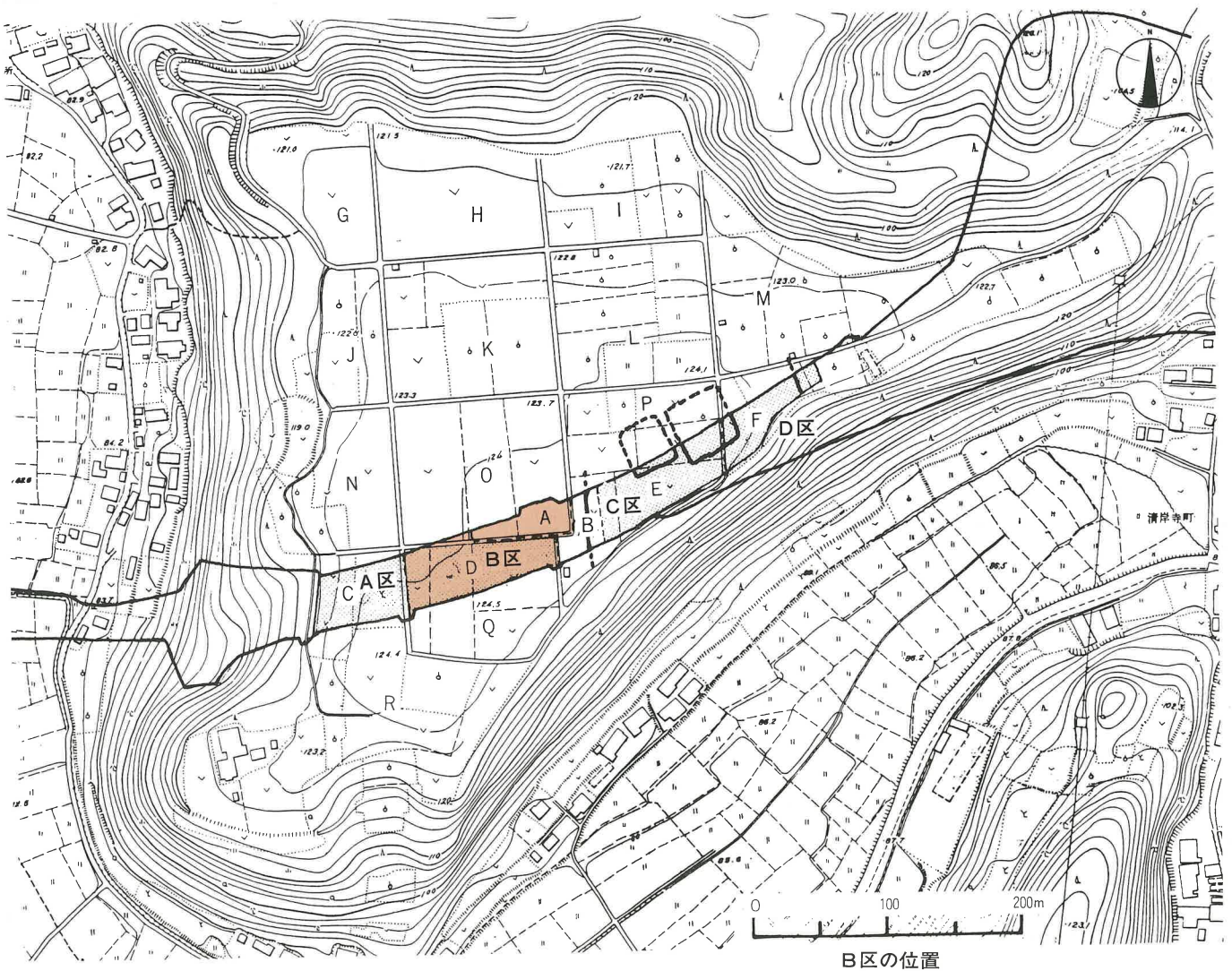
小迫辻原遺跡 A区 表面採集石器

出土遺構	NO	位置・層序	器種	石材	(>)つきは破片・単位(cm)			重量 (単位 g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
A区-8号竪穴住居	2	残留	挟入片刃石斧	頁岩質砂岩	11.2	3.4	2.6	207	ほぼ変形(弥生時代)
A区-3号溝	3	残留	石包丁?	結晶片岩	5.2	(7.2)	0.9	(57)	未製品?(弥生時代)
C区 X(エゾカズ)2調査区7ヶ所	4	-	砥石	結晶片岩	(8.7)	4.4	0.8～1.2	(64)	把手部分が折れている(携帯用)

第5章 B区の記録



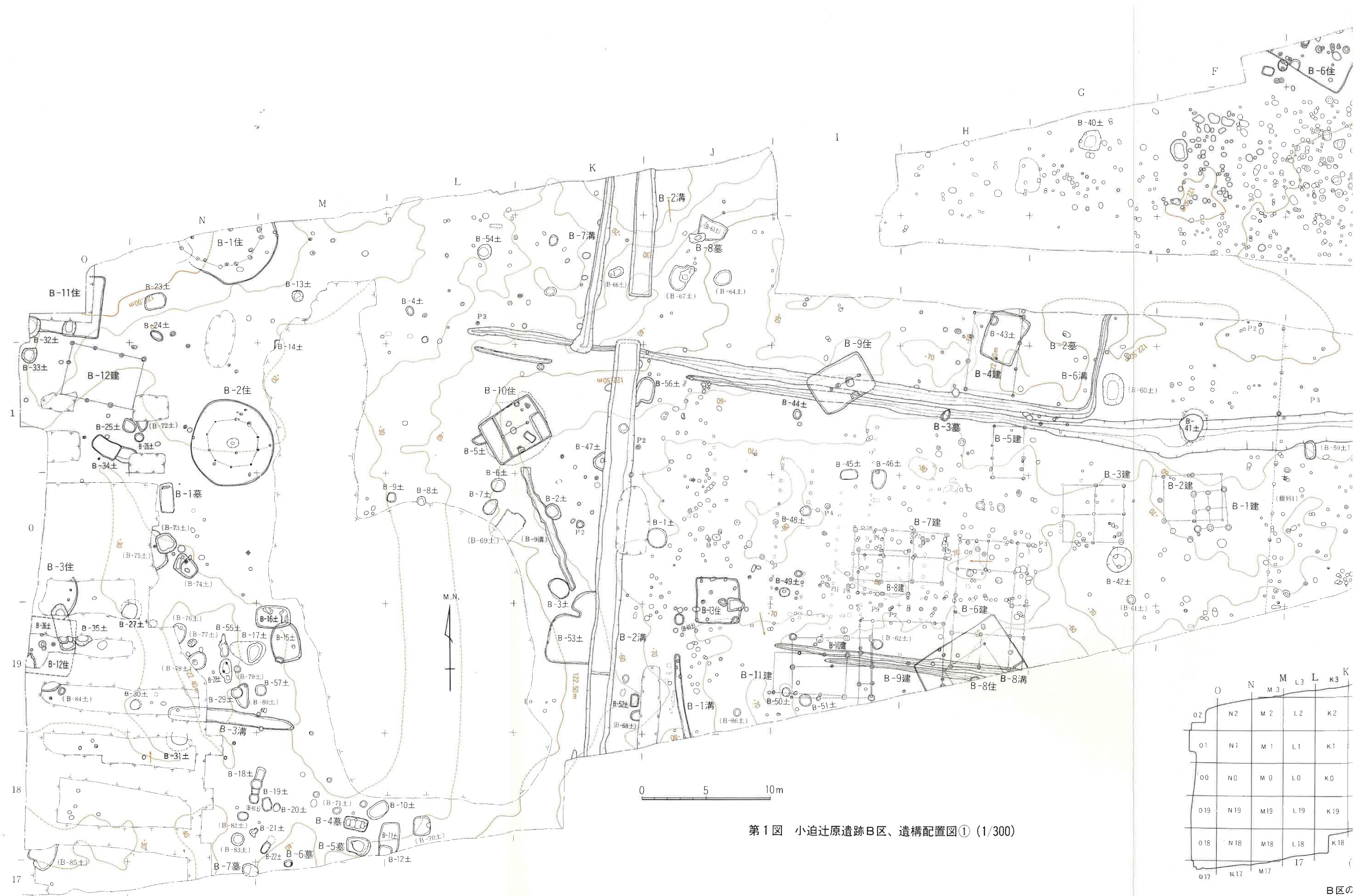
調査風景（1987年）



B区的位置



B区中世館跡全景



第1図 小迫辻原遺跡B区、遺構配置図① (1/300)

B区の



第2図 小迫辻原遺跡B区遺構配置図②
 - 弥生時代前期後半～中期初頭 - (1/300)



第1節 B区の調査概要（第1図 一図版1～3）

B区は本調査時の旧A地区と旧D地区である。調査区の中央にあたり、現状は大部分が畑であった。西から三分の一あたりまでは、かつて日田市西部地区養蚕組合稚蚕共同飼育所の跡地で、その建物基礎の掘削のためにかなり大規模な攪乱を受けていた。しかし全体に耕地整理などによる削平は少なく、C区にくらべて遺構の保存状態はよく、弥生時代の竪穴住居跡も竪穴部分まで遺存していた。

地形は全体に南側が高く、北と西にいくにしたがって低くなる。しかし西部分では本来伸びていたはずの近世の畑地境界溝が途中で削平されて途切れている（B-5・6・8溝）。したがって西側に低くなる現状の地形は、1960年代の耕地整理によるもので、近世までは東西の高低はそれほど変わらなかったと推定される。また北側特に旧D地区北部と旧A地区が低いのは、遺憾ながら調査時の表土剥ぎと遺構検出作業が深すぎたためであって、地形の実際を反映していない。したがって南北の高低差も本来それほどなかったものと推定される。

B区では現地地形の上面で、明らかに自然が生み出した凹みや現代の穴を除いて、竪穴住居跡13軒・掘立柱建物跡12棟、土壇86基、墓9基、溝9条とピット多数を検出した。このうち以下に報告する遺構は、出土遺物・切り合い関係・土質等により時期の判定が可能であったもののみである。文章のない遺構は章末の遺構一覧表を参照されたい（第1～5表）。

B区の遺構の時期別分布の特徴は、①A区と連続する弥生時代前期後半から中期初頭の遺構がまとまって検出されたこと。②弥生時代中期後半の遺構がかなり検出され、特に墓地の一角を発見したこと。③A区からつづく古墳時代前期前半の竪穴住居跡群が存在し、小迫辻原遺跡ではきわめて珍しい小児墓が検出されたこと。④A区の屋敷群よりも大規模な溝で区画した中世の掘立柱建物群が検出されたこと、⑤近世の畑地境界溝が多く存在すること、などである。しかし以上の時期以外の遺構は全く検出されない。これはA区と同様であり、ある特定の歴史的条件が揃った時代にもみ遺跡が形成されるという、この台地の遺跡立地の特徴を備えている。

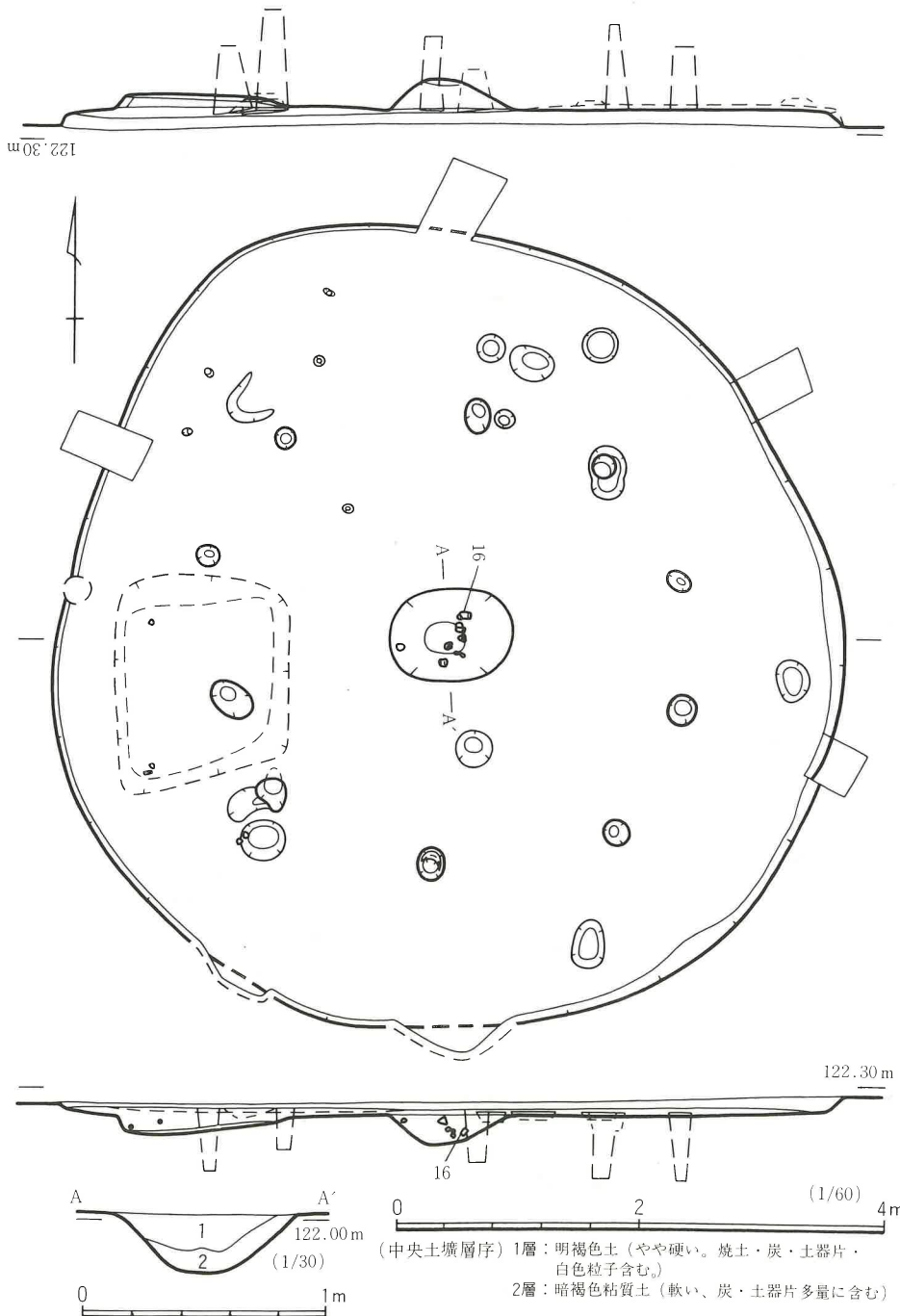


第3図 B区-1号竪穴住居跡（1/60）

第2節 弥生時代前期後半～中期初頭 (第2図)

この時期にあたる遺構は、竪穴住居跡3軒・土壇36基・墓1基を確認した。ほかにピット3本を本文に掲載した。この時代のピットはまだ存在するであろうが、土器を含まないために区別できなかった。

遺構の配置は、第2図をみると明白なようにB区の西半分に集中する。前記したようにこの時期の遺構の集中する西半分は、最近の削平と攪乱が最も激しい部分であり、さらに多くの遺構が存在した可能性は高い。一方削平の少ない東半分では、この時期の遺構が検出されなかったため、遺構の分布がB区の東半分にまで及ばないことも明らかである。つまりA区から連続する弥生時代前期後半から中期初頭の遺構の分布はB-1土壇があるIラインを東限とするとみられる。



第4図 B区-2号竪穴住居跡 (1/60、1/30)

なお弥生時代前期後半から中期初頭としたこの時期は、北部九州の土器編年と比較した場合、次の三期すなわち板付Ⅱ式の新しい段階、前期末段階、中期初頭の城ノ越式段階におおよそ対応すると考えられる。以下の本文中では板付Ⅱ式の新しい段階にあたる時期を「弥生時代前期後半」、前期末段階を「弥生時代前期末」、中期初頭の城ノ越式段階を「弥生時代中期初頭」と表現することにする。

1) 竪穴住居跡 (第1・6・8表)

検出された三軒の竪穴住居跡が、A区の竪穴住居跡の検出状態と異なる点は、①A区よりも遺構の削平の程度が浅いために保存状態がよく、竪穴部分が遺存していたこと。②重複する竪穴がないことである。

B区-1号竪穴住居跡 (第3図 一図版4)

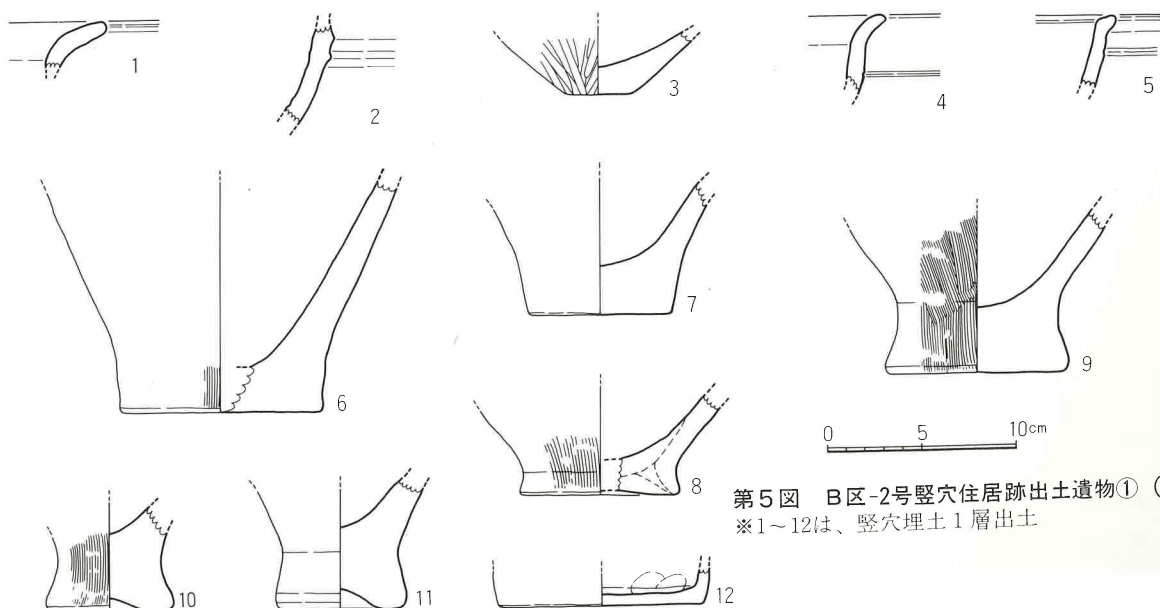
B区北端で南半分のみを検出した円形竪穴建物で、柱穴は6本検出した。柱穴の大きさはよく揃うが、深さは不揃いである。竪穴部分の西半が消失しているた

め、正確に測定ことはできなかったが、径850cm前後で、床面積も50㎡前後の大型竪穴建物と推定される。検出面からの深さは10cmに満たない。床面は貼り床である。削平が激しく深さ数cmを確認したのみだが、埋土は遺物をわずかに含む黄褐色土である。土器は細片が点在するのみで図示できないが、刻目のある壺の口縁部の小片と、打製石斧らしい石片が出土している。竪穴が円形であることとその柱構造の類似、それにその壺小片から、この時期の遺構と認定した。(旧D地区竪穴住居27)

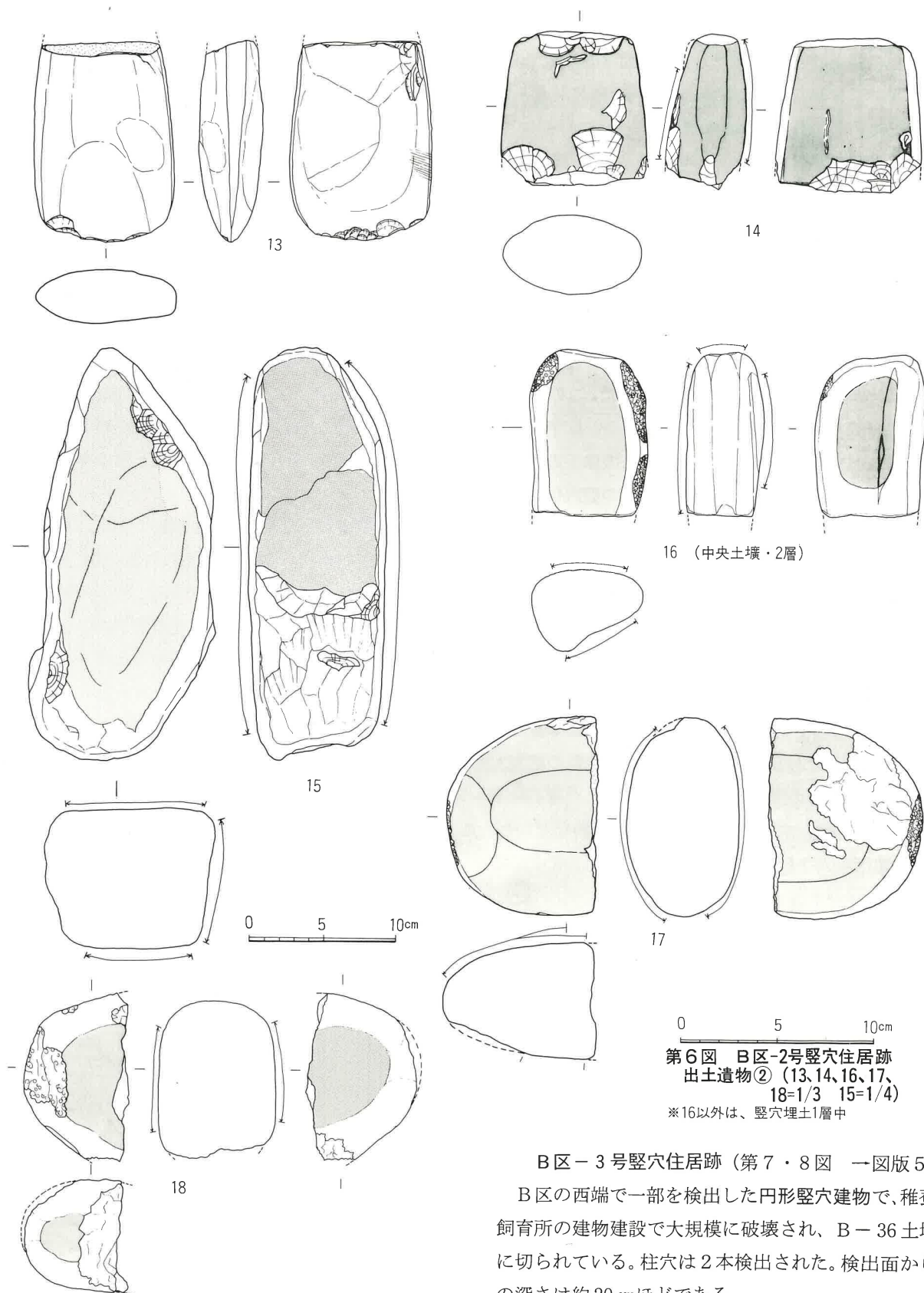
B区-2号竪穴住居跡(第4~6図 一図版4・37)

B-1住の真南で検出した10本柱の円形竪穴建物である。竪穴部分の径は630~680cmで、検出面からの深さは約15cmほどである。柱穴の大きさは細く揃うが、深さは不揃いである。また10本の支柱穴の外側に浅いピットが約3mの間隔で5本検出されたが、建物構造と関わりがあるかどうかは不明である。床面積は32.6㎡である。中央に炭片と焼土・土器片を含む暗褐色土(第4図2・1層)が堆積した長円形の中央土壌がある。底面に焼土面はないので、灰を利用した炉であったと考えられる。内部には土器の小片と礫が混入し、その中には甕の底部小片や半分に折れた16の磨石が入っていた。この竪穴廃絶時に廃棄されたものと推定される。そして床は貼り床で、同じ土が柱穴の埋土にも用いられている。床下に方形土壌が1箇所検出されたが、上面に貼り床がおこなわれたうえに柱穴が検出されているので、この床下の土壌は建設時の底の凸凹の一部であろう。中央土壌の存在とその規模からみて、この竪穴建物は居住用の竪穴住居とみられる。

埋土は炭片・土器片と1~2cm大の黄色土ブロックを多量に含む暗褐色土の単一層(1層)である。遺物はいずれも小片で、大部分は床面からやや浮いた状態で出土した。1~3の壺片、4~11の甕片、12の底部片や、13~15・17・18の割れた石器が検出された。いずれの土器も小破片で、石器もほとんど破片である。竪穴廃絶後、この竪穴は生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。1層の廃棄遺物には土器と石器があり、土器は甕の底部片が多い。1・2・3は壺の破片で、2は胴部に浅いM字突帯の付く小型の壺B、3は丁寧なミガキを施した小型の壺で、胎土に金雲母を含み搬入品の可能性がある。4・5は如意形口縁に沈線を施す甕A、6~11は甕の底部片で大小がある。大部分は被熱している。12は器種不明の土製容器の底部片で、被熱している。3以外はいずれも胎土は在地産である。石器には、13の砂岩製の磨製大型蛤刃石斧の刃部と14の基部がある。15はかなり破損しているがほぼ完形の安山岩製石皿、16の折れた磨石はホルンフェルス製、17・18は割れた磨石とともに安山岩製、とくに17は被熱して割れている。以上の土器などから、この竪穴住居跡の廃絶時期は弥生時代前期末とみられる。(旧D地区竪穴住居23)



第5図 B区-2号竪穴住居跡出土遺物①(1/4)
※1~12は、竪穴埋土1層出土

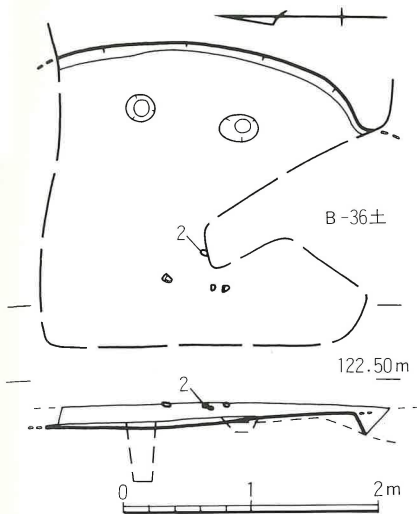


第6図 B区-2号竪穴住居跡
出土遺物② (13,14,16,17、
18=1/3 15=1/4)
※16以外は、竪穴埋土1層中

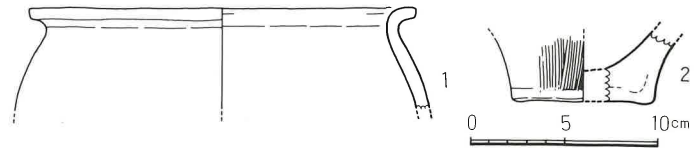
B区-3号竪穴住居跡 (第7・8図 一図版5)

B区の西端で一部を検出した円形竪穴建物で、稚蚕飼育所の建物建設で大規模に破壊され、B-36土壌に切られている。柱穴は2本検出された。検出面からの深さは約20cmほどである。

埋土は炭片と黄色土ブロックの小粒子を多量に含む暗黄褐色土の単一層(1層)である。遺物はいずれも小片で、大部分は床面からやや浮いた状態で出土した。1の甕口縁部片や2の底部片である。どちらも在地産で、2は被熱している。この土器から、竪穴住居跡の廃絶時期は弥生時代前期末とみられる。(旧D地区竪穴住居29)



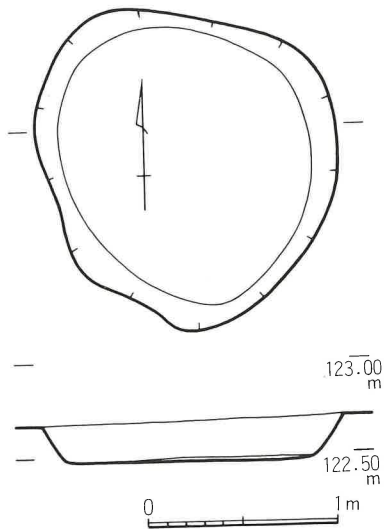
第7図 B区-3号竖穴住居跡 (1/60)



第8図 B区-3号竖穴住居跡出土遺物 (1/4)

2) 土壌 (第3・6~8表)

C区と同じく①小型円形 (A)、②大型円形 (B)、③小型方形 (A5)、④長円形 (C)、⑤船底形 (D)、⑥長方形 (E)、⑦形の定まらない不定形 (F) の7種類が存在する。



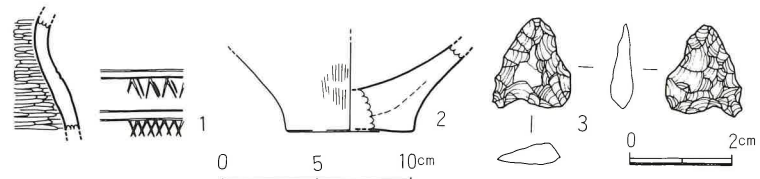
第9図 B区-1号土壌 (1/40)

B区-1号土壌 (第9・10図 一図版5・37)

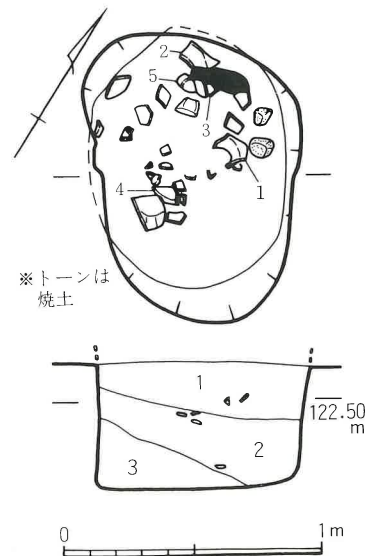
大型円形の土壌で、底面は平坦である。規模は長軸長175cm、短軸長160cm、検出面からの深さ25cmである。底部しか残っていないため断面形態はよくわからないが、平面形と規模からみて貯蔵穴の可能性が高い。埋土は炭片・円礫と土器片を含む暗黄褐色土の単一層 (1層) である。遺物はいずれも小片で、大部分は底面からやや浮いた状態で出土した。1の沈線にヘラ描き文様を施す壺Aの破片は、B-3土壌の3層遺物一括廃棄の1の壺片と同一個体である。2は被熱した壺あるいは甕の底部、3は姫島産黒曜石製の打製石鏃で、未製品の可能性がある。この土器から、この土壌の廃絶時期は弥生時代前期末とみられる。(旧D地区土壌471)

B区-2号土壌 (第11・12図 一図版5・37)

小型長円形の袋状の土壌で、B-9溝に切られている。その規模は長軸長122cm、短軸長84cm、検出面からの深さは50cmである。底面は平坦である。その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。埋土は三層に分かれ、2層に遺物一括廃棄がおこなわれている。まず均質で何も含まない暗黄褐色の3



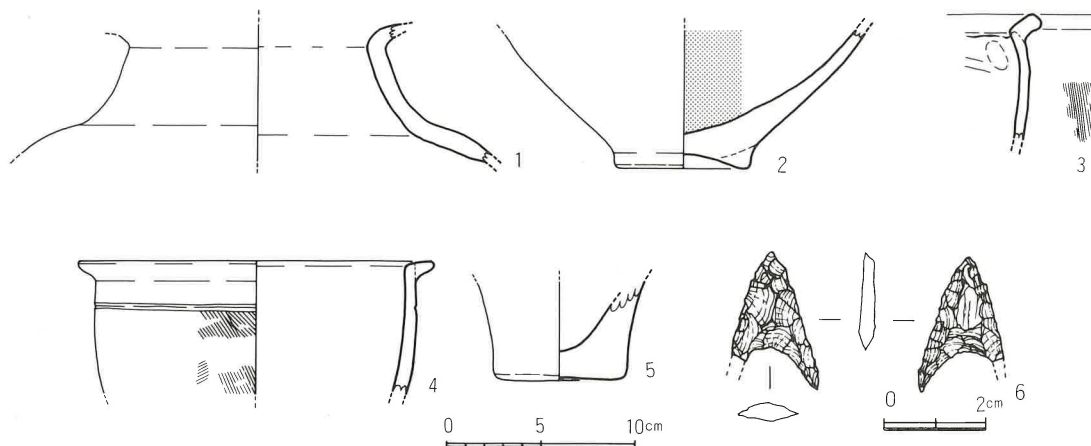
第10図 B区-1号土壌出土遺物 (1・2=1/4, 3=2/3)



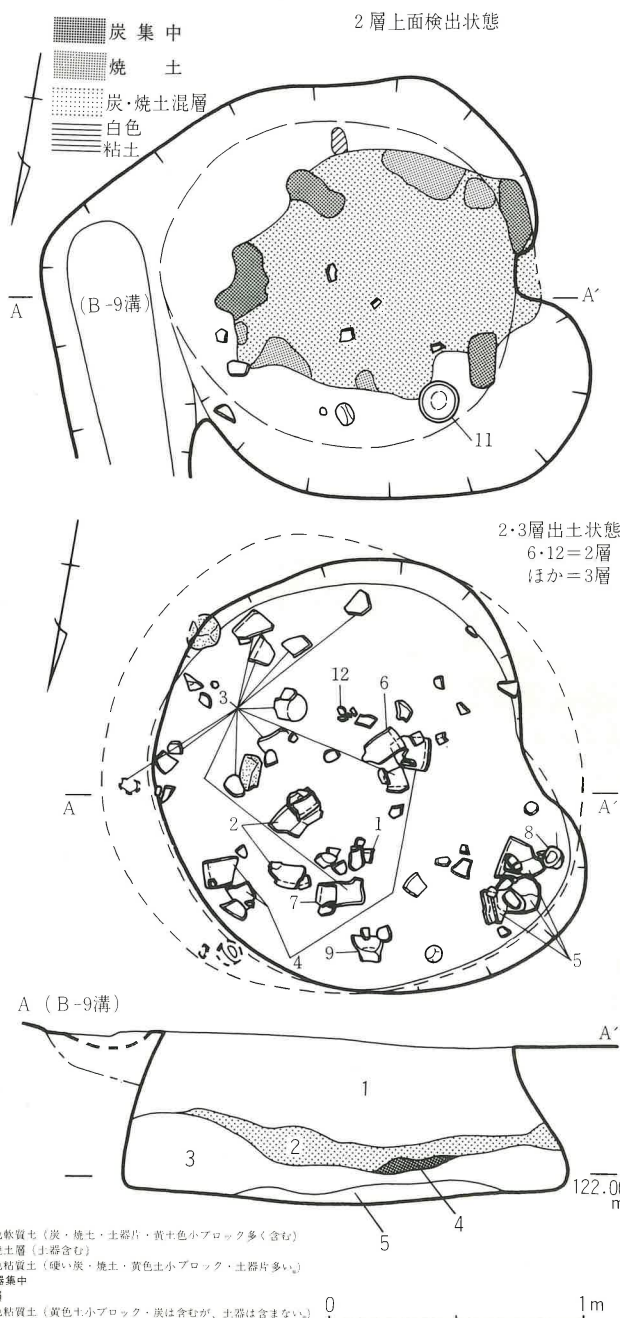
※トーンは焼土

1層：暗黄褐色軟質土 (炭・土器片少しと黄色土小ブロック多量に含む)
2層：暗褐色軟質土 (炭・焼土・土器片多く含む)
3層：暗黄褐色軟質土 (均質で何も含まない)

第11図 B区-2号土壌 (1/30)



第12図 B区-2号土坑出土遺物 (1~5=1/4、6=2/3)

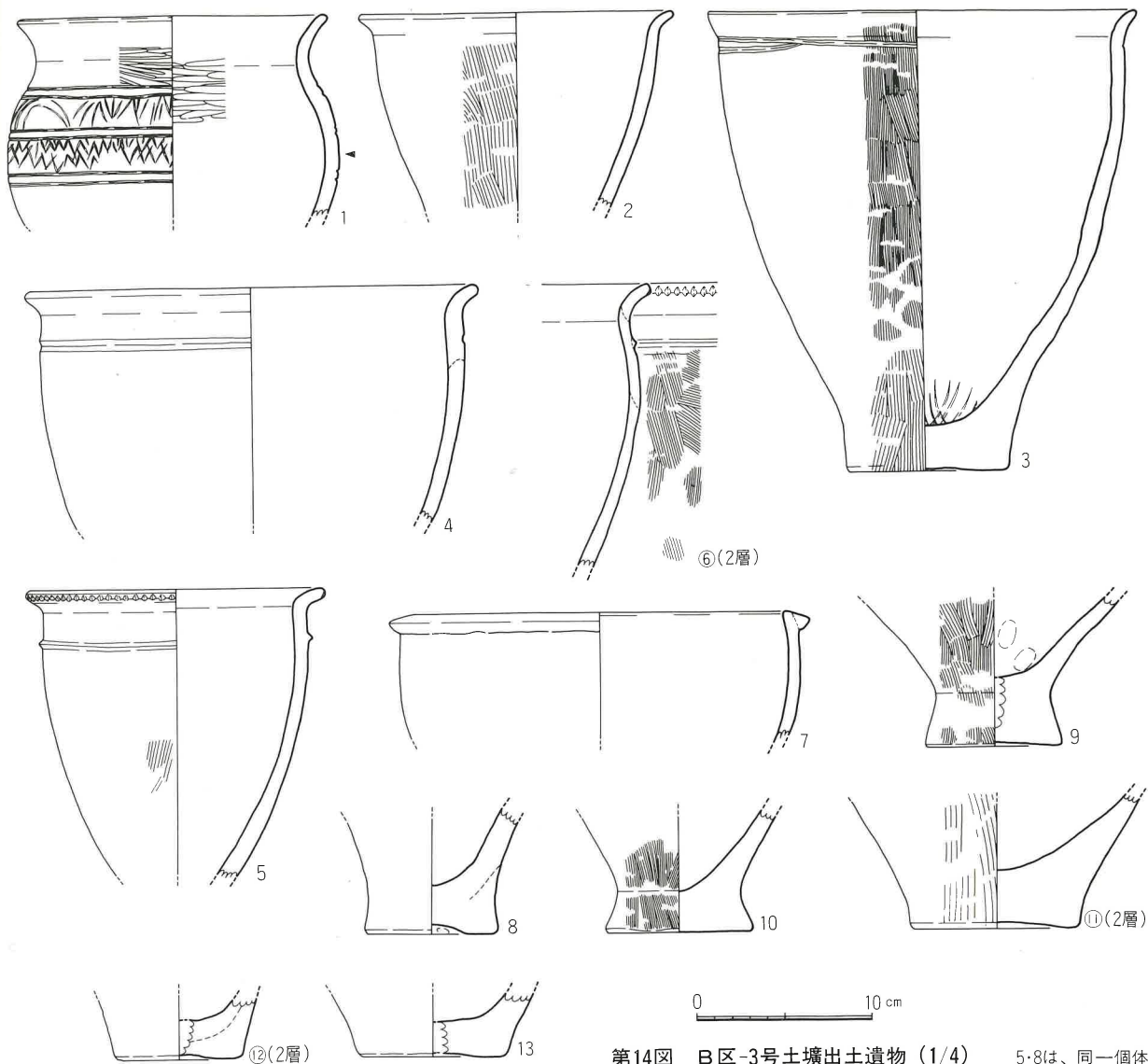


第13図 B区-3号土坑 (1/30)

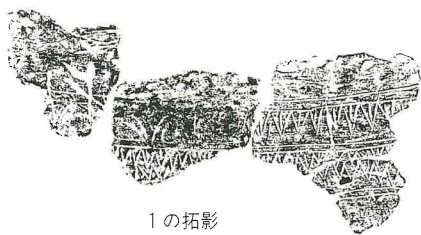
層が堆積する、その上に土器片を中心に炭・焼土・焼け小礫を多量に含む2層が堆積し、その中には白色の粘土も混じっている。いずれも西側から土砂が流れこんだ様子を示している。その堆積状態からみて3・2層は一連の廃棄で、その後1層が堆積して埋没している。2層の土器はいずれも小破片で、生活廃棄物を一気に捨てた可能性が高い。2層の一括廃棄遺物には土器と石器があり、土器は壺と甕がある。2は壺の底部で、3・4は逆L字形口縁の甕Cである。5は底部片で被熱している。6は脚の一部が破損した粘板岩製の無茎凹基の打製石鏃で軽量品。1層からは1の壺Aの頸部片が出土している。土器はいずれも胎土からみて在地産である。廃棄の時期は、以上の土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土坑467)

B区-3号土坑 (第13・14図一図版6・37)

大型円形の袋状土坑で、底面中央がやや凹むがおおむね平坦である。規模は長軸長200cm、短軸長183cm、検出面からの深さは67cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。土坑の底部中央には、貯蔵穴として使用中に堆積したと思われる無遺物の5層が広がり、その上に3層と2層に一連の遺物一括廃棄が認められる。まず底面全体に炭・焼土・黄色土ブロックを多量に含む3層が堆積する。この層はわれた完形品や大型破片のままの土器や円礫を含んで硬い。土器は1の壺が割れて中央にある。ただし底部の破片はなく、胴部の破片の一部は近接するB-2土坑に廃棄されていた(第5図1)。2~5・7~10・13の甕はいずれも大型破片で廃棄され、3はばらばらに検出されたが完形に復元できた。5と8も同一個体で土



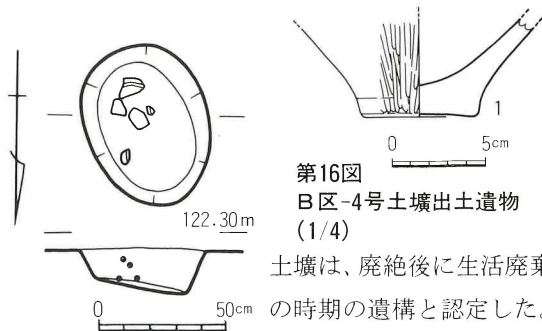
第14図 B区-3号土壇出土遺物(1/4) 5・8は、同一個体



1の拓影

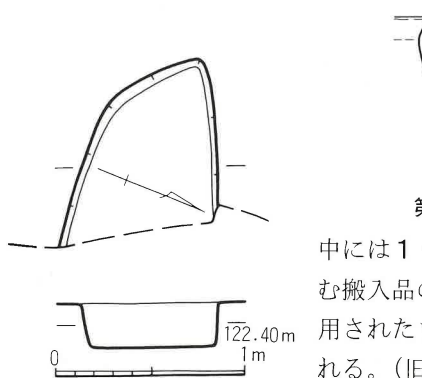
壇の隅に破片が重なるように検出された。1の壺以外はすべて被熱している。次に4層の焼土が廃棄されたのち、炭と焼土の混層である2層が、白色粘土と土器片とともに廃棄されている。3層に比べると土器片の量はかなり少なく、6の甕口縁部片と11・12の甕底部片が目立つ程度である。以上の遺物一括廃棄層は、3層に炭片や黄色土ブロックをかなり含む点、炭や焼土の集中が明確に認められる点と大量の廃棄が間層を挟まずに連続する点などからみて、一連の廃棄行為の結果であり、土器の出土状態からみて1の壺を含む数個体の甕を使用した祭祀行為がおこな

れた可能性が高い。そして最後に炭・焼土・黄色土ブロックを多量に含む1層が土壇をふさぐように堆積する。基盤層に由来する黄色土ブロックを多量に含む点から短期間に堆積したことは明白で、遺物一括廃棄をともなう祭祀ののち埋め戻された可能性が高い。出土土器はほとんど在地産で、12の甕底部のみが金雲母を含む胎土を使用した搬入品である。1はへら描き文様を施す壺A、2～4は甕Aで一条沈線がめだつ。5・6は突帯を施す甕B、7は逆L字口縁の甕C、9～13は甕の底部。1と2を除きほかの土器はすべて被熱している。土器廃棄の時期は、出土土器からみて弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壇466)



第15図 B区-4号土壌 (1/30) B区-5号土壌 (第17・18図一図版6・38)

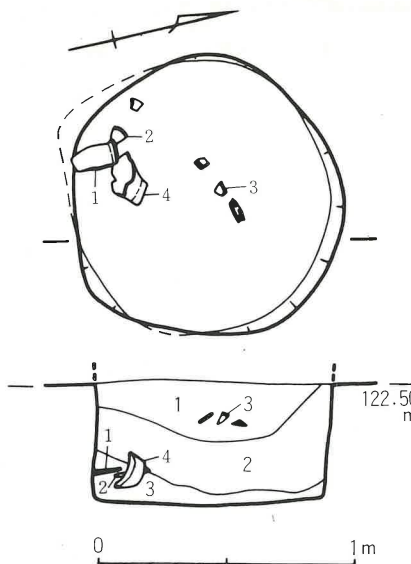
不定形の土壌で、B-10住(古墳時代前期前半)に切られている。底面は平坦である。その規模は長軸長124cm以上、短軸長75cm以上、検出面からの深さは23cmである。その用途は不明である。埋土は炭・焼土と土器の小片を含む暗褐色土の単一層(1層)で、その



第17図 B区-5号土壌 (1/40)

B区-6号土壌 (第19・20図一図版7)

大型円形の竪穴状土壌である。規模は長軸長120cm、短軸長110cm、深さは50cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であった可能性が高い。埋土は三層に分かれ、2層下部に遺物一括廃棄が認められる。まず暗褐色の

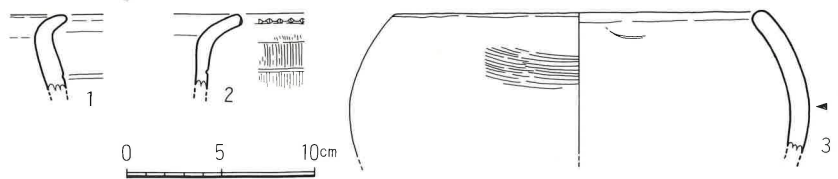


- 1層：暗黄褐色硬質土(炭片・土器片含む。)
- 2層：暗褐色硬質土(炭・土器片・黄色土小ブロック少し含む。)
- 下部に土器集中
- 3層：暗褐色土(炭・黄色土ブロックを多く、土器片も含む。)

第19図 B区-6号土壌 (1/30)

B区-4号土壌 (第15・16図一図版6・38)

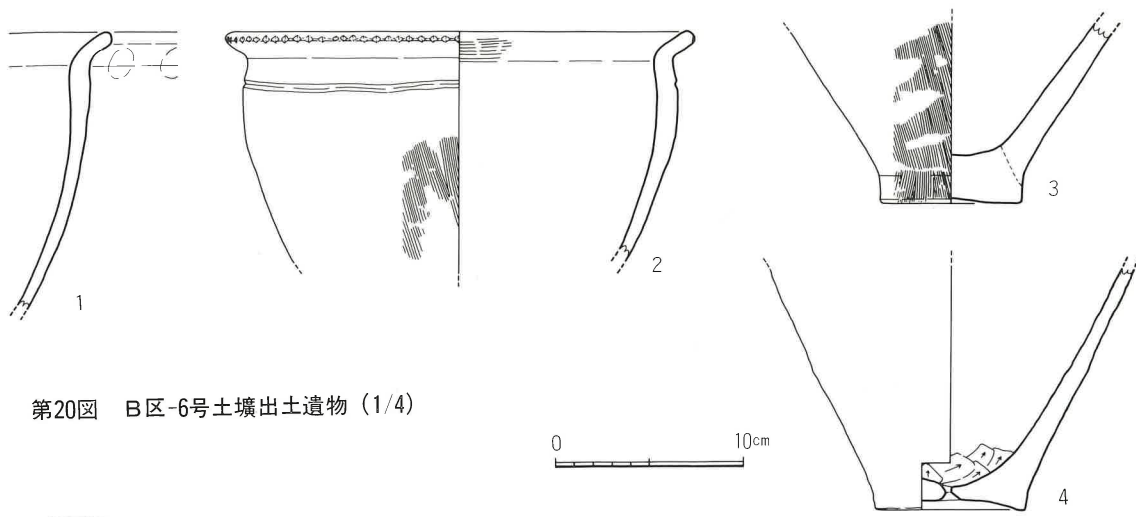
小型長円形の土壌で、底面は皿状である。規模は長軸長64cm、短軸長48cm、検出面からの深さは18cmである。その用途は不明である。埋土は炭片と土器小片を含む暗褐色土の軟らかい単一層(1層)で、その中には1の壺底部片が含まれていた。この土壌は、廃絶後に生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。その土器から、この時期の遺構と認定した。(旧D地区土壌408)



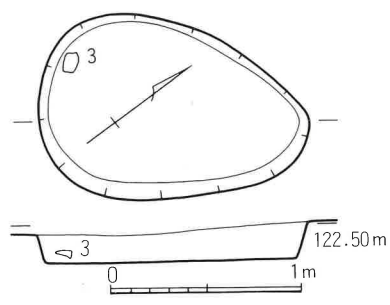
第18図 B区-5号土壌出土遺物 (1/4)

中には1・2の甕片と3の鉢の口縁片が含まれていた。甕はいずれも胎土に金雲母を含む搬入品の甕Aである。遺物の出土状態からみて、廃絶後に生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。土壌廃絶の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌409)

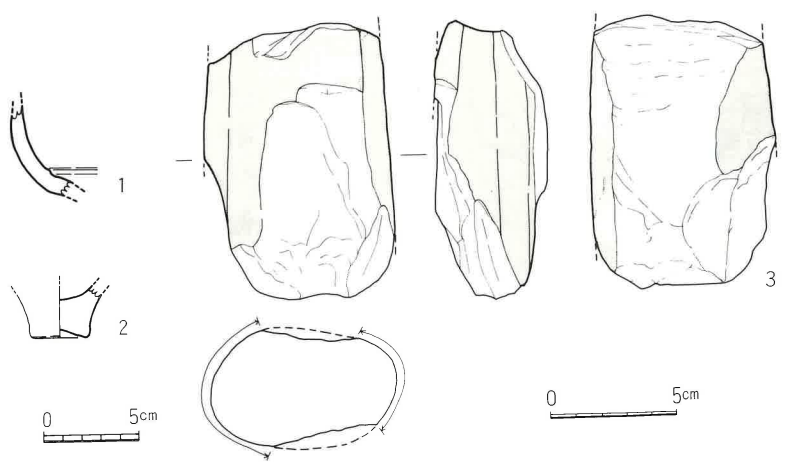
3層が堆積する。この層は炭片と黄色土ブロックを多量に含まれ、別の穴を掘る際の排出土を捨てたような状態であった。次に暗褐色の硬い2層が堆積するが、それに先立って土器片が廃棄されている。1・2の甕口縁部の大型破片、4の底部に穿孔のある甕の破片が一箇所に集中して検出され、一括廃棄されたものと見られる。そして最後に炭と土器小片をわずかに含む1層が堆積する。3は1層出土の甕底部片である。以上の埋没状態から、貯蔵穴の作り替えに際して新しく排出された土砂と土器を一括廃棄し、その後生活廃棄物の捨て場所になったものと推定される。その際に祭祀行為があったかどうかは、土器の出土状態からは判然としない。出土土器はいずれも在地産の胎土を用い、4は被熱していた。1・2は甕Aで、2は一条沈線を施す。4は底部に穿孔して甑に転用した甕である。土壌埋没の時期は、出土土器からみて弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌462)



第20図 B区-6号土壌出土遺物 (1/4)



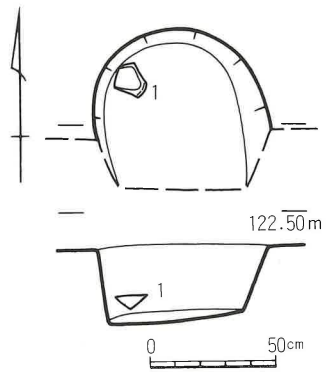
第21図 B区-7号土壌 (1/40)



第22図 B区-7号土壌出土遺物 (1・2=1/4, 3=1/3)

B区-7号土壌 (第21・22図 一図版7・38)

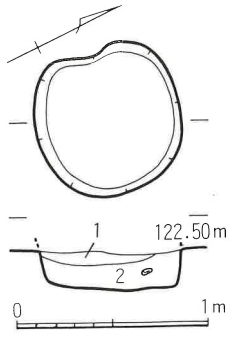
不定形の土壌で、規模は長軸長144cm、短軸長96cm、深さは22cmである。底面が平坦なので何らかの目的をもつ土壌であるが、その用途は不明である。埋土は硬くしまった粘質の強い暗褐色土の単一層(1層)で、その中には1の壺片や2の小型甕の底部片と、3の磨製石斧の破片などが含まれていた。また基盤層に由来する小礫を多く含み、別の土壌からの排出土を廃棄したと推定される。1は削りだし突帯の壺B、2はミニチュア土器の可能性もある。3の石斧は福岡市今山産の可能性のある玄武岩製。土壌廃絶の時期は、以上の出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌461)



第23図 B区-8号土壌 (1/30)

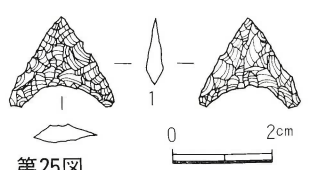
B区-8号土壌 (第23図 一図版7)

小型円形の土壌で、南半分は攪乱坑によって破壊されている。底面は平坦だが傾斜がある。規模は長軸長75cm以上、短軸長67cm、深さは31cmである。用途は不明である。埋土は炭・焼土・1~2cm大の黄色土ブロックと土器の細片を多量に含む暗褐色土の単一層(1層)で、硬く粘質が強い。その中には甕の底部片が含まれていたが保存状態が悪く図示できない。遺物の出土状態からみて、廃絶後に生活廃棄物の捨て場所に転用されたと推定される。土壌の時期は、出土土器からこの時期と認定した。(旧D地区土壌463)



1層：暗黄褐色土(炭・焼土・小円礫・白色砂礫多く含む)
2層：暗褐色軟質土(炭・焼土・土器片含む)

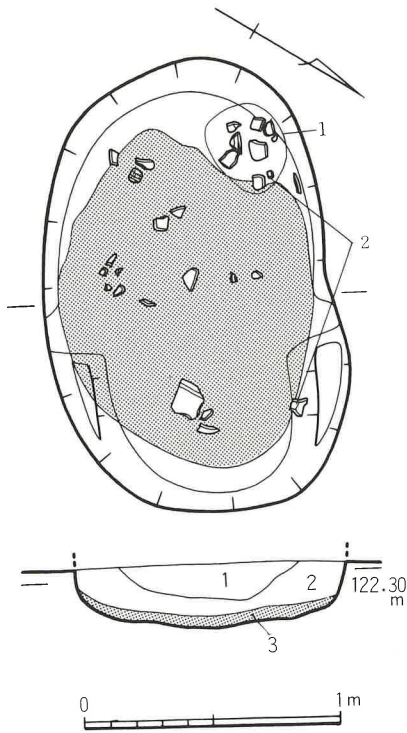
第24図 B区-9号土壌 (1/40)



第25図 B区-9号土壌出土遺物(2/3)

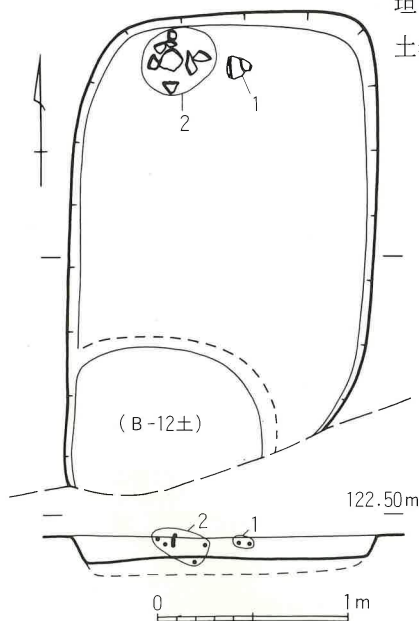
B区-9号土壌 (第24・25図一図版7・38)

小型円形の土壌で、規模は長軸長83cm以上、短軸長70cm、検出面からの深さは27cmである。底面が平坦なので小型の貯蔵穴の可能性もある。埋土は二層に分かれ、炭・焼土・土器細片を



- 1層：暗黄褐色粘質土（炭・焼土・土器片を少し含む。）
- 2層：暗褐色軟質土（炭・焼土・土器片多く含む。）
- 3層：黒褐色土＝炭層（1～2cm大の焼土片を含む。）

第26図 B区-10号土壙 (1/30)

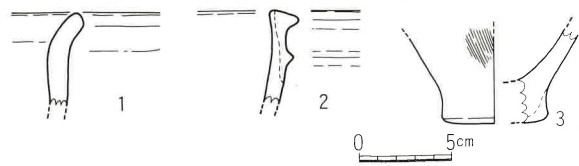


第28図 B区-11号土壙 (1/40)

ともに火を受けて赤く焼けていた。土壙廃絶直後に土器を一括廃棄したものと推定される。出土土器は、1・2とも在地産で、2は甕の底部を穿孔して甑に転用したものである。土壙の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壙 468)

B区-13号土壙 (第32・33図 一図版8・38)

小型円形の土壙で、底は皿状である。規模は長軸長98cm、短軸長87cm、深さは30cmである。用途は不明であ



第27図 B区-10号土壙出土遺物(1/4)

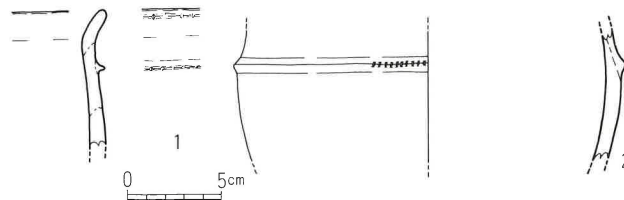
る。廃絶後に生活廃棄物の捨て場所に転用されたと推定される。土壙の時期は出土土器からこの時期と認定した。(旧D地区土壙 464)

B区-10号土壙 (第26・27図 一図版7)

長円形の土壙で、底面は皿状でやや凸凹している。規模は長軸長177cm、短軸長112cm、深さは26cmである。用途は不明である。3層から1層までは使用停止後の堆積層で、埋没状態の特徴は底面に焼土と炭の廃棄層(3層)が認められることである。この3層は黒褐色の炭層で、1～2cm大の焼土粒子を多量に含むが、土器等は一切含まない。その上の2・1層は炭片・焼土片と土器片を含み、上部になるほど混入量は少なくなる。そこには1～3の甕の破片などが散在していた。土壙使用停止直後に何らかの焼却廃棄物を一括廃棄したものと考えられる。土器からみて埋没の時期は弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壙 463)

B区-11号土壙 (第28・29図 一図版8)

長方形と推定される土壙で、南端をB-12土壙に切られている。底面はおおむね平坦である。規模は長さ290cm、幅162cm、深さは20cmである。底面が平坦なので何らかの目的をもつ土壙であるが、用途は不明である。埋土は炭片と土器片を含む黒褐色土の単一層(1層)で、1・2の甕片が含まれていたほかに、甕の底部片も出土した。1・2は突帯を施す甕B。廃絶直後に廃棄されたもの



第29図 B区-11号土壙出土遺物(1/4)

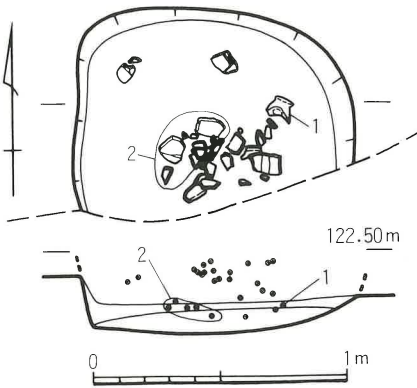
である。土壙廃絶の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壙 464)

B区-12号土壙 (第30・31図一図版8)

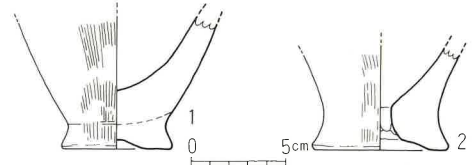
不定形の土壙で、南半分は調査区外にのびB-11土壙を切っている。底面は皿状で、規模は長軸長115cm、短軸長84cm以上、深さは23cmである。埋没状態の特徴は遺物一括廃棄があることである。層序の観察をおこなっていないので詳細は不明であるが、1・2の甕下半が割れた状態で中央に集中して検出された。いずれも比較的大型の破片だが完形には復元できず、

る。埋土は三層に分かれ、2層に遺物一括廃棄が認められる。まず暗茶褐色粘質の硬い3層が堆積する。土器をはじめ炭・焼土も含まないので基盤層の掘りすぎかもしれない。次に土器片と炭片を多量に含む暗褐色の2層が堆積する。土器の大型破片と円礫が重なって中央部に検出された遺物一括廃棄層である。1・

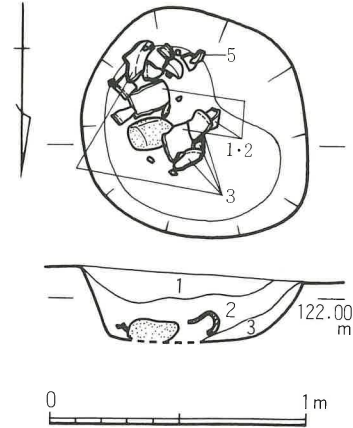
2の壺は同一個体だが、胴部の破片がなく、3の甕も大型破片が重なったように検出された。復元すると完形に近くなるが底部がない。この甕は、胎土に金雲母を含む搬入品である。さらに4・5の甕破片と6の破損した石鏃がを含む他に、B-14土壌出土の2・3(第35図)の破片が含まれていた。そして最後に炭・焼土と土器小片をわずかに含む1層が堆積する。出土土器は3を除き、いずれも在地産の胎土を用い、甕はすべて被熱していた。1・2は口縁部が逆L字口縁の壺Cである。3は一条沈線の甕Aで、4は逆L字口縁の甕C。6は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。土壌埋没の時期は、出土土器からみて弥生時代中期初頭と推定される。(旧D地区土壌407)



第30図 B区-12号土壌(1/30)

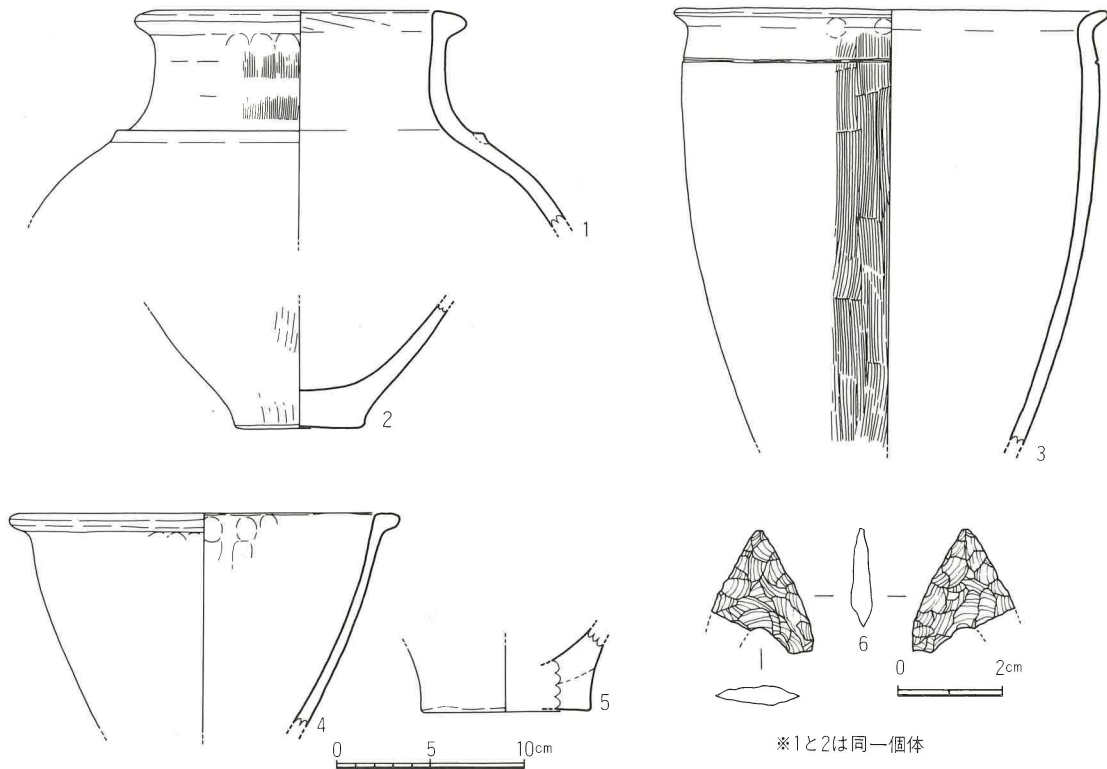


第31図 B区-12号土壌出土遺物(1/4)

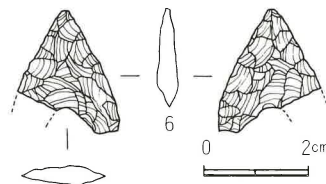


1層：明茶褐色土（サラサラした土・焼土・炭と土器片を少し含む。）
 2層：暗褐色粘質土（やや硬い。土器と炭を多量に含む。）→土器集中
 3層：暗茶褐色粘質土（硬い）→地山か？

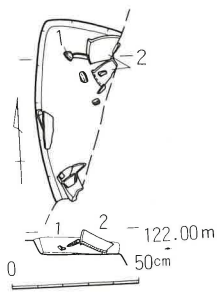
第32図 B区-13号土壌(1/30)



第33図 B区-13号土壌出土遺物(1~5=1/4、6=2/3)

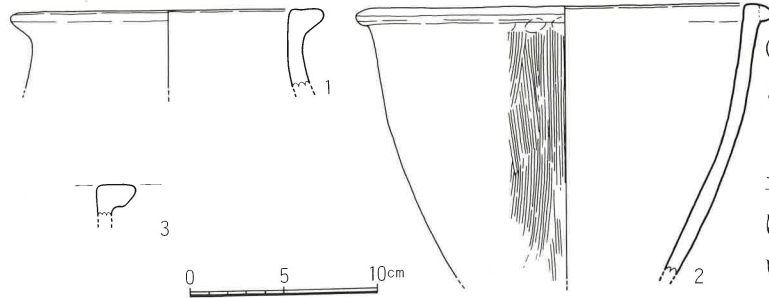


※1と2は同一個体



第34図

B区-14号土壌 (1/30)



第35図 B区-14号土壌出土遺物 (1/4)

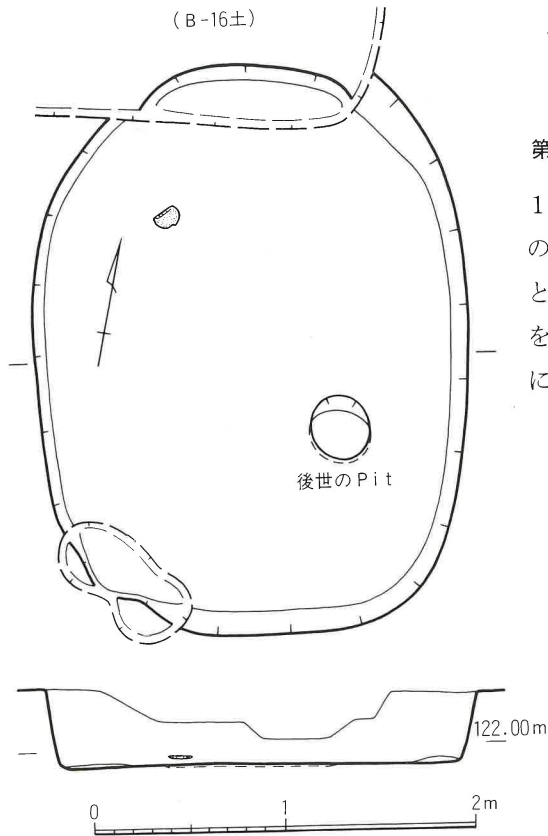
B区-14号土壌
(第34・35図 一図版
8・38)

方形と推定される
土壌で、大半が攪乱坑
によって破壊されて
いる。規模は長軸長71
cm、短軸長31 cm以上、
深さは約8 cmである。底
面が平坦なので何らかの

目的をもつ土壌である
が、その用途は不明であ
る。埋土は単一で、その

第37図 B区-15号土壌出土遺物 (1/4)

1層に遺物一括廃棄があり、B-13土壌出土土器と接合するものが多い(2・3)。土器はいずれも大型破片で検出され、壺甕とも逆L字口縁のC類である。特に2の甕は胎土に金雲母・石英を含む搬入品で、かつ被熱している。以上の土器は土壌廃絶直後に一括廃棄されたとみられる。土器廃棄の時期は、出土土器から



第36図 B区-15号土壌 (1/40)

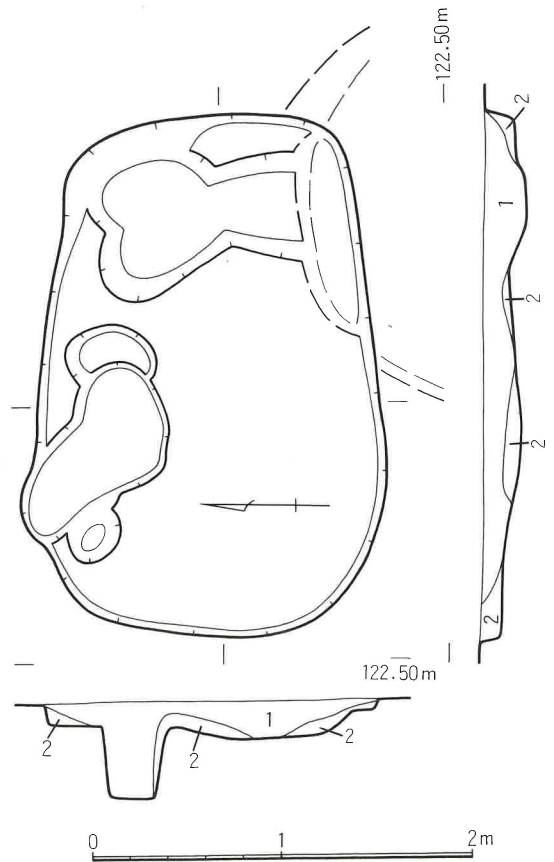
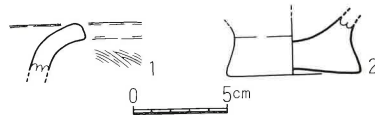
みて弥生時代中期初頭と推定される。(旧D地区土壌406)

B区-15号土壌 (第36・37図 一図版8)

長円形の大型土壌で、B-16土壌に北端を切られる。規模は長軸長313 cm、短軸長230 cm、深さは45 cmである。底面が平坦なので何らかの目的をもつ土壌であるが、その用途は不明である。埋土は炭片と土器片と多量の黄色土ブロックを含む暗黄褐色の単一層(1層)で、1・2の甕小片が含まれていた。黄色土ブロックを多量に含み遺物も少ない点から、廃絶直後に埋め戻されたと推定される。出土土器から土壌をこの時期と認定した。(旧D地区土壌457)

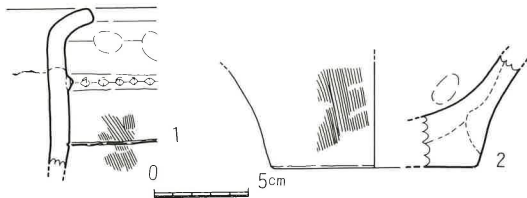
B区-16号土壌 (第38・39図 一図版8)

長円形の大型土壌で、B-15土壌の北端を切る。底面はかなり凸凹していて、用途は不明である。規模は長軸長235 cm、短軸



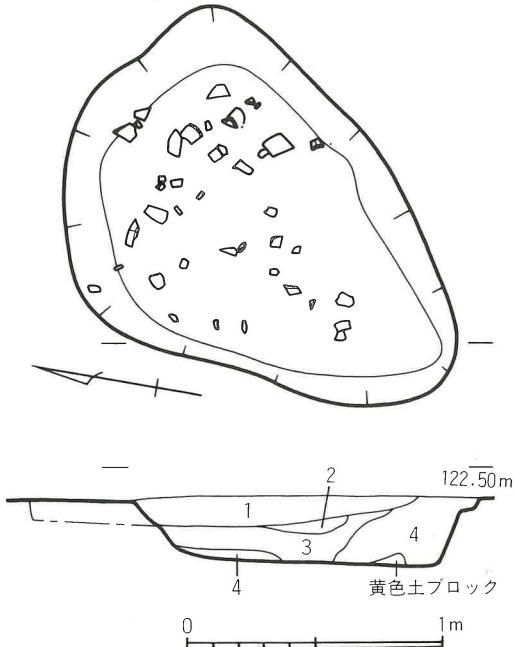
1層: 暗褐色土(やや粘質。焼土・炭・土器片・黄色土ブロック含む)
2層: 黄褐色土→地山の可能性高い。

第38図 B区-16号土壌 (1/40)



第39図 B区-16号土壌出土遺物 (1/4)

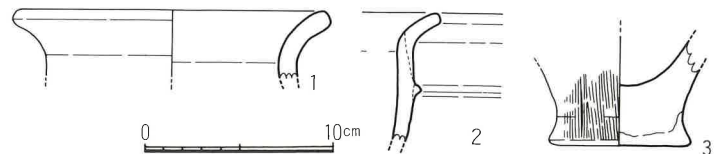
長187cm、深さは23cmである。埋土は炭片・土器片と黄色土ブロックを含む暗褐色の単一層（1層）で、1・2の甕小片が含まれていた。廃絶後、ゴミ捨て穴に利用されたものである。出土土器からこの時期と認定した。（旧D地区土壌442）



- 1層：明茶褐色土（サラサラした土・焼土・炭・小礫含み、土器片が多い。）
- 2層：暗茶褐色軟質土（炭・土器片含む。）
- 3層：暗褐色軟質土（焼土・炭・土器片多く含む。）
- 4層：明褐色土（焼土・炭・土器等何も含まない。）

第40図 B区-17号土壌 (1/30)

B区-17号土壌（第40・41図 一図版8）
N19調査区で検出された不定形の土壌で、底面は平坦だがやや傾斜する。規模は長軸長180cm、短軸長124cm、深さは29cmである。埋土は四層に分かれるが、4層が黄色土ブロックを含む無遺物の土砂廃棄層である。3層以上は炭・焼土・小礫・土器細片を多量に含む層で、廃絶後生活廃棄物の捨て場所に転用されたとみられる。土器はいずれも小片で、1は壺口縁片、2は突帯を施す甕Bで、3の底部は被熱している。いずれも胎土は在地産。土壌の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。（旧D地区土壌436）

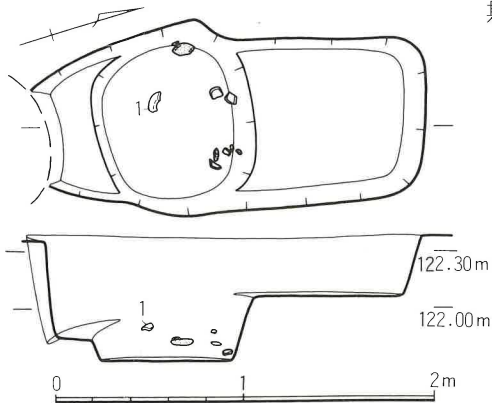


第41図 B区-17号土壌出土遺物 (1/4)

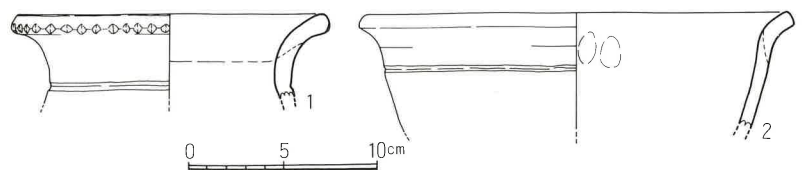
B区-18号土壌（第42・43図 一図版9）

N18・M18調査区で検出された小型円形の縦穴状土壌で、南北の段がついて大きく広がるが、あるいは別な土壌と重複しているかも知れない。底面は平坦で、その規模は長軸長208cm以上、短軸長104cm、検出面からの深さは66cmである。小型貯蔵穴の可能性はあるがはっきりしない。

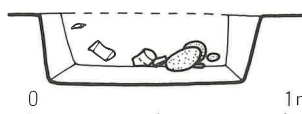
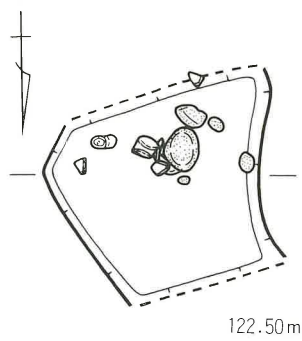
埋土は炭片と土器片と多量の黄色土ブロックを含む暗褐色の軟らかい単一層（1層）で、その層中には1の壺、2の甕の小片が含まれていた。黄色土ブロックを多量に含み遺物も少ない点から、廃絶直後に埋戻されたかと推定される。1・2はそれぞれ沈線を施す壺Aと甕Aで、いずれも在地産の胎土で2は被熱している。土壌の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。（旧D地区土壌448）



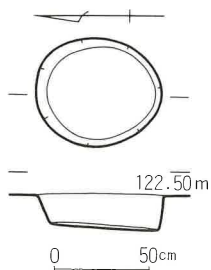
第42図 B区-18号土壌 (1/40)



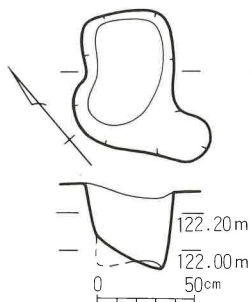
第43図 B区-18号土壌出土遺物 (1/4)



第44図 B区-19号土坑 (1/30)

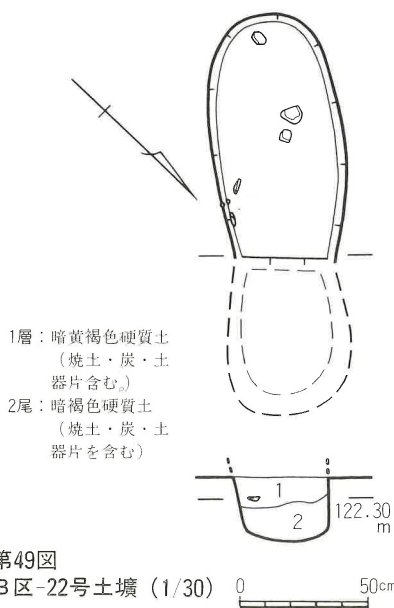


第46図 B区-20号土坑 (1/40)



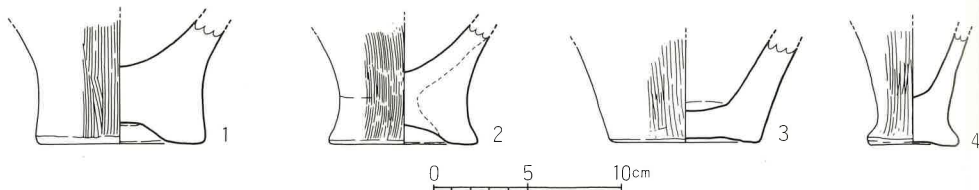
第47図 B区-21号土坑 (1/40)

N 18 調査区で検出された不定形の土坑で、底面は高低がある。規模は長軸長76cm、短軸長45cm、深さは48cmである。断面土層の観察をおこなっていないので埋没状態の詳細は不明であるが、内部から1の甕の底部が出土した。被熱が明瞭で、胎土は在地産である。その土器からこの時期の遺構と認定した。(旧D地区土坑460)



1層：暗黄褐色硬質土
(焼土・炭・土器片含む)
2層：暗褐色硬質土
(焼土・炭・土器片含む)

第49図 B区-22号土坑 (1/30)



第45図 B区-19号土坑出土遺物 (1/4)

B区-19号土坑 (第44・45図)

M18調査区で検出された不定形の土坑で、底面は平坦で、南北の境界は不明瞭である。規模は長軸長97cm、短軸長80cm以上、深さは31cmである。用途はまったく不明である。

埋土は二層に分かれ、下部に炭片を多量に含む暗褐色土(2層)が堆積し、その底部に土器片と礫の一括廃棄が認められる。そこに含まれる土器はいずれも底部の破片(1~4)で、埋没位置からみて底部片のみを廃棄したものと推定される。土器はいずれも在地産の胎土を用い、1と3は被熱が明瞭で、4はあるいは蓋かもしれない。土坑の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土坑449)

B区-20号土坑 (第46図)

同じくM18調査区で検出された小型円形の土坑で、底面はやや傾斜するが平坦である。規模は長軸長66cm、短軸長56cm以上、深さは19cmである。小型貯蔵穴の可能性もあるがはっきりしない。埋土は炭片と焼土を含む暗褐色の硬い単一層(1層)で、土器の小片が含まれていた。その土器からこの時期の遺構と認定した。(旧D地区土坑450)

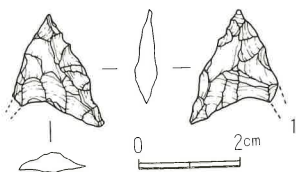
第48図 B区-21号土坑出土遺物 (1/4)

B区-21号土坑 (第47・48図)

B区-22号土坑 (第49・50図 一図版9・38)

M18調査区で検出された長円形の土坑で、底面は皿状である。規模は長軸長156cm、短軸長52cm、深さは25cmである。土坑墓の可能性もあるが明確ではない。

埋土は二層に分かれ、2・1層は炭・焼土・土器細片を含み、廃絶後生活廃棄物の捨て場所に転用されたとみられる。土器はいずれも小片で図示できるものはない。1の脚を破損したサヌカイト製打製石鏃が含まれていた。土器細片の質感からこの時期の遺構と認定した。(旧D地区土坑451)



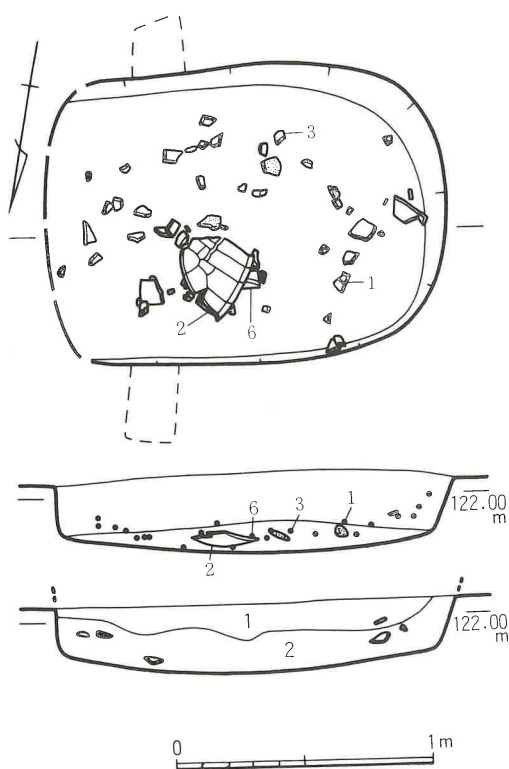
第50図 B区-22号土坑出土遺物 (2/3)

B区-23号土壙 (第51・52図 一図版9・38)

N2調査区で検出された長円形の土壙で、底面は浅い皿状である。規模は長軸長156cm、短軸長117cm、検出面からの深さは30cmである。用途は不明であるが、底面の2層に遺物一括廃棄が認められる。

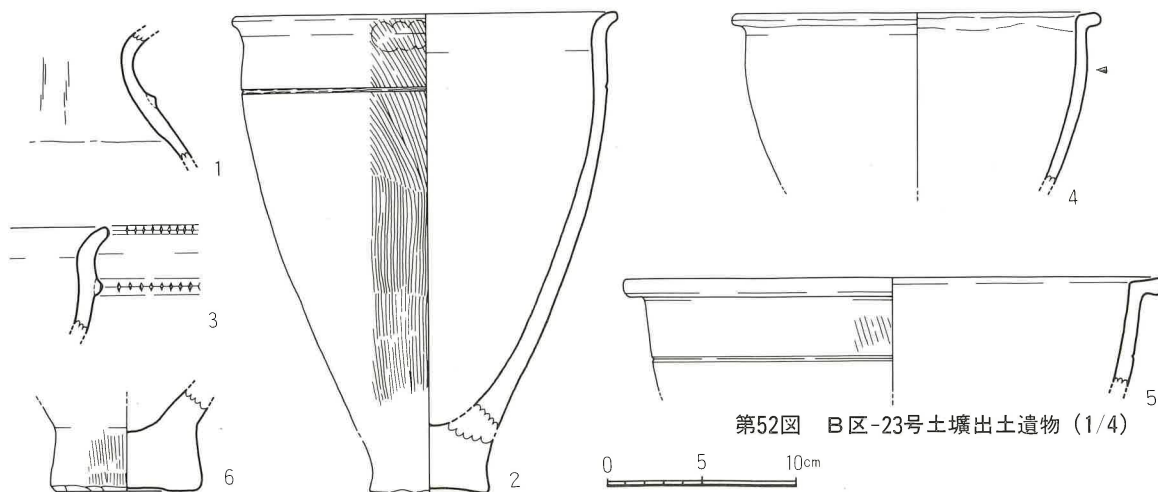
埋土は二層に分かれ、全体に炭・焼土と土器片を多量に含む。特に底面に近い2層下部に集中する。なかでも2の甕は中央にほぼ完形のまま横倒しでつぶれていた。ところがこの土器の一部の破片がB-33土壙の上層から検出されているので、廃棄される前に割られていた可能性が高い。この甕は胎土に大型石英粒子を多量に含む搬入品である。一方1の壺片、3~6の甕はいずれも断片的な破片で出土した。

出土土器は1・3が突帯を施す壺Bと甕B、2が沈線を施す甕A、4と5が逆L字口縁の甕Cである。沈線は一条のものである。6の底部片を含めてほとんどの土器が被熱している。また5の甕も胎土に金雲母を含む搬入品である。土器の出土状態からみて廃絶直後に一括廃棄があり、その後ゴミ捨て穴に利用されたと推定される。土壙の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壙416)

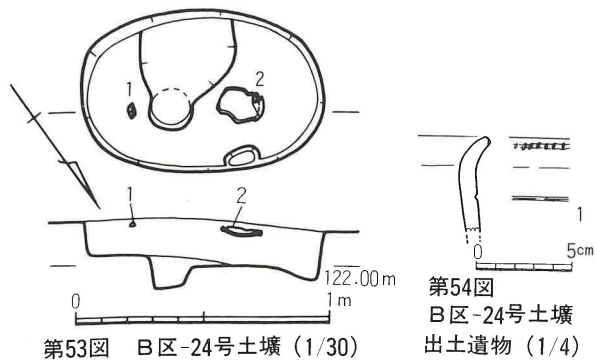


1層：暗黄褐色土（焼土・炭・土器片含む）
2層：暗褐色軟質土（焼土・炭・土器片多く含む。）→土器集中

第51図 B区-23号土壙(1/30)



第52図 B区-23号土壙出土遺物(1/4)



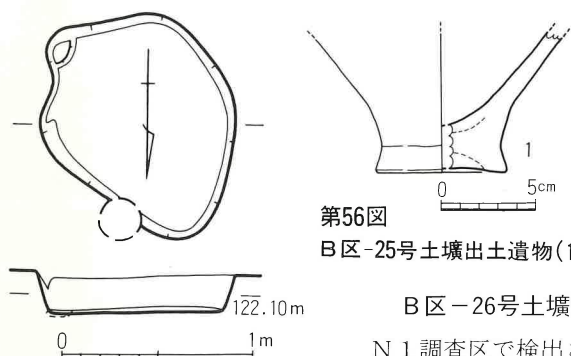
第53図 B区-24号土壌 (1/30)

第54図
B区-24号土壌
出土遺物 (1/4)

B区-24号土壌 (第53・54図 一図版9)

同じくN2調査区で検出された長円形の小型土壌で、底面は高低がある。規模は長軸長97cm、短軸長63cm、検出面からの深さは20cmである。中央にピットがあり小型貯蔵穴の可能性はある。

埋土は炭片と焼土を含む暗褐色粘質の単一層(1層)で、土器の小片が含まれていた。1の甕口縁片のみが図化できた。この土器からこの時期の遺構と認定した。(旧D地区土壌405)



第55図 B区-25号土壌 (1/40)

第56図
B区-25号土壌出土遺物 (1/4)

B区-25号土壌 (第55・56図)

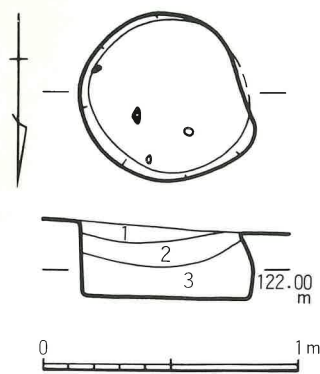
O1・N1調査区で検出された不定形の土壌で、底面は平坦である。規模は長軸長132cm、短軸長95cm、検出面からの深さは23cmである。その用途は不明である。

埋土は土器細片のみを含む暗黄褐色の単一層(1層)で、土器片は散在していた。胎土に金雲母と石英を含む搬入品の1の甕底部片のみが図化できた。この土器からこの時期の遺構と認定した。(旧D地区土壌402)

B区-26号土壌 (第57・58図 一図版9)

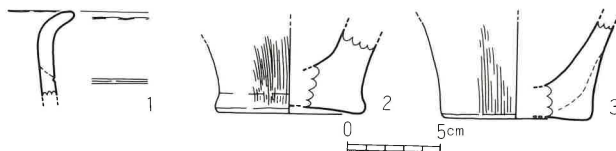
N1調査区で検出された小型円形の袋状土壌で、底面は平坦である。規模は長軸長73cm、短軸長64cm、検出面からの深さは32cmである。その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。

埋土は三層に分かれ、3層は黄色土ブロックを含むが遺物はなく、2層は多量の小礫と土器片を含む。そして1層は小礫を含むサラサラした土である。土器片は2層にのみ含まれ、小片で散在している。おそらく埋め戻しの土砂廃棄の過程で、2層が一括廃棄されたものとみられる。2層からは1~3の甕の破片が出土した。いずれも胎土は在地産で、2の被熱は明瞭である。土壌の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌404)



- 1層：暗茶褐色土(サラサラした土。小礫含む。)
- 2層：明褐色土(1~2cm大の小礫が多量に入る。土器片はこの層のみ含む。)
- 3層：暗褐色粘質土(黄色土ブロックを少し含むが、小礫と土器は含まない。)

第57図 B区-26号土壌 (1/30)



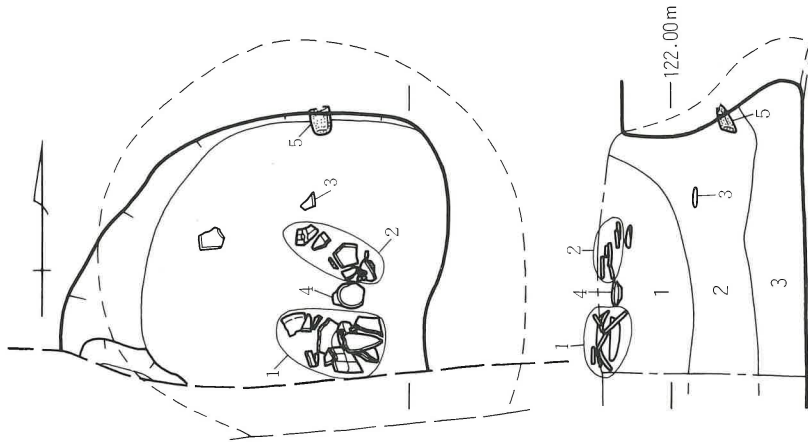
第58図 B区-26号土壌出土遺物 (1/4)

B区-27号土壌 (第59・60図 一図版9・38)

O19・N19調査区で検出された大型円形の袋状土壌で、南端は攪乱坑で削られている。規模は長軸長189cm、短軸長181cm、検出面からの深さは81cmである。底面は平坦である。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

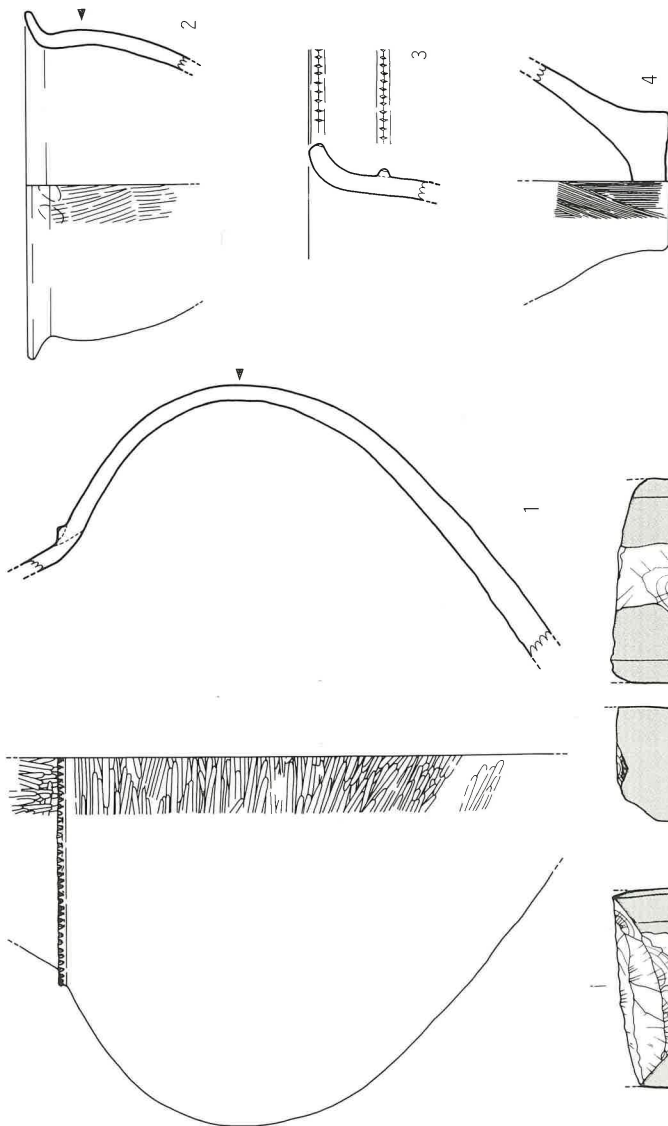
埋土は大きく三層に分かれ、1層の検出面に遺物一括廃棄が認められた。まず暗黄褐色の3層が底部に堆積する。遺物を含まず一気に廃棄されたと思われる。次に炭片・黄色土ブロックと土器片が少量混入した2層が堆積

する。遺物は破片で、3の甕口縁片と5の半分に折れた磨製石斧が出土した。そして最後に少量の黄色土ブロックが均一に入り、炭と焼土を多量に含む1層が堆積する。この層の上部では土器の大型破片が第59図のようにまとまって検出された。1の壺と2の甕は割れた破片を集積した状態で、4の甕底部はその間で検出した。いずれも完形には復元できず、少なくとも壺1個体・甕2個体の破片が一括廃棄されている。2・4の甕は被熱している。

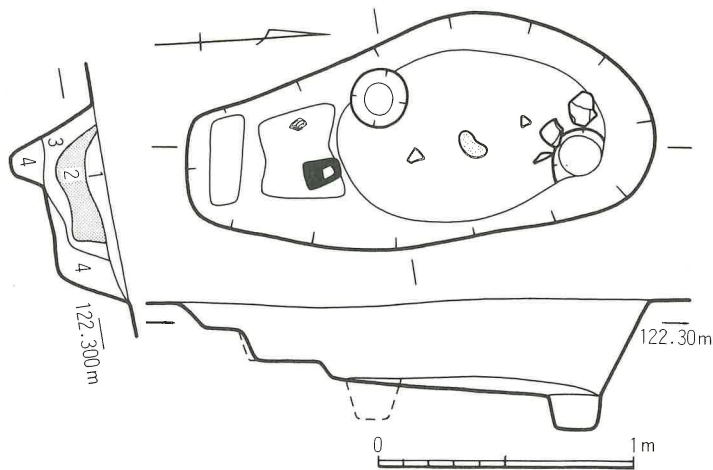


- 1層：暗茶褐色土（焼土・炭片多く、土器が最上部に多い。少量の黄色土ブロックが全体に広がる。）→土器集中。
- 2層：暗褐色土（炭少し含み。黄色土ブロックがまばらに入る。）
- 3層：暗黄褐色粘質土（遺物なし）→短時間に埋まったような土。

第59図 B区-27号土坑 (1/30)



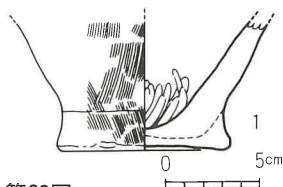
第60図 B区-27号土坑出土遺物 (1~4=1/4、5=1/3)



第61図 B区-28号土壌(1/30)

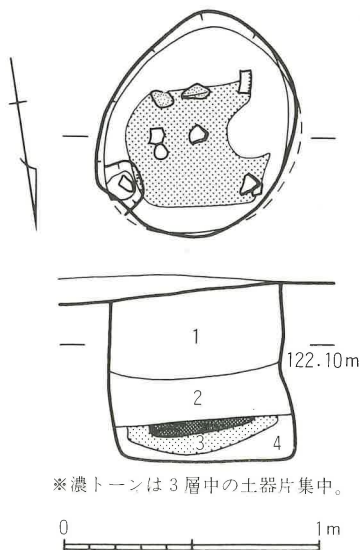
(層序)

- 1層：暗褐色軟質土（焼土・炭含む。）
- 2層：黒色土（＝炭層。焼土多く、土器片も含む。）
- 3層：暗茶褐色軟質土（粘質強く、炭少し含む。）
- 4層：明黄茶褐色軟質土（粘質強く、黄色土ブロックを含む。）



第62図

B区-28号土壌出土遺物(1/4)

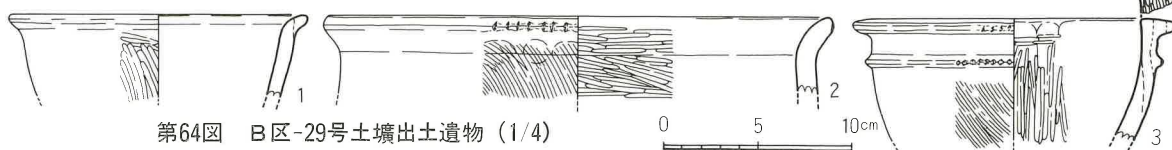


※濃トーンは3層中の土器片集中。

(層序)

- 1層：明褐色粘質土（やや硬い。黄色土ブロック少量と、多量の焼土・炭片を含む。）
- 2層：暗褐色土（バサバサした土。焼土・炭・黄色土ブロック少し含む。）
- 3層：赤褐色土（焼土層。かたく焼けて、最上部、2層との境に土器片集中。）
→人為的な投棄層。
- 4層：暗褐色軟質土（サクサクした土。土器片含む。）

第63図
B区-29号土壌 (1/30)



第64図 B区-29号土壌出土遺物 (1/4)

る。以上の埋没状態をまとめると、廃絶直後に3・2層の土砂を投棄して埋め戻し、1層の時点で何らかの目的で火にかけられた土器を、その炭や焼土とともに廃棄したものである。

出土遺物のうち、1は頸部三角突帯に刻目を施す壺B、2は如意形口縁の甕A、3は突帯に刻目を施す甕Bである。5は基部を失った硬質砂岩製の磨製太形蛤刃石斧で、刃こぼれの激しい廃品である。

土壌の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌426)

B区-28号土壌 (第91・92図 一図版9)

N 19 調査区で検出された長円形の土壌で、底面は段がつきピットが2箇所ある。規模は長軸長187cm、短軸長86cm、検出面からの深さは38cmである。

埋土は四層に分かれ、4・3層は無遺物で、2層に土器片を含む炭・焼土層が認められる。土器片は2層にのみ含まれ、小片で散在している。おそらく埋め戻しの土砂廃棄の過程で、焼却廃棄物の2層が一括廃棄されたものとみられる。2層からは1の甕底部の破片が出土した。胎土は在地産で、被熱は明瞭である。

土壌の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌437)

B区-29号土壌 (第63・64図 一図版10)

同じくN 19 調査区で検出された小型円形の袋状土壌で、B-80土壌(時期不明)に切られる。その規模は長軸長90cm、短軸長75cm、検出面からの深さは74cmである。底面は平坦で、その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。

埋土は四層に分かれ、さくさくとした4層が堆積した後に、硬く焼けた焼土層の3層が投棄され、その上に土器片が散在していた。焼土と土器片は一括して廃棄されたものとみられる。土器はいずれも破片で、1・2の甕口縁片や3の亀の甲タイプの甕Dなどが含まれる。胴部以下の破片は出土せず、別の場所に廃棄されたようである。その遺物一括廃棄のあとは、炭・焼土・黄色土ブロックを含む2・1層が堆積する。

土壌の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌 459)

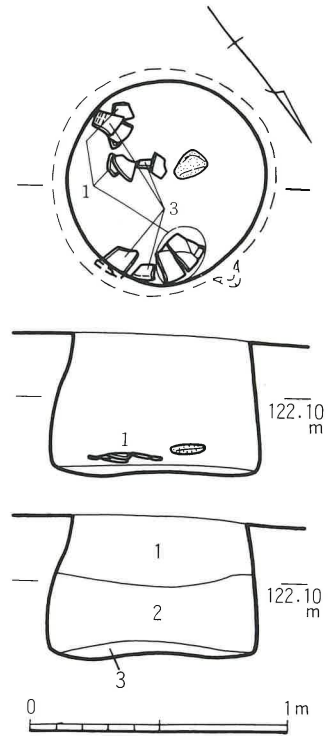
B区-30号土壌 (第65・66図 一図版10・38)

同じくN19調査区で検出された小型円形の袋状土壌で、底面はおおむね平坦である。規模は長軸長90cm、短軸長87cmでほぼ正円形に近い。検出面からの深さは56cmである。その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。

埋土は大きく三層に分かれ、3層と2層に挟まれたように遺物一括廃棄が認められた。まず黒褐色のばさばさした3層が底部中央に盛り上がるように堆積する。貯蔵穴使用停止直後に穴の上から落ちた土である。その上にかぶさるように土器の大型破片と円礫が検出された。1~3が出土した甕の口縁部片で、胴部以上は接合して完形に近くなるのに、底部の破片は一点もない。三点ともよく被熱している。おそらく別な場所で使用されたのちに割られ、胴部破片のみをこの土壌廃絶時に廃棄したものであろう。そして次に基盤層に由来する黄色土の2層が堆積する。遺物は含まず土器廃棄後に埋め戻したものとみられ、最後に暗褐色の1層が堆積して埋没する。

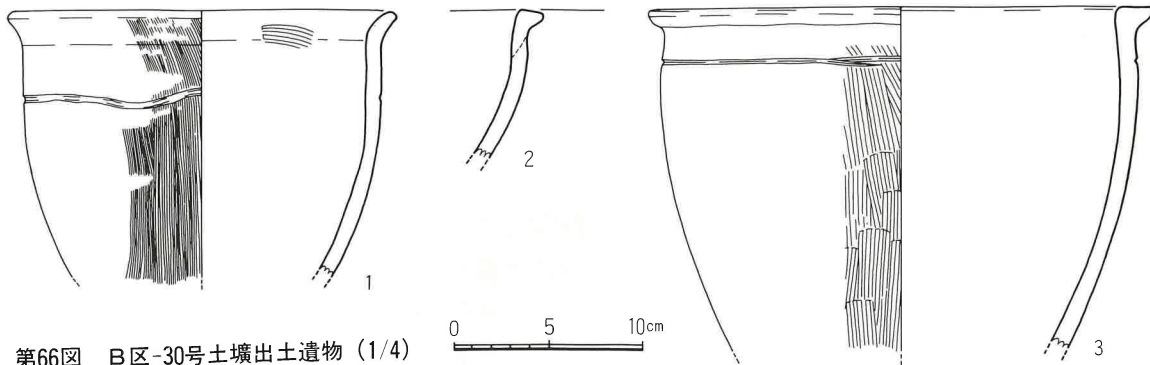
出土土器のうち、1は如意形口縁一条沈線の甕Aで、胎土に金雲母・石英を含む搬入品である。2・3は逆L字口縁の甕Cで、いずれも胎土は在地産である。

土壌の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌 432)



- 1層：暗褐色硬質土（炭片少し含むが、土器片なし、下部に黄色土ブロック含む。）
- 2層：暗黄褐色粘質土（黄色土ブロック層で土器は含まない。）
→人為的にうめもどした土
- 3層：黒褐色軟質土（ばさばさした土。（炭片少しと、土器片多量に含む）
→土器集中

第65図 B区-30号土壌 (1/30)



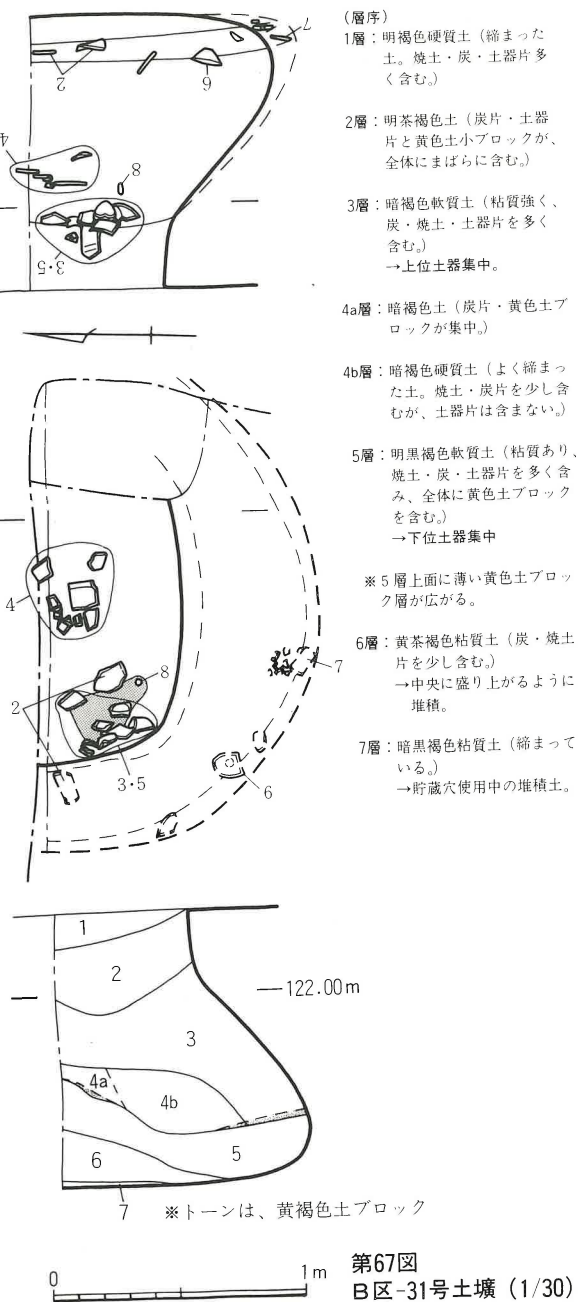
第66図 B区-30号土壌出土遺物 (1/4)

B区-31号土壌 (第67・68図 一図版10・39)

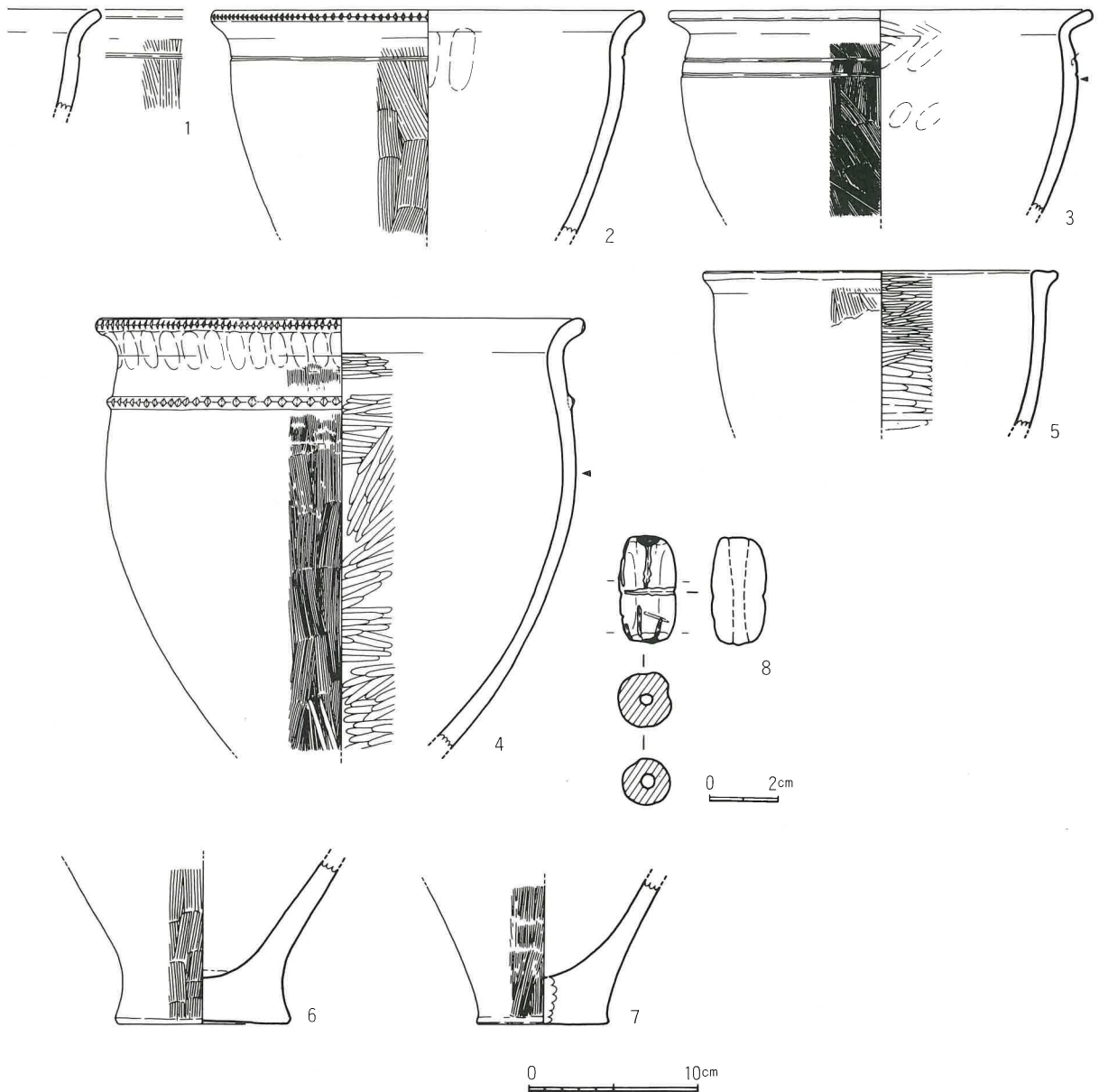
N 18 調査区で検出された大型円形の袋状土壌で、北半分を攪乱坑で破壊されている。規模は径192 cm、検出面からの深さは107 cmである。底面は平坦で、その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

貯蔵穴使用時の痕跡として、底面に薄い黒褐色の7層が広がっている。硬く締まっており踏み締められたと思われる。6～1層は貯蔵穴使用停止後の堆積層で、上位と下位の二回の遺物一括廃棄がある。まず底面全体に炭・焼土を少量に含む6層が中央に盛り上がるように堆積する。おそらく使用停止から下位の遺物一括廃棄がおこなわれるまでのわずかな日時の間に、穴の上から落ちた土が堆積したものである。次に炭・焼土・土器片を多量に含む黒褐色の5層が廃棄される。この層は黄色土ブロックがかなり含まれる遺物一括廃棄層である。2・6・7の甕の大型破片が含まれる。いずれもよく被熱している。その上に薄い黄色土ブロック層が積ったのち、硬く締まった4層が同じく中央が盛り上がるように廃棄され、その後の3層に再び遺物一括廃棄がおこなわれる。3層は炭・焼土・土器片を多量に含む暗褐色の軟らかい層で、土器はいずれも大型破片で廃棄され上下の別がある。まず4の甕の破片が中央にまとまって廃棄され、その斜め上に1・3・5の甕の上半部と8の完形の土錘が黄色土ブロックの塊とともに一ヶ所に廃棄されていた。そして最後に2・1層が堆積して埋没する。以上の埋没過程のうち5層から3層までの廃棄層は、炭片や黄色土ブロックをかなり含む点、炭や焼土の集中が明確に認められる点などからみて一連の廃棄行為の結果である。何らかの甕を使用した行為を介在させて貯蔵穴を埋め戻していったと推定される。

出土土器の胎土はすべて在地産で、土錘もそうである。1～3は如意形口縁の甕Aで一条沈線と二条沈線がある。4は突帯を施す甕B、5は逆L字口縁の甕Cで、4以外の甕はい



ずれも被熱が顕著である。土器廃棄の時期は、出土土器からみて弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌433)



第68図 B区-31号土壌出土遺物 (1~7=1/4、8=1/2)

B区-32号土壌 (第69図)

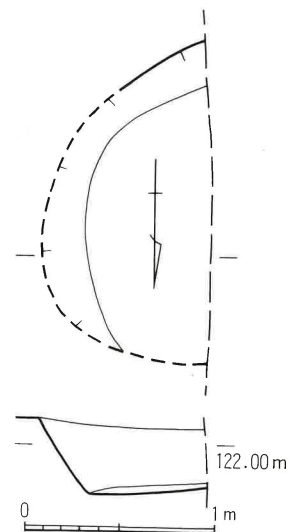
○2 調査区で検出された大型円形の土壌で、西端は調査区外になり、B-11住(古墳時代前期前半)に切られている。その規模は長軸長170cm以上、短軸長88cm以上、検出面からの深さは40cmである。底面は皿状であったと推定される。その用途は不明である。

埋土は炭・焼土と土器細片を多量に含む暗黄褐色の単一層(1層)で、土器片は散在していた。図示できないが甕A・B・Cの小片がある。土壌廃絶後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。

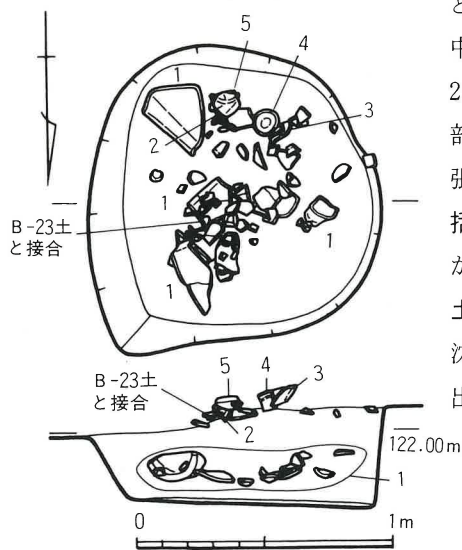
土壌の時期は、出土土器からみて弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌417)

B区-33号土壌 (第70・71図 一図版10・39)

○1 調査区で検出された不定形の土壌で、底面は傾斜するが平坦である。規模は長軸長133cm、短軸長117cm、深さは41cmである。貯蔵穴の可能性はあるがはっきりしない。埋土は炭・焼土と土器片を多量に含む暗黄褐色の単一層(1層)で、大型土器片が上下に分かれて一括廃棄されている。下部には1の甕が大きく割れてその破片が散らばっていた。ほとん

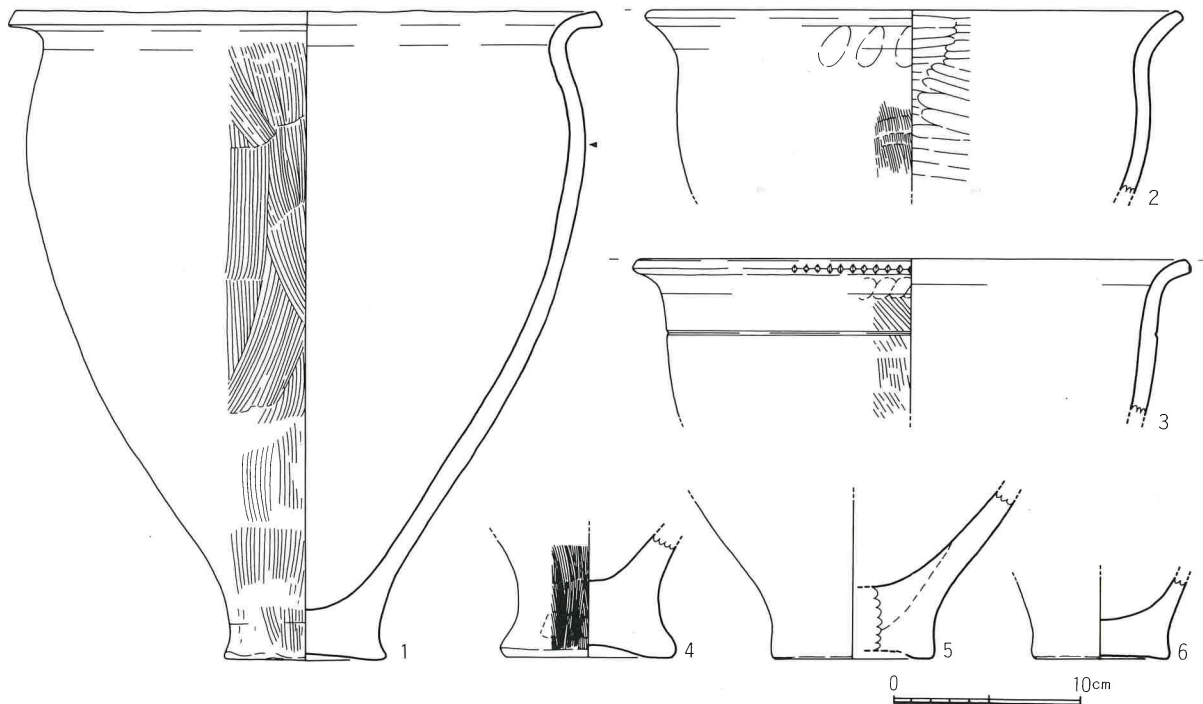


第69図 B区-32号土壌 (1/40)



第70図 B区-33号土壌 (1/30)

ど完形に復元でき、被熱して赤変している。上部には2～5の甕の破片が中央にまとまって堆積していた。またこの上部の一括廃棄のなかにはB-23土壌出土の土器(第52図2)の破片が含まれていた。そのうち4の底部片は胎土に金雲母を含む搬入品である。他の在産の甕に比べて胴部が張らない。以上のように土壌使用停止後すぐに二度に分けた一連の土器一括廃棄がおこなわれている。土器の出土状態からみて、甕を使用した何らかの祭祀行為を介在させて貯蔵穴を埋め戻していったと推定される。出土土器の甕は、如意形口縁の甕Aで在産は沈線がなく、搬入品には一条の沈線を施す。また3以外は被熱の形跡が顕著である。土器廃棄の時期は、出土土器からみて弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌418)

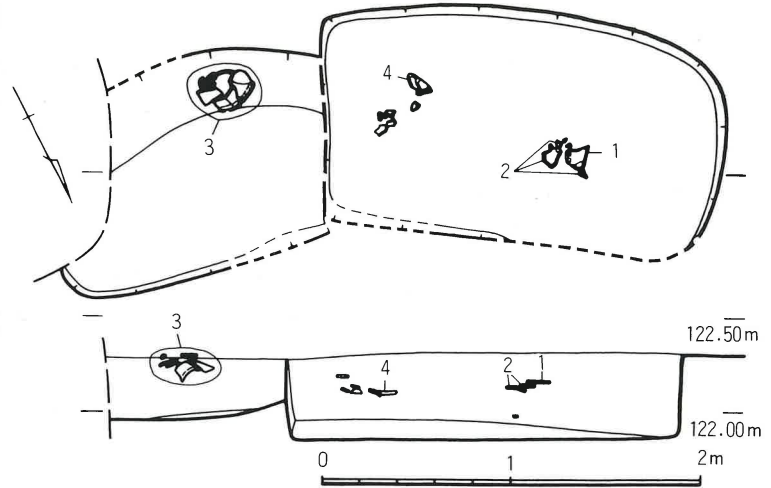


第71図 B区-33号土壌出土遺物 (1/4)

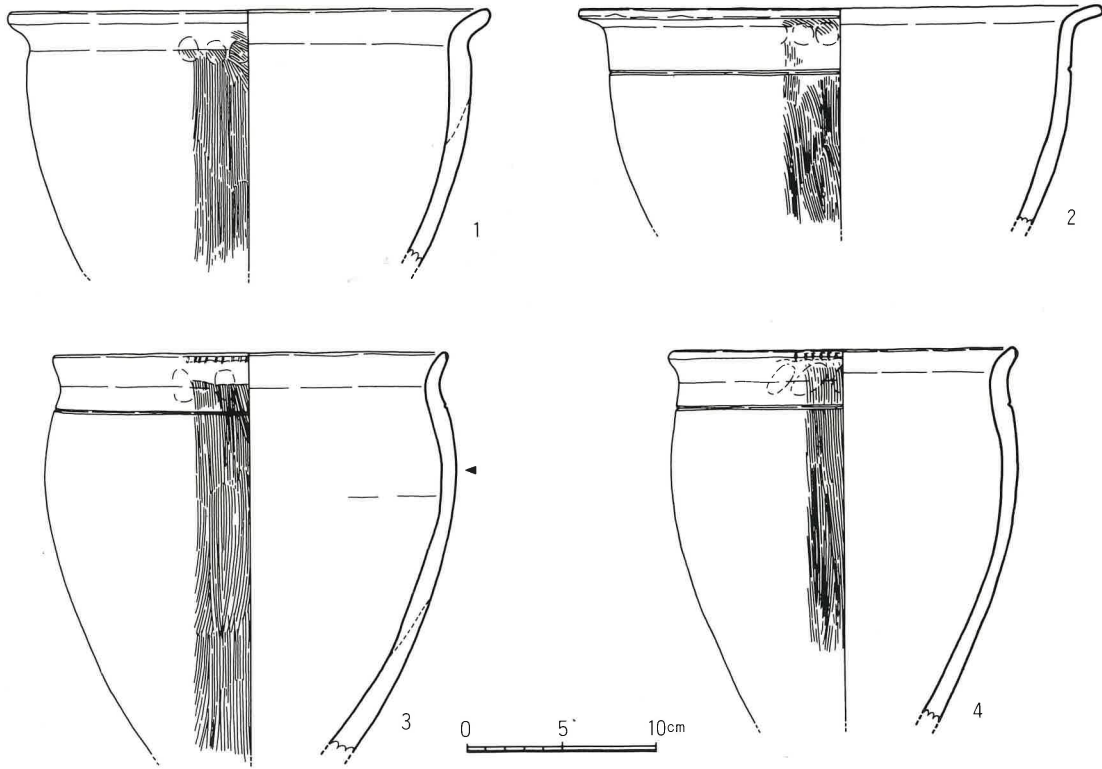
B区-34号土壌 (第72・73図 一図版10・39)

同じくO1調査区で検出された不定形の大型土壌で、底面に高低があり、二つの土壌が重複しているように見えるが、これは西側を調査時に掘りすぎたためである。規模は長軸長361cm、短軸長113cm、検出面からの深さは46cmである。その用途は不明である。埋土は炭と土器片を多量に含む暗褐色の軟らかい単一層(1層)で、大型土器片が3箇所に分かれて検出した。第72図をみると底面からかなり浮いているように見えるが、これは掘りすぎたため、実際は底面近くに位置したと推定される。まず西に1・2の甕の口縁の破片がまとまり、中央に4の甕の口縁部が、東に3の甕が逆さになってそのまま潰れた状態で検出された。この4個体はほぼ同じ高さで検出されたので、以上の土器は一括して廃棄されたものと見られる。いずれも底部の破片がなく、土器の上半部のみを廃棄した可能性が強い。2以外は被熱して赤変している。そのうち1～3は胎土に金雲母を含む搬入品である。

このように土壙使用停止直後に土器一括廃棄がおこなわれている。出土した4個体の土器はすべて甕で、いずれも如意形口縁の甕Aで一条沈線が多い。搬入品1・2には口縁部刻目がなかったり、口縁部の屈折がくの字に近くなる新しい特徴が認められる。土器廃棄の時期は、以上の出土土器からみて弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壙401)



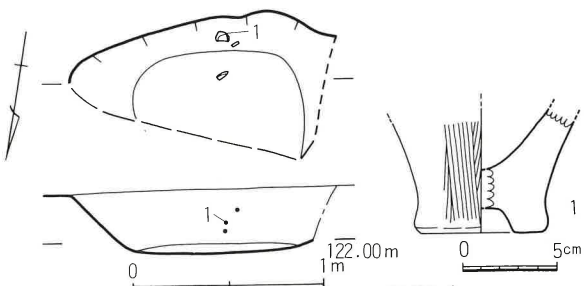
第72図 B区-34号土壙 (1/40)



第73図 B区-34号土壙出土遺物(1/4)

B区-35号土壙 (第74・75図)

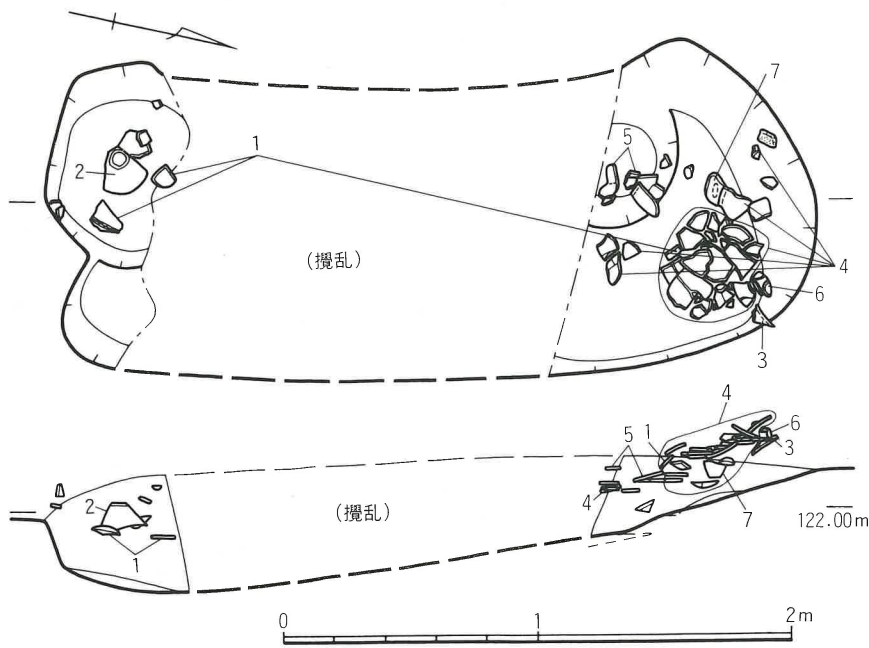
○19調査区で検出された不定形の土壙で、大半を攪乱坑によって破壊され西端はB-12住(古墳時代前期前半)によって切られている。規模は長軸長144cm、短軸長80cm以上、深さは34cmである。底面は皿状である。埋土は炭・焼土と土器細片を多量に含む暗黄褐色の単一層(1層)で、土器片は散在していた。図示できるのは1の甕底部片のみで、被熱している。土壙廃絶後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものとみられる。



第74図 B区-35号土壙 (1/40)

第75図 B区-35号土壙出土遺物(1/4)

土壙の時期は、出土土器からみて弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壙425)

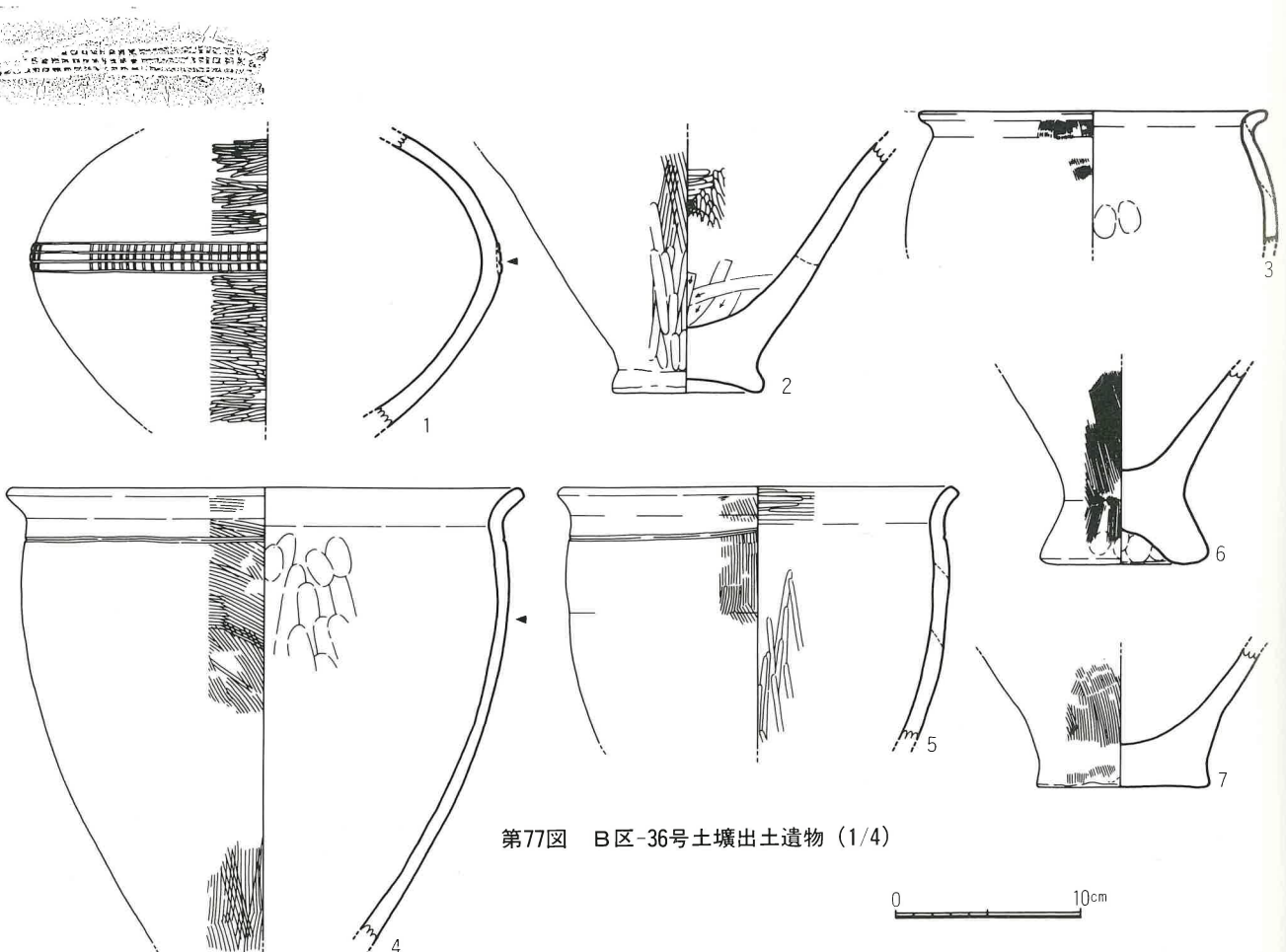


第76図 B区-36号土坑 (1/30)

B区-36号土坑 (第76・77
図 一図版11・39)

同じくO19調査区で検出された船底形の土坑で、中央部を攪乱坑によって破壊されている。北部でB-3住を切り、南部をB-12住(古墳時代前期前半)によって削平されている。底面は船底状で南側が深くなっている。規模は長軸長305cm、短軸長125cm以上、検出面からの深さは55cmである。

断面土層の観察をおこなっていないので埋没状態の詳細は不明であるが、埋土中に土器の一括廃棄が認められる。1の壺の破片が、中央の攪乱坑を隔てた南北の土坑から見つかっているので、ひとつの土坑とみなした。



第77図 B区-36号土坑出土遺物 (1/4)

土器の出土状態は、大型破片で折り重なり、場所によって集中する。たとえば1の壺は破片がばらばらになって土壌全体に分散し、2の壺底部は逆さで検出され、4の甕は一ヶ所で横倒しに潰れた状態で見つかった。壺以外によく被熱している。また1の壺は胎土に石英粒子を多量に含む搬入品で、4の甕も胎土に金雲母を含む搬入品である。つまり異なる地域から搬入された壺と甕が、廃棄の際に異なる取り扱いを受けているのである。以上の観察から、土壌廃絶後に壺と甕を使用した何らかの祭祀行為を介在させて土壌を埋め戻していったと推定される。

出土土器は、1が胎土の異なる搬入品の壺で、胴部最大部に幅広の浅い突帯を一周させ、その上に格子状に沈線文を施す。横4条の沈線が等間隔で平行し、その間を縦に沈線で分割するが、その分割線は全周せず一部空白を残す。2はあるいは蓋かもしれないが、被熱して赤変している。3～5の甕はいずれも如意形口縁の甕Aで、一条沈線がめだつ。6の甕底部は被熱していないので、あるいは蓋かもしれない。7は甕の底部である。

土器廃棄の時期は、以上の出土土器からみて弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌427)

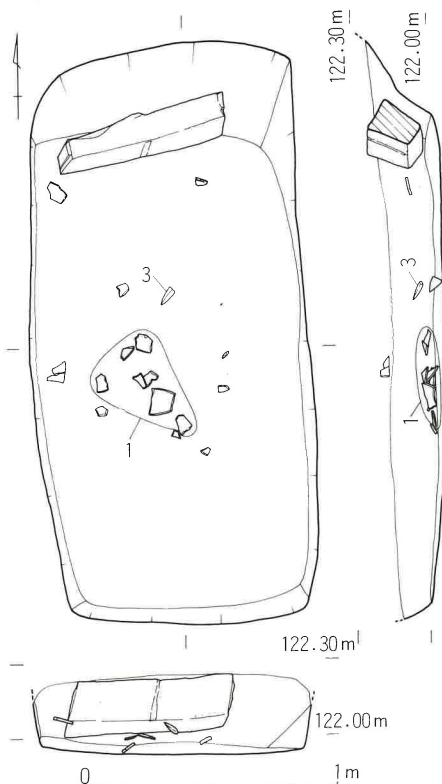
3) 墓 (第4・6・8表)

B-2住のそばで一基の墓が検出されている。攪乱坑が多いので断定はできないが、周辺に墓の分布はなく、単独の埋葬の可能性が高い。

B区-1号墓 (第78・79図 一図版11・40)

N0調査区で検出された箱形木棺墓と推定される墓である。墓壇は長方形で、断面は逆台形あるいは箱形をなして、底面は平坦である。南北の長さ230cm、東西の幅112cmを測り、検出面からの深さは32cmである。長軸の方位角は356度ほぼ南北を向く。北側に、長さ80cmほどの角柱形のきめの細かい安山岩角礫が横たわる。この角礫は、後述するように弥生時代中期後半の埋葬で頭部に置かれて特別な意味をこめたものとして使われている石と同質の石材である。土壌の形状から箱形の木棺を使用したのではないかと推定され、頭部には先ほどの石材を置いたものと見られる。したがって頭位は北となろう。なおほぼ中央部に底面からやや浮いて、3の石剣の先端部破片が検出された。副葬品かあるいは人体に刺さって折れた先端が残されたものと推測される。

埋土は炭・焼土と土器片を少量に含む暗黄褐色の軟らかい単一層(1層)で、1～2cm大の黄色土ブロックを

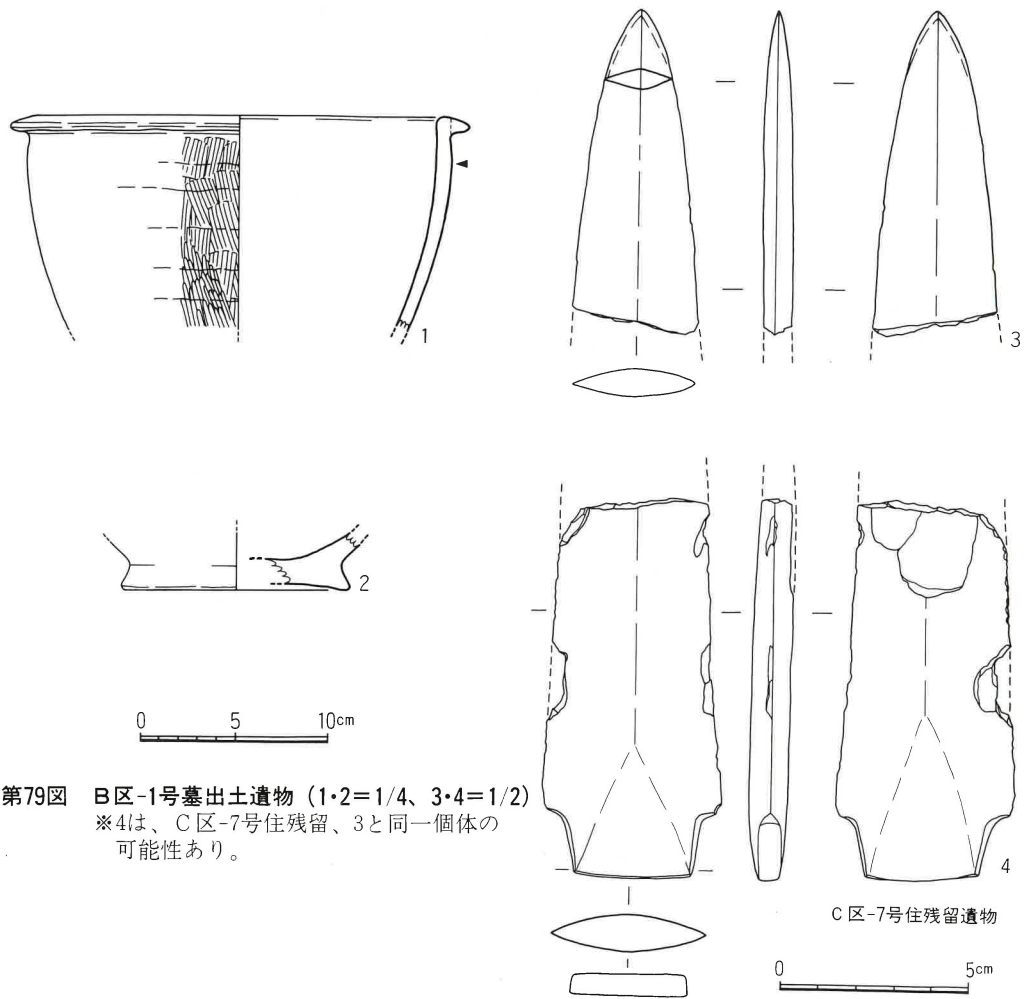


第78図 B区-1号墓(1/30)

多量に含んでいるので、埋め戻されたものと考えてよい。土器片は中央部の底面近くに集まり、その位置よりやや浮いた状態で3の石剣の切っ先を検出した。含まれる土器は1・2の甕とともに被熱していない。副葬土器とも考えられるが、破片はばらばらに出土したので、土壌と同様に埋葬儀礼にかかわる土器を廃棄した可能性が高い。3の石剣の先端部は切っ先を南西方向にむけ、底部から約10cmほど浮いて検出された。また北端におかれた石材も底面からやや浮いており、その形状からみても木棺の小口に利用されたと考えたよりは、むしろ木棺外の頭部近くに特別な意図をもって置かれたと考えたほうが妥当である。

出土した土器は、1が逆L字口縁の甕C、2が底部の細片で、ともに胎土は在地産である。3の石剣切っ先は硬質頁岩製の鉄剣形磨製石剣で表裏とも錆が明瞭である。長さ8.4cmを測る。なおこの石剣と同一個体の可能性のある基部破片が、このB-1墓から東に100m以上はなれた古墳時代前期前半のC-7住の埋土内から出土している(4)。参考までにここに掲げた。

この墓の埋葬時期は、土器から弥生時代前期末と推定され、石剣の年代もその推定と矛盾しない。(旧D地区土壌421)



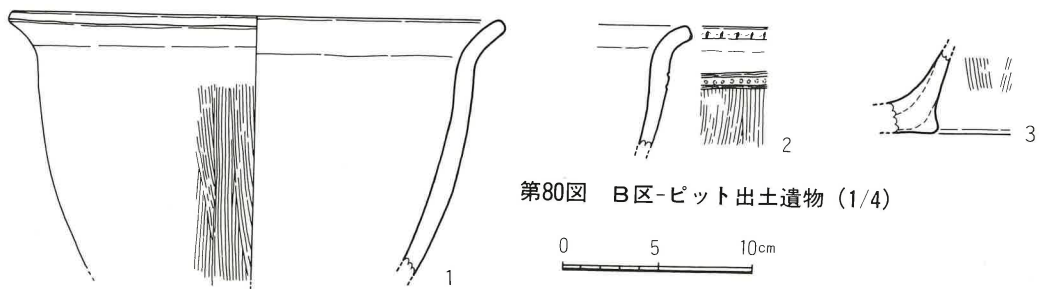
第79図 B区-1号墓出土遺物 (1・2=1/4、3・4=1/2)
 ※4は、C区-7号住残留、3と同一個体の可能性あり。

C区-7号住残留遺物

4) ピット (第2・80図・第6表)

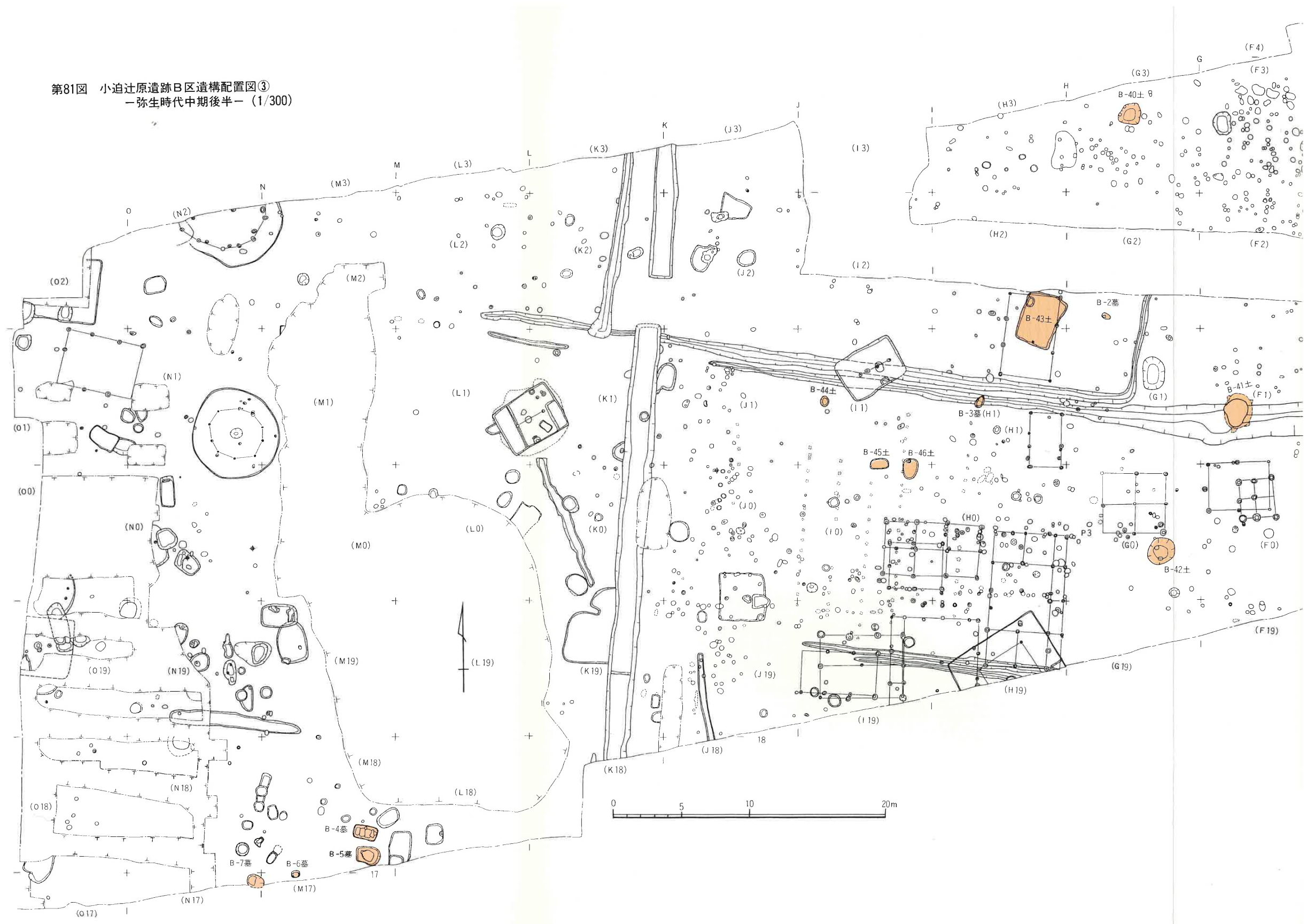
遺物の出土状態から、この時期のピットと認定したのは以下の3例である。

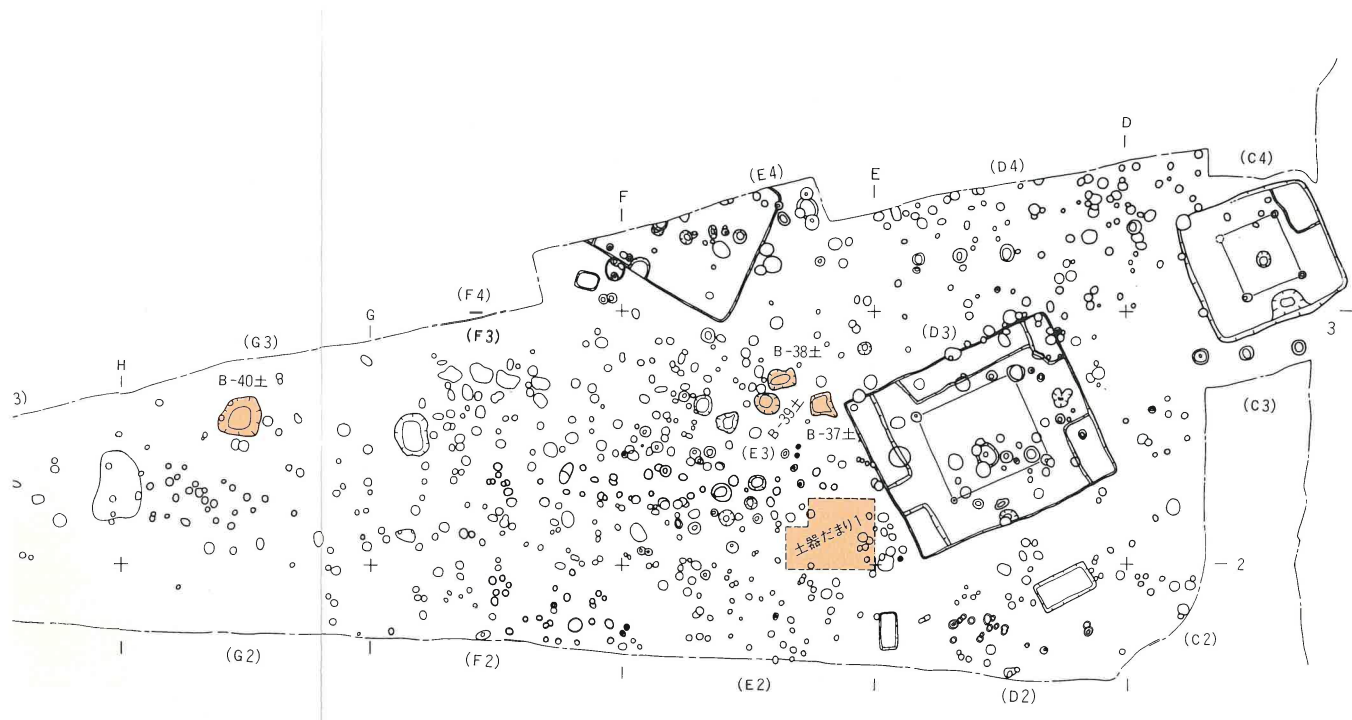
K0調査区ピット2からは1の甕の大型破片が出土した。1は如意形口縁の甕Aである。K1調査区ピット2からは2の甕口縁片が出土した。二条沈線の中に小さな竹管文をほどこす甕Aである。L2調査区ピット3からは3の底部片が出土している。



第80図 B区-ピット出土遺物 (1/4)

第81図 小泊辻原遺跡B区遺構配置図③
 - 弥生時代中期後半 - (1/300)





第3節 弥生時代中期後半（第81図）

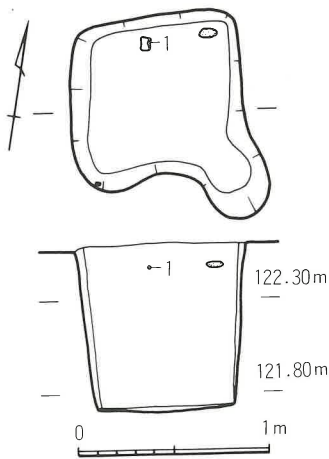
この時期にあたる遺構はきわめて多く、土壌10基と、遺構として検出できなかった土器溜り1箇所、それに墓6基を確認した。ほかにピット2本を本文に掲載した。この時期のピットはまだ存在するであろうが、土器を含まないためにほかの時期のピットと区別できなかった。

この時期の遺構はB区全体に散らばって分布するが、遺構の配置は大きく二群に分かれる。東北部はB-43土壌を中心にして、その周辺に小児甕棺墓・貯蔵穴や土器焼成坑と推定される土壌がある空間である。一方南西部には成人墓・小児墓が集まる墓地空間が存在する。

なお弥生時代中期後半としたこの時期は、北部九州の土器編年と比較した場合の須玖I式の新段階から須玖II式並行期にあたると思われる。

1) 土壌（第3・6・7表）

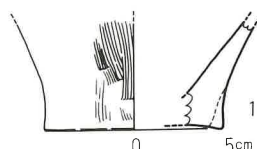
A区と同じく①小型円形（A）、②大型円形（B）、③小型方形（A5）、④長円形（C）、⑤長方形（E）、⑥形の定まらない不定形（F）の6種類が存在する。A区と同じく、袋状土壌はこの時期まで存在し、船底形土壌はみられなくなる。



第82図 B区-37号土壌 (1/40)

B区-37号土壌（第82・83図）

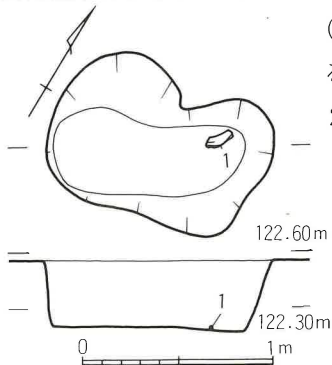
E3調査区で検出されたやや扁平な小型方形の竪穴状土壌で、底面は平坦である（第82図）。規模は長さ114cm、幅90cm、検出面からの深さは90cmである。小型貯蔵穴の可能性もあるが判然としない。断面観察をおこなっていないので、埋没状態の詳細は不明である。埋土中から1の甕の底部破片が出土している（第83図）。この土器から弥生時代中期後半の土壌と認定した。（旧A地区D3調査区土壌1）



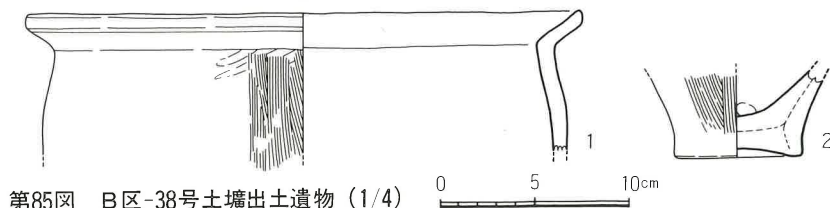
第83図
B区-37号土壌
出土遺物 (1/4)

B区-38号土壌（第84・85図 一図版40）

同じくE3調査区で検出された不定形の土壌で、底面は平坦である（第84図）。規模は長軸長121cm、短軸長60cm、検出面からの深さは37cmである。その用途は不明である。断面観察をおこなっていないので、埋没状態の詳細は不明である。底部から1の甕の口縁部破片が出土している（第85図）。1は遠賀川以東系の甕A、2は甕の底部で、胎土はいずれも在地産である。以上の土器から弥生時代中期後半の土壌と認定した。（旧A地区D3調査区土壌2）



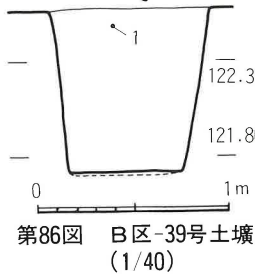
第84図 B区-38号土壌 (1/40)



第85図 B区-38号土壌出土遺物 (1/4)



第87図 B区-39号土壌出土遺物 (1/4)



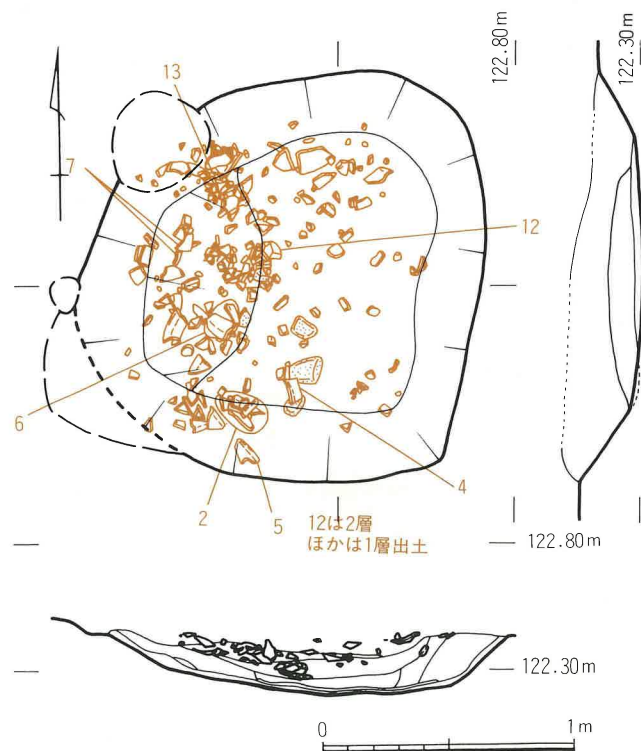
第86図 B区-39号土壌 (1/40)

B区-39号土壌 (第86・87図 一図版40)

同じくE3調査区で検出された小型円形の竪穴状土壌で、底面は平坦である(第86図)。規模は長さ103cm、幅89cm、検出面からの深さは89cmである。小型貯蔵穴の可能性もあるが判然としない。断面観察をおこなっていないので、埋没状態の詳細は不明である。埋土上部から1の大型甕の口縁部破片が出土している(第87図)。この土器は復元口径47cmの大型品で、小型の甕棺に利用されてもおかしくない土器である。口縁部直下に二条一単位の三角突帯がめぐるのが特徴である。胎土は在地産。この土器から弥生時代中期後半の土壌と認定した。(旧A地区D3調査区土壌3)

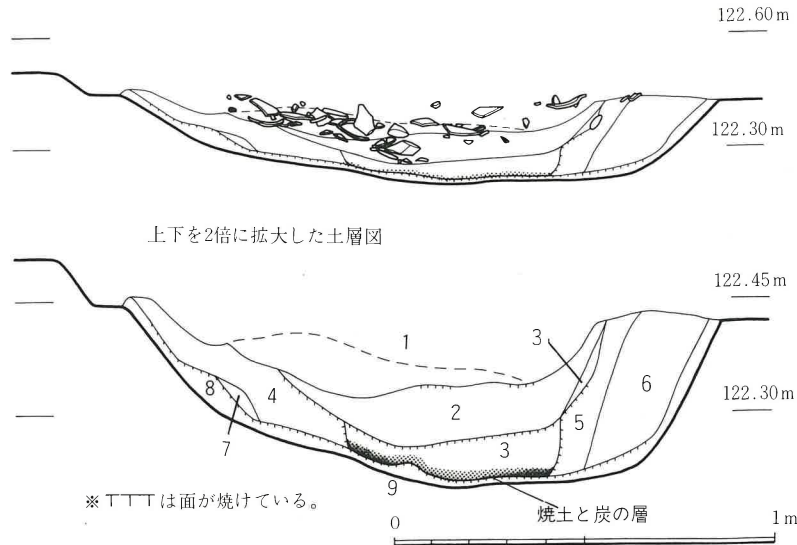
B区-40号土壌 (第88～91図 一図版12・40)

G3調査区で検出された不定形の土壌である。土壌そのものの形状は、平面偏円形で断面は皿状である(第88図)。西側の一方向に張り出しがつく。その規模は長軸長167cm、短軸長157cmで、検出面から最初の掘形底面までの深さは32cmである。この土壌の用途については、次のように土器焼成坑の可能性が指摘できる。(第89・90図)。まずいったん基盤層(9層)を深く掘削して、すぐに基盤層の土である黄褐色粘土(8層)を底面から側面にかけて薄く全体に貼っている。さらにこの粘土で、張り出し部分に段が一段形成されている。8層には炭や焼土などの遺物はまったく含まないので、炉床整形用に選択されたものと考えられる。この層の上面全体がよく焼けており、最初の炉面として使用されたことが判明する(一次面)。次の二次面は部分的な改修である。8層の土と同質の基盤層に由来する黄褐色粘土(7層)を土壌の側面に貼りつけて、張り出し部分により明確な階段状施設が形成される。さらにその後土壌の西半分には粘質の強い褐色土(4層)を貼りつけて三次面の炉床がつくられる。その結果、張り出し部分の階段状施設は埋められてなだらかな斜面となるが、張り出し部そのものは維持されている。同時に土壌全体が西側を中心にひとまわり縮小する。この4層褐色土は8・7層の黄褐色粘土に比べて焼土・炭の小片を含んでやや汚れており、粘土の質が悪くなっている。そのためか4層は8・7層に比べてかなり厚く貼られている。この三次面の上面は非常によく焼けておりかなり内部まで赤変している。その後今度は土壌の東半分の壁にそって粘質の強い褐色土(6層)を、南側に赤褐色土(5層)を段がつくように盛って四次面の炉床がつくられる。6・5層中には白色粘土が含まれ、同時にこの



第88図 B区-40号土壌①
-1・2層遺物出土状態と掘形- (1/30)

ており、最初の炉面として使用されたことが判明する(一次面)。次の二次面は部分的な改修である。8層の土と同質の基盤層に由来する黄褐色粘土(7層)を土壌の側面に貼りつけて、張り出し部分により明確な階段状施設が形成される。さらにその後土壌の西半分には粘質の強い褐色土(4層)を貼りつけて三次面の炉床がつくられる。その結果、張り出し部分の階段状施設は埋められてなだらかな斜面となるが、張り出し部そのものは維持されている。同時に土壌全体が西側を中心にひとまわり縮小する。この4層褐色土は8・7層の黄褐色粘土に比べて焼土・炭の小片を含んでやや汚れており、粘土の質が悪くなっている。そのためか4層は8・7層に比べてかなり厚く貼られている。この三次面の上面は非常によく焼けておりかなり内部まで赤変している。その後今度は土壌の東半分の壁にそって粘質の強い褐色土(6層)を、南側に赤褐色土(5層)を段がつくように盛って四次面の炉床がつくられる。6・5層中には白色粘土が含まれ、同時にこの



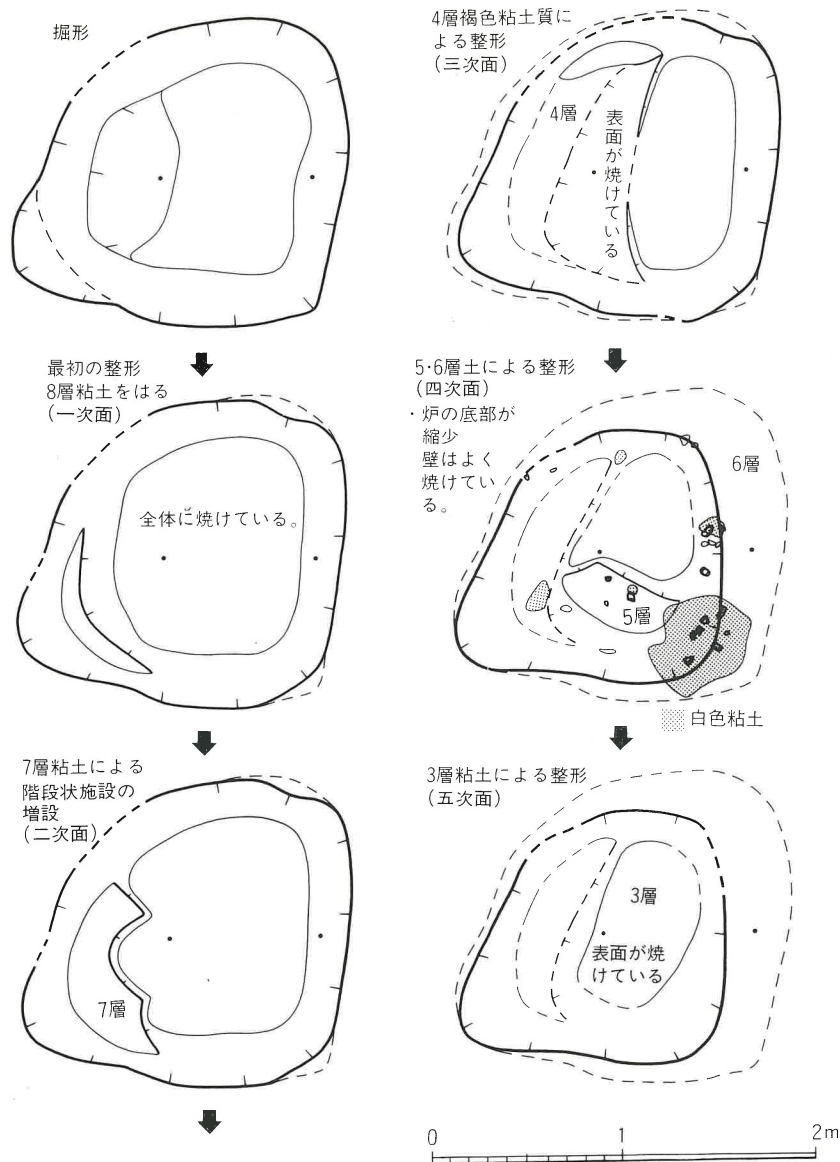
- 1層：黒褐色土（焼土・土器・炭を多量に含み、軟質）→土壙機能停止後の廃棄遺物と堆積。
 2層：暗茶褐色弱粘質土（炭・焼土・白色粘土が混じり、土器片が多い。上面に若干の焼土面があり、六次面があった可能性もある。）
 3層：明茶褐色強粘質土（焼土・炭多量に含む。下部は非常にかたくしまった焼土と炭でおおわれる。）→五次面。
 4層：褐色土（粘質強く、焼土・炭の量は少い。上面と内面は直接火をうけて焼けている。）→三次面。
 5層：赤褐色土（4層より、焼土・炭が多く、土器片を含む。6層より軟く、赤い。）
 6層：褐色土（4層とほぼ同じ。この層の下部には5層下部と同じく、炭と焼土が堆積する。）
 7層：明黄褐色粘土（焼土片・炭はまったく含まない）→階段状施設の構築土（増設）→二次面。
 8層：明黄褐色粘土（焼土ブロックや、炭等は含まず）その上面が焼けている。→一次面。
 9層：黄色粘質土（地山＝基盤層）

第89図 B区-40号土壙②-土層断面-(1/20、上下1/10)

四次面の貼り土と三次面の間には炭と焼土が薄く残っている。また5層中には炭・焼土と土器小片が残されている。このような炉床整形時の様相は三次面までと大きく異なり、炉床の構築方法が「変化」したか、あるいは「粗雑」化したか、評価は分かれる。その結果、張出し部そのものは維持されるが、土壙全体が大きく縮小する。この四次面の上面もまたよく焼けている。最後に四次面の底部に明茶褐色の強粘質の3層土が貼られている。この層中には炭と焼土を多量に含み、下部には焼けて硬く締まった焼土と炭が堆積し、構築方法は四次面以上に「粗雑」化する。またこの焼土と炭の堆積はおそらく炉の残骸の一部であると見られる。この3層の上面はよく焼けており、これが五次面である。この五次面は底面を改修したのみで炉全体の構造は4次面の炉床とほぼ同じである。

以上都合四回の改修がおこなわれ、計五面の炉床をもつ燃烧施設であることが判明する。その第1の特徴は、土壙南西方向の張出し部分が改修を重ねても維持されていることである。ところでこの張出し部分は特に焼け方が激しいわけでもなく、また外部から階段状施設あるいは斜面として底面につづく。炊口部分ではなく、土壙内部への入口施設と考えたほうがよい。第2の特徴は、三次面の構築を境に炉床の構築方法が変化することである。それ以後は土壙の規模が縮小し炉床が上昇する。張出し部分を入口施設としてよければ、おそらく炉の側面の傾きから想定して、燃烧時に壁体がある程度存在していた可能性が高い。第3に、一定期間の使用のたびに炉床を更新することである。形態と張出し部分の位置が一定しているから、同一工人集団が繰り返し使用した可能性が高い。

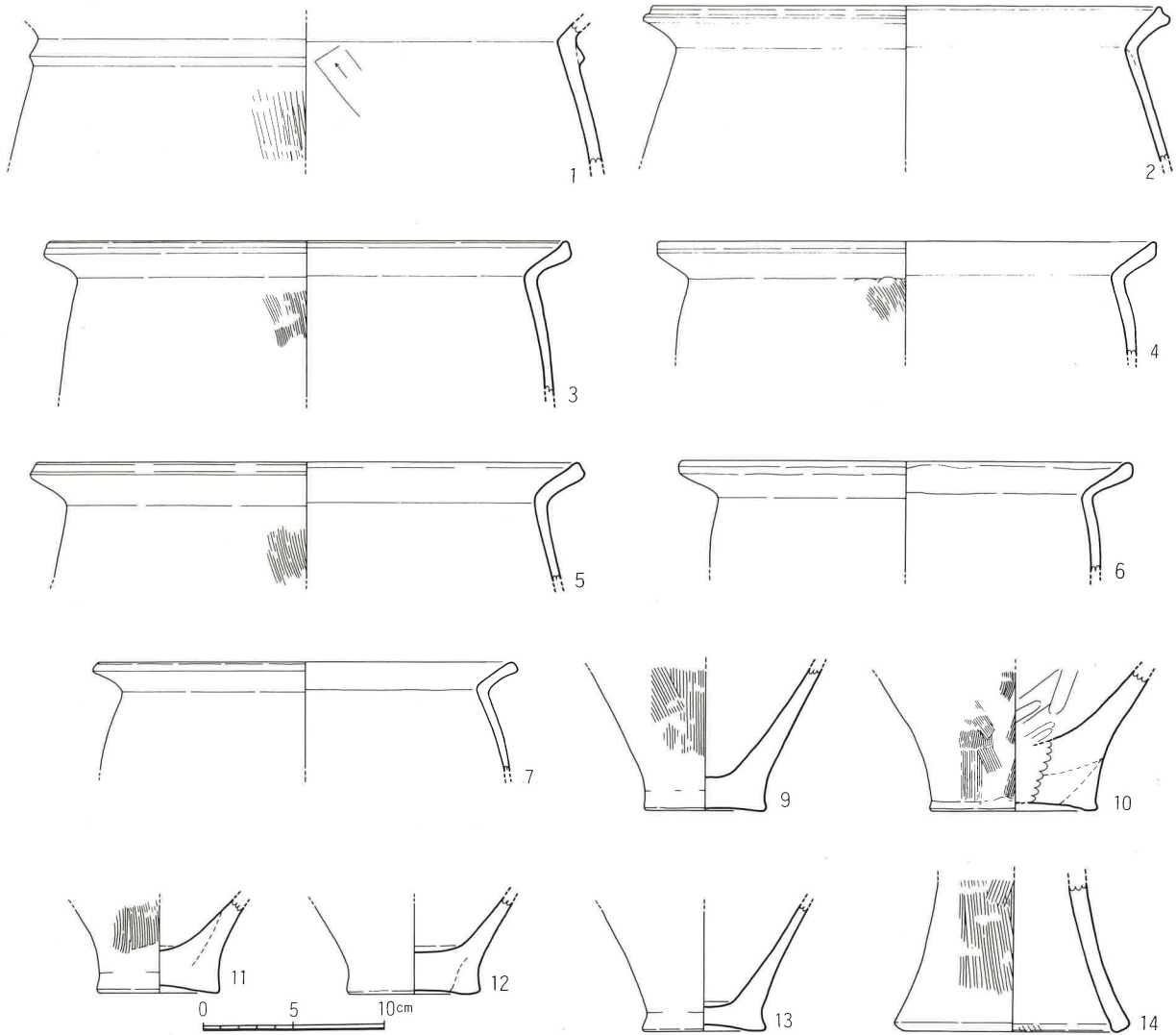
さて上部の2層以上の堆積は五次面以後の廃絶状態を示している。まず2層は暗茶褐色の粘質土で、白色粘土の固まり・炭・焼土と土器片が含まれている。この粘土は、四次面の6・5層中に含まれる粘土と同質のものである。この2層の上面はところどころ焼けているが、一次面から五次面までのような広がりをもたない。あるいは六次面の炉床がつくられた可能性もあるが、廃絶後の遺物廃棄の際に焼けた可能性も高い。最後に黒褐色で軟らかい1層が堆積して埋没する。この中には大量の炭・焼土と土器片を含み、この土壙廃絶直後に焼却廃棄物を一括廃棄したものと推定される。



第90図 B区-40号土壌③-炉底部構造の変遷-(1/40)

以上のようにこの土壌がなんらかの炉であることは判明した。金属関係の遺物が出土していない点を考慮すると、このような構造をもつ燃焼施設は土器焼成坑か、炊事施設のいずれかである。入口をもって壁体の存在した可能性があり、短期間のうちに連続して炉面を更新していく状態からみて、一定の焼成期間の都度に炉を作り替える必要のある土器焼成坑の可能性が最も高い。そうすると少なくとも5回の操業がおこなわれたことになる。遺物はいずれも破片化している。図示した遺物はこの大半が1層から出土した。2層から出土した土器で図示できるのは12の甕底部片のみで、残りは細片である。この土器はよく焼けている。1層からは1～7の甕口縁部と9～11・13の甕底部片、14は器台の破片が出土している。甕の底部はほとんど二次使用により被熱しており、11のように内面におこげの煤が付着している例もあり、焼成時の失敗品ではない。しかし炊事に使用した廃品とするには破片の量が多すぎる。おそらくほかの土壌と同様に炉の廃絶時に土器を使った祭祀行為がおこなわれた可能性を考えたい。

出土土器はいずれも在地産の胎土を用いた遠賀川以東系の甕Aで、1には口縁直下に一条三角突帯が施されている。また被熱のはげしい2の甕の一部はB-1土器溜りにも廃棄されていた。土壌廃棄の時期は、出土土器から弥生時代中期後半と推定される。(旧A地区2号土壌)



第91図 B区-40号土壌出土遺物((1/4))

※8は欠番

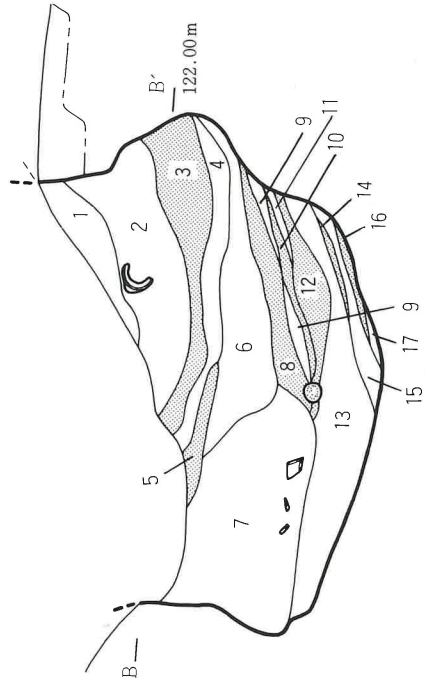
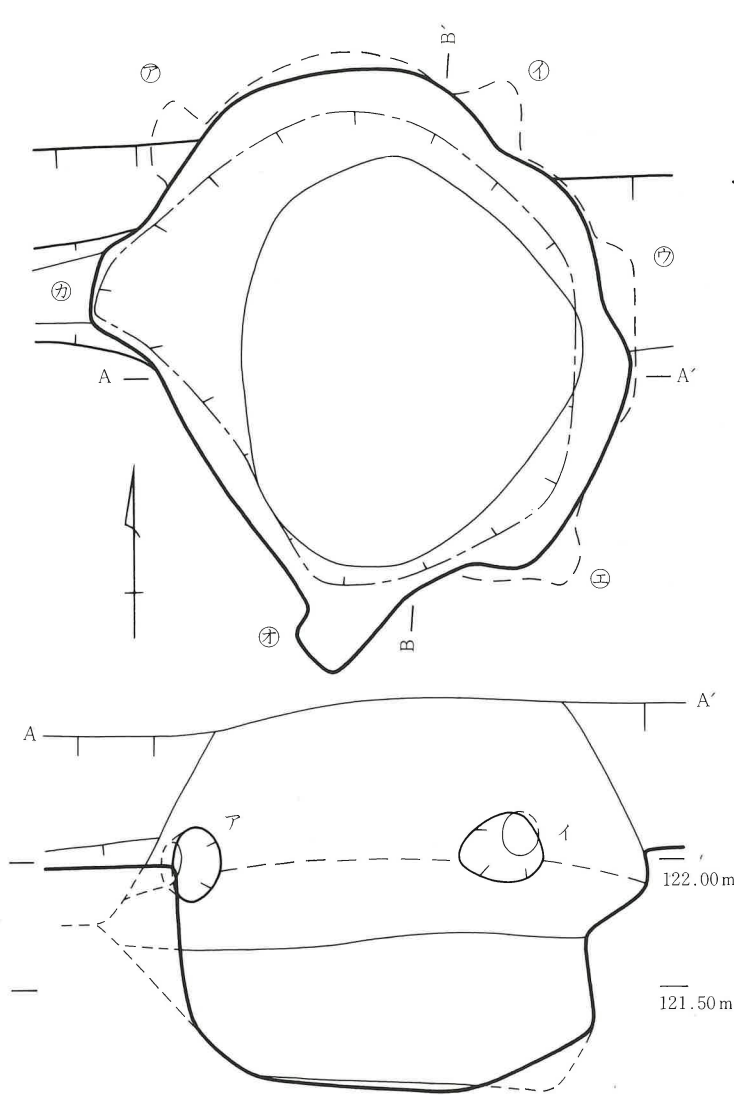
B区-41号土壌 (第92・93図 一図版13・14・40)

F1調査区で検出された大型円形の袋状土壌で、南側上部をB-5溝(近世)に切られている。規模は長軸長219cm、短軸長190cm、検出面からの深さは143cmである。底面は皿状である。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定されるが、底面が平らでないものはこの土壌だけである。壁の四方には穴が5箇所ある。

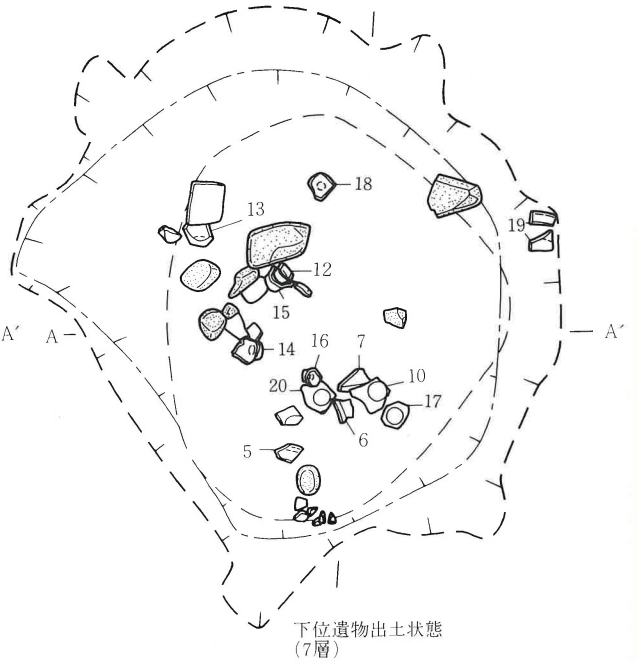
使用状態をしめす痕跡はなく、埋没状態の特徴として上位と下位の二度の遺物一括廃棄が認められる。まず底面の一部に黄褐色土と暗褐色土の互層をなす17~14層が堆積する。わずかに土器片を含み、4の丹塗りのある壺の底部が出土した。その上に黄色土ブロック層である13層が厚く堆積する。この層は基盤層の土そのものである。南側でオの穴から続くように13層が堆積する状態を確認したので、おそらく壁の側面に穿たれた穴からの排出土と推定される。つまり壁に穴を掘ってその土で土壌の底部を埋める行為がおこなわれているのである。側面の穴がどのような機能をもつのか不明だが、このような行為は大型貯蔵穴でしばしば認められる。なおこの層中では11の甕底部片が出土した。次に黄褐色土と暗褐色土の互層をなす12~9層が堆積する。以上の層までは時折土器片を混入するが、炭・焼土等はまったく含まず、人為的な埋め戻し層といってよい。土器片も少量の破片にすぎないので、土砂廃棄時に偶然混入したものと見られる。

次に5cm大の基盤層に由来する礫と黄色土ブロックを少量含む暗褐色の8層と、下部に大量の土器片と円礫に炭・焼土が含まれた暗黄褐色の硬い7層が堆積する。この7層は下位の遺物一括廃棄層である(第92図下)。

5~7の甕口縁部片や10・12~18の甕底部片、19・20の蓋の破片が円礫と重なるように出土した。甕の大部分は

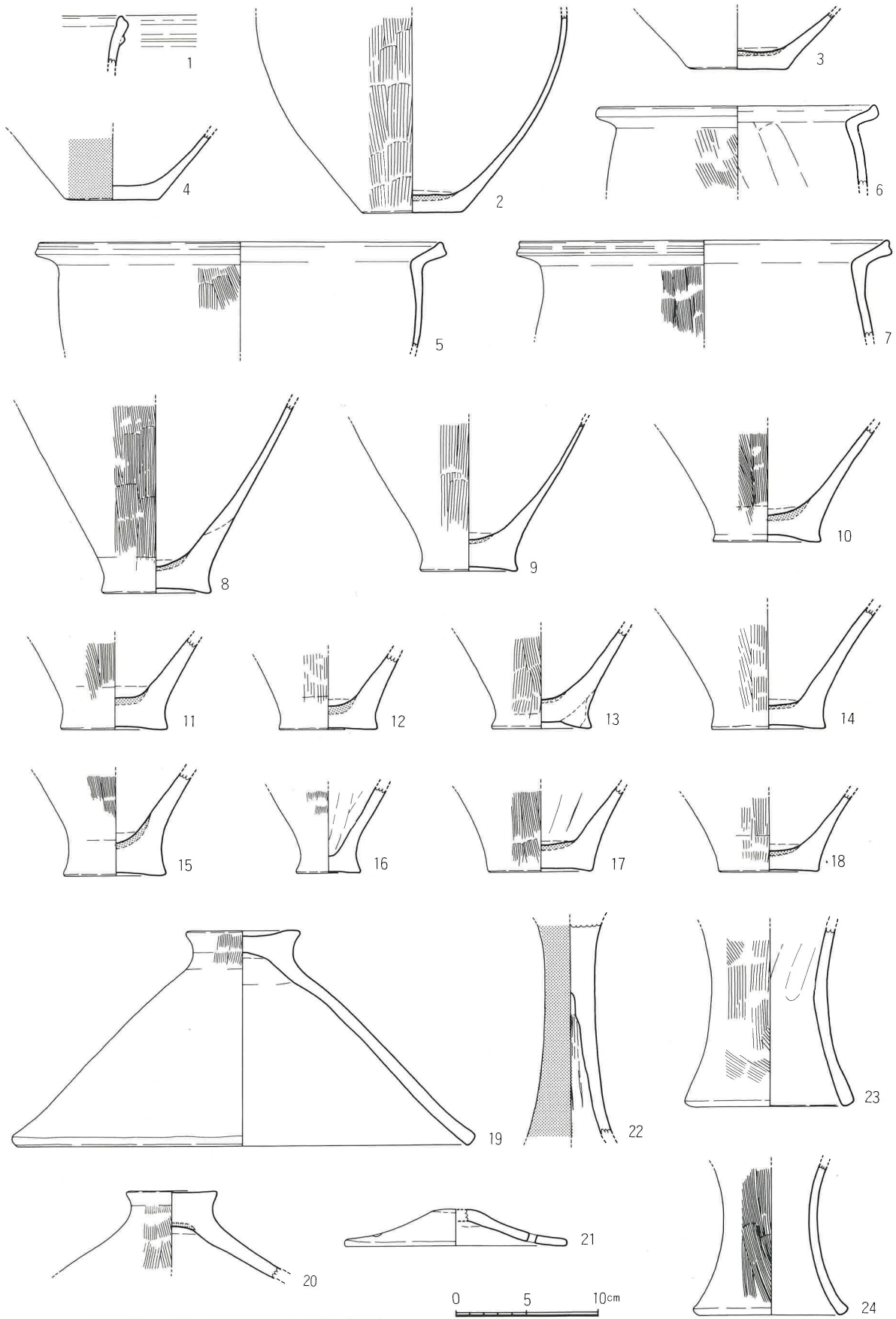


- (層序)
- 1層：暗黄褐色土（黄色土小ブロック多く含む）
 - 2層：褐色土（黄色土小ブロックと炭・土器片を多量に含む）
 - 3層：暗褐色軟質土（1~2cm大の黄色土小ブロックと炭片を少し含む）
 - 4層：黄褐色土（黄色土小ブロックを多く含む）
 - 5層：暗褐色土（黄色土小ブロック少し含む）
 - 6層：黄褐色土と黄色土小ブロック（3~5cm大）の混層。
 - 7層：暗黄褐色硬質土（下部に土器片多い）
 - 8層：暗褐色土（5cm大の地山礫・黄色土小ブロックを少し含む）
 - 9層：暗黄褐色土
 - 10層：暗褐色土
 - 11層：黄褐色土
 - 12層：暗褐色土
 - 13層：黄色土小ブロック層→壁面の穴の排土か。
 - 14層：暗褐色軟質土（サラサラした土）
 - 15層：暗黄褐色土。
 - 16層：暗褐色土。
 - 17層：黄褐色土。
- *M~17層には、土器片含む。



0 1 2m

第92図 B区-41号土壤 (1/30)



第93图 B区-41号土壤出土遗物 (1/4)

被熱して煤の付着した日常の生活用具である。しかし完形に復元できるものはなく、破片のまま一括廃棄したものと考えられる。次に土器片をほとんど含まない6～3層が堆積する。いずれも黄色土ブロックを多量に含み、おそらく遺物一括廃棄の直後に土壌の上から土砂を投棄したものであろう。さらに2層で上位の遺物一括廃棄がおこなわれる。その層には黄色土ブロックと炭・土器片を多量に含む。土器は細片が多く2・3の壺底部、8・9の甕底部、21の小型蓋片、22の高坏脚部、23・24の器台片が出土した。壺・蓋・高坏は被熱していないが、甕と器台はよく被熱していた。日常の生活用具の廃品を一括廃棄したものと考えられる。その後は黄色土ブロックを多量に含む1層が投棄され埋没する。上下の一括廃棄土器に後述するように時期差はなく、19の蓋のように上下で接合する例があるので、一連の埋め戻しの過程の中で二度土器を中心とする一括廃棄がおこなわれたわけである。したがってその二度に分かれて廃棄された土器群は、実は同時に使われていたものと考えられる。

出土土器の胎土はすべて在地産である。土器全体でみても壺・蓋・高坏は被熱していないが、甕と器台はよく被熱する。1は口縁下に突帯のある直口壺、2・3は壺の底部、5～7は遠賀川以東系の甕Aである。8～18は甕Aの底部と推定される。19・20は蓋で、21は穿孔のある小型壺の蓋である。22は丹塗りの須玖系の高坏D、23・24は器台である。土器製作の特徴は砂粒を多量に含む胎土を、最終工程で底部の内面に貼りつけてザラザラした内面になることである（底部Aとする）。同時にこの底部Aの外面にはかならずヨコナデで底面端部を調整している。以上はきわめて明瞭な特徴で、2・3の壺、8～15・17・18の甕、20の蓋で確認される。以上の土器と5～7の甕口縁、19の蓋、23・24の器台は、胎土・色調・調整などの特徴が一致し、少なくとも以上の壺・甕・蓋・器台などの土器は同一工人集団によって製作されたと推定される。もしB-40土壌が土器焼成坑であるとすれば、この一群の土器がそこで製作された第一の候補となるだろう。一方1・4の壺、21の小型壺の蓋、22の高坏は丹塗りのある須玖系の土器であるが、胎土は在地産であるので、先ほどの土器群と同じ場所で焼かれた可能性もある。

土器廃棄の時期は、出土土器から弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。（旧D地区土壌488）

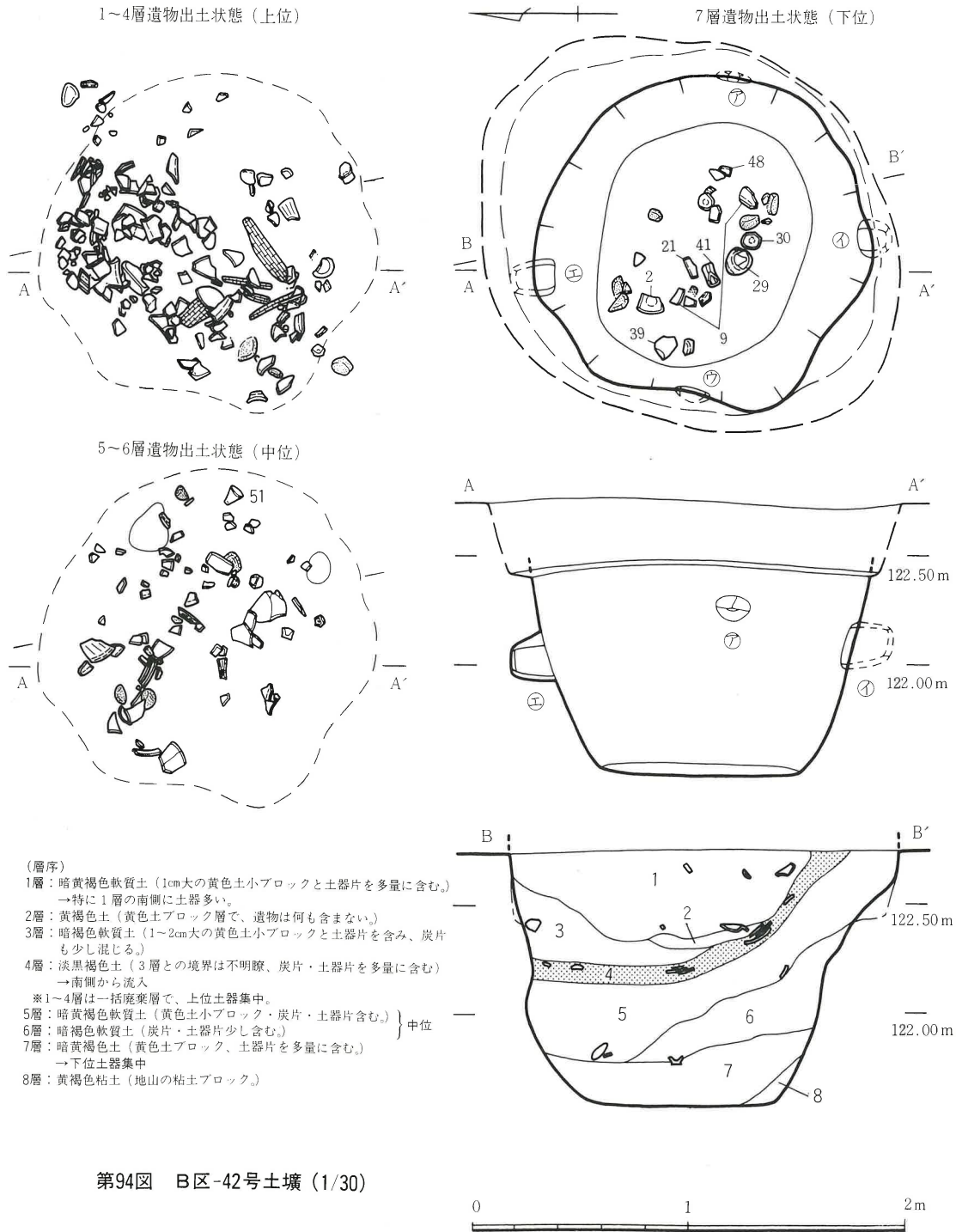
B区-42号土壌（第94～97図 一図版14・40・41）

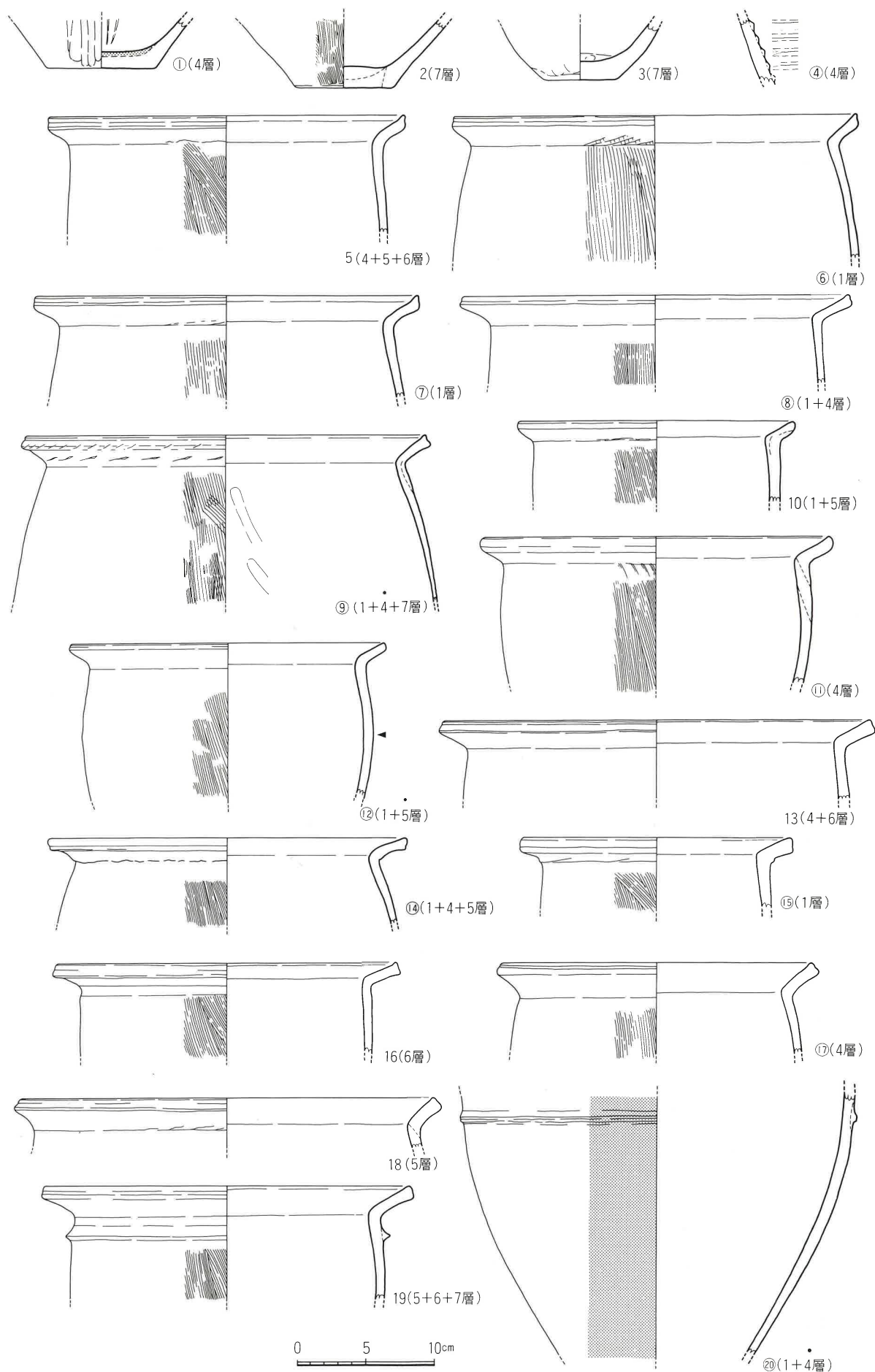
G0調査区で検出された大型円形の竪穴状土壌で、底面は平坦である。壁は直立せず上に向かって開いていく。規模は長軸長158cm、短軸長145cm、検出面からの深さは123cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定されるが、ほかにこの形態の類例はない。側面には穴が東西南北に4箇所ある。深さは揃わず、ほかの例よりも小さい。

使用状態をしめす痕跡はなく、埋没状態の特徴は上位と下位の二度の遺物一括廃棄が認められることである。まず底面の片隅に黄褐色粘土8層が堆積する。これは基盤層の土である。あるいは側面の穴からの排出土かもしれない。次に黄色土ブロックと土器片を大量に含む暗黄褐色の7層が堆積する。この7層が下位の遺物一括廃棄層である（第94図）。2・3の壺底部片、19・21の甕口縁部片、29・30の甕底部、39の甑底部、40・41の高坏片、47・48の器台片と、52の完形の磨石が出土した。そのうちの多くは7層上部から出土した破片で、円礫と一緒に出土している。39の甑のみ被熱している。次に炭と土器片を含む軟らかい6・5層が、南側から投棄されて厚く堆積する。これらの層中からは全体にかなり土器片と小礫を含むが、あまりまとまらない中位の遺物である。5・10・12・14・16・18・24の甕口縁部片、27・32・33・36の甕底部片、44の鉢口縁片、50の器台片、51のコップ形の坏が出土し、そのうち51は完形のまま検出されたが、ほかの土器はすべて破片化していた。おそらく下位の遺物一括廃棄の直後に土壌の上から土砂とともに投棄されたものであろう。さらに4層で上位の遺物一括廃棄がおこなわれる。その層には炭・炭化材・土器片を多量に含み、特に炭が多く黒色化している。同じく南側から廃棄された状態である。土器は大型破片と細片がとり混ざり、1・4の壺片、8・9・11・17・22の甕口縁部片、20・23・34・37・38の甕底部、40・43の高坏片、45の鉢片などが出土した。その後黄色土ブロックを多量に含む3～1層が投棄され埋没する。特に2層は黄色土ブロックそのもの廃棄層であり、1層はふたたび土器片を多量に含む。ここでは6・7・15・25・26の甕口縁部、28・31・35の甕底部片、46の鉢口縁部片、49の器台片が出土した。以上の上下の一括廃棄土器は後述するように時期差はなく、上下で接合する例がきわめて多く、47・48の器台のように上下で検出された破片が接合して完形に復元できる例もあった。一連の埋め戻しの過程の中で土器を含む焼却遺物の一括廃棄がお

こなわれ、その廃棄された土器はまだ使える土器であった可能性が高く、おそらく割られて廃棄されたと思われる。したがってその廃棄された土器群は、同時に使われていたものと考えられる。

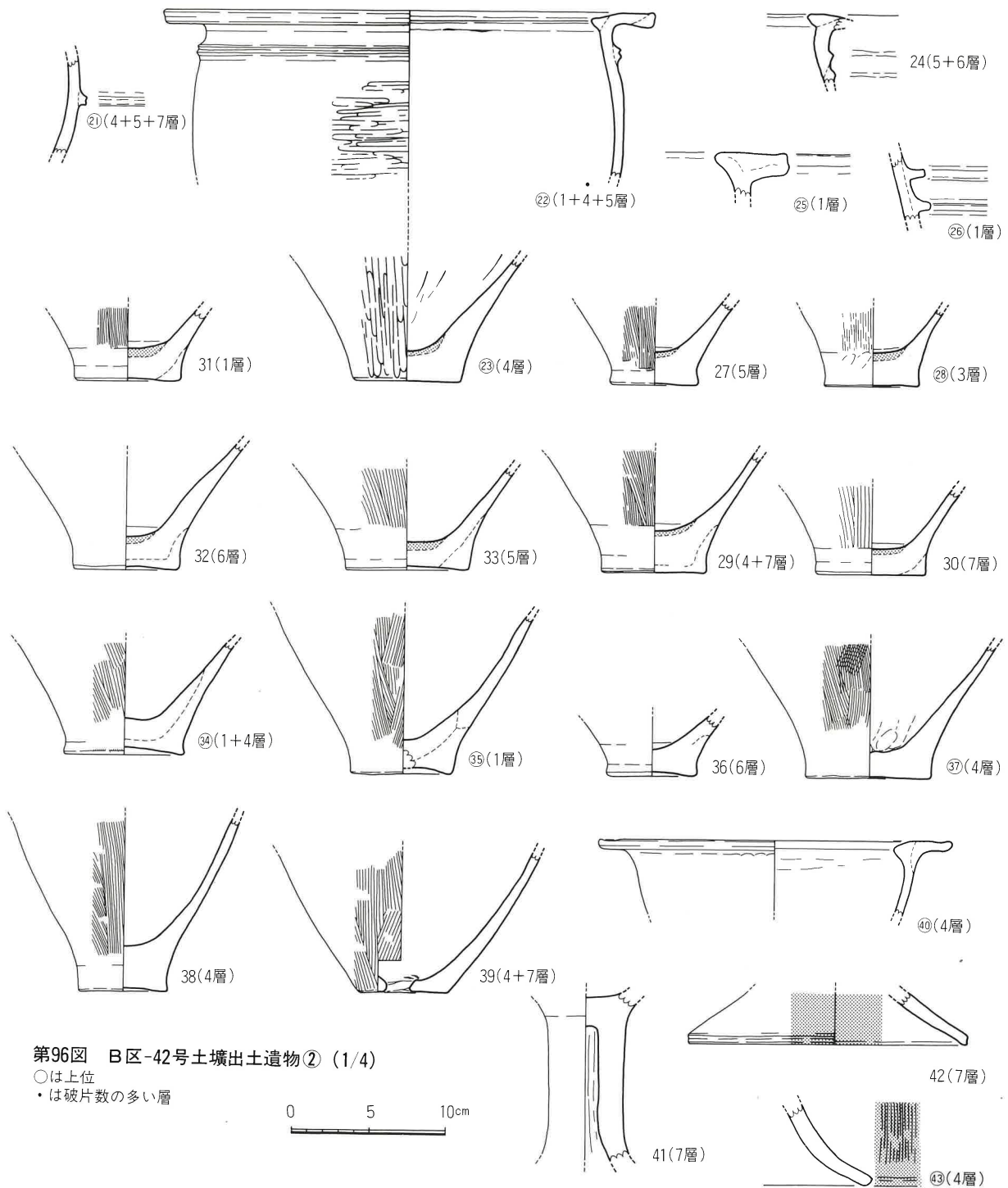
出土土器の胎土はすべて在産である。土器全体でみても壺・高坏は被熱していないが、7層出土の41の高坏口縁のみは被熱する。甕と器台はよく被熱する。1は壺の底部、4は5条の突帯を施した遠賀川以東系の壺。5～19は遠賀川以東系の甕Aで、19のように口縁下に一条三角突帯を施す例もある。20～23は丹塗りを施す須玖系の甕で、22と23は同一個体を見られる。24は遠賀川以西系の甕B、25は甕棺の口縁部と思われる大型破片。27～38は甕Aの底部と推定される。39は焼成前に底部に穿孔した甕。40は在産系の高坏。41～43は丹塗りを施す



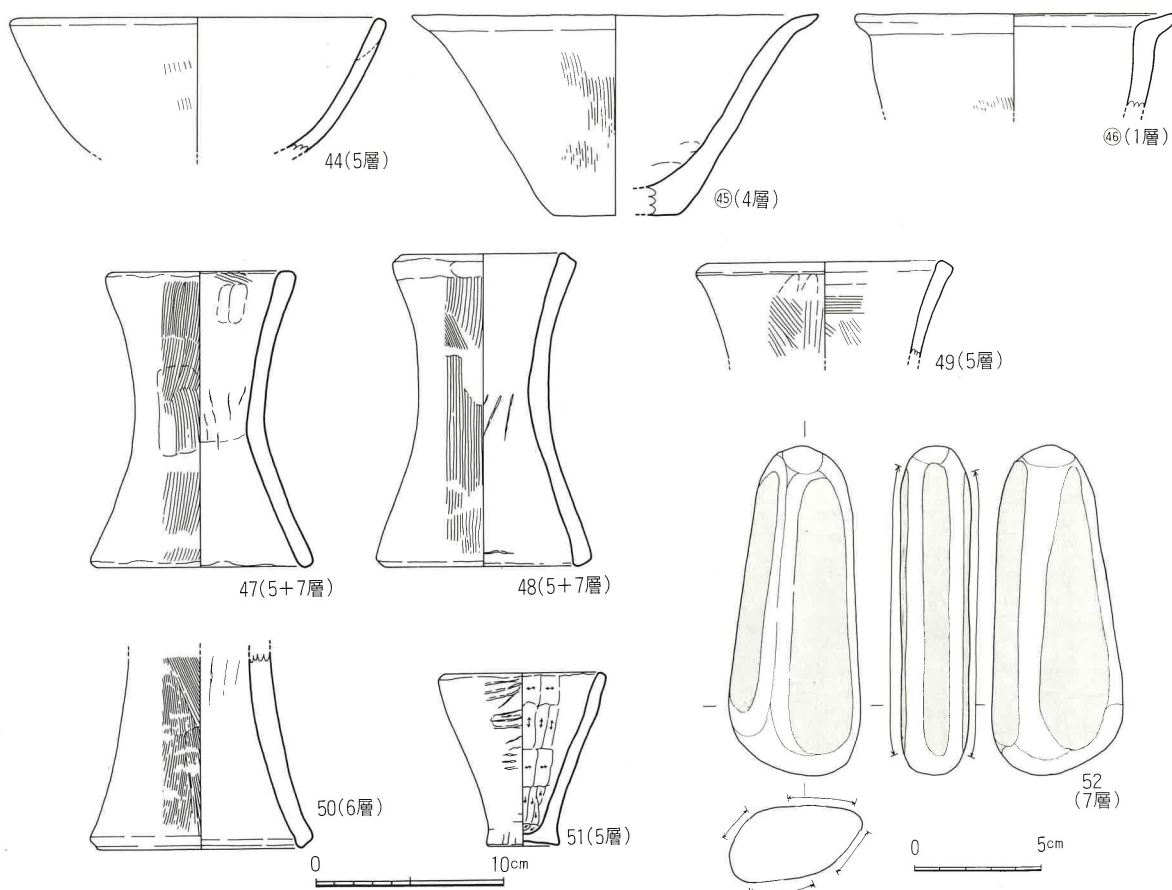


第95図 B区-42号土壌出土遺物① (1/4)

○は上位、●は破片数の多い層



須玖系の甕D。45と46は在地系の鉢。47～50は器台。51はコップ形の坏で、外面に叩き痕跡が明瞭で、内面はヘラケズリ状の掻きあげが顕著である。また内面に赤褐色の粘土が付着するので何かの容器である。出土石器は、52が安山岩製の小型の磨石である。土器製作の特徴はB-41土壌出土の底部破片に認められる特徴的な底部Aの技法と同じ、砂粒を多量に含む胎土を最終工程で底部の内面に貼りつけて、ザラザラした内面にするのである。この特徴は1と23の壺、27～33の甕で確認される。特に23の丹塗りを施す須玖系の甕Dに、この特徴が認められることは重要である。この特徴はB-41土壌出土土器とも共通し、その土器も含めて同一工人集団により製



第97図 B区-42号土壌出土遺物③(44~51=1/4、52=1/3) ○は、上位

作されたと推定される。そして彼らは、須玖系の丹塗りの甕も製作していると考えられるのである。もしB-40土壌が土器焼成坑であるとすれば、B-41土壌出土土器とともにこの一群の土器がそこで製作された第一の候補となるだろう。土器廃棄の時期は、出土土器からみて弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。(旧D地区土壌480)

B区-43号土壌 (第98~100図 一図版15・41・42)

H1・H2調査区で検出された長方形の大型土壌で、底面は竪穴建物のように平坦である。規模は長さ400cm、短軸長300cm、検出面からの深さは30cmである。床面積は10.3㎡、長軸の方位角は21度である。内部には西辺のやや北に偏ったところに、壁に接して長円形の土壌が1箇所検出した。廃棄された土器の一部がこの土壌の中に入りこんでいるので、おそらく土壌廃絶時には開口していたと見られる。底面が全体によく踏みしめられた硬化面になっている。炉がないにもかかわらずかなり使用された状態をしめすのは、この土壌が何らかの作業施設であったこと示している。

埋没状態の特徴は、廃絶直後の遺物一括廃棄が認められることである。まず底面の周縁部を中心に暗褐色の粘質の強い2層が堆積する。比較的硬く、通常の埋没土に混入する黄色土ブロックがまったく含まれない。この層下部の床面に土器小片が散在して出土するので、土壌廃絶直後に廃棄された土層である。含まれる土器は、1の甕片、甕棺として使われてもおかしくない3の大型甕胴部、5・14~16の甕口縁部片や23・24の甕底部片、28の高坏口縁片と、半分に割れて焼けた29の磨石が出土した。以上の土器のうち5・15・16の甕の破片は、後述する1層の土器集中地点の中にも破片の一部が含まれ、16などは大部分の破片が床面直上で検出されてその上に1層の土がかぶるが、一部の破片は土器集中地点でも出土した。したがって2層下部の土器廃棄→2層堆積→1層遺物一括廃棄はきわめて短時間の一連の行為によって生じたものと推定される。さらに1層で遺物一括廃棄がおこなわれる。その層には1~2cm大の黄色土ブロックと炭・土器片を多量に含み、粘土の固まりが土器片といっしょ

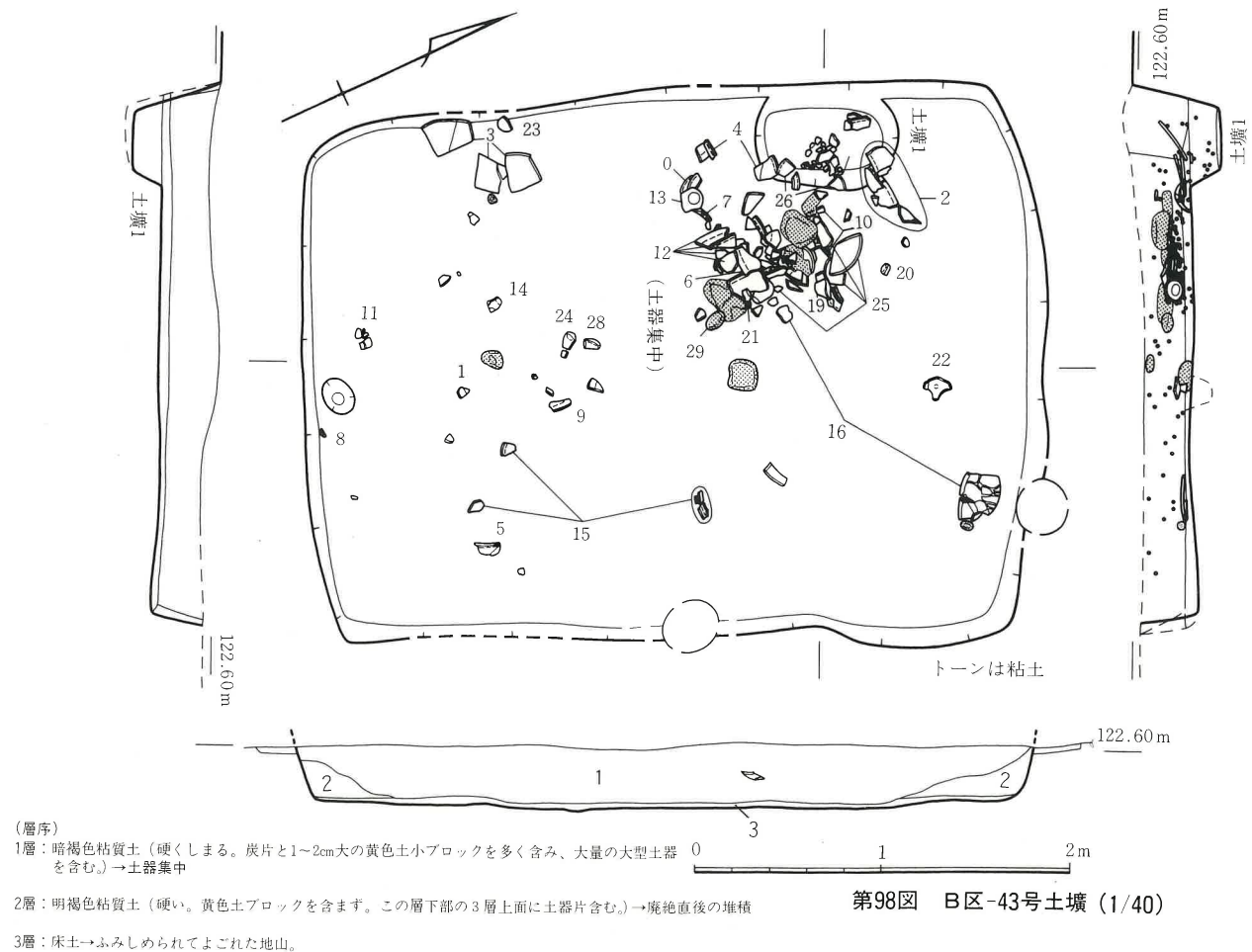
にまとまって出土した。土器は大型土器破片が多く、0の壺口縁片、2の大型甕口縁片、4・6～8・10～13の甕口縁片、17～22の甕底部、25・26の蓋片、27の高坏脚部が出土した。壺・蓋・高坏は被熱していないが、甕と器台はよく被熱している。1層は一気に埋没しており、遺物一括廃棄をともないながら埋め戻された可能性が高い。ところで粘土の固まりが廃棄されているのは、この遺構をふくめてきわめて限られる。おそらくこの作業土壌と廃棄された粘土、そして近接する推定土器焼成坑（B-41土壌）の三者は関係が深いものと推定される。

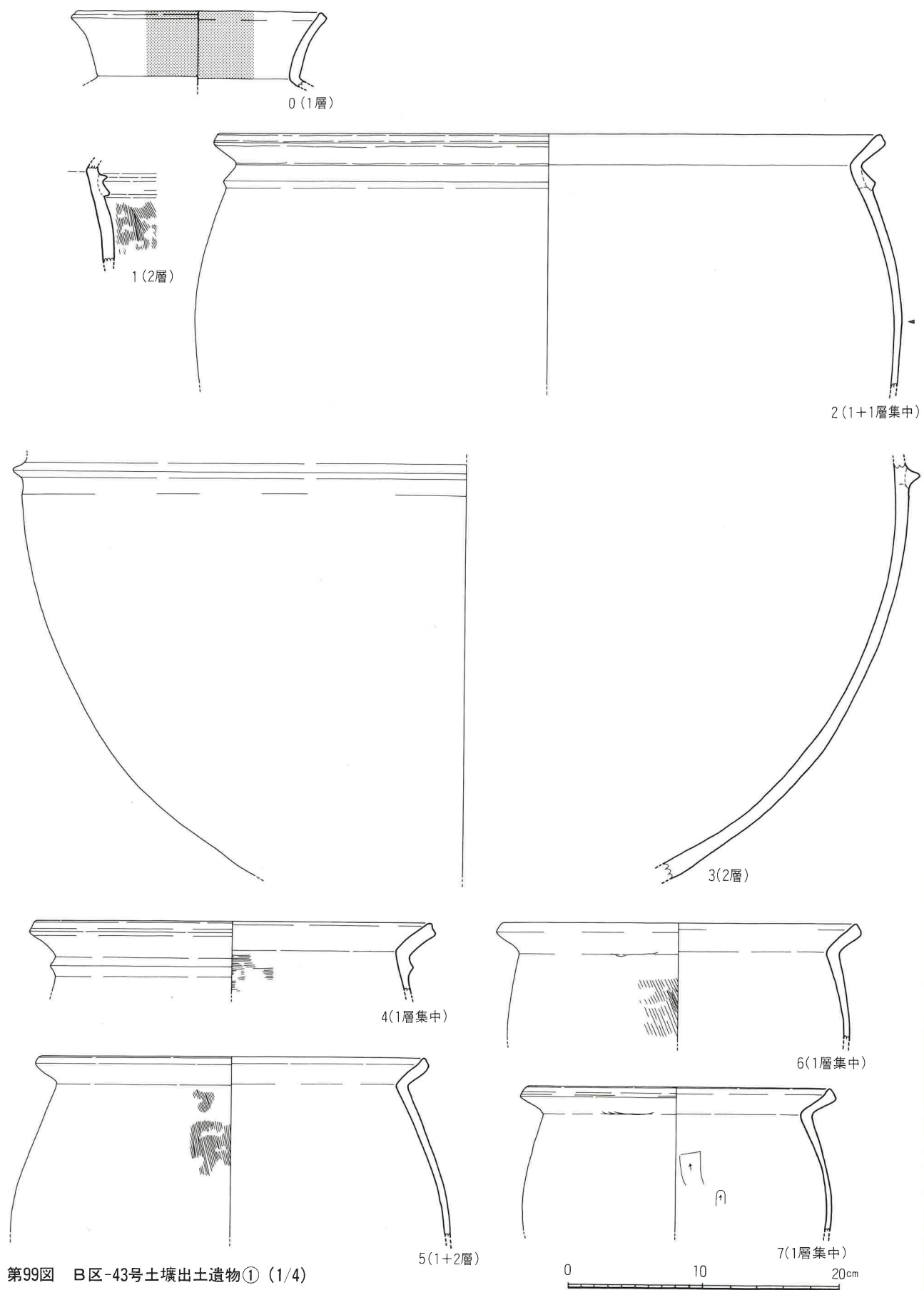
出土土器の胎土はすべて在産である。0は丹塗りのある須玖系の壺D、1は頸部にM字突帯を施す甕、2・3は大型甕で甕棺の胎土によく似ている。4～16は遠賀川以東系の甕A、17～24は甕Aの底部と推定される。25・26は蓋で、27・28は高坏Dである。28の高坏は焼けている。大型破片の中には表面が薄く剥離したようなものが目立つので、廃棄された土器のなかには焼成失敗品が含まれている可能性がある。また甕の底部には内面に砂粒含みの胎土をもちいた例（底部A）はない。

土器廃棄の時期は、出土土器からみて弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。（旧D地区竪穴住居35）

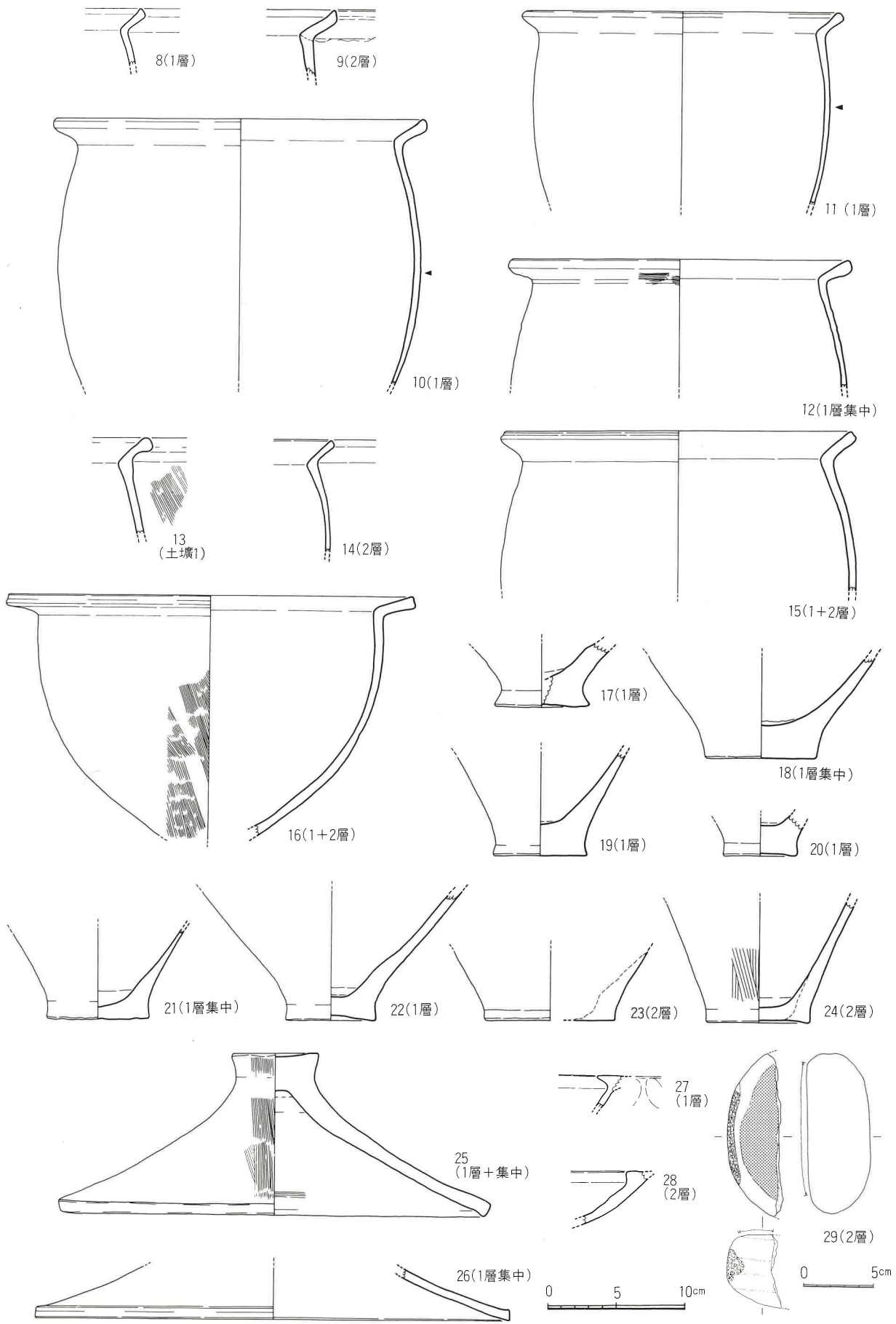
B区-44号土壌（第101図）

I 1 調査区で検出された小型円形の土壌で、底は丸い皿状である。規模は長軸長78cm、短軸長68cm、検出面か

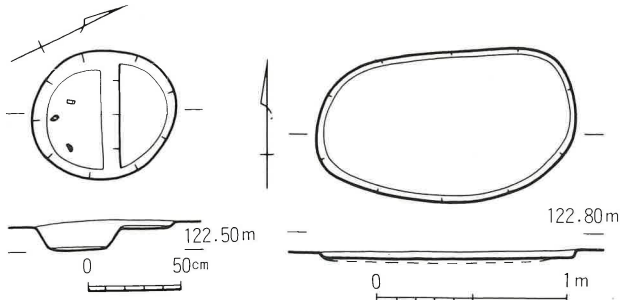




第99図 B区-43号土壙出土遺物① (1/4)

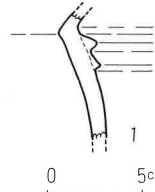


第100図 B区-43号土壞出土遺物②(1/4)



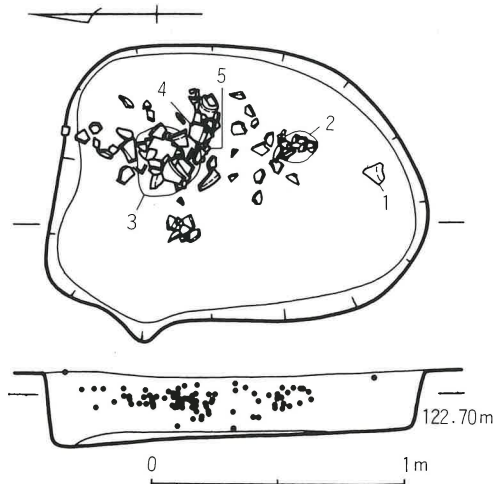
第101図
B区-44号土壌 (1/40)

第102図 B区-45号土壌 (1/40)



第103図 B区-45号
土壌出土遺物(1/4) 一図版16)

らの深さは16cmである。性格は不明である。断面観察をおこなっていないので、埋没状態の詳細は不明である。埋土中から土器の細片が出土している。この土器から弥生時代中期後半の土壌と認定した。(旧D地区土壌420)

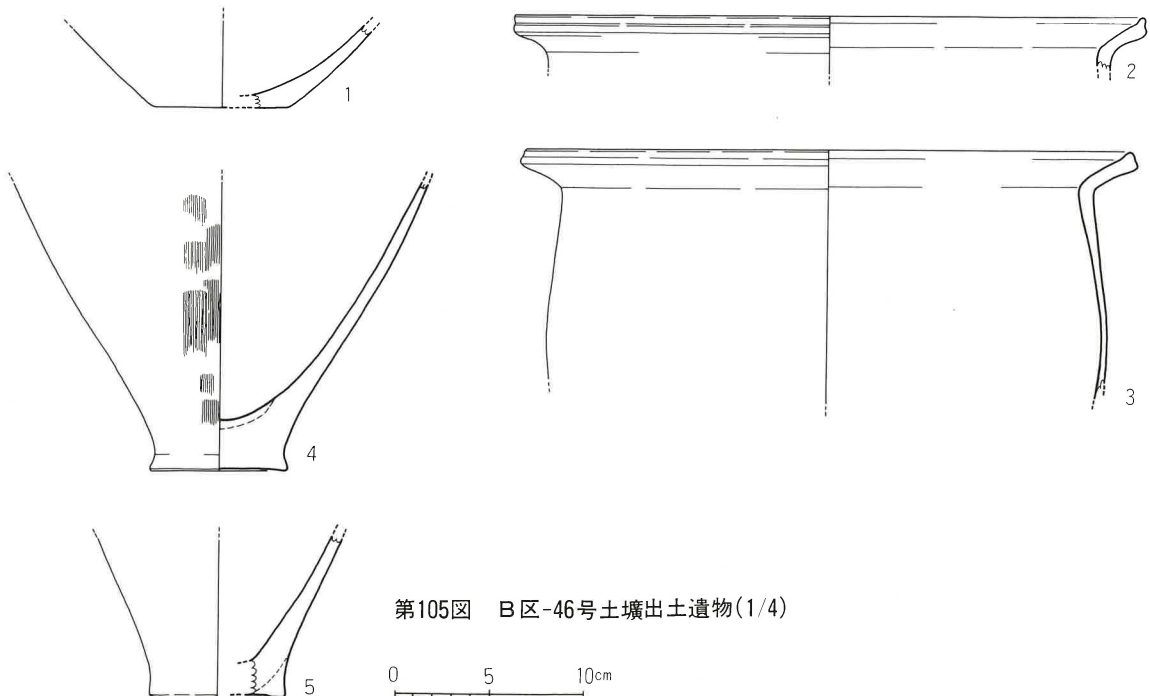


第104図 B区-46号土壌 (1/30)

I O 調査区で検出された長円形の浅い土壌である。規模は長軸長 135 cm、短軸長 79 cm、検出面からの深さは 10 cm である。底面は平坦なので、何らかの使用目的をもって掘られた土壌と考えられるが、その用途は不明である。埋土は土器細片を含む暗黄褐色の単一層 (1 層) で、その層中から頸部に M 字突帯を貼りつけた甕の破片を検出した。その土器からこの時期の遺構と認定した。(旧D地区土壌 478)

B区-46号土壌 (第104・105図 一図版16・42)

同じく I O 調査区で検出された不定形の大型土壌で、底面はやや傾斜するがおおむね平坦である。規模は長軸長 153 cm、短軸長 105 cm、検出面からの深さは 30 cm である。底面の形状からみて何らかの使用目的をもって掘られた土壌と考えられるが、その用途は不明である。埋土は多量の黄色土ブロックと、炭片と焼土片をわずかに含む暗黄褐色の単一層 (1 層) である。その中ほどに遺物一括廃棄がある。いずれも土器の小片でばらばらになった破片を片付けたような印象を与える。黄色土ブロックを多量に含むので埋め戻しの過程で土器片の一括廃棄がおこなわれたと推定される。



第105図 B区-46号土壌出土遺物(1/4)

一括廃棄の土器には、1の壺底部片、2・3の遠賀川以東系の甕Aの口縁部片、4・5の甕底部片が含まれる。とくに4の甕底部は内面底部に砂粒を多量に含む胎土を用いる底部Aである。胎土は在地産で、底部片は被熱している。土器廃棄の時期は、出土土器からみて弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。(旧D地区土壌481)

B区-1号土器溜まり (第106・107図 一図版42)

E3調査区で検出されたもので、土器を多量に検出したが遺構の輪郭をつきとめることができなかつたので、「土器溜り」と呼んで報告する。土器片の分布・集中には偏りが認められ、中央部の特に集中する地点はおそらく土器が廃棄された土壌である可能性が高い。

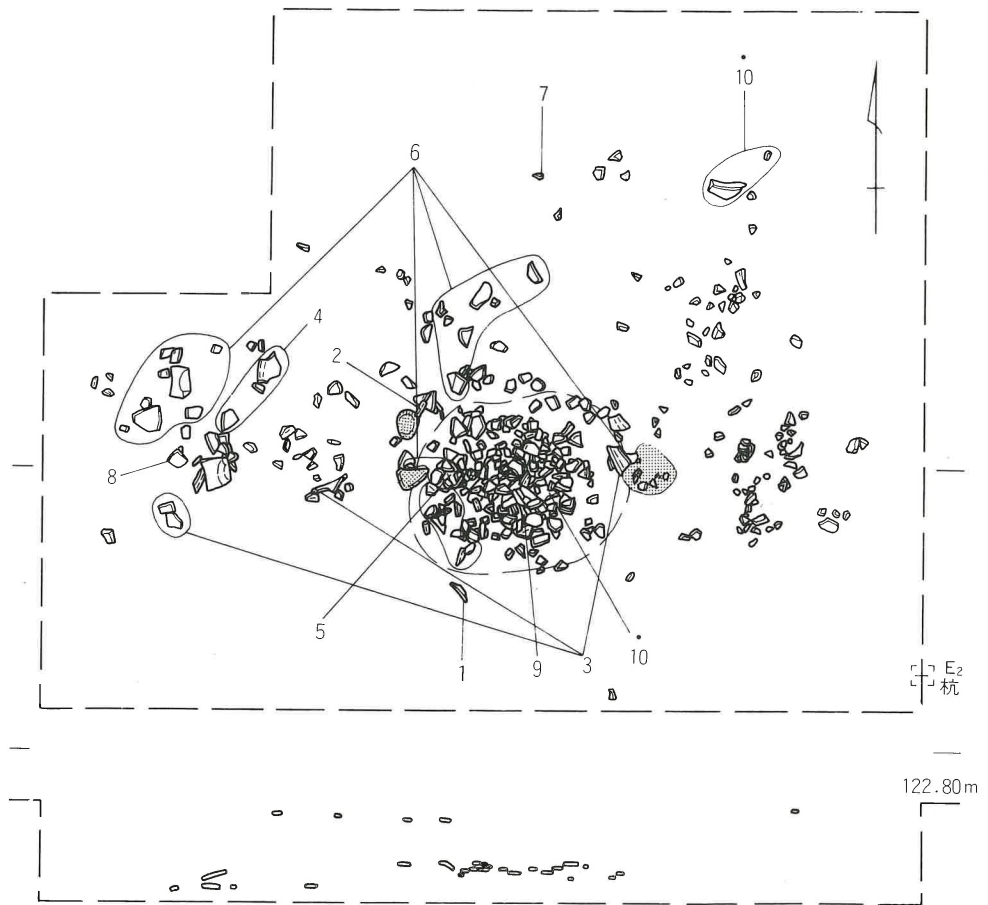
出土土器の胎土はすべて在地産である。器種は甕・器台と高坏で、壺は含まない。甕と器台は被熱するものが多い。1～5は遠賀川以東系の甕Aである。6・7は甕Aの底部と推定される。8・9は器台である。10は完形に復元できた高坏。7の甕底部片の一部は、土器焼成坑と推定したB-40土壌の廃絶後の一括廃棄層(1層)に混入していた。おそらくB-40土壌と同時に廃棄されたと推定される。

土器廃棄の時期は、出土土器から弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。(旧A地区1号集中)

2) 墓 (第4・6表)

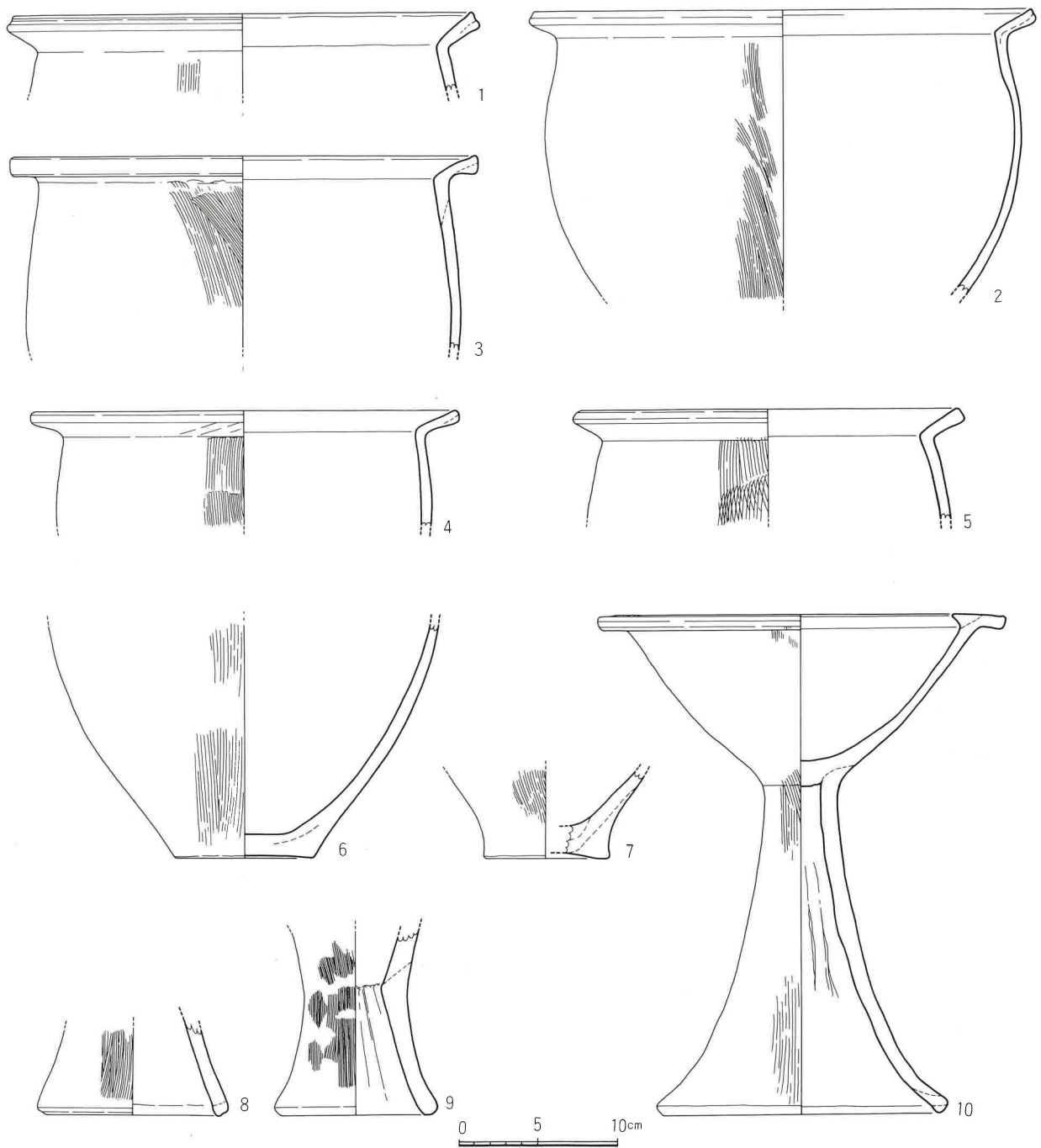
B-2墓からB-7墓までの6基の墓がこの時期のものである。B-2墓とB-3墓の二基はいずれも小児墓で、上下とも甕を転用した合口甕棺墓である。B-43土壌のまわりにあり、推定される頭位方向はいずれもその土壌の方を向いている。これに対し残りの4基の周辺には竪穴住居跡や土壌のような生活遺構がなく、独立した墓地の一部と推定される。墓の形式は成人用が石蓋土壌墓・土器蓋甕棺墓・土器蓋土壌墓というように変化にとみ、小児墓も高坏と甕を合口にしたもので、前記した二基とは異なっている。またこの四基は頭位が東向きに揃っている。

成人用が石蓋土壌墓・土器蓋甕棺墓・土器蓋土壌墓というように変化にとみ、小児墓も高坏と甕を合口にしたもので、前記した二基とは異なっている。またこの四基は頭位が東向きに揃っている。



第106図 B区-1号土器溜まり (1/30)





第107図 B区-1号土器溜まり出土遺物 (1/40)

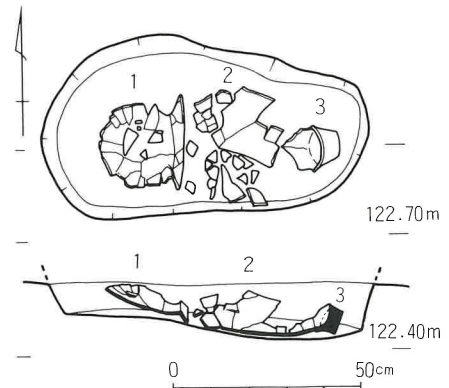
B区-2号墓 (第108・109図 一図版16・43)

G2調査区で検出された合口甕棺墓で、上半は削平されている。上下ともに甕をもちいる。墓壙の平面形は土器の形にあわせた楕円形で、その規模は長軸長82cm、短軸長49cm、検出面からの深さはもっとも深いところで16cmである。土器の大きさからみて小児用の甕棺墓である。西側の甕の底部が高くなるように置かれているので西頭位と推定される。頭位の方法は方位角で270度となり、B-43土壌の方向に頭を置いたことになる。甕棺内の土はすべてふるいにかけてが、遺物は検出できなかった。したがって、副葬品はなかったと推定される。

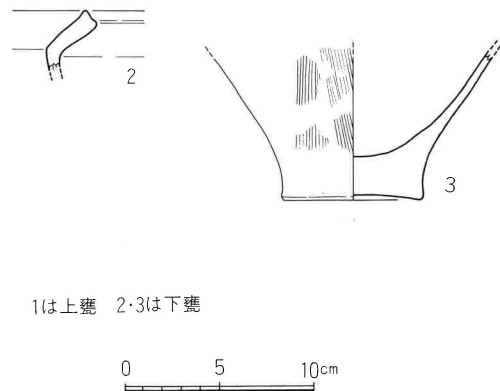
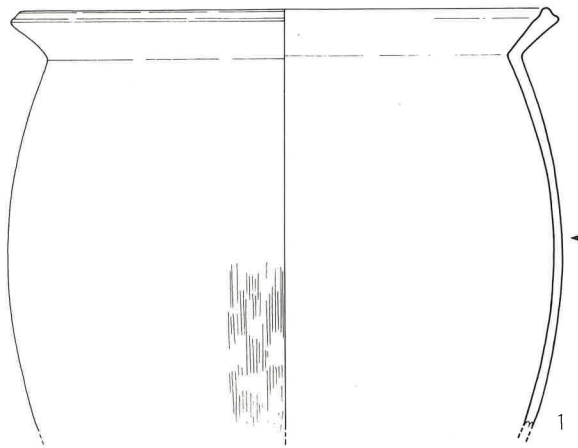
上甕に使われた1の甕は遠賀川以東系の甕Aである。下甕に使われた2・3の甕も遠賀川以東系の甕Aである。1は被熱しており、3の底部は被熱していない。甕棺の時期は弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。(旧D地区甕棺8)

B区-3号墓 (第110・111図 一図版16・43)

H1調査区で検出された合口甕棺墓で、B-5溝(近世)に上部を削平され、つぶれた状態で検出された。上下ともに甕をもちいている。墓壇の平面形は土器の形にあわせた楕円形で、南西側が高くなっている。その規模は長軸長92cm、短軸長54cm、検出



第108図 B区-2号墓 (1/20)



1は上甕 2・3は下甕

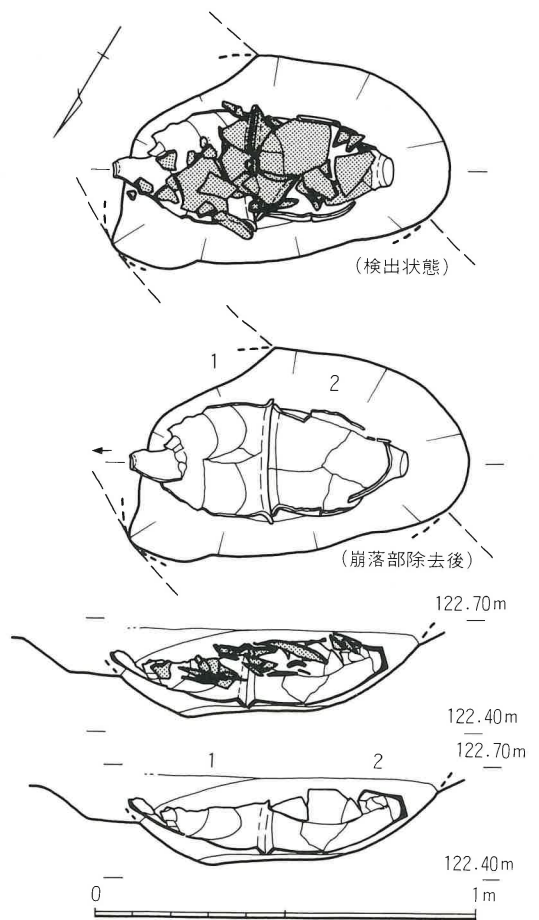
第109図 B区-2号墓出土遺物 (1/4)

面からの深さは24cmである。土器の大きさからみて小児用の甕棺墓で、北東側の甕の底部が高くなるように置かれていることから東北頭位と推定される。頭位の方法は方位角で60度である。この墓もB-43土壌の方向に頭を置いたことになる。甕棺内の土はすべてふるいにかけたが、遺物は検出できなかった。したがって副葬品はなかったと推定される。

上甕に使われた1の甕と下甕に使われた2の甕はどちらも遠賀川以東系の甕Aである。1・2の甕はまったく被熱していない。通常の炊事用の甕であるのに使われた痕跡がない。つまり未使用の新品を埋葬用に転用したものと推定される。また2の甕は内面底部に砂粒を多量に含む胎土を用いる底部Aである。甕棺の時期は弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。(旧D地区甕棺7=墓2)

B区-4号墓 (第112図 一図版17)

M18調査区で検出された石蓋土壇墓で、B-5墓と平行して作られている。蓋石がやや落ち込んだ状態で検出された。墓壇は長方形の二段掘りである。上段の規模は長さ188cm、幅104cm、検出面からの深さは43cmである。石蓋をかぶせている下段の墓壇は上段墓壇の中央にやや方向をずらして掘りこまれ、その規模は長さ182cm、幅61cm、深さは27cmである。下段墓壇の規模から成人用の墓と推定される。蓋石の置き方は、まず安山岩の板石を西から東の順で三枚重ねねにかぶせ、最後に頭部と脇に安山岩のきめの細かい角礫をかぶせている。この角礫と同質の石はB-7墓の最後にも置か



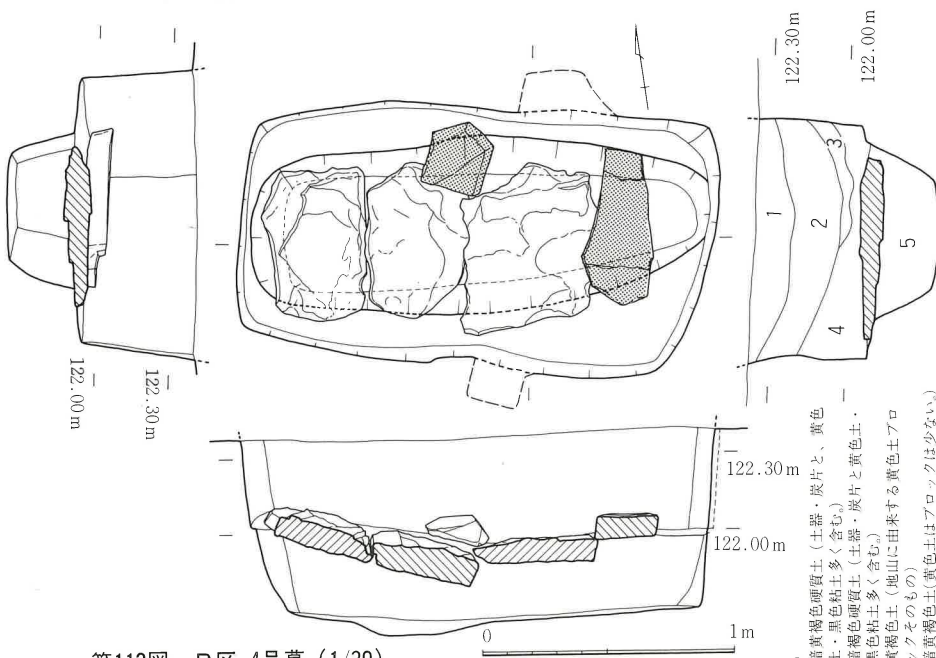
第110図 B区-3号墓 (1/20)



第111図 B区-3号墓 (1/4)

れている。蓋石の重ね方からみて被葬者の足元からかぶせはじめ、最後に顔をふさいだものと推定される。したがって東頭位に死者を安置したものと考えられる。そうすると墓壇の頭位方向は方位角94度となり、ほぼ東向きである。墓壇内の土はすべてふるいにかけてが、遺物は検出できなかったので副葬品はなかったと推定される。

ところでこの墓の蓋石の幅は下段墓壇の幅より狭く、そのままかぶせたのでは蓋石が落ちてしまうはずであるが、実際はやや落ち込んでいたものの、きちんと正しくかぶせた状態になっていた。墓壇内部には黄色土ブロック混じりの土が堆積していたので、おそらく被葬者を横たえて土壇内に土を入れて、その上から蓋石を重ねたものと推定される。墓の時期は、弥生時代中期後半の墓地の一角で発見されたことから、この時期と認定した。(旧D地区土壇452)



第112図 B区-4号墓 (1/30)

(層序)
 1層：暗黄褐色硬質土(土器・炭片と、黄色土・黒色粘土多く含む)
 2層：暗褐色硬質土(土器・炭片と黄色土・黒色粘土多く含む)
 3層：黄褐色土(他山に由来する黄色土ブロックそのもの)
 4層：暗黄褐色土(黄色土はブロックは少ない)
 ※以上は、上段墓壇埋土
 5層：暗褐色土(マサバサした土、水分が多く粘質強い、3~5cm厚の黄色土ブロックを多量に含む)→人為的な埋土

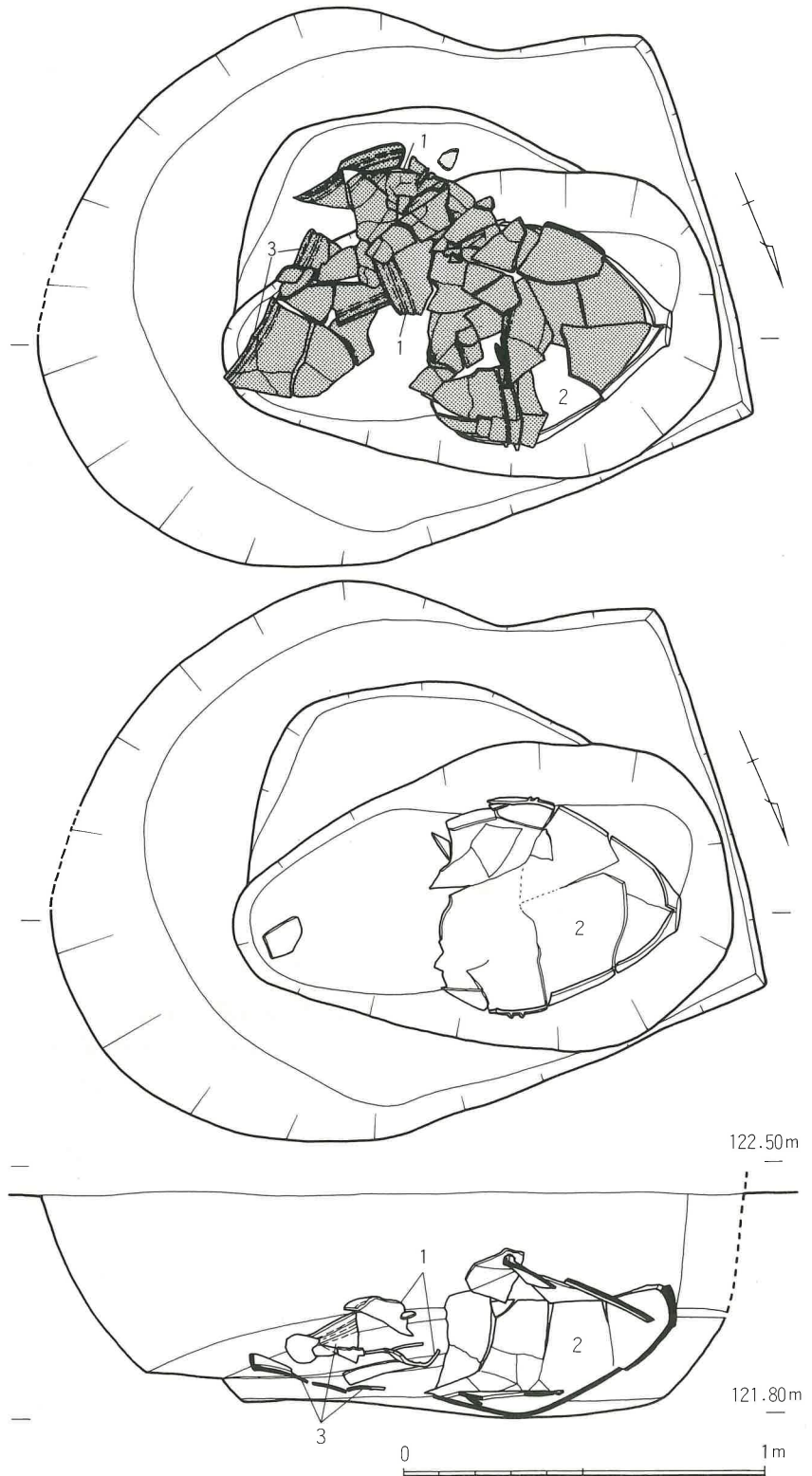
B区-5号墓 (第113~115図 一図版17・18・43)

B-4墓の南となりとに近接し、ほぼ平行して設けられた土器蓋甕棺墓である。墓壇の平面形は土器の形にあわせた楕円形の二段墓壇である。上段墓壇の西側が角張っているのは輪郭の検出を誤ったための掘りすぎである。上段の規模は長軸長190cm、短軸長154cm、検出面からの深さは51cmである。下段の規模は長軸長133cm、短軸長87cm、深さは12cmである。下段墓壇の平面形は甕棺の

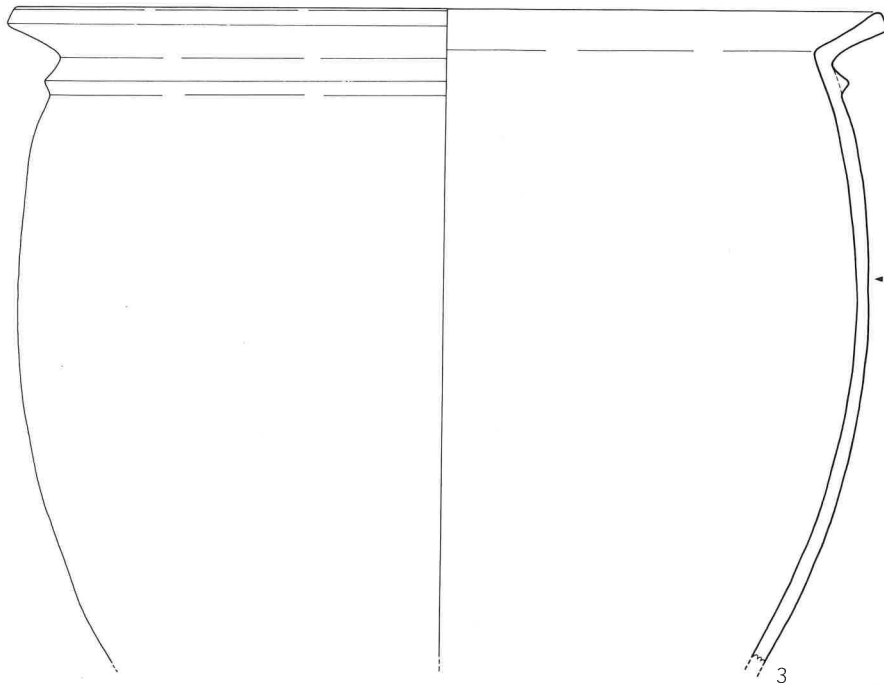
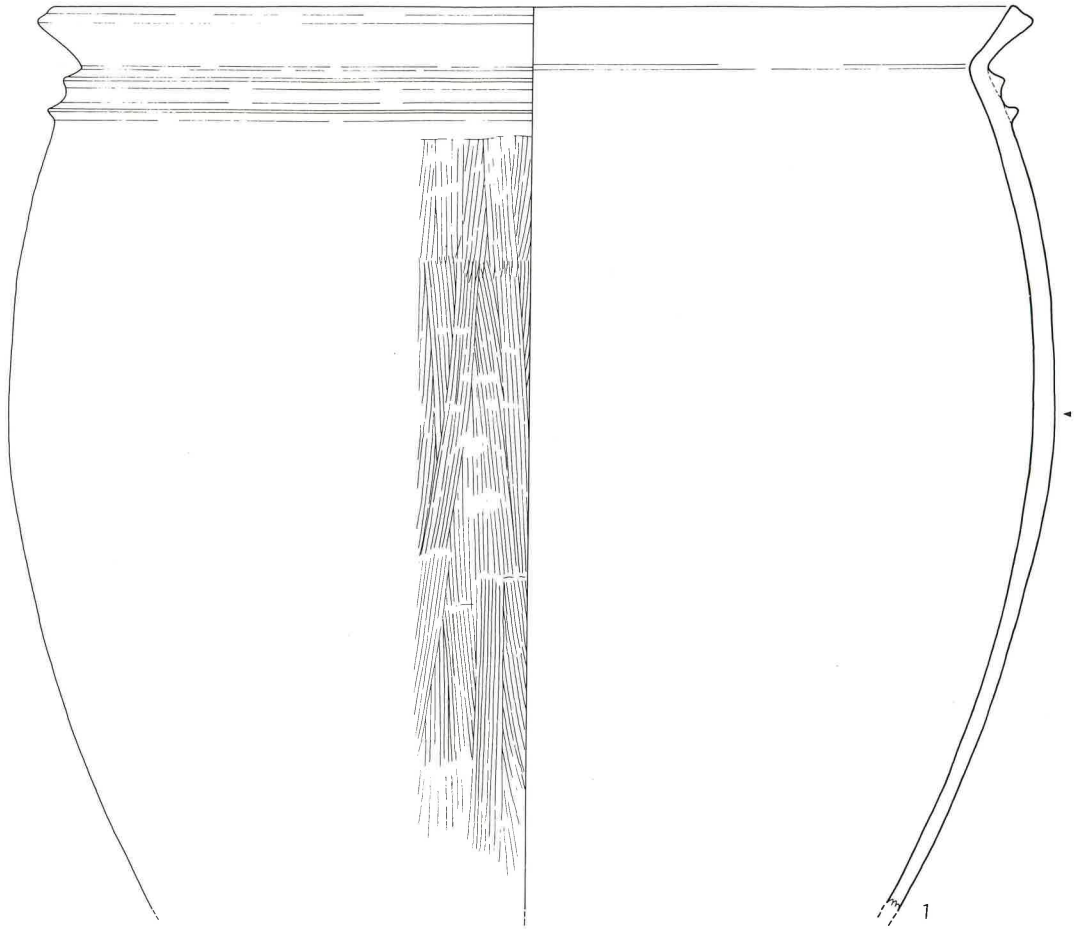
形にあわせた西側が広い楕円形で、東側がやや高くなっている。これに対し上段墓壙は東側が丸く大きくふくらんでいる。この形は甕棺の搬入口が東側にあったことを推察させる。下甕の大きさからみて成人用の甕棺墓で、蓋には本来上甕に使われてもよい大型の甕が2個体大きく割って被せられていた。下甕から推定される頭位方向は、方位角で113度のおおよそ東向きである。甕棺内の土はすべてふりにかけたが、遺物は検出できなかったので副葬品はなかったと推定される。

下甕には第115図2の遠賀川以東系の大型広口壺が使用されている。口縁部を丁寧に打ち欠いた中型の成人用甕棺である。胴部には二条の高い台形突帯がつき、外面にはうっすらとタタキの痕跡が観察される。3の大型甕は底部下半がなく、上半の3分の1の破片は外面を上にかぶせるように置かれていた。遠賀川以東系の甕Aの大型品で、口縁直下に一条の三角突帯がめぐる。1は下甕と2の大型破片の上にかぶせられていた大型甕で、20～30cm大の破片に割ってかぶせていたが、底部の破片はなかった。形態は基本的に遠賀川以東系の甕Aだが、口縁直下の三角突帯は二条で、外面のハケメもナデ消していない。蓋に使用された2・3の甕は底部を取り除いたうえで利用されており、豊前地方の土器蓋墓の強い影響が認められる。

墓の時期は、土器からみて弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。(旧D地区甕棺5)



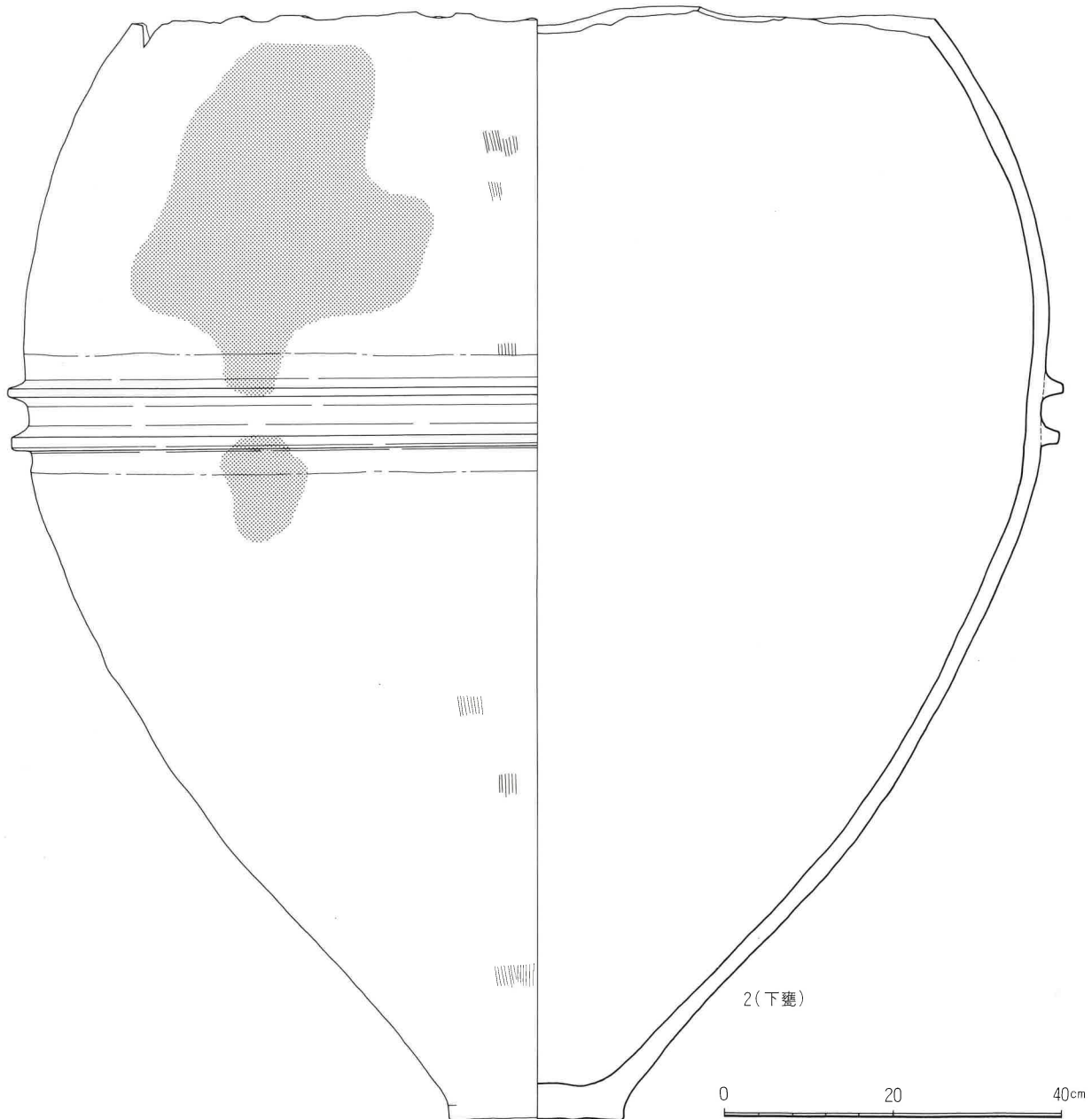
第113図 B区-5号墓 (1/20)



1・3は土器蓋

0 10 20cm

第114図 B区-5号墓出土遺物①(1/4)

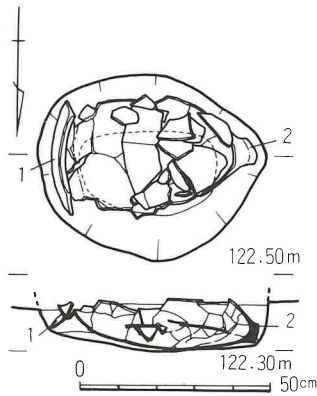


第115図 B区-5号墓出土遺物②(1/8)

B区-6号墓 (第116・117図 一図版19・44)

成人墓にかこまれたM17調査区で検出された合口甕棺墓で、下甕に蓋としての高坏を被せている。上半は削平されていたが、つぶれた状態で検出した。墓壙の平面形は土器の形にあわせた楕円形で、底面は東側がやや高い。その規模は長軸長61cm、短軸長50cm、検出面からの深さは13cmである。土器の大きさからみて小児用の甕棺墓で、高坏の方向から東頭位と推定される。頭位の方法は方位角で89度となる。甕棺内の土はすべてふるいにかけて、遺物は検出できなかったので副葬品はなかったと推定される。

「上甕」に使われた1の高坏は丹塗りを施した須玖系の高坏Dで、おそらく脚部を折りとられて坏部のみを使ったものであろう。下甕に使われた2の甕は速賀川以東系の甕Aで、被熱して煤が付着している。通常の炊事用の甕を埋葬用に転用している。また2の甕は内面底部に砂粒を多量に含む胎土を用いる底部Aである。甕棺の時期は弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。(旧D地区甕棺4)



第116図 B区-6号墓 (1/20)

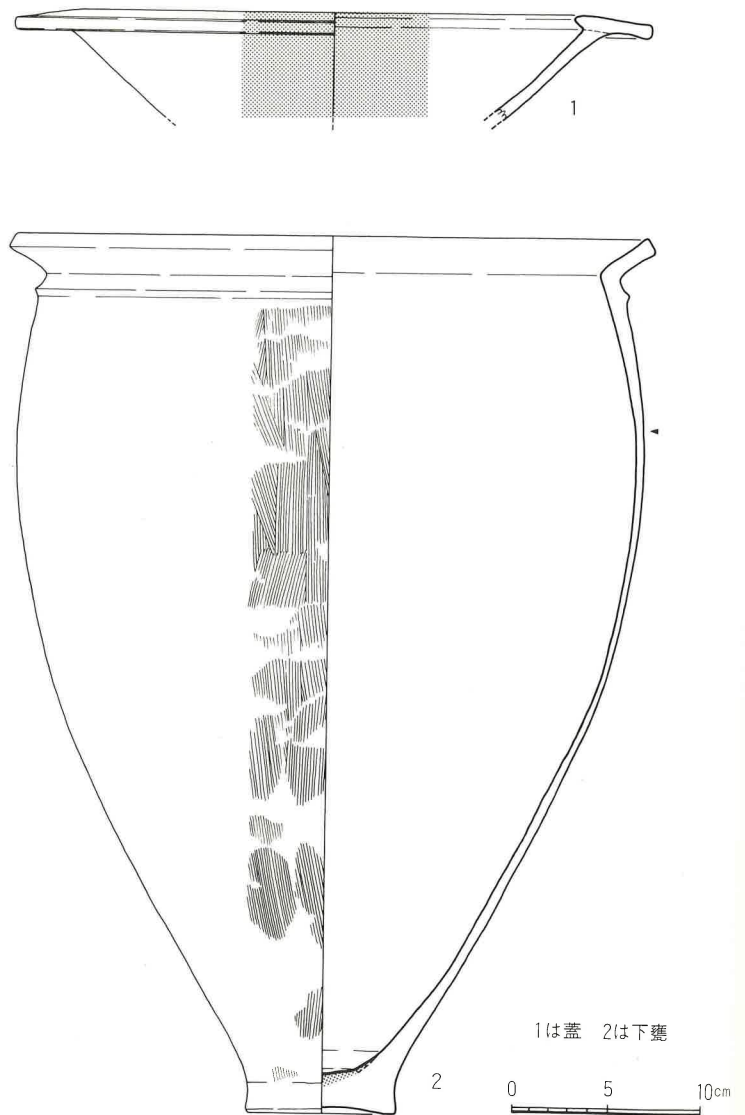
B区-7号墓 (第118～120図 一図版 19・44)

N 17 調査区で検出された土器蓋土墳墓で、最も西に位置している。墓墳の平面形は、甕棺を据えていないにもかかわらず土器の形にあわせたとおもわれる楕円形で、東側は階段状になった変形の二段墓墳である。当初は、B-5墓同様に甕棺を安置する予定であったのに、何らかの理由で甕棺を割って蓋に転用したと思われる。上段の規模は長軸長126cm、短軸長93cm、検出面からの深さは42cmである。下段の規模は長軸長95cm、短軸長93cmで、深さは13cmである。蓋にはB-5墓で甕棺に使用されたものと同じ大きさの甕を大きく割って利用しているので成人用と推定される。また土器で蓋をしたのち、B-4墓の蓋石の一部に利用されたものと同じ安山岩のきめの細かい角礫を三つ最後にかぶせている。

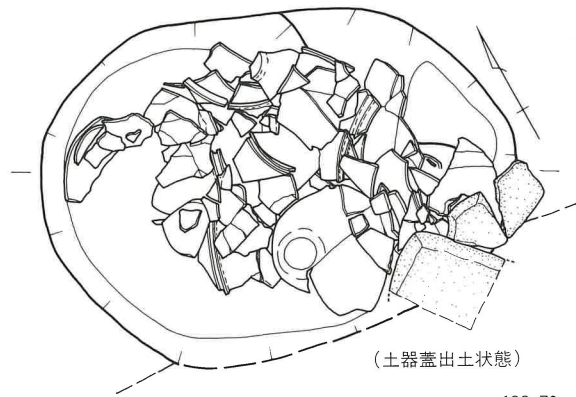
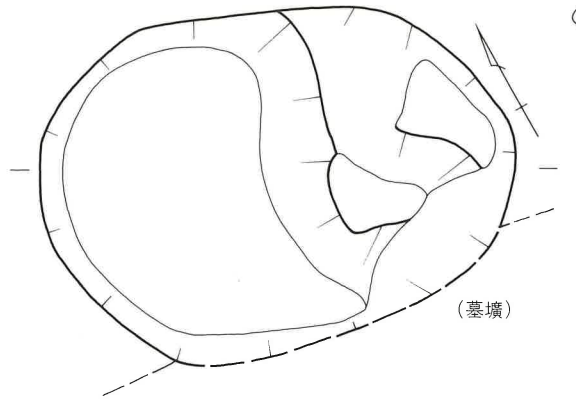
この角礫はB-4墓の石蓋の最後に置かれた石とまったく同質のものである(註1)。その石の置かれた方向からみて頭位は南東頭位と考えられる。墓墳内の土はすべてふるいにかけたが、遺物は検出できなかったので副葬品はなかったと推定される。なお埋土は炭片と焼土片を多量に含む暗褐色の軟らかい土で、分層はできなかった。

甕棺葬ならば本来下甕として使われるべき2の大型広口壺が、割られて重ねられている。破片のほとんどは外面を上に向け、底部の破片は逆さにされて最後に置かれている。この壺を復元すると頸部以上を丁寧に打ち欠いていることがわかる。B-5墓の壺とまったく同じ打ち欠き方法である。おそらく埋葬の準備段階まではB-5墓のように甕棺葬にする予定だったが、埋葬実施段階に変更されたものと推定される。土器そのものは胴部に二条の高い台形突帯がつく中型の成人用甕棺である。B-4墓3と同一型式である。1の甕は日常品で被熱して煤の付着した既用品を埋葬に転用したもので、同じくばらばらに破砕されて土壌の西側を中心に2の破片をおおように置かれていた。復元すると完形になった。しかし2の壺の上甕に使うには口径が小さすぎたので、「上甕」に予定されていたとは考えるのは疑問である。この甕は遠賀川以東系の甕Aである。

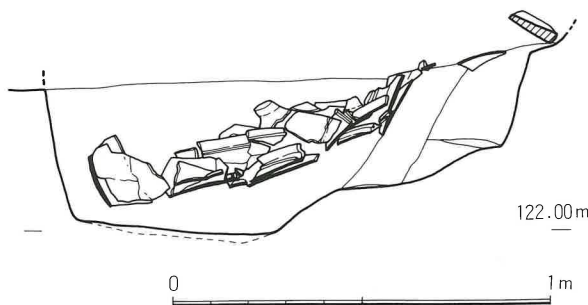
墓の時期は、土器からみて弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。(旧D地区土壌444)



第117図 B区-6号墓出土遺物 (1/4)

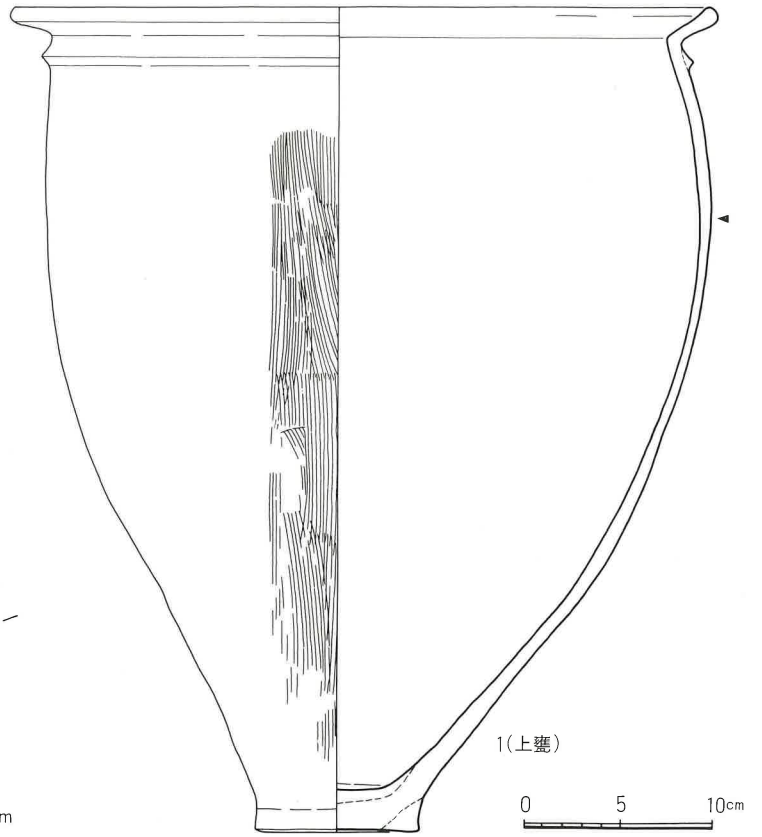


122.70m



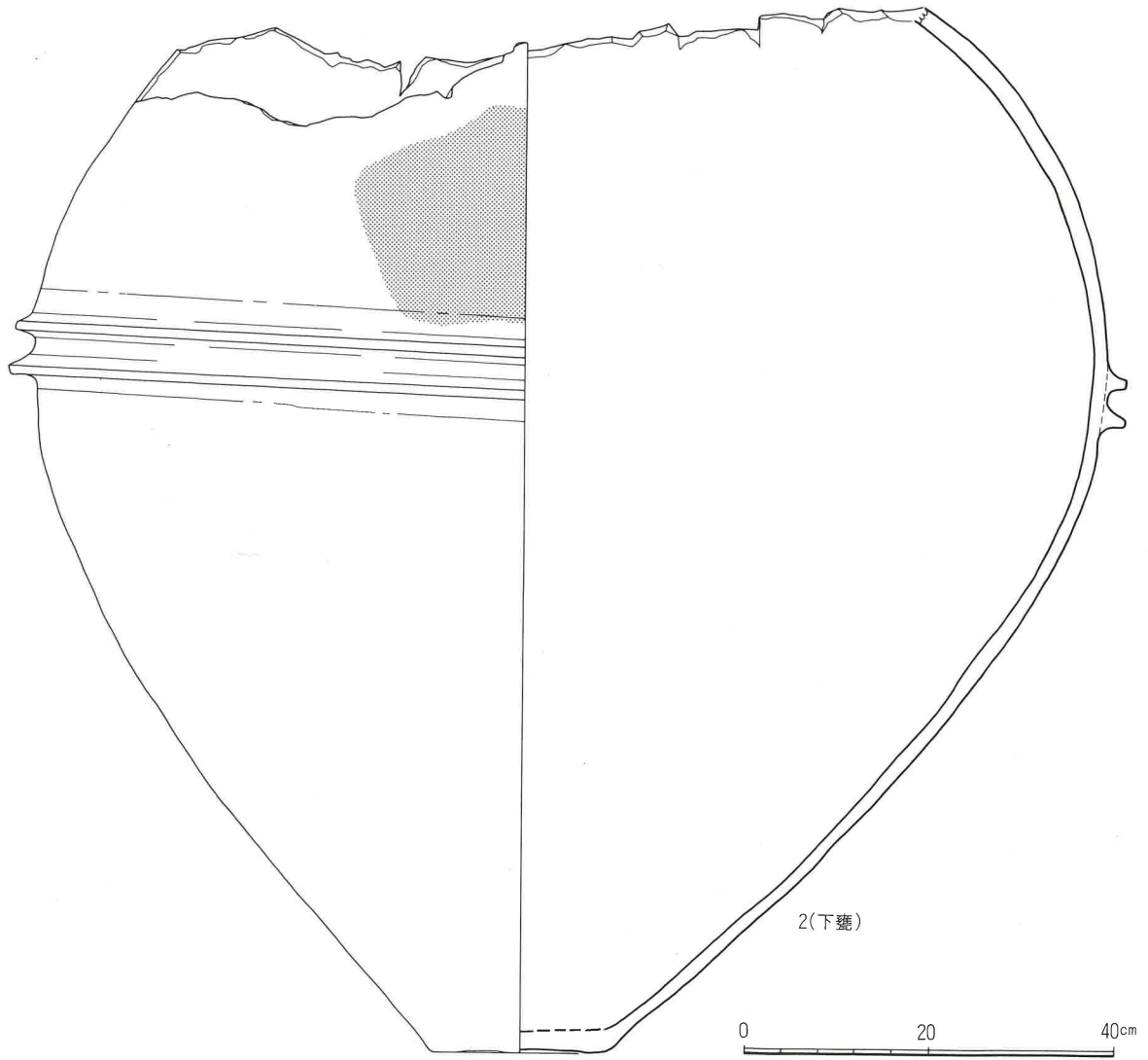
0 1m

第118図 B区-7号墓 (1/20)



第119図 B区-7号墓出土遺物①(1/4)

註1、弥生時代前期末の墓であるB-1墓の北端に置かれた石とも同質であり、時代をこえて小迫辻原遺跡を利用した集団に受け継がれた埋葬習慣のひとつとみなせる。



第120図 B区-7号墓出土遺物②(1/8)

3) ピット (第121図、第6表)

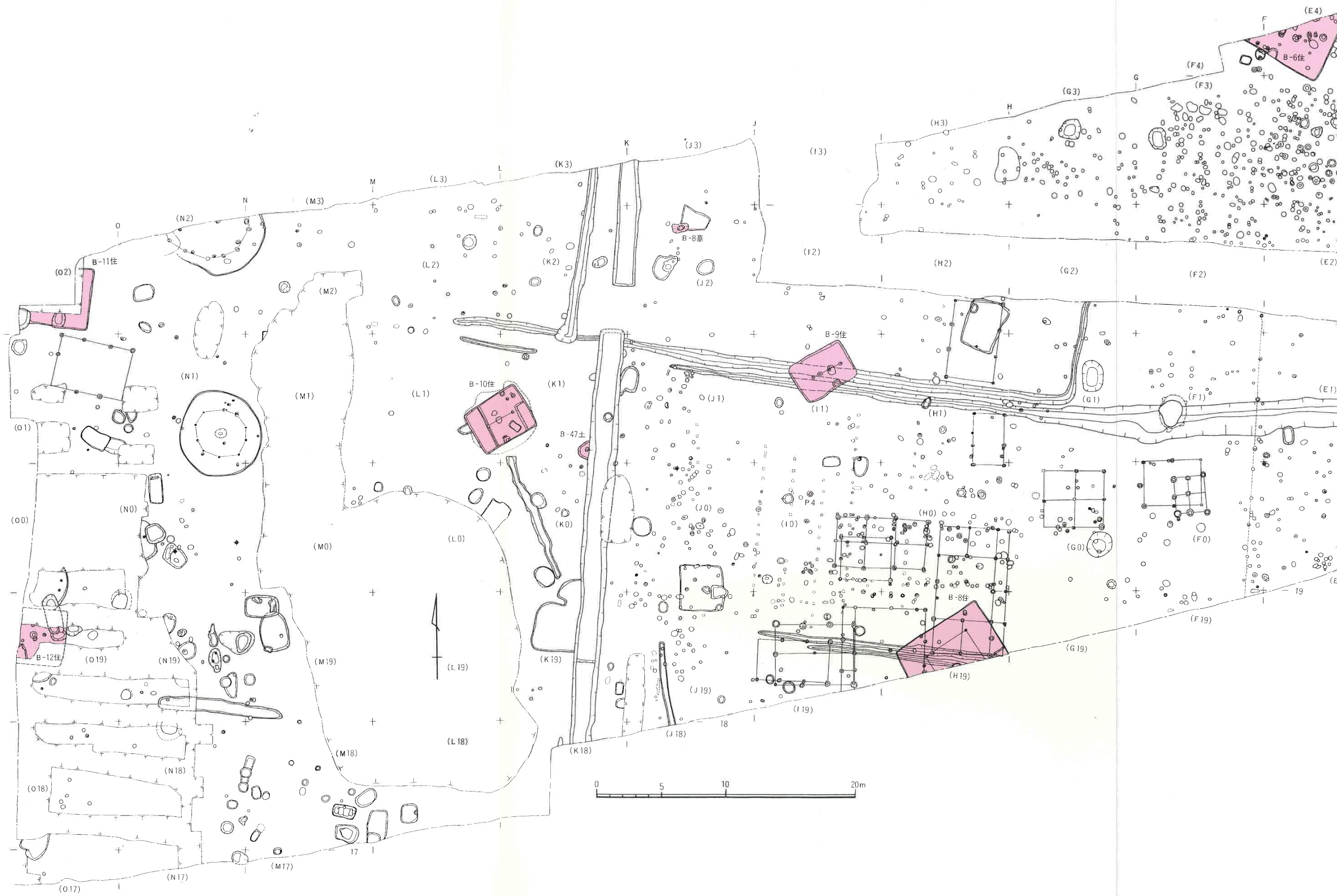
遺物の出土状態から、弥生時代中期後半と認定したのは以下の二例である。

E1 調査区ピット2からは、1の甕口縁片が出土した。この土器は遠賀川以東系の甕Aである。GO 調査区ピット3からは2の甕口縁片が出土した。この土器も遠賀川以東系の甕Aである。



第121図 B区-ピット出土遺物 (1/4)

第122図 小迫辻原遺跡B区遺構配置図④
—古墳時代前期前半— (1/300)





第4節 古墳時代前期前半（第122図）

この時期の遺構はB区全体に散発的に分布する。竪穴住居跡9軒・土壇1基と墓1基を確認し、ほかにピット1本を本文に掲載した。この時期のピットはまだ存在する可能性が高く、掘立柱建物がなお存在したことを考慮しなければならない。遺構の配置の特徴として竪穴の方向に統一性がある。竪穴は長軸方向から次の三群に分けることが可能である。第1は長軸が北西から南東方向をとるB-6住の1軒、第2は北東から南西方向をとるB-4・5・7・9・10住の5軒、第3は南北方向をとるB-11・12住の2軒である。特に第2の竪穴群の方向はA区の竪穴群の方向と一致しており、小迫辻原遺跡内のかなり広い空間で、同一方向に建物を建設する時期があったことをうかがわせる。ちなみにこの三群は時期が微妙に異なっている。すなわち第1群が小迫辻原1～2期、第2群が小迫辻原3期、第3群が小迫辻原4期に相当する。ちなみに第2群の竪穴住居跡の方位角は1号方形環溝の角度と近似する。

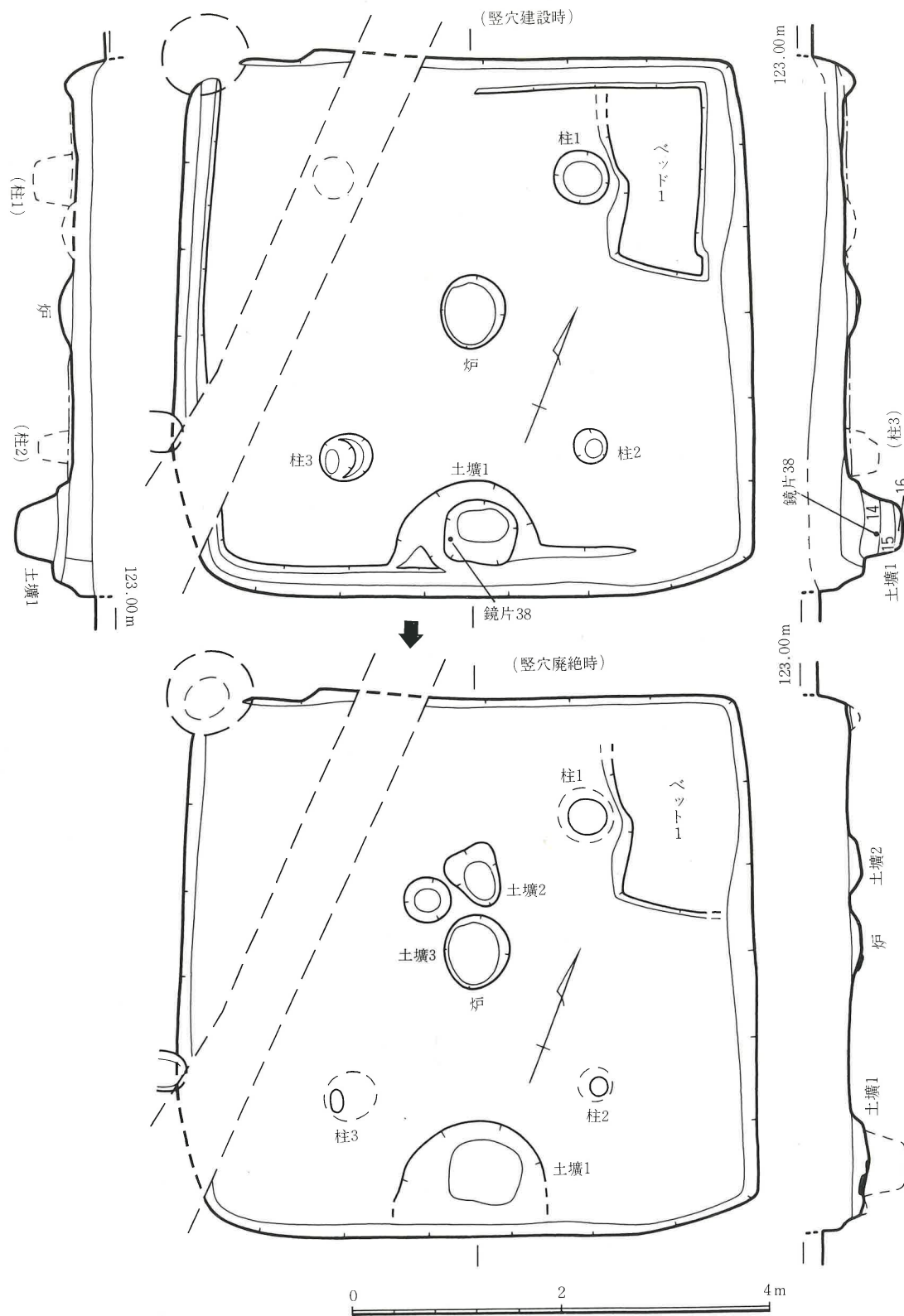
1) 竪穴住居跡（第1・6表）

B区-4号竪穴住居跡（第123～127図 一卷頭図版11・図版20・21・44・45）

B区とC区間の農道下で検出された方形竪穴建物で、中央西寄りに現在の水道管が走りその一部を破壊している。規模は東西長軸長560cm、南北短軸長510cmでやや東西に長く、深さは28cmである。東西長軸の方位角は68度で、床面積は25.3㎡の中型竪穴である。南西の柱穴1本が水道管によって破壊されているが、ほぼ等間隔に配置された4本柱の構造に復元でき、柱穴の深さも揃っている。ベッドの背後を含めて周溝がほぼ全周し、土層の観察からみて建設時に掘削された壁材固定用の溝と考えられる。床面は、踏みしめられて硬化した床である。なお床面の下には建設時の土壌は存在しなかった。

内部施設としては、東北隅に浅く短いベッド状遺構が柱穴1に接して設けられている。このベッドは地山を削りだしたものである。中央の炉は焼土面のある地床炉である。南辺中央の壁に接して土壇1があるほか、炉の周辺に小土壇が2箇所検出された。その小土壇2と3は建設当初から設けられたものではない。土壇2は竪穴使用中のある時点で付加されたもので廃絶時には炉と並んで存在し、土壇3は廃絶時の祭祀行為にともなって掘られた可能性が高い。炉とベッドの存在とその規模からみて、この竪穴建物は居住用の竪穴住居とみられる。ところで南辺に設けられた大型の土壇1は、通常炉の南側に設けられる対面土壇で、その上部は実際廃絶時まで開口していたことが埋没状態の観察から明らかである。ところがその「底部」のさらに下に、もう一段深い土壇が検出された。一見二段掘りの土壇に見えるが、その下の土壇は埋土が異なっており（第124図）、下部埋土の14～16層は、それまで多量に検出されていた土器片や炭・焼土などをまったく含まず、黄色土ブロックを多量に含む明るい黄褐色土が詰まり、明らかに故意に埋められた状態であった。そしてこの土壇の14層中の西の壁際に中国製舶載鏡片（38）が見つかったのである。したがってこの鏡片は明らかに埋納されたものである。しかしこの土壇は鏡片を埋納するために掘られたものではない。鏡片は土壇を埋める行為の最終段階に近い時にその片隅に置かれたのであるから、土壇の中央の下部には何か別な、鏡片以上に重要な意味をもった品物が埋納されたはずである。調査時に検出できなかったのも、何かは不明であるが、おそらく腐朽してしまうようなもの、つまり人体から繊維製品などにいたる有機物の可能性が高いであろう。先にふれたようにこの土壇の上段部は、通常の土壇として使用されていたと考えられるので、下段の土壇が掘られ埋納行為がおこなわれたのは、住人が生活を開始するのに先立つこの竪穴建物の建設時のことと推定される。

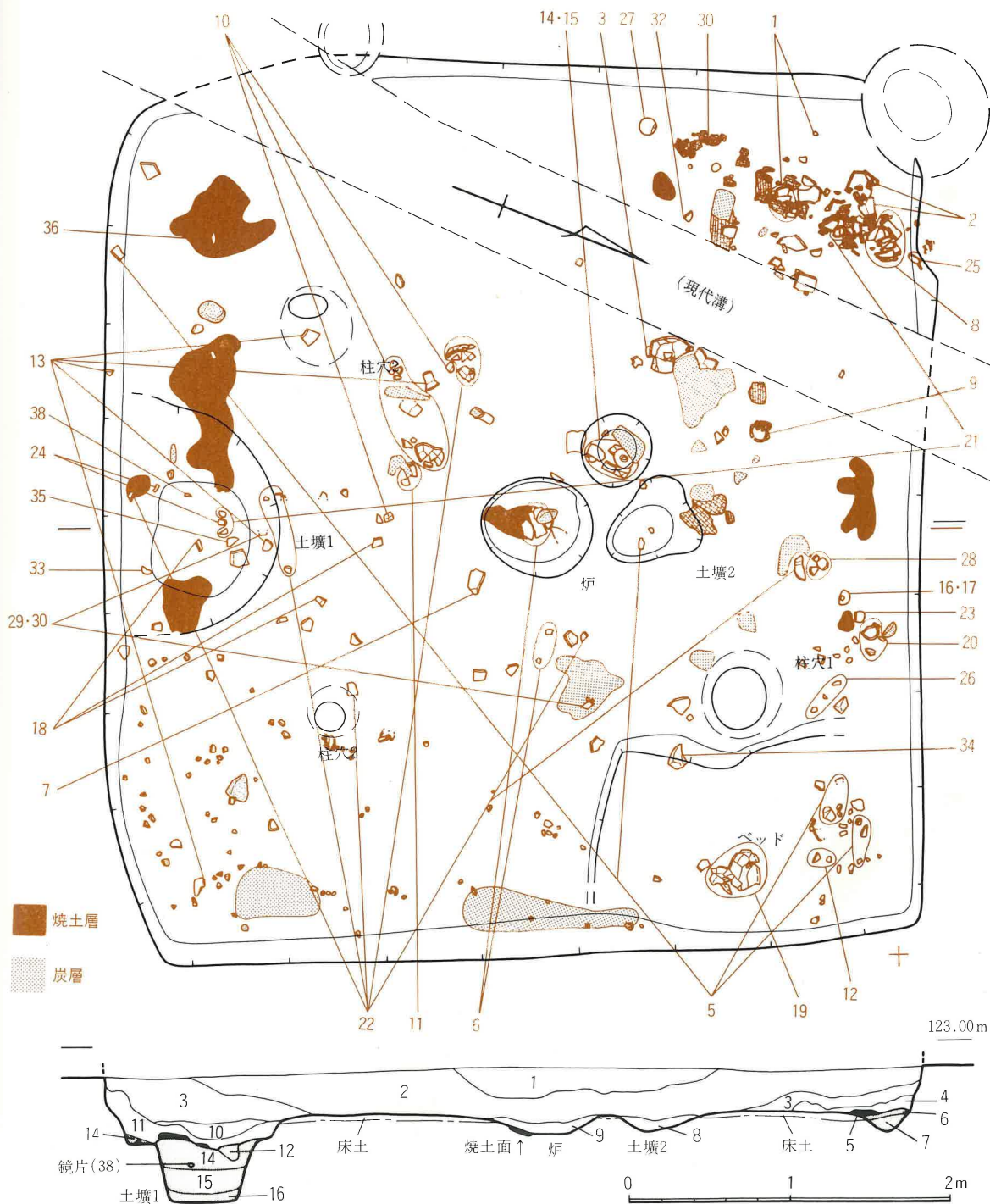
その後竪穴廃絶時には次のような焼却行為を伴う祭祀行為がおこなわれている（第124図）。まず床面上に炭片・焼土を多量に含む淡黒褐色の軟らかい4層が、竪穴の床面全体に薄く広がる。この層中には焼土層が点在し、炭化した木材を多量に含み、炭層とした堆積もその多くは炭化材がつぶれたものであった。また炭片の中には茅材とみられる炭化物が点在し、おそらく焼却された建築材の名残りと考えられる。そして興味深いことに、以上の焼土層・炭層や炭化材の下、すなわち床面直上に大量の土器と鉄器1点が検出された。遺物が廃棄された後に焼却行為に起因する大量の廃棄物が投棄されているのである。床面そのものには被熱の痕跡は認められなかったの



第123図 B区-4号竖穴住居跡①—竖穴内遺構の変遷—(1/60)

の小型台付鉢の脚部のみがベッド近くの壁ぎわに正位で置かれていた。以上の3点は何れも故意に打ち欠かれた土器である。19の鉢は完形品のままベッド中央に正位に置かれ、つぶれた状態で検出された。28の完形の碗も17の近くでつぶれた状態で出土した。さらに36の定角式の鉄鏝の完形品が焼土層の下になって床面に貼りつくように検出された。この鏝には装着痕はなく、鉄鏝のみが置かれたものと推定される。

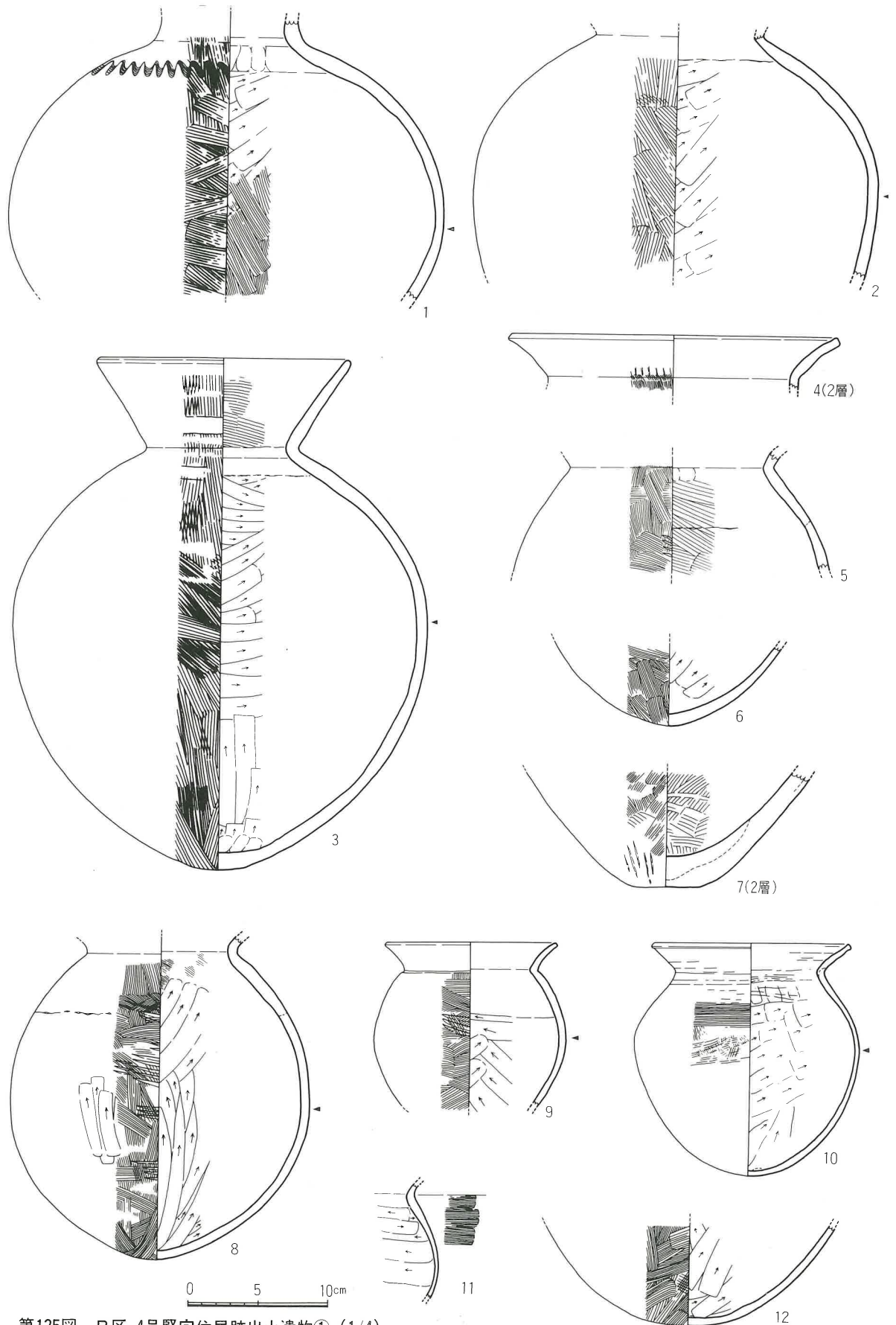
で、竖穴内部で焼却がおこなわれたとは考えられないが、別の場所でおこなわれた焼却行為の片付けが、この竖穴を対象におこなわれた点は指摘できる。ただし不思議なことに柱穴の周囲には排出土はなく、柱採取の際の柱穴の掘り上げも認められなかった。柱のみをそのまま残して腐朽するのにかまかせたのか、あるいは丁寧に抜かれたかの何れかと推測される。さてこの4層下部の焼却廃棄物におおわれた遺物の出土状態は、竖穴の床面に置かれたものと、4層廃棄の直前あるいは同時に一括して廃棄されたものに分けることができる。床面に置かれた例としては9の甕の上半が炉の北側に逆さで置かれ、14・15の高坏口縁部の完形品が土壙3の内部に逆さで置かれ、17



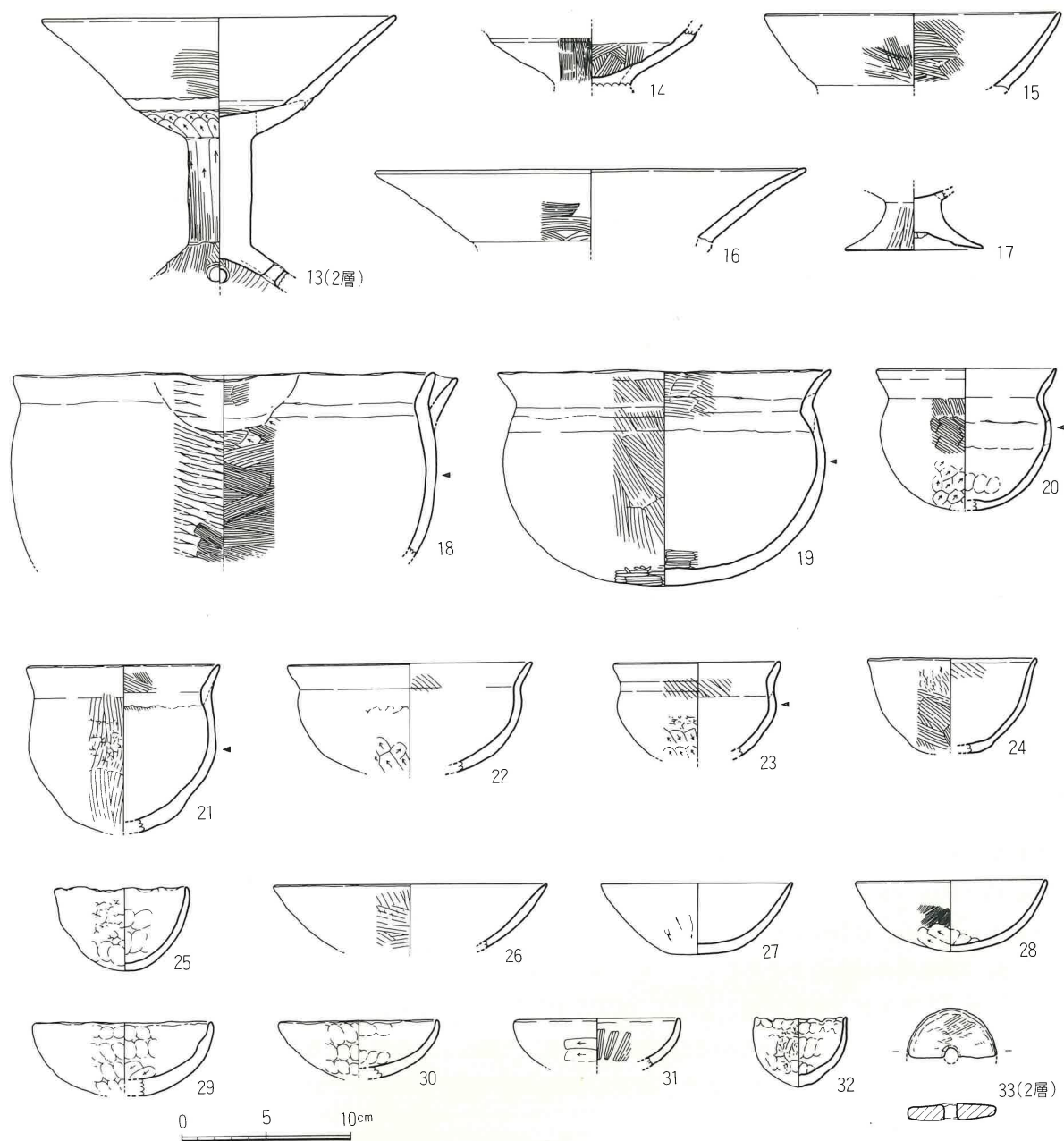
- 1層：暗黄褐色粘質土（炭含む。）
- 2層：暗褐色軟質土（土器・炭片多く含む。）
- 3層：暗褐色軟質土（2層よりやや暗い・土器・炭片含む。）
- 4層：淡黒褐色軟質土（炭・焼土多い。下部に完形に近い土器・焼土の広がり炭化材が入る。）
- 5層：焼土層
- 6層：暗灰色粘土→周溝は床土
- 7層：淡黄褐色粘質土
- 8層：暗褐色軟質土（炭化材・大型炭片・土器片混入）→4層に対応する土壙2の埋土
…廃絶時には開孔している。
- 9層：暗褐色炭まじり土（焼土小ブロック多くまぜる）→炉の埋土

- 10層：暗灰色軟質土
- 11層：暗褐色軟質土（炭・焼土・土器片多く含む、下部に焼土層が広がる。） } 4層に対応する
土壙1の上部埋土
…土壙1の上部は廃絶時には開孔していたものと推定される。
- 12層：暗褐色軟質土（11層よりややよこれる。）
- 14層：黄褐色土軟質（黄色地山ブロックを多く含む、この層中の土壙1際で鏡片(38)を検出した。） } 土壙4の
下部埋土
- 15層：明黄褐色軟質土（何も含まない。）
- 16層：暗褐色粘質土（黄色地山ブロック含む）
*16~14層まで、短期間に人為的にうめもどしたような明い層でよこれていない。
整穴廃絶時には14層上面が、土壙1の底面であったとみてよい。
また、14層と同じ土で、土壙1周辺の周溝がうめられている。
したがって、土壙1の下部は、整穴建設時に埋めもどされた可能性が高い。

第124図 B区-4号竪穴住居跡② 一遺物出土状態と層序一 (1/40)

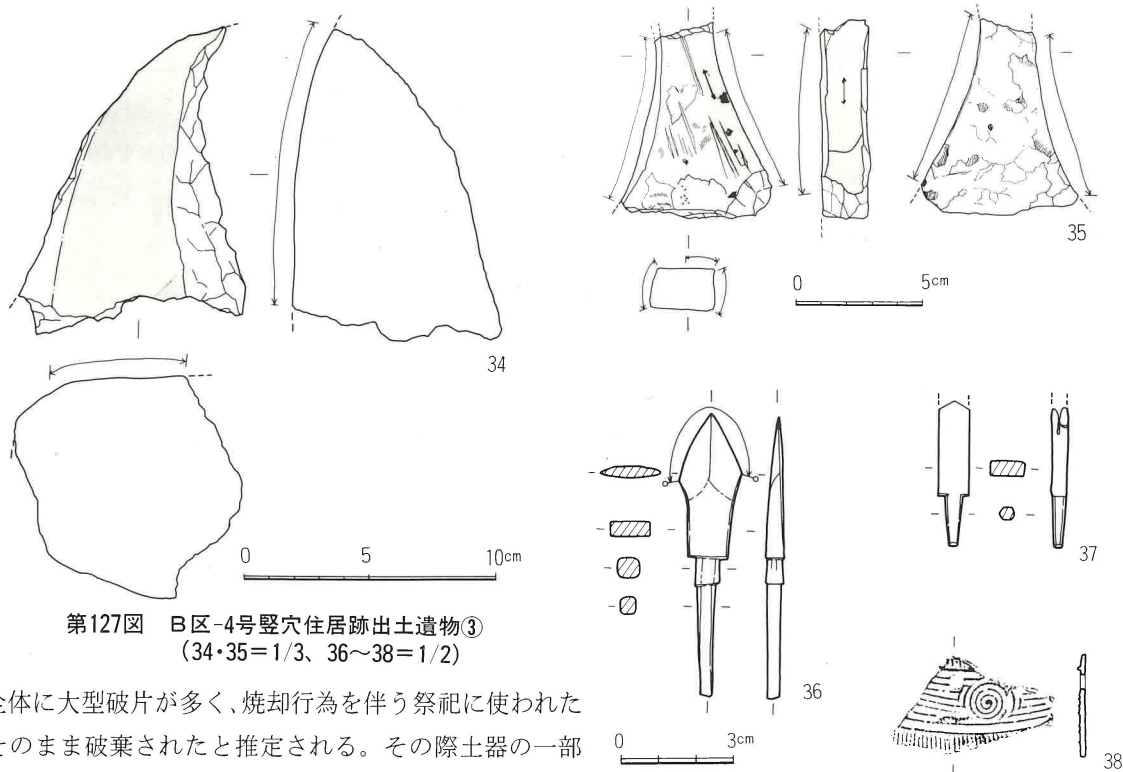


第125图 B区-4号竖穴住居迹出土遗物① (1/4)



第126図 B区-4号竪穴住居跡出土遺物② (1/4)

一方焼却廃棄物と一括廃棄されたものには、1～3の壺、5・6・8・10・12の甕、16の高坏、18の鉢、21の小型甕、22～24の小型鉢、25～27・29～31の碗、32のミニチュアの鉢、35の砥石片がある。そのうち1の壺は大型破片でまとまって出土し、接合した破片の半分は1号条溝C-4溝14・15・22群にも廃棄されていた。2の壺も1の壺のそばで大型破片がつぶれて出土し、接合した破片のかなりの部分が1号条溝22群でも検出された。3の壺はほぼ1個体分の破片が炭層の下で重なって出土したが、破片の一部はB-10住の3層一括廃棄層の中でも発見された。このことはこの竪穴住居跡とB-10住の廃絶祭祀がほとんど同時におこなわれたことを示している。8も口縁部以外はほとんど完形品のまま1・2の壺のそばでつぶれていた。10の甕は破片が分散して出土したが、復元すると完形となった。25の碗は、8のそばで完形のまま横倒しの状態で出土した。32のミニチュアの鉢も1の壺の近くで完形で出土した。残りの土器は破片となって4層中に散在していた。以上の土器のうち甕の大部分と19の鉢は被熱して煤が付着するが、壺・高坏と小型土器群には被熱の形跡はない。また廃棄された土器には小型の器種が目



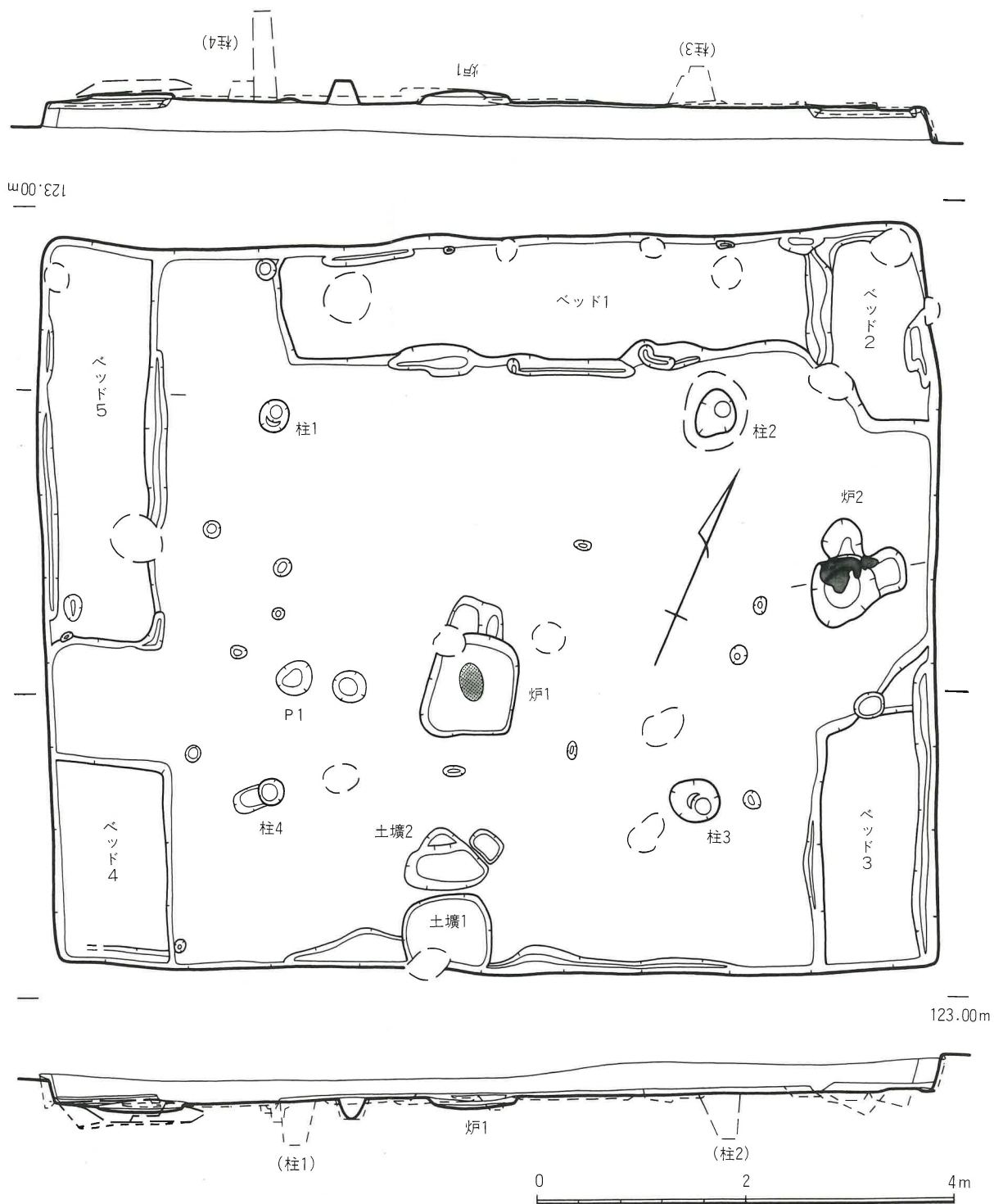
第127図 B区-4号竪穴住居跡出土遺物③
(34・35=1/3、36～38=1/2)

立ちまた全体に大型破片が多く、焼却行為を伴う祭祀に使われた土器群がそのまま破棄されたと推定される。その際土器の一部は、再度使用しないことを示すために打ち欠いたり破碎したりして、この竪穴内に置かれたものと見られる。その後、炭・土器片を含む3～1層が順次レンズ状に堆積している。遺物は底面に比べてはるかに少なくなる。おそらく廃絶祭祀後この竪穴住居の跡はそのまま放置され、自然埋没にまかされたと推定される。この上層特に2層中から4の甕口縁部片、7の甕底部片、13の高坏、33の土製紡錘車、34の石皿片が出土した。そのうち13の高坏は2層中で破片が散在し、脚部以外は完形に復元でき、さらにその破片の一部は隣接するC-9住の埋土中から検出された。おそらくC-9住廃絶時にはまだこの竪穴住居跡は2層堆積中であったことを示している。なお出土位置は不明だが、37の鉄鏃基部片が出土している。

以上の竪穴廃絶時の状況をまとめると、①竪穴建物の構造物が取り払われ、②この竪穴住居跡と1号条溝の間どこかで焼却行為を伴う祭祀がおこなわれ、③そこで少なくとも壺3個体、甕7個体、高坏2個体、鉢2個体、小型の甕鉢碗等14個体以上を使っている。④祭祀終了後、一部は1号条溝内に廃棄されたが、大部分は焼却廃棄物とともに、この竪穴住居内に廃棄された。以上の祭祀は竪穴建替えに際しておこなう廃絶祭祀であると推定される。

出土遺物のうち、土器の大半は胎土からみて在地産である。6と11の甕のみは胎土に金雲母を含む搬入品である。1～3は布留系の壺D、4～8は在地系の甕Aだが、6と8は内面ヘラケズリが顕著で布留系技術の影響が明瞭である。9は伝統的V様式系の甕Bだが、内面ヘラケズリの布留系技術の影響がある。10～12は布留系の甕Dで、11は搬入品。13は伝統的V様式系の高坏B、14と15は同一個体の高坏、16は在地系の高坏A、17は在地系の小型台付鉢A、18は片口につく大型の鉢A、19は伝統的V様式系の影響が残る鉢B、20・21は小型甕で、22～31は小型の鉢または碗で、22と23は布留系の影響を受けた形態。28と31はヘラケズリとミガキに布留系の影響が認められる。32は手づくねのミニチュアの鉢Aである。33は半分に分かれた土製紡錘車、34は安山岩製の石皿の破片、35はよく使い込まれた砥石の破片である。36は定角式の鉄鏃の完形品で、茎部が二段になり、断面は方形である。古墳の副葬品として発見されることが多い型式で、竪穴住居跡で発見される例はめずらしい。37は鉄鏃の基部破片である。38は懸垂孔のある鏡片で、後漢時代の中国製雲雷文内行花文鏡の外区文様帯の破片である。文様面には赤色顔料が付着している。長さ4.5 cm、幅2.5 cm、厚さ約1.5 mm、懸垂孔の径は約3 mmである。

以上のように建設時に鏡片の埋納がおこなわれて使用が開始され、廃絶時には鉄鏃と土器の埋置を伴う廃絶祭

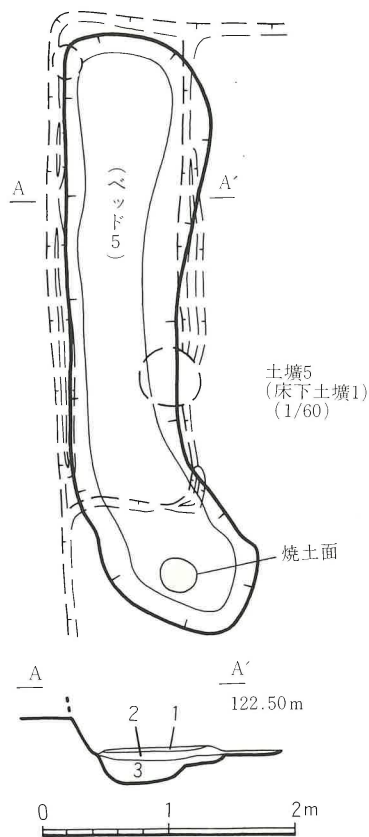


第128図 B区-5号竪穴住居跡① (1/60)

祀がおこなわれた竪穴住居跡である。正方形4本という典型的な古墳時代型式の竪穴建物を採用している点も注目される。いったいどんな人が住んでいたのだろうか。竪穴住居跡の時期は、建設時の方向からみて古墳時代前期前半の小迫辻原3期に建設・使用され、廃絶の時期は出土土器から小迫辻原3期の末と推定される。(旧A・B地区竪穴住居3)

B区-5号竪穴住居跡 (第128～136図 一図版22・23・45～47)

B-4住の南西に数m離れてほぼ同じ方向で検出された長方形の竪穴建物で、後世の多くのピットが重複しており、調査は根気のいるものであった。規模は東西長軸長880cm、南北短軸長700cmで東西に長く、残存部の深さは35cmで、東西長軸の方位角は66度、床面積は58,0㎡の大型竪穴である。竪穴の平面形にあわせて配置された

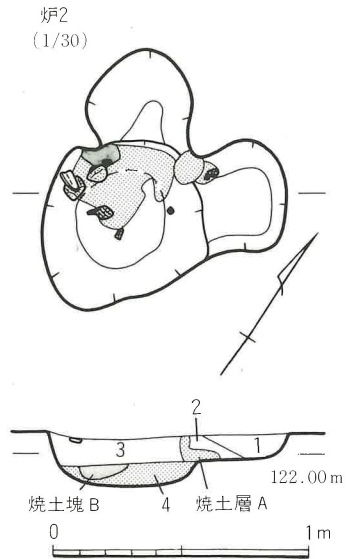


第129図
B区-5号竪穴住居跡②
-内部施設-(1/60・1/30)

土壌5
(床下土壌1)
(1/60)

焼土面

(ベッド5～床下土壌1層序)
1層：ベッド床面土→ふみかたまっている。
2層：黄褐色粘質土(硬い。きれいな土で、何も含まない)
→ベッド状遺構のための盛土。
3層：やや青みがかかった暗褐色土(黄色土ブロックを含み、炭・土器片を少し含む)
→床下土壌の埋土



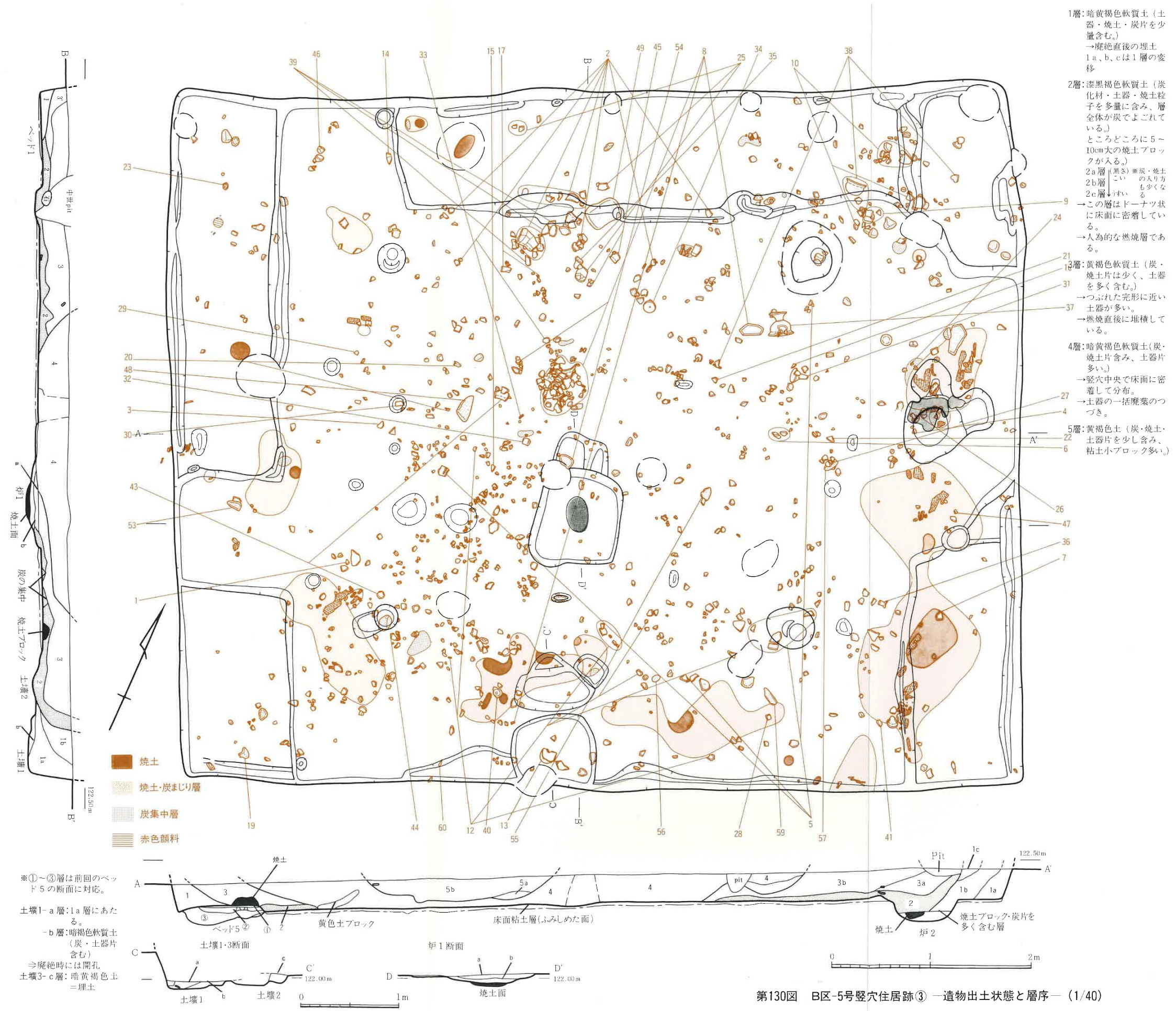
炉2
(1/30)

122.00m
0 1m

1層：褐色土(住居断面の16層に対応)
2層：暗黄褐色土
焼土塊B：炭化材含む。
3層：暗黄褐色軟質土(焼土・炭・土器片含む)
(→住居断面のII a層に対応)
4層：混焼土ブロック+炭片層

4本柱の構造であり、柱穴4のみが非常に深く掘られている以外は柱穴の深さは揃っている。ベッドの背後およびベッド前面を含めて周溝がほぼ全周し、土層の観察からみて建設時に掘削された壁材固定用の溝と考えられる。特にベッド前面の周溝はC-8住で確認されたように、ベッドを固定する板材の固定用に掘られた溝と考えられる。床面は踏みしめられて硬化したもので、ベッド上も硬化している。なおベッド5の下には建設時に掘られた床下土壌1が第129図左のように存在した。その土壌の底には1箇所赤く焼けた焼土面を発見した。床下土壌掘削時に火を使用した何らかの行為がおこなわれたと推定される。この床下土壌は床面の高さまでいったん埋めた後、硬い黄褐色粘土を固めてベッド5を構築している。ベッド状遺構は5箇所あり、南面をのぞき断続的にコ字形に配置されている(第128図)。ベッド5が前述のように盛り土である以外は、すべて削りだしである。ベッド1と2は一連のものであるが、間に狭い溝が走り、周溝と同じ役割をはたしたと考えられ、おそらく間仕切りの壁が立ち上げられていたと推定される。炉は2箇所あり、中央の炉1は皿状に掘り凹め、底面中央に焼土面が形成された地床炉である。炉2は東辺に近いベッド2と3の間に切られたもので、当初から造り付けられたものか、竪穴使用中にベッドを削って設けたものかは判然としない。下部に焼土が堆積し炉と認めたが、炉1とはその構造が異なる。しかし埋土内に廃絶時の遺物が流れこんでいるので、竪穴廃絶時には開口していたことは明らかである。土壌は2箇所あり、南壁中央の壁に接して設けられた土壌1は半円形の浅いもので、通常炉の南側に設けられる「対面土壌」にあたる。廃絶時まで開口していたことが埋没状態の観察から明らかである。その土壌の北側に近接して浅く掘りこまれた土壌2は、C-1住で検出された入口施設の位置と構造がよく似ているので、梯子を固定するための穴と推定される。その内部には竪穴焼却時の堆積層(2層)が流入しており、梯子は竪穴廃絶時に抜取られたと推定される。炉と多数のベッドの存在とその規模からみて、この竪穴建物は居住用の竪穴住居とみられる。

竪穴の使用中に床面にめりこんだ遺物がある。30・35の高坏頸部片である。廃絶の際にはまず建物の取り壊しが行なわれており、排出土の堆積はなかったが柱穴2・3・4の3箇所では明瞭に柱の抜取痕跡が認められる。た

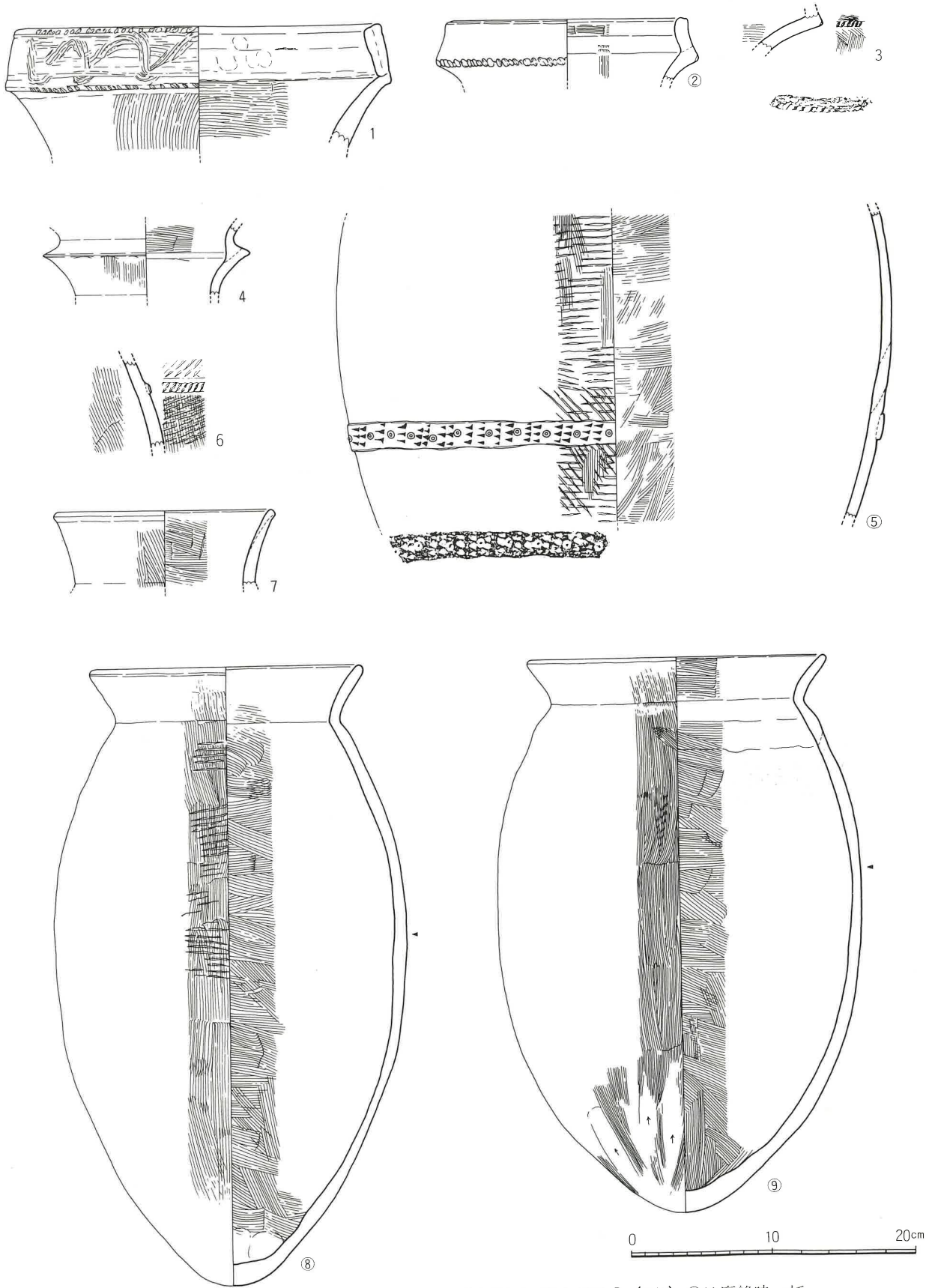


- 1層: 暗黄褐色軟質土 (土器・焼土・炭片を少量含む)
→ 廃絶直後の埋土
1a, b, cは1層の変移
- 2層: 漆黒褐色軟質土 (炭化材・土器・焼土粒子を多量に含み、層全体が炭でよごれている)
→ ところどころに5~10cm大の焼土ブロックが入る)
2a層 (黒さ) ※炭・焼土の入り方の違い
2b層 ※炭・焼土の入り方の違い
2c層 ※炭・焼土の入り方の違い
→ この層はドーナツ状に床面に密着している
→ 人為的な燃焼層である
- 3層: 黄褐色軟質土 (炭・焼土片は少く、土器を多く含む)
→ つぶれた完形に近い土器が多い
→ 燃焼直後に堆積している
- 4層: 暗黄褐色軟質土 (炭・焼土片含み、土器片多い)
→ 竪穴中央で床面に密着して分布
→ 土器の一括廃棄のつづき
- 5層: 黄褐色土 (炭・焼土・土器片を少し含み、粘土小ブロック多い)

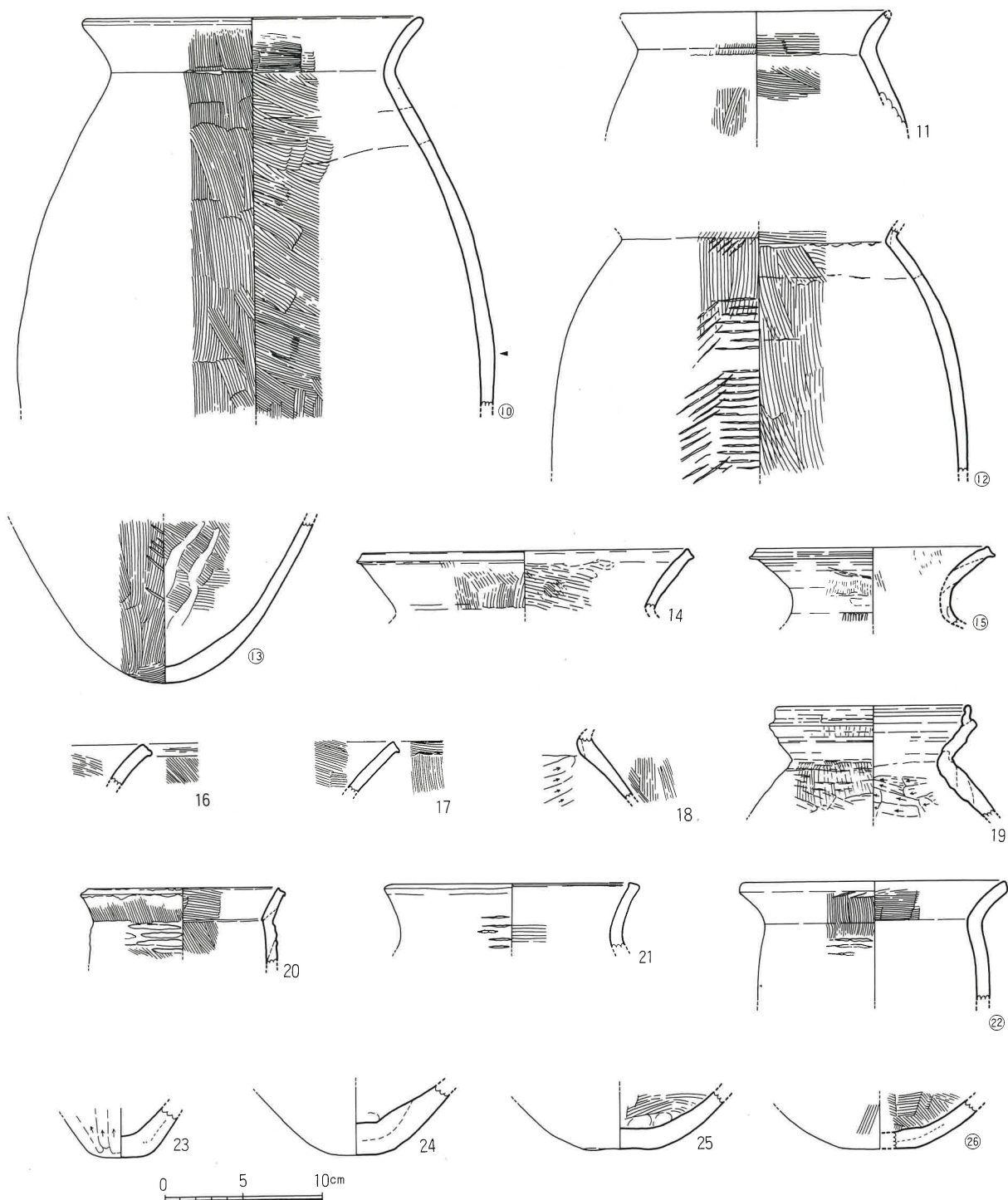
※①~③層は前回のベッド5の断面に対応。
 土壌1-a層: 1a層にあたる。
 -b層: 暗褐色軟質土 (炭・土器片含む)
 ⇒ 廃絶時には開孔
 土壌3-c層: 暗黄褐色土 = 埋土

a層: 暗黄褐色軟質土 (炭・焼土・土器片含む) = 3層に対応。
 b層: 暗褐色軟質土 (炭・土器片を含み、焼土小ブロックが多い) = 2層に対応。

第130図 B区-5号竪穴住居跡③ 遺物出土状態と層序 (1/40)



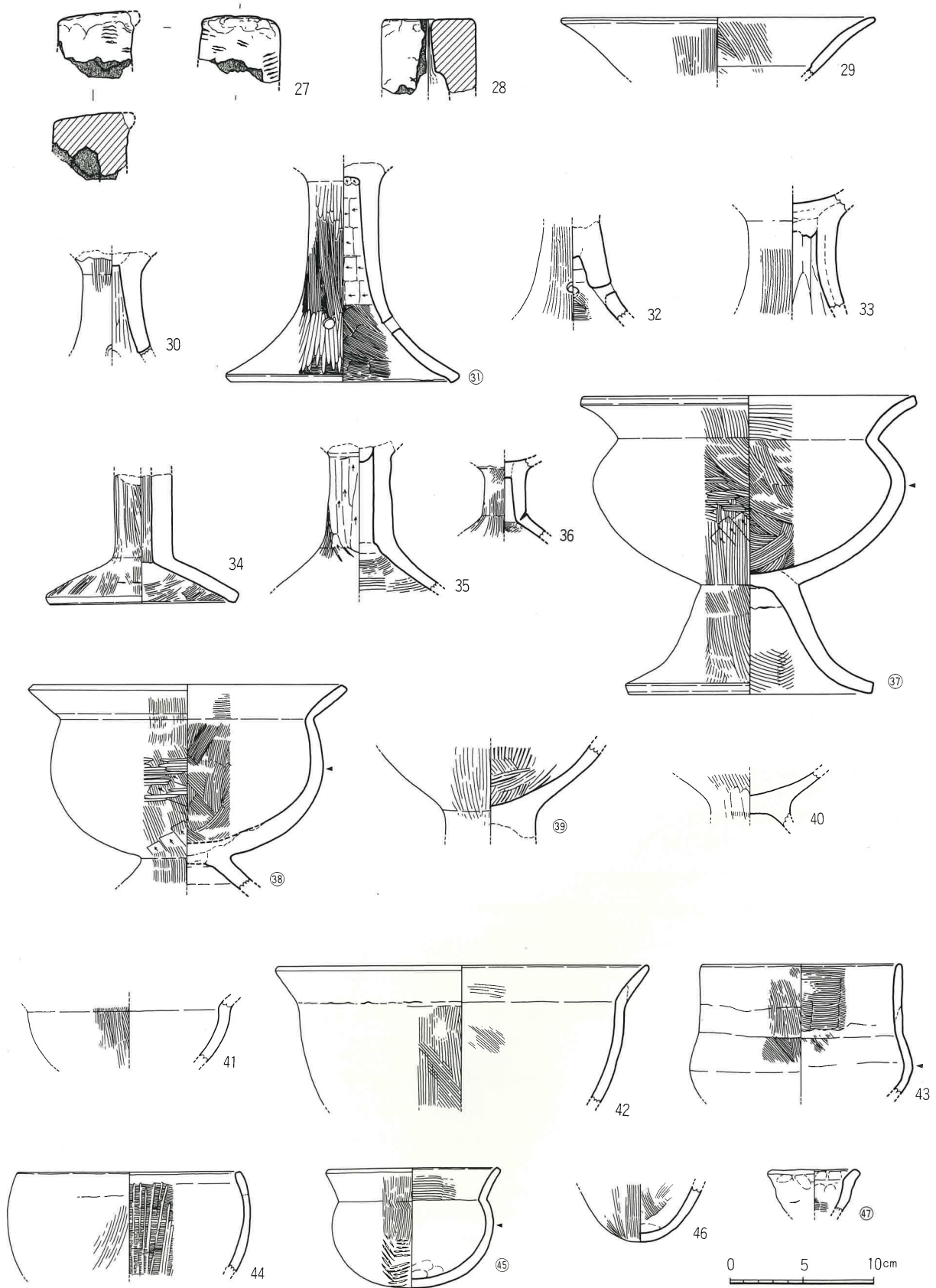
第131図 B区-5号竪穴住居跡出土遺物① (1/4) ○は廃絶時一括



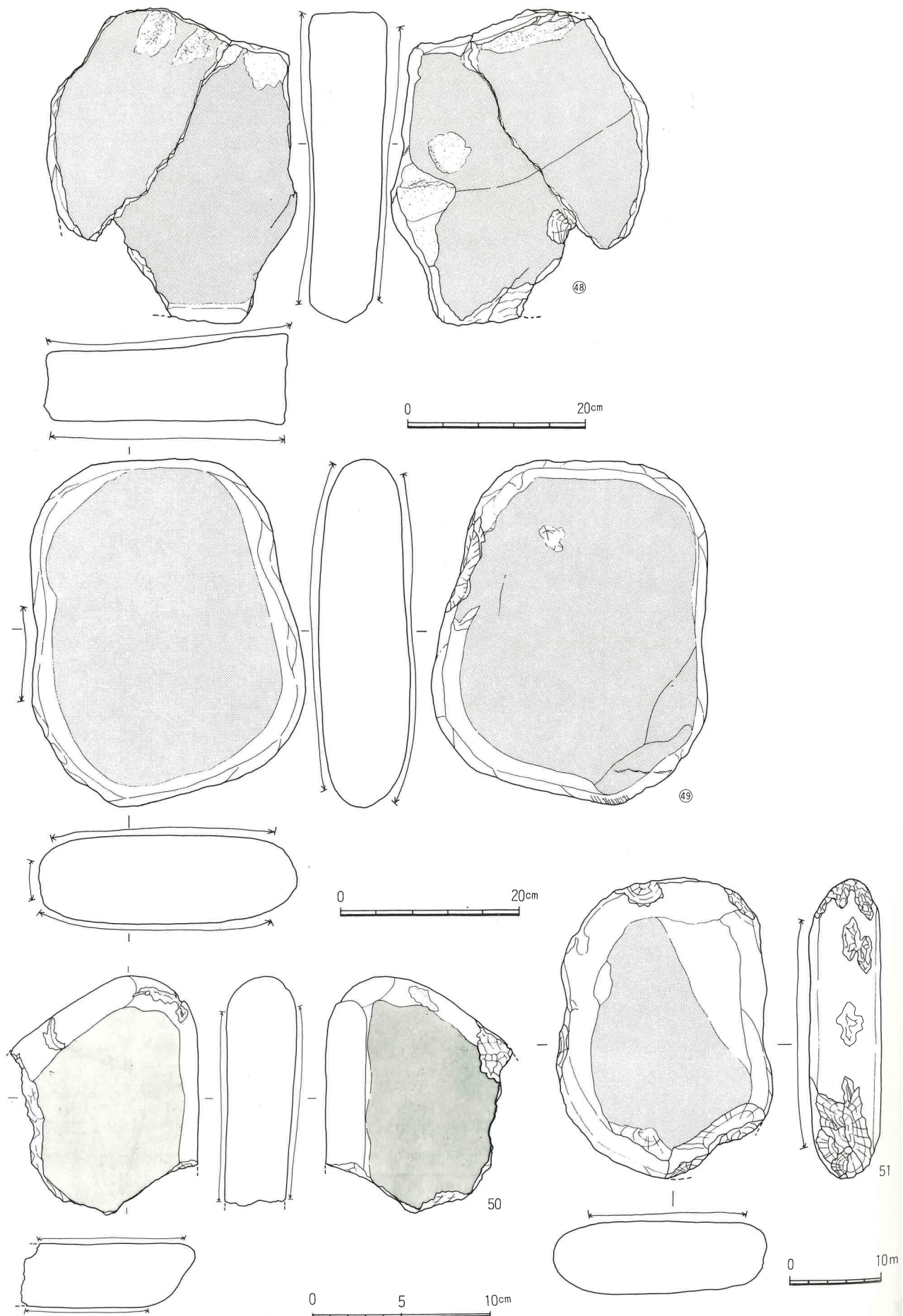
第132図 B区-5号竪穴住居跡出土遺物② (1/4) ○は廃絶時一括

だし柱穴1にはその痕跡がなく、切り取られたかあるいは丁寧に抜かれたと推測される。そして廃絶から焼却廃棄物一括廃棄の間に多少の時間の経過があったようで、竪穴の東側と南側に厚く暗黄褐色の1層が堆積している。この1層におおわれた床面直上において60の柳葉形の鉄鏃の完形品が、先端を壁に向けて出土した、この鉄鏃には矢柄の木質が残存しており、矢全体が廃絶直後に置かれたものと推定される。同じ状況はB-4住でも認められた。ほかにこの層には炭・焼土と土器片が少量含まれる。7の壺口縁部の完形品、19の甕口縁部片、23の甕底部片等である。

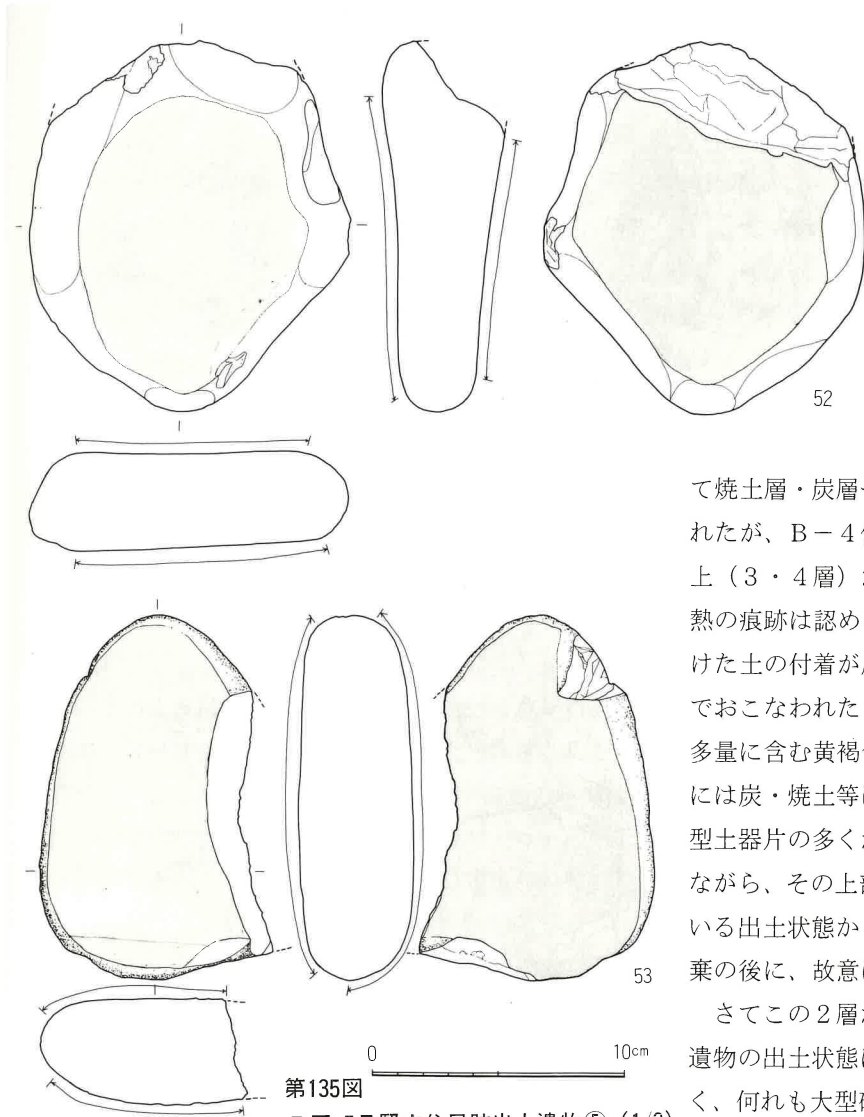
その直後、次のような焼却行為を伴う祭祀行為がおこなわれている(第130図)。まず床面上に炭片・焼土を多



第133図 B区-5号竖穴住居跡出土遺物③ (1/4) ○は廃絶時一括



第134図 B区-5号竪穴住居跡出土遺物④ (48・49・51=1/6、50=1/3)
○は廃絶時一括



第135図
B区-5号竪穴住居跡出土遺物⑤ (1/3)

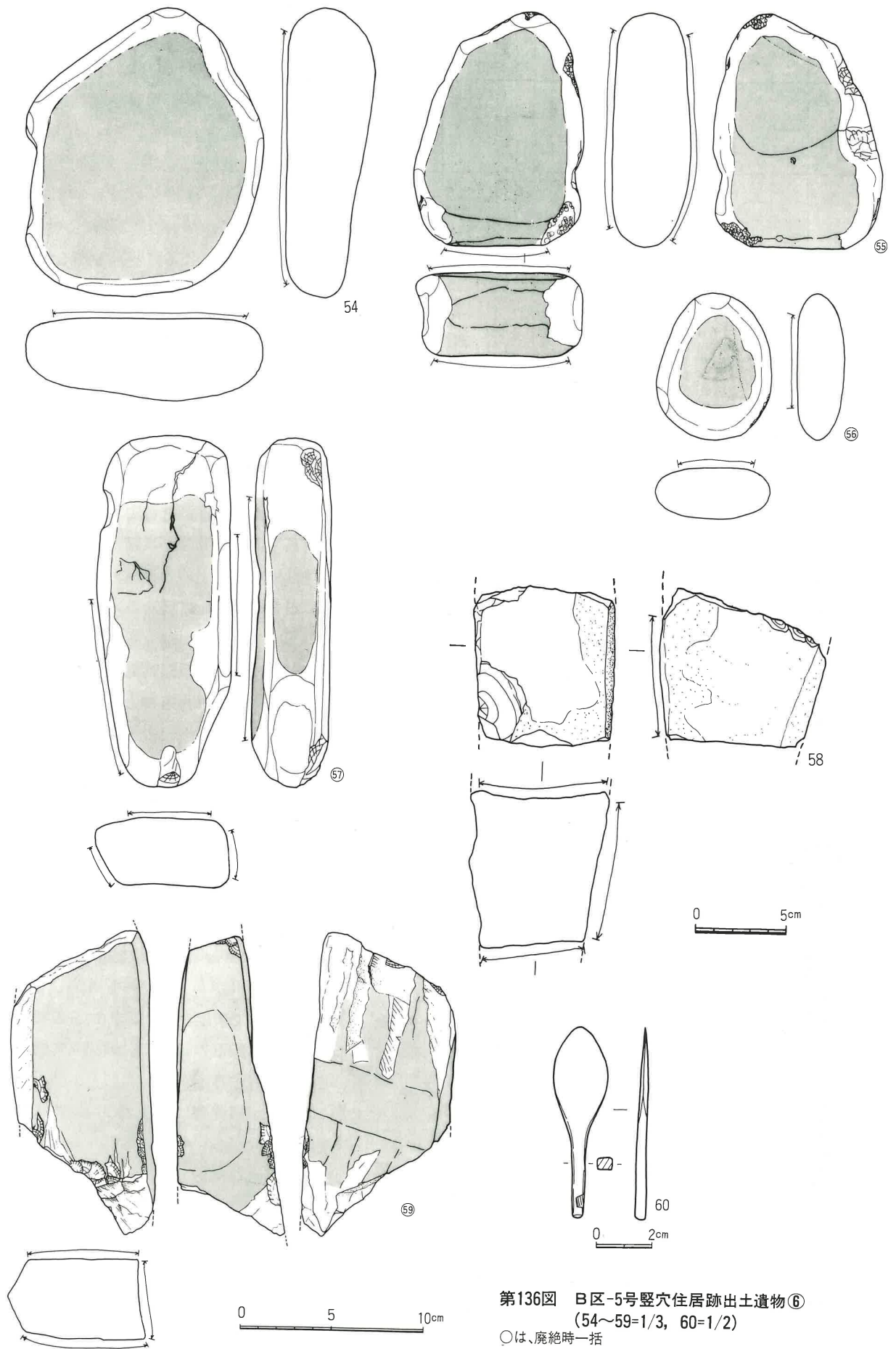
量に含む淡黒褐色の軟らかい2層が、竪穴の床面全体に広がる。この層中には焼土層が点在し中には5～10 cm大の焼土ブロックが混じる。炭化した木材を多量に含み、炭層とした堆積もその多くは炭化材がつぶれたものであった。また炭片の中には茅材とみられる炭化物が点在し、おそらく焼却された建築材の名残りと考えられる。そして

焼土層・炭層や炭化材の上下に大量の土器が検出されたが、B-4住と異なり大半の遺物は焼却廃棄物の上(3・4層)から検出された。床面そのものには被熱の痕跡は認められなかったが、赤色顔料と見紛う焼けた土の付着が床面に認められ、焼却行為はこの竪穴でおこなわれたと考えられる。さらに下部に土器片を多量に含む黄褐色系の3～5層が堆積する。この層中には炭・焼土等は少なく、土器のみが多い。さらに大型土器片の多くがその上部を底面あるいは2層に接しながら、その上部は3層あるいは4層に取り巻かれている出土状態からみて、3～5層は焼却と遺物一括廃棄の後に、故意に埋め戻されたものと推定される。

さてこの2層から3・4層下部の焼却廃棄物に伴う遺物の出土状態は、完形品を配置した状態のものではなく、何れも大型破片をまとめて捨てた状態で、大部分が破片として散在していた。このように焼却廃棄物と

一緒に一括廃棄されたものには、1～6の壺片、8～10・12～17・20～22・25・26の甕片、27・28の支脚片、29・31～34・36の高坏、37～41の台付鉢、42～46の鉢、47のミニチュアの鉢、48～57の石皿磨石類、58・59の砥石片などほとんどの遺物が含まれる。そのうち5の壺と12の甕は大型破片で散らばり、8～10の甕は半個体分の破片がそれぞれまとまって出土し、12・13・15・22の甕片は2層中に散在し、31の高坏脚部は坏部を折り取られて、炭層の上に横倒しでつぶれていた。37は完形だが鉢部に1箇所内部から穿った穿孔があり、これも横倒しで検出した。38も脚部が折り取られて底部が穿孔されて廃棄されていた。45もほぼ完形で検出された。また48の石皿は被熱して割れている。49は完形の石皿で焼土層の上で検出され、55～57の磨石と59の砥石片も焼却廃棄物の中にはまりこむように出土した。以上の土器のうち甕の大部分は被熱して煤が付着するが、壺・高坏と小型土器群には被熱の形跡はない。例外的に32の高坏脚部片と43の直口壺が被熱していた。祭祀時に焼けたのか焼却時に焼けたのかは不明である。また廃棄された土器では小型器種は少ない。全体に細片が多いので焼却行為を伴う廃絶祭祀に使われた土器群がそのまま破棄されたものと、その後の片付けにより混入したものの両者があると推定される。第131～136図で番号に丸をかこった遺物は前者と推定されるものである。

以上の竪穴廃絶時の状況をまとめると、①柱が抜き取られ竪穴建物の構造物を取り払われ、②矢が床面に置かれたのち、部分的に土砂を廃棄する。おそらく焼却のための準備である。③この竪穴の内部で焼却行為を伴う祭祀がおこなわれ、④そこに祭祀に使用された土器群と石器群が廃棄されている。⑤祭祀および廃棄終了後、竪穴は埋め戻され、その際多量の土器残片が混入する。以上の行為は竪穴建替えに際しておこなう廃絶祭祀であると



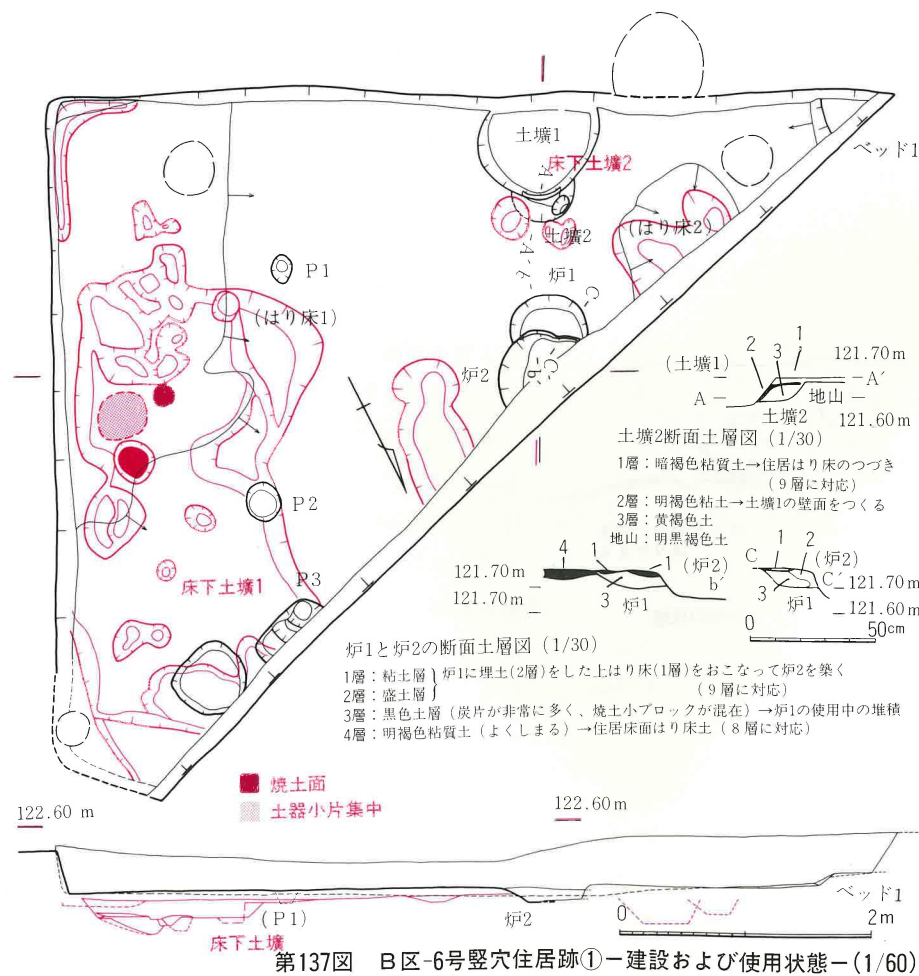
第136図 B区-5号竪穴住居跡出土遺物⑥
 (54~59=1/3, 60=1/2)

○は、廃絶時一括

推定される。

出土遺物のうち、土器の大半は胎土からみて在地産である。9の甕は胎土に金雲母を含み、20の甕は石英を多量に含む搬入品である。1～7は在地系の壺Aで、1～4は複合口縁壺、1の口縁部外面には粗雑な櫛描きの波状文があり、5の胴部突帯には竹管文と4点一組の列点文が施される。8～17は在地系の甕Aで、15は単口縁の壺としてもよい。ヘラケズリが認められるのは搬入品と考えられる9の甕の底部外面のみである。18は内面ヘラケズリの布留系の甕Dである。19は内面ヘラケズリで口縁を貼りつけて立ち上げる外来系の甕Fで、搬入品の可能性も残る。20～22は口縁部外面まで粗いタタキが残る小型甕Aである。23～26は平底気味の底部片で、23・24は在地系の甕Aで、25・26は内面に退化した簾状ハケの施された伝統的V様式系の影響が残る甕Bである。27・28は在地系の支脚Aで割れ方からみて破碎された可能性がある。29～33は在地系の高坏Aで、34～36は脚の軸部と端部の境が明瞭な、外来系の影響を受けた高坏である。37～41は在地系の台付鉢Aで、36と37には廃棄時の穿孔がある。42・44は在地系の鉢A、43は在地系の鉢あるいは直口壺A。45は製作技法は在地系だが、外来の形態を指向した鉢である。46は小型壺Aの底部で、47は手づくねのミニチュアの鉢Aである。石器は48～57が石皿と磨石で、その内49・51・54～56は完形品。58・59は砥石で何れも破片である。60は柳葉形の鉄鏝の完形品で木質が残る。土器の大半が在地系のA類であることは特筆される。また礫石器類が多量に廃棄されている点も注目される。

以上のように廃絶時に鉄鏝の埋置を伴う廃絶祭祀がおこなわれた竪穴住居跡である。その点と位置・方向からみて、B-4住と密接な関係があったと推定される。竪穴住居跡の時期は、建設時の方向からみて古墳時代前期前半の小迫辻原3期に建設・使用され、廃絶の時期は、出土土器からみて同じく小迫辻原3期の間と推定される。(旧A地区竪穴住居5)



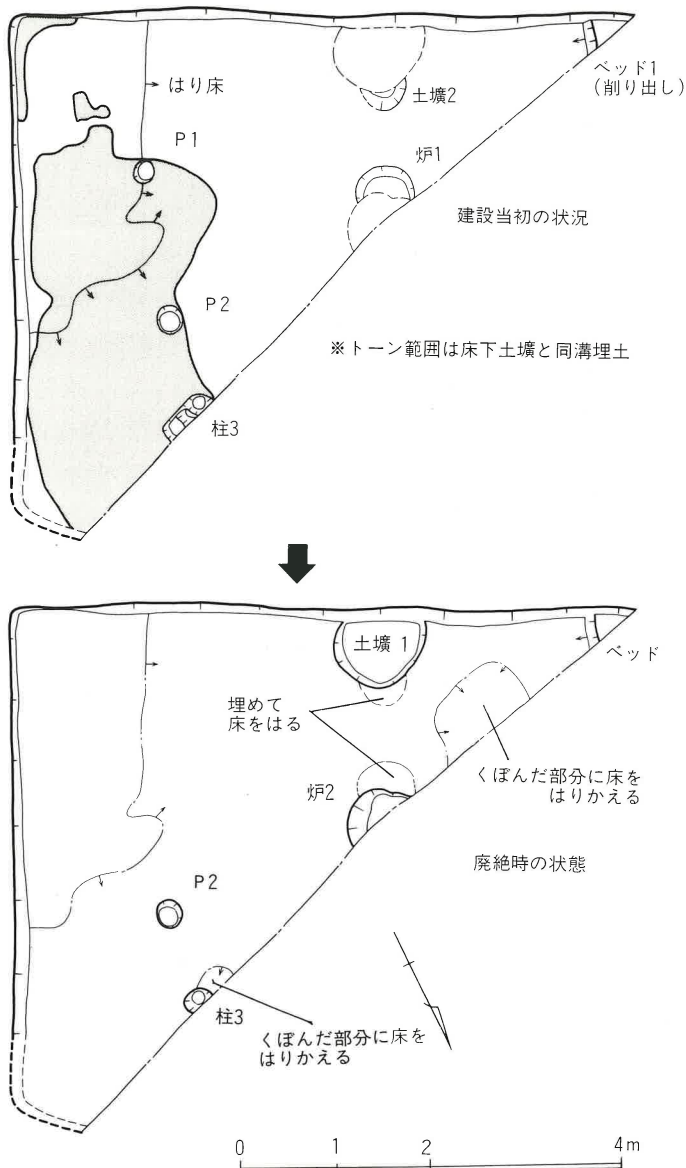
B区-6号竪穴住居跡 (第137～142図 一図版24・47)

調査区北辺で検出された長方形の竪穴建物で、北半分は調査区外にのび、後世の多くのピットが重複している。規模は長軸長690cm以上、短軸長550cmで、深さは約40cmである。長軸の方位角は115度で北西から南東に長軸をおく。ほかの同時代の遺構とは方向が大きく異なっている。床面積は少なくとも34.0㎡以上の大型の竪穴である。竪穴を半分しか掘れなかったために柱穴は明確ではないが、その候補となるピットを3本検出した、P1とP3が当初か

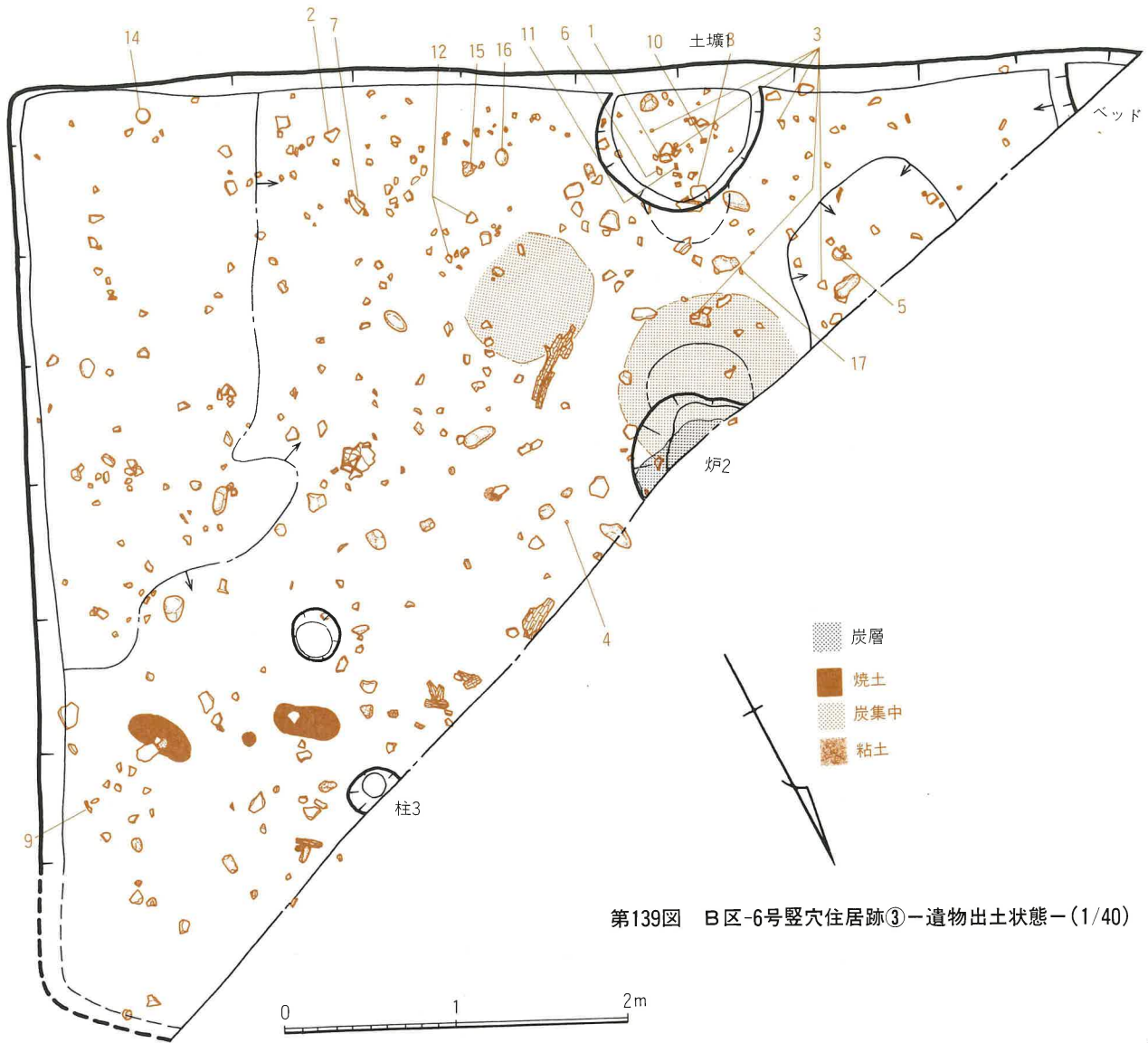
ら存在しており、柱穴ならば4本柱と考えられるが、P1はその後床が貼られていて、廃絶時にはP2とP3しかないから、2本柱の可能性も否定できない。周溝は南東隅でL字形に検出したにとどまり、全周していない。土層の観察から建設時に掘削された溝と考えられる。床面は明確な貼り床で、南西の一部をのぞいてほぼ全面に認められる。黄褐色土を敷いたもので硬くしまって光沢がある。なお後述するように炉や土壇の造り替えにあわせて床が貼りなおされている。建設時に掘られた床下土壇が第137図のように存在した。しかし凸凹で一定の形を造り出そうとしたとは思えない。その土壇の底には1箇所焼土面が発見され、小土器片が集中する地点があった。床下土壇掘削の際に火の使用があったと推定される。ベッド状遺構は削りだしベッドを西端でかるうじて検出した。炉は2箇所あり切りあっている。中央の炉2がまず検出され、周囲の貼り床をはいだ際に炉1を検出した。いずれも皿状に掘り凹め、底面には焼土面がなく代わりに炉内には多量の炭片と硬い小さな焼土塊からなる黒色土が堆積していた。通常の地床炉ではなく、焼土と灰を混ぜて炉床とした「灰床炉」である。小迫辻原遺跡ではC-10住・D-1住などで確認されている。炉1が当初の炉で、後に炉2に造りかえ、その際炉1を埋めて貼り床をおこなったものである。炉は南から北に移動したことになる。土壇は2箇所ありこれも切りあっている。南壁中央の壁に

接して設けられた土壇1は半円形の浅いもので、通常炉の南側に設けられる「対面土壇」にあたる。廃絶時まで開口していたことが埋没状態の観察から明らかである。この土壇の北側に土壇1によって大部分破壊された土壇2を検出した。この土壇も炉1と同じく貼り床されてふさがれており、造りなおされたものである。以上の遺構の造り替えをまとめると第138図のようになる。竪穴建設当初は土壇2と炉1が使われ、後に土壇1と炉2に造りなおされる。その際床のくぼみ、特に床下土壇2の付近とP3の周辺に貼り床をおこなって床を新しくしている。おそらく住んでいるうちに、かつて床下土壇を埋めた場所が下がってきたので、改築をおこなう際に床を張替えたのであろう。以上炉とベッドの存在と竪穴規模からみて、この竪穴建物は居住用の竪穴住居とみられる。

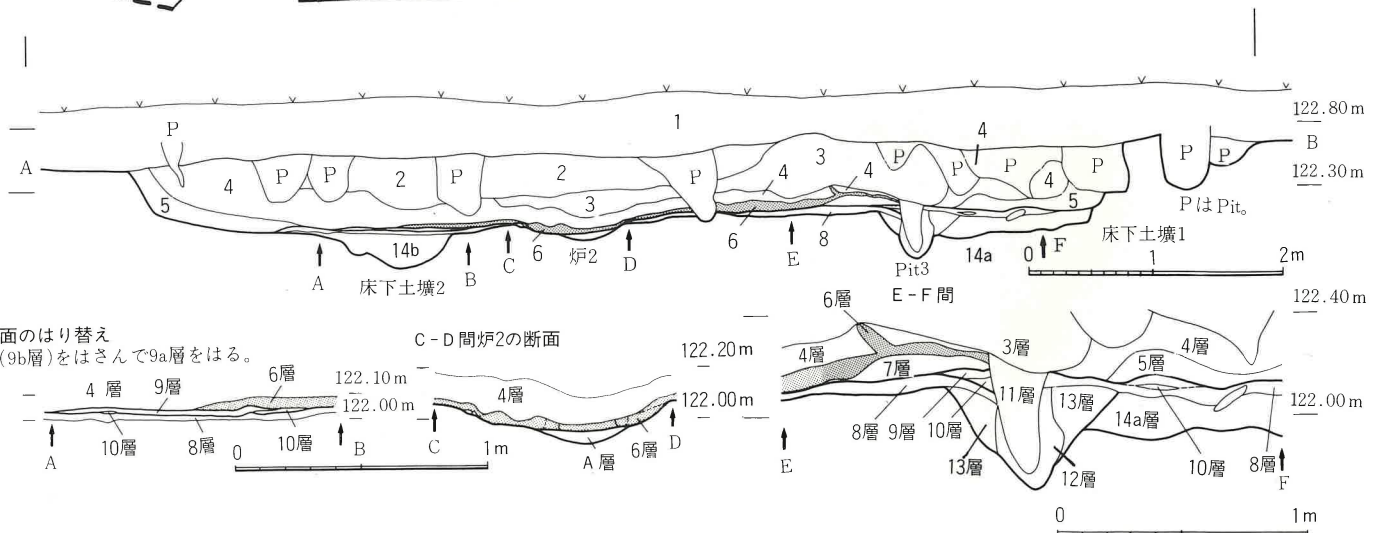
廃絶の際にはまず建物の取り壊しが行なわれて、排出土の堆積はなかったがP3では明瞭に柱の抜取痕跡が認められる。ただし焼却廃棄物が廃棄されてから抜き取られている。その後焼却行為を伴う祭祀行為がおこなわれる。まず床面上に炭片・焼土を多量に含む炭層(6層)が竪穴の床面全体に広がる。この層中には焼土層が点在し、炭化した木材を多量に含んでいた。おそらく焼却された建築材の名残りと考えられる。そして6層中から大量の遺物が検出されたが、床面そのものには被熱の痕跡は認められず、P3の柱は廃棄後抜き取られているので、焼却行為は別な場所でおこなわれたと考えられる。この6



第138図 B区-6号竪穴住居跡②-変遷-(1/80)



第139図 B区-6号竪穴住居跡③-遺物出土状態-(1/40)

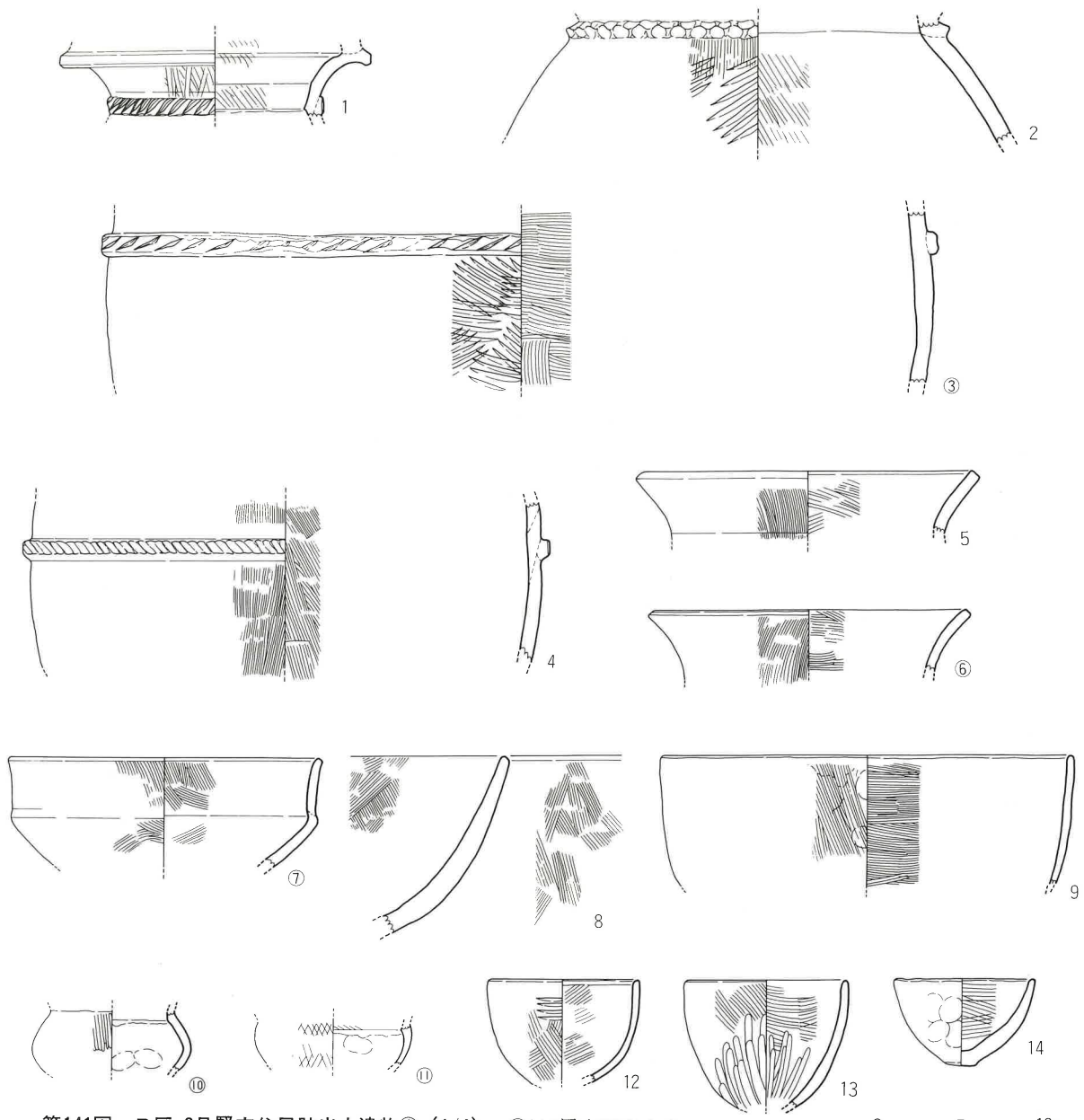


第140図 B区-6号竪穴住居跡④-断面土層各部-(160・1/30)

- 1層: 褐色土 (現耕作土)
- 2層: 明茶褐色土
- 3層: 暗褐色軟質土 (黄色粘土粒子多く、下部は少し黒い)
- 4層: 暗褐色土 (炭・焼土多く含む)
- 5層: 明茶褐色硬質土
- 6層: 明黒色土 (炭層) → 竪穴中央に床面に密着して広がる
- 7層: 明茶褐色土 (粘土・焼土・炭粒子を含む)

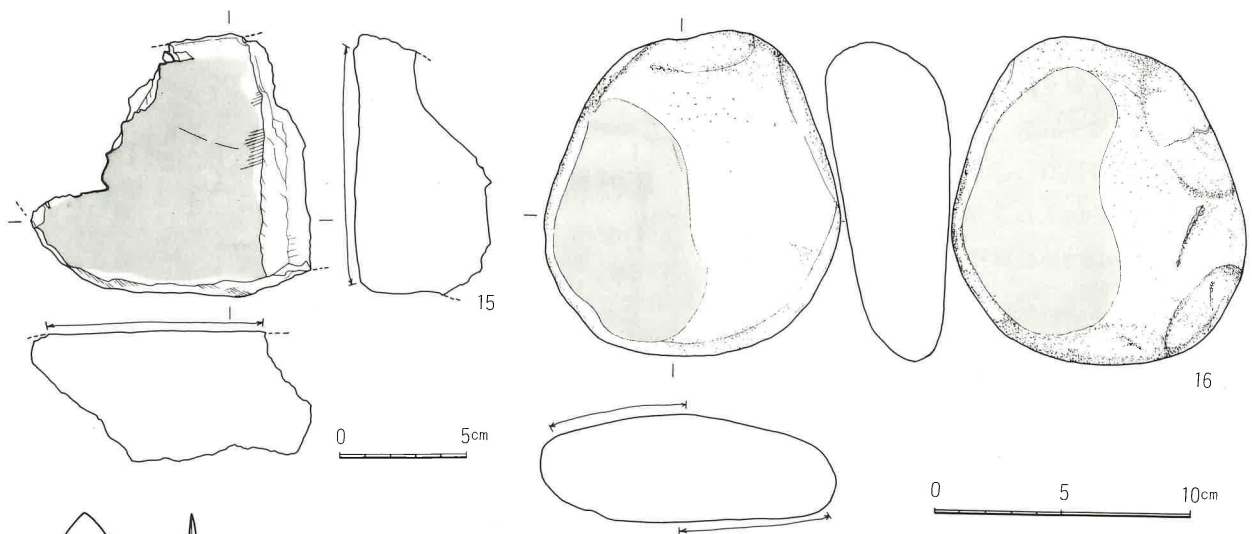
- 8層: 明黄褐色土 (非常にかたくしまり、9層=2次はり床に比べて、少し黒い) → 1次はり床
- 9層: 明黄褐色粘質土 (かたくしまる) → 2次はり床、いずれも床面の凹みを補修する。 } 竪穴はり床
- 10層: 暗黒褐色土=8層と9層の間層→床面の凹みにたまった土。
- 11層: 暗黒褐色土=Pit3の柱が抜きとられた後に堆積した土
- 12層: 明黒褐色土 (粘土混じる) → 柱を固定したときの埋土 } 柱穴3
- 13層: 明茶褐色土
- 14a層: 明赤褐色土 } 床下土層埋め土
- 14b層: 明赤褐色土

A層: 茶褐色砂質土 (粘土小ブロックを多くまぜて底をつくる) → 焼土面はない。
 ※ A層直上の6層には炭の多い焼土小ブロックが集中。



第141图 B区-6号竖穴住居跡出土遺物① (1/4) ○は6層庄面直上出土

0 5 10cm



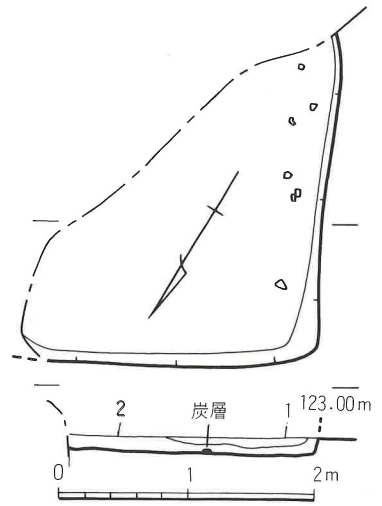
第142图
B区-6号竖穴住居跡出土遺物②
(15·16=1/3、17=1/2)

0 5cm

層中からは、6の甕口縁片と10・11の小型土器片が土壌1の中に流れこんで、3の壺胴部片と7の高坏片が床面に散在し、16の磨石も床面直上で検出された。また4層中ながら6層の直上に14の完形の碗が正位で置かれた状態で検出され、17の鉄鏃もその高さから出土した。さらに土器片を多量に含む5～2層が順次堆積する。この層中には炭・焼土と黄色土ブロックが多く、焼却廃棄物と遺物の一括廃棄の後に埋め戻された可能性も残るが、自然埋没の可能性も高い。上記した以外の遺物は5～2層中で検出された破片である。

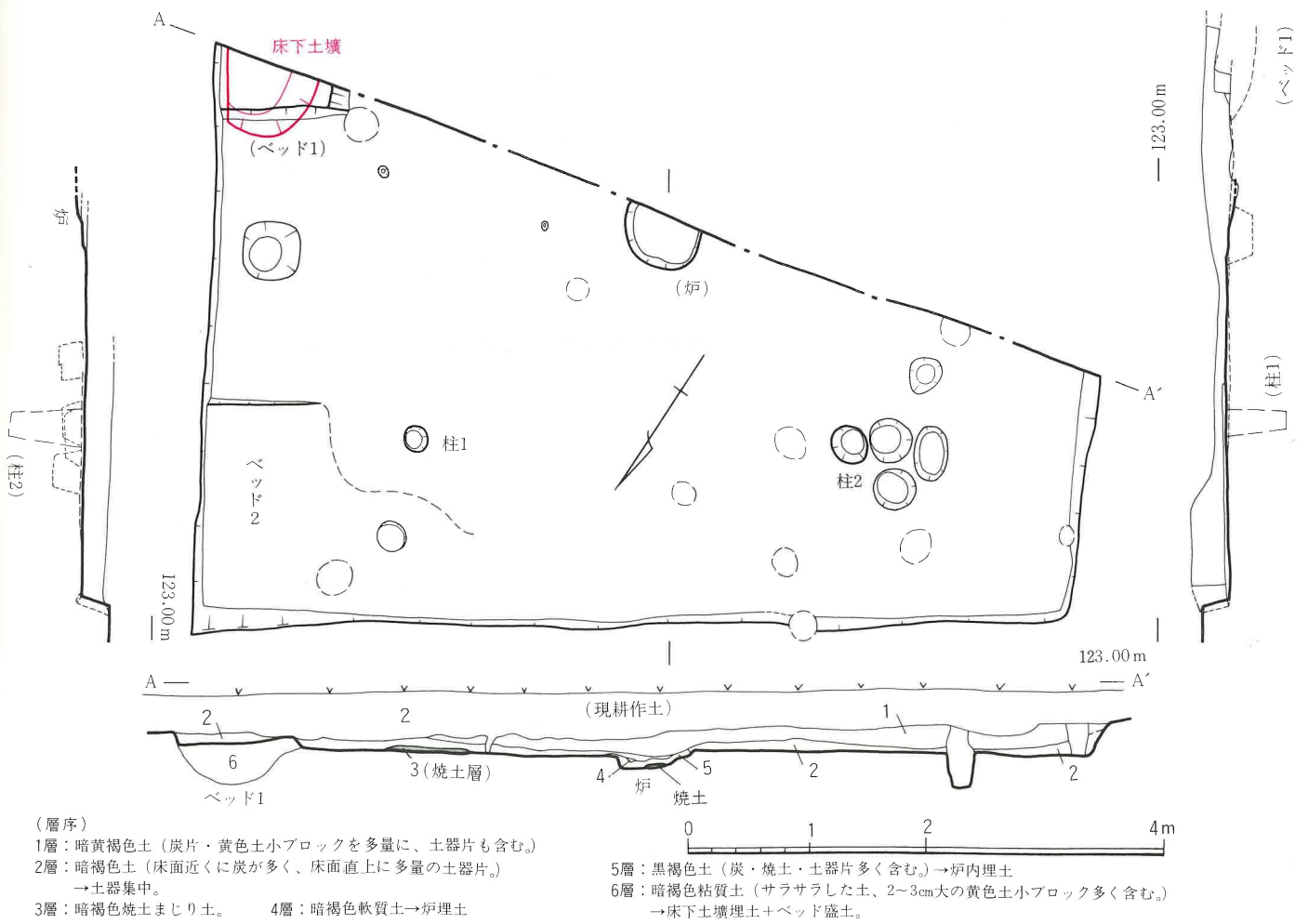
以上の竪穴廃絶時の状況をまとめると、①竪穴建物の構造物が取り払われるが柱は残され、②この竪穴住居跡の外で焼却行為を伴う祭祀がおこなわれ、③祭祀の焼却廃棄物と遺物群が廃棄されている。④祭祀および廃棄終了後、竪穴は埋め戻され、その際多量の土器残片が混入する。以上の祭祀は竪穴建替えに際しておこなう廃絶祭祀であると推定される。

出土遺物のうち、土器の大半は胎土からみて在地産である。1～4は在地系の壺Aで、1は複合口縁壺、2と3の外面には粗いタタキ痕が残る。5・6は在地系の甕A、7は在地系の高坏A、8・9は在地系の鉢A、10・11は小型壺あるいは鉢で、11の形態は外来系小型鉢の影響を受けている。12・13は在地系の小型



1層：暗黄褐色軟質土
2層：暗褐色軟質土（炭・土器片多く含む。）

第143図 B区-7号竪穴住居跡 (1/60)



(層序)
1層：暗黄褐色土（炭片・黄色土小ブロックを多量に、土器片も含む。）
2層：暗褐色土（床面近くに炭が多く、床面直上に多量の土器片。）
→土器集中。
3層：暗褐色焼土まじり土。 4層：暗褐色軟質土→炉埋土

5層：黒褐色土（炭・焼土・土器片多く含む。）→炉内埋土
6層：暗褐色粘質土（サラサラした土、2～3cm大の黄色土小ブロック多く含む。）
→床下土壌埋土+ベッド盛土。

第144図 B区-8号竪穴住居跡① (1/60)

鉢Aで、12にはタタキ痕が残り、13はタテヘラミガキが顕著。14は伝統的V様式系の製作技法で作られた碗Bである。石器は15が石皿の破片で16が磨石、ともに安山岩製。17は柳葉形の鉄鏝の完形品である。土器の大半が在地系のA類で、外面にタタキ痕を残すものが多い。また一部ではあるが外来系の影響が認められる。竪穴住居跡の時期は、建設時の方向と、土器の特徴からみて古墳時代前期前半の小迫辻原2期と推定される。(旧A地区竪穴住居6)

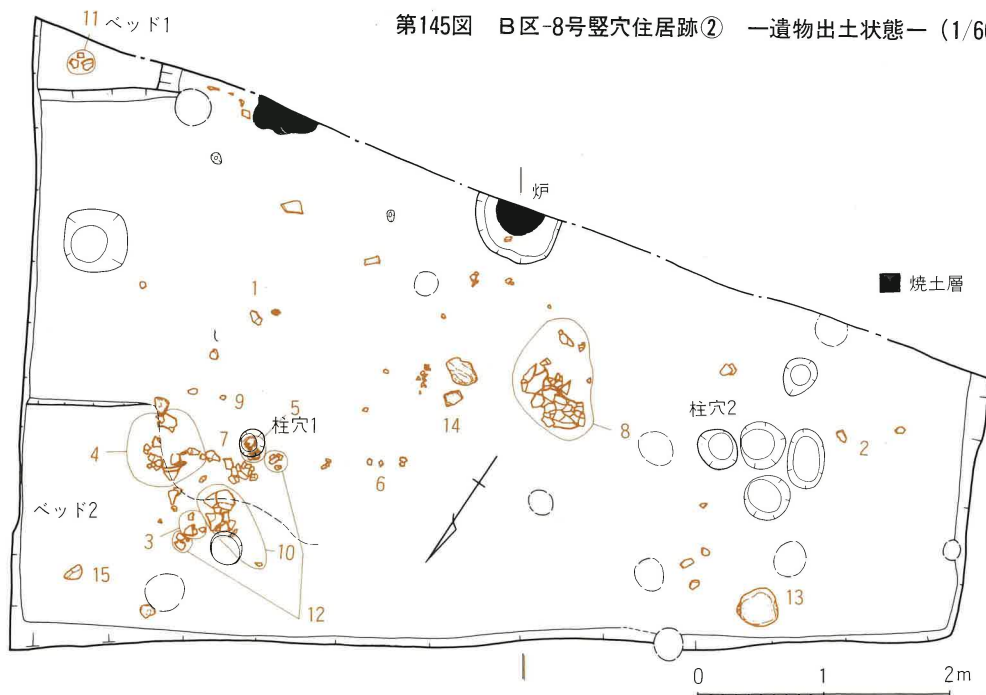
B区-7号竪穴住居跡 (第143図 一図版24)

B区の東端でコーナーのみを検出した竪穴遺構で、床面が検出されたので竪穴住居跡に分類した。おそらく方形の竪穴建物であろう。規模は長軸長270cm以上、短軸長250cm以上で、深さは13cmである。長軸の方位角は60度である。床面は踏みしめられて硬化したものである。埋土は二層に分かれ、底面に炭と土器細片を含む2層が堆積する。土器はいずれも細片で図示できないが、内外面ハケメ調整の在地系の甕Aの破片ばかりで、内面ヘラケズリの破片は含まれていない。竪穴の方向が周辺の小迫辻原3期の竪穴住居跡と一致するので、この竪穴も同じ時期と推定される。(旧D地区竪穴住居34)

B区-8号竪穴住居跡 (第144～147図 一図版24・25・48)

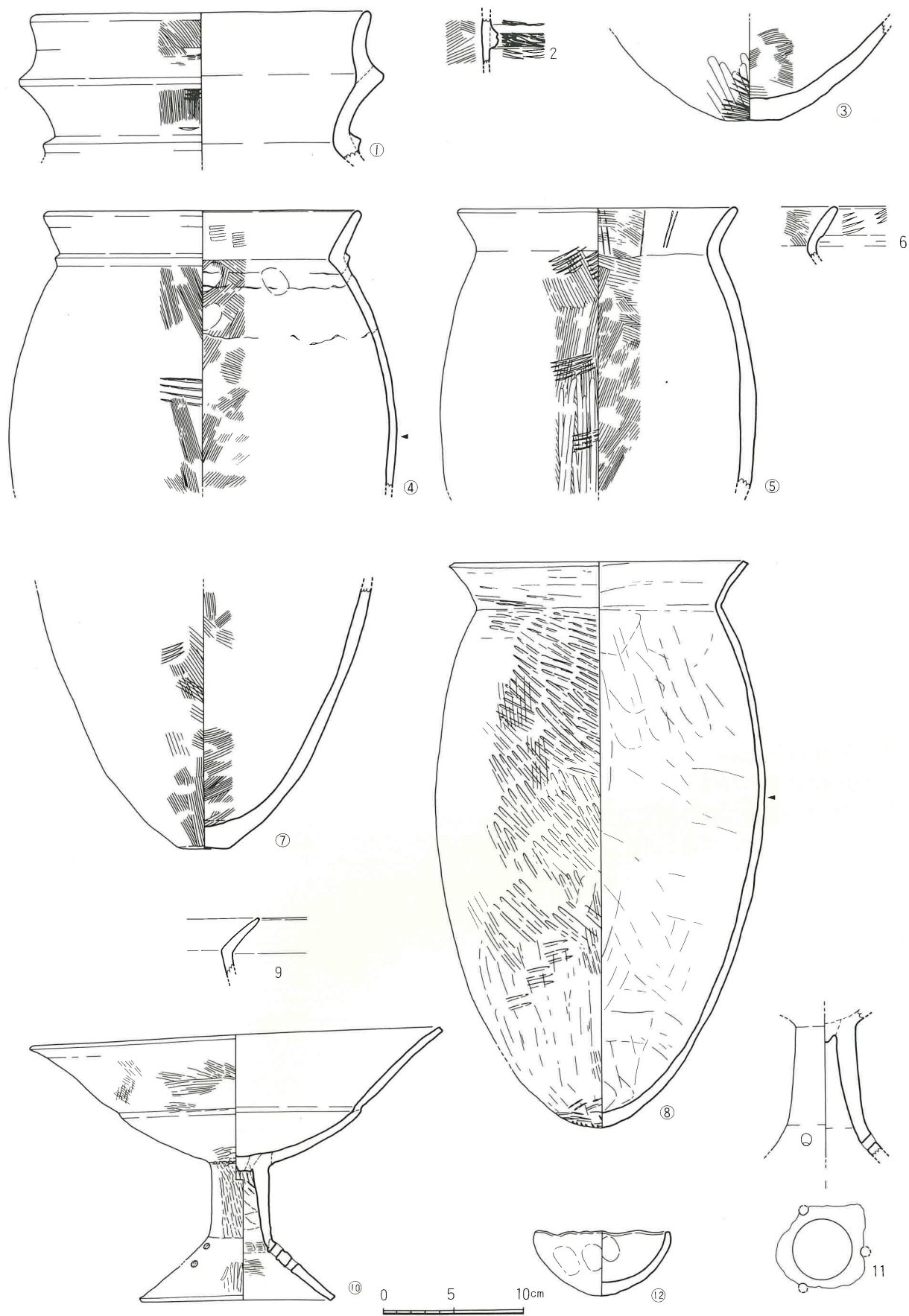
B区南辺で検出された東西に長い長方形の竪穴建物で、後世の溝とピットが重複していた。南半分は調査区外につづき未調査である。規模は東西長軸長760cm、南北短軸長450cmを越え、深さは約25cmである。東西長軸の方位角は60度である。床面積は50㎡前後になると推定される大型竪穴である。竪穴の平面形にあわせて配置された4本柱の構造と推定され、その内2本を検出した。床面を全部剥いだが周溝は検出されなかった。床面は踏みしめられて硬化したものである。なおベッド1の下には建設時に掘られた床下土壌が第144図のように存在した。内部の遺構としては、まずベッド状遺構が2箇所あり、東辺両隅に位置する。ベッド1は前述のように盛土で構築され、ベッド2は削りだして作られている。炉は中央にあり、皿状に掘り凹め、底面中央に焼土面が形成され、内部に焼土が堆積した地床炉である。柱穴2周辺などで数箇所小土壌を検出したが性格は不明である。以上炉とベッドの存在とその規模からみて、この竪穴建物は居住用の竪穴住居とみられる。

廃絶時にはまず建物の取り壊しがおこなわれたことが、柱穴1の抜取後に5の甕が廃棄されていることからわかる。次に焼却行為を伴う祭祀行為がおこなわれている。まず床面上に炭片・土器片を多量に含む暗褐色の2層が床面全体に広がる。この層中には焼土層(3層)が点在しているが、炭化材は少なかった。床面そのものには

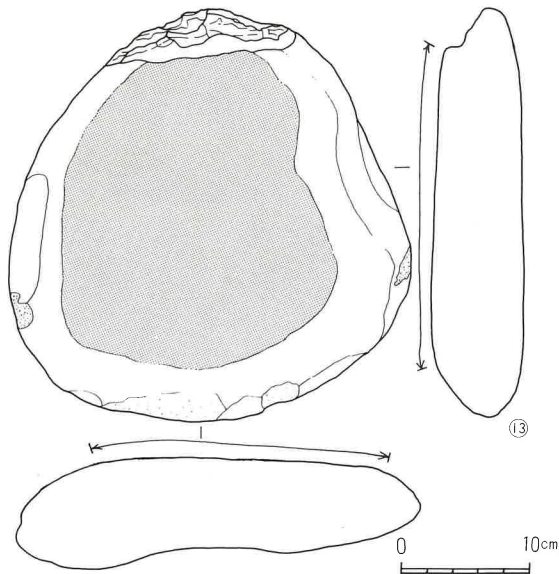


第145図 B区-8号竪穴住居跡② 一遺物出土状態一 (1/60)

被熱の痕跡は認められず、焼却行為は別な場所でおこなわれたと考えられる。この2層中からは、1の壺口縁部片が床面につぶれて、3の甕底部・4の甕上半部・5の甕上半部・7の甕下半部・10の完形の高坏と12のほぼ完形の碗が、ベッド2から柱穴1の間で一ヶ所にまとまってつぶれた状態で検出された。そのうち5の

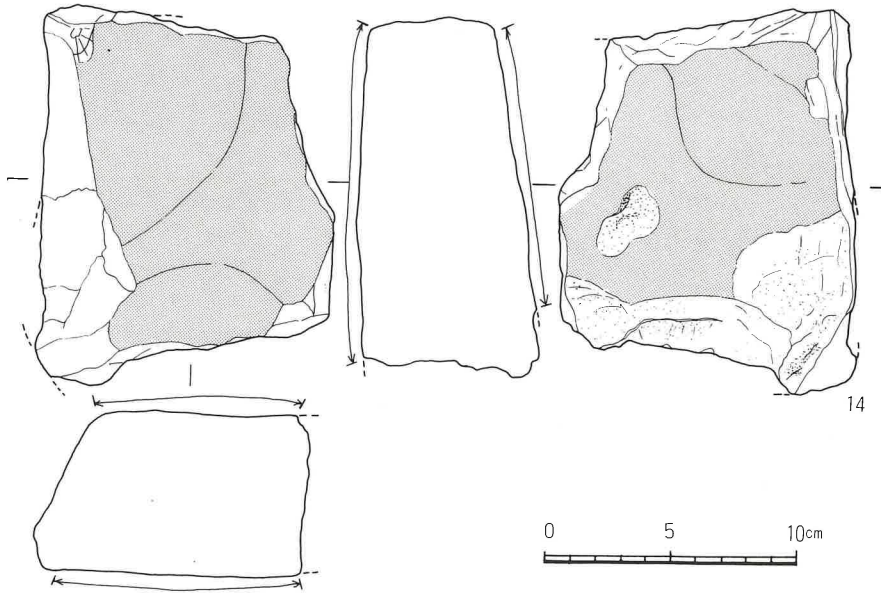


第146図 B区-8号竪穴住居跡出土遺物① (1/4) ○は廃絶時一括



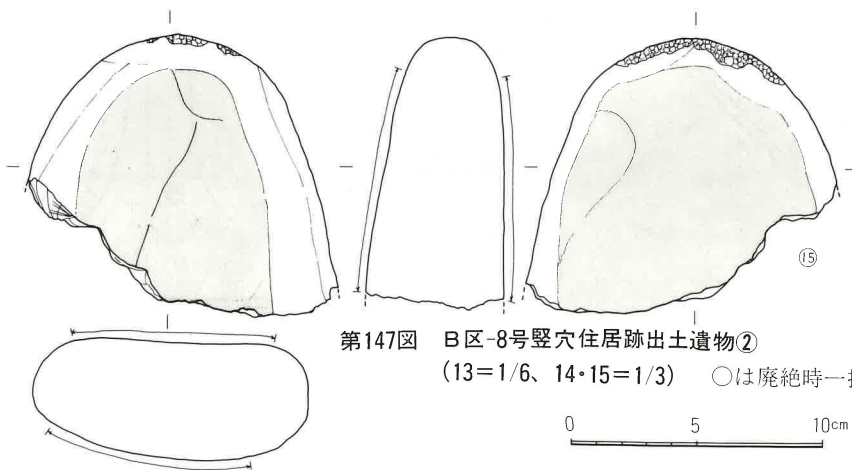
甕は柱穴抜き取り後に落ち込み、10の高坏は完形のまま横倒しで検出された。ほかに8の甕は中央で炭層の上によって完形のまま横倒しでつぶれ、11の高坏脚部はベッド1の床面上でつぶれていた。完形に復元できたのは8・10と12のみで、ほかの土器は破片が不足する。また13の完形の石皿と14の半分に割れた磨石も床面上で検出し、14の磨石は被熱している。以上の出土状態からみて、別な場所でおこなわれた祭祀後にこのような片付け方をしたものと推定される。その上に基盤層に由来する黄色土の小ブロックを多量に含む1層が堆積する。黄色土ブロックの量からみて短期間の埋没であり、焼却廃棄物と遺物の一括廃棄の後に埋め戻された可能性が高い。

以上の竪穴廃絶時の状況をまとめると、①竪穴建物の構造物を取り払われ、②この竪穴住居跡の外で焼却行為を伴う祭祀がおこなわれ、③祭祀の焼却廃棄物と遺物群が廃棄



されている。④祭祀および廃棄終了後、竪穴は埋め戻される。以上の祭祀は竪穴建替えに際しておこなう廃絶祭祀であると推定される。

出土遺物のうち、土器は胎土からみてすべて在地産である。甕の大部分は被熱している。1・2は在地系の壺Aで、1は複合口縁壺。3～8は在地系の甕Aで、3の底部は平底がのこる。4は頸部に三角突帯を施す。7は底部に小さな平底を残す。8はタタキ痕がよく残り、外面か下半にタテヘラケズリを施す。9は口縁部が尖る。10・11は在地系の高坏A。10は縦に2箇所透穴をめぐらし、形態は外来系の影響を受けている。12は手づくねの碗Aである。石器13～15は安山岩製の石皿である。土器の大半が在地系のA類で、外面にタタキ痕を残すものが多い。また一部ではあるが外来系の影響が認められる。



第147図 B区-8号竪穴住居跡出土遺物②
(13=1/6、14・15=1/3) ○は廃絶時一括

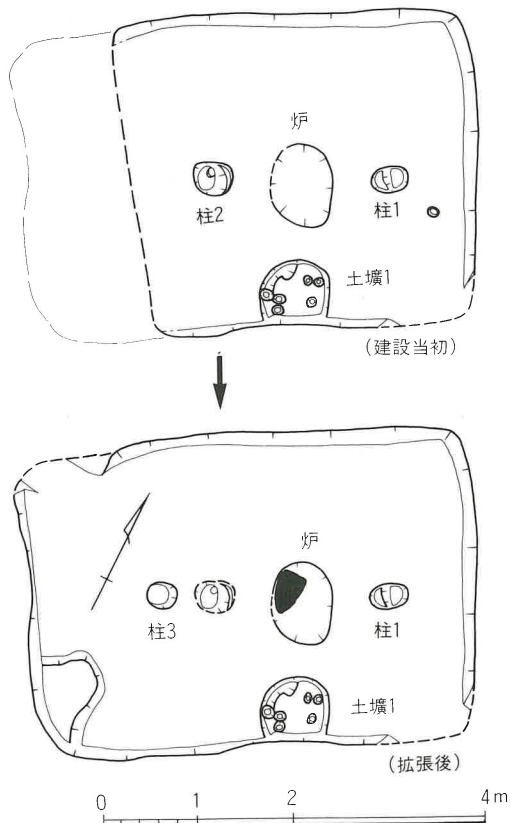
竪穴住居建設の時期は方向からみて小迫辻原3期で、廃絶の時期は土器の特徴がB-6住に近い点からみて小迫辻原3期の始めごろで、使用期間はかなり短かったのではないかと推定される。(旧D地区竪穴住居36)

B区-9号竪穴住居跡 (第148~150図 一図版26)

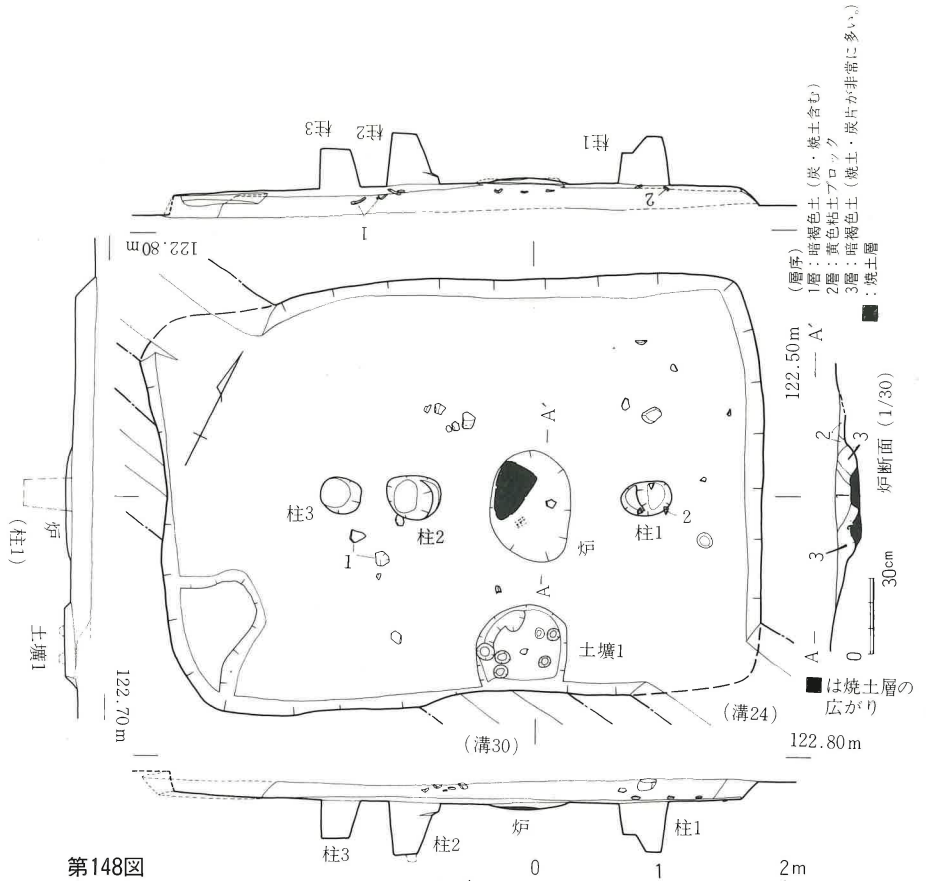
B区中央で近世の溝に切られた方形竪穴建物で、後に改築して長方形に拡張されている。規模は拡張時で東西長軸長490cm、南北短軸長340cmと東西に長く、深さは約30cmである。東西長軸の方位角は63度である。床面積は拡張後で13.7㎡の小型竪穴であり、柱穴の位置から推定して拡張前の床面積はおおよそ10㎡ほどである。柱穴

は竪穴の長軸にあわせた2本柱の構造であり、拡張時に西の柱が柱穴2から柱穴3へと外側に移されている。当初の2本の柱穴の深さはよく揃っている。床面は踏みしめられて硬化したもので、当初の床面と壁を丁寧に延長

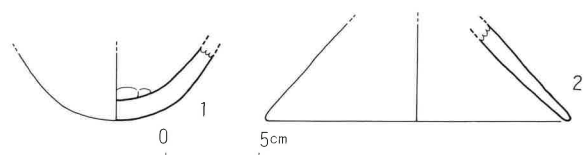
して拡張したものである。周溝と床下土壌はなかった。以上のように最初はほぼ方形の2本柱竪穴建物として作られ、ある時期に西側に1mほど竪穴を拡張し、その際西柱の位置を変えている(第149図)。ベッド状遺構は存在しないが西南隅に竪穴拡張時に掘り残された低い段状の遺構が残されている。その性格は不明である。炉は1箇所のみで造りかえはない。柱穴1と2の間に床面を皿状に掘り凹め、底部に焼土が堆積した地床炉である。拡張後も同じ炉がそのまま使われている。しかし廃絶時に残された炉内の焼土が西側にかたよって検出された点から推測して、人のすわる「座」の位置が西側から火を使うように変化したと思われる。土壌は1箇所あり、南東壁中央の壁に接し炉の位置に対応して設けられた土壌1は半円形の浅いもので、炉と同様に造りかえはなく、炉の機能と密接な関係にある「対面土壌」にあたる。小規模な竪穴建物だが、炉と土壌の存在からみて、居住用の竪穴住居とみられる。



第149図 B区-9号竪穴住居跡の変遷 (1/80)



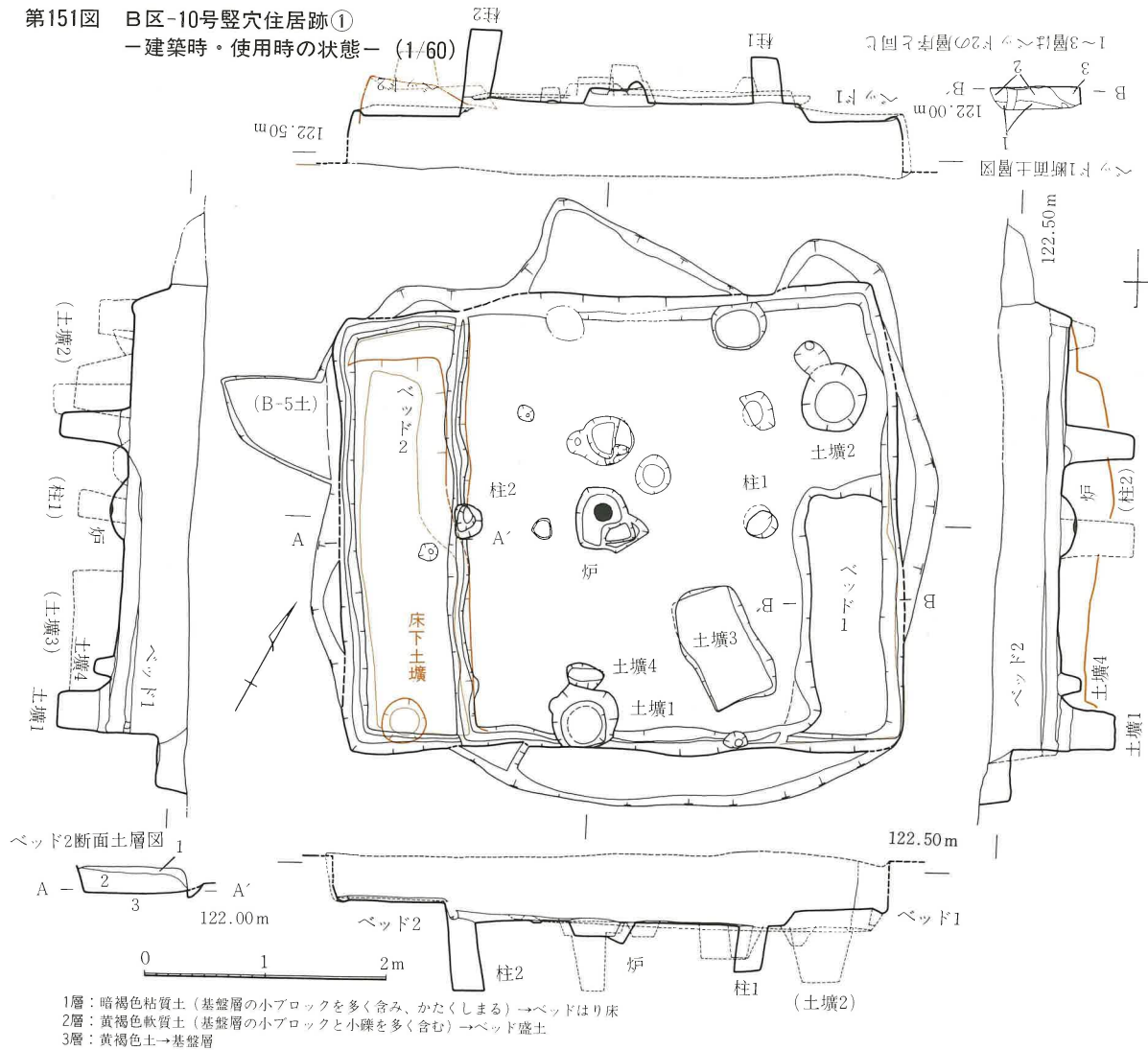
第148図 B区-9号竪穴住居跡(1/60: 炉断面: 1/30)



第150図 B区-9号竪穴住居跡出土遺物 (1/4)

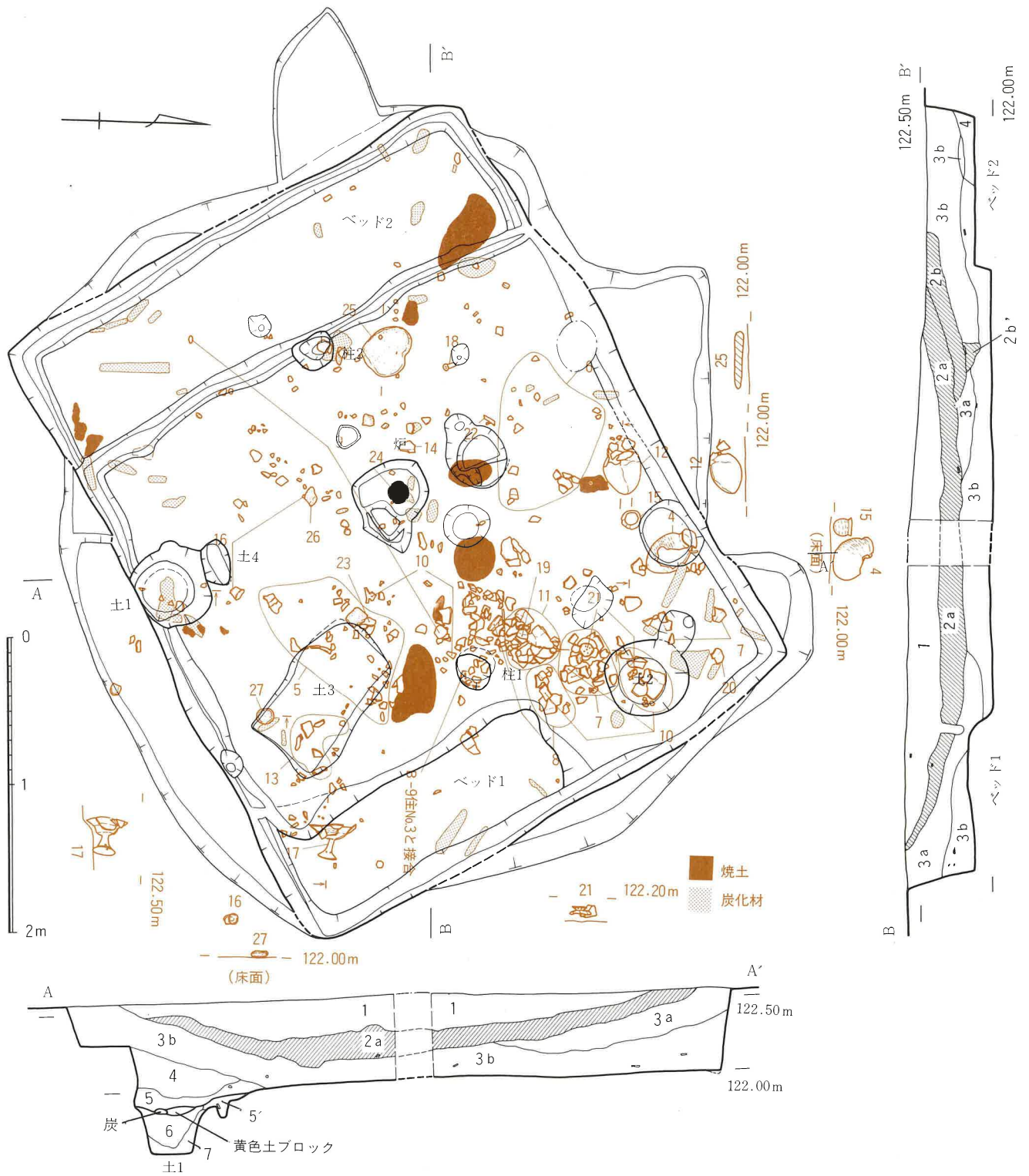
埋土は炭と焼土を含み、一部に黄色土ブロックが混入する。土器片はきわめて少なく、小片が床面に散在する。1の在来系の甕Aの底部片と2の布留系の小型器台脚部片が目立つ程度である。床面上の埋土に黄色土ブロックが目立つので埋め戻された可能性が高く、焼却廃棄物や土器の片付けも認められないので、この竪穴住居では廃絶祭祀はおこなわれていないとみられる。竪穴住居跡の時期は、建設時の方向からみて古墳時代前期前半の小迫辻原3期で、廃絶の時期は土器からみて同じ3期の間と推定される。(旧D地区竪穴住居25)

第151図 B区-10号竪穴住居跡①
—建築時・使用時の状態— (1/60)



B区-10号竪穴住居跡 (第151～156図 一図版26～28・48・49)

長方形の竪穴建物で、きわめて保存状態がよく、上部までよく残っていた。そのため円形竪穴と誤認し土層観察用土手の位置が大幅にずれてしまった。規模は東西470cm、南北390cmで、深さは約60cmである。地形との関係から判断して、当初から竪穴部分が深い構造であったと推定される。東西長軸の方角角は59度である。床面積は16.0㎡の小型竪穴である。竪穴の長軸に配置された2本柱の構造で、柱穴2がやや深い。ベッド1・2の背後にまで周溝が全周し、建設時に掘削された壁材固定用の溝と考えられる。特にベッド2前面の周溝はベッドの枠板材の固定用の溝と考えられる。これに対しベッド1の前面には周溝がなく、構造が異なっていた可能性が高い。床面は踏みしめられて硬化したものである。ベッド2の下には建設時に掘られた床下土壙が存在した。土壙の底には1箇所ピットがあり、土壙はベッドの範囲に対応するように掘られている。竪穴の周囲には張り出しのような段が認められる。特に南東壁の張り出しは層序の観察から遺構埋没時に形成されたものである。しかし形状は安定していないので、後述するように廃絶後に竪穴を埋めた際の掘り崩しの痕跡である可能性が高い。ベッド状遺構は2箇所あり、東西両辺に配置されている(第151図)。いずれも構築方法は盛り土によるものであるが、ベッ



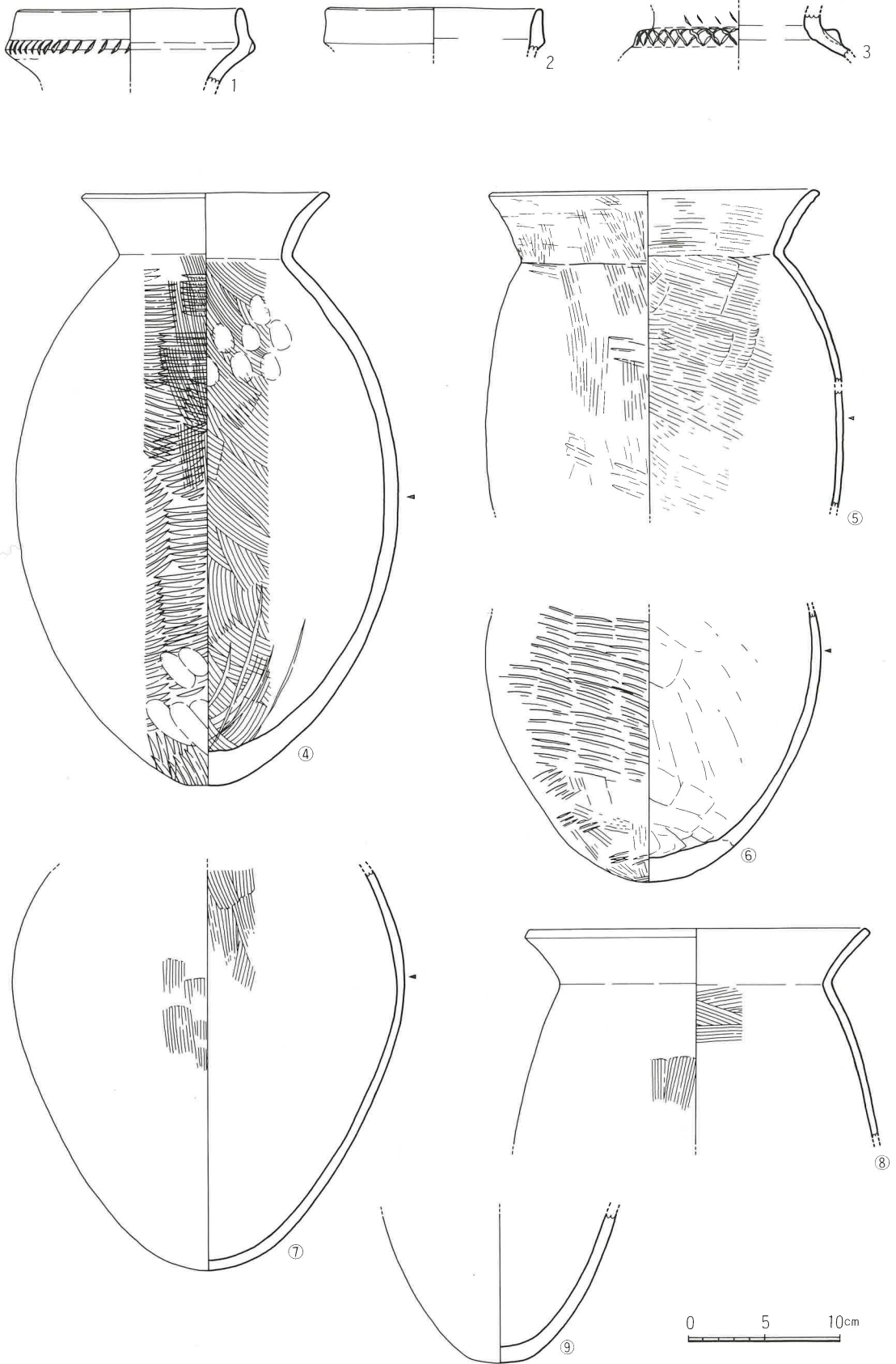
土 5'層=小Pitの埋土
 壙 6層:暗褐色軟質土(さくさく、炭・黄色粘土ブロック含む)
 1 埋土 7層:黄褐色軟質土(混入物なし)→すぐに埋まった土

竖穴埋土

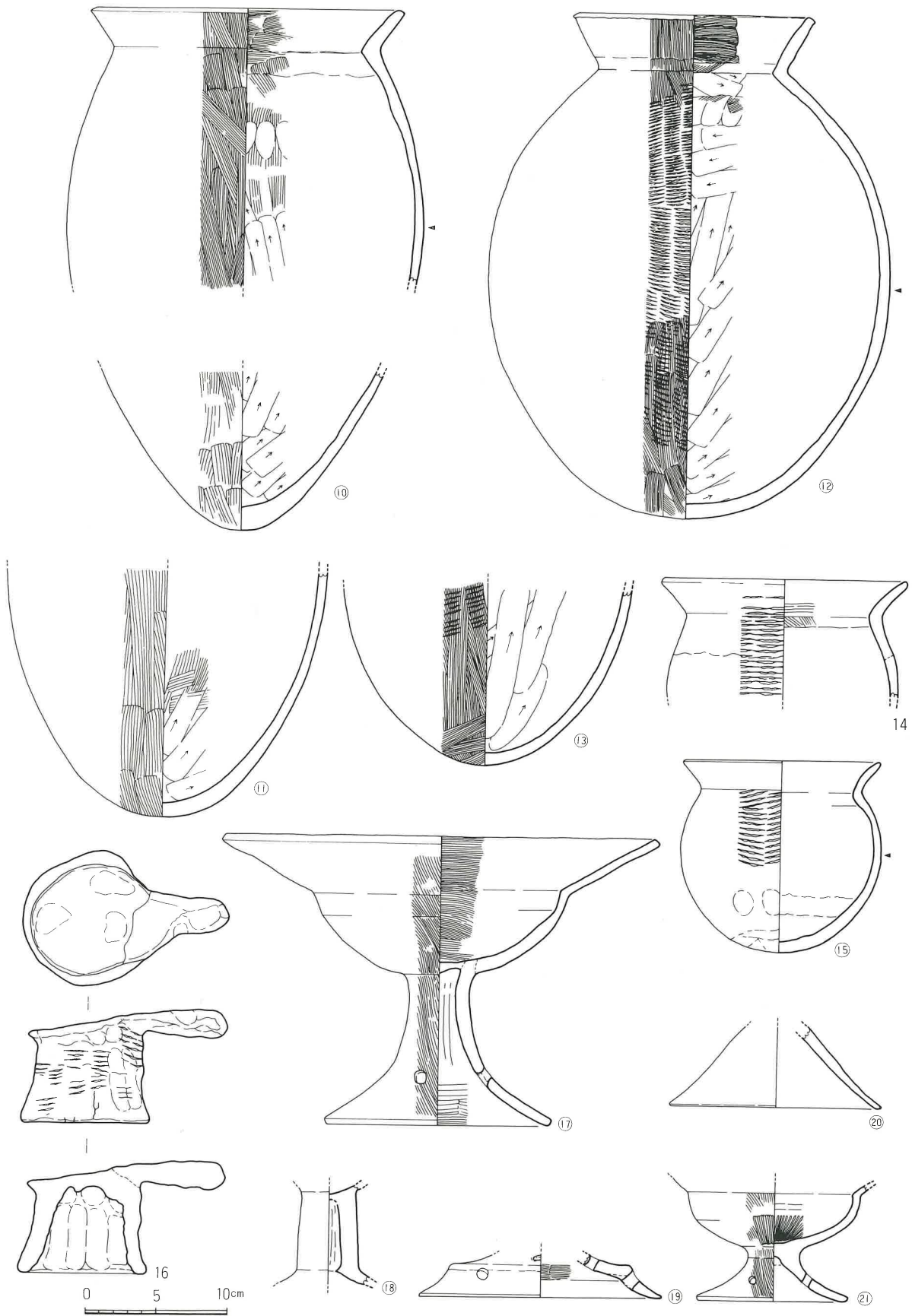
- 1層:暗褐色土(均質で土器片多く含む)
- 2a層:黒褐色土(土器片・黄色粘土地山小ブロックまじる)
- 2b層:黒色土(均質で、土器片まじる)
- 2b'層:淡黒色土(2a層の下に部分的にある)
- 3a層:暗黄褐色土(土器片・焼土・炭片・黄色地山粒子多く含む)
- 3b層:暗黄褐色土(3a層より黒い。炭・焼土片多量に混じる)
- 4層:暗褐色土(炭片・黄色地山小ブロック含む)
- 5層:淡黒褐色土(炭・炭化材料片含む)→土壙1の上層埋土→廃絶直後の堆積。

自然堆積層が、
 ゴミ穴として利
 用されている
 土器を大
 量に含む

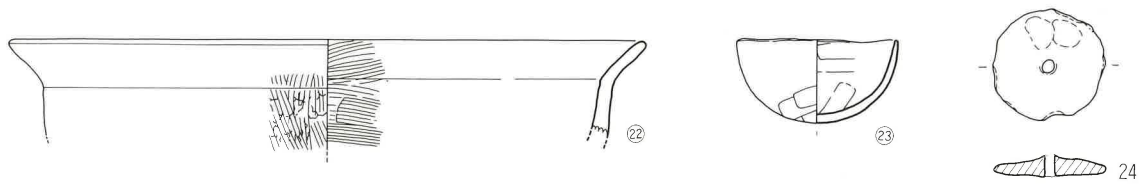
第152図 B区-10号竖穴住居跡② 一遺物出土状態と層序一 (1/40)



第153図 B区-10号竪穴住居跡出土遺物① (1/4) ○は廃絶時一括



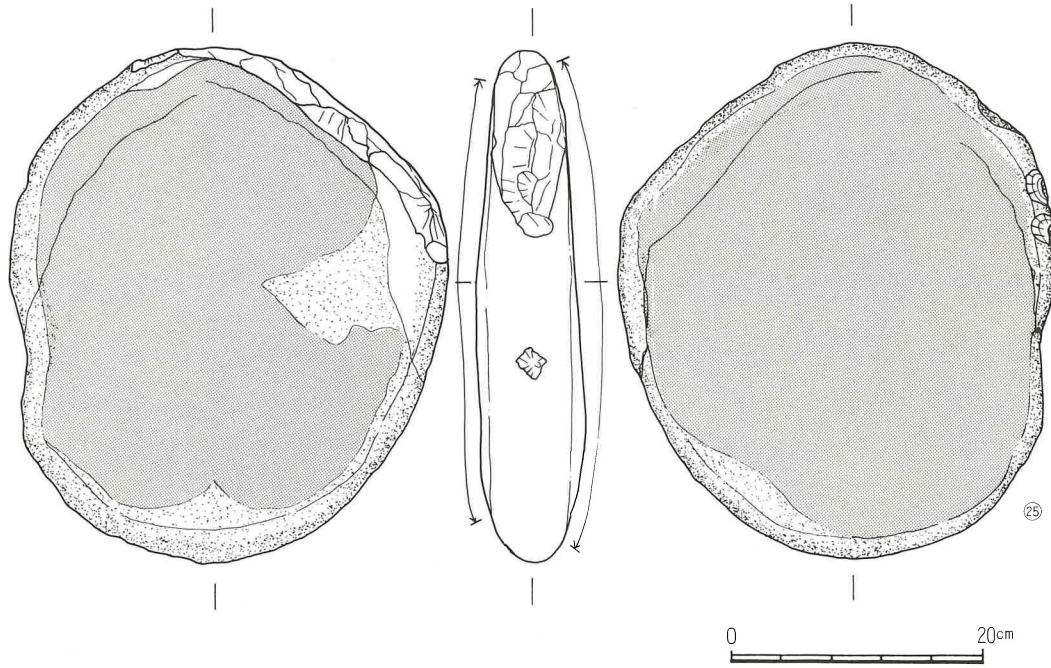
第154図 B区-10号竪穴住居跡出土遺物② (1/4) ○は廃絶時一括



0 5 10cm

第155図 B区-10号竪穴住居跡出土遺物③ (22~24=1/4、25=1/6)

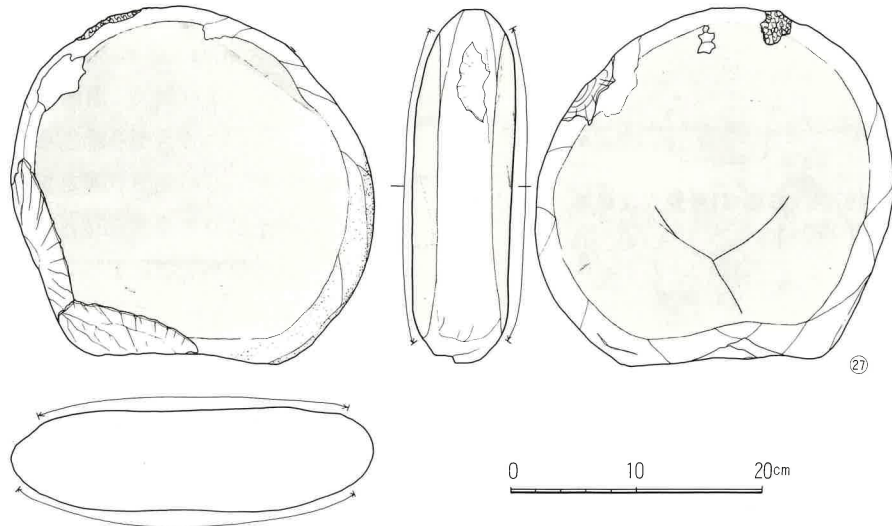
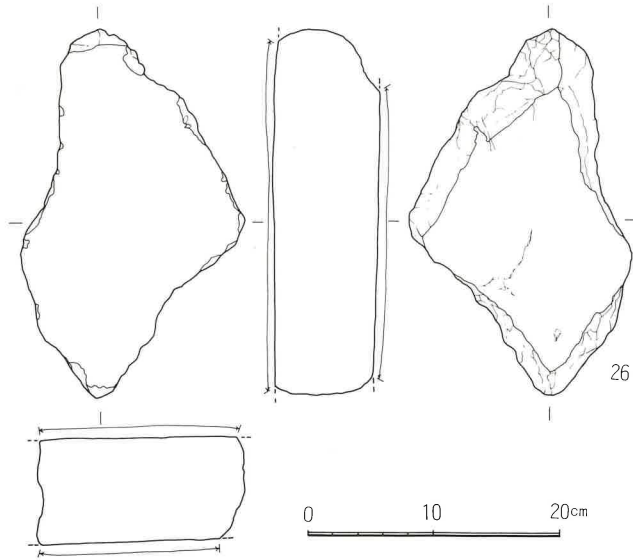
○は廃絶時一括



ド1は水平な床面からそのまま盛り土し、ベッド2は前述したように床下土壌を掘った後に盛り上げているという違いがある。なお背後の周溝の深さがベッドの高さの中に納まっている点からみて、ベッドは双方とも建設当初につくられたものである。炉はほぼ中央に1箇所あり、皿状に掘り凹め、底面中央に焼土面が形成された地床炉である。土壌は4箇所あり、南東壁中央の壁に接して設けられた土壌1は円形で、炉の南側に設けられる「対面土壌」にあたる。きわめて深い点が通常の対面土壌と異なっている。廃絶時に堆積した焼土の一部が内部に落ち込んでいるので最後まで開口していたことは明らかである。その土壌の北側に近接して掘りこまれた土壌4は、C-1住やB-5住で検出された入口施設の構造とよく似ているので、梯子を固定するための穴と推定される。土壌2は床面で検出したが、土壌3は埋土上面が硬化しており、廃絶時にはすでに埋められている。以上、炉とベッドの存在とその規模からみて、この竪穴建物は居住用の竪穴住居とみられる。

廃絶時にまず建物の取り壊しがおこなわれたことが、柱穴の上に土器あるいは焼土が廃棄されていたことからわかる。次に焼却行為を伴う祭祀行為がおこなわれている(第152図)。まず南側の一部に土器を含まない5・4層が、おそらく壁を掘り崩して廃棄される。そして床面上に炭片・焼土を多量に含む淡黒褐色の3層が、竪穴の床面全体に広がる。この層には焼土層と炭化した木材を多量に含む多量の遺物一括廃棄が認められる。床面そのものには被熱の痕跡は認められないので、竪穴内部で焼却がおこなわれたとは考えられないが、この竪穴廃絶時の焼却行為の片付けが、この竪穴を対象に行なわれた点を指摘できる。さてこの3層の焼却廃棄物におおわれた遺物の出土状態は、竪穴の床面に完形のまま置かれたものと、3層廃棄の直前あるいは同時に一括して大型破片のまとまりとして廃棄されたものに分けることができる。完形のまま置かれたものは、まず側面に穿孔のある4

の甕が北壁にもたれ掛かり、そのそばに12の甕が横倒しで出土し、ふたつの甕の間に15の小型甕が正位で置かれていた。また17の高坏はベッド1上から倒れたように横倒しで検出された。さらに25の完形の石皿もベッド脇に置かれた状態で出土し、この石皿は被熱して剥離している。以上は焼却廃棄物と遺物の一括廃棄がおこなわれる直前に置かれたものである。次に大型破片のまとまりで廃棄されたものは5・11・13の甕と18・19の高坏、20の小型器台、21の台付鉢、22の鉢と23の碗である。その内5・8は上半のみを、6・7・11・13は下半のみが出土し、10は破片が分散していたが完形に復元できた。20は炭化材の下になっていた。21の口縁を失った台付鉢が7の甕の破片の上に逆さまに置かれていた。また27の小型の石皿も炭化材の上ののって出土

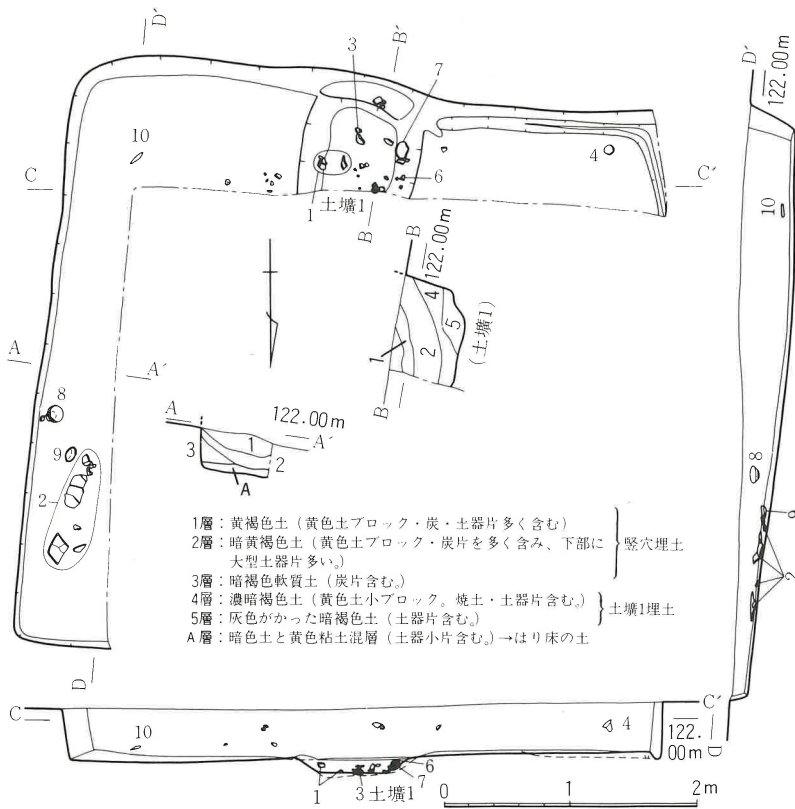


第156図 B区-10号竪穴住居跡出土遺物④(1/3) ○は廃絶時一括

した。さらに興味深いことに、11の甕の近くで出土した壺の破片が、B-4住の3の壺Dと接合した。ところで3層には黄色土ブロックが多量に含まれ、また完形で出土した土器はまったくつぶれていないので、焼却廃棄物と遺物一括廃棄のあと3層の土が埋め戻されたと推定され、その際3層上部に16の支脚が折られて廃棄されたと推定される。その後は放置され、ゴミ穴に使用されながら自然埋没したと推定される(2・1層)。2層以上に混入した遺物は、1～3の壺片、24の土製紡錘車、26の石皿の破片がある。

出土遺物のうち、土器の大半は胎土からみて在地産であるが、7の甕・20の小型器台・23の碗は搬入品の可能性がある。また甕と支脚はどれも被熱している。1～3は在地系の壺Aで、1・2は複合口縁壺。3は突帯の刻みを交差させる。4～14は在地系の甕Aだが、4・5・14のように外面にタタキ痕が顕著で内面にケズリのない甕と、10～13のようにタタキをハケで消し内面にヘラケズリが施される甕がある。15の小型甕は伝統的V様式系の系譜を引く甕Bである。16は在地系の支脚A、17は在地系の高坏Aで、18・19は外来系の高坏、20は外来系の小型器台、21は在地系の台付鉢A、22は在地系の鉢A、23は在地系の碗Aである。24は手づくねの完形の紡錘車である。石器は、25～27は石皿でいずれも安山岩製である。土器の大半が在地系のA類であるが、小型器種のなかには外来系の技術で作られたものが目立つ。

以上この竪穴住居跡は位置・方向と土器の接合関係からみて、B-4住と密接な関係があったと推定される。竪

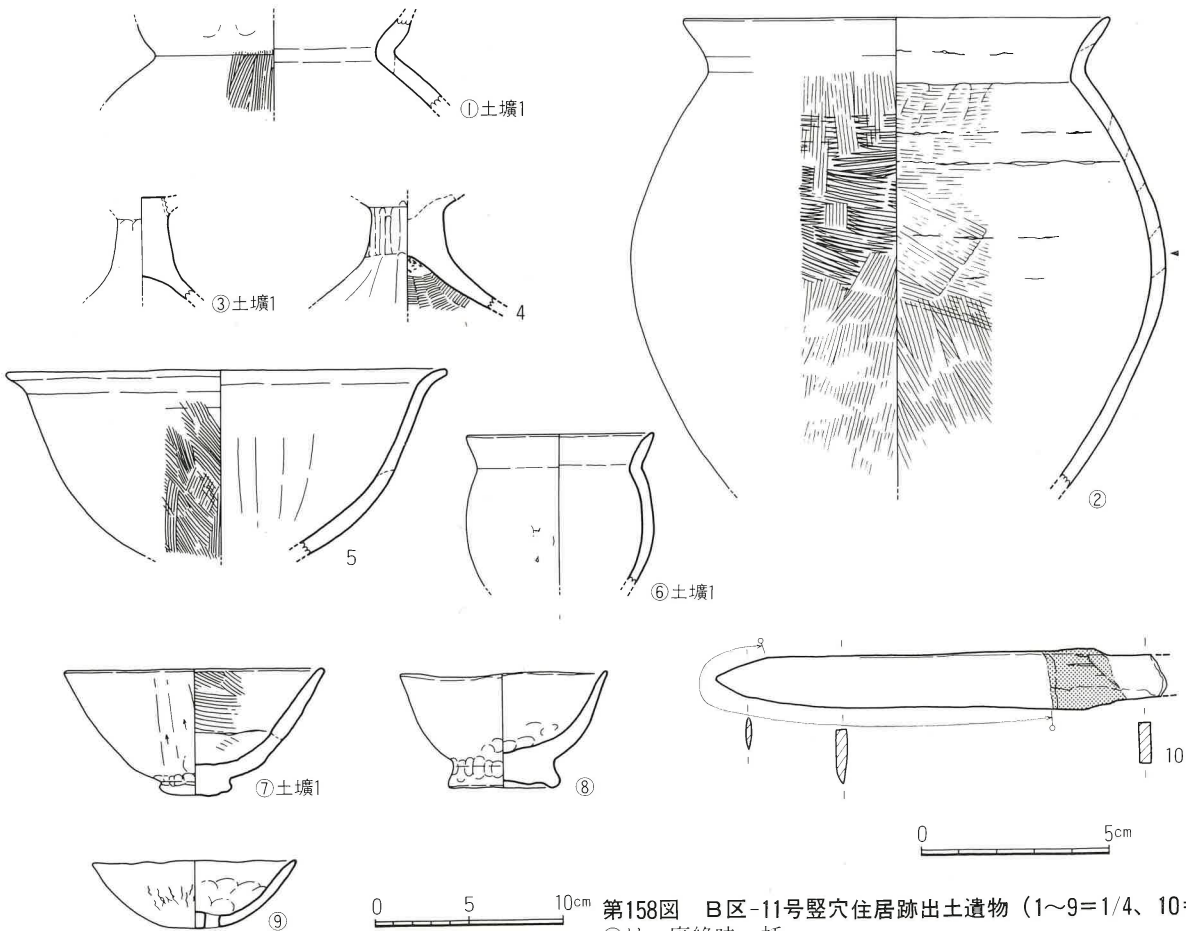


第157図 B区-11号竪穴住居跡 (1/60)

穴住居跡の時期は、その方向からみて古墳時代前期前半の小迫辻原3期に建設・使用され、廃絶の時期は、出土土器からみて同じく小迫辻原3期後半と推定され、B-4住と同時に廃絶した可能性も考えられる。(旧D地区竪穴住居24)

B区-11号竪穴住居跡 (第157・158図 一図版29・49)

稚蚕飼育所の給水塔によって大部分が破壊された方形の竪穴建物である。規模は東西480cm、南北480cmでほぼ正方形になる。深さは約40cmである。南北軸の方位角は6度で、ほぼ真北である。床面積は20.2㎡と復元される中型の竪穴である。柱構造は不明で、周溝は南西部に部分的に確認される。床面は黄色粘土を混ぜた土を厚く敷いた貼り床である。残された遺構の中には床下



第158図 B区-11号竪穴住居跡出土遺物 (1~9=1/4、10=1/2) ○は、廃絶時一括

土壌は存在しない。ベッドや炉は不明というほかないが、土壌は1箇所あり、南壁中央の壁に接して設けられた「対面土壌」にあたる。廃絶時に堆積した土が内部に落ち込んでいるので最後まで開口していたのは明らかである。

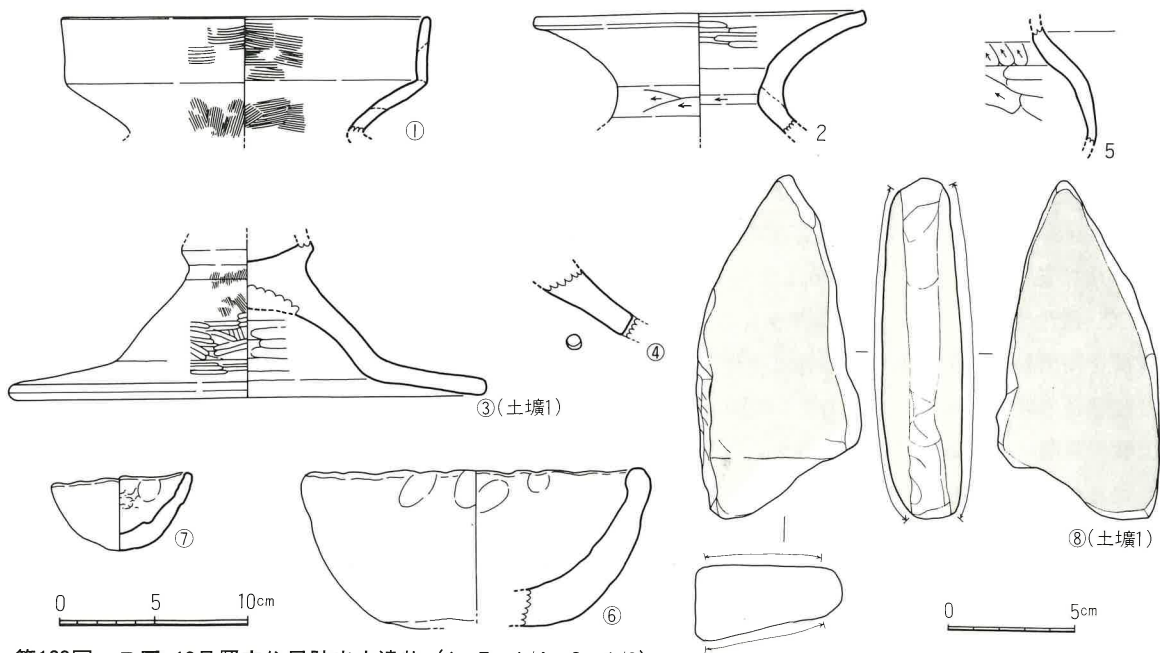
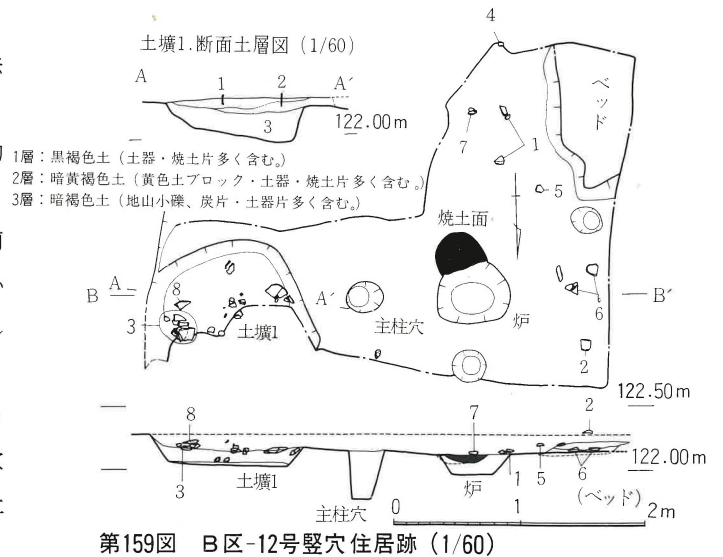
この竪穴では焼却廃棄物の廃棄はおこなわれていないが、祭祀行為に伴う土器の一括廃棄が認められる。まず南側の開口していた土壌1内に流入した5・4層中に、1の壺頸部片・3の高坏脚部・6の小型壺片、7の碗が、破片の状態で廃棄される。そのうち6は被熱し7は完形に復元できた。次に竪穴の周縁に暗褐色の3層が部分的に堆積する。そこでは4の高坏脚部と10の刀子が単独で検出された。そして炭片と黄色土ブロックを多量に含む暗黄褐色の2層が堆積する。この層の下部の北東壁ぎわに遺物一括廃棄が認められる。2の甕は大型破片で重なり、そのそばで8の台付鉢と9の碗が完形のまま正位で置かれた状態で検出された。2と9は床面に密着し8はやや浮いていた。また2の甕は被熱し、9の碗には穿孔が施されている。さらに黄色土ブロックと炭を多量に含む1層が堆積し、5の鉢片が混入する。以上の出土状況から竪穴廃絶時の祭祀行為に使用された土器を供献あるいは廃棄したものと考えられるが、焼却行為は行なわれていない。さらに2・1層中に基盤層に由来する黄色土ブロックが多量に含まれる点から、廃棄後埋め戻された可能性が高い。

出土遺物のうち土器はすべて胎土からみて在地産である。1は在地系の壺Aで、2は伝統的V様式系の影響が残る在地系の甕A。3・4も伝統的V様式系の系譜をひく高坏B。5・6は在地系の鉢Aと小型甕A、7・8は伝統的V様式系の技法による碗B。9は在地系の碗Aで穿孔がある。10は刃渡り8、7cmの鉄製刀子で、柄の木質が付着する。土器の多くが伝統的V様式系の系譜をひくB類であることが注目される。

竪穴住居跡の時期は、その方向と竪穴形態から古墳時代前期前半の小迫辻原4期と推定されるが、廃棄された土器は小迫辻原2期とみてもおかしくないものである。後日再検討したい。(旧D地区竪穴住居26)

B区-12号竪穴住居跡(第159・160図 一図版29・49・50)

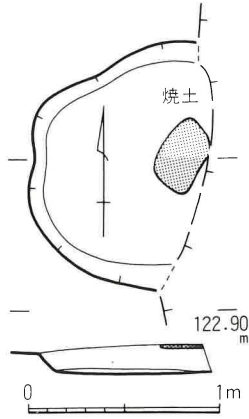
B区の西端でその一部を検出した長方形と推定される竪穴建物で、稚蚕飼育所の建物建設で大規模に破壊され、B-36土



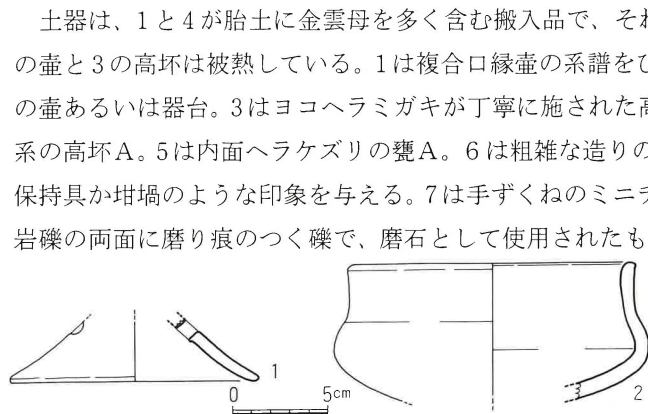
第160図 B区-12号竪穴住居跡出土遺物(1~7=1/4、8=1/3)
○は廃絶時一括

壙（弥生時代前期末）を切っている。その規模は東西365cm以上、南北290cm以上で、ベッドの位置などから推測して東西に長いと思われる。深さは約15cmである。わずかに残った東壁の方向と炉と柱穴の並びから推して東西に長軸をもち、その方位角はおおよそ90度前後で、B-11住の方向とに近いものと考えられる。柱穴は1本のみ検出したが、炉との位置関係からみて2本柱の構造となろう。床面は踏みしめられて硬化したものである。床下土壌は見つかっていない。削りだして造られたベッド状遺構が1箇所ある。炉はほぼ中央に1箇所あり、皿状に掘り凹めた地床炉で、外側南に焼土面がある。土壌は1箇所で、東壁に接して設けられたものであり、廃絶時には埋没していた可能性が高い。炉とベッドの存在とその規模からみて、この竪穴建物は居住用の竪穴住居とみられる。

埋土（1・2層）は土器片と炭・焼土と黄色土ブロックをかなり含む暗褐色軟質土で、土器は破片となって床面全体に散在する。なかでも3の高坏らしい脚部と8の異形の磨石は土壌1の上面からまとまって出土した。他に1の壺口縁片、4の高坏片、6の異形の鉢片が床面上で検出され、7の碗は完形のまま正位で置かれていた。また2の壺らしい口縁部と5の甕片はやや浮いて出土した。以上の出土状況から竪穴廃絶時の祭祀行為に使用された土器を供献あるいは廃棄したものと考えられ、さらに2・1層中に黄色土ブロックが多量に含まれる点から、廃棄時に埋め戻された可能性がある。



第161図 B区-47号土壌 (1/40)



第162図 B区-47号土壌出土遺物 (1/4)

土器は、1と4が胎土に金雲母を多く含む搬入品で、それ以外はすべて在地産である。2の壺と3の高坏は被熱している。1は複合口縁壺の系譜をひく在地系の壺Aで、2は単口縁の壺あるいは器台。3はヨコヘラミガキが丁寧に施された高坏の脚あるいは坏部。4は在地系の高坏A。5は内面ヘラケズリの甕A。6は粗雑な造りの大型の鉢で、一見土器焼成用の保持具か坩堝のような印象を与える。7は手づくねのミニチュアの碗。石器として8の安山岩礫の両面に磨り痕のつく礫で、磨石として使用されたものである。土器の多く特に2・3・

6など器種および型式を判別するのが困難な異形の土器が目につく。

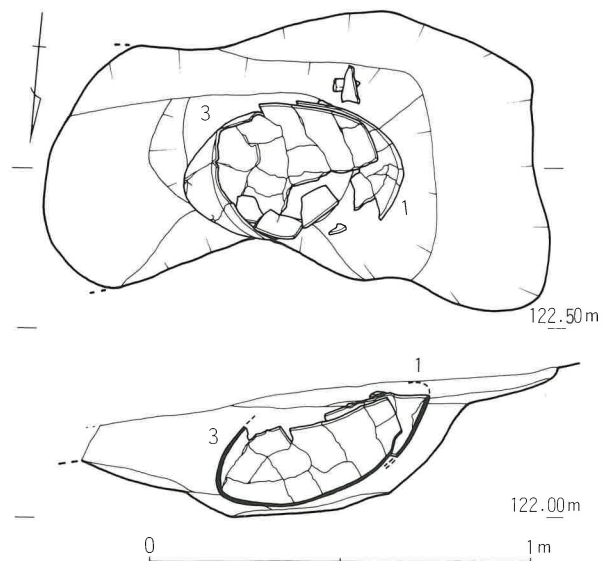
竪穴住居跡の時期は、その

方向と竪穴形態および出土土器からみて古墳時代前期前半の小迫辻原4期と推定される。(旧D地区竪穴住居31)

2) 土壌 (第3・6表)

B区-47号土壌 (第161・162図 一図版29)

B-10住近くのK1調査区で検出された不定形の土壌で、B-2溝(中世)に東半分を破壊されている。規模は長軸長132cm、短軸長90cm以上、残存部の深さは16cmで、底面は平坦である。埋土はサクサクした暗褐色の単一層(1層)で、黄色土小ブロックと土器片を含み、検出面で焼土の堆積を検出した。1の高坏あるいは小型器台の脚部片と2の在地系の鉢Aの破片が含まれていた。この土器からみて土壌の時期は古墳時代前期前半の小迫辻原2ないし3期と推定される。(旧D地区土壌486)



第163図 B区-8号墓 (1/20)

3) 墓 (第4・6表)

1基の小児土器棺墓が単独で発見されている。方向は他の遺構と一致しない。

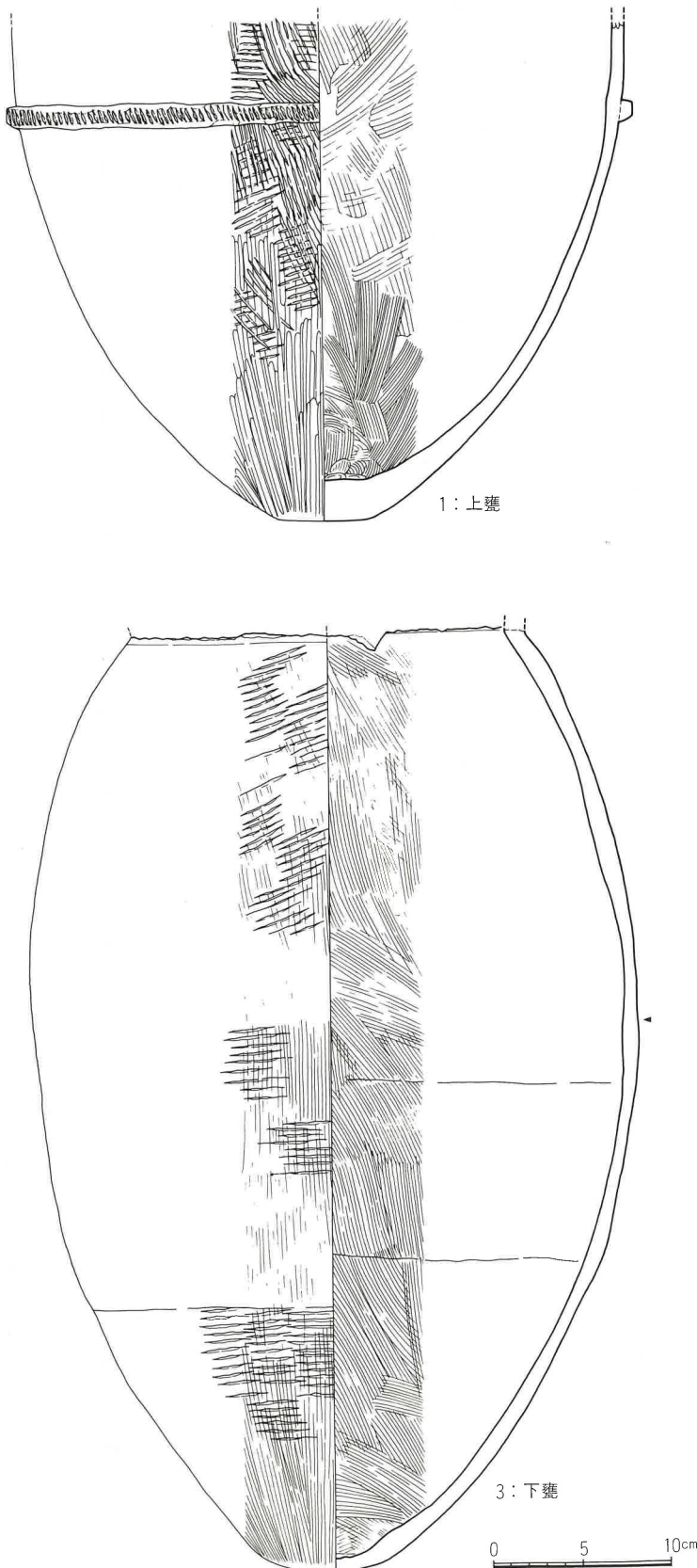
B区-8号墓

(第163・164図 一図
版30・50)

J2調査区で検出
された合口甕棺墓で、
下甕に壺を被せてい

る。上半はかなり削平されている。墓壙の平面形は土器の形にあわせた変形二段の楕円形で、規模は上段で長軸長133cm、短軸長72cm、深さは9cmである。下段の規模は長軸長105cm、短軸長56cmで、深さは30cmである。土器の大きさからみて小児用の甕棺墓で、上甕の方向から西頭位と推定される。頭位の方向は方位角で260度である。甕棺内の土はすべてふりにかけたが、遺物は検出できなかったので副葬品はなかったと推定される。また下甕の内面に赤色顔料の塗布が認められた。

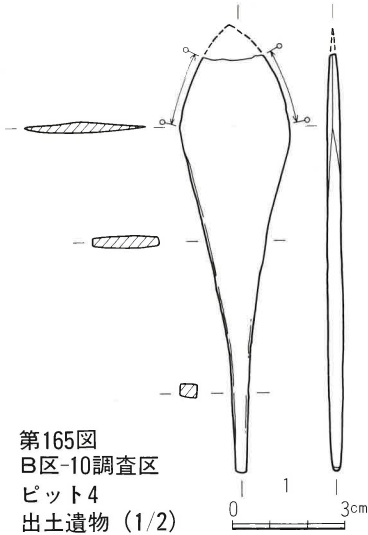
上甕に使われた1は在地系の壺Aで、上半をきれいに除去している。胴部に突帯があり、刻目の代わりに平行タタキで条線を施す。底部下半はタタキ痕を直接ヘラミガキで消している。下甕に使われた3は在地系の甕Aで、口縁をきれいに打ち欠き、その一部と思われる2の甕口縁部も出土している。また3は被熱の痕跡が明瞭で、実用品を転用したことがわかる。両者の壺甕ともに底部は平底気味で、タタキ痕が残る点からみて、埋葬の時期は古墳時代前期前半の小迫辻原1ないし2期と推定される。(旧D地区2号甕棺=墓3)



第164図 B区-8号墓出土遺物 (1/4)

4) ピット (第122・165図 一図版50)

I 0 調査区ピット4 から先端部の破損した1の残長11cmを越える大型の柳葉形鉄鏃が出土している。装着痕は認められない。あるいは故意に埋納された可能性もある。



第165図
B区-10調査区
ピット4
出土遺物 (1/2)

第5節 奈良時代 第167図)

この時期にあたる遺構は少なく、竪穴住居跡1軒を確認したのみで、ほかにピット1本を本文に掲載した。この時代の遺構はまだ存在したであろうが、土器を含まないためにほかの時期の遺構と区別できなかった。

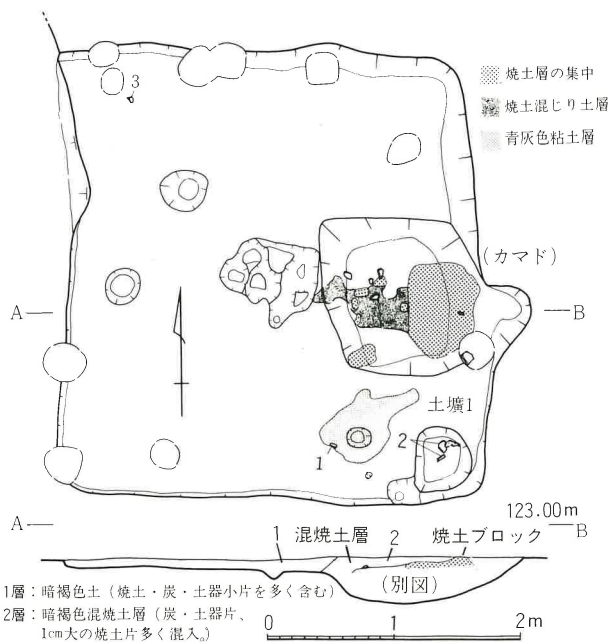
1) 竪穴住居跡 (第1・6・8表)

B区-13号竪穴住居跡 (第166・168・169図 一図版31・50)

J 0・J 19 調査区で検出された東カマドの方形の竪穴建物で、後世の柱穴がかなり重複している。その規模は南北長軸長370cm、東西短軸長350cmで正方形に近い。検出面からの深さは約10cmである。南北軸の方位角は2度でほぼ北である。床面積は10.5㎡の小型の竪穴である。柱穴はなく無柱穴の構造の上屋であったと推定される。周溝・床下土壌・ベッドはない。床面は踏みしめられて硬化したものである。カマドは存在するが床面積はあまりに小さく、上屋構造も簡易なものと考えられるので、居住用の竪穴住居というよりも炊事用のカマ屋と考えるのが妥当であろう。

カマドはその上部が壊れているので、下部構造のみを検出できた。まず大きくカマドの基礎を造るための掘り込みをおこない、煙道となる地点は竪穴から大きく飛び出すように溝をのばしている。黄色土ブロックが多く混じる土(3層-第168図)を使って掘り込みを埋めつつ、炉床と煙道を造っている。その炉床の上に同じく黄色土ブロックを混ぜた2層の土でカマドの袖と奥壁を構築している。一見大きく基礎土壌を掘って改めて埋めるのは無駄な工程のように思われるが、おそらく除湿や基礎固めなどの効果をねらったものであろう。竪穴南東隅のカマドのそばに、小土壌が1箇所ある。内部には炭・焼土と土器片を多量に含む黒灰色粘質土が堆積し、カマドの掻きだし土と見られるので、この土壌はカマドと関連する施設と推定され、廃絶時に堆積した土が内部に落ち込んでいるので最後まで開口していたことは明らかである。

竪穴廃絶時に徹底的に破壊されていて、焼土・炭混じりの層と青灰色の粘土層が、カマドの跡からその南の床面上にかけて堆積し、土壌1の内部におよんでいた。青灰色粘土層におおわれた床面直上で1の須恵器坏身口縁部片が検出され、



1層: 暗褐色土 (焼土・炭・土器小片を多く含む)
2層: 暗褐色混焼土層 (炭・土器片、1cm大の焼土片多く混入)

第166図 B区-13号竪穴住居跡 (1/60)

第167図 小迫辻原遺跡B区遺構配置図⑤
 -奈良時代・中世- (1/300)

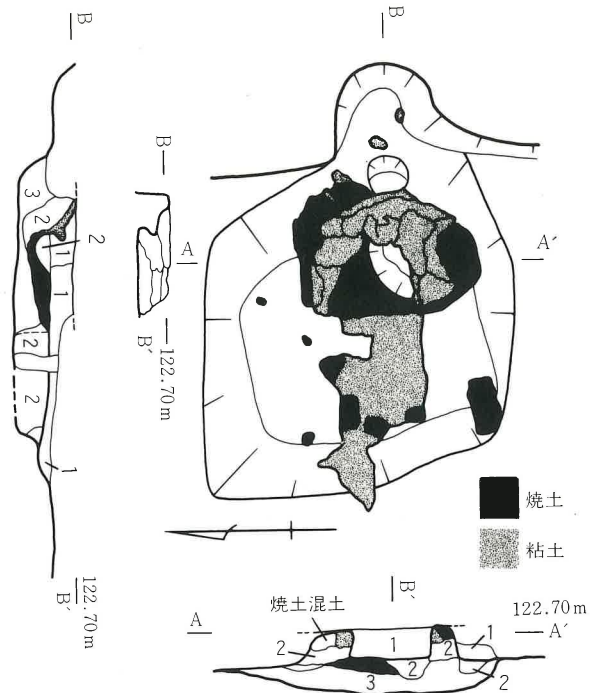




2の焼塩用製塩土器は土層1内に破片が集中しカマドから掻きだされた焼土の下から検出された。おそらくカマドを破壊した際に破碎されて廃棄されたもので、カマド祭祀の痕跡と推定される。竪穴の埋没状態は残存部が浅いため自然埋没かどうかは不明であるが、床面から3の砥石の破片が出土した。

出土遺物のうち、2は逆錐形の焼塩用製塩土器で、胎土に石英を多量に含む搬入品である。その特徴からみて、北部九州玄界灘沿岸の生産地からの搬入であろう。3の砥石はよく使い込まれており、廃品を捨てたと見られる。

以上の出土土器からみて8世紀中ごろから後半の奈良時代の遺構と推定される。(旧D地区竪穴住居33)

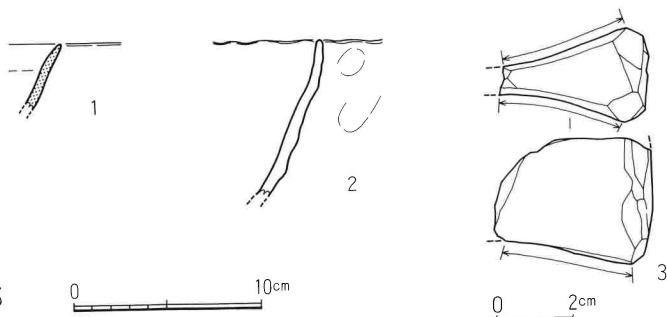


(層序)
 1層：暗褐色土（炭片1~2cm大の焼土ブロックと、3~5cm大の橙色の焼けた粘土ブロックを多く含む）→カマドの上部構造物の崩落土。
 2層：暗黄褐色土（炭・焼土・黄色土ブロックを含む）→カマド下部構造土
 3層：暗黄褐色土（焼土・黄色ブロックを含む）→カマド下部構造土

第168図 B区-13号竪穴住居跡のカマド (1/30)

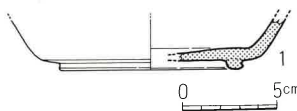
2) ピット (第170図、第6表)

F2調査区ピット2から1の須恵器坏身の底部片が出土した。やはり奈良時代の製品である。



第169図 B区-13号竪穴住居跡出土遺物 (1・2=1/4、3=1/2)

第6節 中世 (カラー図版、第167図 一巻頭図版13・図版3)



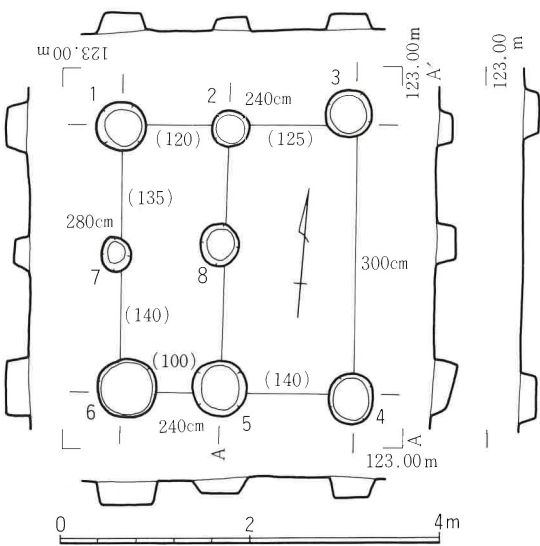
第170図 B区-F2調査区ピット2出土遺物 (1/4)

この時期にあたる遺構はきわめて多く、掘立柱建物跡11棟・土層8基・墓1基と溝3条を確認した。そのほかにピット6本を本文に掲載した。この時代の遺構はまだ存在するであろうが、土器を含まないためにほかの時期の遺構と区別できなかった。

遺構の配置は、B区中央を南北に縦断するB-2溝の東西で大きく異なる。その西側には遺構はきわめて少なく、性格不明の二・三の土層と溝が残されているのみである。攪乱はひどいが削平の状態は東側とそれほど変わらないので、中世の遺構は現状より多くは存在しなかったと推測される。これに対し東側は掘立柱建物とそれに関連する土層が密集し、とくにB区南部に集中する。また建物群がなくなるF1・F0調査区では、50m近く離れているにもかかわらずB-2溝に並行する南北のピット列を検出した。B区-1号

柵列としたが、延長上の旧B地区のE2・E3調査区では対応するピットを認定できなかったため、今回は中世の遺構とは認定しなかった。今後の周辺調査の結果によって再考したい。さらにその外側にB-9墓が1基存在した。

B-2溝は陸橋をもち、そこは明らかに特定の空間への入り口となっている。掘立柱建物が立ち並ぶ位置からみて、東側が空間の内部であり、建物群は溝に画された広大な広がりの中に配置されていたことは明らかである。溝の方向と建物の方向がよく一致する点もそのことを裏付けている。おそらくB-2溝を西辺の区画施設とする方形の区画があり、その方形区画と方向をあわせて掘立柱建物群が展開する中世の館跡と推定される。南北の区画は調査区内では検出されず、東の区画かと調査時に考えたB-1柵列は確証をえられなかったため、その規模を明示できないが、おそらく一辺が50mをこえる半町四方、あるいはそれより大きな規模のものと推定される。そして館跡の内部構造としては、門あるいは扉などの施設の痕跡は検出できなかったものの、B-2溝の陸橋から掘立柱建物群にかけて建物のない空間が存在しており、広場＝庭の存在が推定される。中心施設は廂をもつ大規模なB-9建物とB-6建物である。また内部には井戸は存在しない。これは辻原台地の地下水位が低いためで、中世のみならず全時代を通じて井戸は存在しない。



第171図 B区-1号掘立柱建物跡 (1/80)

ところでB-9建物の西側すなわち廂の正面にB-10建物とB-11建物が重複して存在しているため、この二棟はB-9建物と同時に建てたとは考えられない。したがってB-9・10・11建物は時期を異にする建物である。そうすると少なくとも館内では2回の建直しつまり、3小期の変遷があったことになる。

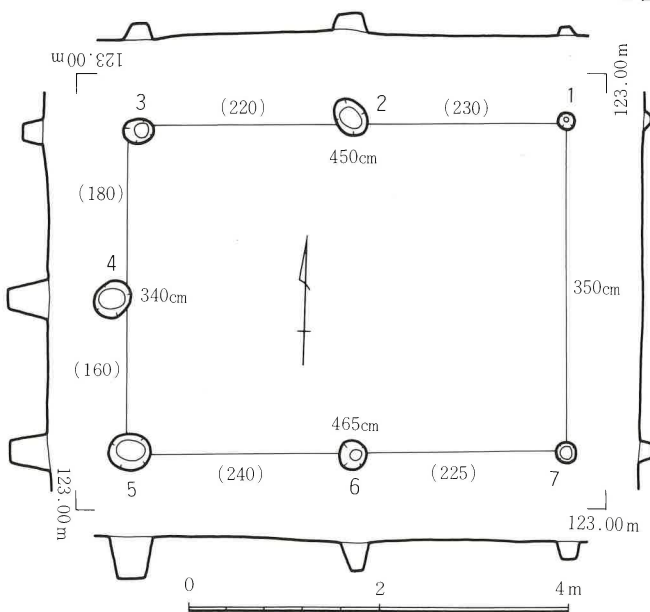
この館跡の時期は出土遺物が少なくかつ断片的なため、はっきりとはしないが中国製磁器などからみて中世前期の13世紀後半を中心とする時期、すなわち鎌倉時代の可能性がもっとも高く、A区の屋敷群とはほぼ同じ時期と推定される。

この館跡の時期は出土遺物が少なくかつ断片的なため、はっきりとはしないが中国製磁器などからみて中世前期の13世紀後半を中心とする時期、すなわち鎌倉時代の可能性がもっとも高く、A区の屋敷群とはほぼ同じ時期と推定される。

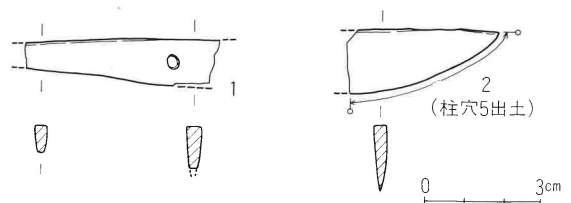
1) 掘立柱建物跡 (第2・6・9表)

B区-1号掘立柱建物跡 (第171図 一図版31)

掘立柱建物群の東端で検出した2間×2間の総柱の掘立柱建物跡で、B-2建物と重複している。東の梁を支える柱穴が1本未検出である。四隅の柱穴が大きく、かつやや深く掘られている。柱間寸法は、心心距離で南北長軸長約300cm、東西短軸長約240cmをはかる。床面積が約7.0㎡の小型の建物で、倉庫と推定される。長軸の方位角は173度の南北棟である。建物の方向がほかの掘立柱建物と異っており、あるいは中世では



第172図 B区-2号掘立柱建物跡 (1/80)



第173図 B区-2号掘立柱建物跡出土遺物 (1/2)

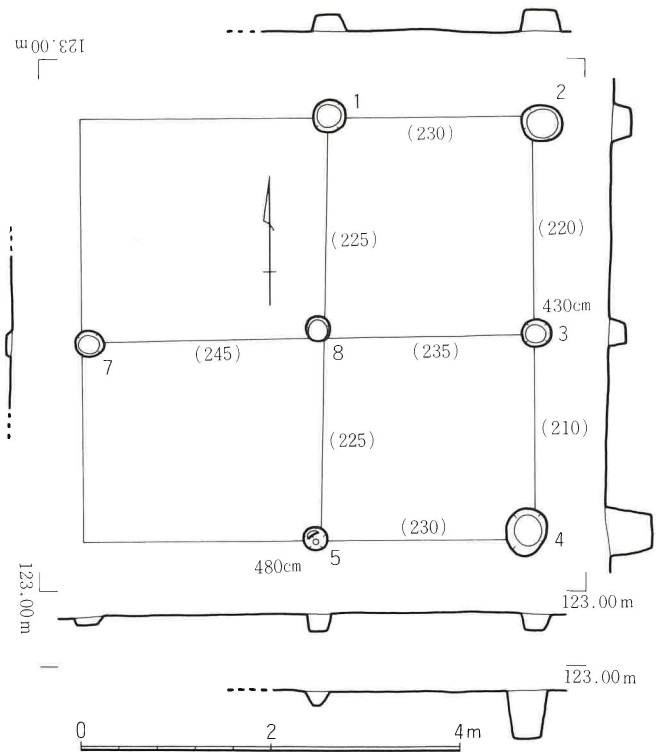
ないかもしれない。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の土質と色調の類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区掘立柱建物29)

B区-2号掘立柱建物跡 (第172・173図 一 図版31・50)

同じく掘立柱建物群の東端で検出した2間×1間の掘立柱建物跡で、B-1建物と重複している。柱穴4はあるはこの建物の梁を支える柱の穴かもしれない。柱穴の大きさはまちまちだが、深さはおおよそ揃っている。柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約465cm、南北短軸長約350cmをはかる。床面積が約15.9㎡の小型の建物で、長軸の方位角は89度の東西棟である。建物南西コーナーの柱穴5から、同一個体と推定される1・2の鉄製小刀の破片が2点出土している。建物建設あるいは廃絶時の祭祀行為にかかわる可能性がある。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の土質と色調の類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区掘立柱建物35)

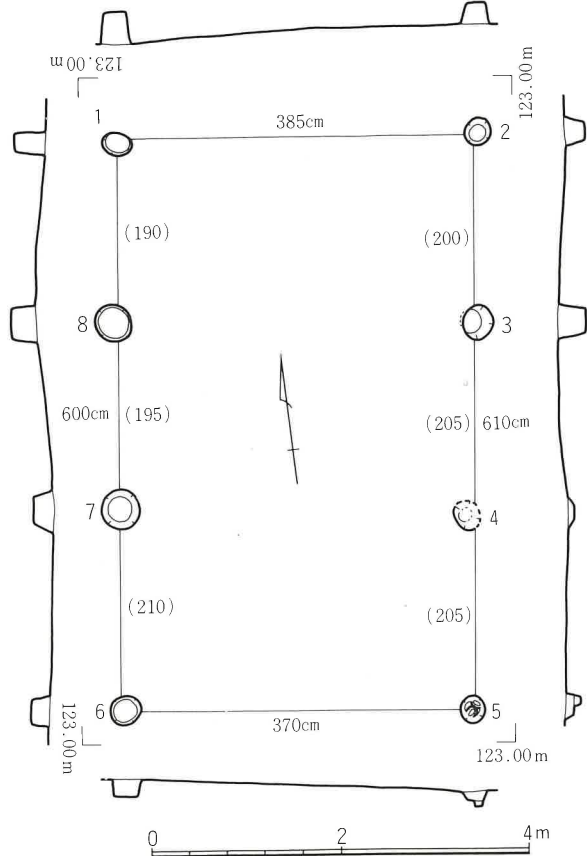
B区-3号掘立柱建物跡 (第147図 一 図版32)

B-2建物の長軸延長線上で検出した2間×2間の総柱の掘立柱建物跡で、二本のコーナーの柱の穴

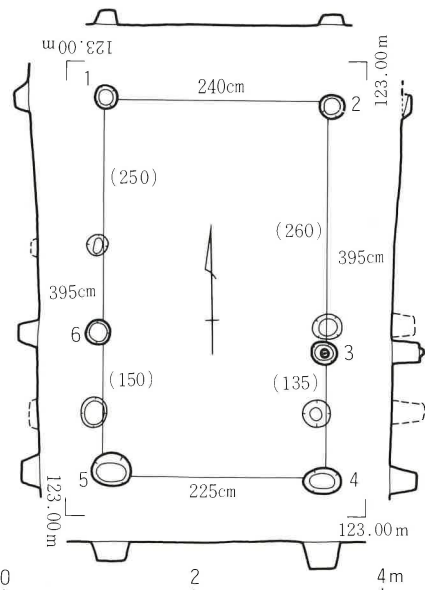


第174図 B区-3号掘立柱建物跡 (1/80)

が未検出である。残る二隅の柱穴は大きくかつやや深く掘られている。柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約480cm、南北短軸長約430cmをはかる。床面積が約21.5㎡と推定される中型の建物で、簡易な倉庫と推定される。長軸の方位角は89度の東西棟である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の土質と色調の類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区掘立柱建物34)



第175図 B区-4号掘立柱建物跡 (1/80)



第176図 B区-5号掘立柱建物跡 (1/80)

B区-4号掘立柱建物跡 (第175図 一図版32)

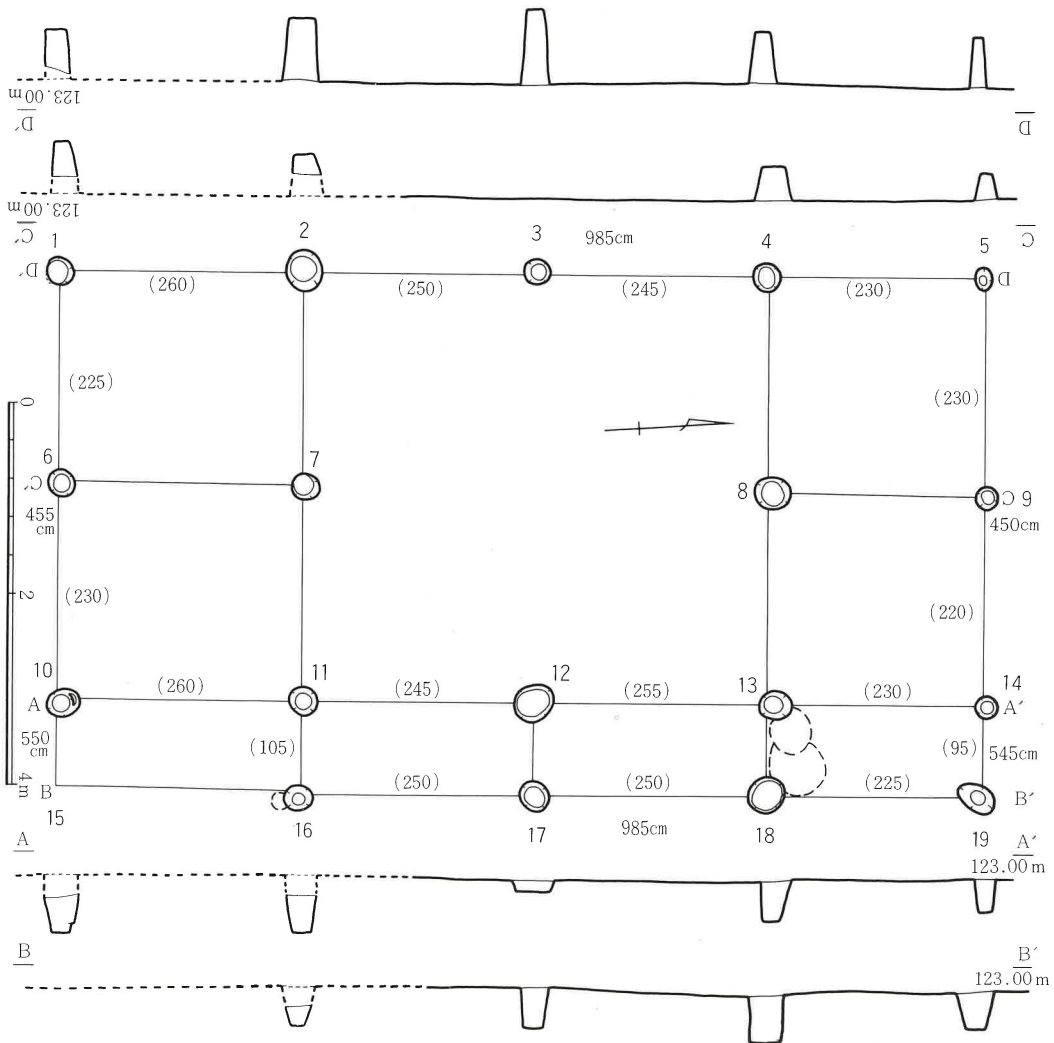
B-6建物の長軸延長線上の掘立柱建物群北端に位置する3間×1間の掘立柱建物跡である。南北の梁を支える柱の穴はみあたらない。柱穴の大きさと深さはおおよそ揃っている。柱間寸法は、心心距離で南北長軸長約610cm、東西短軸長約385cmをはかる。床面積が約22.9㎡の中型の建物で、長軸の方位角は8度の南北棟である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区掘立柱建物30)

B区-5号掘立柱建物跡 (第176図 一図版32)

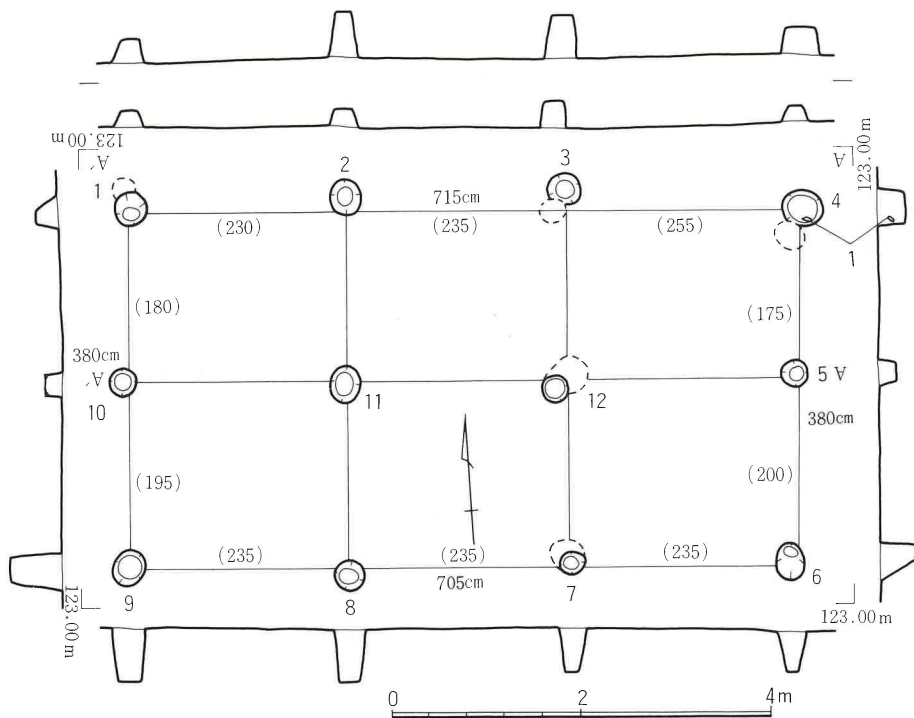
B-4建物とB-6建物の間に方向を一致させて建てられた、やや変則な2間×1間の掘立柱建物跡である。桁行の柱穴3と6が偏った位置にある。四隅の柱穴が大きいが、深さはおおよそ揃っている。柱間寸法は、心心距離で南北長軸長約395cm、東西短軸長約240cmをはかる。床面積が約9.3㎡の小型の建物で、長軸の方位角は3度の南北棟である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区掘立柱建物31)

B区-6号掘立柱建物跡 (第177図 一図版33)

建物群の中央に位置し、東側に廂の付く4間×2間の掘立柱建物跡である。廂南端の柱穴は調査区外になる。建物内部に床を支える束柱が二本検出された。柱穴の大きさはまちまちだが、梁間と束柱である柱穴6~9の深さが浅い傾向にある。柱間寸法は、心心距離で南北長軸長約985cm、東西短軸長約455cmをはかり廂を含めると545cmである。床面積は約44.5㎡で廂部分を含めると53.8㎡となる大型の建物で、長軸の方位角は4度の南北棟である。



第177図 B区-6号掘立柱建物跡 (1/80)



第178図 B区-7号掘立柱建物跡 (1/80)

さが浅い傾向にある。柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約715cm、南北短軸長約380cmを測る。床面積が約26.7㎡の中型の建物で、床をもつB-6建物の副屋的な建物と推定される。長軸の方位角は92度の東西棟である。

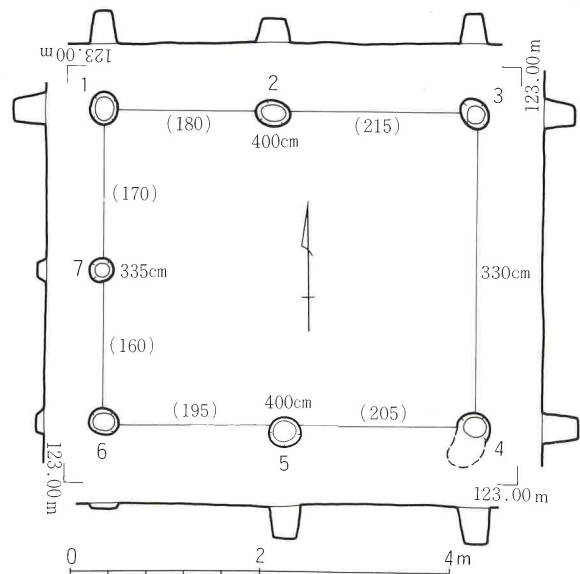
東北コーナーの柱穴4の掘形内から1の口禿げの白磁皿の破片が出土している。建物建設時に入ったものである。コーナー柱に入っている点と一般に副葬品として陶磁器片を納める例があり、小迫辻原遺跡でもB-9墓でも類例があるので、あるいは建物建設時の地鎮的な意味を込めた磁器片埋納である可能性もある。この白磁からみて建物の時期は13世紀後半を前後する鎌倉時代の遺構と推定される。(旧D地区掘立柱建物28)

B区-8号掘立柱建物跡 (第180図 一図版33)

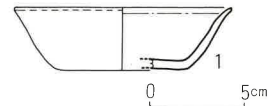
B-7建物と重複する2間×2間の掘立柱建物跡である。東の梁を支える柱の穴はみあたらない。柱穴の大きさと深さはおおよ揃っているが、柱穴6・7が浅い。柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約400cm、南北短軸長約335cmをはかる。床面積が約13.3㎡の小型の建物で、長軸の方位角は92度の東西棟である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区掘立柱建物36)

B区-9号掘立柱建物跡 (第181・182図 一図版33・36・50)

B-6建物の背後にそれと並行して建てられた桁行2間以上、梁間2間の廂付き掘立柱建物跡で、南半分は調査区外になる。B-6建物とは正反対の方向に廂をつける。柱穴の大きさと深さはよく揃うが、廂を支える柱穴8~10は浅い。柱間寸法は、心心距離で南北長軸長約490cm以上、東西短軸長約560cmをはかり廂を含めると650cmである。床面積は約30.6㎡以上で廂部分を含めると36.7㎡以上となり、復元すると60㎡前後の大型の建物となる。検出された掘立柱建物のなかでは最大の建物となる。長軸の方位角は0度の南北棟である。



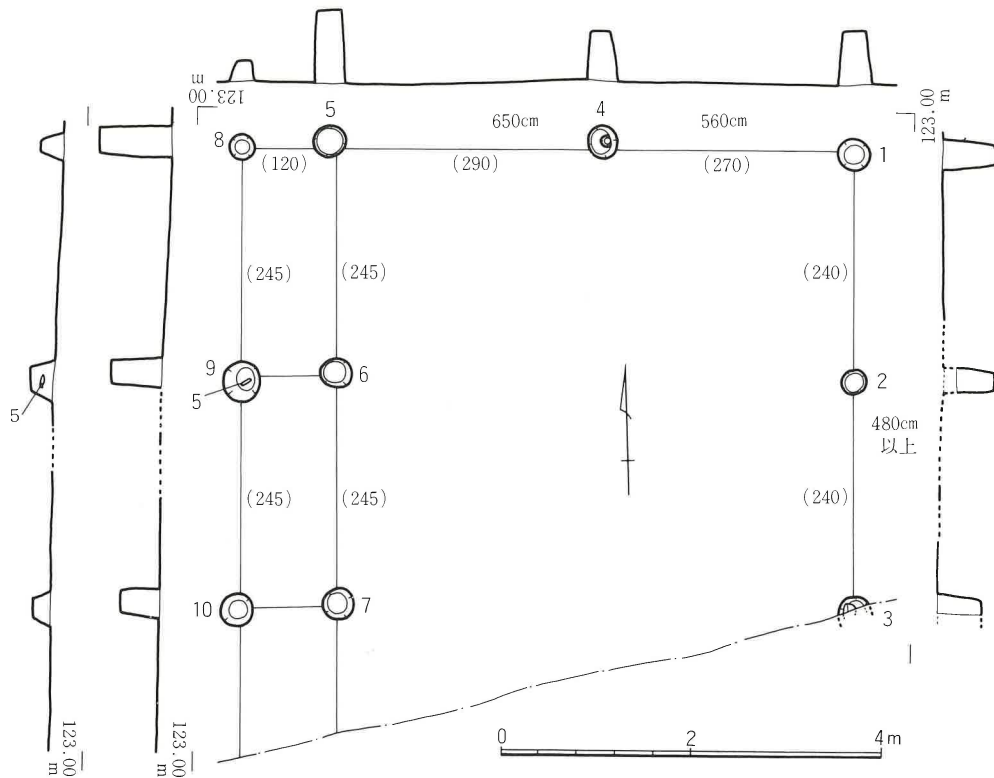
第180図 B区-8号掘立柱建物跡 (1/80)



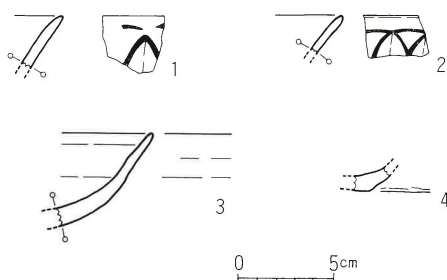
第179図 B区-7号掘立柱建物跡出土遺物 (1/4)
る。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区掘立柱建物32)

B区-7号掘立柱建物跡 (第178・179図 一図版33・50)

B-6建物の背後にそれと直交して建てられた3間×2間の総柱の掘立柱建物跡で、柱穴の大きさは揃うが、梁間と床を支える束柱である柱穴5・10・11・12の深さが浅い傾向にある。



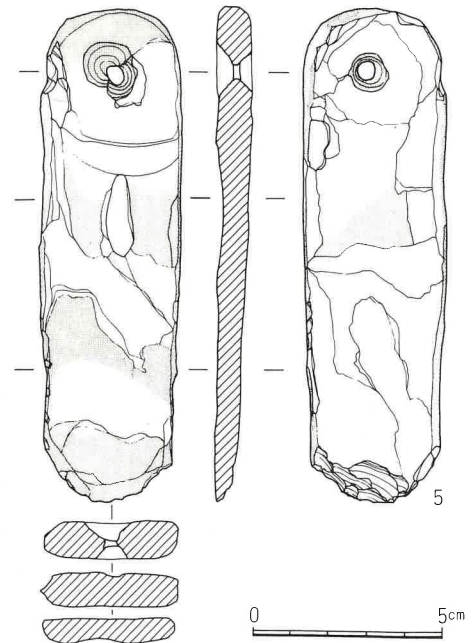
第181図 B区-9号掘立柱建物跡 (1/80)



第182図 B区-9号掘立柱建物跡出土遺物
(1~4=1/4、5=1/2)

東北コーナーの柱穴1から1の青磁碗の口縁片が、柱穴7から2の青磁碗の口縁片が、北西コーナーの柱穴5から3の青磁碗の口縁片と4の土師質土器の小片が出土した。建物建設時あるいは廃絶時の磁器片埋納である可能性が高く、通常1箇所のみの場合が多いが、この建物では3箇所に見られ、おそらくこの建物がこの館跡の掘立柱建物群のなかで、最大の建物であることと関係するのであろう。また柱穴9の柱痕内から5の携帯用砥石の完形品が出土している。建物廃絶時に廃棄されたもので、意図的な埋置の可能性はある。

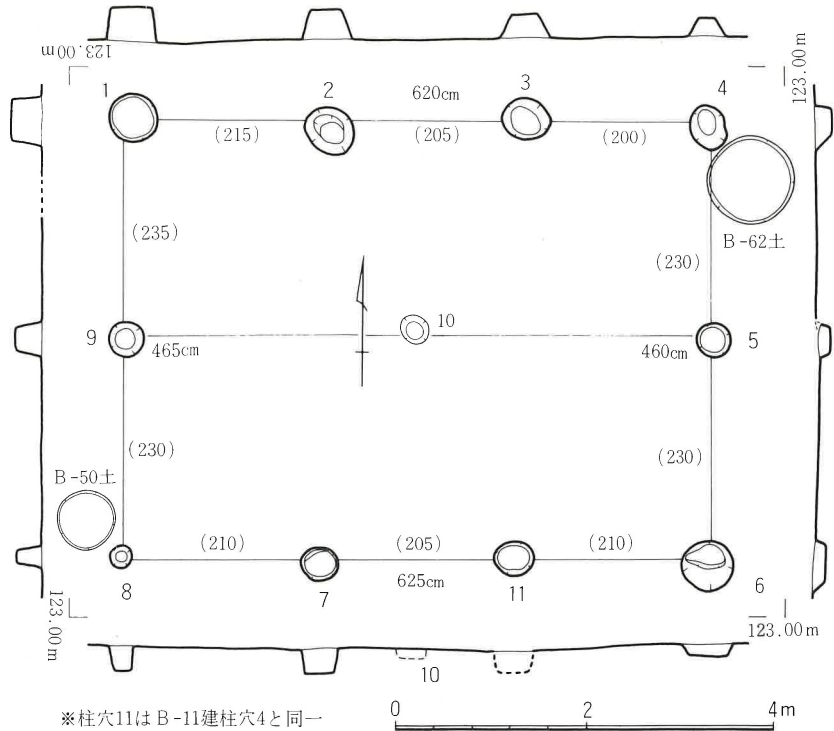
出土遺物の詳細は、1・2が鎬蓮弁文の中国製青磁碗、3が中国製青磁碗、4が底部回転糸切りの土師質土器、5が千枚岩製の砥石で一方に両面穿孔の穴が穿たれ、片面がよく磨れている。携帯用の砥石である。以上の遺物からみて建物の時期は13世紀後半を前後する鎌倉時代の遺構と推定される。(旧D地区掘立柱建物37)



B区-10号掘立柱建物跡(第183

図 一図版34)

B-9建物と直交して重複する3間×2間の掘立柱建物跡で、内部中央に小さな柱穴10があり、床を支える束柱の可能性はある。柱穴の大きさは不揃いだが、深さはよく揃っている。柱穴10のみ深さが浅い。柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約625cm、南北短軸長約465cmをはかる。床面積が約28.8㎡の中型の建物で、長軸の方位角は89度の東西棟である。なおこの建物の壁の外側に接するように東西にB-50土壌とB-62土壌が検出された。ほかに例のない束柱の配置と考えあわせると、この二つの土壌もこの建物の機能にかかわる可能性が高い。しかしその機能がなんであったかはわからない。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区掘立柱建物26)

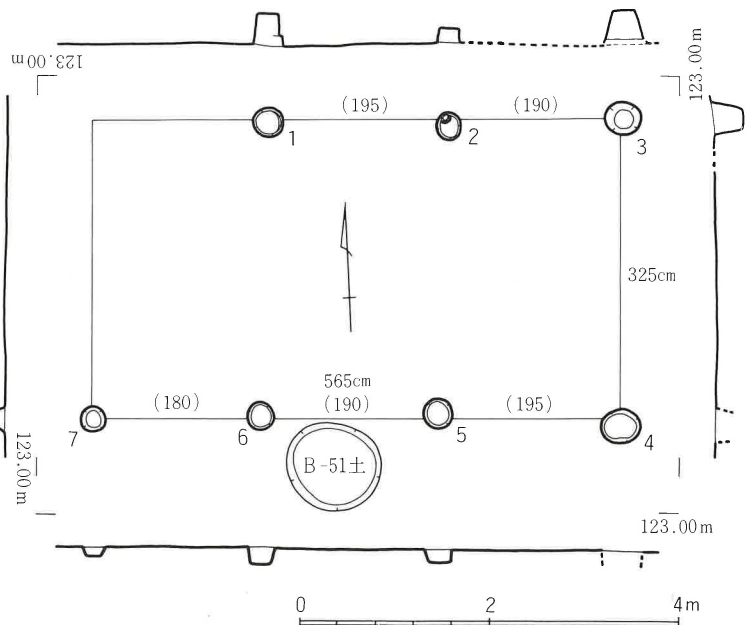


第183図 B区-10号掘立柱建物跡(1/80)

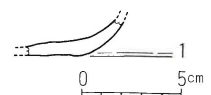
B区-11号掘立柱建物跡(第184・185

図 一図版34)

B-10建物と重複する3間×1間の掘立柱建物跡で、北西隅の柱穴は未検出である。柱穴の大きさはまちまちで深さも一定しない。柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約565cm、南北短軸長約325cmをはかる。床面積が約17.9㎡に復元される小型の建物で、長軸の方位角は93度の東西棟である。なおこの建物の南壁の外側に接するようにB-51土壌が検出された。その位置からみてこの建物と関係する土壌であろう。B-10建物の場合と同じであり、重複するB-10建物とB-11建物は、同じ機能をもった建物が同一地点に建て替えられたものと推定される。南西コーナーの柱穴7から1の土師質土器の坏底部破片が出土している。建物建設または廃絶時の祭祀行為にかかわる可能性がある。この土器と柱穴埋土の類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区掘立柱建物25)



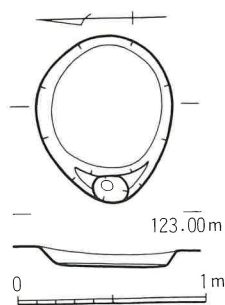
第184図 B区-11号掘立柱建物跡(1/40)



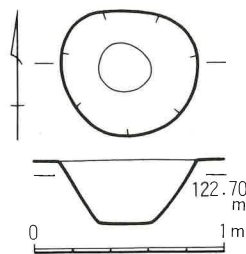
第185図
B区-11号掘立柱
建物跡出土遺物
(1/4)

2) 土壌 (第3・6・7表)

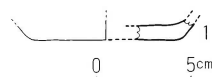
掘立柱建物の周辺を中心に小規模な土壌が検出されている。しかしほかに出土遺物がきわめて少ないために時期判定困難な土壌が多く、実際はさらに存在したことは疑いない。



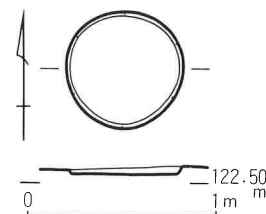
第186図 B区-48号土壌 (1/40)



第187図 B区-49号土壌 (1/40)



第188図 B区-49号土壌
出土遺物 (1/4)



第189図 B区-50号土壌 (1/40)

B区-48号土壌 (第186図)

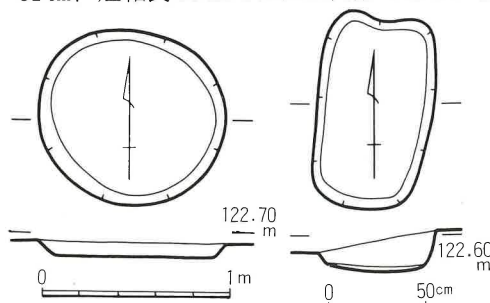
I 0 調査区で検出された小型円形の土壌で、きわめて浅く底面は平坦である。規模は長軸長90cm、短軸長72cmで、検出面からの深さは12cmである。用途は不明。埋土は黒灰色の単一層(1層)で、炭と土器細片を含み、そのなかには土師質土器が含まれていた。その土器から中世の遺構と推定した。(旧D地区土壌482)

B区-49号土壌 (第187・188図)

同じくI 0 調査区で検出された小型円形の土壌で、底は丸い皿状である。規模は長軸長67cm、短軸長65cmで、検出面からの深さは32cmである。用途は不明。埋土は黒褐色軟質の単一層(1層)で、炭および焼土と1cm大の黄色土ブロックと土器細片を多量に含み、そのなかには1の底部回転糸切りの土師質土器片が含まれていた。その土器から中世の遺構と推定した。(旧D地区土壌474)

B区-50号土壌 (第189図)

I 19 調査区のB-10建物西側で検出された小型円形の土壌で、きわめて浅く底面は平坦である。規模は長軸長61cm、短軸長60cmでほぼ正円形である。検出面からの深さは4cmである。前述したようにB-10建物と関係する可能性が高い。用途は不明。埋土は淡黒褐色軟質の単一層(1層)で、焼土と土器細片を含み、B-52土壌とB-1溝の埋土とよく似ている。時期を明示する出土遺物はないが、掘立柱建物の柱穴埋土との類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区土壌475)



第190図 B区-51号土壌 (1/40)

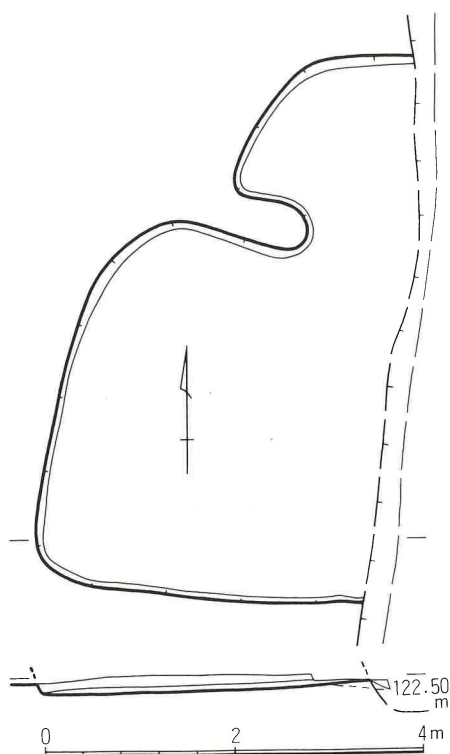
第191図 B区-52号土壌 (1/40)

B区-51号土壌 (第190図)

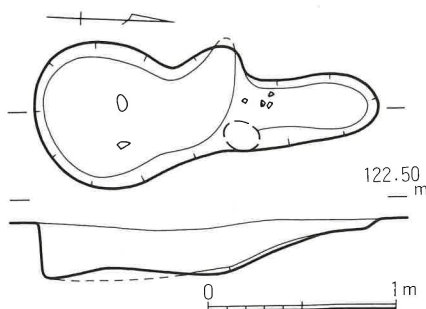
同じくI 19 調査区のB-11建物南側で検出された小型円形の土壌で、きわめて浅く底面は平坦である。規模は長軸長99cm、短軸長90cmで、検出面からの深さは11cmである。前述したようにB-11建物と関係する可能性が高い。用途は不明。埋土は暗黄褐色軟質の単一層(1層)で、炭・黄色土ブロックと土器細片を少量含む。時期を明示する出土遺物はないが、ほかの中世遺構の埋土との類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区土壌476)

B区-52号土壌 (第191図)

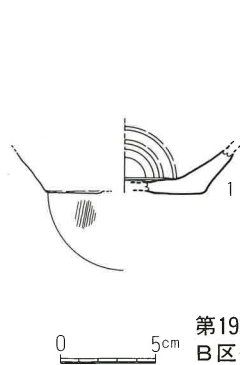
K 19 調査区のB-1溝とB-2溝の間に、前者と並行するように検出された不定形の土壌で、底面は皿状である。規模は長軸長105cm、短軸長60cmで、検出面からの深さは21cmである。B-1溝の埋土と同じ土が埋まっている。用途は不明。埋土は暗黄褐色の単一層(1層)で、焼土と土器細片を含み、B-50土壌とB-1溝の埋土とよく似ている。時期を明示する出土遺物はないが、掘立柱建物の柱穴埋土との類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区土壌469)



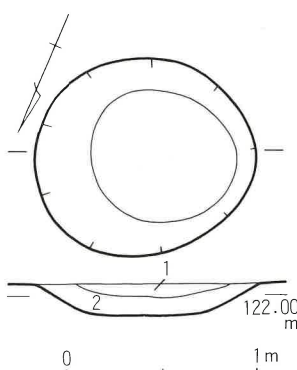
第192図 B区-53号土壙 (1/80)



第196図 B区-55号土壙 (1/40)

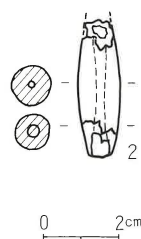


第193図
B区-53号土壙出土遺物
(1=1/4, 2=1/2)

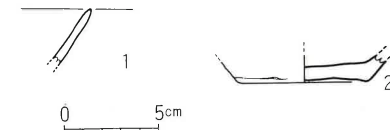


1層：明茶褐色粘質土（硬い。1~2cm大の黄色土ブロック含む。土器含む。）
2層：暗褐色粘質土（軟い。炭片・炭化種子を、多量に含むが、土器片はない。）

第194図 B区-54号土壙 (1/40)



B区-54号土壙 (第194・195図)



第195図 B区-54号土壙出土遺物 (1/4)

B区-53号土壙 (第192・193図 一図版35・51)

同じくK19調査区で検出された不定形の大型土壙で、B-2溝の西にありその溝に切られている。底面は浅く平坦である。その規模は長軸長585cm、短軸長355cm以上で、検出面からの深さは20cmである。埋土は暗褐色の単一層（1層）で、炭および焼土と基盤層に由来する角礫と土器細片を多量に含み、そのなかには1の底部回転糸切りの土師質土器片と2の土錐が含まれていたほかに、鑄蓮弁文のある青磁碗の小片が含まれている。その遺物から中世の遺構と推定した。（旧D地区竪穴住居32）

L2調査区で検出された円形の土壙で、底は丸い皿状である。規模は長軸長118cm、短軸長104cmで、検出面からの深さは16cmである。埋土は二層に分かれ、底面の暗褐色粘質の2層には、炭片と炭化種実が多量に含まれていたが、土器の出土はなかった。その上の1層には黄色土ブロックと土器片が含まれて埋め戻された可能性がある。1層からは1の中国製青磁碗の口縁部片と2の底部回転糸切りの土師質土器片が出土した。その遺物から中世の遺構

と推定した。（旧D地区土壙415）

B区-55号土壙 (第196図 一図版35)

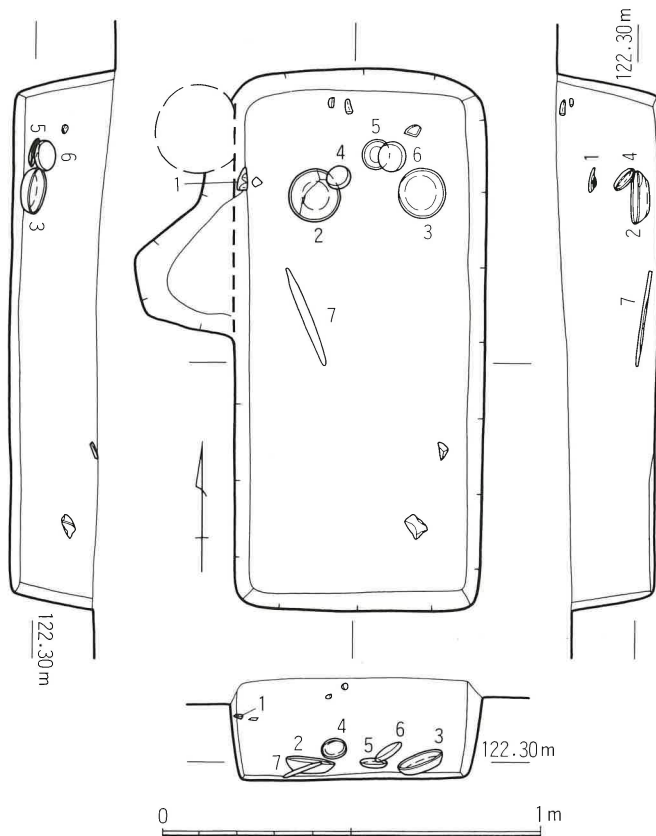
N18調査区で検出された不定形の土壙で、底面は凸凹で一定しない。その規模は長軸長181cm、短軸長49cmで、検出面からの深さは29cmである。埋土中から青磁小片が出土した。その遺物から中世の遺構と推定した。（旧D地区土壙436）

3) 墓 (第4・6・9表)

B区では掘立柱建物群からはなれたD2調査区で1基のみ検出されている。B区の北側の日田市調査地区ではかなり多くの中世墓が調査されており、その分布とは対照的である。

B区-9号墓 (第197・198図 一図版35・51)

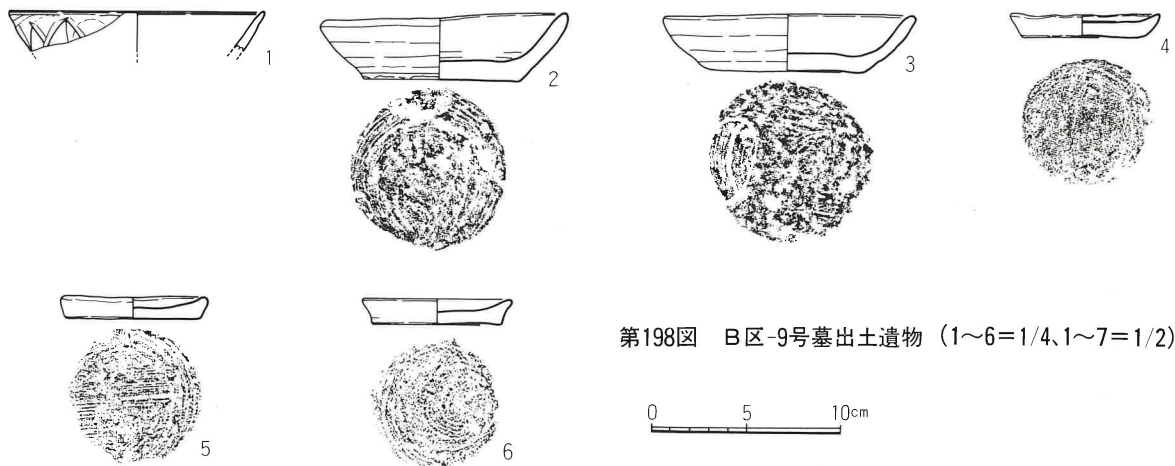
箱形木棺墓と推定される墓である。墓壙は正確な長方形で、断面は箱形をなし、底面は平坦である。南北の長さ143cm、東西の幅67cmを測り、検出面からの深さは25cmである。長軸の方位角は0度で、正確に磁北を向く。土壙の形状から箱形の木棺を使用したのではないかと推定され、副葬品が北側に集中する点から北頭位とみられる。また成人を直肢葬したとするには墓壙が短いので、膝を曲げた屈肢横臥の姿勢で葬った可能性が高い。副葬品として、鉄製短刀1振り、青磁破片1点、土師質土器杯2枚と小皿3枚が検出された。その副葬状態はまず完形の土師質土器杯2・3が左右対称に、まるで頭部を挟むように正位で置かれ、その北側に土師質土器小皿5が



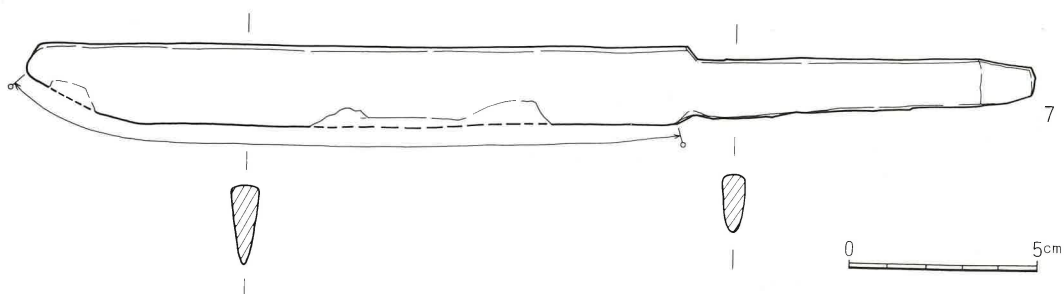
第197図 B区-9号墓 (1/20)

同じく正位で置かれていた。以上の3枚は同じ高さで検出された。おそらく被葬者の頭を囲むように配置したと見られる。その3枚の上に土師質土器小皿4・6の2枚が斜めに伏せられた状態で検出された。以上5枚の土師質土器には煤痕等の使用の跡はなく、何かを供献していたものと推定される。さらに最初に置かれた土師質土器3枚と同じ高さで、7の鉄刀が中央西寄りに検出された。先端を南側に刃を内側に向けている。以上の土師質土器と鉄刀からなる副葬品はその出土位置からみて棺内に置かれたものと推定される。ところでこの他に墓壇内の埋土中のかかなり浮いた位置から青磁片が2点が検出されている。南東部から出土した青磁の小片は、検出面で出土したもので混入の可能性が高いが、西の壁に接して土師質土器の横にあたる位置でやや浮いて出土した1の青磁碗の口縁部片は、破片の部位と出土位置から考えて破片を棺外副葬した可能性が高い。

出土遺物の詳細は次のとおり。1は竜泉窯系中国製青磁碗で、外面に鎬蓮弁文がある。土師質土器はすべて底部回転糸切りで、3の坏と5の小皿には板状圧痕がつく。また2と3の坏、4～5の

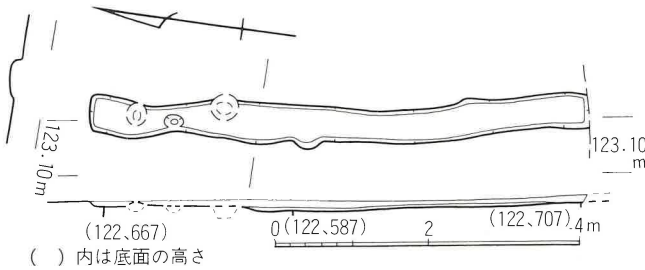


第198図 B区-9号墓出土遺物 (1~6=1/4, 1~7=1/2)

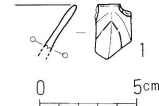


小皿の法量はきわめて近似し、同時に製作された一群を副葬に利用したものと思われる。いずれも胎土は在地産のもので、14世紀前半に使用の中心時期をおく型式である。7の鉄刀は全長約27cm、刃渡り17cmの小刀である。

土師質土器の年代観からみて14世紀前半ごろの墓と推定される。(旧A地区1号土壌墓)



第199図 B区-1号溝 (1/100)



第200図 B区-1号溝
出土遺物 (1/4)

4) 溝 (第5・6表)

方形区画を限る西の溝と、性格不明の2条の短い溝が検出されている。

B区-1号溝 (第199・200図 一図版34)

B-2溝と掘立柱建物群の中間に位置し、南北にのびる細い溝である。断面は浅いU字形をなし、長さ6m余りを検出して調査区外に達する。性格は不明である。埋土は軟らかい淡黒褐色の単一層(1層)で、焼土と土器片を含む。この埋土は近接するB-52土壌のそれによく似ている。土器はいずれも小片であり、1の中国製青磁碗の口縁部片を含み、これは鎬蓮弁文を有する。埋土の様相とこの青磁から中世の遺構と推定した。(旧D地区溝28)

B区-2号溝 (第201・202図 一図版34・35)

B区の中央を南北に縦断する長大な溝で、B区で45m余りを検出している。なおその後の日田市の調査によってこの溝はさらに南北にのび、全長150m近くに達することが明らかになっている(註1)。B-47土壌(古墳時代前期前半)とB-53土壌を切って掘られている。溝の方向の方位角は4度で真北に近い。K2調査区付近で約3.5mにわたって溝が途切れている。これは計画的に掘り残された陸橋である。すでに触れたようにこの陸橋が中世方形館内部への入り口のひとつであろう。溝の断面はどこで切っても逆台形で、検出面での幅は最も広いところで2.2m、狭いところで1.3mである。なお底面の幅は1.3~1.5mで比較的一定しており、つくりも丁寧に仕上げられている。溝の底面の高さは北にいくほどやや低くなる微妙な傾斜をしめし、この方形館の建設された時期の微地形を反映していると推定される。なお検出面からの深さは50cmほどであるが、第201図に示すG点で段が付き南側が浅くなる。また断面Aの付近で径1mほど深さ80cmの円形の土壌を検出している。土層観察からこの溝に付設されたものであることは明らかだが、性格は不明である。ところでこの溝にともなう門などの建築物や土塁の痕跡はみあたらなかった。

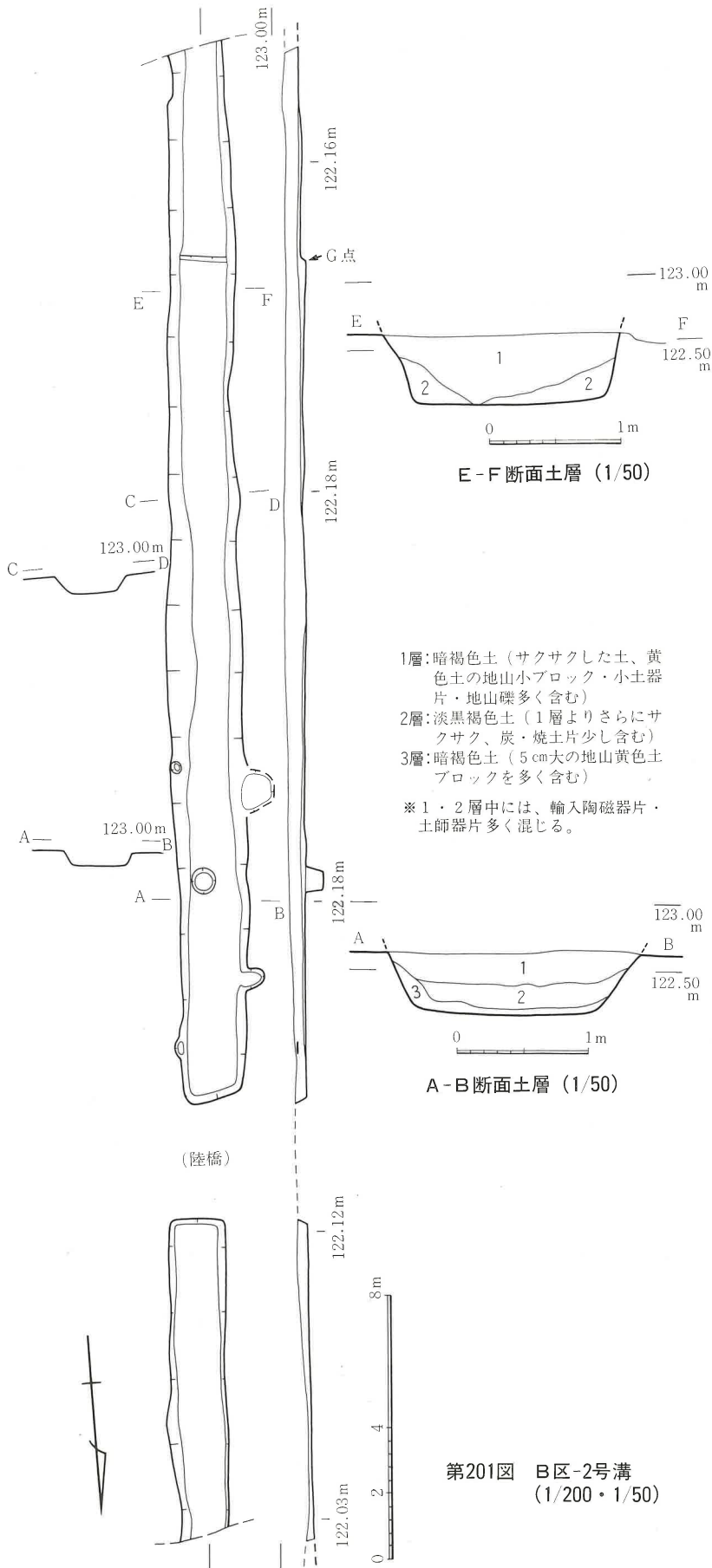
埋土は単純で、三層あるいは二層に分層でき、A-A'断面では、底部に5cm大の基盤層に由来する黄色土ブロックを多量に含む3層が堆積し、そこでは東側からより多く流れこんでいた。この土は内容物からみて人為的に破棄されたものである。3層は部分的な堆積であるのに対し、次の2・1層は溝全体で認められる。まず炭・焼土を含みサクサクと軟らかい淡黒褐色の2層が堆積し、さらに黄色土ブロック・礫・土器片を多量に含む1層が堆積している。層単位が厚く土質も軟らかいので、短期間に埋没した印象を与える。2・1層からは青磁片・常滑焼の甕片、土師質土器片などの破片が、点在した状態で出土し、埋没時に混入した廃棄物であると推定される。

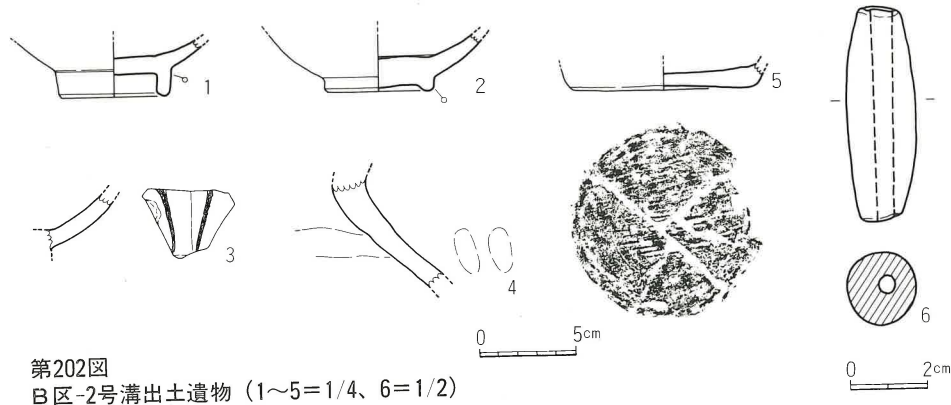
出土遺物の詳細は次のとおり。1~3は竜泉窯系中国製青磁碗の破片で、3は外面に鎬蓮弁文がある。4は胎土の小石英の粒子を含む常滑焼の甕と推定される頸部破片である。5は底部回転糸切りで板状圧痕がつく土師質土器の坏。6は土錐である。この遺物からみて13世紀後半から14世紀前半ごろにこの溝が機能していたと推定される。(旧D地区溝26)(中世前期)

註1、O-1区2号溝とQ区1号溝である。

土居和幸「小迫辻原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』V、1990、日田市教育委員会

土居和幸「小迫辻原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』VIII、1993、日田市教育委員会





第202図
B区-2号溝出土遺物 (1~5=1/4、6=1/2)

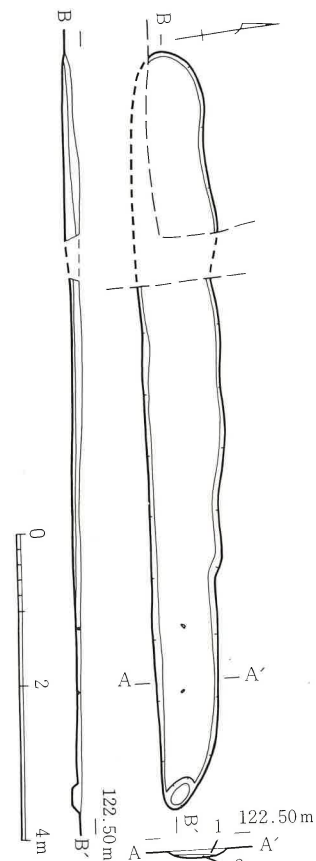
B区-3号溝 (第203図 一図版35)

方館跡の外側で検出された東西にのびる溝である。断面は浅いU字形をなし、長さ9.8mを検出した。幅は1m余りで、長軸の方位角は96度である。性格は不明であるがB-2溝とほぼ直交する。埋土は軟らかい黒色土で、青磁の小片が出土した。図示できないがその小片の出土と埋土の様相から中世の遺構と推定した。(旧D地区土壌434)(中世)

5) ピット (第167・204図、第6表 一図版36・51)

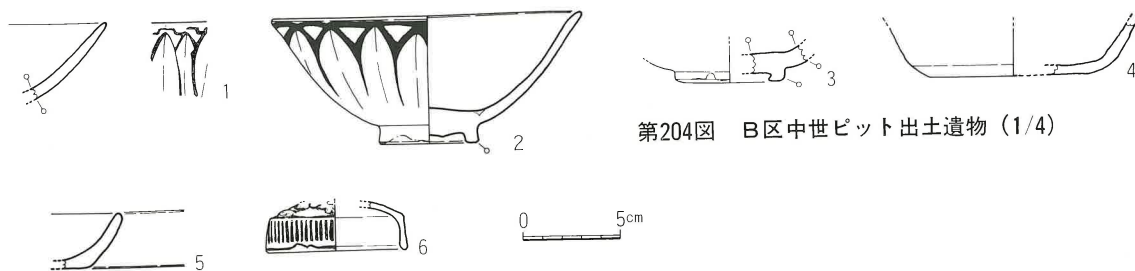
掘立柱建物群の周辺あるいは重複して、この時期の遺物を含む柱穴が6本検出されている。いずれも掘立柱建物の柱穴の一部と推定され、さらに多くの掘立柱建物が存在していたことを示している。

I0調査区ピット6からは1の青磁碗口縁片が出土した。外面に鎬蓮弁文がある。破片埋納の可能性もあり、このピットをコーナーの柱穴とする掘立柱建物が存在した可能性がある。I0調査区ピット8からは2の青磁碗が完形のまま出土した。明らかに柱抜き取り後の埋納と考えられ、ピットの位置が掘立柱建物の密集地の中なので、別の掘立柱建物が存在した可能性を示している。I0調査区ピット9からは3の青磁碗の底部小片が出土している。I0調査区ピット11からは4の底部回転糸切りの土師質土器の坏片が出土した。H0調査区ピット7からは5の土師質土器の坏片が出土した。I19調査区ピット7からは6の小型の陶器製香炉壺が出土している。



1層：黒色土(青磁片含む)
2層：茶褐色粘質土→地山か?

第203図 B区-3号溝 (1/100)



第204図 B区中世ピット出土遺物 (1/4)

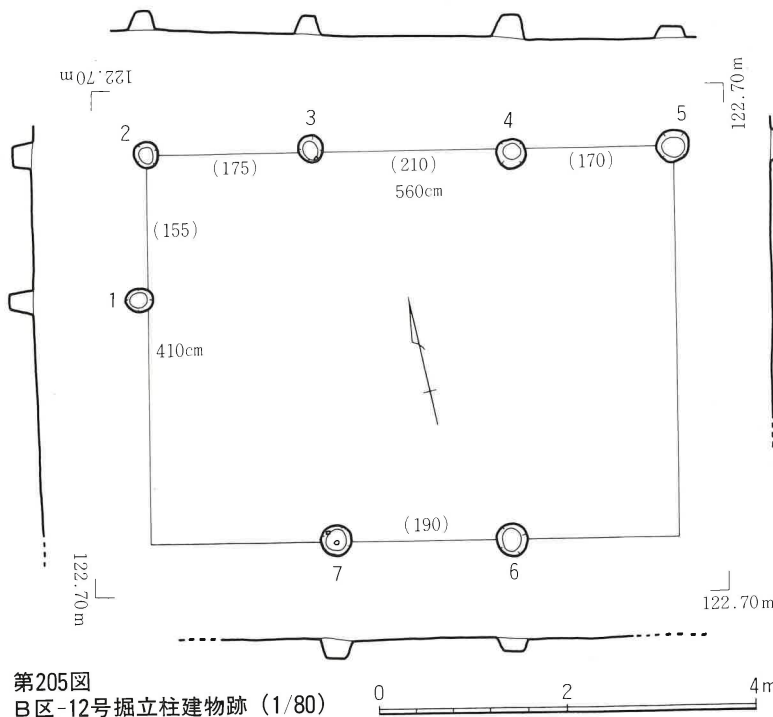
第7節 近世 (第208図)

この時期にあたる遺構は少ないが、B区全体に分布する。掘立柱建物跡1棟および土壌2基と溝5条を確認した。この時代の遺構はまだ存在するだろうが、土器を含まないためにほかの時代の遺構と区別できなかった。なお中世の掘立柱建物群周辺で認められる数条の南北の小ピット列は、近世以後のなんらかの植栽の痕跡である。

遺構の配置をみると、西部には溝がなく、代わりに掘立柱建物跡1棟のみが存在するのに対し、東部では東西南北に溝がはしっている。つまり全体は畑地として利用され、B区西端の一部のみは小規模な宅地として利用された可能性がある。ちなみに小迫辻原遺跡では、近世の掘立柱建物跡は単独で検出されることが多く、継続した宅地というより、開発初期の作業小屋あるいは農作業用の出作り小屋であった可能性が高い。

近世の遺構の時期は、出土遺物からみて遅くとも18世紀後半には溝が掘られ、その後1960年代の耕地整理まで溝は維持されていたものである。

1) 掘立柱建物跡 (第2表)



第205図
B区-12号掘立柱建物跡 (1/80)

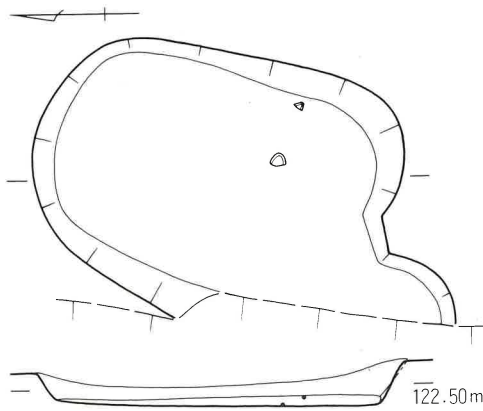
B区-12号掘立柱建物跡 (第205図
一図版36)

B区の西端のO1調査区で検出された3間×2間の掘立柱建物跡で、コーナーの二本の柱穴は稚蚕飼育所の建物建設による攪乱で破壊されている。東の梁をささえる柱の穴は未検出である。柱穴の大きさと深さは揃っている。柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約560cm、南北短軸長約410cmを測る。床面積が約23.4㎡の中型の建物で、長軸の方位角は102度の東西棟である。時期を明示する出土遺物はないが、近世畑地境界溝と方向が一致するので近世の遺構と認定した。(旧D地区掘立柱建物24)

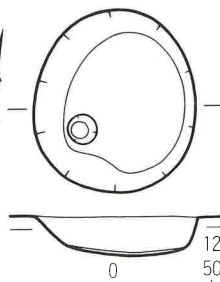
2) 土壌 (第3表)

B区-56号土壌 (第206図)

J1調査区検出された不定形の大型土壌で、底面は浅く平坦である。その規模は長軸長245cm、短軸長143cm以上で、検出面からの深さは2cmである。埋土が軟らかい暗褐色の単一層(1層)で、近世畑地境界溝の埋土と一致し、1層中から近世染付磁器の小片が出土したので近世の遺構と認定した。(旧D地区土壌419)



第206図 B区-56号土壌 (1/40)

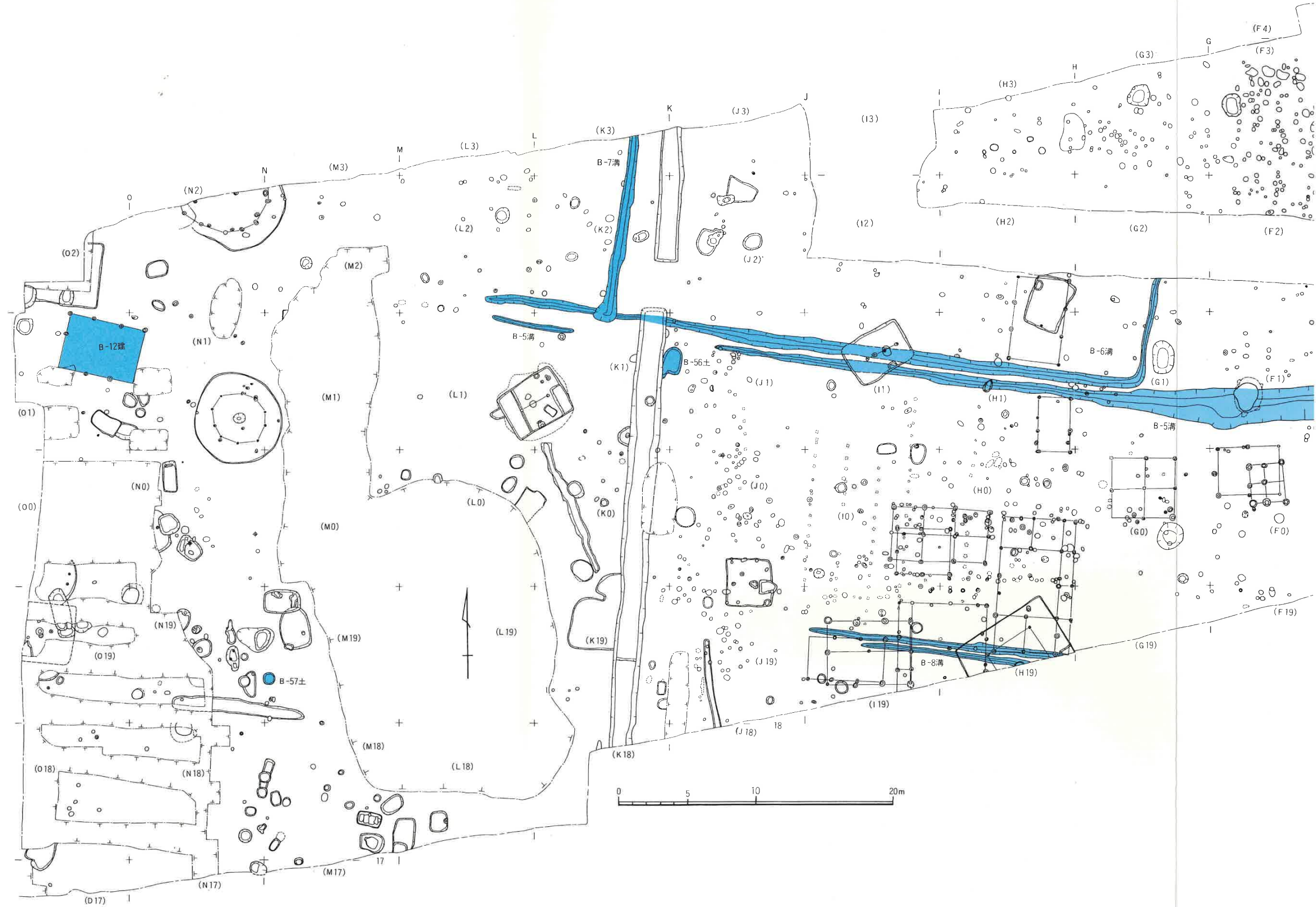


第207図
B区-57号土壌 (1/40)

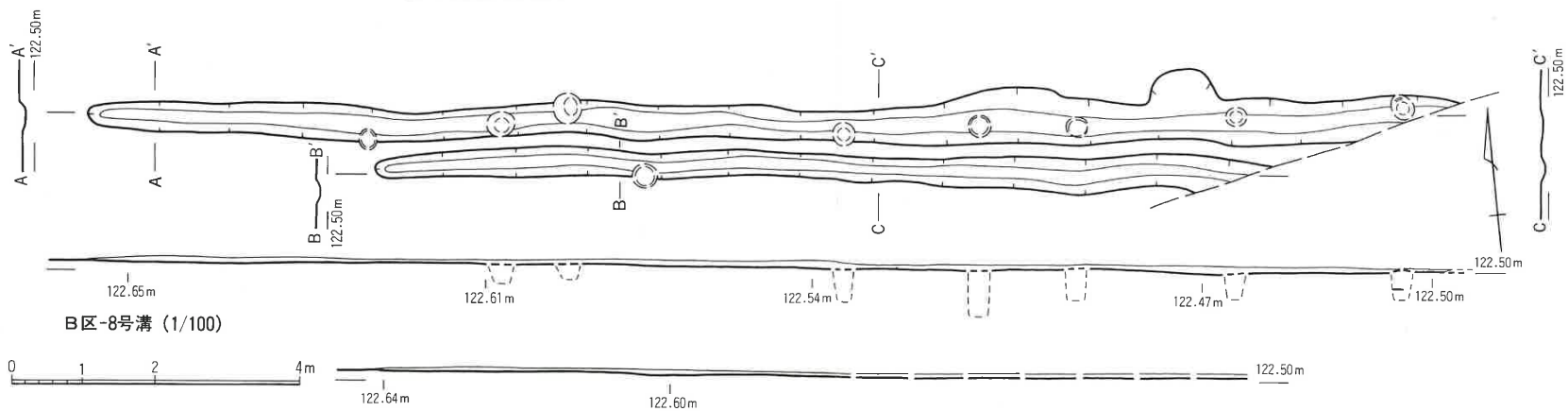
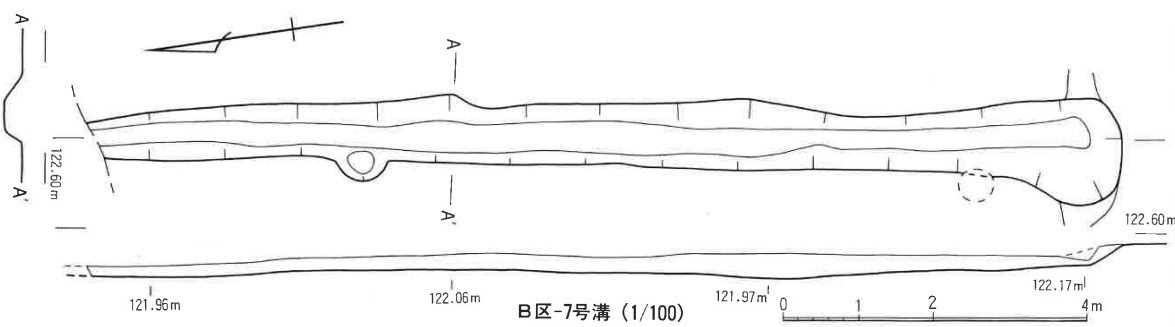
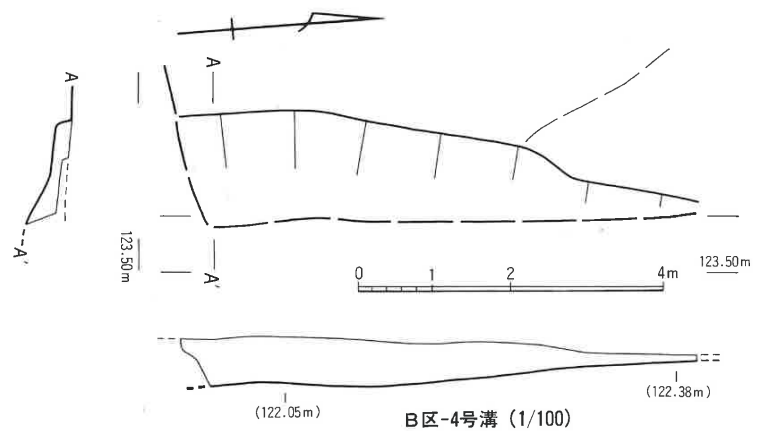
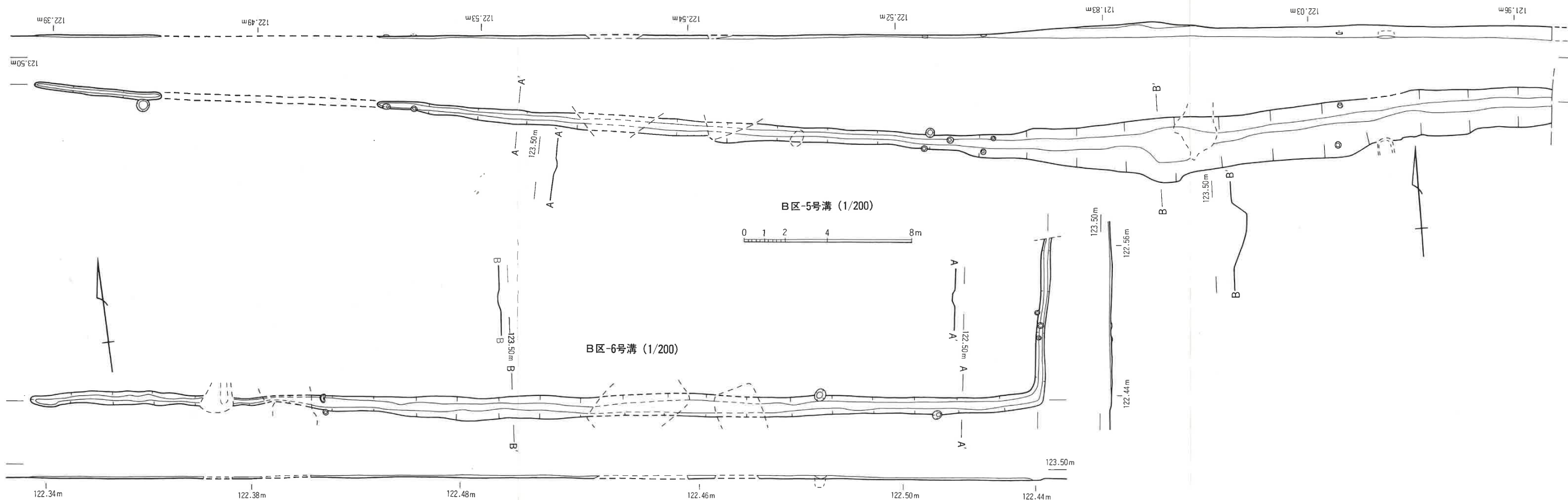
B区-57号土壌 (第207図 一図版36)

M19調査区で検出された小型円形の土壌で、底面は皿状である。その規模は長軸長95cm、短軸長85cmで、検出面からの深さは22cmである。埋土が軟らかい暗褐色の単一層(1層)で、ほかの畑地境界溝の埋土と一致し、1層中から近世陶器の小片が出土したので近世の遺構と認定した。(旧D地区土壌441)

第208図 小迫辻原遺跡B区遺構配置図⑥
—近世— (1/300)







第209图 B区-4·5·6·7·8号沟 (1/100·1/200)

3) 溝 (第5表)

5条の畑地境界溝を検出したが、二条一単位の溝が平行して掘られた例をB-5・6溝とB-8溝で確認した。この二条が平行する畑地境界溝は、現在の日田市内でも耕地整理のおこなわれていない古い地割りを残す畑地で観察される。耕作者に聞き取りをおこなうと、その二条の溝を境にして畑地の所有者が異なる場合が多い。そこから推測すると、二条平行の畑地境界溝は、異なる畑地所有者が両側から各々掘ったものであって、二条の溝の間には、単なる耕作上の便宜による境界線が走るだけでなく、畑地耕作者の境界線としての意味をもち、その後近代になると土地所有者の境界線へと変わっていくものと思われる。

B区-4号溝 (第209図)

B区の東端でその一部を検出した、南北にのびる畑地境界溝である。B-7住(古墳時代前期前半)を切っている。断面は深いU字形と推定され、長さ7.5mを検出した。時期を明示する出土遺物はないが、埋土がほかの畑地境界溝のそれと一致するので近世の遺構と認定した。(旧D地区溝31)

B区-5号溝 (第209図)

東西に75m近く検出した長大な畑地境界溝で、K1調査区で一部途切れているが、その延長部分を含めて後世に削平されたものであろう。また東の延長はC-12溝につながると推定される。途中からB-6溝が平行して走る。平行する部分の南北では耕作者が異なっていた可能性が高い。溝の断面はU字形で、B-6溝と別れるところから東では、急に深くかつ広くなり、方向も方位角98度から87度へとわずかに変化する。時期を明示する出土遺物はないが、埋土がほかの畑地境界溝のそれと一致するので、近世の遺構と認定した。(旧D地区溝30)

B区-6号溝 (第209図)

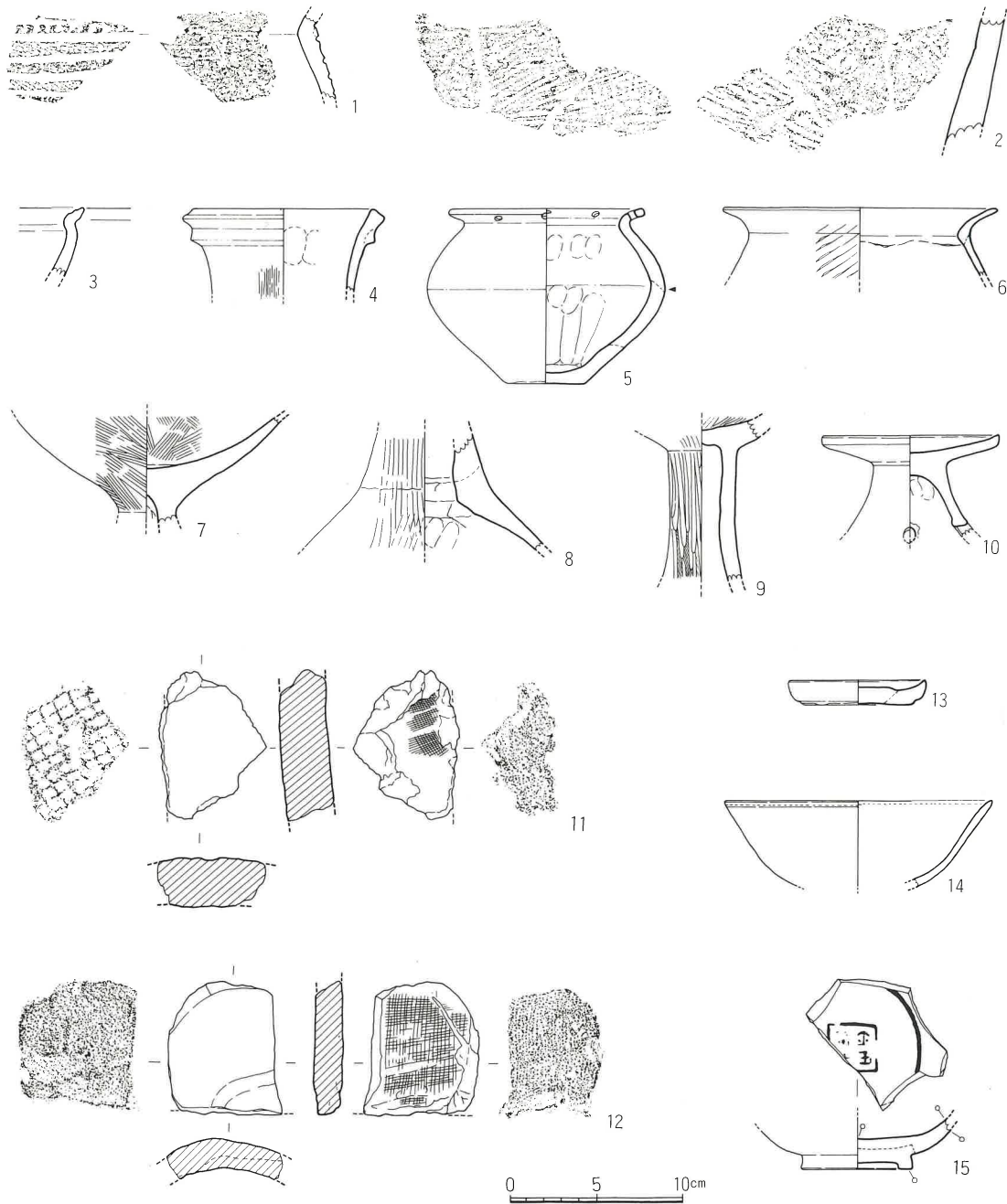
B-5溝に平行して走り、途中から北に直角に曲がるL字形の畑地境界溝である。西の延長は削平され、北の延長は、旧B地区に伸びていたはずであるが、検出時の下げすぎで飛ばしてしまった。B-7溝と一部重複する。溝の断面はU字形で、底面の高さはほぼ水平である。東西部分を約49m、南北部分を約8m検出した。方位は東西溝が方位角98度、南北溝が10度である。時期を明示する出土遺物はないが、埋土がほかの畑地境界溝のそれと一致するので、近世の遺構と認定した。(旧D地区溝24)

B区-7号溝 (第209図)

B-6溝と直行して重複する南北方向の畑地境界溝である。溝の断面はU字形で、底面の高さはほぼ水平である。溝の方位角は8度である。B-6溝との切り合い関係は不明だが、南端がB-6溝に接して終わる点から推定して、B-6溝-B-7溝の順となるだろう。おそらくB-6溝に囲まれた一筆の畑地の耕作者が、なんらかの都合で畑地を東西に分割する必要が生じて設けた溝と推定される。時期を明示する出土遺物はないが、埋土がほかの畑地境界溝のそれと一致するので、近世の遺構と認定した。(旧D地区溝25)

B区-8号溝 (第209図)

B-6溝の東西溝とB-5溝の西部分と平行し、約20mの間隔をおいて掘られた二条平行の畑地境界溝である。西の延長は削平され、東の延長は調査区外にのびる。溝の断面はU字形で、底面の高さは西にいくほどやや高さを増す。東西約19mを検出した。溝の方位角は96度である。やはりこの溝の南北で耕作者が異なると推定される。時期を明示する出土遺物はないが、埋土がほかの畑地境界溝のそれと一致するので、近世の遺構と認定した。(旧D地区溝29・32)



第210図 B区表面採集遺物① (1/4)

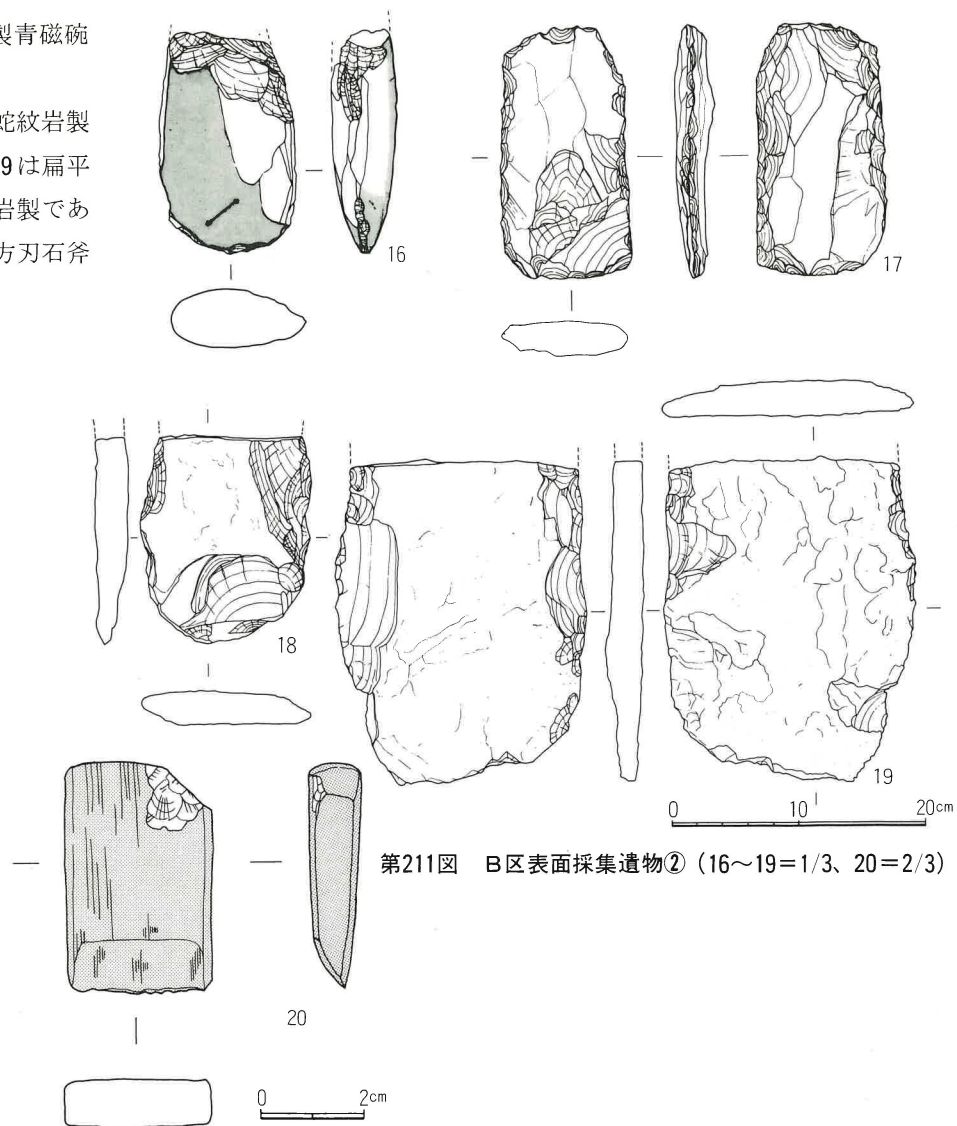
第8節 表面採集遺物 (第210・211図、第6表 一図版52)

以下の遺物は、試掘調査と表面採集および遺構検出時の遺物と、遺構内出土遺物であるがより古い時代からの残留遺物と考えられるものである。

第210図は土器で、1は縄文時代後期の西平式の精製深鉢の頸部で、くびれに半裁竹管文を施している。2は縄文土器茅山式の深鉢片、3は縄文時代晩期の浅鉢口縁部片である。4・5は弥生時代中期末の長頸壺と短頸壺で、5は完形品で試掘時出土。本調査ではこの型式の土器は出土していない。6は古墳時代前期前半の伝統的V様式系の甕Bで、胎土は在地産である。7～9は同じく古墳時代前期前半の高坏である。10は古墳時代前期前半布留系の小型器台である。11と12は旧A地区の試掘調査時に出土した布目瓦で、おそらく奈良時代の遺構に関係するとみられる。13は13世紀ごろの土師質土器の小皿である。14は口禿の中国製白磁碗で、15は見込みに「金玉満

堂」の押し型のある中国製青磁碗
である。

第211図は石器で、16は蛇紋岩製の縄文時代の石斧、17～19は扁平打製石斧で、17は結晶片岩製である。20は弥生時代の磨製方刃石斧の完形品で、硬質頁岩製。



第211図 B区表面採集遺物② (16～19=1/3、20=2/3)